

續國譯漢文大成

文學部 四十九

309
65

映
入



始



續國譯漢文大成

文學部第四十九册(第十三帙の二)
蘇東坡詩集 一の一

吉田待郎氏

字



309
65

蘇東坡詩集 第一卷 目次

總說

卷一

古今體詩

郭 綸……………一
 初發嘉州……………三
 隄爲王氏書樓……………四
 過宜賓見夷牢亂山……………六
 夜泊牛口……………七
 牛口見月……………九
 戎 州……………三
 舟中聽大人彈琴……………三

泊南井口期任遵聖長官到晚不及見復來……………一五
 過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符 二首……………二六
 渝州寄王道矩……………二七
 入 峽……………二八
 江上看山……………三
 涪州得山胡次子由韻……………二四
 留題仙都觀……………二五
 仙都山鹿……………二七

目次

蘇東坡詩集 第一卷 目次

蘇東坡詩集 第一卷 目次

江上值雪效歐陽體次子由韻	二六
嚴顏碑	二七
屈原塔	二八
望夫臺	二九
竹枝歌	三〇
八陣碛	三一
諸葛鹽井	三二
白帝廟	三三
永安宮	三四
過木樛觀	三五
巫山	三六
巫山廟上下數十里有烏窰無數取食於行舟之上	三七
神女廟	三八
過巴東縣不泊聞頗有萊公遺蹟	三九
昭君村	四〇
新灘	四一
新灘阻風	四二
黃牛廟	四三
蝦蟆培	四四
出峽	四五
遊三遊洞	四六
遊洞之日有亭吏乞詩	四七
寄題清溪寺	四八
留題峽州甘泉寺	四九
夷陵縣歐陽永叔至喜堂	五〇

卷二

古今體詩

息壤詩	五
荊州十首	六
渚宮	七
荊門惠泉	八
次韻答荊門張都官維見和惠泉詩	九
涇陽早發	一〇
夜行觀星	一一
漢水	一二
襄陽古樂府三首	一三
野鷹來	一四
上塔吟	一五
襄陽樂	一六
峴山	一七
萬山	一八
隆中	一九
竹葉酒	二〇
鱸魚	二一
食雉	二二
穎大夫廟	二三
新渠詩并敘	二四
雙鳧觀	二五
許州西湖	二六
阮籍嘯臺	二七
大雪獨留尉氏有客入驛呼與飲至醉	二八
黃河	二九
朱亥墓	三〇

次韻水官詩……………三六

卷 三

古今體詩

辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門外……………一四
 和子由灑池懷舊……………一四
 次韻劉京兆石林亭之作……………一四
 和劉長安題薛周逸老亭……………一五
 驪山三絕句……………一五
 次韻子由岐下詩并序……………一五
 北亭……………一五
 橫池……………一五
 短橋……………一五
 軒窗……………一五
 曲檻……………一五

雙池……………一六
 荷花……………一五
 魚……………一五
 牡丹……………一六
 桃花……………一六
 李……………一六
 杏……………一六
 梨……………一六
 棗……………一六
 櫻桃……………一六
 石榴……………一六

柳……………一六
 次韻子由除日見寄……………一六
 壬寅二月有詔減決囚禁記所經歷寄子由……………一七
 太白山下早行至橫渠鎮書崇壽院壁……………一八
 留題延生觀後山上小堂……………一八
 留題仙遊潭中興寺東有玉女洞……………一八
 石鼻城……………一八
 礪溪石……………一八
 鄆塢……………一八

卷 四

目次

樓觀……………一八
 題寶雞縣斯飛閣……………一八
 壬寅重九不預會獨遊普門寺僧閣有懷子由……………一九
 客位假寐……………一九
 九月二十日微雪懷子由弟……………一九
 病中聞子由得告不赴商州……………一九
 病中大雪數日未嘗起觀號令趙薦以詩相屬……………一九
 歲晚三詩寄子由……………一九
 饋歲……………一九
 別歲……………一九
 守歲……………一九
 讀開元天寶遺事……………一九

古今體詩

和子由踏青	二二
和子由蠶市	二二
次韻子由論書	二二五
記所見開元寺吳道子畫佛滅度以答子由	二二八
和子由寒食	二二二
次韻和子由欲得驪山澄泥硯	二二三
次韻和子由聞子善射	二二四
次韻子由彈琴	二二五
中隱堂詩 五首	二二六
鳳翔八觀并序	二二三
石 鼓	二二三
詛楚文	二二四
王維吳道子畫	二二五
維摩像唐楊惠之塑在天柱寺	二四七
東 湖	二五〇
真興寺閣	二五〇
李氏園	二五二
秦穆公墓	二六一
和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書	二六四
將往終南和子由見寄	二六七
讀道藏	二七〇
真興寺閣禱雨	二七二
七月二十四日久不雨出禱礮溪	二七三
二十六日五更起行至礮溪天未明	二七五
是日自礮溪將往陽平憩於翠麓亭	二七六
二十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺	二七八

是日至下馬嶺憩於北山僧舍	二六〇
攜雲篇	二六三
柝佳月	二六六

卷 五

古今體詩

和子由記園中草木 十首	二六五
紀 夢	二六五
次韻子由種菜久旱不生	二六六
大老寺竹間閣子	二六七
周公廟	二六八
戲作買梁道詩	二七〇
南溪之南竹林中新構一茆堂名之曰避世堂	二七二
重遊終南子由以詩見寄次韻	二七四
自清平鎮往返四日得十一詩	二七五

太白詞	二八六
扶風天和寺	二九一

樓 觀	三二五
五 郡	三二六
授經臺	三二八
大秦寺	三二九
僊游潭	三二九
南 寺	三三〇
北 寺	三三一
馬融石室	三三二
玉女洞	三三三

愛玉女洞中水：……………三三四
 自憐游同至黑水：……………三三五
 南溪有會景亭：……………三三七
 凌虛臺：……………三三九
 竹 籬：……………三三一
 漢陂魚：……………三三三
 十二月十四日夜微雪：……………三三五
 九月中曾題二小詩於南溪竹上：……………三三六
 司竹監燒葦園：……………三三八

卷 六

古 今 體 詩

次韻柳子玉見寄：……………三三九
 送曾子固伴越得燕字：……………三六〇
 王頤赴建州錢監求詩及草書：……………三六二

和子由木山引水 二首：……………三四二
 和子由苦寒見寄：……………三四五
 寄題興州晁太守新開古東池：……………三四七
 華陰寄子由：……………三四八
 和董傳留別：……………三四九
 西蜀楊善二十年前見之甚貧今見之亦貧：……………三五二
 夜直秘閣呈王敏甫：……………三五三
 謝蘇自之惠酒：……………三五四
 秀州僧本覺靜照堂：……………三六五
 石蒼舒醉墨堂：……………三六六
 送安惇秀才失解西歸：……………三六九

送任伯通判黃州兼寄其兄孜：……………三七〇
 次韻子由初到陳州 二首：……………三七四
 次韻子由綠筠堂：……………三七六
 送劉放伴海陵：……………三七七
 送錢藻出守婺州得英字：……………三七九
 送呂希道知和州：……………三八一
 次韻王誨夜坐：……………三八四
 送文與可出守陵州：……………三八五
 送劉道原歸觀南康：……………三八七
 出都來陳所乘船上有題小詩八首和之：……………三九二
 次韻張安道讀杜詩：……………三九六
 送張安道赴南都留臺：……………四〇一
 傅堯俞濟源草堂：……………四〇五
 陸龍圖洗挽詞：……………四〇六
 胡完夫母周夫人挽詞：……………四〇九

次韻柳子玉過陳絕糧 二首：……………四一〇
 穎州初別子由 二首：……………四二二
 歐陽少師令賦所蓄石屏：……………四二七
 陪歐陽公燕西湖：……………四三〇
 十月二日將至渦口五里所遇風留宿：……………四三三
 出穎口初見淮山是日至壽州：……………四三六
 壽州李定少卿出餞城東龍潭上：……………四三五
 濠州七絕：……………四三七
 繪 山：……………四三七
 彭祖廟：……………四三八
 逍遙臺：……………四三九
 觀魚臺：……………四四〇
 虞姬墓：……………四四二
 四望亭：……………四四三
 浮山洞：……………四四三

發洪澤中途遇大風復還……………四三四
 十月十六日記所見……………四三六
 廣陵會三同舍各以其字爲韻仍邀同賦……………四三八

卷 七

古今體詩

遊金山寺……………四三七
 自金山放船至焦山……………四五〇
 甘露寺……………四五三
 次韻子由柳湖感物……………四六〇
 次韻楊裝早春……………四六三
 初到杭州寄子由二絕……………四六五
 次韻柳子玉 二首……………四六七
 地 爐……………四六七
 紙 帳……………四六八

劉貢父……………四三八
 孫巨源……………四四一
 劉莘老……………四四二

臘日遊孤山訪惠勤惠思二僧……………四七〇
 李杞寺丞見和前篇復用元韻答之……………四七三
 再 和……………四七六
 遊靈隱寺得來詩復用前韻……………四七九
 戲子由……………四八二
 送蔡冠卿知饒州……………四八六
 嘲子由……………四九〇
 越州張中舍壽樂堂……………四九一
 姚屯田掩詞……………四九四

送岑著作……………四四五
 雨中明慶賞牡丹……………四七〇
 吉祥寺賞牡丹……………四七六
 吉祥寺僧求闍名……………四九二
 和劉道原見寄……………四九〇
 和劉道原咏史……………五〇〇
 和劉道原寄張師民……………五〇三
 送張職方吉甫赴闕漕六和寺中作……………五〇五
 和子由柳湖久澗忽有水 二首……………五〇六
 雨中遊天竺靈感觀音院……………五〇九
 贈上天竺辯才師……………五一〇

卷 八

古今體詩

焦千之求惠山泉詩……………五〇三

和蔡準郎中見遊西湖 三首……………五二一
 六月二十七日望湖樓醉書五絕……………五二六
 七月一日出城舟中苦熱……………五二九
 宿餘杭法喜寺後綠野堂……………五三二
 宿臨安淨土寺……………五三三
 自淨土寺步至功臣寺……………五三六
 遊徑山……………五三九
 自徑山回得呂察推詩……………五四四
 宿望湖樓再和……………五四六
 夜泛西湖五絕……………五三七

答任師中次韻……………五四八

沈謙議召遊湖不赴明日得雙蓮於北山下……………五九七
 和歐陽少師會老堂次韻……………五九八
 題永叔會老堂……………五九二
 和歐陽少師寄趙少師次韻……………五九三
 監試呈諸試官……………五九四
 望海樓晚景五絕……………五九一
 試院煎茶……………五九四
 孫莘老求墨妙亭詩……………五九七
 李公擇求黃鶴樓詩……………五九一
 八月十日夜看月有懷子由并崔度賢良……………五九四
 催試官考較戲作……………五九七
 八月十七日復登望海樓自和前篇 五首……………五九七
 秋 懷 二首……………五九三
 哭歐陽公孤山僧惠思示小詩次韻……………五九七
 梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛次韻……………五九七

和沈立之留別 二首……………五九〇
 和陳述古拒霜花……………五九二
 次韻孔文仲推官見贈……………五九三
 朱壽昌郎中少不知母所在求之五十年……………五九七
 湯村開運鹽河雨中督役……………六〇一
 是日宿水陸寺寄北山清順僧 二首……………六〇四
 鹽官部役戲呈同事兼寄述古……………六〇六
 鹽官絕句 四首……………六〇八
 南寺千佛閣……………六〇八
 北寺悟空禪師塔……………六〇九
 塔前古檜……………六一〇
 僧爽白雞……………六一〇
 六和寺沖師開山溪爲水軒……………六一一
 冬至日獨遊吉祥寺……………六一二
 後十餘日復至……………六一三

戲 贈……………六〇四
 和人求筆迹……………六一五
 將之湖州戲贈莘老……………六一六
 鴉種麥行……………六一八
 送張軒民寺丞赴省試……………六一〇
 和致仕張郎中春晝……………六一二
 再用前韻寄莘老……………六一四
 畫魚歌……………六一六
 吳中田婦歎……………六一九

和邵同年戲贈買收秀才 三首……………六一一
 遊道場山何山……………六一六
 贈孫莘老七絕……………六一九
 莘老蒼天慶觀小園有亭北向……………六二〇
 至秀州贈錢端公安道竝寄其弟惠山老……………六二六
 秀州報本禪院鄉僧文長老方丈……………六四九
 王復秀才所居雙檜 二首……………六五一
 宋叔達家聽琵琶……………六五二

卷 九

古 今 體 詩

元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作……………六一七
 正月九日有美堂飲醉歸徑睡……………六一九
 次韻答章傳道見贈……………六二二

法惠寺橫翠閣……………六三七
 祥符寺九曲觀燈……………六四〇
 上元過祥符僧可久房蕭然無燈火……………六四二

正月二十一日病後述古邀往城外尋春	六五三	贈別	七〇六
有以官法酒見餉者	六五四	次韻代留別	七〇七
飲湖上初晴後雨	六五六	月兔茶	七〇八
往富陽新城李節推先行	六六八	薄命佳人	七〇九
風水洞二首和李節推	六六一	吉祥寺花將落而述古不至	七一
獨遊富陽普照寺	六六四	述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦	七二
自普照遊二庵	六六五	李鈐轄坐上分題戴花	七三
富陽妙庭觀董雙成故宅發地得丹鼎	六六七	於潛令刁同年野翁亭	七四
新城道中	六九〇	於潛女	七二七
山邨五絕	六九二	自昌化雙簾館下步尋溪源	七八
癸丑春分後雪	六九七	於潛僧綠筠軒	七二
湖上夜歸	六九八	與臨安令宗人同年劇飲	七四
曾元忽游龍山呂穆仲不至	七〇一	寶山晝睡	七五
寒食未明至湖上太守未來兩縣令先在	七〇二	僧清順新作垂雲亭	七六
次韻孫莘老見贈時莘老移廬州因以別之	七〇四	五月十日與呂仲甫等同泛湖游北山	七九

會客有美堂周邵長官與數僧同泛湖	二首	七三
席上代人贈別	三首	七五
留題徐氏花園	二首	七六
唐道人言天目山上俯視雷雨		七九

追和子由去歲試舉人洛下所寄	五首	七四〇
過廣愛寺見三學演師	三首	七四五
韓子華石淙莊		七四八

蘇東坡詩集總說

唐賢の詩は、率ね溫柔敦厚であつて、所謂古詩三百篇の遺意が存して居る。降つて唐季五代になると、詩風が飄忽薄蕩に流れた。宋興つて詩壇に西崑體（略して崑體ともいふ）が行はる。西崑體といふのは、楊億、劉筠、錢惟演の徒が、唐の李商隱の詩に倣つて、故事を用ひ、専ら鮮麗ならんことを力めたもので、其の弊は、ただ好看な文字のみを剪裁して、商隱に擬し得たりと爲すに至つたのである。嗣いで蘇舜欽は、豪放を以て自ら異にし、筆を下すこと縦横である。梅堯臣は、高淡を以て宗となし、思を運らすことを精微である。何れも新意を出して一時に振ひ、相共に崑體一派の詩弊を矯めやうとしたが、惜しいかな、其の力足らざるの憾があつた。

蘇東坡出づるに及んで、其の天才の宏放なる、其の學問の淵博なる、其の識見の高絶なる、波瀾を巻いて小詩に入れ、一世を風靡した觀がある。東坡の詩壇に於ける地位は、獨、當時の第一人者たるのみならず、有宋三百年、其の右に出づるものを見ない。其門人黃庭堅、秦觀、秦觀、陳師道の徒、東西に木鐸し、宋の詩風がここに一變した。

宋人の詩に於ける縦横自在、意の到る所、筆隨ふの境を拓いて、其の用墨を新にしたが、東坡の詩は、其の最も至れるものである。東坡の文章は、縦横意の如くに運んで、筆端の到る所、自ら天下

の至文を成すと言はれて居るが、其の詩も亦、飄逸清廓である。天分が既に古今得易からざる奇才である上に、其の身世も亦波瀾の盡くるなきに遭つた。幽囚の苦、遷謫の厄、驚くべきもの、哀しむべきもの、怒罵すべきもの、冷笑すべきものがあると共に、江山風月、塵埃の外に逍遙し、忽にして莊語、忽にして諧謔、議論となり、譬喻となり、直敘し、側寫し、行く雲の如く、流るる水の如く、千言萬語、實に天下の偉觀である。

東坡の詩、既に飄逸清廓である。詩は飄逸清廓でなければ、韻が高くない。東坡の波瀾多き生涯を通じての豊功偉節は、其の忠厚正大の意が外に發したものである。詩に忠厚正大の意がなければ、風雅の旨でない。東坡の卓然として一家を成し、有宋に冠絶せる所以のもの、決して偶然でない。唐宋詩辭に、

賦の器識學問は、政事に見はれ、文章に發す。史に稱す、言は以て其の猷あるを達するに足り、行は以て其の爲すあるを遂ぐるに足り、節義は以て其の守あるを固むるに足る。皆、志と氣と之を爲すなり、惟詩も亦然り、地負海涵、一體を名けずして、其の旨要の在る所を核ぬ。我詩雖云、抽、心平聲韻和といへるが如きは、此れ賦が自ら其詩を評せるものなり。作詩熟讀毛詩・國風・離騷、曲折盡在是とは、此れ賦が自ら其の人を教ふる所以を謂へるものなり。

且夫れ精深華妙とは、則ち靈敏之を稱せるなり。公如大國楚、吞五湖三江とは、則ち黃庭堅之を稱せるなり。天才宏放、宜與日月爭光とは、則ち蔡條(字は約之、百衲居士と號す。)之を稱

せるなり。屈注天潢、倒連滄海、變眩奇怪、終歸渾雅とは、放陶孫(字は器之、曜庵と號す)之を稱せるなり。之を前にしては、曹劉陶謝、之を後にしては、李杜韓白、學ばざる所なし。亦、工ならざる所なし。同時の歐陽王黃、猶ほ俱に遜謝す。洵なるかな、千古に獨立して、一代一人の詩にあらざるなり、

と。清の趙雲松が東坡の詩を評する二三の例をいふと、
坡詩の人に絶する處は、議論英爽、筆鋒精銳にして、重きを擧ぐることに輕きが若きに在り。之を讀むに、甚しくは力を用ひざるに似て、而も力は已に十分に透る。此れ天才なり。
坡詩は鍛鍊を以て工となさず。其の妙處は、心地空明、自然に流出し、一に全く力を著げざるに似て、而して自然に心脾に沁入するに在り。此れ其の獨絶なり。

坡公は莊・列諸子及び漢・魏・晉・唐諸史に熟す。故に遇ふ所に隨つて、輒ち典故あり、以て其の援引に供ふ。此れ臨時檢書者の能く辨ずる所にあらざるなり。
詩人、成語佳對に遇へば、必ず肯て放過せず。坡公は尤も剪裁に妙なり。工巧と雖も、而も纖佻に落ちず。其の才分の大なるに由るなり。

東坡は大氣旋轉、句法字法の中に層層たらずと雖、而も筆力の到る所、自ら創格を成す。
心地空明、自然に流出すといひ、自然に心脾に沁入すといふのは、よく坡詩の特長を説いて居る。
沈德潛も評して、

蘇子瞻は胸に洪爐あり、金銀鉛錫、皆鎔鑄に歸す。其筆の超曠、天馬の羈を脱するに等しく、飛還遊戯、窮極變幻、而して意中の出さんと欲する所に適如たり。韓文公の後、又一境界を開闢せり。坡詩は長篇短章、筆が暢びて心持がよい。筆勢の赴く處は、まことに大空を破つて來た天馬の羈を離すべからざるが如きものがある。而して其の比喩に工なる、たとひ陳腐の言でも、一たび坡公の洪爐に入れば、忽ち清新の文字と化し去る。

塞衣歩月照花影。烟如流水涵青蘋。

我行西北隅。如渡三月半弓。

永曠來天風。千山動鱗甲。萬谷酣笙鐘。

風過如呼吸。雲生似吐含。

夢雲忽變色。笑電亦改容。

青山偃蹇如高人。常時不肯入官府。

治生不求富。讀書不求官。譬如飲不醉。陶然有餘歡。

欲知垂盡處。有似赴壑蛇。一修鱗半已沒。去意誰能遮。

一方、漫に坡詩を評論した人の中で、張舜民の如きは、

仔細檢點不無利鈍。と言ひ、楊時も、風雅の意を知らないと言つた。即ち龜山語録に、

文を爲る、溫柔敦厚の氣あるを要す。人主に對する語言及び章疏は、文字溫柔敦厚、尤も無かるべからず。子瞻が詩の如きは、譏玩する所多くして、殊に側但君を愛するの意なし。

凡そ詩は必ず之を言ふものは罪なく、之を聞くものは、以て戒しむるに足らしむ。此れ誦諫を尚ぶ所以なり。東坡の詩の如きは、則ち之を言つて安んぞ罪なきを得ん。而して之を聞いて、豈以て戒しむるに足らんや、

とある。恐らくは皆、篤論ではなからう。

東坡は既に譬喩に工である。又、能く諧謔嘲笑に長じ、幾んど一種の天才である。爲に語言を以て禍を買ひ、仕宦に浮沈した。又禪を好み、往往禪を借りて談語をなす。故に瀟灑の詩、尙逸の詩に富んで居る。

然れども坡老の本色は、窮通利達を見ることが雲煙の如く、人生を渺視し、萬世を大觀する所に在る。

久知世界一泡影。大小真僞何足評。

形骸一塵垢。貴賤兩草木。

我生涉世本爲口。一官久已輕車轡。

天倫の至情、亦、坡詩に於て之を見る。

百川日夜逝。物我相隨去。惟有宿昔志。依然守故處。

近別不改容。遠別涕霑胸。咫尺不相見。實與千里同。

人生無離別。誰知恩愛重。

與君今世爲兄弟。又結來生未了因。

杜少陵を詩聖と稱する所以は、其詩の萬有を包涵して、神力が之に加はつて居るからである。併し、其の沈痛悲壯の辭は、時艱に遭遇し、道途に倥傯し、皇皇として席の暖まるに暇がなかつた爲であらう。故に其の詩は、益々苦んで益々工となつたものである。

東坡も亦然りて、其の沈鬱豪邁の音は、皆、窮蹙艱難の際に發したものである。東坡の詩に於ける才力は、決して少陵に減じない。故に窮して益々巧みとなる。鳳翔に筮仕してより、語言を以て禍を買ひ、仕途に浮沈があつて、風霜塵土の中に顛覆した。かくて開封府の推官を以て杭州に通判となり、而して密州、而して徐州、而して湖州、而して黃州、而して登州、揚州、定州、惠州、儋州と轉轉したのである。其の間、再び朝命を被り、殿廷に召されたが、其多くは外に出て不遇の境に在つた。是が其の詩の神境に進んで、其詩をして不朽ならしめた所以である。少陵と東坡とは、世を異にして顔顔する兩詩聖である。

宋詩が行はれて、東坡の詩が尤も盛に謳誦された。併し、坡詩は、以て唐詩となすべきものである。ただ唐詩を學ぶものは、白雲萬里、關山明月、其の字を陳腐にし、風調を以て格を立てる嫌がある。宋詩を學ぶものは、龜閣虬戶、簾曉曉戶、強ひて其の語を新奇にし、雕刻を以て致を取る弊がある。皆、眞の唐詩、眞の宋詩ではない。龜閣虬戶といふのは、昔、徐彥伯が文を爲るに、多く新を求め、

鳳閣を龜閣となし、龍門を虬戶となした所から起つたさうである。坡詩を讀むもの、李杜の詩と合せて之を讀み、其の青を拊み其の華を披いて、謳誦し、世の唐詩を學ぶもの、宋詩を學ぶものの弊風を一掃せば、ここに眞詩を得るに庶いであらう。

其の詩を頌し、其の書を讀み、其の人を知らずして可ならんやであるから、宋史に據りて東坡の傳を殺べる。

蘇軾、字は子瞻、眉山(今の四川眉州)の人。(老蘇の長子、進士の第に中り、再び制科優等の中る。

仁宗、英宗、神宗、哲宗に事へて、官は禮部尚書、兼端明殿、翰林侍讀の二學士に至る。)幼にして穎

悟、見識があつた。冠する比、博く經史に通じ、賈誼、陸贄、莊子等の書を好む。仁宗の嘉祐二年(皇

紀一七七年、西曆一〇五七年)禮部に試せられたが、試官歐陽修は之を第二に賞いた。復、春秋

を以て對策し、第一に居る。殿試には、乙科に中つた。

後、書を以て歐陽修に見ゆ。修は梅聖俞に語つて、

老父當避此人、出一頭地。

と言つた。五年、福昌主簿に調せらる。復、制策に對して三等に入る。宋より以來、制策三等に入

るは、ただ吳育(卒して正肅と諡す、集五十卷あり。)と軾とあるのみ。

大理評事簽鳳翔府の判官に除せらる。英宗の治平二年(皇紀一七二五年、西曆一〇六五年)、入りて登聞鼓院に判となつた。

蘇公、梅聖俞に與ふる

韓魏公、言を知る

英宗は、藩邸に在る比より其の名を聞き、唐の故事を以て、召し入れて翰林知制誥となさうとした。宰相韓琦曰く、
軾は遠大の器なり。他日、自ら當に天下の用を爲すべし。朝廷に在りて之を培養するを要す。今、驥に之を用ひなば、則ち天下の士は、未だ必しも以て然りとなさじ。適、以て之を累はすに足る。と。且つ請うて軾を召し、試二論に及んだが、復、三等に入り、直史館を得た。軾は琦の前言を聞いて、

韓公は人を愛するに徳を以てす、

と喜んださうである。父の妻が除いたので、朝に還る。

適、王安石政を執る。素より軾の己に異なるを惡み、以て官告院（宋史職官志に、官告院、主管官一員、掌二吏兵、勅封、官告云云）に判たらしめた。既にして、安石は科擧を變じて學校を興さうとした。兩制三館（史館、昭文館、集賢院を三館といふ。皆、崇文院に寓す）に詔があつて之を議せしむ。軾が議を上ると、神宗は即日召對された。軾曰く、

陛下天縱文武、明かならざるを患へず、勤めざるを患へず、斷せざるを患へず。但患ふる所は、治を求むる太だ急に、言を聽く太だ廣く、人を進むる太だ銳きことなり。願くは鎮むるに安靜を以てし、物の來るを待ちて、然して復、之に應じたまへ、と。帝は悚然として、

神宗を諫む



策問

朕當に之を熟思すべし、
と宣ふ。安石はもとより悅ばない。命じて軾を開封府推官に權たらしめ、將に事を以て之を困しめやうとした。然るに、軾は決斷精敏であるから、聲聞がますます遠きに及んだ。安石が新法を創めると、軾は上書して之を論じた。軾は安石の帝を贊けるに獨斷を以てし、帝専ら之に信任したまふを見、開封府の試官と爲つたので、因りて進士を試するに、

晉武の吳を平ぐるや、獨、斷じて克ち、符堅の晉を伐つや、獨、斷じて亡ぶ。齊桓は、専ら管仲に任じて霸となり、燕噲は、専ら子之に任じて敗る。事同うして功異なる、

といふ策問を發した。安石はますます怒り、御史謝景溫（字は師直、王安石と善し）をして其の過を論奏せしめ、窮治して見たが、得る所がなかつた。

軾は遂に外を請ひ、杭州に通判となり、徒つて密州に知となり、又、徐州に徙る。河水が曹村に決れて泛溢し、城下を瀝り、漲ると思ふ間もなく洩れて、城が將に敗れやうとした。軾は武衛營に至り、卒長を呼んで、爲に力を盡くしたのである。卒長は、

太守も猶ほ險涼を避けない。吾が儕、小人は、當に命を效すべきである、

と言つて、其の徒を率ひ釜鑪（釜はモッコ、土を盛る器。鑪はスキ、土を起す農具）を持ち出て、遂に東南に長堤を築いた。けれども雨が日夜止まないで、城が沈まないこと三版（高さ二尺を版となす）復、朝に請ひて故城を増築して、木岸を爲つた。水の再び至るを慮つて、其の備へをなし

治河

たのである。徒つて湖州に知となる。御史李定・舒亶・何正言等は、軾の謝表の語を搆め、諷詩に託して訕謗をなすと媒孽し、逮へて臺獄に赴かしめ、之を死に實かうとした。

室を築く

帝は、獨、之を憐みたまひ、黃州團練副使として其州に安置された。(黃州は今の湖北黃州府) 軾は幅巾芒屨、田父野老と谿谷の間に從ひ、室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す。

王安石を見

不可といふのであれば、姑く會鞏を用ひよと仰せられた。そこで鞏は太祖總論を進めたが、帝は意に允さなかつた。手札して軾を汝州に移す。軾は未だ汝に至らないで、上書して自ら言ふ、一家二十口、饑寒の憂迫る。常州に薄田あれば、之に居らんことを願ふと。朝に奏して、夕には可を報せらる。道中、金陵を過り、王安石を見て、

大兵大獄は、漢唐滅亡の兆なり。今、西方は連年兵を用ひ、東南は數大獄を起す。公、獨一言以て救ふなきか、

と言つた。安石曰く、

二事は皆、惠卿が之を啓いたもの。安石は外に在り、何を敢て言はん、と。又曰く、

人は須らく是れ一の不義を行ひ、一の不幸を殺して、天下を得るとも、爲さざるを知つて、乃ち

可なるべし、

と。軾は戯れて、

今の君子は、半年の磨勘(宋の中世、磨勘院を置き、文武官吏の在職年限によりて、進級せしむることを掌る。)を減するを争つて、人を殺すと雖、亦之を爲す、

と言つた。安石は笑つて言はない。

哲宗立ちて、起居舍人(天子の言動を記すを掌る)に擢でらる。元祐元年(皇紀一七四六年、西曆一〇八六年) 中書舍人に遷る。朝廷、范純仁の言を以て復、青苗(植附の時に農民に錢を貸して利息を取る)を散す。司馬光請うて抑配の禁を申嚴す。抑配といふのは、政府が利息を取る爲に、人民に金を貸し付け、又、人民にわりつけて金を出さしめ、或は夫役に従はしめることをいふ。軾は繼奏し、光は軾の議を是とし、對を請うて遂に止む。

差役、免役

初、祖宗差役を行ふ。差役とは、民家を九等に分ち、上の四等より公用の工夫を徵發し、下の五等は之を免除する課役の法である。然るに役に充つるもの、多く習はず。又、之を虐使して、終歲息むことを得ざるものもあつた。安石は改めて免役となし、戸は高下を差等し、錢を出して雇役せしむ。然るに法を行ふものが、過取して民病をなしたので、光は差役を復せんとした。軾曰く、差役、免役は、各利害がある、と。光曰く、君に於ては何如と。軾曰く、

法、相因らば、則ち事成り易く、事、漸あれば、則ち驚かす。三代の法は、兵農一たり。秦に至

り、始て分れて二となる。唐の中葉に及び、府兵を變じて長征の卒となす。是より農は穀府を出して、以て兵を養ひ、兵は性命を出して、以て農を衛る。聖人復起ると雖、易ふる能はざるなり。今、免役は實に大に此に類せり。公、驛に免役を罷め、差役を行はんと欲す。正に長征を罷め、民兵を復するが如し。蓋し未だ易からざるなり、

と。光は以て然りと云はない。軾又、政事堂で陳べると、光は忿然とした。軾曰く、昔、韓魏公、陝西の義勇を刺す。公、諫官となつて、争ふこと甚だ努め、韓公は樂しまない。公も亦願みなかつた。豈、今日相となつて、軾の盡言を許さざるか、と。尋で翰林學士に除せられ、二年には、待讀をも兼ねた。嘗て祖宗の寶訓を讀み、因りて時事に及ぶ。軾、歷言すらく、

今、賞罰明かならざれば、善惡勸沮する所なし。又、黃河の勢、方に北流し、而して之を強ひて東せしめ、夏人入りて鎮戎に寇し、數萬人を殺掠せしも、帥臣掩蔽し、以て聞せず。毎事此の如くんば、恐くは遼く衰亂の漸をなさん、

と。軾嘗て禁中に鎖宿し、便殿に召對す。宣仁后(宣仁聖烈皇后、神宗の母)曰く、卿の官、遽に此に至るは、乃ち先帝の御意である。先帝、卿の文章を誦する毎に、必ず歎じて、奇才奇才と仰せられた。但、未だ卿を進用するに及ばなかつたまでであると。軾は覺えず哭して聲を失した。宣仁后も哲宗も泣き、左右も皆感涕した。已にして坐を命じ茶を賜ふ。御前の金蓮燭(天子の御殿にと

金蓮燭を敬して燃る

もす燈)を徹し、送つて院に歸へらしむ。

四年、軾は當軸のものに容れられないのを度り、遂に外を請ひ、龍圖閣學士に拜されて杭州に知となる。未だ行かざるに、諫官に論せられて嶺南に遷さる。軾、密に疏す、朝廷宜しく深く罪すべからず、仁政の果をなさんと。

杭を治む

宣仁后は、心に其の言を善いとせられたが、用ひることは出来なかつた。既にして軾は杭に至る。大旱であつて、饑疫が並に作る。軾は本路の上供米を減せんことを請ひ、又、價を減じて常平米(常平倉の米)を糶し、多く饑溺藥劑を作つたので、活きるものが多かつた。

杭は本、江海の地、水泉が鹹苦で、居民は稀少。唐の刺史李泌、始て西湖の水を引いて、六井を作り、民、水に足る。白居易に及んで、又、西湖の澗水を浚ひて、漕河に入れ、河より田に溉ぐ千頃、民以て殷富であつた。湖水に葑が多いので、宋では廢てて治めなかつたが、葑積んで田となり、水が幾もなくなつた。漕河は湖水の利を失ひ、給を江湖に取る。六井も亦、幾んど廢した。

軾は茅山の一河、専ら江湖を受け、鹽橋の一河、専ら湖水を受くるを見、遂に二河を浚つて、漕に通じた。後、堰扉を造つて、潮水蓄洩の限となし、餘力を以て復、六井を完うした。又、葑田を取つて湖中に積むこと、南北徑三十里、長堤を爲り、以て行く人を通せしめた。堤が成つて、芙蓉楊柳を其の上に植う。之を望むに畫圖のやうで、杭人は之を蘇公堤と名けた。

浙江の潮は、海門より東來して、勢、雷霆の如くである。而して浮山が江中に峙ち、漁浦諸山と犬

蘇公堤

總 說

牙の如く相交はり、河湟激射し、年年公私の船を敗ることが計へきれない。軾は江の上流地、石門と名くる處より漕河を鑿ち、慈浦より北折し、小嶺に抵り、古河を浚ひて浮山の險を避けしめやうとした。

軾は復、言ふ、

三吳の水、瀦して太湖の水となり、溢れて松江となり、以て海に入る。慶曆以來、松江に挽路を築いて扼塞す。故に今、三吳に水が多い。挽路を鑿ちて十橋となし、以て江勢を汎かん欲す、と。俱に用ひるを果さないの、世人は以て恨となした。軾は再び抗に莅み、民に徳があつたので、家毎に畫像がある。飲食には必ず祝し、生祠を作つた。

六年召して吏部尚書となしたが、未だ至らず。弟轍を右丞に除し、翰林承旨に改む。數月、復、轍を以て外を請うたから、龍圖閣學士を以て穎州に知たり。七年には、揚州に徙る。未だ歳を聞しないに、召して兵部尚書兼侍讀となし、郊祀には南簿使たらしむ。

皇后及び大長公主が輜車に乗り、儀仗を避けなかつたから、軾は之を劾奏した。駕が廻り、皇后に昭して迎調するなからしめた。

禮部尚書に遷り、端明殿翰林侍讀兩學士を兼ね。高麗、使を遣はして書を請うたから、朝廷は故事を以て之を許した。軾曰く、

漢の東平王、諸子及び太史公に書を請ひしとき、猶は肯て予へなかつた。今、高麗の請ふ所、此

民、生祠を作

より甚しきあり。其れ予ふべけんや、と。それは聽かれなかつた。

八年、宣仁后が崩れて、哲宗、政を親らしたので、軾は外に補せんことを乞うた。兩學士を以て定州に知たらしむ。時に國事將に變せんとし、軾は入りて辭することが出来なから、既に行いて上書した。定州の軍政は弛して居つたから、春に會して大に聞す。軾、命じて舊典を擧げしに、帥は常服して張中を出で、將吏は戎服して事を執り、敢て慢するものもなかつた。定人は言ふ、韓琦より後、此禮を見ないで、今に至ると。

初、宣仁后在しし時、侍御史賈易、監察御史董敦逸、黃慶基等、先後して軾及び弟轍の作つた文詞が先朝を譏斥すと論す。三人のものが皆、坐して黜けらる。紹聖(哲宗の年號)の初に及び、御史復言をなし、軾を誦して英州に知たらしむ。未だ至らずして寧遠軍節度副使に貶せられ、惠州に安置された。居ること三年、又、瓊州別駕に貶せられて、昌化に居る。昌化は故の儋耳の地で、人の居る所ではない。食飯具はらず、藥餌も得られない。

初、官屋を燬ふ、有司なほ不可といふ。軾は遂に地を買ひて室を築く。僮人は甕を運び、土を舂して之を助く。屋を爲る三間、人は其の憂に堪へない。軾は獨、幼子と菜を食ひ水を飲み、書を著はして樂んで居た。

徽宗の時、連に永州に徙り、三大赦を更て還る。玉局觀に提舉(管理)となり、朝奉郎に復す。

地を買ひて室を築く

軾は元祐より以來、未だ嘗て歲課を以て乞はない。故官を遷して此に止まる。未だ幾ならないで、常州に卒す、年六十六。

軾、轍と文章を爲る、俱に其の父を師とする。弱冠、父子兄弟、京師に至る。一日にして聲名赫然として四方に動く。軾嘗て自ら謂ふ、

文を作る行雲流水の如し

文を作る、行雲流水の如し。初より定質なし、但、常に當に行くべき所に行き、止らざるべからざる所に止る。嬉笑怒罵の辭と雖、皆書して之を誦すべし、

と。其の體は、渾涵光芒、百代に雄視し、文章ありて以來、蓋し亦鮮い。洵は晩にして易傳を作り、未だ究めなかつたので、軾に命じて其の志を述べしめた。軾は易傳を成し、復、論語説を作る。

後、海南に居つて書傳を作る。又、東坡集、奏議内外制、和陶詩等がある。一時の文人、黃庭堅、晁補之、秦觀、張耒、陳師道の如き、舉世未だ之を識らなかつたが、軾は之を待つこと朋儔の如く、未だ嘗て師資を以て自ら與へなかつた。舉子となつてから、侍從に出入するに至るまで、必ず君を愛するを以て本となして居る。挺挺たる大節は、毎に小人の爲に忌惡せらる。身後にも、猶ほ名を元祐黨に編せられ、文集の刊行するものを毀たる。

高宗即位し、資政殿學士を贈り、其の孫符を以て禮部尙書となし、又、其の文を左右に置き、之を讀んで倦むことを忘る。親ら集の贊を製して、曾孫嶠に賜ひ、遂に太師を崇贈し、文忠と諡す。三子邁、迨、過、俱に善く文を爲る。

御製序を賜ふ

詩人は窮して益、巧なりとせば、坡公が窮蹙艱難の際に於ける吟咏は、其の順境の日に成つた諸篇に優ること萬萬であらう。坡公が生平の豐功亮節と、夫の兄弟朋友過從離合の跡及び一時新法の廢興、時事の變遷とは、悉く詩集に見はれて居る。而して其の正言讜議、時に合はなくても世に阿らず、禍を買つても權に諛びない、夷險一節といふ態度は、まことに士君子の儀表と仰ぐに足るものがある。坡詩を誦誦するもの、誦誦しないもの、共に之を思はなければならぬ。

昭和三年七月

岩垂憲徳識

蘇東坡詩集 卷一

岩垂憲德譯解

古今體詩 四十二首

漢土の詩は、上古は概ね四言であつたが、中古は、五言若くは七言で、句に定つた數がない。五言とは、言ふまでもなく、五字一句のものをいひ、七言とは、七字一句のものをいふ。五言でも、七言でも、一首四句なるものを絶句といひ、八句なるものを律詩といふ。律詩や絶句は、之を今體又は近體といひ、今體に對して、字數や句法の定まらないのを古體、古詩、又は古風と稱する。

郭綸

郭綸

河西猛士無人識

河西の猛士の識るなし、

日暮津亭閱過船

日暮津亭に過船を閱す。

路人但覺驄馬瘦

路人は但覺ゆ驄馬の瘦するを、

【字解】 一 猛士 強く勇まし

い士、史記高祖紀に、安得猛士守四方。二 津亭 わたしは、

津は行旅の往還の渡し場。亭は驛亭の意。陸上のうまつぎに比していつたのである。三 驄馬 青馬、後

不知鐵槩大如椽。 知らず鐵槩大さ椽の如きを。

因言西方久不戰。 因て言ふ西方久しく戦はず、

截髮願作萬騎先。 截髮願くは萬騎の先とならんと。

我當憑軾與寓目。 我當に軾に憑つて與に寓目すべく、

看君飛矢集蠻貊。 君が飛矢の蠻貊に集るを看む。

漢書、桓典傳に、拜侍御史、常乘驢馬、京師畏服、爲之語曰、行行且止、避驢馬御史。杜牧之の詩、將軍獨乘鐵驢馬。鐵槩、鐵製の長いホコ。截髮、唇の周囲の傳に、王質掩鼻、侃論之、截髮爲信云云。【六】憑、軾與寓目、左

傳、城濮の戰の條に、君馭軾而驅之、得臣與高固爲目焉とある。君、管侯を指すは軾に憑つて見物されよ、捕者得臣に於ても相伴仕り、目を寓して一見物致した。軾は車前の横木。車上に立つて、胸下に當るから、手を掛けるに便利である。【七】蠻貊、えびすで製した毛布。桂海虞衡志に、蠻貊出西南諸蕃。蠻人衣被夜臥、無貴賤一人有二氈。

【題義】郭綸の功あるも賞されず、憔悴して他郷にあるに同情して寄せた作である。東坡の自註に、郭綸、本河西弓箭手、屢戰有功不賞、自黎州都監、官滿貧不能歸、今權嘉州監稅とある。黎州は、今の四川清溪縣。都監、官名。宋は兵馬都監を置く。嘉州は、今の四川樂山縣。

【詩意】河西の勇士郭綸は、志を得ないで、一小官吏となつて、渡し場に、往來船を檢べて居る。(此の二句は、英雄の失路を寫し出したのである。)人はただ仕途に窮する彼を見て、其の武勇の彼を見ない。彼は言ふ、西方今や風雲惡し、(仁宗の康定元年九月、西賊入寇し、郭綸固守)髮を斷つて信となし、萬騎の先驅をなさんと。我も兵車に上つて一見物仕らうぞ。そして君の飛ばした矢のえびす軍に達する御手竝を拜見致さう。

【餘論】五句の處、力が少いといふ批評もある。

初發嘉州

初めて嘉州を發す

朝發鼓闐闐、西風獵畫旂。

朝に發して鼓闐闐、西風畫旂を獵かす。

故鄉飄已遠、往意浩無邊。

故郷飄として已に遠く、往意浩として無邊。

錦水細不見、蠻江清可憐。

錦水は細にして見えず、蠻江は清うして憐むべし。

奔騰過佛脚、曠蕩造平川。

奔騰して佛脚を過ぎ、曠蕩して平川に造る。

野市有禪客、釣臺尋暮煙。

野市禪客あり、釣臺暮煙を尋ね、

相期定先到、久立水潺潺。

相期す定す先づ到るを、久しく立つ水の潺潺たるに。

【字解】【一】闐闐、鼓の聲、詩、小雅に、伐鼓闐闐、振旅闐闐。【二】獵、震かす。【三】錦水、錦江、又、蜀江と名く。【四】蠻江、青衣江。【五】佛脚、開元中、僧海通は、石に鑿して彌勒大像を爲る。【六】曠蕩、ひろびろとした貌。【七】造、平川、造は造みたる意。杜詩に、秦川對酒平如掌。【八】定、かならずと期する辭、杜詩に、定卜瀟湘居とある。【九】潺潺、水の流れる貌。白居易の詩に、有石白礫磧、有水清潺潺とある。

【題義】仁宗の嘉祐四年、(皇紀一七一九年、西曆一〇五九年)東坡は、弟子由と、父老泉に侍し、舟で楚に行く。此詩は其時の作。

【詩意】朝に四川の嘉州を出發したときは、太鼓の聲が闐闐と音たて、西風は燕の尾のやうな旗を動かした。故郷は遠く隔て、行く先は遙かである。蜀江の水も見えなくなり、嘉州は成都を距る三百餘里、故にいふ。盤江の流れも面白く、奔流して佛脚の處を過ぎ、ひろびろと進んで平川に至る。禪僧が暮煙を罩める比、魚釣臺を尋ねて、到るといふ堅い約束をしたので、我は暫く水の潺湲と流れる處に佇んで居た。(問)我今何適、天台訪石橋の意である。自註に是日期郷僧宗一會別釣魚臺下。【餘論】氣韻洒脱、格律謹嚴、東坡の少年未綫筆時の作だと評されて居る。

健爲王氏書樓

健爲王氏の書樓

樹林幽翠滿山谷。
樓觀突兀起江濱。
云是昔人藏書處。
磊落萬卷今生塵。
江邊日出紅霧散。
綺窗畫閣青氣氤。
山猿悲嘯谷泉響。

【字解】(一)樓觀、高樓門觀、
觀は遠方を望む意から起つたのであ
る。(二)突兀、高くゆきんで立
つ、樓觀の詩に、突兀便高三百尺。
【三】磊落、多い貌。後漢書に、連衡
環珩之圃。(四)氣氤、氣の盛なる
貌。白樂天の詩、柔靡青氣氤。(五)
【六】山猿、鳥の鳴く聲。(七)【八】借問、試
に問ふ意。(九)【九】先登、斬敵、敵の首
を斬ること。樊仲博に、先登斬首二
十三級。(一〇)【一〇】三項、古書の名。

野鳥嘒嘒巖花春。
借問主人今何在。
被甲遠戍長苦辛。
先登搏戰事斬級。
區區何者爲三墳。
書生古亦有戰陣。
葛衣羽扇揮三軍。
古人不見悲世俗。
回首蒼山空白雲。

其の内容は伏羲・神農・黃帝の書ない
ふとし、三王の書をいふとし附説が
ある。(一)【二】葛衣羽扇、諸葛武侯、
羽扇・素衣、葛巾毛扇、指揮三軍。

【題義】健爲郡にある王齊萬の書樓を詠じたのである。齊萬は蜀の人時に武昌縣に寓居す即ち書樓の主人である。
【詩意】樹林や修竹が山谷に滿ち、奥深くて青い。(王昌齡の詩に、深篁引幽翠とあるも思ひ合さ
る。)高く聳える高樓門觀も江上に見える。ここに昔の人の文庫があつて、澤山な書物も塵に埋もれて
居る。既にして江邊に朝日が上つて霧も消え、美しい意や、畫いた閣は、如何にも心地よい。猿悲鳴、
泉響いて、野鳥嘒嘒る谷間の花、書見には尤も適つて居る。試に問ふ、主人は今、何處に、それは武

裝して戰地に在り、先登や搏戰や斬級を事として居る。こせこせ古書と首引して居る時ではない。書生でも亦、戰陣に臨んで、葛衣羽扇で大軍に指揮すべきである。併し、古人は此の末世の悲しみを見ない。首を回せば、蒼山空しく白雲の棚曳くを見、浮世の塵が厭はれる。

過宜賓見夷牢亂山

宜賓を過ぎ夷牢の亂山を見る

江寒晴不知遠見山上日

江寒うして晴るることを知らず、遠く見る山上の日。

朦朧含高峯見蕩射峭壁

朦朧として高峯を含み、見蕩として峭壁を射る。

横雲忽飄散翠樹分歷歷

横雲忽ち飄散す、翠樹分れて歷歷。

行人挹孤光飛鳥投遠碧

行人孤光を抱ひ、飛鳥遠碧に投ず。

蠻荒誰復愛穠秀安可適

蠻荒誰か復愛せん、穠秀安んぞ適くべけん。

豈無避世士高隱鍊精魄

豈世を避くるの士なからんや、高隱精魄を鍊る。

誰能從之遊路有豺虎迹

誰か能く之に従つて遊ばん、路に豺虎の迹あり。

【字解】(一)夷牢 唐宋詩には夷中を作る。夷牢山は、戎州に在り、州内に四面あり、宜賓は其の一である。(今、四川、水磨道に屬す)一説にいふ、夷牢とするは誤。(二)朦朧 おぼろなる貌、旭が高峯に含まれたまをいふ。(三)見蕩 光の定まらない貌、朝日の山上に見られたまをいふ。(四)峭壁 斷崖。(五)歷歷 分明に見ゆる。(六)孤光 日光。(七)蠻荒 宜賓を指す。

【題義】年譜を按ずるに、東坡は二十一で、進士に擧げられ、蜀から京師に入り、仁宗の嘉祐二年(皇紀一七二七年、西曆一〇五七年)禮部に赴き、進士に及第し、其の年の四月、成國太夫人(東坡の北堂)が亡くなつて、計至る。東坡は服喪蜀に歸る。四年、東坡は年二十四、服を除き、冬、南の方楚に適く、此詩は其の時の作である。

【詩意】四川の宜賓の地は、江水の邊にあるので、水蒸氣のために常に陰霾(つちぐもり)であつて、晴れるといふことを知らない。遠く見える山上の日も峯に含まれて、兎角おぼろがちである。併し、日が漸く上ると、光が斷崖を射る。かくて横雲も拂はれ、翠の樹も分明に見える。旅行く我は、ただ前進して恰も日光を抱ひやうなさまであり、飛ぶ鳥も、高く遠く、青空に其の影を失つてしまふ。宜賓は、かかる穠秀として、こまやかに秀でたる絶勝の地であるが、蠻荒の地であるから、誰も行いて愛するやうなものはない。だが、景勝の山中のことであるから、世を避ける高隱の士があつて、觀法や養生などして、只管、精魂を鍊つて居るものがあるであらう。一體、誰が此の人に從つて遊ぶであらう。殊に此邊には恐ろしい豺や虎の足跡さへある。容易に往き從ふことが出来ようぞ。

【餘論】起六句、寫景自好、結の處、字句勁健、極めて力がある言ひ表し方である。

夜泊牛口

夜牛口に泊す

日落江霧生繫舟宿牛口

日落ちて江霧生ず、舟を繫ぎ牛口に宿す。

古今體詩 過宜賓見夷牢亂山 夜泊牛口

居民偶相聚三四依古柳。

居民偶相聚まり、三四古柳に依る。

負薪出深谷見客喜相售。

薪を負うて深谷を出で、客を見て喜び相售る。

煮蔬爲夜飧安識肉與酒。

蔬を煮て夜飧を爲す、安んぞ識らん肉と酒と。

朔風吹茅屋破壁見星斗。

朔風茅屋を吹き、破壁星斗を見る。

兒女自啾噉亦足樂且久。

兒女自ら啾噉、亦樂み且久しきに足る。

人生本無事苦爲世味誘。

人生本事無し、世味の爲に誘はるるを苦しむ。

富貴耀吾前貧賤獨難守。

富貴吾前に耀く、貧賤獨守り難し。

誰知深山子甘與麋鹿友。

誰か知らん深山の子、麋鹿と與に友たるを甘んず。

置身落蠻荒生意不自陋。

身を置きて蠻荒に落つ、生意自ら陋ならず。

今予獨何者汲汲強奔走。

今予獨何する者ぞ、汲汲強ひて奔走す。

【字解】(一)朔風、北風、朔は北方をいふ。(二)啾噉、啗者の辭定まらない。こゝは幼兒の聲を狀したもので、字面は、東方朔の傳に見ゆ。(三)麋鹿、麋は麋鹿、鹿の大なるもの。

【題義】此詩も前の詩と同じやうに、仁宗の嘉祐四年、東坡が嘉州から宜賓を過ぎ、其の途中で、牛口に泊つた時の作である。

【詩意】日暮れて、霧が江上を籠めたので、舟を繋いで牛口村落に泊つた。たまたま村民三四人、古柳の下に相聚る。山の奥から薪木を負うて出て來たので、客を見て喜んで之を賣る。食事は野菜を煮て、夕食とする。肉も味はないし、酒も飲めない。(村民生活のさまが略窺はれる。)家屋は茅葺で、烈しい北風に吹かれ、壁の破れから空の星が見える。併し兒女のなく聲は、楽しく聞えて居る。人生は、本來何事も無い。然るに世味とて、富貴の爲に誘はれ、汲汲として功名に奔走して居る。富貴が吾前に輝いて來れば、兎角、貧賤に安んじては居られないやうである。此村民、深山の子等は、これと異なる。身を蠻荒の地に落し居るも、其の生意は自然に陋くはない。我等は此村民にも劣つて居る。心が名利の爲に使はれて、わざわざ蜀の郷里を立ち出で、かかる淺ましいことに奔走して居るのは歎はしい。

【餘論】全篇を四段に分つて見ると、起十二句を一段とする。其中、日落云の四句は、牛口村落をいひ、負薪云は、村民の生活を寫し、朔風云は、村民の屋内をいふ。人生四句を二段とする。誰知四句を三段とする、今予二句を四段とする。二段三段四段の十句は、東坡自ら感慨を興したものである。人生を達觀した處、僅僅二十四歳の青年の口占とは見えない。

牛口見月

牛口に月を見る

掩窗寂已睡月脚垂孤光。

掩窗寂として已に睡る、月脚孤光を垂る。

古今體詩 牛口見月

披衣起周覽。飛露灑我裳。
山川同一色。浩若涉大荒。
幽懷耿不寐。四顧獨徬徨。
忽憶丙申年。京邑大雨霧。
蔡河中夜決。橫浸國南方。
車馬無復見。紛紛操棧耶。
新秋忽已晴。九陌尚汪洋。
龍津觀夜市。燈火亦煌煌。
新月皎如畫。疎星弄寒芒。
不知京國喧。謂是江湖鄉。
今來牛口渚。見月重淒涼。
却思舊遊處。滿陌沙塵黃。

衣を披て起つて周覽すれば、飛露我が裳に灑ぐ。
山川同一色、浩として大荒を渉るが若し。
幽懷耿として寐せず、四顧獨徬徨。
忽ち憶ふ丙申の年、京邑大に雨霧。
蔡河中夜に決し、國の南方に横浸す。
車馬復見るなく、紛紛たり操棧耶。
新秋忽ち已に晴れ、九陌尚は汪洋。
龍津に夜市を観る、燈火亦煌煌たり。
新月皎として畫の如く、疎星寒芒を弄す。
知らず京國の喧しきを、謂ふ是れ江湖の郷。
今牛口渚に来る、月を見て重ねて淒涼。
却つて舊遊の處を思へば、滿陌沙塵黄なり。

【字解】【一】掩窗 閉ちた窗、掩は閉づる意。【二】月圓 月光の下射すること。【三】大荒 大空、韓愈の時に、翩然下大荒。【四】幽懷云 幽懷は幽鬱といふに同じ。心の底に潜るる思ひ。韓愈の時に幽懷不可寫。秋不寐 秋は心の安んぜざる貌、時、

蘇東坡舟に、耿耿不寐、如有隱憂。【一】彷彿 彷彿と同じ、さまよふ。【二】丙申年 仁宗の嘉祐元年を指す。【三】滿陌 滿陌の大道、楊豆源の時に、九陌華軒爭道路。【四】操棧耶 水夫。棧は筏に同じ。大を稱といひ、小を桴といふ。【五】九陌 遺の時に、騎官日尙早、更向九龍津。【六】寒芒 さむげなる星の光、芒は光芒。晏子春秋に、彗星有芒。【題義】仁宗の嘉祐元年（皇紀一七一六年、西曆一〇五六年）東坡、進士に擧げられ、扶風を過ぐ、明年、成國太夫人の憂に丁り、蜀に歸る。四年冬、老蘇公に侍して再び京に入る。此詩は其の時の作。【詩意】窗を閉ちて寂として已に眠に就いたが、月の光が牙えて居るので、衣を披て起つて見渡すと、夜露は落ちて我が裳を濡ほす。山も川も一つ色に白く、大空を渉るやうである。心の底の思ひは、遣る瀬がなくて察られない。あたりを見廻してさまよひ歩く。忽ち憶ひ出すのは、仁宗皇帝の嘉祐元年である。亡き母を追慕して堪へられない。又、あの年は、京邑に大雨があつて、蔡河は夜半に決れて、國都の南方に横浸した。地上は一面に河となつて、車も馬も見えなく、無數の筏が縦横するのみである。秋に入つて空も晴れたが、都の大路は、水が尙ほ退かない。水郷に夜店が開かれて、燈光是煌いて居る。新月は畫のやうに明るく、星は光を奪はれてまばらに寒げな色である。京師の喧しさを餘所にして、是れ江湖の郷といふ。（忽憶丙申年の句より此に至る、皆、京中の事を追憶する。）今、牛口渚に来つて、月を見て重ねてすさまじく感ぜらるる。却て舊遊の處を思ふと、滿陌も沙塵で黄色になつて居る。

【餘論】起八句佳佳、以下殊乏餘錄と評した人もある。

戎州

戎州

亂石圍古郡。市易帶羣蠻。

亂石古郡を圍み、市易羣蠻を帶ぶ。

瘦嶺春耕少。孤城夜漏間。

瘦嶺春耕少く、孤城夜漏の間。

往時邊有警。征馬去無還。

往時邊に警あり、征馬去つて還るなし。

自頃方從化。年來亦款關。

自頃方に化に従ふ、年來亦關を款き、

頗能貪漢布。但未脫金銀。

頗る能く漢布を貪る、但未だ金銀を脱せず。

何足爭強弱。吾民盡玉顏。

何ぞ強弱を争ふに足らん、吾が民は盡く玉顏。

【字解】(一)戎州、今の四川敘州の地。(二)夜漏、漏は漏刻。(三)征馬、馬に乗つて旅する。江海の別賦に、願征馬一雨不顧。(四)款關、關門を叩く。(五)漢布、布は錢のこと、分布流行の義から言つたのであらう。(六)金銀、金の指環、こは耳飾。

【題義】宋の政和四年に、戎州を改めて敘州とす。犍爲縣より敘州に至る百五十里。此詩は、其の風俗を述べたのである。

【詩意】戎州の地は、四方亂石で圍まれ、其の民は羣蠻と市易して居る。瘦嶺のあたり、春耕するもの少く、孤城も夜半に覺えて居る。昔は國境も物騒で、征馬も還らないこともある。此頃は方に教化され、數年このかた、關門を叩いて交易を求め、頻に漢製の布を欲しがらる。併しまだ金の耳飾などに目を付けない。かかる蠻人と強弱を争ふべきではない。吾が中國の民は、ことごとく玉の如き顔であるぞ。(羣(西南の夷)人の犍陋(容貌凶惡)に對して玉顏の二字を下したのである。)

舟中聽大人彈琴

彈琴江浦夜漏永。斂衽竊聽獨激昂。

風松瀑布已清絕。更愛玉珮聲琅璫。

自從鄭衛亂雅樂。古器殘缺世已忘。

千年寥落獨琴在。有如老仙不死閔。

興亡。

世人不容獨反古。強以新曲求鏗鏘。

舟中に大人の彈琴を聽く

琴を江浦に彈じて夜漏永し、

衽を斂めて竊に聽いて獨激昂、

風松瀑布已に清絶、

更に愛す玉珮聲琅璫、

鄭衛の雅樂を亂せしより、

古器殘缺し世已に忘る。

千年寥落獨琴在り、

老仙の死せずして興亡を閱する如きあり。

世人は容さず獨古に反るを、

強ひて新曲を以て鏗鏘を求む。

【字解】(一)大人、子、父を稱して大人といふ。始て家語に見ゆ。

(二)激昂、ふるひ立ちて氣をはる。

獨激昂、或はいふ、三字、不似雅琴。且與下文「不真」古の樂聲、酒後耳熱歌呼するもの、即ち激昂。

(三)琅璫、佩びた玉の聲。(四)鄭衛亂雅樂、鄭や衛の音聲は雅樂で、人の耳を悅ばしめ、正しい音樂を亂る。論語陽貨篇に、惡鄭聲之亂雅樂。(五)鏗鏘、琴の聲。禮記に、君子之聽音、非聽其鏗鏘而已也。

(六)不死閔、董養、董のふえの舌。(七)渺茫、ひろくはるか、草莊の詩に、扶桑已在渺茫中。(八)夜漏、夜の半すぎ。

(九)文王、文王操、琴曲の名。琴操に、村爲無道、請侯晉歸文王。

微音淡弄忽變轉

微音淡く弄して忽ち變轉

數聲浮脆如笙簧

數聲浮脆笙簧の如し

無情枯木今尙爾

無情の枯木今尙ほ爾り

何況古意墮渺茫

何ぞ況んや古意の渺茫に墮つるを

江空月出人響絕

江空しく月出でて人響絶え

夜闌更請彈文王

夜闌にして更に請うて文王を彈す

【題義】此詩は、嘉祐四年の作、古樂知るべからずと雖も、古聲は終に變ずることが出来ない意。

【詩意】夜深けて、江浦に響く琴の音には、思はず祗を効め耳を澄して、いたく感じた。音色は、風をうけたる松の聲、落ち下る瀑の音のやうで、清絶といふべきである。又、佩びた玉の聲の如き琴の音は、更に愛すべきである。一體、鄭衛の淫風が正樂を亂してから、古への樂器も殘缺して千年も久しく世に忘れられたのに、琴だけが昔ながらに行はれて居るのは、恰も年老いたる仙人が死なないうで、世の興亡を閱するがやうである。世の人は、古に反るを喜まない、強ひて新曲をなしては、古樂に代へる。微音は淡く傳へて忽ち變轉、聲は脆く流れて笙の笛の舌のやうに響く。無情の枯木朽株である琴でも、斯の如くである。何ぞ況んや古道の渺茫に墮ちるのを思ふときは、まことに感慨に堪へない。江空しく月出でて人響も絶え、夜も半ば過ぎたが、更に請うて、一層高尚なる文王操の一曲を彈じてもらつた。

其後有一風一雨一雷於焉、文王乃作此歌。

彈じてもらつた。

泊南井口期任違聖長官到晚不及見復來

南井口に泊し、任違聖長官に期し晩に到る、見るに及ばずして復來る

江上有微徑深榛煙雨埋

江上に微徑あり、深榛煙雨に埋む。

崎嶇欲取別不見又重來

崎嶇別を取らんと欲す、見ずして又重ねて來る。

下馬未及語固已慰長懷

馬を下りて未だ語るに及ばず、固より已に長懷を慰む。

江湖浩渺安得與之偕

江湖浩渺を涉る、安んぞ之と偕にするを得む。

【字解】任、任、字は違聖、眉山の人、文學氣節を以て郷里に推重さる。聖官、光祿大夫に至る。違聖は曾て平原の令となる、故に長官といふ。或はいふ、平原當に平泉に作るべしと。【二】深榛煙雨、草叢物の時に、一郡別離寒雨中。【三】崎嶇、山路のけはしきこと。【四】歌、取別、社詩に、取別何草草。【五】長懷、鮑照の詩に、長懷無終極。

【題義】宋は、南渡の後、江安縣の東北に、南井監を置く。東坡、南井口に泊したとき、任違と面會を約して行違ひとなつたので此の作がある。

【詩意】江の畔に、草木や煙雨に埋れた小徑がある。路のけはしきをも厭はないで、行いて別を彼べようとしたが、逢へなかつた。又重ねて來り、馬を下りてまだ言葉を交へないが、思を晴らした。長官は遠く江湖を涉るので、何處までも伴ふ譯にはならない。名残が惜まれるのである。

過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符云此山

乃張道陵所寓 二首

安樂山を過ぎ、山上の木葉に文、道士の篆符の如きあるを聞く。云ふ、此山は乃ち張道陵の寓せし所と、二首あり

天師化去知何在。天師化し去る知る何在る（在の字、疑ふ）

玉印相傳世共珍。玉印相傳へて世共に珍とす。

故國子孫今尙死。故國の子孫今尙ほ死す、

滿山秋葉豈能神。滿山秋葉豈能く神ならんや。

【字解】【一】安樂山 瀘州合江縣に在る（今の四川永寧道内） 【二】玉印相傳 張真人、名は道陵、張良八世の孫。遺す所の符章印劍は、子孫世々之を守る。

【題義】葛洪の神仙傳に據るに、張道陵は、沛國の人。本、大學の書生で、博く五經に通じたが、歎じて曰く、此れ年命に益なしと、遂に長生の道を學んだ。蜀人教化し易く、蜀地に名山が多いと聞いて弟子と蜀に入る。後、天に沖して去るといひ傳ふ。

【詩意】張真人は化し去つて何處に在る。其の遺した玉印は、相傳へて珍として居る。不老不死の仙術を傳へた筈であるのに、故國の子孫は、神通を得ないで、今尙ほ死する。滿山の秋葉は、神力がない。

眞人已不死。外慕墮空虛。眞人已に死せず、外慕空虛に墮つ。

猶餘好名意。滿樹寫天書。猶は餘す好名の意、滿樹天書を寫す。

【字解】【一】眞人 莊子大宗師に、古之眞人不知死生、不知惡死。史記封禪書に、李少君病死、天子以爲化去不死。

【詩意】眞人は已に死なないが、外を慕うて虚空に墮ちた。猶ほ名を好むの心持があつて、滿樹に天書を寫して居る。（宋史に據るに、眞宗の大中祥符元年（皇紀一六六八年、西曆一〇〇八年）春正月、黃帛が承天門の南に曳く。有司以聞す。上、羣臣を召して朝元殿に拜迎し、天書と號したことが見え居る。）

渝州寄王道矩

曾聞五月到渝州。曾て聞く五月渝州に到る、

水拍長亭砌下流。水は長亭を拍つて砌下に流ると。

唯有夢魂長繚繞。惟夢魂の長く繚繞たるあり、

共論唐史更綢繆。共に唐史を論じて更に綢繆。

舟經故國歲時改。舟は故國を経て歲時改まり、

霜落寒江波浪收。霜は寒江に落ちて波浪收まる。

【字解】【一】渝州 今の四川巴縣治。 【二】王道矩 青神の人。青神は今の四川建昌道。 【三】長亭 十里一長亭、五里一短亭。亭は驛亭。 【四】砌 階下の壁。 【五】繚繞 まつぱりめぐる。 【六】綢繆 もつれあふ、詩唐風に、綢繆東晉。 【七】更綢 夜の時を計る器、東晉香の時に、麝香知夜漏、刻漏也。更綢。

歸夢不成冬夜永。歸夢成らずして冬夜永く、
厭聞船上報更籌。厭ひ聞く船上更籌を報ず。

【題義】渝州は、渝水に因つて名く。吳船録に所謂恭州は即ち渝州。懷を王君に寄せた詩である。

【詩意】曾て五月の比、渝州に到ると、水は長亭を拍つて階下の砌を流れると聞く。ただ夢魂のみは長くまつはり繞り、共に唐史を論じては更に纏れあふ。今、船は故國を経て、四季改まり、霜は寒江に下りて波も起たない。ながながしい冬の夜、歸夢も成らないをりには、船上の時を報らせる時計の音まで氣になつて堪まらない。

入峽

峽に入る

自昔懷幽賞。今茲得縱探。
長江連楚蜀。萬派瀉東南。
合水來如電。黔波綠似藍。
餘流細不數。遠勢競相參。
入峽初無路。連山忽似禽。
縈紆收浩渺。蹙縮作淵潭。

昔より幽賞を懷ひ、今茲縱に探るを得。
長江、楚蜀に連り、萬派東南に瀉ぐ。
合水來つて電の如く、黔波綠にして藍に似たり。
餘流細にして數へられず、遠勢競うて相參る。
峽に入れば初路なく、連山忽ち禽に似たり。
縈紆して浩渺を收め、蹙縮して淵潭をなす。

風過如呼吸。雲生似吐含。
壁崖鳴窅窅。垂蔓綠氍氍。
冷翠多崖竹。孤生有石楠。
飛泉飄亂雪。怪石走驚驂。
絕澗知深淺。樵童忽兩三。
人煙偶逢郭。沙岸可乘籃。
野戍荒州縣。邦君古子男。
放衙鳴晚鼓。留客薦霜柑。
聞道黃精草。叢生綠玉簪。
盡應充食飲。不見有彭聃。
氣候冬猶煖。星河夜半涵。
遺民悲昶衍。舊俗接魚蠶。
板屋漫無瓦。巖居窄似菴。
伐薪常冒險。得米不盈甌。

風過ぎて呼吸するが如く、雲生じて吐含するに似たり。
崖より墜ちて鳴いて窅窅、蔓を垂れて綠氍氍。
冷翠崖竹多く、孤生石楠あり。
飛泉亂雪を飄へし、怪石驚驂を走らす。
絶澗深淺を知り、樵童忽ち兩三。
人煙偶、郭に逢ふ、沙岸籃に乗すべし。
野戍州縣荒れ、邦君は古の子男。
衙を放つて晚鼓を鳴らし、客を留めて霜柑を薦む。
聞道黄精草、叢生す綠玉簪に、
盡く應に食飲に充つべきも、彭聃あるを見ず。
氣候冬猶は煖に、星河夜半ば涵す。
遺民昶衍を悲しみ、舊俗魚蠶を接ふ。
板屋漫にして瓦なく、巖居窄くして菴に似たり。
薪を伐りて常に險を冒し、米を得て甌に盈たす。

歎息生何陋。劬勞不自慚。

葉舟輕遠泝。大浪固嘗諳。

矍鑠空相視。嘔啞莫與談。

蠻荒安可住。幽邃信難耽。

獨愛孤棲鶴。高超百尺嵐。

橫飛應自得。遠颺似無貪。

振翮游霄漢。無心願雀鷄。

塵勞世方病。局促我何堪。

盡解林泉好。多爲富貴酣。

試看飛鳥樂。高遁此心甘。

歎息生何陋、劬勞自慚、
葉舟輕うして遠く泝る、大浪固より嘗て諳んず。

矍鑠空しく相視て、嘔啞與に談することなげん。

蠻荒安んぞ住まるべけん、幽邃信に就み難し。

獨愛す孤棲の鶴、高く百尺の嵐に超え、

横飛應に自得すべく、遠く颺りて貪ることなきに似て、

翮を振ひて霄漢に遊び、雀鷄を顧るに心なきを。

塵勞世方に病む、局促我何ぞ堪へん。

盡く林泉の好きを解するも、多くは富貴の酣を爲す。

試みに看よ飛鳥の樂、高く遁れて此心甘んずるを。

【字解】【一】 峽 山崩して水を夾むを峽といふ。【二】 幽賞 しづかにほめ味ふ、李白の春夜宴桃李園序に、幽賞未已、高談稱清。一本に清賞に作る。【三】 合水來如電 李白の望瀑布水詩に、飲如飛電來。【四】 野渡 野水をいふ。【五】 壺 寺の塔。【六】 盤紆 めぐりまつはる、莊園西都賦に歩用道以盤紆。【七】 風過如呼吸 莊子刻意篇に、吹呼吸吐故納新。

【八】 翠車 安からざる車の形容。【九】 純純 樹の枝などの類長く垂れる貌。【一〇】 石楠 百陽雜俎に、石楠花有紫碧白三色、大如牡丹。【一一】 郭君古子男 荆楚及び蠻子ば、皆古の子男の國。【一二】 問道 問説と同じ、さくならくと問む、さくなるの延會。

【一三】 黃精 即ち青精飯、之を食すれば、年を延ぶ。【一四】 玉壺 淮南文帝の時に、斜柯神玉壺、管は多と同じ。【一五】 彭蠡 彭蠡と老彭、共に長壽。【一六】 規矩 孟規と王衍、東坡の自註に、孟規從此入規、王衍亦到主。【一七】 魚腹 李白の時に、羣衆及魚腹問、固何茫然。魚腹羣衆の先祖は蜀主である。【一八】 小壘 小壘。【一九】 劬勞 骨折りて病む。詩小雅、羣衆哀哀、在彼劬勞。【二〇】 聖鑒 老いて勇健なること、後漢書馬援傳に、聖鑒哉此翁。【二一】 嘔啞 小兒の語る聲。【二二】 駁 駁樂の意。【二三】 關 阿ナナキ島、鳩の窟。【二四】 扇 羽扇。【二五】 輪 音アン、鳩の窟。【二六】 局促 器量の小い貌、白居易の時に、羣俗常許君、局促應笑予。【二七】 林泉 山林泉石。

【題義】蜀江、百川を會して直下すること千里、峽をなす所三處、之を三峽といふ、即ち西陵峽・歸鄉峽・巫峽である。

【詩意】余は昔から靜に山水を清賞したいと懐つて居たが、今年、十分に探ることが出来た。大江は源を蜀の岷山から發し、東、漢口と合し、萬派争ひ流れて東南に瀉いで居る。江水は又、東北して巴郡に至る。合水は滔滔として、飛電の來るかと疑はる。黔水の波は綠で藍に似、餘流は數はられな。其の遠い流は競うて相參はる。峽に入れば初は路がなく、兩岸の連山は、佛龕のやうである。流は、めぐりまつはつて水の浩渺を收め、壑まつて淵となり潭となる。風の行くは、呼吸するやうであり、雲は吐いたり含んだりする。崖より墜ちて悲鳴をあげることもある。細長く蔓草は垂れ、崖には青い竹が多く、石楠などもある。瀑の落ちるは亂雲のやうであり、怪石の立てるは馬の驚くやうである。深山の谷間にも、人の住むなるべく、樵の小供兩三見ゆ。山村の郭に逢うたのである。沙の岸は藍輿に乗ることも出来る。蜀より楚に至る、郡を過ぐる十一、縣は二十六。州縣も荒廢に歸した。楚

の地も藪の地も、古の子男の國であつた。役所も晩の鼓を鳴らし客を留めて蜜柑を饗應する。聞き及ぶ所では、黃精草、之を食へば、年を延ばすことが出来る。綠玉簪も同じ效能、之も養生した。盡く食飲に充てても、古の彭祖や老聃のやうに長壽でない。氣候は冬なほ暖かに、天の河も夜半涵して居る。遺民は今尚ほ昔の孟、昶や王衍を悲しむ。孟、昶は此地から入觀し、王衍も蜀の君である。土地の習はしは、蜀の先祖と傳へて居る魚鳧氏や蠶叢氏を忘れない。板屋で瓦もなく、巖居は菴のやうである。險を冒して薪を伐り、米を得ても小甕には満たない。如何にも生活は陋く、勞作しても愧ぢない。一葉の舟に棹さして遠く沂る。大浪の打つは、固より踏んじて居る。老いて勇健なるも、與に談ずることが出来ない。かかる蠻荒の地には留まられないし、かかる里離れた處では樂しみを得られない。ただ愛することは、朝鳴き鳥の高く百尺の空に颯り、雲間に飛び遊び、雀や鶉を顧る心がないのである。浮世の塵にこせつくことは、どうしても堪へられない。皆人は山林泉石の樂を解するも、多くの場合、富貴の人の酣樂をなすに過ぎない。試みに看よ、飛鳥の樂しく高く遁れて、此心の甘んじて居るのを。

【餘論】長江の六句は總挈をなし、入、峽の十二句は、峽中の景物をいひ、絶湖の十二句は、峽中の人事をいひ、氣候の八句は、峽に居る人の勞をいひ、歎息の八句は、峽に入るの勞をいひ、獨愛以下十二句の中、前六句は、孤獨横飛自得の樂をいひ、後六句は、自己の局東塵勞の態を寫して居る。高翹の樂を知らば、則ち高翹の甘きを知る。詩醇の評に、一篇章法明燦、如觀遠軸列秀青青とある。

江上看山

江上山を見る

船上看山如走馬、
倏忽過去數百羣。
前山槎牙忽變態、
後嶺雜沓如驚奔。
仰看微逕斜繚繞、
上有行人高縹緲。
舟中舉手欲與言、
孤帆南去如飛鳥。

船上山を看れば走馬の如く、
倏忽として過ぎ去る數百羣。
前山は槎牙として忽ち態を變じ、
後嶺は雜沓して驚奔する如し。
仰いで微逕を看れば斜に繚繞し、
上に行人あり高うして縹緲。
舟中手を舉げて與に言はんと欲すれば、
孤帆南に去つて飛鳥の如し。

【字解】(一) 倏忽、ナミヤカ、

莊子應帝王篇に、南海之帝爲倏、北海之帝爲忽、倏は倏と同じ。(二) 槎牙、木の枝のかどち入りくむ。(三) 雜沓、こたごたこみ合ふ、雜沓と同じ。(四) 縹緲、まっはりめぐる。(五) 縹緲、高く遠い、杜時に山風吹靡子縹緲。

【詩意】船上から山を見ると、走馬のやうで、見る間に數百羣も過ぎ去る。前なる山は、木の枝のかどち入りくむやうであり、後なる嶺もこたごたこみ合ふ。仰いで山上の小徑を見ると、斜にまっはりめぐり、上に行く人は高くして遙かである。舟中、手を舉げて、與に言はうとすれば、生憎や、孤帆は南を指して飛鳥の如くである。

【餘論】此詩の起句は、杜少陵の隔河見胡騎、倏忽數百羣の二語を用ひて居り、結句は、獨孤及の

詩、風帆若鳥飛から来る。

涪州得山胡次子由韻

涪州に山胡を得、子由の韻に次す

終日鎖筠籠。回頭惜翠茸。

終日筠籠に鎖され、頭を回して翠茸を惜む。

誰知聲嘯嘯。亦自意重重。

誰か知らん聲嘯嘯、亦自ら意重重。

夜宿煙生浦。朝鳴日上峯。

夜宿煙浦に生じ、朝鳴日峯に上る。

故巢何足戀。鷹隼豈能容。

故巢何ぞ戀ふに足らん、鷹隼豈能く容れんや。

【字解】涪州、古の巴國、漢の涪陵（今の重慶）。【筠籠】たけかご、杜市の詩に、野人相贈筠筠籠。【翠茸】翠羽。【誰知】誰か知らん。【亦自】亦自ら。【意重重】意、思。【夜宿】夜に宿す。【煙生】煙が生ずる。【朝鳴】朝に鳴る。【日上】日の上。【故巢】故郷。【何足】何に足らぬ。【戀】戀ふ。【鷹隼】鷹と隼。【豈能】豈に能はぬ。【容】容れぬ。

【題義】舟が涪州を過ぎて得たのであるから、涪州得山胡と題したのである。山胡は、鸚鵡をいふ。東坡の自註に、善鳴出黔中一とあるが、涪州といふも、黔中といふも同じである。元和郡縣志に、巴之南部、秦黔中也。

【詩意】一日中、竹籠に閉ぢ込められ、美しい翠羽も、そこなはれるやうである。併し、呼び叫ぶ聲のうちにも、亦自ら深く心に思ふ所がある。煙が浦邊に生ずる比の夕暮となると、宿を求め、日が峯に上る朝は、聲朗らかに鳴く。故巢など、決して戀しくはない。鷹や隼は、容れないのである。

留題仙都觀

仙都觀に留題す

山前江水流浩浩。

山前江水流れて浩浩、

山上蒼蒼松柏老。

山上蒼蒼として松柏老ゆ。

舟中行客去紛紛。

舟中行客去つて紛紛、

古今換易如秋草。

古今換易秋草の如し。

空山樓觀何崢嶸。

空山樓觀何ぞ崢嶸、

真人王遠陰長生。

真人王遠陰長生。

飛符御氣朝百靈。

符を飛ばし氣に御して百靈を朝す、

悟道不復誦黃庭。

悟道復黃庭を誦せず。

龍車虎駕來下迎。

龍車虎駕來りて下り迎ふ、

去如旋風搏紫清。

去ること旋風の紫清を搏つが如し。

真人厭世不回顧。

真人は世を厭ひて回顧せず、

世間生死如朝暮。

世間の生死朝暮の如し。

學仙度世豈無人。

仙を學び世を度る豈人なからんや、

古今體詩 涪州得山胡次子由韻 留題仙都觀

【字解】仙都、仙都山。【觀】觀音堂。【山前】山に在り。【浩浩】廣大貌。【蒼蒼】深青色。【松柏老】山は蒼蒼として松柏老ゆ。【紛紛】多し。【崢嶸】高峻貌。【真人】仙人。【王遠】王遠。【陰長生】陰長生。【飛符】符を飛ばす。【御氣】氣を御す。【朝百靈】百靈を朝す。【悟道】悟道。【不復誦黃庭】不復誦黃庭。【龍車虎駕】龍車虎駕。【來下迎】來りて下り迎ふ。【去如旋風】去ること旋風。【搏紫清】紫清を搏つ。【真人厭世】真人は世を厭む。【不回顧】回顧せず。【世間生死】世間の生死。【如朝暮】如朝暮。【學仙度世】仙を學び世を度る。【豈無人】豈人なからんや。

餐霞絕粒長苦辛。

霞を餐ひ粒を絶ち長く苦辛。

安得獨從逍遙君。

安んぞ獨逍遙君に従うて、

冷然乘風駕浮雲。

冷然風に乗りて浮雲に駕し、

超世無有我獨存。

超世無有我獨存することを得ん。

超世無有 晉書阮修傳に、超世高遊莫如其情。

天台山賦に、絶粒茹芝者云云。莊子逍遙遊篇に、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、可遊乎四海之外。〔三〕冷然乘風 冷然は飄然と同じ、輕妙の貌。莊子逍遙遊篇に、列子御風而行、冷然善也。〔四〕

【題義】東坡は英宗の治平三年（皇紀一七二六年、西曆一〇六六年）襄を載せて蜀に歸り、四年四月、家に到る。其の再び仙都觀を過ぎたのは、同じく四年のことである。仙都觀は唐の時代に建てたもので、宋には景德觀と改め、又、白鶴觀と名く。

【詩意】見渡せば、山前の江水は浩浩として流れ、山上の大きな松柏は青青として居る。併し舟中の旅客は紛紛として去つてしまひ、古今の移り行くも秋草のやうである。空山の樓觀は、高く聳えて居り、王方平だの陰長生などいふ真人は此山に在つて道を學び仙を得たものである。符を飛ばし氣に御して百靈を朝せしめる。大道を悟つて、また黃庭經など道家の書を誦しない。龍が下り迎へ、毎に之に乗つて往來する。其の去ることの速かなるは、旋風の天空を搏つがやうである。真人は人世を厭ひて回顧しない。人間の生死するは、朝暮の代謝するやうに思つて居る。仙術を學び、人世を渡らうと欲する我は、霞を餐ひ、粒食を絶ちて長く苦辛する。どうか、飄然として風に御し、雲に駕し、絶對

的廣漠の世界に逍遙したいものである。

仙都山鹿

仙都の山鹿

日月何促促。

日月何ぞ促促、

塵世苦局束。

塵世局束を苦しむ。

仙子去無蹤。

仙子去つて蹤なく、

故山遺白鹿。

故山白鹿を遺す。

仙人已去鹿無家。

仙人已に去つて鹿に家なく、

孤棲悵望層城霞。

孤棲悵望す層城の霞。

至今聞有遊洞客。

今に至り遊洞の客あるを聞く、

夜來江市叫平沙。

夜江市に來り平沙に叫ぶ。

長松千樹風蕭瑟。

長松千樹風蕭瑟、

仙宮去人無咫尺。

仙宮人を去つて咫尺なし。

夜鳴白鹿安在哉。

夜鳴の白鹿安くにあるや、

古今體詩 仙都山鹿

【字解】〔一〕促促 あくせくする、魏文帝の著書に、促促百年。

〔二〕白鹿 任昉の述異記に、鹿千年化著、又五百年化為白。明皇別錄に、芙蓉園得一白鹿、山人王曼曰、此漢時鹿也。果於角際零毛中得一銅牌、刻曰宜春苑中白鹿、上目之曰仙客、命國人善養之。

〔三〕悵望 なげきのぞむ。〔四〕層城霞 孫綽の遊天台山賦に、荷台嶺之可攀、亦何羨於層城、また、赤城霞起而建標。〔五〕蕭瑟 ものさびしき貌。宋玉の賦に、秋之爲氣也蕭瑟兮、草木搖落而變衰。〔六〕行迹 韋應物の詩に、落葉滿空山、何處尋行迹。

滿山秋草無行迹 滿山の秋草行迹なし。

【題義】老泉の詩跋によると、鄆都縣に至り、將に仙都觀に遊ばんとし、知縣李長官を見る。云、固より君の將に至らんとするを知る。それは此山に老鹿があるが、猛獸も獵人も、之をどうすることも出来ない。客が來遊すると、鹿が輒ち夜鳴く、常に此を以て、之を候して、未だ嘗て失敗がなかつたと。此異聞によつて東坡も此詩を作つたのである。

【詩意】日月何ぞ催促として過ぎ行く。浮世の塵に局束されるのが嫌である。仙人去つて其の友として居つた白鹿だけが山に遺つて居る。仙人が居ないと、鹿に家がない。孤で層城の霞を望んで恨いて居る。今でも遊洞の客があると、鹿は鳴いて江市にも平沙にも聞える。長松千樹、風もものさびしく、仙人の家には人も居ない。さて夜鳴いた白鹿は何處にゐる。滿山これ秋草で尋ねるに由がない。

江上值雪效歐陽體限不以鹽玉鶴鶯絮蝶飛

舞之類爲比仍不使皓白潔素等字次子由韻

江上雪に値ひ、歐陽の體に效ひ、限るに鹽玉鶴鶯絮蝶舞の類を以て比をな
さす、仍ほ皓白潔素等の字を使はず、子由の韻に次す

縮頸夜眠如凍龜 頸を縮めて夜眠る凍龜の如く、

【字解】縮頸、史記龜策

雪來惟有客先知 雪來つて惟客の先づ知るあり。

江邊曉起皓無際 江邊曉に起れば浩として際なく、

樹杪風多寒更吹 樹杪風多くして寒更に吹く。

青山有似少年子 青山は少年子に似たるあり、

一夕變盡滄浪髭 一夕變じ盡す滄浪の髭。

方知陽氣在流水 方に知る陽氣流水に在り、

沙上盈尺江無漸 沙上尺に盈ち江漸くるなし。

隨風顛倒紛不擇 風に隨つて顛倒紛として擇はず、

下滿坑谷高陵危 下坑谷に滿ちて高陵危し。

江空野闊落不見 江空しく野闊く落ちて見えす、

入戶但覺輕絲絲 戸に入りて但覺ゆ輕く絲絲。

沾裳細看若刻鏤 裳を沾して細に看れば刻鏤の若く、

豈有一一天工爲 豈一一天工の爲あらんや。

霍然一揮徧九野 霍然一揮九野に徧し、

傳に、神龜縮頸而宿。浩氣際。列子力命篇に、窮於無際。

【一】滄浪、水色、陸機の詩に、垂影滄浪。

【二】盈尺、左傳隱公八年に、平地盈尺爲大雪。謝惠連の雪賦に、盈尺則呈瑞於豐年。後漢書王霸傳に、河水漸滿無船不可濟。

【三】若刻鏤、世説に、羣公對雪、尚隆之曰、麴推一金井、誰測湯餅、吳永嘉曰、玉滿天山、懸刻佩環、並間服其韻精。

【四】霍然一揮、霍然ば、にはかに消え失せる貌。司馬相如の大人賦に、霍然雲消。こゝは、にはかに雪をまき散らす意。

【五】九野、呂氏春秋に、天有九野。

吁此權柄誰執持
世間苦樂知有幾
今我幸免沾膚肌
山夫只見壓樵擔
豈知帶酒飄歌兒
天王臨軒喜有麥
宰相獻壽嘉及時
凍吟書生筆欲折
夜織貧女寒無幃
高人著屐踏冷冽
飄拂巾帽眞仙姿
野僧斫路出門去
寒液滿鼻清淋漓
漉袍入袖溼靴底

吁此の權柄誰か執持する。
世間苦樂知る幾がある。
今、我幸に膚肌を沾すを免る。
山夫只見る樵擔を壓するを、
豈知らんや酒を帶び歌兒を飄すを。
天王軒に臨んで麥あるを喜び、
宰相壽を獻じて時に及ぶを嘉す。
凍吟の書生、筆折れんと欲し、
夜織の貧女寒うして幃なし。
高人屐を著けて冷冽を踏み、
巾帽を飄拂して眞に仙姿。
野僧路を斫りて門を出でて去り、
寒液鼻に滿ちて清うして淋漓。
袍に漉ぎ袖に入り靴底を溼す、

【七】帶酒 李義山の時に、帶酒玉
兒嬉。

【八】喜有麥 朝野食載に、要宜麥
見三白。

【九】宰相獻壽 宋の大明中、元日
雪花降る。右衛將軍莊嚴を下り、
雪が衣に集つて還り白す、上以て瑞
となし詩を賦す。

【一〇】高人著屐 齊の東郭先生は
貧困饑寒、衣は敝れ、履は完からず
して雪中を行く。

【一一】眞仙姿 晉の王恭嘗て鶴氈裘
を披て雪中を行く。孟昶、之を見て
曰く、眞に神仙中の人と。

【一二】淋漓 したたる貌。

亦有執板趨堦墀
舟中行客何所愛
願得獵騎當風披
草中咻咻有寒兔
孤隼下繫千夫馳
敲冰煮鹿最可樂
我雖不飲強倒卮
楚人自古好弋獵
誰能往者我欲隨
紛紜旋轉從滿面
馬上操筆爲賦之

亦板を執りて堦墀に趨くあり。
舟中の行客何の愛する所。
願くは獵騎を得て風に當つて披かん。
草中咻咻寒兔あり、
孤隼下に繫げ千夫馳す。
氷を敲き鹿を煮て最も樂しむべし、
我飲まずと雖も強ひて卮を倒す。
楚人は古より弋獵を好む、
誰か能く往くものぞ、我隨はんと欲す。
紛紜旋轉從て面に滿つ、
馬上筆を操つて爲に之を賦す。

【一三】執板 吳志朱治傳に、每進
見孫權常親迎、執板交拜。

【一四】堦墀 堦は階に同じ、墀は階
上の地。

【一五】咻咻 呼吸する聲。

【題義】歐陽修が嘗て客を會して詩を賦したとき、玉月梨梅練絮白舞鶉鷓銀等の字を用ひることを禁
じたといふ話がある。歐陽公の原作は、聚星堂雪詩の後に載せてある。東坡の此詩は、歐陽公の原作
に效ひ、弟子由の韻に次したものである。

古今體詩 江上值雪效歐陽體次子由韻

【詩意】寒いので頭を縮めて眠る形は、凍えた龜のやうである。雪が降つても、内に在つては氣付かない。外から来た客が先づ知る。そこで早起して江上を見ると、浩として際がなく、梢は風で、寒さが一層加はる。見渡せば青い山も、一夕にして滄浪の髭となる。少年の忽ち老い易きに似て居る。陽氣は、流れる水にも見れる。さて、平地の尺に盈つるは大雪で、爲に江水も断げない。雪は風のまにまに紛紛として散る。それが積り積つて坑谷に滿ち、高陵も危い。江もかくれて見えなく、野も廣くなつたのは雪のためである。戸に入りて、雪は軽く飛んで居る。裳を治すも構はないで、細に看ると、雪の形は六出であつて、刻刀を用ひたやうである。天工と雖も、一雕琢を加へる譯にはゆかない。霍然雪を撒き散らすと世界に彌し。ああ誰が此の權柄を掌る。人間に苦樂は多いが、今、我は幸に肌を治すを免れた。降る雪は樵夫の肩に積るを見るも、簾を垂れて美酒に寒を忘れ、筵を掃うて巧に妬む同鸞の袖を知らない。正月元日雪花を見る、天王は豊年を喜び、宰相は瑞兆と賀し奉る。苦學の書生は、筆の凍るを歎き、貧しい織女に韓はない。昔、東郭先生は、飢寒に迫り、衣は敝れ履は完からずして雪中を行き、雪中篋裘を披た香の王恭は孟利に神仙中の人と褒められた。野僧は門を出で雪に路つけ、寒液が鼻に滿つ。朝士の袍も袖も靴も雪に溼はされ、笏を執つて階陛に趨く。舟中の行客が顧ふ所は何ぞ、羸騎を驅つて雪中を披かん、草中に寒兎の聲がするから、じつとしては居られない。車を繋げて千夫は獵場に馳せる。獲物は多い。氷を敲き、鹿を料理して、酒を飲む。楚人の弋獵は昔から名高い。ああ獵に行く人があれば、我も隨はん。雪は紛紛、風が加はつて旋轉し、顔に一杯になつた。馬上筆を操つて之を賦したのである。

た。馬上筆を操つて之を賦したのである。

嚴顔碑

嚴顔の碑

先主反劉璋。兵意頗不義。
孔明古豪傑。何乃爲此事。
劉璋固庸主。誰爲死不二。
嚴子獨何賢。談笑傲砮几。
國亡君已執。嗟子死誰爲。
何人刻山石。使我空涕淚。
吁嗟斷頭將。千古爲病悻。

先主劉璋に反く、兵意頗る不義なり。
孔明は古の豪傑、何ぞ乃ち此事を爲す。
劉璋は固より庸主、誰か爲に死して二かざらん。
嚴子は固より庸主、誰か爲に死して二かざらん。
國亡びて君已に執へらる、嗟子死して誰が爲にする。
何人か山石に刻する、我をして空しく涕淚せしむ。
吁嗟斷頭將、千古病悻となる。

【字解】【一】嚴顔、劉璋の爲に巴郡を守つて居つたが、雲飛に擒にせらる。飛呵して曰く、何ぞ降らざると、顔曰く、我州、ただ斷頭將軍あつて降將軍なしと。【二】先主、劉漢の劉備。【三】劉璋、曹操、璋を擬威將軍となす。張松、璋に説いて先主を迎へしむ。先主、成都を圍み、璋出て降る。璋を南郡に遷す。【四】不二、一心なきないふ。【五】砮几、檣旗の意、古の刑具。

【題義】東坡の自註によると、嚴顔の碑は忠州（今の四川東川道）に在る。巴郡の太守嚴顔の節義を詠じたのである。

【詩意】蜀の劉備が劉璋に反したのは、徳義に於て宜しくない。諸葛孔明が居つてなせ此事をする。劉璋の凡庸であるのは、言ふまでもないから、之が爲には命を棄てるものもなからう。ただ顔顔は賢で、張飛に擒にされても屈しない。推轂の上に立ちてびくともしない。其國が亡び、其君が執へられたのに、嚴將軍は誰が爲に死する。之を山石に刻したのは何人である、我をして涕涙を覺えざらしめる。ああ斷頭將軍は、千古、人をして悸かしめる。

屈原塔

屈原の塔

楚人悲屈原。千載意未歇。
精魂飄何處。父老空哽咽。
至今滄江上。投飯救饑渴。
遺風成競渡。哀叫楚山裂。
屈原古壯士。就死意甚烈。
世俗安得知。眷眷不忍決。
南賓舊屬楚。山上有遺塔。
應是奉佛人。恐子就淪滅。

此事雖無憑。此意固已切。
古人誰不死。何必較考折。
名聲實無窮。富貴亦暫熱。
大夫知此理。所以持死節。

此事は憑るなしと雖も、此意は固より已に切なり。
古人誰か死せざらん、何ぞ必しも考折を較せん。
名聲實に窮りなく、富貴亦暫く熱す。
大夫は此理を知る、死節を持する所以なり。

【字解】「一」屈原、名は平、楚懷王の左徒たり。懷沙の賦を作り、汨羅に投じて死す。【二】精魂、たましひ、李華の弔古戰場文に、形骸不至、精魂何依。【三】哽咽、涙にむせぶ、古樂府、魚仲婦妻時に、哽咽不能語。【四】滄江、江水は蒼色、故にいふ。【五】競渡、舟で先を争ひて渡る遊戯。荆楚歲時記に、五月五日競渡。續齊諧記に、屈原五月五日投汨羅水、楚人哀之、至此日以竹筒子貯米投汨羅水祭之。【六】古壯士、戰國策に、壯士一去兮不復還。【七】眷眷、れんごろに思ふ、詩小雅に、眷眷懷顧。【八】南賓、古の巴子國、即ち忠州。【九】考折、長壽と短折、尙書洪範に、五福、考終命、六極、凶短折。【一〇】大夫、屈原は三閭大夫、の塔を見て、屈原其の人を弔つたのである。

州は、もと楚の地、山の上に塔がある。これは佛教信者が屈原の淪滅することを恐れて建てたものであらう。此の事は恐り處がなくても、此の意は至つて切なる覺ゆ。人間は一度は死ぬのである。長生と短命とを比べるにも及ぶまい。名聲は翫りがなく、富貴も暫しの間のみ。屈原は此の道理を悟つて居るから死節を失はないのである。

望夫臺

望夫臺

山頭孤石遠亭亭。

山頭の孤石遠くして亭亭、

江轉船回石似屏。

江轉じ船回り石は屏に似たり。

可憐千古長如昨。

憐むべし千古長くして昨の如く、

船去船來自不停。

船去り船來りて自ら停まらず。

浩浩長江赴滄海。

浩浩たる長江滄海に赴き、

紛紛過客似浮萍。

紛紛たる過客浮萍に似たり。

誰能坐待山月出。

誰か能く坐して山月の出づるを待ち、

照見寒影高伶俜。

照し見ん寒影の高うして伶俜たるを。

【題義】昔、人あり楚に往き、歳を累ねて還られなかつたので、其の妻が山に登り、之を望むこと久しく、乃ち化して石となつた。此の故事を賦したのである。

【詩意】山上の孤石は、高く聳えて屏風のやうであるより翠屏山といふ。江水も流を轉じ、行く船も廻る。憐むべし千古は長きが如きも昨日の心地し、船は來往して暫くも停らない。浩浩たる長江は、やがて滄海に入るも、紛紛たる過客は、浮草のやうである。あゝ入る日を惜しむなく、出づる月を待つて、寒影のおちふれたるを照らし見たいものである。

竹枝歌

竹枝歌

竹枝歌本楚聲幽怨惻怛若有所深悲者豈亦往者之所見有足怨者與夫傷二妃而哀屈原思懷王而憐項羽此亦楚人之意相傳而然者且其山川風俗鄙野勤苦之態固已見於前人之作與今子由之詩故特緣楚人疇昔之意爲一篇九章以補其所未道者

【訓讀】竹枝歌は、本楚聲、幽怨惻怛、深く悲しむ所あるもの若し。豈亦往者の見所、怨むに足るものあるか。夫れ二妃を傷んで屈原を哀み、懷王を思うて項羽を憐む、此れ亦楚人の意相傳へて然るもの。且つ其れ山川風俗、鄙野勤苦の態は、固より已に前人の作と、今子由の詩とに見はる。故に特に楚人疇昔の意に緣り、一篇九章を爲り、以て其の未だ道はざる所のものを補ふ。

古今體詩 望夫臺 竹枝歌

【字解】竹枝 はやり歌、其の聲もと巴渝より出づ。唐の貞元中、劉禹錫、阮湘に在り、僊歌鄙陋なるを以て、乃ち唐人の九歌によりて、竹枝新詞を作り、里中の小兒をして之を歌はしむ。【一】 幽怨、心の底にひめたるうらみ、李白の詩に、獨幽怨以沈迷。【二】 惘恨、いたみかなしむ、禮記問喪に、惘恨之心、痛疾之意。

蒼梧山高湘水深

蒼梧山高く湘水深し、

中原北望度千岑

中原北に望めば千岑を度る。

帝子南游颿不返

帝子南に遊んで颿として返らず、

惟有蒼蒼楓桂林

惟蒼蒼たる楓桂林あり。

楓葉蕭蕭桂葉碧

楓葉蕭蕭桂葉は碧、

萬里遠來超莫及

萬里遠く來るも超にして及ぶなし。

乘龍上天去無蹤

龍に乗つて天に上り去つて蹤なし、

草木無情空寄泣

草木の無情なるに空しく泣を寄す。

水濱擊鼓何喧闐

水濱に鼓を撃つて何ぞ喧闐たる、

相將扣水求屈原

相將ゐて水を扣き屈原を求む。

屈原已死今千載

屈原已に死して今千載、

【字解】【一】 蒼梧、禹貢荊州の域、漢は蒼梧郡を置く、地は百粵を總べ、山は五嶺を連ぬ。【二】 湘水、一名湘江、湖南の巨川。【三】 千岑、岑はみね、張衡の詩に、江外歷千岑。【四】 帝子南游、湘君は舜の二女、舜の二妃。舜南に巡狩し、蒼梧に死す。二妃之に従ひ、及ぼずして沅湘の間

に墮死す。【五】 乘龍上天、黃帝龍に乗りて天に上る。羣臣後宮從ふもの七十餘人、小臣は上るを得ず。【六】 空寄泣、博物志に、舜崩、二妃啼以涕揮竹竹盡斑。【七】 喧闐、人が羣がりてやかましい。唐國史補に、鄜陽婦之喧闐。【八】 相將、高陽樂人歌相將入酒家。【九】 哀

【一】 蒼梧、禹貢荊州の域、漢は蒼梧郡を置く、地は百粵を總べ、山は五嶺を連ぬ。【二】 湘水、一名湘江、湖南の巨川。【三】 千岑、岑はみね、張衡の詩に、江外歷千岑。【四】 帝子南游、湘君は舜の二女、舜の二妃。舜南に巡狩し、蒼梧に死す。二妃之に従ひ、及ぼずして沅湘の間

滿船哀唱似當年

滿船哀唱して當年に似たり。

海濱長鯨徑千尺

海濱の長鯨徑千尺、

食人為糧安可入

人を食うて糧となす安んぞ入るべけん。

招君不歸海水深

君を招くも歸らず海水深し、

海魚豈解哀忠直

海魚は豈忠直を哀しむを解せんや。

吁嗟忠直死無人

吁嗟忠直死して人なし、

可憐懷王西入秦

憐むべし懷王の西秦に入るを。

秦關已閉無歸日

秦關は已に閉ぢて歸る日なし、

章華不復見車輪

章華復車輪を見ず。

君王去時簫鼓咽

君王去る時簫鼓咽び、

父老送君車軸折

父老君を送りて車軸折る。

千里逃歸迷故鄉

千里を逃れ歸つて故郷に迷ふ、

南公哀痛彈長劍

南公哀痛して長劍を彈す。

三戸亡秦信不虛

三戸秦を亡す信に虚ならず、

【一】 蒼梧、禹貢荊州の域、漢は蒼梧郡を置く、地は百粵を總べ、山は五嶺を連ぬ。【二】 湘水、一名湘江、湖南の巨川。【三】 千岑、岑はみね、張衡の詩に、江外歷千岑。【四】 帝子南游、湘君は舜の二女、舜の二妃。舜南に巡狩し、蒼梧に死す。二妃之に従ひ、及ぼずして沅湘の間

一朝兵起盡謹呼。

一朝兵起りて盡く謹呼す。

當時項羽年最少。

當時項羽は年最も少く、

提劍本是耕田夫。

劍を提ぐるも本是れ耕田の夫。

橫行天下竟何事。

天下に橫行するも竟に何事ぞ、

棄馬烏江馬垂涕。

馬を烏江に棄つれば馬涕を垂る。

項王已死無故人。

項王已に死して故人なく、

首入漢庭身委地。

首は漢庭に入り身は地に委す。

富貴榮華豈足多。

富貴榮華は豈多とするに足らんや、

至今惟有冢嵯峨。

今に至つて猶ほ冢の嵯峨たるあり。

故國淒涼人事改。

故國淒涼として人事改るも、

楚鄉千古爲悲歌。

楚鄉千古爲に悲歌す。

【題義】竹枝詞は唐人に起る、竹枝を打つて神を賽するより創まる。屈原も九歌を作り、楚人をして神を迎せしめた。其の聲によつて此の竹枝を作つたのである。

【詩意】蒼梧の山は高く、湘江の水は深い。遙に中原を望めば、山又山である。昔、舜帝は南に巡狩

して蒼梧の野に崩じ江南の九疑山(湖南寧遠縣南六十里)に葬る。ただ楓樹桂林があるのみ。楓葉は物さびしく、桂葉は碧である。萬里遠く來るも、超かにして及ばない。帝は龍に乗つて天に上る。湘君の涙は空しく竹を斑ならしめる。水濱に鼓を撃ち水を叩いて屈原を求む。屈原亡してここに千年なれども、滿船の哀唱は、其の昔に變らない。海濱の長鯨は、人を食うて糧とするから、入ることが出来ない。海水も深いので、君を招いても歸らない。無情の海魚は、忠直の屈原を哀しむことを知らない。屈原死して、また忠直の人を見ない。懷王の秦に入つて歸らないのは、誠に憐むべきである。ああ章華臺には楚王在さず、王の此世を去らるる時、簫鼓の聲咽び、父老は流涕して吾王は反らずと。楚王の幽魂は故山に迷うて居るのである。懷王が秦に入つて反らなかつたから、楚人は之を憐み、楚の南公はいふ、他日、楚はたとひ三戸になつても、秦を亡ばすものは、必ず楚であると。それで一朝、秦を攻める兵が起ると、齊しく謹呼したのである。當時、項羽は僅に二十四の青年で、劍を提ぐるも、本是れ耕田の夫、天下に橫行するも、何事も成就しなかつた。烏江を渡るとき、涕を垂れて愛馬に別れ、身死して首は漢庭に入る。して見ると、世の富貴榮華は尊ぶに足らない。ただ塚の嵯峨として今に存するのみ。故國は寂寥として人事改まるも、楚郷の人は、いつまでも悲歌慷慨して已まないであらう。(要するに第九章は全篇を總括したのである。)

【餘論】紀曉嵐曰く、每段八句、過接處、若斷若連、章法甚妙、と。

八陣磧

平沙何茫茫，鬢髯見石蕚。
 縱橫滿江上，歲歲沙水蓄。
 孔明死已久，誰復辨行列。
 神兵非學到，自古不留訣。
 至人已心悟，後世徒妄說。
 自從漢道衰，蠶起盡姦傑。
 英雄不相下，禍難久連結。
 驅民市無煙，戰野江流血。
 萬人賭一擲，殺盡如沃雪。
 不爲久遠計，草草常無法。
 孔明最後起，意欲掃羣孽。
 崎嶇事節制，隱忍久不決。
 志大遂成迂，歲月去如瞥。

八陣磧

平沙何ぞ茫茫、鬢髯として石蕚を見る。
 縱横江上に滿ち、歳歳沙水蓄む。
 孔明死する已に久しく、誰か復行列を辨せん。
 神兵は學んで到るにあらず、古より訣を留めず。
 至人は已に心に悟る、後世徒に妄説す。
 漢道の衰へしより、蠶起盡く姦傑。
 英雄相下らず、禍難久しく連結。
 民を驅りて市に煙なく、野に戰つて江に血を流す。
 萬人一擲を賭し、殺し盡す雪に沃ぐが如し。
 久遠の計を爲さず、草草常に法なし。
 孔明最後に起り、意羣孽を掃はんと欲す。
 崎嶇節制を事とし、隱忍久しく決せず。
 志大に遂に迂を成す、歲月は去つて瞥の如し。

六師紛未整，一旦英氣折。
 惟餘八陣圖，千古壯夔峽。

六師紛として未だ整はず、一旦英氣折れて、
 惟八陣の圖を餘し、千古夔峽を壯とす。

【字解】(一) 八陣磧、四川の夔州奉節縣は、本、漢の魚復縣、八陣の圖は縣の西南七里に在り。磧は水邊の石原。晉書桓溫傳に、
 諸葛亮造八陣圖於魚復平沙之上、壘石爲行、行相去二丈、桓溫見之曰、此常山蛇勢也。(二) 夔峽、さも似たり、彷彿と同じ。(三)
 石蕚、鬚は芽を束ね位を表すこと、漢書叔孫通傳、趙襄野外、註にいふ、立竹及茅索、誓之。石蕚の字は、東坡が特に其の意を借り
 用ふ。八陣磧の石を以て位を表する茅蕚の如きよりいふ。(四) 至人心悟、劉志諸葛亮傳に、亮性長於巧思、推演兵法、作八陣圖、
 咸傳其要。(五) 蠶起、羣り起る、史記項羽紀に、楚蠶起之將。蠶は蜂の古字。(六) 賭一擲、李太白詩に、天地賭一擲、未
 能忘戰爭。(七) 崎嶇、平かでない山路を説く、困難を感ずるより、困難の義に用ふ。(八) 隱忍、心に堪へ忍びて外には
 さない。史記の伍子胥傳に、隱忍就功名。(九) 瞥、ちらりと見る。

【題義】入蜀記に、夔州東南有八陣磧、孔明之遺跡、碎石行列如引繩、每歲江漲、磧上水數十丈、
 比退陣石如故。夔の人は諸葛公を重んじ、每歲、八日(正月七日)を以て出でて磧上に遊ぶ、之を
 八陣磧といふ。此詩は八陣磧を言ひて孔明論をなしたのである。

【詩意】魚復縣の平沙、何ぞ茫茫たる、孔明の八陣圖の遺跡は、江上に縱横し、毎年、沙水に浸され
 て居る。孔明の亡くなつてから久しいので、八陣の圖を明にするものもない。一體、人の意表に出る神
 兵といふものは、學んで出来るものではない。昔から秘訣を傳へないからである。至人は、已に其の
 訣を心に悟る、後世の人は、徒に妄説する。漢の世が衰へて、蜂のやうに羣り起つたものは、盡く姦
 傑である。其の人人は相下らないので、禍難が久しく結んで解けない。民が四散して市に煙も立たな

く、野に戦争が断えないで、血が流れて川をなす。萬人一擲を賭して天下を争ひ、未だ戦争を忘れることが出来ない。人を殺し盡すこと雪に水を沃ぐがやうである。其の戦争も、軍を作す法なく、國家百年の計を爲すことを思はない。最後に孔明が起つて羣雄を一掃しようとした。千辛萬苦、軍の節制を事とし、隱忍することが久しく、大きな志も、遂に達することが出来なかつた。歳月は去つて暫くも留らない。天子の六軍も、整頓するに至らないため、兎角、最初の英氣も挫けて、ただ八陣の圖が遺り、千古夔州の峽を壯にして居るのみである。

【餘論】紀昀は、眉山父子持論如此、收得完密、住得簡潔、と評して居るが、成敗を以て古人を論ずるは、文人の通弊である。三蘇の常に孔明を誦議するは、其の短處であり、又、其の疏なる處でもある。

諸葛鹽井

諸葛の鹽井

五行水本鹹、安擇江與井。

五行水本鹹し、安んぞ擇ばん江と井と。

如何不相入、此意誰復省。

如何ぞ相入れざる、此意誰か復省みん。

人心固難足、物理偶相逞。

人心固に足り難し、物理偶、相逞うす。

猶嫌取未多、井上無閒綆。

猶は嫌ふ取ること未だ多からざるを、井上に閒綆なし。

【字解】(一) 鹽井 東坡自註に、井有十四、自山下至山上、其十三井常空、每盛夏水涸、則鹽泉涌出、常去於江水之所不及。(二) 五行水本鹹 尙書の洪範に、五行水曰潤下、潤下作鹹。(三) 人心固難足 後漢書に、光武曰く、人吾不知足。(四)

無閒綆 莊子の至樂篇に、綆短者不可以復深。

【題義】孔明八陣圖の下に一磧がある。東西百步、南北四十步、上に鹽泉井五口あり、冬出で夏は沒す。昔漢の羅哀といふは、成都の人で、貨殖を以て名高い。鹽井の利を擅にし、貨鉅萬に至つた。鹽井は資源である。此詩は孔明の鹽井を詠じたのである。

【詩意】五行の理からいふと、相尅つものは相勝つ。山泉は多く甘くして、海水は鹹し、鹹いものは、水が本に歸し、甘いものは、土之に勝つのである。鹽泉が逸遷とつらなつて遷り去り、常に江水の及ばざる所に去るといふが、江水と井水とに異りはない。如何ぞ相入れざる、此意を省るものはない。人心は固に満足することを知らない。萬物の理は、思ひ存分にする。取るものは多く取る。それでも取ることが未だ十分でないのか、井上には綆の休む暇もない。

白帝廟

白帝廟

朔風吹入峽、慘慘去何之。

朔風に吹かれて峽に入り、慘慘として去つて何くにか之。

共指蒼山路、來朝白帝祠。

共に蒼山の路を指し、來り朝す白帝の祠。

荒城秋草滿、古樹野藤垂。

荒城、秋草滿ち、古樹野藤垂る。

浩蕩荆江遠、淒涼蜀客悲。

浩蕩として荆江遠く、淒涼として蜀客悲しむ。

遲回問風俗。涕泗悵興衰。

遲回して風俗を問ひ、涕泗して興衰を悵む。故國は依然として在るも、遺民豈復知らん。

一方稱警蹕。萬乘擁旌旗。

一方に警蹕を稱し、萬乘旌旗を擁す。

遠略初吞漢。雄心豈在夔。

遠略初、漢を吞まんす、雄心豈夔にあらんや。

崎嶇來野廟。閔默愧當時。

崎嶇として野廟に來り、閔默して當時を愧づ。

破甑蒸山麥。長歌唱竹枝。

破甑山麥を蒸し、長歌竹枝を唱ふ。

荆邯真壯士。吳柱本經師。

荆邯は眞に壯士、吳柱は本經師。

失計雖無及。圖王固已奇。

計を失つて及ぶ無しと雖も、王を圖るは固に已に奇なり。

猶餘帝王號。皎皎在門楣。

猶ほ帝王の號を餘して、皎皎として門楣に在り。

【字解】(一)白帝廟。四川奉節縣(今の四川東川道)の東八里にある。公孫述、魚復縣に遷る、白龍、井中より出づ、因て白帝城と號し、自ら白帝と稱す。(二)朝風。北風、夏侯湛の詩に、朝風動秋草、邊馬有歸心。また顏延之といふ。(三)警蹕。いたみかなしむ、詩の小雅に、憂心忡忡。(四)遲回。ぶらぶらさまさま、李白の詩に、金花折風帽、白馬小遲回。孟襄陽の詩に、林下莫遲回。(五)警蹕。天子出入の儀、蹕は行人を止め道を清めること、警は戒めましめること。古今註に、警蹕は樂の制、出づるに警、入るに蹕、出入皆止むるをいふ。(六)萬乘。天子をいふ。昔、天子は兵車萬乘を出すべき畿内方千里を領するに由る。(七)遠略。左傳僖公九年、齊侯不務德而動遠略。(八)閔默。吳均の詩に、樓衣空倒默。(九)破甑。甑は炊器。(一〇)荆邯。後漢平賊の人、東方將に平かならんとし、兵且に西に向ばんとするを見、遂に公孫述に説いて兵を發せしめ、田戎をして江陵に據らしめ、延

岑みして漢中に出でしむ。述、以て羣臣に問ふ。博士吳柱曰く、昔武王伐殷、盟師以待天命、未開無左右之助、而欲出師千里之外、以廣封疆者、荆邯曰く、東帝無尺土之柄、向所輒平、不亟乘時與之分功、而虛設武王之說、是效陳宮、欲爲西伯也と。(二)門楣。門上の横櫓、轉じて家門の欄に用ふ、高啓の詩に、男兒氣失壯門楣。

【題義】白帝廟は甚だ古く、松柏は皆百年のもの。公孫述は蜀に據つて漢を承くるとなし、自ら白帝と稱し、夔子國を改めて白帝城となす。後漢の光武帝、岑彭を遣はし、討ちて之を滅す。公孫述が荆邯を用ひなかつたのは、陳餘が李左車を用ひなかつたと同じである。東坡は之を失計となして居る。

【詩意】北風が吹き荒み、それに送られて蜀の峽に入る。いたみ悲しい有様で何處を指して之く。共に蒼山の路を指し、そして白帝の祠に詣づるのである。荒れた城には秋草が滿ち、古い樹には萬葉が懸つて居る。荆江はひろびろとして遠く流れ、蜀客は物寂しくて堪へ兼ねる。ぶらぶら迷つては風俗を問ひ、古今の興衰に涙を催した。故國は依然として存するも、遺民は昔を知らない。公孫述は、初、萬乘の旗を立てて、出づるに警、入るに蹕、天子出入の儀式を具へ、漢を併吞するの遠略を抱いた。其の雄心は決して夔州に偏安するものではなかつた。さて旅程崎嶇として白帝廟に來り、古を懷うて暫し悵默し、破れた甑で山麥を蒸し、竹枝を長歌した。後漢の荆邯は、眞に壯士といふべく、博士の吳柱は、もともと經學先生である。それで時務を知らなかつたといへば言ふものの、王道を言ふのは立派で、公孫述が帝號の皎皎として家門を飾つたのも、此が爲である。

永安宮

永安宮

千古陵谷變。故宮安得存。

千古陵谷變ず、故宮安んぞ存するを得ん。

徘徊問耆老。惟有永安門。

徘徊して耆老に問ふ、惟永安門あり。

遊人雜楚蜀。車馬晚喧喧。

遊人は楚蜀を雜へ、車馬晚に喧喧。

不見重樓好。誰知昔日尊。

重樓の好きを見ずば、誰か昔日の尊きを知らん。

吁嗟蜀先主。兵敗此亡魂。

吁嗟蜀の先主、兵敗れて此に魂を亡ふ。

只應法正死。使公去遺燔。

只應に法正死し、公をして去つて燔に遣はしめしなるべし。

【字解】【一】永安宮。東坡の自註に、今蜀之永安門、即宮之遺址也。三國志に、改。魚復。曰。永安。【二】耆老。老人の義、耆は六十歳、老は七十歳。【三】法正。云云。蜀の兵既に敗るるや、諸葛亮歎じて曰く、法正直（法正の字）若し在らば、能く主上を制して東行せざらしめん、たとひ東行すとも、必ず傾危せざらん。【四】遺燔。遺骸の意。

【題義】永安宮は、諸葛亮が先主の遺詔を受けし處、今の四川奉節縣の境に在る。

【詩意】高岸は谷となり、深谷は陵となる。千古陵谷も變ずるのに、永安宮のみが無事といふ譯にはゆかない。徘徊して土地の耆老に尋ねると、ただ永安門が昔のままに存するのみ。遊人は楚からも蜀からも來て、車馬の響は喧し。重樓の好きを見なければ、昔の尊殿が解らない。ああ蜀の先主は、兵が敗れてここに亡くなられた。法正が死んだので、先主は此危難に遣はれたのであらう。

【餘論】紀昀は此詩を評して、後四句、凡鄙之至、殊不似坡公手筆と言つた。

過木樨觀

木樨觀を過ぐ

石壁高千尺。微蹤遠欲無。

石壁高き千尺、微蹤遠く無からんことを欲す。

飛簷如劍寺。古柏似仙都。

飛簷は劍寺の如く、古柏は仙都に似たり。

許子嘗高邁。行舟悔不迂。

許子嘗て高邁、行舟迂せざるを悔ゆ。

斬蛟聞猛烈。提劍想崎嶇。

蛟を斬りて猛烈を聞く、劍を提げて崎嶇を想ふ。

寂寞棺猶在。修崇世已愚。

寂寞として棺猶は在り、修崇世已に愚。

隱居人不識。化去俗爭吁。

隱居人識らず、化し去つて俗争ひ吁く。

洞府煙霞遠。人間爪髮枯。

洞府煙霞遠く、人間爪髮枯る。

飄飄乘倒景。誰復顧遺軀。

飄飄として倒景に乘じ、誰か復遺軀を顧みん。

【字解】【一】木樨觀。許遜が得道の處。木樨山は萬州武寧縣（今の四川東川道）の東南十三里にある。【二】飛簷。高く反り出たノキ、洛陽御製記に飛簷峻宇。簷一に繪に作る。【三】劍寺。劍門山頂に一寺あり、瑤山寺といふ。【四】仙都。方輿勝覽に、自蜀都縣東行二里、石徑巖間、翠柏殆數萬株、又名平都福地」とある。許遜陽は嘗て此處に避世し、山中に精修すること一百三十六年、舉家飛昇と傳へて居る。【五】高邁。高く世をのがる、列仙傳に、許遜、字敬之、晉永嘉中爲蜀之旌陽令。佗吳猛得神力、棄官

唐洪州西山下。【題】斬蛟。晉之初、許遜往旌陽の命となり、真人の術を得て、江湖に周遊し、悉く蛟蜃を斬りて民害を除く。【事】瓜裂結、列子の天瑞篇に、皮膚爪髮、隨世隨落。【倒景】夕日、温庭筠の詩に、鳥飛天外、斜陽盡、人過橋邊、倒景來。

【題義】老泉の詩鈔によるに、許旌陽が得道の處を舟人が告げなかつた。既に過ぎ武寧縣に至つて其の事が知れた。縣の人の言に、許旌陽の棺槨は、猶ほ山上に在りと。輿地紀勝に許旌陽舊宅、今之白鶴寺也。

【詩意】石壁の高さは千尺、人の行くことなからんを欲するのである。高くそり出た蒼は、劍寺のやうである。劍門を出て東望すれば、彷彿として見ることが出来る。古い柏のあるは、仙都のやうである。此度、迂回して此の古蹟を訪はなかつたのを残念に思ふ。昔、許旌陽の官を棄て山に居つた時、海に大蛇があつた。真君は正一斬邪の法で之を殲したといふことである。(正一の法といふのは、道家でいふ陶隱居正一法のこと、之を傳へたものを正一真人といふ。)さて、許子の騎鶴として劍を掲げた武勇談も今は寂寞として、ただ山上の棺槨に昔を偲ぶのみである。道家修崇のことも既に驗なく、真人隱居の術も人が識らない。ただ許子の仙化を人が争つて歎いて居る。真人の居は煙霞遠く、人間の皮膚爪髮は随つて生じ随つて落ちる。飄飄として倒景に乗じて去る真人は、復、俗界の遺體など、少しも顧みないのである。

巫山

巫山

瞿塘迤邐盡、巫峽崢嶸起。
連峰稍可怪、石色變蒼翠。
天工運神巧、漸欲作奇偉。
塊軋勢方深、結構意未遂。
旁觀不暇瞬、步步造幽邃。
蒼崖忽相逼、絕壁凜可悸。
仰觀八九頂、俊爽凌顛氣。
晃蕩天宇高、奔騰江水沸。
孤超兀不讓、直拔勇無畏。
攀緣見神宇、憩坐就石位。
巉巖隔江波、一一問廟吏。
遙觀神女石、綽約誠有以。
俯首見斜鬟、拖霞弄修帔。
人心隨物變、遠覺含深意。

瞿塘は迤邐として盡き、巫峽は崢嶸として起る。
連峰稍怪しく、石色蒼翠に變ず。
天工神巧を運らし、漸く奇偉を作さんと欲す。
塊軋として勢方に深く、結構意未だ遂げず。
旁觀瞬く暇あらず、步步幽邃に造る。
蒼崖忽ち相逼る、絶壁凜として悸るべし。
仰いで觀る八九頂、俊爽顛氣を凌ぐ。
晃蕩として天宇高く、奔騰江水沸く。
孤超兀として譲らず、直拔勇にして畏るなし。
攀緣神宇を見、憩坐石位に就く。
巉巖江波を隔て、一一廟吏に問ふ。
遙に觀る神女の石、綽約誠に以あり。
首を俯して斜鬟を見、霞を拖きて修帔を弄す。
人心は物に随ひて變じ、遠く深意を含むを覺ゆ。

野老笑我旁少年嘗屢至。
 去隨猿猴上反以繩索試。
 石筍倚孤峰突兀殊不類。
 世人喜神怪論說驚幼穉。
 楚賦亦虛傳神女安有是。
 次問掃壇竹云此今尙爾。
 翠葉紛下垂婆娑綠鳳尾。
 風來自偃仰若爲神物使。
 絕頂有三碑詰曲古篆字。
 老人那解讀偶見不能記。
 窮探到峰背探斫黃楊子。
 黃楊生石上堅瘦紋如綺。
 貪心去不顧澗谷千尋絕。
 山高虎狼絕深入坦無忌。

野老は我が旁に笑ふ、少年嘗て屢し至り、
 去る猿猴に随つて上り、反る繩索を以て試む。
 石筍孤峰に倚り、突兀殊に類せず。
 世人は神怪を喜び、論說幼穉を驚かす。
 楚賦亦虚傳、神女安んぞ是あらん。
 次に壇を掃ふ竹を問ふ、云ふ此れ今尙は爾りと。
 翠葉は紛として下垂、婆娑たり綠鳳尾。
 風來つて自ら偃仰、神物に使はるるが若し。
 絶頂に三碑あり、詰曲古篆字。
 老人那ぞ讀むことを解せん、偶見るも記する能はず。
 窮め探りて峰背に到り、探斫す黃楊子。
 黃楊は石上に生じ、堅瘦にして、紋、綺の如し。
 貪心去つて顧みず、澗谷千尋絶る。
 山高く虎狼絶え、深く入れば坦にして忌むなし。

溟濛草樹密蔥蒨雲霞膩。
 石竇有洪泉甘滑如流髓。
 終朝自盥漱冷冽清心胃。
 浣衣挂樹梢磨斧就石鼻。
 徘徊雲日晚歸意念城市。
 不到今十年衰老筋力憊。
 當時伐殘木芽孽已如臂。
 忽聞老人說終日爲歎喟。
 神仙固有之難在忘勢利。
 貧賤爾何愛棄去如脫屣。
 嗟爾若無還絕糧應不死。

溟濛草樹密に、蔥蒨雲霞膩なり。
 石竇洪泉あり、甘滑にして流髓の如し。
 終朝自ら盥漱すれば、冷冽にして心胃を清む。
 衣を浣うて樹梢に掛け、斧を磨いて石鼻に就く。
 徘徊雲日晚れ、歸意城市を念ふ。
 到らざる今に十年、衰老筋力憊る。
 當時伐殘の木、芽孽已に臂の如しと。
 忽ち老人の説を聞き、終日爲に歎喟す。
 神仙は固より之あり、難きは勢利を忘るるに在り。
 貧賤爾何ぞ愛せん、棄て去る屣を脱するが如し。
 嗟爾若し還るなくば、糧を絶つも應に死せざるべし。

【字解】【一】巫山 四川巫山縣の東、湖北巴東縣の西に在る。即ち巫峽で、巴山山脈特起の處。十二峯があり、峯下に神女廟がある。巫峽は西陵峽、襄陽峽と並に三峽と稱す。【二】羣峯 四川奉節縣の東十三里にある。一名は廣溪峽。【三】進道 旁行連延の義、梁簡文帝の從軍行に、進道懸巖、參差觀雁行。【四】神竇 深く險しい竇、蜀都賦に、鍾三峽之神竇。【五】連峰梢可怪 三峽七百里、兩岸の連山、略、缺くる處なし。重巖疊嶂、天を隠くし日を蔽ふ、人境にあらず。【六】雲霧翠 附牀の詩に、蒼翠望。

塞山。【七】 煥然 際限なき貌。劉安の招隱士に、煥兮軋、山自曉、心倦留兮別覽危。【八】 結構 左太神の時に、巖穴無、結構。【九】 步步遺、幽深 魏志の魏斐傳の註に、步步遺留。幽深はしづかに奥深し。【一〇】 蒼崖 李嶺山の時に、蒼崖萬崑崙。【一一】 仰觀八九頂 入剋記に、巫山十二峰不可悉見、所見八九峰。【一二】 懸壺 天邊の氣。【一三】 見雷 光の定まらない貌。【一四】 學劍 劉安の招隱士に、學劍授柱杖兮聊淹留。【一五】 懸壺 高く峻しい貌。【一六】 神女石 入剋記に、十二峰、惟神女峰最爲三巖、奇峭。幽中十二峰は、望霞、翠屏、朝雲、松栢、集仙、來鶴、淨壇、上昇、起雲、飛鳳、登龍、聖泉で、神女峰の名が見えない。或は、いふ、來鶴峰は神女峰の別名と。【一七】 神約 柔絹にして美しい貌。莊子逍遙遊に、藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若水雲、淖約若處子、淖は神と同じ。【一八】 劉雲 雲は、雲、山の形と色とも喩ふ、虞集の時に、雪中道覺鴨千變。【一九】 指霞 指は霞なり、霞は赤い雲氣、朝やけ、夕やけ、かすみは霞。【二〇】 修絃 長い桐子。釋名に、絃、絃也、絃之肩背不及下也。【二一】 猿孫 孫は手長貌。【二二】 石筍 尖り立てる岩石、後漢の任文公傳に、蜀武擔石折、註にいふ、其石俗今爲石筍。【二三】 楚賦 宋玉の神女賦を指す。神女は即ち巫山の神女。【二四】 掃地竹 永嘉記に、川江餘岸、有仙石壇、有竹、竹葉如青翠、風來枝動、掃石壇、壇上無塵。荆州國記に、天門角上特生二竹、倒垂拂拭謂之天簾。【二五】 楚妾 舞ふ貌、詩の陳風に、子仲之子、婆娑其下。【二六】 僂仰 ねたり起きたりする、詩小雅に、或棲遲偃仰。【二七】 結曲 まがりくねる、劉禹錫の時に、修蔓纏結曲。【二八】 黃梧子 ツゲ、埤雅に、黃梧木性堅、極長。【二九】 蕉葉 蕉、蕉葉、江文通の時に、青林結、蕉葉、丹雘被蕉葉。【三〇】 石寶有洪泉 仙經に、神山五百成一閉、其中石髓出、得而服之、壽與天相畢、金玉之精也。神仙傳に、王烈入太行山、忽見山破石裂、青泥流出如髓、烈取食之如飴。石髓は即ち石髓乳。【三一】 石鼻 山名、宋史地理志に、峽州中夷陵郡軍事建業中移治石鼻山。【三二】 如脫履 史記封禪書に、龜乎番、誠得如黃帝、吾親去赤子、如脫履耳。履はわらぐつ。

【題義】 江水峽を歴、東して新崩灘を逕ぐ、其の下十餘里、大巫山あり、首尾一百六十里、之を巫峽といふのは、山に因つて名を爲したのである。巫山の峰巒は、上、雲漢に入り、山脚は、直に江中に挿さんで居る。

【詩意】 同じく三峽の一であるが、壘塘峽は、うねうねとして連なり、巫峽は深くして險しい。連崖千丈、奔流電激、天を隠し日を蔽ふ、といふのが巫峽で、全く人境でない。石の色も蒼翠に變じて居り、天工は奇觀をなさうとする。併し、峽勢は、際限なく轉じ、結構も、兎角、定まらない。重巖疊嶂、怒湍流水、人をして應接に暇なからしめる。歩歩進んで幽邃の境に入る。すると、蒼崖が逼つて、絶壁に怖氣を生ずるであらう。仰いで觀れば、巫山十二峰、悉くは見えない。八九峰だけが見える。清英の氣は天邊を凌いで、天の光も定まらない。伏して臨むと、江水は奔騰して居る。一は卓然として譲らない。一は直進して畏れない。そこで神宇に攀ち、石位に憩ふ。江波を隔てて一廟史に問ふ。遙に見えるのは神女石、柔媚にして美しい。山の形と色とは、傾ける總鬢と見るべく、朝やけ夕やけは、長い楯子を拖いたやうである。人心は物によつて變じ、其の都度、物に深意を含めるを思はせる。土地の人、我が旁にあつていふ、若い時分は、しばしばここに遊び、山嶽に随つては、高きに上り、歸るときには繩索を用ひて下りた。尖つて立てる巖は、石筍の如く、他の處には類がない。一體、世の人は、神怪を喜ぶ。昔、楚の襄王が宋玉といふ文學者と雲夢の浦に遊んだとき、王は宋玉をして賦を作らしめた。其の夜、王は夢に神女と遇うたといふ傳説がある。此の楚賦は、固より虚を傳へたもので、世に神女などいふもののあるべき道理はない。次に、壘を掃ふ竹の事である。之を問ふと、例の土地の人またいふ、これは今も事實である。山樹の青い葉が垂れて居り、風に隨つて起き臥する、其の度毎に壘を拂ふは、神に使はれるやうでもある。山の頂に三つの碑がある。難しい古篆文字

である。私達には讀めないし、記憶も出来ない。更に探つて峰の背に出て黃楊子を採斫した。石上に生じ、堅緻にして、其文理はあや衣の如し。なほも見たくて進み行き、千尋の谷を縋り、高きに登ると、はや虎も狼も居らない。深きに入ると、平坦ではあつたが、草樹暗く、雲霞重なつて居る。巖穴の水は石鍾乳のやうで、手を洗ひ口漱ぐと、心胃を清める。衣を洗ひ、斧を磨いて、又石鼻山に分け入る。あちらこちらと迷ふ中に、日も暮れて歸途に就くのが例であつた。首を回せば幾年の昔、今は筋力も衰へて、其の當時伐り残した木の芽孽も臂のやうな大きになつたと、土地の人の物語を聞いて、余は歎息した。神仙はあるであらう、世の勢利を忘れなくては駄目である。貧賤は誰も愛しはしまいが、富貴を愛しては神仙を得られない。棄て去る履を脱するがやうでなくてはならない。我もし黄帝の如くに上天することが出来れば、妻子を棄て去る驪を脱する如しと言つた昔の天子もある。爾もし世間を出て、世間に入らないならば、仙術を得て、たとひ糧を絶つても永世であらう。

【餘論】一篇の美文、野老を以て結を作せるは、極めて完密又極めて脱洒と古人も評して居る。唐宋詩中に、帶草纓帽、屯雲積氣、折之則句鍊字琢、合之則悠悠乎與三類氣、以俱、而莫得三其涯と評して居る。

巫山廟上下數十里、有烏鳶無數、取食於行舟之上、舟人以神之故、亦不敢害。

巫山廟上下數十里、烏鳶無數ありて、食を行舟の上にと取る、舟人神を以ての故に、亦敢て害せず。

羣飛來去噪行人。

羣飛來去して行人を噪がす。

【字解】「一」羣飛。杜詩に、白羣飛太劇乾。「二」噪。行人。西

得食無憂便可馴。

食を得て憂なければ便ち馴るべし。

京雜記に、賈買日、乾鼓鳴而行人至。

江上飢鳥無足怪。

江上の飢鳥は怪むに足るなきも、

【三】類類。揚子法言に、類類之類、

野鷹何事亦頻頻。

野鷹何事ぞ亦頻頻。

世於焉斯、亦號三夫糧食、而已矣とある。

【題義】吳船錄に、凝真觀前有馴鴉、客舟將來則迎於數里之外、舟過亦送數里、土人謂之之神鴉とある。入蜀記に、神女祠中有鳥數百、送迎客舟とある。此詩は之を詠じたものである。

【詩意】巫山廟の鳥と鷹、無數に飛び去り飛び來つて、行く舟人を惱ます。併し食飽いて憂へがな

と馴れる。江上の飢鳥は、其れでよいとしても、野の鷹は何事ぞ、亦頻頻として來去する。

神女廟

神女廟

大江從西來、上有千仞山。

大江西より來る、上に千仞の山あり。

江山自環擁、恢詭富神姦。

江山自ら環擁し、恢詭神姦に富む。

古今體詩 巫山廟上下數十里有烏鳶無數取食於行舟之上 神女廟

深淵鼉鼉橫。巨壑蛇龍頑。

深淵鼉鼉横はり、巨壑蛇龍頑なり。

旌陽斬長蛇。雷雨移滄灣。

旌陽長蛇を斬り、雷雨滄灣を移す。

蜀守降老蹇。至今帶連環。

蜀守老蹇を降し、今に至るまで連環を帯ぶ。

縱橫若無主。蕩逸侵人寰。

縱横若し主なくば、蕩逸して人寰を侵さん。

上帝降瑤姬。來處荆巫間。

上帝瑤姬を降し、來りて荆巫の間に處らしむ。

神仙豈在猛。玉座幽且閑。

神仙豈猛にあらんや、玉座幽且つ閑。

飄蕭駕風馭。弭節朝天關。

飄蕭風馭に駕し、節を弭して天關に朝す。

倏忽巡四方。不知道里艱。

倏忽四方を巡り、道里の艱を知らず。

古粧具法服。蓬殿羅煙鬟。

古粧法服を具し、蓬殿煙鬟を羅ぬ。

百神自奔走。雜沓來趨班。

百神自ら奔走し、雜沓來りて班に趨る。

雲興靈怪聚。雲散鬼神還。

雲興りて靈怪聚り、雲散じて鬼神還る。

茫茫夜潭淨。皎皎秋月彎。

茫茫夜潭淨く、皎皎秋月彎なり。

還應搖玉珮。來聽水潺潺。

還つて應に玉珮を搖かし、來つて水の潺潺を聽くなるべし。

【字解】 神女廟 荆州記に、神女廟在峽之北岸。 倏忽 大にしてめづらしい。 宋史に、倏忽靈怪自幽者、悉以名聞。

【題義】 神女の事は、宋玉の賦に據ると、本、襄王を諷したものである。後世察しないで、一切兒女子を以て之を褒れしめて居る。廟中の石刻にも、瑤姬、西王母之女、稱雲華夫人、助禹令鬼神、斬石疏流、有功見紀、今封妙用真人といふことが載つて居る。瑤姬は仙術を得、嘗て江上を過ぎ、巫山に留連した時、大禹が水を理めて山下に駐る。大風卒に至つて幾んど制しきれない。姫と相値ひ、拜して助を求めた。姫は侍女に命じて禹を助け、石を斬り波を疏し、塞を決し扼を導き以て其の流に循はしめたので、禹は拜謝したと言ひ傳へて居る。又、禹嘗て之に崇獻の巖で詣でたとき、廟阿の際、化して石となり、倏然として飛騰し、散じて輕雲となり、聚つて夕雨となり、游龍となり、翔鶴となり、千態萬狀、親しむことが出来なかつたといふ傳説がある。大禹の神功は、巫山神女の助に因るといふのが此詩の骨子である。

【詩意】大江が西から來り、千仞の山、上は雲漢に入り、山脚直に江中に挿んで居る。先づ江山から入手して治水を領起する。恢詭富神姦は、上を承けて下を起す。鼉鼉といひ、蛇龍といふ、皆神姦である。旌陽の令許遜が長蛟を斬ると、忽ち雷雨を起して、滄溟を移し、やがて他處に移り去つた。全く神怪の所爲である。秦の時に、蜀の守李冰が寒氏の毒龍を降伏して鎮つたが、それからまゝにして置き、之を鎮め治める主神がないと、人糞を侵し來つて衆庶の妨害をなすに至るであらう。それ故に、天帝が瑤姬即ち神女を降して此の荊州巫山の間に居らしめた譯である。神女は毒龍を降服したが、本來神仙は決して猛なるものではない。柔は能く剛を制するからである。神女の玉座は幽にして且つ閑であらう。又、神女も天帝に事へるから、風の車に乗り、飄蕭として旗を弭かして天庭に参朝する。風に駕せることであるから、たちまちの間に、四方を巡りて道路の艱難なるを知らない。又、神女の平生は、奥深い神殿に坐して古粧の法服をめされ、周圍には美しい黒髪の女官が神女の眷屬として羅列し、百神は神女の命を畏みて、ここかしこ奔走し、雜沓してそれぞれの職務の班列に就いて居る。其の百神のありさまは、雲の興つたときは、百神の靈怪が聚つたのである。雲の散じたときは百神が還る時である。更に、神女が百神を使つて、雲雨を行つた後、閑暇なときの遊びは、清夜の逍遙である。ひろびろとして夜潭は淨かに、仰ぎ見ると、秋の月は、弓張のさまである。かかる清夜に於ける神女の娛しきは、佩玉を挿かして水邊に來り、潺湲たる清音を聴いて遊ばれることであらう。

【餘論】通篇、水の字を藏して露はさす、末句に至つて水の字を點じて詩旨を明にする。紀昀は、神女詩、不作三疊辭、是本領過人處と評して居る。

過巴東縣不泊聞頗有萊公遺蹟

巴東縣を過ぎて泊せず、頗る萊公の遺蹟あるを聞く

萊公昔未遇寂寞在巴東

萊公昔未だ遇はず、寂寞として巴東に在り。

聞道山中樹猶餘手種松

聞道らく山中の樹、猶ほ手種の松を餘すと。

江山養豪俊禮數困英雄

江山豪俊を養ひ、禮數英雄を困しむ。

執板迎官長趨塵拜下風

板を執つて官長を迎へ、塵に趨つて下風に拜す。

當年誰刺史應未識三公

當年誰か刺史、應に未だ三公を識らざるべし。

【字解】【巴東縣】 夔州の西六十里、今の湖北荆南道。【萊公】 宋の宰相寇準字は平仲、嘗て官を巴東に守る。同平章事に累遷し、萊園公に封ぜらる。【禮數】 身分相當の特遇、左傳莊公十八年に、名位不同、禮亦異數。【趨塵拜下風】 晉書に、望塵而拜。左傳僖公十五年、羣臣致在下風。

【題義】 湖北の巴東縣は、嘗て宋の宰相寇準が令であつた地で、寇萊公の祠がある。祠中の二柏は、公の手植したもので、民は之を甘棠に比する。其故事は、詩の召南に蔽芾甘棠勿剪勿伐、召伯所茇、

古今體詩 過巴東縣不泊聞頗有萊公遺蹟

とある。召伯が南國を循行して文王の政を布いた時、或は甘棠の下に舍つたが、後人が其の徳を思つて、其の樹を愛し、之を傷けるに忍びなかつたといふことである。仁宗の明道二年(皇紀一六九三年、西曆一〇三三年)十一月、寇準は謫所に死んだ。此詩の結びの處は坡公が隱然自負したもので、萊公を詠じたものでないと、古人も評して居る。

【詩意】寇準が昔、まだ志を得ないで、一地方官として巴東縣を守つて居つた時、手植の樹といふがある。公の祠前に在る二柏が其れである。江山は豪俊を養つて、人格を向上させるが、官途の待遇は英雄を一時に屈せしめ、一縣令となつて、東帶笏を執つて官長を迎へ、塵を望んで拜し、常に下風に在る。當年の刺史は誰であつたか、他日盛名高き賢相萊公を認め得なかつたのであらう。(東坡の自ら任ずる所が窺はれる。)

昭君村

昭君本楚人、
藍色照江水。
楚人不敢娶、
謂是漢妃子。

昭君村

昭君は本楚の人、
藍色江水を照す。
楚人は敢て娶らず、
謂ふ是れ漢妃の子と。

【字解】

昭君、漢書匈奴傳に、單于自言願娶漢氏、以自親、元帝以後宮良家子王嬪字昭君、賜之單子。藍色、容色美好をいふ。胡鬼、白樂天の昭君詩に、生爲漢宮妃、死作胡地鬼。陳鴻の長恨歌傳に、當時詠除

誰知去鄉國、

誰か知らん郷國を去つて、

萬里爲胡鬼、

萬里胡鬼とならんとは。

人言生女作門楣、

人は言ふ女を生めば門楣となると、

昭君當時憂色衰、

昭君當時色衰ふるを憂ふ。

古來人事盡如此、

古來人事盡く此の如し、

反覆縱橫安可知、

反覆縱橫安んぞ知るべけん。

【題義】昭君村といふのに二ヶ處ある。一は歸州の興山縣、方輿勝覽に、歸州東北四十里有昭君村とある。一は巫山十二峰の南、神女廟の下に在る。孰れか是なるを知らないが、東坡の此詩は、巫山に在るものを指して居る。王梅溪の昭君村詩に、十二巫峰下、明妃生處村、至今蠶龍女、灼面亦成痕とある。劉夢得の竹枝詞にも、昭君村中多女伴、永安宮外踏青回とある。

【詩意】昭君の村は巫山にあるから、昭君は楚の人で、其の美しい容色は、江水を照らしたのである。楚人の娶るを遠慮したのは、漢妃の子とて、畏れ多いといふのであつた。誰か知らん其の妃が、漢宮を去つて、萬里の胡地に没するやうにならうとは、神ならでは知ることが出来ない。人は言ふ、男を生んでも候に封せられない。女は却て門上の楣となると、昭君の人に羨まれた當時は、ただ容色の衰へるを憂へたものである。人事の定めないうこと、率ね此の如くである。運命の反覆し縱横する作

用は、人間の測り知る所でないからう。

新灘

新灘

扁舟轉山曲未至已先驚。

扁舟山曲に轉じ、未だ至らずして已に先づ驚く。

白浪橫江起槎牙似雪城。

白浪は江を横りて起り、槎牙として雪城に似たり。

番番從高來一一投澗坑。

番番として高より來り、一一澗坑に投ず。

大魚不能上暴鬣灘下橫。

大魚も上る能はず、鬣を暴して灘下に横はる。

小魚散復合淺澗如遭烹。

小魚は散じて復合し、淺澗に遭ふが如し。

鷓鴣不敢下飛過兩翅輕。

鷓鴣敢て下らず、飛過兩翅輕し。

白鷺誇瘦捷挿脚還敬傾。

白鷺瘦捷を誇り、脚を挿みて還敬傾す。

區區舟上人薄技安敢呈。

區區舟中の人、薄技安んぞ敢て呈せん。

只應灘頭廟頼此牛酒盈。

只應に灘頭の廟、此の牛酒の盈つるに頼るべし。

【字解】

【一】新灘 石多く流が急で舟行の困難なるを灘といふ。入蜀記に、新灘兩岸、南曰官灘、北曰龍門、龍門水尤湍急多。暗石、官灘差可行、然亦多亂石、故爲險中險處。【二】山曲 江淹の別賦に、屈復嶺兮遠山曲、去復去兮長河曲。【三】槎牙 木の枝のかどだちて入りくみし貌。【四】番番 武勇ある貌。【五】鷓鴣 魚は魚、文選の鷓鴣の詩に、鷓鴣、長鳴、辛氏三

秦記に、龍門大魚集門下數千、不得上、故云、秦、龍門。【六】澗坑 小水の聲、司馬相如の上林賦に、臨沓注、澗、澗澗。又、魚の存き沈みする貌をいふ。【七】鷓鴣 鷓鴣。【八】薄技 司馬相如の傳、使持節、薄技、出入周衛之中。【九】牛酒 司馬相如傳に、獻牛酒以交驛。

【題義】吳船錄に、歸州下五里至白狗灘、三十里至新灘とある。山が崩れ石が壅いで、此の灘を成し、峽中最險の處。此詩四層を以て舟人を襯起す。

【詩意】遠山の曲、長河の澗、舟は轉轉して流れ行く。未だ新灘に至らないのに、先づ驚いたのは白浪、江を横り、槎牙たる雪城を江中に見たことである。そして如何にも勇ましく水流が谷底に落ちる。大魚も上ることが出来ないで、灘下に魚肢を曝して居る。小魚は散つては聚まり、聚つては又散る。浮きつ沈みつして小水の聲の聞えるは、恰も物を寒るがやうである。鷓鴣も敢て下らないで、翅輕く飛んで行く。鷺は身の瘦捷といふ點を誇り顔に、脚を挿みたり體を傾けたりして居る。舟中の人よ、此際は我が薄技など無遠慮に呈さない。ただ灘頭の廟に牛酒を供へ、驛を交へて、險しい處を離れたいものである。

【餘論】紀昀は、結二句拙、盈字亦押得牽強、と評して居る。

新灘阻風

新灘風に阻る

北風吹寒江來自兩山口。

北風寒江を吹いて、來る兩山の口よりす。

初聞似搖扇。漸覺平沙走。
飛雲滿巖谷。舞雪穿窗牖。
灘下三日留。識盡灘前叟。
孤舟倦鷓鴣。短纜困牽揉。
嘗聞不終朝。今此獨何久。
只應留遠人。此意固已厚。
吾今幸無事。閉戶爲飲酒。

初聞く扇を搖かすに似たり、漸く覺ゆ平沙の走るを。
飛雲巖谷に滿ち、舞雪窗牖を穿つ。
灘下に三日留り、識り盡す灘前の叟。
孤舟鷓鴣に倦み、短纜牽揉に困しむ。
嘗て聞く朝を終へすと、今此に獨何ぞ久しき。
只應に遠人を留むべし、此意固に已に厚し。
吾今幸に事なく、戸を閉ちて爲に酒を飲む。

【字解】「窗牖」まど、壁にあるを窗といひ、屋にあるを窗といふ。江淹の詩に、朱簾入窗牖、暈照空壁とある。「鷓鴣」舟の櫂や櫂などのであれあふ音、元稹の詩に、鷓鴣深林井。「不終朝」老子に、飄風不終朝、驟雨不終日、執事此者、天地不終朝、而況於人乎。

【題義】新灘は、既に峡中最險の處、風に阻まれて、留まること三日。

【詩意】北風が兩山の口から來つて寒江を吹き渡る。初は扇を搖すがやうであつたが、だんだん平沙の走るを覺えた。雲は巖谷を覆ひ、雪は窗を打つて、天候が惡い。灘下に三日も逗留したので、土地の人とも親しくなつた。孤舟、櫂の軋る音も倦み果て、短い纜も操るに苦しむ。老子は、飄風朝を崇へずと言つたが、今、北風は久しく終まない。これは遠來の客を響應すのであらうと思へば、有

難いことだ。幸に我は恙なく、戸を閉ちて一杯を傾ける。
【餘論】紀昀曰く、不作感憤、身分特高と。東坡の東坡たる所以である。

黄牛廟

黄牛廟

江邊石壁高無路。
上有黄牛不服箱。
廟前行客拜且舞。
擊鼓吹簫屠白羊。
山下耕牛苦磽确。
兩角磨崖四蹄溼。
青芻半束長苦饑。
仰看黄牛安可及。

江邊の石壁は高うして路なし、
上に黄牛あれども箱を服せず。
廟前の行客拜し且つ舞ふ、
鼓を撃ち簫を吹き白羊を屠る。
山下の耕牛磽确に苦しむ、
兩角崖を磨して四蹄溼ふ。
青芻半束長へに饑を苦しむ、
仰いで看る黄牛安んぞ及ぶべけん。

【字解】「黄牛廟」新灘を過ぐる八十里で、黄牛峽に至る。峽上の廟は即ち黄牛神で、禹を助けて川を疏した神と傳へて居る。「不服箱」詩の小雅に、饒彼率牛、不服箱。詩の小雅に、饒彼率牛、不服箱。詩の小雅に、饒彼率牛、不服箱。詩の小雅に、饒彼率牛、不服箱。

【題義】黄牛灘の南岸は、重嶺が疊起し、高崖の間、石の形が恰も人の刀を負ひて牛を牽くやうなのがある。人は黒く牛は黄、人跡の絶える所は、究めることが出来ない。荆州記に、此巖既高、加以三江。

潘紆廻、雖途經二信宿、猶望二見之。行者歌曰、朝發黃牛、暮宿黃牛、三朝三暮、黃牛如故。黃牛廟の下は即ち無義灘で、亂石が中流を塞ぎ、之を望むに畏るべしといふことである。

【詩意】新灘を過ぎて、八十里行くと、黃牛峽である。江水南岸の石壁は高くして、路もない。上に黃牛廟がある。黃牛といへども名のみで、箱を付けた車を引かない。廟前に遊ぶ旅客は、舞の後、鼓を撃ち簫を吹き白羊を屠つて快飲する。山下の耕牛は、石多い瘠地で兩角を崖に磨き四蹄を水に溼して勞働しても、青獨半束、餓を醫するに足りない。羨ましいのは山上の黃牛である。

蝦蟇培

蝦蟇培

妻背似覆孟、驀頤似偃月。

妻の背は覆孟に似たり、驀の頤は偃月に似たり。

謂是月中驀、開口吐月液。

謂ふ是れ月中の驀、口を開いて月液を吐く。

根源本甚遠、百尺蒼崖裂。

根源本甚だ遠し、百尺蒼崖裂く。

當時龍破山、此水隨龍出。

當時龍山を破り、此水龍に隨つて出づ。

入江江水濁、猶作深碧色。

江に入りて江水濁り、猶ほ深碧の色を作す。

稟受苦潔清、獨與凡水隔。

稟受苦だ潔清、獨凡水と隔つ。

豈惟煮茶好、釀酒應無敵。

豈惟茶を煮るに好きのみならん、酒を釀すも應に敵なからべし。

【字解】(一) 蝦蟇 蝦蟇一名蟾蜍、培、一に磔に作る。荆州記に蝦蟇館在夷陵石鼻山下。歐陽公集自註にいふ、嶺土人寫作背字。(二) 覆孟 安きに喩ふ、漢書、東方朔客難、連四海之外、以爲覆孟。(三) 偃月 ひとひの背のさま、歐陽集に、犀角偃月。(四) 月中驀 蝦蟇月に奔る、之を蟾蜍といふ。

【題義】蝦蟇培は夷陵石鼻山下に在る。黃山谷いふ、從舟中望之、頤頂口吻、甚類蝦蟇、尋泉入洞中、寒泉出石骨、若蚪龍吼、水流循蝦蟇背、垂鼻口間、乃入江、と。

【詩意】蝦蟇の背は覆孟のやうで、見るからに安らかである。頤は偃月の如く、額の骨かと思はれる。本はれ月中の蟾蜍である。昔、后羿は長生の薬を西王母に請うたが、其妻の姮娥、盗んで之を食ひ、遂に月宮に奔り、化して蟾蜍となつたといふ傳説がある。月中の驀、口を開いて月液を吐く、蝦蟇培の根源は、まことに遠い。一旦龍が山を破つて、百尺の蒼崖忽ち裂ける。そこで此の水、龍に隨つて流れ出で、江に入る。江水が濁つても、深碧の色をなして居るは之が爲めである。此水の素質は潔清で、凡水と異なる。茶を煮るによいばかりではなく、酒を釀すにも極上であらう。

出峽

峽を出づ

入峽喜巉巖、出峽愛平曠。

峽に入つて巉巖を喜び、峽を出でて平曠を愛す。

吾心淡無累、遇境即安暢。

吾心は淡くして累なく、境に遇へば即ち安暢。

東西徑千里、勝處頗屢訪。

東西徑千里、勝處頗る屢訪ふ。

幽尋遠無厭。高絕每先上。
前詩尙遺略。不錄久恐忘。
憶從巫廟回。中路寒泉漲。
汲歸眞可愛。翠碧光滿盞。
忽驚巫峽尾。巖腹有穿壑。
仰見天蒼蒼。石室開南向。
宜尼古廟宇。叢木作幃帳。
鐵楯橫半空。俯瞰不計丈。
古人誰架構。下有不測浪。
石竇見天囿。瓦棺悲古葬。
新灘阻風雪。村落去攜杖。
亦到龍馬溪。茅屋沾村釀。
玉虛悔不至。實爲舟人誑。
聞道石最奇。寤寐見怪狀。

幽尋遠きも厭ふなく、高絶毎に先づ上る。
前詩尙は遺略す、録せずんば久うして忘るるを恐る。
憶ふ巫廟より回りしとき、中路寒泉漲る。
汲み歸れば眞に愛すべし、翠碧光盞に滿つ。
忽ち驚く巫峽の尾、巖腹穿壑あるに。
仰ぎ見れば天蒼蒼、石室開いて南向す。
宜尼の古廟宇、叢木幃帳を作し、
鐵楯半空に横はる、俯して瞰れば丈を計らず。
古人誰か架構する、下に不測の浪あり。
石竇に天囿を見、瓦棺古葬を悲しむ。
新灘風雪に阻てられ、村落去つて杖を攜ふ。
亦龍馬溪に到り、茅屋に村釀を沾る。
玉虚に至らざるを悔ゆ、實に舟人の爲に誑かる。
聞道らく石最も奇にして、寤寐に怪狀を見る。

峽山富奇偉。得一知幾喪。
苦恨不知名。歷歷但想像。
今朝脫重險。楚水渺平蕩。
魚多客庖足。風順行意王。
追思偶成篇。聊助舟人唱。

峽山奇偉に富む、一を得て知る幾か喪ふを。
苦に恨む名を知らざるを、歴歷但想像す。
今朝重險を脱すれば、楚水渺として平蕩。
魚多くして客庖足り、風順にして行意王なり。
追思して偶篇を成し、聊か舟人の唱を助けん。

【字解】【一】嶺。けはしく高き嶺、宋玉の高唐賦に、登嶺而下望兮。【二】平蕩。陶淵明の桃花源記に、土地平蕩。【三】無窮。賈政鵬賦に、嶺人無窮兮。【四】楚水。一本楚を過に作る。【五】跡。水經註に、楚水多滌。其上、信爲勝處。【六】楚。説文に、楚、盆也。盆は瓦器形似類。【七】巫峽尾。豐州志に、巫山在大江之濱、形如巫字とある。昔、漁者歌うて曰く、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚霑裳、と。【八】巖腹有穿壑。王維の詩に、巖腹乍穿壑。壑は空洞。【九】宜尼古廟宇。孔子の古廟、王梅溪集に、巴東之西、近江有夫子洞、亦曰聖洞。【一〇】鐵楯。鐵の剛體。【一一】天囿。星經に天囿十二星主倉庫之屬。【一二】瓦棺。帝王世紀に、舜南征崩鳴條、殯以瓦棺。【一三】龍馬溪。馬鳴溪は豐州に在り、俗に龍馬溪と呼ぶ。昔、土人馬を溪上に牧せしに、龍駒を産す。之を行在所に賣せんとし、溪口に到る。豈を獲ひ長鳴し、江に躍る。溪以て名くといふ。【一四】村落。巴地村の人、善く酒を醸す。故に巴地清村といふ。【一五】玉虛。洞の名、興山縣の南五十里、唐の天寶五載、其の洞忽ち開く。入洞記に、玉虛洞去江岸五里許、洞門小、纒委丈、既入則可容數百人、有石成輪蓋、巖芝草竹笋仙人龍虎鳥獸之屬。【一六】寤寐。ねても覺めてし、寤は覺めること、詩の周南に、寤寐求之。【一七】歷歷。分明なる貌、搜神記に、前世之事、歷歷可聞。【一八】王。俗に旺に作る、旺盛の意、莊子養生主に、神雖王不替也。

【題義】黄牛峽が盡くれば、則ち扇子峽、吳船録にいふ、過此則峽中灘盡矣、三十里得南岸平地、曰

平善壩、舟出峽至此、人皆相慶如更生、發平善壩三十里至峽州。

【詩意】峽山は尤も奇、船が峽に入る、兩岸は悉く奇峰、其の險しく高きを喜ぶ。峽を出ると、廣くとして平遠である。心も淡く、意も暢びる。東西の徑千里、勝地は遠しとして訪ねざるはない、高絶の處も、登り覽る。前詩に漏れた所があるから、又録する、備忘の爲めである。さきに、巫廟から回つたとき、途中に寒泉があつた、翠碧愛すべきである。忽ち巫峽の尾の處、巖腹に空洞があるのに驚かされた。仰いで見ると天は青青として居り、石室が南に向き開いて居る。それは孔夫子の古廟である。叢木が四周し、鐵製の闌檻が半空に横はつて居る。俯して瞰ると何丈あるか分らない。誰が建てたのであらう。下には不測の浪がある。巖穴に天窟を見る。天の倉廩に象つたのであらう。瓦棺のあるは古葬が行はれたものと見える。(夏以前は瓦棺、殷は木棺、周には棺槨が行はれた。昔、舜が崩れたとき瓦棺を以て鳴條に葬つたことが古史に載つて居る。)新灘で風雪に阻まれたから、村落に往いて散策した。又、龍馬溪に到ると、茅屋に村酒を沽つて居る。舟人に誑かれ、玉虛洞に行かなかつたが残念である。聞けば洞石は最も奇で、ねても覺めても、其の怪狀が忘れない。概して峽山の風光は奇偉に富んで、幾んど應接に暇がない。名も記憶出来ないが、ありありと想像される。今朝重險を出ると、楚水が廣々と平和に流れて居る。魚が多くて料理が十分。風が順で遊意も盛んで、記憶を辿つてたまたま此篇を成し、舟中の人の誦唱を助けることとしたのである。

【餘論】紀昀曰く、出峽詩却寫未出峽事、一到本題、戛然意住、灤洞掩映、運意玲瓏、と。

遊三游洞

三游洞に遊ぶ

【字解】三游洞、峽州の上二十里に在る。方輿勝覽に、唐白居易、弟知退及元微之三人遊、故號三游洞。三人が三游洞の記を作つて石壁の上に刻んだから名けた。一説に元次山、白居易、李白三人遊ぶと。

凍雨霏霏半成雪。

凍雨霏霏として半は雪となる、

遊人屢冷蒼苔滑。

遊人屢冷かにして蒼苔滑かなり。

不辭攜被巖底眠。

被を攜へて巖底に眠らんことを辭せ

洞口雲深夜無月。

洞口雲深くして夜月なし。ざれども、

雜采微に、今我承恩、雨雪霏霏。【一】被、被は裘衣のことである。載復古の詩に、綈被蒙頭睡、儵然百慮寬。綈被につき合せた夜著。陸遊の詩に、布衾被元相似。紙被は紙子の夜著。在窮記に、送四輔給被一領とあるは、四輔の帛。侯鯖條にも、古被の四幅で被ひ、其の四邊に縁のあることが書いてある。

【題義】白樂天が江州の司馬から忠州の刺史に轉任したとき、弟の知退、友人の元微之と洞に遊び、各古詩二十韻を賦して石壁に書し、吾三人始めて遊ぶを以て、三游洞と名くと記した。東坡も亦、弟微及び黃庭堅三人と會て遊んだので此詩がある。

【詩意】爰まじりの雨がひらひらと降り、半ば雪となつて飛ぶ。洞中寒氣が甚しい、遊人の履も冷たく、青青と苔むした崖は滑かで徑路も行き易からず、被を攜へ來つて此の巖底に眠ることは、固より嫌ふのではないが、雨雪の時、洞口には雲深く、月もないから宿るべきやうもない。

遊洞之日有亭吏乞詩既爲留三絕句於洞之石壁明日至峽州吏又至意若未足乃復以此詩授之

洞に遊ぶの日、亭吏ありて詩を乞ふ、既に爲に三絶句を洞の石壁に留め、明日、峽州に至る、吏又至り、意未だ足らざるが若し、乃ち復此詩を以て之に授く

一徑繞山翠、縈紆去似蛇。
忽驚溪水急、爭看洞門呀。
滑磴攀秋蔓、飛橋踏古槎。
三扉迎北吹、一穴向西斜。
歎息烟雲老、追思歲月遐。
唐人昔未到、古俗此爲家。
洞暖無風雪、山深富鹿羆。
相逢衣盡草、環坐鬢應髭。
竈突依巖黑、樽罍就石窪。

一徑山翠を繞り、縈紆去つて蛇に似たり。
忽ち驚く溪水の急なるに、争うて看る洞門の呀なるを。
滑磴秋蔓に攀ち、飛橋古槎を踏む。
三扉は北吹を迎へ、一穴は西に向つて斜なり。
歎息す烟雲老い、追思すれば歲月遐かなり。
唐人昔未だ到らず、古俗此に家を爲す。
洞暖にして風雪なく、山深くして鹿羆に富む。
相逢うて衣盡く草、環坐して鬢應に髭なるべし。
竈突巖に依つて黒し、樽罍石窪に就き、

洪荒無傳記、想像在羲媧。
此事今安在、遺蹤我獨嗟。
山翁勸留句、強爲寫槎牙。

洪荒傳記なし、想像羲媧に在り。
此事今安くに在る、遺蹤我獨嗟く。
山翁勸めて句を留め、強ひて爲に槎牙を寫す。

【字解】三絶句、老泉東坡子由の詩各一。峽州、十道志に、三峽口地曰、峽州、楚蜀分險。今の湖北宜昌縣治。
【山翠】唐、裴迪の詩に、雲光徒、屢跡、山翠拂、人衣。世説に、羊元所居山當、戶峯巒奇秀、謂客曰、此翠屏宜、絶對、與、人心目。
【縈紆去似蛇】縈紆は、めぐりまつばる。史通に、列行縈紆以相屬。柳子厚の文に、斗折蛇行明滅可見。【呀】呀、説文に張、口貌。玉篇に、大空の貌。近國の西都賦に、呀、周、池而成。【滑磴】滑、秋蔓。なめらかなる石版。劉禹錫の詩に、墻高秋蔓綠。
【古槎】古、樺、江總の詩に、古槎橫、近洞。【烟雲老】枚乘の七發に、烟雲開漠。【衣盡草】後漢書の董綱傳に、解、草衣、以升、卿相。【環坐】禮記檀弓に、魯婦人之簪而弔也、自敗、於孤始也。南宮縚之妻の姑之喪、夫子誨之、縚、善の婦人の結ひ髪のみまで弔ふば、喪節の職に敗れしときかくして形ひしより始まる。南宮縚の妻の姑の喪に、孔夫子は、之に縚の法を教へた。
【應髭】かまどの類だし、淮南子に、孔子無、髭突、墨子無、髮所、魯連子應、五突、分、烟者、衆矣。樽罍就石窪、樽は、雲質を盡さし樽。顔真卿石崖題句に、李公登、飲處、因、石爲、窪樽。【依巖】漢書の劉歆傳に、信、口説、而背、傳記。【就石窪】蘇軾、伏義氏、女媧氏。【就石窪】木の枝のかどたちて入りくみし貌、陸龜蒙の詩に、槎牙費、鹿同。

古今體詩 遊洞之日有亭吏乞詩

七五

【題義】下牢關を過ぎ、船を繋いで三游洞に登る。石磴を躡む二里、其の險處は、脚を著くべからず。洞の大きさは、三間屋の如し。一穴あり、人を通行せしむるも、陰黒にして畏るべし。山腹を縈り、偃僕して巖下より洞前に至る。差行くべし。下は溪潭に臨む、石壁二十餘丈、又一穴の後、壁ありて居るべし。鍾乳歲久うして地に垂る、正に穴門に當る。亭吏が詩を乞うたので、此の勝を寫したので

ある。
 【詩意】山の翠をうねうねと繞れる一徑は、蛇の行くやうである。溪水の急なるに驚いて、やがて洞門の口を張つて居るを見る。蔓草に攀ちて、なめらかなる石の阪路を登り、古い椗を踏んだ。三つの扉は北風を迎へ、一穴は斜に西に向つて居る。烟雲は籠めて歲月逝かなるを覺える。唐の人の來たといふ話は聞かないが、昔から住家がある。傳へいふ、洞は煖かた、風雪もなく、山は深くて鹿も牡豕も多い。村の人は、粗衣を著け、結び髪である。烟突は巖につき、酒樽は石の窟を用ひて居る。記録はないが、古い村で、伏羲氏、女媧氏の世が思はれる。今は遺跡に昔を偲ぶばかり、土地の人が詩を所望したから、爲に此の入り組んだことを記したのである。

寄題清溪寺

清溪寺に寄せ題す

口舌安足恃、韓非死說難。
 自知不可用、鬼谷乃真姦。
 遺書今未亡、小數不足觀。
 秦儀固新學、見利不知患。
 嗟時無桓文、使彼二子顛。

口舌安んぞ恃むに足らん、韓非は說難に死せり。
 自ら用ふべからざるを知る、鬼谷は乃ち真姦なり。
 遺書今未だ亡びず、小數觀るに足らず。
 秦儀は固より新學、利を見て患を知らず。
 嗟時に桓文なく、彼の二子をして顛せしむ。

死敗無足怪、夫子固使然。
 君看巧更窮、不若愚自安。
 遺宮若有神、頷首然吾言。

死敗怪むに足らなし、夫子固より然らしむ。
 君看よ巧更に窮るは、愚にして自ら安んずるに若かざるを。
 遺宮若し神あらば、首を頷して吾言を然りとせん。

【字解】 清溪寺 東坡自註に、在峽州、鬼谷子之故居。鬼谷先生傳に、楚有清溪、下深千仞、其水靈異。口舌安足恃、漢書袁敬傳に、上怒罵敬曰、齊勝以舌得官、乃妄言沮吾軍。死說難 史記に、韓非者、韓之諸公子也、作孤憤、五刑、内外儲、說林、說難十餘萬言。然韓非知說之難、爲說難、書甚具、終死於秦、不能自說。鬼谷 蘇秦、張儀、俱に鬼谷先生に事へて術を學ぶ。秦、儀、道の未だ行ふに足らざるを知り、復、往いて見る。先生曰く、子の爲に至道を言はん、齊或日を擧げしめ、二子に告ぐるに、全身之道を以てした。遺書今未亡 劉向七略に、鬼谷子の書あり。隋書志に、鬼谷子三卷を載す。小數 不足觀 柳宗元曰く、漢時無鬼谷子、鬼谷子後出、學者宜其不道。秦儀固新學 文心雕龍に、新學之說、則逐奇而先正。桓文 齊の桓公、晉の文公。巧更窮 文心雕龍に、韓、九辨、其巧辭、彌錯伏、其精術。丸を轉ずは極めて容易。錯はクピカセ。【〇】 頷、説文に、低頭也。

【題義】 清溪は峽州遠安縣の南六十里にあつて、源を清遠山下より發すといふことである。郭璞遊仙の詩に、清溪千仞餘、中有二道士、借問是何人、云是鬼谷子。寄題といふは、其の地に至らないで題詠する意である。

【詩意】 口舌は恃むに足らない、韓非子も遊說の難しいことを説いて、遊說に死んだ。鬼谷先生の自ら用ふべからざるを知りつつ人に授けるは、眞の姦である。鬼谷子の書は今に傳はつて居るが、要するに小道で、觀るに足らない。之に師事した蘇秦も張儀も、固より新學で、ただ利を見て、患を知らな

い。あお時に齊桓の如き晋文の如き霸者は居らないから蘇、張の二子をして頼せしめた。二子の死敗は、怪しむに足らない。自ら招いたのである。して見ると、巧をますます窮めるのは、愚を守つて自ら安んずるに若かない。鬼谷の遺宮にしてみれば、首を領して吾が言を然りとするであらう。

【餘論】 紀昀いふ、鬼谷乃真姦、意好而語未工。

留題峽州甘泉寺

峽州の甘泉寺に留題す

輕舟橫江來弔古悲純孝。

輕舟江を横つて來り、古を弔うて純孝を悲しむ。

逶迤尋遠路婉嬾見遺貌。

逶迤として遠路を尋ね、婉嬾として遺貌を見る。

清泉不可挹涸盡空石窰。

清泉抱むべからず、涸れ盡して空しく石窰。

古人飄何之惟有風竹關。

古人飄として何くに之く、惟風竹の關しきあり。

行行翫村落戶戶懸網罩。

行行村落を翫ぶ、戶戶網罩を懸く。

民風坦和平開戶夜無鈔。

民風は坦にして和平、戸を開くも夜鈔なし。

叢林富葡萄平野絕虎豹。

叢林葡萄に富み、平野虎豹を絶つ。

嗟哉此樂鄉母乃姜子教。

嗟哉此の樂郷、乃ち姜子の教なからんか。

【字解】 甘泉寺 姜詩の故居と傳ふるも、信じ難し。姜詩は廣漢（今の四川遂寧縣の東北）の人である。母に事へて至孝。

【二】純孝 左傳隱公元年に、君子曰、觀孝叔、純孝也。【三】逶迤 斜めに行く貌、易林に、逶迤高源。淮南子に、河運遙故能遠。

【四】純孝 年若く、美しい、詩の齊風に、婉嬾靡兮。【五】石窰 窖は、穴ぐら。月令に穿三窰者一註にいふ、入地方曰窰。【六】行行 古詩に、行行且行行、與君生別離。【七】戶戶懸網罩 王建の詩に、懸網戶戶院相當。李義山の詩に、戶盡懸三網。東は魚を捕ふる籠。【八】無鈔 鈔は略取すること、說文に、鈔、又取也。後漢書の高句麗傳に、鮮卑歲納、連年寇鈔。

【九】葡萄 茹ばたけのこの根のひき連なるよりいふ。【一〇】平野 梁簡文帝の銘に、遠遊平野。【一一】嗟哉 馬授の詩に、嗟哉武溪兮多毒淫。

【題義】 東坡自註にいふ、甘泉寺、姜詩故居、と。歐陽修が詩の自註に、甘泉寺在臨江一山上、與縣麻一相對、寺有清泉一泓、俗傳爲姜詩泉、亦有姜詩祠云云、と。姜詩は廣漢の人であるから、姜詩の泉が此にある筈はない。入蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至一婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不以此爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に沂つて汲む。後、風に値ひ、水を

得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞を市ひ、鄰母をして其の姑に遣らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鱗を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが出来たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。

【一】 蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至一婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不以此爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に沂つて汲む。後、風に値ひ、水を

得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞を市ひ、鄰母をして其の姑に遣らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鱗を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが出来たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。

【二】 蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至一婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不以此爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に沂つて汲む。後、風に値ひ、水を

得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞を市ひ、鄰母をして其の姑に遣らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鱗を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが出来たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。

【三】 蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至一婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不以此爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に沂つて汲む。後、風に値ひ、水を

得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞を市ひ、鄰母をして其の姑に遣らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鱗を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが出来たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。

【四】 蜀記に、峽州西山甘泉寺、竹橋石磴、甚有幽趣、法堂之右小徑數十步、至一婦泉、謂姜詩妻龐氏也、泉上有祠、歐陽不以此爲信云云、とある。後漢列女傳に據ると、廣漢の姜詩が妻は同郡龐盛の女である。姜詩は母に事へて至孝、妻も奉順する尤も篤かつた。母、好んで江水を飲む。併し水のある處は舍を去る六七里である。妻、常に流に沂つて汲む。後、風に値ひ、水を

得ないで還る。母が渴したので、姜詩は妻を責め逐ひ出した。妻は鄰舍に寄止し、晝夜紡績し、珍羞を市ひ、鄰母をして其の姑に遣らしむ。たびたびであつたので、姑が怪んで鄰母に問ひ、其の實を得て感慚し、呼び還したといふことである。姑又魚鱗を嗜んだから、姜詩の夫妻は力作して之を供す。舍の側に忽ち泉が涌く。其の味ひ江水の如く、毎旦雙鯉をも出したので、常に母膳に供することが出来たと傳へて居る。此の詩は之を賦したのである。

【詩意】輕舟江を渡つて遠路を厭はないで甘泉寺に來り、姜詩夫妻の古へを弔うて、其の純孝を悲しむ。年若くて美しかつた孝子が昔の容貌を偲ぶ。清泉は抱むことが出来なく、石窖には水もない。姜詩夫妻は何處へ之きしか。ただ風や竹のさわがしい音がするのみ。行き行いて村落を見舞ふと、戸毎に捕魚の網や籠が懸つて居る。風俗は平和で、戸を閉ぢないでも盜難がない。叢林には筍が多く、野原には虎豹の跡を絶つて居る。ああ此の楽しい郷、これは純孝姜子夫妻の感化でもあらう。

夷陵縣歐陽永叔至喜堂

夷陵雖小邑自古控荆吳。夷陵は小邑と雖も、古より荆吳を控ふ。
形勝今無用英雄久已無。形勝今用ゐるなく、英雄久しく已に無し。
誰知有文伯遠謫自王都。誰か知らん文伯あるを、遠謫王都よりす。
人去年年改堂傾歲歲扶。人去つて年年改り、堂傾いて歲歲扶く。
追思猶咎呂感歎亦憐朱。追思猶ほ呂を咎め、感歎亦朱を憐む。
舊種孤楠老新霜一橋枯。舊種孤楠老い、新霜一橋枯る。
清篇留峽洞醉墨寫邦圖。清篇峽洞に留め、醉墨邦圖を寫す。
故老問行客長官今白鬚。故老行客に問ふ、長官今は白鬚。

著書多念慮許國滅歎娛

寄語公知否還須數倒壺

書を著はして念慮多く、國に許して歎娛を滅す。
語を寄す公知るや否や、還須く數倒壺を倒すべし。

【字解】一 夷陵縣。史記白起傳に據るに、白起攻楚拔郢都、明年拔鄢、楚夷陵、楚王亡去、秦以鄢爲南都。歐陽修至喜堂記に、夷陵者、楚之西境、昔春秋齊荆、以狄之、而詩人亦曰蠻荆。峽州にも至喜亭あり、歐公亦之が記を爲る。二 形勝。地勢のすぐれたるところ。史記高祖記に秦形勝之國、南史劉善明傳に、國之形勝。三 文伯。梁肅は、常州刺史劉孤及の狀に、遠言登辭、若山嶽之峻極、江海之波瀾、故天下謂之文伯。四 遠謫。歐陽修の傳に據るに、入朝爲館閣校勘、范仲淹以言事貶、在近多論議、司諫高若訥、獨以爲當、修始書其之、謂其不知復、人間有產私事、若訥上其書、坐貶夷陵令。五 昔。昔、呂。呂は呂夷簡を指す、史に稱す、呂夷簡爲相成、郭后之黨、逐孔道輔、范仲淹於外、時論少之、歐陽之貶、由故仲淹也、と。六 憐。朱。東坡自註に、時宋太守爲公築此堂。宋史に、景祐二年（皇紀一六九五年、西曆一〇三五年）朱慶基以郎中、出守峽州。七 舊種孤楠老。至喜亭新に北軒を開き、手から楠木を植うる時に、爲舊碧幼宜佳樹、手願若若、選數叢。八 一橋枯。歐陽修夷陵縣至喜堂記に、有楠柏茶箱四時之味。又、蘇答元珍詩に、殘雪壓枝猶有橘。又、夷陵書事詩に、綠巖紅橋最宜秋。九 清篇留峽洞。云云。三聯調に歐公の詩があり、夷陵圖後、歐公の題詩がある。行客、東坡自らいふ。一〇 許國。晉書陸玩傳に、以身許國。

【題義】宋仁宗の景祐三年に、歐陽修が貶謫されて夷陵に來つた。峽州の太守朱慶基は、歐公と親しかつたので縣舎に來り、其の廳事の東を擇らんで作つたのが此至喜堂である。歐公の言に、凡爲吏者、莫不始來而不樂、既至而後喜也、作至喜堂記、藏其壁。之に共鳴したのが此時である。
【詩意】峽州は小州、夷陵は下縣であるが、大江に濱して、南は楚、東は吳を控へ、古から地勢のすぐれた土地である。併し其の形勝は今に用なく、英雄も久しく出ない。歐陽公のやうな文伯が遠く王

都から此地に調せられやうとは誰も思はなかつたであらう。公去つて年年改まり公の堂が傾いて、歳扶ける。公を思うては、時の宰相呂夷簡を咎め、公を慕うては、峽州の太守朱慶基が公の爲に作られた至喜堂に及ぶ。舊植ゑた楠木も老い、當時の橋も新霜に枯れた。三游洞に、歐公の詩があり、夷陵圖後にも、公の筆蹟があり、土地の老人等は余に歐公の事を問うたから、余は答へた、昔の長官は今白髪となり、頻に書を著はして千載の憂を述べ、身を以て國に許して安逸を貪らなにと。さて更めて遠く語を寄す、公知るや否や、また、しばしば酒壺を倒されることもありませう。

蘇東坡詩集 卷二

古今體詩 三十九首

息壤詩

息壤詩

淮南子曰、蘇湮洪水盜帝之息壤。帝使祝融殺之於羽淵。今荆州南門外、有狀若屋宇、陷入地中、而猶見其脊者、旁有石、云不可犯。春鍾所及、輒復如故。又頗以致雷雨。歲大旱、屢發有應、予感之、乃爲作詩、其辭曰、

【調讀】淮南子曰、蘇、洪水を瀆ぎ、帝の息壤を盗む、帝祝融をして之を羽淵に殺さしむ。今の荆州南門の外に、狀屋宇の若く、地中に陥入して猶ほ其の脊を見すものあり。旁に石あり、云ふ。犯すべからず、と。春鍾の及びし所輒ち復故の如くす。又、頗る雷雨を致すを以て、歳大に早すれば、屢、發いて應あり。予之に感じ、乃ち爲に詩を作る。其の辭に曰く、

【字解】(一) 淮南子 書名。前漢の淮南王劉安撰し、二十一卷ある。(二) 息壤 湖北江陵縣の南にあり。即ち山海經の蘇圃。帝之息壤。以瀆洪水之處也。(三) 祝融 火の神、左傳昭公二十九年に、火正曰祝融。(四) 羽淵 羽山の上に二泉あり、會して羽

譯となる。即ち羽淵。左傳に、其神化爲黃龍、入於羽淵とあるもの。羽山は山東鄒城縣の東北に在る。【】香舖 香は土を盛る器、舖ばスキ、香舖に、香舖相尋、干戈不息。

帝息此壤以藩幽臺。

帝此の壤に息し、以て幽臺を藩にす。

有神司之隨取而培。

神あり之を司り、隨つて取りて培ふ。

帝敕下民無敢或開。

帝下民に敕し、敢て或は開くことなからしむ。

惟帝不言以雷以雨。

惟れ帝言はず、以て雷し以て雨ふらす。

惟民知之幸帝之怒。

惟れ民之を知り、帝の怒らんことを幸ふ。

帝茫不知誰敢以告。

帝茫として知らず、誰か敢て以て告ぐる。

帝怒不常下土是震。

帝の怒は常ならず、下土是れ震はし。

使民前知是役於民。

民をして前知せしむ、是れ民を役す。

無是墳者誰取誰干。

是の墳なくば、誰か取り誰か干さん。

惟其的之是以射之。

惟れ其之を的にす、是を以て之を射る。

【字解】【】帝之怒 怒はもと怒に作る。一説に怒字似當作怒、今之に従ふ。

【題義】錦繡萬花谷といふ書（宋孝宗時代の著）に、江陵南門外、壘門内東垣下有二小瓦堂、室一所、高三尺許、此息壤也、禹鑄石造龍之宮室、置穴中、以塞水脈と見えて居る。洪水が天に滔り、鱗は

帝の息壤を竊んで以て洪水を堰ぐ、帝乃ち祝融をして羽山に殺さしめたといふのが傳説で、此の傳説に本いて此の詩が出来たのである。游宦紀聞といふ書（宋の張世南撰、十卷ある）に、漢洪録を引いて、江陵南門有息壤、開元中、裴宙牧荊州、掘得石城徑六尺八寸、是年霖雨不止、復埋之而水止、と見えて居る。

【詩意】天帝が此の壤に息ひて、地中の臺を藩とした。神が之を司どり、之に培うた。天帝が下民に仰せがあつて、之を聞かないやうにしたが、天帝は物言はない、雷を鳴らし雨を降らして其の意を表はされる。民は之を善いこととし、早の時など、特に天帝の大に怒られるやうにと幸つてしきりにお祈りする。併し天帝の怒りは、何日何時發するか少しも分らない。其の都度下土を震はし民を前知せしめる。是は畢竟、民を役することになる。ああこの墳がなければ、之を取るものもないし、之を干すものもない譯である。的があればこそ之を射るものも生ずるのである。

荊州 十首

荊州 十首

游人出三峽楚地盡平川。

游人三峽を出づれば、楚地盡く平川。

北客隨南賈吳檣間蜀船。

北客南賈に隨ひ、吳檣蜀船を間ふ。

江侵平野斷風捲白沙旋。

江は平野を侵して斷え、風は白沙を捲いて旋る。

欲問興亡意、重城自古堅。興亡の意を問はん欲すれば、重城古より堅し。

【字解】 荆州 太平寰宇記に、荆州江陵郡屬山南東道。楚都。秦爲三南郡。即今州也。宋江陵府となし、元中興路と改め、明は荆州府となす。昔、之に由り湖北者に屬す。民國の江陵縣は、即ち舊府治である。三峽 巫峽・瞿塘峽・西陵峽であることは前にも述べた。併し、一定しない。太平寰宇記には、西峽・巫峽・歸峽。峽程記には、明月・廣溪・仙山。或は壘塘・龜頭・巫山を三峽とし、或は州城の明月峽・黄牛峽・西陵峽を三峽とする。重城 左傳哀公七年に、民保於城。城保於德。唐書に、大河以北無堅城。

【題義】 宋、仁宗の嘉祐五年（皇紀一七二〇年、西曆一〇六〇年）正月に、東坡は弟子由と父老泉に侍して荆州から大梁に遊んだ。荆州十首は、其時の作である。第七首に、殘臘多風雪の句がある所を見ると、十首は、一時の作ではない。第一首は、總起である。

【詩意】 遊人が三峽を出ると、險阻既に遠く、楚の地は、盡く平川である。人も物も四方から輻湊し、北客は南買に隨ひ、吳檣に蜀船が間つて居る。江は平野を斷ち、風は白沙を捲きあげる。昔、禹が始めて城を作り、強者は攻め、弱者は守り、敵者は戦ふとか。興亡の意はと問はば、城を堅くするが第一と答へやう。重城は古より堅いのである。

南方舊戰國、慘澹意猶存。南方舊戰國、慘澹意猶は存す。慷慨因劉表、淒涼爲屈原。慷慨は劉表に因り、淒涼は屈原の爲なり。

廢城猶帶井、古姓聚成村。廢城猶は井を帶び、古姓聚りて村を成す。

亦解觀形勝、昇平不敢論。亦解く形勝を觀、昇平敢て論せず。

【字解】 慘澹 心を痛め動かす、杜詩に慘澹苦志。慷慨 いきどほりなげく、後漢書、齊武王縉傳に性剛毅慷慨。劉表 字は景升、後漢高平の人、曹操の袁紹と官渡に相持するや、紹、助を表に求む、表之を許して未だ授けず。紹敗れ、表自ら將として表を征す、未だ至らざるに、表は疽が背に發して死す。淒涼 さむしくいたむ、李白の詩に、覽古傷淒涼。廢城の意にも用ふ、杜甫の詩に、江海日淒涼。屈原 屈平字は原、楚の同姓、江南に遷され、天を投ぎ壘を引き、以て自ら明にせしも、終に看られず。清白を以て久しく濁世に居るに忍びず、遂に汨羅に投じて死す。帶井 易に改色不改井。古姓成村、村は聚落。太平寰宇記に、武昌郡六姓、吳、伍、程、史、龍、屈。武陵郡三姓、于、伍、閭。解 節の義に用ゐること、詩に多い。廢詩に解放。胡廣。延。塞馬。能騎。代馬。獲。秋田などとある。平仄の便にて節と用ゐるが多いが、本義は節よりも重い。

【詩意】 首を回せば、南方の古國、慘として心を痛ましめる。劉表が袁紹の乞を許して、援を與へない。紹が曹操に敗られ、表も亦、曹操に征せられ、其の軍の到らない内に、表は疽が背に發して死んだ。劉表の古土を訪ふと、慷慨を禁ずることが出来ない。屈原の清白を以てしては、世も濁世に容れられない。淒涼の念が自ら起るのである。廢城には昔ながらの井戸が存し、古來の人人が今に聚落をなして居る。靜に天下の形勢を觀て、敢て輕しく昇平を論じない。また高常侍が、豈邊を安んずるの策なからんや、諸將は已に恩を承くとの意である。

【餘論】 紀昀は此詩を評して、結は即ち高常侍が豈無邊策、諸將已承恩の意であると言つた。高適の蜀中作に、策馬自沙漢、長驅登塞垣、邊城何蕭條、白日黃雲昏、一到征戰處、每愁胡馬翻、豈無

安邊書、諸將已承恩、惆悵孫吳事、歸來獨閉門。とある。諸將が邊を防ぐを知らないから、策ありと雖も、陳すべきなし。天下借賞と言はないで、主將承恩といふ、人をして言外に之を思はしめる。

楚地闊無邊、蒼茫萬頃連。

楚の地は闊うして無邊、蒼茫として萬頃連る。

耕牛未嘗汗、投種去如捐。

耕牛未だ嘗て汗せず、種を投じて去てて捐つるが如し。

農事誰當勸、民愚亦可憐。

農事誰か當に勸むべき、民の愚亦憐むべし。

平生事遊情、那得怨凶年。

平生遊情を事とす、那ぞ凶年を怨むを得む。

【字解】(一) 楚地、元和郡縣志に、春秋以來、楚國之郡、謂之郢都、西接巴巫、東連雲夢。(二) 無邊、廣くして限りなし、郭景純の江賦に、莽之無象、尋之無邊萬頃連、前漢刑法志に、投封萬井、間、食貨志に、地方百里、投封九萬頃、提封は知行の地。(三) 耕牛、事物紀原に、漢武帝以趙過爲搜粟都尉、教民耕植、三犁共一牛、一人耕之。(四) 農事誰當勸、左傳昭公十七年に、九思爲九農正。註にいふ、以九思爲九農之號、各隨其宜、以教民事也。(五) 平生事、遊情、太平寰宇記によるに、楚人多劇作、唐至德之後、流備爭食者甚衆、五方雜居、風俗大變、最爲疲弊、耗民莫甚於此。

【詩意】楚の地は、西は巴巫に接し、東は雲夢に連り、蒼茫として涯を知らない。耕作に骨も折らなければ播種の事も務めない。民の愚は寧ろ憐むべく、ただ日に遊情を事として居る。これでは生活の安定を得る筈はないから、凶年を咎める譯にもゆくまい。

【餘論】紀昀は此詩を三四太拙、後四句亦太直、十首中如二月之累と評して居る。

朱檻城東角、高王此望沙。
江山非一國、烽火畏三巴。
戰骨淪秋草、危樓倚斷霞。
百年豪傑盡、擾擾見魚蝦。

朱檻城の東角、高王此に沙を望む。
江山一國にあらず、烽火三巴を畏る。
戰骨秋草に淪み、危樓斷霞に倚る。
百年豪傑盡き、擾擾として魚蝦を見る。

【字解】(一) 望沙、荆州志に、城東南有望沙樓、後漢時、高季興、建以望沙津、陳亮吉知荆州、更名仲宣樓、五代史に、南平世家高季興於後漢開平二年、爲荆南節度使、末帝時封渤海王、後唐莊宗同光二年封南平王、子從誨嗣封父爵、高從誨が督使陶穀を望沙樓に宴せし、とも五代史に見ゆ。(二) 江山非一國、五代史に、南漢與閩、蜀、皆稱帝、從誨所向稱臣、故に公の時に、江山非一國の語あり。(三) 三巴、常璩の華陽國志に、劉璋改永寧爲巴郡、以固陵爲巴西太守、是爲三巴。(四) 戰骨淪秋草、江淹の恨賦に、試望平原、蔓草叢骨、拱木斂魂、張籍の時に、年年戰骨多秋草。(五) 危樓、高樓、岑樓、雲樓、皆同じ、陰鑑の時に、接路上一危樓。(六) 百年豪傑盡、續通鑑長編に、乾德元年、高繼沖率表來歸、自先生作詩時、上溯至高季興封渤海王、蓋百三十餘年矣。(七) 擾擾、紛擾の意、國語に、唯有諸侯、故擾擾焉。

【詩意】杜子美の時に、滂沱朱檻溼とあるが、其の朱塗の欄干は城東の角にある望沙樓である。高從誨は、晉の使である陶穀を此の樓に宴したことは歴史に名高い。當時、南漢も閩も蜀も皆、借號して帝と稱した。從誨は、向ふ所、臣と稱したので、この江山は、晉にも屬し、南漢にも閩にも又蜀にも屬してゐたというてもよからう。警報をする烽火は、巴郡・巴東・巴西の來寇を畏れるからである。戰場に墮した骨は、秋草に没し、高樓は空しく斷霞に聳えて居る。當年の豪傑一時に借號したのも、

今は紛紛亂離の跡を遺したまで、魚蝦の水中にあるに異らない。
 【餘論】查初白曰く、此詩因南平而致慨於五季也。季興初爲荆南節度、所領止江陵、歸峽三城、地狹而兵弱、難與諸國爭衡、父子祖孫、與五代相終始。是時楊李擅吳、王氏保閩、劉氏驕張于南粵、王孟跳梁于蜀中、莫不帝制自爲、志圖兼并、獨高氏所向稱臣、未幾而強弱大小、同歸滅、百年以來、戰骨已銷、孤城猶在、千秋形勝之區、惟危樓倚斷霞、耳、一時豪傑自命者、細瑣丕變、無足比數、魚蝦擾擾一語、說得五代君臣及僭號諸國、可憐可憫、可鄙可羞、と。解して得て明快である。

沙頭烟漠漠、來往厭喧卑。
沙頭烟漠漠、來往喧卑を厭ふ。

野市分聲鬧、官船過渡遲。
野市聲鬧を分ち、官船過渡遅し。

遊人多問卜、僧叟盡攜龜。
遊人多く卜に問ふ、僧叟盡く龜を攜ふ。

日暮江天靜、無人唱楚辭。
日暮れて江天靜に、人の楚辭を唱ふるなし。

【字解】【一】沙頭、沙市ともいふ、今の湖北江陵縣城南十五里に在る。荆州志には、沙頭市在江陵縣東北十五里、元微之の江陵玩月詩に、聞胡沙頭市。【二】厭、喧卑。鮑明遠の舞鶴賦に、去帝鄉之岑寂、歸大寰之喧卑。【三】僧叟、田舎もの、晉書左思の傳に、陸機吳弟雲、嘗曰、此間有僧文、狀作三都賦。僧叟は即ち僧文の意。吳人は中州人を僧といふ。【四】攜龜、楚人の尙巫を謂つたのである。龜は龜卜の龜、史記に三王不同龜、四夷各異卜、然各以決吉凶。精少孫補史記に、南方老人用龜支牀足。

【題義】沙頭市の所見を寫したものである。紀昀は讀古風之不作也と評して居る。

【詩意】湖北の沙頭市、烟は市を籠めて漠漠、來往の人で雜沓厭ふべきである。市場は塵（塵といふ塵の屬）の擧つたやうに喧しいのに、官船の渡も遅い。ここに遊ぶ行客は、多く卜者に身の上を占つてもらひ、田舎のものは盡く龜を所持して居る、日が暮れて江天の靜かなる頃になつても、また古の屈原・宋玉などの楚辭を唱へるやうな氣高いものはない俗地である。

太守王夫子、山東老俊髦。
太守王夫子は、山東の老俊髦。

壯年聞猛烈、白首見英豪。
壯年猛烈を聞き、白首英豪を見る。

食雁君應厭、驅車我正勞。
雁を食うて君應に厭くべし、車を驅つて我正に勞す。

中書有安石、慎勿賦離騷。
中書安石あり、慎んで離騷を賦すること勿れ。

【字解】【一】王夫子、東坡全集に、上荆州王兵部書、與王判部書がある。二人は皆、荆州の守であり、又姓を問うして居るが、其の名字が傳はらない。【二】俊髦、髦は毛中の長毛、故に才極の衆に秀でたるに喩ふ。爾雅の註に、土中之俊、翰毛中之髦。【三】食雁君應厭、後漢の王符傳に、臯市規解官歸安定、鄉人有以貨得雁門太守者、亦去職還家、書刺調規、規不迎、既入而問、卿前在郡食雁美乎。【四】中書有安石云云、時相を指す。安石の如きあれば、王夫子は、屈原のやうに放逐されて離騷を作るなどのことはなからう。晉の謝安傳に、安石爲尙書僕射、領吏部、加後將軍及中書令。【五】離騷、屈原の辭賦。史記屈原傳に、憂愁幽思而作離騷、離騷者、猶離憂也。離は遠ふといふ意。

【詩意】荆州の王夫子は、山東の老俊傑で、壯年の時は、猛烈で聞え、白首になつても英豪として知られる。昔、皇甫規が官を辭して郷に歸つた時、同じく郷人が、これは金の力で雁門の太守となつたものがあつた。名刺を通じて規に會つた。規は君は郡に在つて雁を食つて美かつたかと尋ねたさうである。此故事により、雁を食うて君は應に厭くべし、車を驅つて我は正に勞するといふのが王夫子の志であらう。幸ひ、今は善い宰相が居られるから、君は出でて仕ふるべく、屈原のやうに不平の文句を言つてはならない。

【餘論】紀昀は此詩を夾此一首章法生動、從杜公游何氏山林詩、萬里戎王子一首得法と評して居る。杜の陪鄭廣文遊何將軍山林十首中の一首は、萬里戎王子、何年別三月支異花開絕域、滋蔓匝清池、漢使徒空到、神農竟不知、露翻兼兩打、開折日離披、である。

殘臘多風雪、荆人重歲時。

殘臘風雲多く、荆人は歲時を重んず。

客心何草草、里巷自嬉嬉。

客心は何ぞ草草、里巷自ら嬉嬉。

爆竹驚鄰鬼、驅雛聚小兒。

爆竹鄰鬼を驚かし、驅雛小兒を聚む。

故人應念我、相望各天涯。

故人應に我を念ふべし、相望む各天涯。

【字解】(一)殘臘、窮臘といふに同じ。冬至の後、第三の戌の日に、百神を合せ祭るを臘祭といふ。臘祭は年末に行ふから、臘月は陰曆十二月の異名となる。(二)重歲時、別楚歲時記に、歲暮家具を蓄留宿歲飯、至新年十二月、棄之街衢、以爲去故

納新。こゝは汎く楚人の時節を重んずるをいふ。(三)草草、心を勞する貌。詩の小雅に、曠人好射、勞人草草。杜詩に、聞君遊萬里、取別何草草。(四)嬉嬉、欣び笑ふ聲。皮日休の詩に、幾日嬉嬉活。(五)爆竹、驅雛、別楚歲時記に、正月一日、爆竹鳴而起、先於庭前爆竹、以避山臊惡鬼、東方朔の神異經によるに、西方深山中に人あり、其の長尺餘、一足、性人を畏れず。之を祀せば人をなして寒熱せしむ。名けて山臊といふ。竹を以て火中に著け、爆竹聲あれば、山臊驚怖す。鬼は金姑の聲を恐む、人間は爆竹の聲を聞いて金姑の聲となす。驅雛は呂氏春秋の註に、歲前一日、擊鼓驅疫、謂之逐除。

【詩意】歲が暮れて、風雪も多いので、外から来た人は心を勞してせわしないが、歲時を重んずる此里では嬉嬉として喜んで居る。山臊や惡鬼を驚かす爆竹の音や、陰曆十二月の八日に、村人が太鼓を撃ち、金剛力士を裝うて逐疫することも、賑やかである。遠く離れて居る吾が友も、我が彼を思ふやうに、彼も亦、我を念うて居られるであらう。各天の一方に相望んで居る。

【餘論】楚の人は歲時の風俗を重んず。爆竹も驅雛も、昔ながらに行はれて居る。時節の移り行く毎に、故人は應に我を念ふであらうといふのが此詩である。紀昀は此詩を一結不脱自己、方不是泛陳風土と評して居る。

江水深成窟、潜魚大似犀。

江水深うして窟を成し、潜魚大にして犀に似たり。

赤鱗如琥珀、老枕勝玻瓈。

赤鱗琥珀の如く、老枕玻瓈に勝れり。

上客舉雕俎、佳人搖翠篋。

上客は雕俎に舉げ、佳人は翠篋を搖す。

登庖更作器。何以免屠割。

庖に登せ更に器に作る。何を以て屠割を免れん。

【字解】 赤鱗如琥珀。本草に、青魚生江湖間、多以作鮓、所謂五侯鮓也。其頭中枕骨液令氣通燥乾、狀如琥珀。羅雅に、魚枕謂之丁。註にいふ、枕在魚頭骨中、形似兼書丁字。江淹の別賦に、兼魚之赤鱗。【二】老枕勝玻璃。劉禹錫の詩に、老枕如玻璃。温庭筠の詩に、玻璃枕上聞天籟。【三】翠筵。筵は玉筵に似て。【四】屠割。割も屠る意、或は割に作る。

【題義】 詩の周頌に、猗與漆沮、潛有多魚とある。漆水、沮水は川の名、潛は魚を取る仕掛である。潛に魚が多い。郭璞の江賦に、或鹿筋象鼻、或虎狀龍頭、鱗甲環錯、煥爛錦斑とある。鹿のひたひ、象の鼻、虎の状、龍の頭、鱗甲が間雜し、照り輝いて、錦の如く斑といふ意である。夫れで庖に登せられ、器に作らる。多材は累を爲すの感を寓せたのが此詩である。

【詩意】 江水は深く孔穴をなし、其の潛に居る魚は肥えて大きく犀のやうである。其の鱗は赤くて琥珀の如く、其の頭骨中の枕は、玻璃にも勝つて居る。それで上客は之を雕めた俎に擧げ、佳人は之を翠色の飯にする。料理され、器物に作らる。何れにしても屠られる。材多ければ身を累はす類であらう。

北雁來南國。依依似旅人。

北雁南國に來り、依依として旅人に似たり。

縱橫遭折翼。感惻爲沾巾。

縱橫遭うて翼を折り、感惻して爲に巾を沾す。

平日誰能挹高飛。不可馴。

平日誰か能く抱く、高飛して馴るべからず。

故人持贈我三嗅。若爲珍。

故人我に持贈す、三たび嗅ぐ若爲なる珍ぞ。

【字解】 北雁。韓退之の詩に、嗷嗷鳴雁且飛、窮秋南去春北歸。【二】依依。離れるに忍びない意。楚辭の九思に、志戀無兮依依。【三】折翼。漢の息夫躬が絶命詞に、驚頭折翼痛得往命。【四】沾巾。張衡の四愁の詩に、側身北望涕沾巾。【五】高飛。九域志に、韓憑妻何氏美、宋康王欲之、何氏歌曰、南山有鳥、北山張羅、鳥自高飛、羅當奈何。【六】持贈。持ち行きておくる、陶弘景の詩に、不堪持贈君。

【詩意】 南に去り北に歸る雁がねは、依依として旅人のやうである。縱横に相遭うては翼を折る。思へば感ずること多くて爲に巾を沾す。平日誰か之を抱く、羅ありて之を張れども、鳥は高く飛びて馴れない。吾が友は我に此の雁を贈り來る。いかなる珍ぞ、やがて隣に上るのである。

【餘論】 此の詩に見るも、荆の俗は好みて雁を食ふもの如く、第六首の食雁君應厭の句と合せて觀るべきであらう。紀昀は、此の詩を意格特高と評して居る。

柳門京國道。驅馬及春陽。

柳門は京國の道、馬を驅りて春陽に及ぶ。

野火燒枯草。東風動綠芒。

野火枯草を燒き、東風綠芒を動かす。

北行連許鄧。南去極衡湘。

北行許鄧に連り、南去衡湘を極む。

楚境橫天下。懷王信弱王。

楚境は天下に横はるに、懷王は信に弱王。

【字解】一、修門。荆州の修門、宋玉の招魂篇に、魂兮歸來入修門。玉逸の註にいふ、郢城門と。荆州記に、郢南門二門、一名龍門、一名修門。唐の吳融留獻荆南成相公詩に、行行御門路。荆州別に御門あるものと見ゆ。二、野火燒枯草。白樂天が春草の時に、野火燒不盡、春風吹又生。三、遠許鄧。許州は、清の時、直隸州として河南省に屬せしが、民國之を改めて許昌縣となす。鄧州は民國になつてから、縣と改め、河南汝陽道に屬す。四、衡州。衡州は、范仲淹の岳陽樓記に、北通巫峽、南極瀟湘。衡州、清の時、湖南省に屬せしが、民國之を廢す。今の衡陽縣は其の舊治。湘州、州治は湘に臨む、即ち今の湖南長沙縣。五、關王。史記に、趙王自上、食、禮甚卑、高祖狂謂賢、貫高、趙午乃怒曰、吾王辱王也。註にいふ、關、關也。

【詩意】楚城の南門を出で、大道を歩し、馬を驅つて春の野に及ぶ。野火は枯れ草を燒き、春風は緑の草を靡かせて居る。北行すると、行く先は許州、鄧州。許州は、河南道に屬し、西南、汝州に至る。一百八十里、鄧州は、山南東道に屬し、南、襄州に至る。一百八十里、北、汝州に至る。四百九十里。又南に去つて衡州湘州を極める。思へば楚王の領土は天下に横はつて大きいのに、懷王は威を振ふことが出来なかつたのは、信に弱王であると言はなければならぬ。

【餘論】此詩の結句は、史記の貫高、趙午乃怒曰、吾王辱王也の語に本いて居る。紀昀は、結句寫自負之意、此猶少年初出、意氣方盛之時也、黃州以後、無復此種議論一矣と評して居る。

渚宮

渚宮

渚宮寂寞依古郢。
楚地荒茫非故基。

渚宮は寂寞として古郢に依る、
楚地は荒茫として故基にあらず。

【字解】

一、渚宮。春秋楚の別宮、今の湖北江陵縣城內西北隅に在る。左傳に、楚子西治、漢汜、江、入郢、王在渚宮下、見之。孔穎達

二王臺閣已幽莽

二王臺閣已に幽莽、

何況遠間縱橫時。

何ぞ況んや遠く縱橫の時を問はん。

楚王獵罷擊靈鼓。

楚王獵罷んで靈鼓を撃ち、

猛士操舟張水嬉。

猛士舟を操りて水嬉を張る。

釣魚不復數魚鼈。

釣魚復魚鼈を數へず、

大鼎千石烹蛟鱔。

大鼎千石蛟鱔を烹る。

當時野人架宮殿。

當時野人宮殿を架し、

意思絕妙般與倅。

意思絶妙般と倅と。

飛樓百尺照湖水。

飛樓百尺湖水を照らす、

上有燕趙千蛾眉。

上には燕趙の千蛾眉あり。

臨風揚揚得意自得。

風に臨んで揚揚として得意自得す、

長使宋玉作楚辭。

長へに宋玉をして楚辭を作らしむ。

秦兵西來取鐘簾。

秦の兵西より來つて鐘簾を取り、

故宮禾黍秋離離。

故宮禾黍秋離離。

の疏にいふ、渚宮宮、郢都之南、蓋楚威王所建也。太平寰宇記に襄王所建とあるは誤。一、荒茫。沈約の詩に、九服荒茫。二、王臺閣。湘東王と高氏。渚宮舊事に、湘東王釋於三子城中、穿佛池山、長數百丈云云。太平寰宇記に、謂之湘東苑。名勝志に、後魏高祖造臺。城西南、樂亭、亦名渚宮。三、幽莽。幽莽、山に、幽は閉塞の地、莽は草莽の地、其の閉塞を治めず、其の草莽を變らず云云。莊子の則陽に、爲政焉勿。幽莽。四、靈鼓。六國時代の楚をいふ。五、楚王獵罷云云。司馬相如子虛の賦に、楚亦有平原廣澤、游獵之地、鐘樂若此者乎、楚王之獵何與寡人云云。又、擊靈鼓。六、飛樓。七、水嬉。張協の七命に、乘魚舟兮爲水嬉。八、大鼎千石。司馬相如の上林賦に、撞千石之

千年壯觀不可復。今之存者蓋已卑。池空野迴樓閣小。惟有深竹藏狐狸。臺中絳帳誰復見。臺下野水浮清漪。綠窗朱戶春晝閉。想見深屋彈朱絲。腐儒亦解愛聲色。何用白首談孔姬。沙泉半涸草堂在。破牕無紙風颼颼。陳公蹤蹟最未遠。七瑞寥落今何之。

千年壯觀復すべからず、今の存するもの蓋し已に卑し。池空しく野廻かに樓閣小なり、惟深竹の狐狸を藏するあり。臺中の絳帳は誰か復見ん、臺下の野水清漪を浮ぶ。綠窗朱戶春晝も閉づ、想ひ見る深屋朱絲を彈せしを。腐儒も亦解く聲色を愛す、何ぞ用ひん白首孔姬を談ずるを。沙泉半は涸れて草堂あり、破牕紙なく風颼颼。陳公の蹤蹟は最も未だ遠からず、七瑞寥落今何くに之く。

【一】立萬石之虞。【二】欽。【三】或。【四】或。【五】或。【六】或。【七】或。【八】或。【九】或。【一〇】或。【一一】或。【一二】或。【一三】或。【一四】或。【一五】或。【一六】或。【一七】或。【一八】或。【一九】或。【二〇】或。【二一】或。【二二】或。【二三】或。【二四】或。【二五】或。【二六】或。【二七】或。【二八】或。【二九】或。【三〇】或。【三一】或。【三二】或。【三三】或。【三四】或。【三五】或。【三六】或。【三七】或。【三八】或。【三九】或。【四〇】或。【四一】或。【四二】或。【四三】或。【四四】或。【四五】或。【四六】或。【四七】或。【四八】或。【四九】或。【五〇】或。【五一】或。【五二】或。【五三】或。【五四】或。【五五】或。【五六】或。【五七】或。【五八】或。【五九】或。【六〇】或。【六一】或。【六二】或。【六三】或。【六四】或。【六五】或。【六六】或。【六七】或。【六八】或。【六九】或。【七〇】或。【七一】或。【七二】或。【七三】或。【七四】或。【七五】或。【七六】或。【七七】或。【七八】或。【七九】或。【八〇】或。【八一】或。【八二】或。【八三】或。【八四】或。【八五】或。【八六】或。【八七】或。【八八】或。【八九】或。【九〇】或。【九一】或。【九二】或。【九三】或。【九四】或。【九五】或。【九六】或。【九七】或。【九八】或。【九九】或。【一〇〇】或。

百年人事知幾變。直恐荒廢成空陔。誰能爲我訪遺蹟。草間應有湘東碑。

百年人事知る幾か變ずる、直恐る荒廢空陔と成るを。誰か能く我が爲に遺蹟を訪はん、草間應に湘東の碑あるべし。

【題義】子由の同じく渚宮を賦した詩に、楚塞多秋木、荆王有故宮。又いふ、湘東晉宗子、高氏變元戎、擊沼長千尺、開亭費萬工と。湘東王釋は、子域中に池山を穿構し、上に通波閣がある。水に跨つて之を爲る。南に芙蓉堂、東に醜飲堂、西に鄉射堂、堂に竹塼(射塼)を置く。東南に連理堂、堂北に映月亭、修竹堂、臨水齋がある。齋の前は高山、山に石洞があつて苑中に潛行する。山上に陽雲樓、北に臨風亭、明月樓がある。竹林があり、花房がある。花草が繁くなつても竹林彌盛と傳へて居る。渚宮の勝概が想像される。

【詩意】名高い楚王の別宮も、今は寂寥として古の郢の地に存して居る。楚地は荒茫として、昔の楚ではない。湘東王釋と高氏との臺閣は今は修理もせず艾鋤しない。また六國時代の合縱連横などの話を問はうぞ。憶ふ昔、楚王の遊獵に、水嬉に、鑼鼓を撃ち舟に乗り、王者の威勢を恣まにしたのである。當時、郢人の宮殿を建築する、巧を極めたもので、墨子に見ゆる公輸般や、舜典に載つて居る共工垂も斯くやと思はれる。高樓は湖水に臨み、樓上には燕や趙の美人を多數に待らせ、意氣揚揚として此世をば我が世と自得し、屈原の弟子として名高い宋玉をして高唐の賦や九辨などの楚辭を作らしめたのである。榮枯盛衰は人事の常で、秦の兵が西から來つて、楚の宮殿を掠めた。史記の秦始皇本紀に據ると、秦王は諸侯を破る毎に、其の宮室に倣つて咸陽の都に土木を起し、戦争で得た所の諸侯の美人や鐘鼓をば之に充たしたさうである。楚の宗廟宮室は、盡く禾黍の荒野となつた。昔の壯觀は復望まれない。今の故宮は、地卑く、池空しく、野も廻かに樓閣も小である。ただ竹叢に狐狸の潜めるのみ。臺中の絳帳など今は見ることも出來ず、臺下の野水に清らかな漣を浮べて居る。綠の窗、朱塗の戸、春來れど晝も開かない。昔は深屋盛に音楽を奏で、後の世にも馬融などの學者は、高堂に坐して絳帳を施し、前には生徒に授け、後では女樂を列ねたといふ話がある。聲色を愛する學者に孔子と周公との道を談ずる要もなからう。さて、沙泉が半ば潤れて草堂のみあり、破窓も紙なく、風の颯颯たるを覺える。陳堯咨は、嘗て荆南に太守となつて來たが、其の跡は此處からは遠くない。梁の元帝の小宇を七瑞と言つたが、湘東王に封せられたことは、歴史に名高いが、今は其の跡も空し

い。百年の人事は幾たびか變ずるものであるから、此の故宮も、更に荒廢して空破となるかも知れない。もし故宮の遺蹟を尋ねるといふことにもなると、湘東の碑が唯一の材料となるであらう。

荆門惠泉

荆門の惠泉

泉源從高來。走下隨石脈。
紛紛白沫亂。隱隱蒼崖坼。
縈回成曲沼。清澈見肝膈。
淙瀉爲長溪。奔駛蕩蛙蝮。
初開不容碗。漸去已如帛。
傳聞此山中。神物嬾遺謫。
不能致雷雨。灑灑吐寒碧。
遂令山前人。千古灌稻麥。

泉源高きより來り、走り下りて石脈に隨ふ。
紛紛として白沫亂れ、隱隱として蒼崖坼く。
縈回して曲沼を成し、清澈肝膈を見る。
淙瀉長溪を爲し、奔駛して蛙蝮を蕩す。
初開いて碗を容れず、漸く去つて已に帛の如し。
傳へ聞く此の山中、神物嬾くして謫に遺ひ、
雷雨を致すこと能はず、灑灑寒碧を吐き、
遂に山前の人をして、千古稻麥に灌がしむ。

【字解】【一】荆門、漢の舊縣、荆襄州の要津。清、直隸州となし、湖北に屬し、民、縣に改め、湖北襄陽道に屬す。荆門の西に蒙、惠の二泉がある。二泉は荆門山より發す、東坡自註にいふ、荆門山在宜都、大江之南、與虎山對、と。宜都は縣名、虎山は虎牙山。【二】石脈、温泉湧の時に、孔竇淋漓石脈。【三】隱隱、司馬相如の上林賦に、沈沈隱隱。沈沈は深き貌。隱隱は威なる貌。

【一】拆裂、われさける。【二】雲間、まといめぐる、王勃の滕王閣序に、窮島嶼之傑回。【三】清潭見、肝面、清く澄む、澈は澄の意。廓はむれのうち。【四】流瀉、小水が大水に入るを瀉といふ。孟東野の秋雨亭句に、流瀉殊未終。【五】奔駭、驚駭、玉駕に駭、疾也。馬が疾く走ること。觸も触。【六】神物、神物。僧史に、僧開禪師住、鄂武山中、一日有老翁來、曰、我龍也、以瘦骨、行雨、天罰當死、願道力可脫、乃化、小蛇、延入袖中、夜風號電擊、山岳爲搖、而師危坐不傾、遂且蛇飛去。【七】月、月が水に映じて光る。何遜の望新月詩に、的的與沙靜、灑灑逐波輕。

【題義】李德裕、詩を惠泉の上にて題して、茲泉由太潔、終不著纖鱗、到底清何益、涵虛只自貧、と。今に至るまで碑版が存して居る。碑版は碑誌の類である。荆門山の二泉北を蒙といひ、南を惠といふ。蒙泉は常に寒く、惠泉は常に温、此詩は南泉を詠じたのである。

【詩意】湧き出る泉に色色ある。温泉は正出し、沃泉は縣出し、汎泉は側出する。荆門山の惠泉は、高きより走り下つて、澗澗として石脈に通じ、水玉を飛ばし、崖を坼き破り、まといめぐりて曲沼となる。清い流れが長い谷川をつくつて奔馳する。蛙も蟬も流されてしまふ。其の泉源は、觴を濯ぶべく、江津に至るに及んでは、舟を舫べ、風を避けなければ涉れない。聞けば山中に棲める神龍が行雨を情つたので、天罰を得、雷雨を起すことが出来なくなつた。そこで惠泉が月に映じて寒碧を吐き、山前の住民をして千古稻麥に灌がしめることが出来たのである。

次韻答荆門張都官維見和惠泉詩

次韻して荆門の張都官維見が惠泉の詩に和せられしに答ふ

楚人少井飲地氣常不洩

楚人井飲を少く、地氣常に洩れず。

蓄之爲惠泉空若有所折

之を蓄ふるを惠泉となす、空として折つ所あるが若し。

泉源本無情豈問濁與澈

泉源は本情なし、豈濁と澈とを問はんや。

貪愚彼二水終古恥莫雪

貪愚彼の二水、終古恥雪ぐなし。

只應所處然遂使語異別

只應に處る所然るべし、遂に異別を語らしむ。

泉傍地平衍泉上山巒嶂

泉傍は地平衍、泉上は山巒嶂。

君子慎所居此義安可闕

君子は居る所を慎む、此義安んぞ闕くべけんや。

古人貴言贈敢用況高節

古人は言贈を貴ぶ、敢て高節を況ふるを用ひんや。

不爲冬霜乾肯畏夏日烈

冬霜の爲に乾かず、肯て夏日の烈を畏れんや。

冷冷但不已海遠要當徹

冷冷但不已まざれば、海遠きも要當に徹すべし。

【字解】【一】張維、續通鑑長編に據るに、熙寧十年正月に、前原州臨涇縣令張維、名維、廣州、嶺南の事がある。【二】地氣、陰氣をいふ、禮記に、五冬之月、天氣上騰、地氣下降。【三】飲、聚るなり、飲ぶなり。前漢書の溝洫志に、河水溢溢。【四】食愚彼二水、食泉は、廣州南海縣石門口に在り、即ち吳陸之の酌んで詩を賦した處。荆門記に、橫溪水甚理、冬夏不乾、俗謂之食泉。柳宗元

愚溪序に、灌木之陽有深澗、東流入於瀟水、余以愚稱、罪謂瀟水上、愛是澗、故更之爲愚澗。【五】平衍、地が下く平か。【六】巒嶂、山の高い貌、張平子の西京賦に、託喬基於山阿、直墻竟以高房。巒は通じて竟に作る。【七】貴言贈、史記孔子世家に、適、周見、老子、辭去、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言、吾不能富貴、竊仁人之號、送子以言。王勃の滕王閣

閣見、老子、辭去、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言、吾不能富貴、竊仁人之號、送子以言。王勃の滕王閣

閣見、老子、辭去、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言、吾不能富貴、竊仁人之號、送子以言。王勃の滕王閣

序に、臨別贈言。【一】況高節。況は比況の意、史記魯仲連傳に、好持高節。【二】清冷。水の清き聲、陸士衡招隱の詩に、山澗何清冷。

【題義】昔、南北朝の時代、范柏年が南朝宋の明帝に見えたとき、帝は言、廣州の食泉に及び、卿の州にも亦此泉があるかと問はれた。柏年は答へていふ、梁州には、惟文川、武郷、廉泉、讓水あるのみと。帝曰く、卿の宅は何處、曰く臣の居る所は、廉讓の間と。食泉の二字は此詩を離れない。

【詩意】楚人は井水に乏しい、地氣が水を生じないからである。それで飲み水の湧き出るのは、まことに恵泉である。併し、泉が溢れて後には清めるもあり、濁れるもありて、さまざまに分れる。泉の源は、本情がないから、濁と激とを問はない。ただ食泉の名を得、愚泉の名を得ば、終に恥を雪ぐの日はないであらう。境遇の然らしめるに由る。泉の傍は、土地が低く平かである。泉の上は、山が高く登れない。すべて君子は居處を慎む。此事を忘れてはならない。古人は言贈を重んじ、別に臨むときも送る辭がある。必しも高節を言ふ譯ではないが、冬霜の爲に殊更に乾くことをしなない。夏日の烈しいをも別に畏れも悪みもしない。ただ水の清い聲して、進みて已まなければ、海遠きも、遂には之に放るであらう。

涑陽早發

涑陽早發

富貴本无定、世人自榮枯。

富貴本定るなし、世人自ら榮枯。

鸞鷲好名心、嗟我豈獨無。

鸞鷲名を好む心、嗟我豈獨無からんや。

不能便退縮、但使進少徐。

便ち退縮する能はず、但進む少しく徐ならしむ。

我行念西國、已分田園蕪。

我が行西國を念ふ、已に分とす田園の蕪するを。

南來竟何事、碌碌隨商車。

南來竟に何事ぞ、碌碌として商車に隨ふ。

自進苟無補、乃是懶且愚。

自ら進んで苟も補ひなければ、乃ち是れ懶にして且つ愚。

人生重意氣、出處夫豈徒。

人生意氣を重んず、出處夫れ豈徒ならんや。

永懷江陽叟、種藕春滿湖。

永く懷ふ江陽の叟を、藕を種ゑて春湖に滿つ。

【字解】【一】涑陽。今の鎮洋縣（湖北襄陽道に屬す）涑陽縣。利河は土人、涑口といひ、縣を祖る、北六十清里。【二】自榮枯。莊子の答賓般に、朝爲榮華、夕爲顛覆。【三】鸞鷲。かまびすしき意、莊子に、天下何其重鸞也。【四】田園蕪。陶潛歸去來辭に、田園將蕪、胡不歸。【五】商車。漢武帝紀、元光六年（皇紀五三二年、西曆紀元前一二九年）冬、初算商車。註にいふ、始稅商賈車船、令出塞。【六】江陽。眉州を指す、名勝志に、晉會賢、江陽郡於眉州。【七】藕。蓮の根、荷は芙蓉、其の根は藕、其の莖は荷、其の葉は蓮、其の實は蓮である。

【詩意】富貴は本定つたものでないから、人間には自ら榮枯がある。我にも亦多少功名の心はある。故に退縮しては居られない。ただ躁進を戒めて居る。我は遠遊を思ふから、我が田園の荒蕪に歸するは覺悟して居る。さて南に來ても何事もなし得ない。碌碌として商車に隨ふのみである。自ら進んで、苟も國に補ひがなければ、是れ懶惰で愚昧である。人生は意氣を重んずる、従つて出處も徒爾で

あつてはならない。永く故山の先輩を懐うて已まないが、今日此頃は、遠根を種ゑて、湖に満ちて居るであらう。

【餘論】此詩は、感懐を述べたもので、涇陽を言つたのではない。紀昀いふ、途中感懐適在涇陽、遂以涇陽命篇、不爲涇陽作也、故不及山川地理。と。樂城集涇陽早發の詩に、春氣入楚澤、原上草猶枯、北風吹栗林、梅蕊飄已無、我行亦何事、驅馬無疾徐、楚人信稀少、田畝任棲蕪、空有道路人、擾擾不留車、悲傷彼何類、歎息此亦愚、我今何爲爾、豈亦愚者徒、行行楚山曉、霜露滿陂湖。

夜行觀星

夜行星を觀る

天高夜氣嚴、列星森就位。

天高く夜氣嚴に、列星森として位に就く。

大星光相射、小星闇如沸。

大星は光相射る、小星は闇として沸くが如し。

天人不相干、嗟彼本何事。

天人は相干さず、嗟彼は本何事。

世俗強指摘、一一立名字。

世俗強ひて指摘し、一一名字を立つ。

南箕與北斗、乃是家人器。

南箕と北斗と、乃ち是れ家人の器。

天亦豈有之、無乃遂自謂。

天亦豈之あらんや、乃ち遂に自ら謂ふならんや。

追觀知何如、遠想偶有似。

追觀知る何如、遠想偶似たるあり。

茫茫不可曉、使我長歎喟。

茫茫として曉るべからず、我をして長く歎喟せしむ。

【字解】

【一】列星森就位。列星は列宿に同じ、宿は星宿の意。董仲舒の春秋繁露に、天不則則列星亂其行。【二】指摘。指、一に指に作る、列子黃帝篇に、無偏指指。【三】南箕與北斗。詩に維南有箕、不可簸揚、維北有斗、不可挹酒漿。【四】家人器。漢書禮林傳に、饋固曰、此人言耳。【五】自謂。箕斗の類、皆、形の似たるよりして之をいふ、星象の本に、此名があるのではない。【六】追觀。追は近の意。

【題義】

星を觀ての感想を述べたもの、晉書に、凡五星盈縮失位、其精降於地爲人、歲星降爲貴臣云云。人間の吉凶は、天象に隨ふものとして居るが、茫茫曉ることが出来ないといふにある。

【詩意】

天は澄みわたつて高く見え、夜氣も嚴に、列星は、其の位に就いて居る。大星は光が強く、小星は沸くやうである。天人はもと相干さないのを、世人が強ひて名字を付ける。詩に南箕といひ、北斗といふも、一家の私言であつて、星象の本義ではない。近く觀察せば果して如何、思ひ半に過ぐるであらう。ただ遠く想像して偶、類似のところを見るのみである。宇宙の事は茫茫として曉ることが出来ないから、我をして長歎せしめるのである。

漢水

漢水

捨棹忽逾月、沙塵困遠行。

棹を捨てて忽ち月を逾え、沙塵遠行を困しむ。

襄陽逢漢水、偶似蜀江清。

襄陽漢水に逢ふ、偶蜀江の清きに似たり。

古今體詩 夜行觀星 漢水

蜀江固浩蕩，中有蛟與鯨。

蜀江は固より浩蕩、中に蛟と鯨とあり。

漢水亦云廣，欲涉安敢輕。

漢水も亦廣といふ、涉らんと欲するも安んぞ敢て輕しく。

文王化南國，遊女儼如卿。

文王南國を化す、遊女儼として卿の如し。

洲中浣紗子，環珮鏘鏘鳴。

洲中の浣紗子、環珮鏘鏘として鳴る。

古風隨世變，寒水空泠泠。

古風は世に隨つて變じ、寒水は空しく泠泠。

過之不敢慢，佇立整冠纓。

之を過ぎて敢て慢せず、佇立して冠纓を整ふ。

【字解】 漢水、二源あり、出蒙昌秦州之饒安至四川、由重慶江津縣入江、此西漢水。出漢中府沔縣之饒安至漢陽府入江者、此東漢水。 襄陽、太平寰宇記に、山南東道襄陽本楚邑、漢漢帶其西、峴山在其南、爲楚之北津、建安十三年始置襄陽郡、以地在襄山之陽爲名。 遊女儼如卿、詩、周風周南に、南有喬木、不可休息、漢有遊女、不可求思。 村の時、淫風が天下に徧く、ただ江漢の域、先づ文王の教化を受けたのである。 浣紗子、荆州府夷陵州の西北に在る。 秋冬の月、水色淨麗、若浣紗然。 環珮鏘鏘、史記に、環珮玉聲璆然。 鏘鏘は金石の聲、詩に八聲鏘鏘。 佇立、久しく立つ、時、暴風に、瞻望不及、佇立以泣。

【題義】 東漢水は、漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽六府の境を貫流して江に入る大川である。源を陝西の饒安山に發し、初の名は漢水、東南して河水となり、沮水を受け、東流して襄水を受け、始て漢水となる。東南して白河を経、又、東して湖北に入り、潛水を受け、均水を受け、又、東南して、宜城・鍾祥・京山を経て、潛江に至る。東南漢陽より大江に入る。

【詩意】 舟を捨ててから月餘、長い行程は、絶えず沙塵に困められた。襄陽で漢水に逢うたが、蜀江の清きに似て居る。蜀江は固より浩蕩で、蛟鯨も潜む。漢水も一名廣といひ、廣廣として居る、輕輕しくは涉らない。昔、周の文王の教化が江漢の域に行はれて、淫風の世にも禮を犯すことを思はなかつたことは、周南漢廣の詩に歌はれて居る。遊女も儼として居り、洲中の浣紗子が儼びた玉も鏘鏘と音がする氣高い所がある。古風は世と變じ、寒水も今は空しく泠泠たるのみ、併し之を過ぎて敢て慢らない。たたずみて冠纓を整へた。

襄陽古樂府 三首

樂府は、前漢武帝の時、之を立て、文人を集めて詩賦歌謠を作らしめたのに始まる。哀帝の時に至つて罷んだが、後世、其の調に倣つて作る詩を樂府といふ。樂府は魏の頃より其の傳を失つた。文人の擬作するもの、多く題と左ふのは、但、聲調の譜を取つて、詞義の合ふのを必としなからである。紀昀いふ、樂府音節失傳、不過摹其字句。

野鷹來

野鷹來

野鷹來萬山下。

野鷹來る、萬山の下に。

荒山無食鷹苦飢。

荒山食なくして鷹飢に苦しむ。

古今體詩 襄陽古樂府三首・野鷹來

【字解】 野鷹來、河水の南に層巖あり、景升臺といふ。荆州の牧、劉表が襄陽を治めたとき築いたもの。景升は劉表の字である。表は

飛來爲爾繫綵絲。 飛び來らば爾の爲に綵絲を繋かん。

北原有兔老且白。 北原に兎あり老いて且つ白し。

年年養子秋食菽。 年年子を養つて秋は菽を食ふ。

我欲擊之不可得。 我之を撃たんと欲するも得べからず。

年深兔老鷹力弱。 年深く兎老いて鷹の力は弱し。

野鷹來。 野鷹來れ。

城東有臺高崔巍。 城東に臺あり高うして崔巍。

臺中公子著皮袖。 臺中の公子皮袖を著け。

東望萬里心悠哉。 東望萬里、心悠なるかな。

心悠哉鷹何在。 心悠なるかな、鷹何くにか在る。

嗟爾公子歸無勞。 嗟爾公子歸れ勞する無かれ。 ーらん。

使鷹可呼亦凡曹。 鷹をして呼ぶべからしめば亦凡曹なり。

天陰月黑狐夜嘯。 天陰り月黒く狐夜嘯ゆ。

蘇東坡詩集に、劉表臺在城東。又、東二十里有呼鷹臺。【一】崔巍、山高くしてけし、楚辭に、高山崔嵬兮。一本に、巍を巖に作る。

【一】心悠哉、思ふ心が長くして盡きない意。詩の周南に、悠哉悠哉、輿轉反側。【二】嗶、説文に咆也とある。猛獸がほえること。

【題義】劉表は呼鷹臺に登つて、野鷹來の曲を歌ふ。其の聲韻は魏の孟達が上堵吟に似ると言はれて居る。孟達は初、劉璋に事へたが、璋、達をして兵を將ゐて劉備を迎へしめたので、因て江陵に屯した。劉備は達を宜都の太守としたが、後、關羽を救はなかつたから、罪されることを懼れ、衆を率ゐて魏に降る。散騎常侍を拜し、新城の太守を領した。諸葛亮、魏を伐ち、達を誘はうとし、數書を以て招いたのを魏人に疑はれ、遂に反いてやがて敗滅した。

【詩意】昔、鄭交甫が江妃二女に遇つたといふ傳説のある萬山、其の萬山の下に、野の鷹がやつて來た。食物も得いで饑に苦しむ。鷹はいふ、飛び來つて結局、爾の爲に羈がれるのみである。又、北の原に兎がある、老いて白い。抱朴子の言によると、年を経た兎らしい。年年子を育て秋菽を食ふ。我は之を撃たうとしても撃てない。兎は老い鷹の力は弱い。城東臺あり東望萬里、鷹を呼ぶ、鷹は何處に居る。心悠なるかな。ああ臺中の公子、爾歸り去れ、もし鷹を呼び、呼んで來るやうでは凡羣である。天が陰り月も黒く、狐の咆える聲も聞えるから早く歸られよ。

上堵吟

臺上有客吟秋風。 臺上に客あり秋風に吟す、

悲聲蕭散飄入空。 悲聲蕭散飄つて空に入る。

古今體詩 蘇東坡詩集三首・上堵吟

【字解】【一】蕭散、ものまびしい意、司馬相如の上林子虛の賦に、蕭蕭蕭蕭不復與外事相聞。【二】

千里金城關雉子、漢書袁良傳に、金

鷹を好み、嘗て此臺に登つて野鷹來の曲を歌ふ。【一】萬山、襄陽城の西に在る。相傳ふ、鄭交甫所見楚女、居此山之下。昔、周の鄭交甫、嘗て楚に過き、漢皋に至る。江妃二女に遇ふ、二女佩珠を解いて之に與ふ。交甫受けて之を懷にし、行くこと數十歩、二女見えず、珠も亦隨つて失ふ。【二】綵絲、香書に、崔嵬、秦王娶、日、蘇容重、爪牙名若世豪、東夏冠軍之號、豈足以稱其心、且重猶鷹也、血則附人、他便高騰、遇風塵之會、必有凌雲之志、惟宜登其巔、極其峻、秦之存、王佐北海の王猛、太原の蘇峻と峻に王佐の才と稱せらる。【三】有兎老且白、瑞應圖に王者思加耆老則白兎見。葛洪抱朴子に見壽千歲、鬚五百歲一者、其毛色白。【四】城東有臺

臺邊遊女來竊聽

臺邊の遊女來つて竊に聽き、

欲學聲同意不同

學はんと欲して聲同じきも意同じか

君悲竟何事

君の悲は竟に何事ぞ、

千里金城兩稚子

千里の金城兩稚子

白馬爲塞鳳爲關

白馬を塞と爲し鳳を關と爲す、

山川無人空且閒

山川人無うして空しく且つ閒なり。

我悲亦何苦

我悲は亦何をか苦しむ、

河水冬更深

河水冬更に深く、

鱸魚冷難捕

鱸魚冷かにして捕へ難し。

悠悠江上聽歌人

悠悠たる江上歌を聽く人、

不知我意徒悲辛

我意を知らずして徒に悲辛す。

【題義】 塔陽縣に塔水あり、傍に白馬塞がある。孟達は新城の守となつて之に登り嘆じていふ、劉封や申耽は、金城千里に據つても之を失つたと、遂に上塔の吟をなしたが、其の音韻が哀切で、人心をして惻しめる。今に向ほ此の聲を傳へて居る。蜀の劉備は、孟達を遣はし房陵を攻めて之を下さし

め、劉封を遣はし沔水より達と會して上庸を攻めしむ。太守申耽が郡を擧げて降つたので、耽を上庸の太守となした。又、耽の弟儀も西城の太守となつて漢中の地を定めた。上庸、西城は、皆今の荊州の地である。章武元年（皇紀八八一年、西曆二二一年）孟達は、魏に降る。新城の太守となり、白馬塞に登つて歎じたのが上塔の吟である。魏は房陵、上庸、西城の三郡を以て新城となした。【詩意】 孟達は新城の太守となつて、白馬塞上秋風に吟じたが、其の悲しき音は、物寂しく空に響いた。塞邊の遊女が窃に之を學んだが、聲は同じでも、歌ふ所以は異なる。孟達の悲んだ所は、何事ぞ、それは、劉封や申耽は白馬山を城塞となし、鳳林を關門となして、金城千里に據つたが、遂に其の守を失つて、山川に人無うして空しく閒になつたからである。孟達は更に何をか苦しむ。江水は冬更に深く、鱸魚も冷かで捕へ難いからである。悠悠たる江上に歌を聽く人、我が真意を解しないで徒に悲辛して居る。

襄陽樂

襄陽樂

使君未來襄陽愁

使君未だ來らざりしとき襄陽愁ふ、

提戈入市襄陽裏

戈を提げて市に入り襄陽を裏む。

自從旣渡南渡沔

旣渡南沔を渡りしより、

襄陽無事春遊多

襄陽事なくして春遊多し。

古今體詩 襄陽古樂府三首・上塔吟・襄陽樂

【字解】 一、使君 天子の使者の尊稱なれど、漢の世、稱太守曰。府君、刺史曰使君。二、裏 旣委、匈奴の毛織服を著る、漢司馬遷の傳に、旣委之君長威震怖、裏は固難類、面には兵に作る。三、襄陽無事 云云 宋書の劉道產傳に、自領襄陽

城千里天府之國。孟達、新城の守となり、白馬塞に登り嘆じて曰く、劉封、申耽、金城千里に據りて、更に之を失ふと、遂に上塔吟をなす。一、白馬爲塞 元和郡縣志に、白馬塞山在竹山縣西南三十五里、荊州記、孟達登白馬山、即此。竹山は、襄陽府の均州に屬す。二、鳳爲關 襄陽記に、鳳林關在峴山衝州。三、古は之を動といふ。襄陽に産す。

襄陽春遊樂何許。襄陽の春遊は何れの許にか樂しむ、

峴山之陽漢江浦。峴山の陽漢江の浦。

使君朱旆來翻翻。使君の朱旆來りて翻翻、

人道使君似羊杜。人は道ふ使君は羊杜に似たりと。

道邊逢人間洛陽。道邊人に逢うて洛陽を問ふに、

中原苦戰春田荒。中原は戰に苦しんで春田荒ると。

北人聞道襄陽樂。北人襄陽の樂を道ふを聞かば、

目送征鴻應斷腸。征鴻を目送して應に斷腸すべし。

【題義】劉道産は、襄陽の太守となつて、善く職に臨み、政績が著はれ、蠻夷の前後に化を受けなかつたものも、皆、歸順し、百姓が業を樂しむ。此に由り襄陽樂歌がある。襄陽樂歌があるやうになつたのは、實に道産から始まつた。

【詩意】南史によると、劉道産は、初、無錫の令となり、後、雍州の刺史となり、襄陽の太守も兼ねるやうになつた。よく政績が著はれ、襄陽の民は其の業を樂しんだ。劉使君がまだ來られないときは、襄陽の民は生を安んぜなかつた。それは蠻夷の人が蠻服のまま、戈を提げ市に入つたからである。使君が來られて、蠻服のものは南して河水を渡る。それからは襄陽も至つて平和で、春遊が多い。其の

境、接、凶寇、威懷蠻。【三】朱旆、許渾の時に、朱旆翻翻鳴樹中。【四】羊杜、羊祐と杜預。皆、襄陽を鎮めて、德政があつた。晉書に、羊祐字叔子、泰山南城人。杜預字元凱、京兆杜陵人。【五】目送征鴻、晉書顧愷之傳に、愷之每重、勸康四言詩、因爲之圖、恆云、手揮五絃、目送歸鴻。【六】斷腸、甚しく心を痛める。魏文帝の時に、念君客遊、思斷腸。

春遊は、峴山の南、漢江の浦。使君の赤い旗も、翻つて居る。人はいふ、劉使君は昔の羊祐や杜預であると、羊祐も杜預も、此の襄陽を鎮めて德政があつた。翻つて都の洛陽の事を人に問ふと、今は戰場に苦しんで、春田も荒廢したといふことである。もし我が襄陽樂の歌を聞いたなら、定めし征く厭を目送して、腸を斷つる念があるであらう。

峴山

峴山

遠客來自南游塵昏峴首。

遠客南より來り、游塵峴首に昏し。

過關無百步曠蕩吞楚藪。

關を過ぐれば百歩なし、曠蕩として楚藪を吞む。

登高忽惆悵千載意有偶。

高に登り忽ち惆悵、千載意偶するあり。

所憂誰復知嗟我生苦後。

憂ふる所誰か復知らん、嗟我生きて後を苦しむ。

團團山上檜歲歲閱榆柳。

團團たる山上の檜、歳歳榆柳を閱す。

大才固已殊安得同永久。

大才固より已に殊なり、安んぞ同じく永久なるを得む。

可憐山前客倏忽星過雷。

憐むべし山前の客、倏忽として星は雷を過ぐ。

賢愚未及分來者當自剖。

賢愚未だ分つに及ばず、來者當に自ら剖るべし。

【字解】【一】峴山、襄陽府城の南に在る。襄陽記に、紫蓋山、萬山、峴山、謂之三峴。【二】峴首、宋の時に、紫蓋山を改め

て中観となし、観山を以て観首とした。【一】楚靈、楚國の靈の意、東坡の遊、武昌寒溪西山寺、詩にも、離障見、吳宮、莽莽靈靈。【二】惆悵、かなしみうらむ、楚辭の九辨に、惆悵而自悲。【三】觀山、山上、名勝志に、晉柏在觀山下、相傳羊叔子手植、有碑題曰晉柏、觀山、晉皇之が靈池廟の碑に、桂樹園觀兮白石齋齋。【四】悠悠、疾速にして捕捉すべからざる形容。【五】星過、詩に三星在、觀、註にいふ、如、心星之光耀見、於魚笏之中、其去須臾不可、久也と。

【題義】晉書羊祜の傳に、祜樂山水、每風景必造、觀上、嘗慨然歎息、願謂從事中郎鄒湛等曰、自有宇宙、便有此山、由來賢達勝士登此遠望、如我與卿者多矣、皆湮滅無聞、使三人悲傷、如百歲後有知、魂魄猶應登此也、湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳、至若湛輩、乃當如公言耳、及祜卒、襄陽百姓、於觀山祜平生遊息之所、建碑立廟、歲時饗祭焉、望其碑者、莫不流涕、とある。観山碑を墮淚碑といふのは、此の故事による。

【詩意】遠く南から來て見ると、観山は遊歴に蔽はれて彷彿、關を過ぎると、百歩もない。ひろびろと楚國の淵藪を呑んで居る。山の高きを窺めて遠くを望むと、忽ち惆悵する、千里眺望の感は、昔も今も此の後も異ならないであらう。我が心の中に憂へる所は、人は知らない。我は後を憂へる。皆人は團圓たる山上の槍を眺め、年年榆柳の青青たるを閲するであらうが、我が憂とする所は憂へない。人已に才が異なる、同じく永久なることが出来ない。憐むべし山前の客、登臨の快も、よく幾時ぞ、忽ち日月は過ぎて行く、心星の光が一寸魚梁の中に見はれたやうなもので、瞬く間に消えて行く。賢も不肖も今は別はないが、他日自ら分れることであらう。賢愚の句は、暗に羊祜傳中の鄒湛等と観山に登つて慨歎した語を用ひて居る。

【餘論】紀昀は此詩の結二句を評して、十字深警といつた。

萬山

萬山

西行度連山北出臨漢水。

西行して連山を度り、北出して漢水に臨む。

漢水盛成潭旋轉山之趾。

漢水は盛りて潭を成し、山の趾に旋轉す。

禪房久已壞古甃含清泚。

禪房は久しく已に壞れ、古甃清泚を含む。

下有仲宣欄綆刻深容指。

下に仲宣の欄あり、綆刻は深くして指を容る。

回頭望西北隱隱龜背起。

頭を回して西北を望めば、隱隱として龜背起る。

傳云古隆中萬樹桑柘美。

傳へいふ古の隆中と、萬樹桑柘美なり。

月炯轉山曲山上見洲尾。

月炯かにして山曲に轉す、山上洲尾を見る。

綠水帶平沙盤盤如抱珥。

綠水平沙を帯び、盤盤として抱珥の如し。

山川近且秀不到嬾成恥。

山川長くして且つ秀づ、到らざれば嬾くして恥を成す。

問之安能詳畫地費簪筆。

之を問ふも安んぞ能く詳かにせん、地に畫して簪筆を費す。

【字解】一、萬山、湖北荊州府の西北に在ること、前にも述べた。元和郡縣志に、萬山一名漢卓山、在襄陽縣西十一里。太平寰宇記に、萬山北隔漢水。二、潭、淵をいふ、孟浩然が萬山潭の時自註にいふ、沈碑潭と。三、旋、轉山之趾、易林に、行於山趾。

【古壁】古い敷き瓦。陳陶の詩に、蛟龍窟古壁。【仲宣】 魏は并備。襄陽志に、萬山東有王仲宣井、即仲宣井。杜子美の詩に、唐同王宅宅、曾非觀山前。【隱隱】 隱隱は微にして明かでない貌。王昌齡が詩に、青山隱隱孤舟渡。説文に、地似龜背。【中】 輿地志に、隆中山在襄陽府城北下、即諸葛亮隱居、有三顯門。【盤盤】 曲折する貌。李白の蜀道難、青泥何盤盤。【抱耳】 日傍の氣、漢書天文志の註に、凡氣在傍直對爲耳。在傍如牛頭、向日爲抱。【實地】 實地、實地、後漢馬援傳に、於帝前、乘舟爲山谷、指畫形勢、蜀志許都傳に、指畫實地、舉手可采。晉書に、かんざしと釋。晉は連冠於樊、騎は馬策。【題義】 萬山は一名、漢單山、鄭交甫が玉女に見えた處であることは、前にも述べた通りである。此の詩は、東坡、萬山に遊んで賦したのでない、弟の話を聞いて作つたのである。東坡の自註に、時獨不游、問轍而作とある。

【詩意】 西に行いて連山を踰え、北に出て漢水に至つた。此の邊の漢水は淵をなして山の麓を旋つて居る。山の寺は荒れ果てて、古い敷き瓦のみが清い色を帯びて居る。寺の下に、名高い王仲宣の井欄がある。井戸繩が深く食ひ込んで指が容る。西北に龜の背のやうな處が諸葛孔明の寓居した隆中である。潭山の桑が美しく茂つて居る。月は明に山の曲に移る。山上から洲の端が見られる。緑の水が白い沙を帯び、曲折してまはり廻る。日の傍の氣のやうに見える。かかる秀山長川、行いて見ないのは懶けものといふ恥を招く。其の地を踏まなければ其の情を盡くすことが出来ない。地に轡や鞭を盡して、徒に説明の勞を費させるのみである。

隆中

隆中

諸葛來西國、千年愛未衰。

諸葛西國に來る、千年愛未だ衰へず。

今朝游故里、蜀客不勝悲。

今朝故里に遊ぶ、蜀客は悲に勝へず。

誰言襄陽野、生此萬乘師。

誰か言ふ襄陽の野に、此の萬乘の師を生ずと。

山中有遺貌、矯矯龍之姿。

山中に遺貌あり、矯矯たる龍の姿。

龍蟠山水秀、龍去淵潭移。

龍蟠れば山水秀で、龍去れば淵潭移る。

空餘蜿蜒蹟、使我寒涕垂。

空しく餘す蜿蜒の蹟、我をして寒涕を垂れしむ。

【字解】 【中】 隆中、漢晉春秋に、諸葛亮家於南陽之郡縣、在襄陽城西二十里、號曰隆中。太平寰宇記に、襄陽縣有諸葛宅、三顧草廬は即ち此宅。一説にいふ、孔明躬耕南陽、乃襄陽之南陽城、非今之南陽郡也と。【生】 此萬乘師、揚雄の解嘲に、孟軻雖連蹇、猶爲萬乘師。【矯矯】 介子推の傳に、有龍矯矯。矯矯は壯なる貌。【蜿蜒】 龍蛇などのうねり行く貌、蛇行蜿蜒、不、跡の上版。

【題義】 隆中に諸葛の故宅がある。荆州記に、宅西有山臨水、孔明嘗登之、鼓琴爲梁父吟、因名此山爲梁山とある。

【詩意】 諸葛孔明は、躬耕畝に耕し、好んで梁父の吟をなす。時に劉備は新野(今の新野縣、河南汝陽道に屬す)に屯したが、徐庶は劉備に見えて曰く、諸葛孔明者、臥龍也、將軍豈願見之乎、と。又曰く、此人可就見、不可屈致と。孔明は劉備の三顧に逢ひて、南陽の草廬を出たのである。爾來、孔明は、景仰の人となつて、愛が未だ衰へない。今朝余は其の故里に遊んで、古を憶うて感慨に

堪へない。襄陽の此の田舎に、帝王の師を出さうとは思はなかつた。山中にある孔明の遺貌は、嬌嬌たる龍姿、龍あれば山水秀で、龍去れば淵も移る。龍蜿蜒の遺蹟を訪うて、涕涙を禁することが出来ない。

【餘論】紀昀は此詩を評して起四句全入律、意亦猶人而寫來脫酒、と。

竹葉酒

楚人汲漢水。釀酒古宜城。

楚人漢水を汲み、酒を釀す古宜城。

春風吹酒熟。猶似漢江清。

春風酒を吹いて熟し、猶ほ漢江の清きに似たり。

者舊人何在。邱墳應已平。

昔舊人何にか在る、邱墳應に已に平なるべし。

惟餘竹葉在。留此千古情。

惟餘して竹葉在り、此の千古の情を留む。

竹葉酒

【字解】竹葉、酒の異名、尺牘雙魚の註に、釀酒、竹葉を以て其の中に雜ふ、極めて清醇なり、故に酒を謂つて竹葉となす。酒器に、蒼梧之地、釀酒以竹葉、雜於中、故謂之。【一】宜城、楚の鄖陽、太平寰宇記に、宜城、襄陽屬縣、在府南九十五里。宜城、名勝志に、宜城有金沙泉、在縣東二里、其泉造酒甘美、世稱宜城釀、又名竹葉春。【二】春風吹酒熟、魏文帝の詩に、宜城釀酒今朝熟。【三】者舊、襄陽に昔舊傳あり。【四】邱墳、江淹の恨賦に、琴瑟滅兮邱壟平。【五】竹葉在、杜子美の詩に、三杯竹葉酒、張華の勸學篇に、蒼梧竹葉清、宜城九醞。

【題義】昭明太子の將酒篇に、洛陽輕薄子、長安游俠兒、宜城橙栗椀、中山浮羽卮、とある。宜城は、

本楚の鄖都、天寶元年、宜城縣に改めた。故城は今の縣南に在る。其の地から美酒を出し、俗に其の宜城美酒を竹葉春と名ける。古詩にも、竹葉清香好、何妨飲數杯、とある。

【詩意】襄陽に美酒がある。漢水を用ひて宜城で釀したものであるから、世に宜城釀といふ。竹葉の中に雜へて、漢江の清きに似て居る所から竹葉春といふ。さて此の襄陽の地には、多くの古老があつて昔舊傳に載つて居る。而も其の人人は今、何處にある。墳土も已に平かとなつたであらう。惟竹葉の在るありて、千古風流の情を留めて居る。

【餘論】紀昀は此詩を頗有風調、然是空腔、若以此種爲起妙、則終身在窠臼中、と評して居る。窠臼は鳥の栖、穴中に在るを窠といひ、樹上にあるを巢といふ。栖が臼の形に似たるより窠臼といふ。在窠臼中は現成格式に囚はれた意である。故に蹈常襲故を落窠臼といふ。

鱸魚

曉日照江水。遊魚似玉瓶。

曉日江水を照し、遊魚玉瓶に似たり。

誰言解縮項。

誰か言ふ解く項を縮むと。

貪餌縮項每遭烹。

餌を貪りて項を縮め毎に烹らるるに遭ふ。

杜老當年意。臨流憶孟生。

杜老當年の意、流に臨みて孟生を憶ふ。

鱸魚

吾今又悲子輟筋涕縱橫。

吾今又子を悲しみ、筋を輟めて涕縱横。

【字解】【一】 古は助といふ、體廣くして扇、頭も尾も皆、尖小、脚は細い。淡水に産する。郊居賦に、赤鯉青魴、細鱗縮項と見ゆ。【二】 縮項、宋の裴敬見、刺史となり、六指船を作り、齊の高帝に獻じて曰く、本は縮項縮項縮項一千八百頭と。一本には食餌縮項の縮項の二字無し。勝れりと爲す。【三】 杜老當年云云 杜子美の詩に、復憶襄陽孟浩然、清詩句句盡堪傳、感今耆舊無新語、漫約樓頭縮項鱸。孟浩然の詩に、島泊隨陽雁、魚藏縮項鱸。筋は箸、竹筍、七筋の筋。

【題義】 襄陽志に、漢江出縮項魚、土人以槎斷水、鱸多依槎、因號槎頭鱸とある。孟浩然の詩に、試垂三竹竿、釣果得查頭鱸、鱸魚を詠じて點綴の警切なるを覺ゆ。

【詩意】 朝日が水を照して、遊魚がありありと數へられる。鱸魚を縮項鱸と人は言ふが、項を縮めな

いで、餌を食ひ、果ては煮て食はれる。昔、晉の翟莊は、弋釣を事としたが、長するに及び、獵の方は廢めた。其の譯を聞くと、獵は我よりし、釣は物よりして、未だ頓かに盡さない。故に先づ其の甚

だしいものを節するのである。且つ餌を食つたり、釣を呑んだりするのは我でないと言つた。翟莊は、晩年亦、釣をも棄てた。又、杜子美は、詩友孟浩然を憶うて已まなかつたが、吾は今、又、汝鱸魚を

悲しみて、之を食ふに忍びない。筋を輟めて涕を流した。

食雉

雉を食ふ

雄雉曳修尾、鷲飛向日斜。

雄雉修尾を曳き、鷲飛日に向つて斜なり。

空中紛格鬪、綵羽落如花。

空中紛として格鬪し、綵羽落つること花の如し。

喧呼勇不顧、投網誰復嗟。

喧呼勇みて顧みず、網に投じて誰か復嗟かん。

百錢得一雙、新味時所佳。

百錢一雙を得、新味時に佳とする所。

烹煎雜鷄鶩、爪距漫槎牙。

烹煎して雜鷄を雜ふ、爪距漫に槎牙。

誰知化為蜃、海上落飛鷄。

誰か知らん化して蜃となるを、海上に飛鷄落つ。

【字解】【一】 修尾、長い尾、鶴會の孔雀賦に、曳修尾之翹翹。翹翹は長い翹。【二】 紛格鬪、聚華の禽細に、雉介鳥也、善搏鬪。易林に、眇鳥無形、與之搏鬪。【三】 投網、時に雉鷄三子羅。【四】 烹煎、烹煎といふに同じ、鮑游の詩に、自携茶甌就烹煎。【五】 雜鷄、左傳襄公二十八年に、公語曰、羹、羹人鷄更之、以鷄。【六】 化為蜃、月令に孟冬雉入大水爲蜃。鄭註にいふ、大水、淮也と。按神記に、千歲之雉入海爲蜃。【七】 海上落飛鷄、埤雅に、蜃形如蛇而大、嘘氣成樓臺、初在烟霧中、高鳥倦飛就之、以息氣、輒吸之而下、俗謂之蜃樓。

【題義】 雉に數種ある、青質五色なるを鷄雉といひ、長尾にして走つて鳴くを鷄雉といひ、黄色にして自ら呼ぶを鳴雉といひ、山雞にして小冠なるを鷄雉といひ、五色が備つて章を成すを翠といふ。此の詩の雉は鷄雉である。長尾にして善く走り、其の肉は甚だ美しい。

【詩意】 雉の健なるものは鷄で尾の長さは六尺と、昔の書物に載つて居るが、其の鷄雉は、鷄より飛んで空中で格鬪を始める。羽が落ちても顧みない。果ては網に羅つて煮て食はる。千年の雉、海に入つて蜃となるといふ傳説があるが、其の蜃は、また能く氣を吐いて樓臺を爲す。海中に、春夏の間、依

約として鳥激常に此氣がある。そして高鳥が飛び倦んで之に就くと、忽ち吸はれてしまふといふ傳説もある。

穎大夫廟

穎大夫の廟

人情難強回。天性可微感。

人情は強ひて回し難し、天性は微感すべし。

世人爭曲直。苦語費搖撼。

世人曲直を争ひ、苦語搖撼に費す。

大夫言何柔。暴主意自慘。

大夫言何ぞ柔かなる、暴主意自ら慘む。

荒祠傍孤冢。古隧有殘坎。

荒祠は孤冢に傍ひ、古隧に殘坎あり。

千年惟茅蕉。世亦貴其膽。

千年惟茅蕉、世亦其の膽を貴ぶも、

不解此微言。脱衣徒勇敢。

此の微言を解せずして、衣を脱して徒に勇敢。

【字解】(一)穎大夫 東坡の自註に、穎考叔也、廟在汝州穎橋。汝州は今の臨汝縣。太平寰宇記に、穎大夫廟在許州許昌縣。隋大業九年、重建汝州云云。(二)苦語 苦言に同じ、劉孝標文に、苦言頓首。(三)搖撼 うごかす、宋史に、多起邪說以搖撼在位。(四)古隧 江總の詩に、缺碑橫古隧。(五)殘坎 坎は溝穴。(六)茅蕉 秦の始皇帝は太后を毒に逼し、命を下して曰く、敢陳者死と。陳めて死するもの二十七人、齊の客茅蕉衣を解いて井幹の上に立つて陳む。始皇之を釋して迎へて太后を歸し、母子たること初の如し。(七)微言 微言を用ひて、微しく意に中てる、列子說符に、人可與微言乎。

【題義】昔、穎考叔といふは、穎谷といふ土地の代官であつたが、鄭の莊公の悔心あるを聞いて、はるばる都に上つて諷諫し、公の心を感化した。左傳隱公元年に、鄭莊公寘姜氏於城穎而誓之曰、不及黃泉無相見也、既而悔之、穎考叔爲穎谷封人、聞之有獻於公、公賜之食、食舍肉、公問之、對曰、小人有母、皆嘗小人之食、夫、未嘗君之羹、請以遺之、公曰爾有母遺、緊我獨無、因語之故、且告之悔、對曰、君何患焉、若闕地及泉、隧而相見、其誰曰不然、公從之、遂爲母子如初、とある。

【詩意】人は感情に支配される。感情の盛んであるときは、強ひて回すことは出来ない。微言すれば、諫が入る。世の人は諫めると言へば、言葉を厲しく、曲直を争ふ。穎考叔の莊公を諫める言は、如何にも柔和しい。流石の莊公も自ら悔みて、孝心を起した。其の穎考叔の墓も今は荒れ果て、莊公母子の誓を立てたといふ古い隧道も、今は殘坎のみ。秦の始皇を直諫して、衣を解いて井幹の上に立つたといふ茅蕉の事は、千年の久しき今日でも人に貴はれて居るが、茅蕉は此の微言といふことを解しないで、徒に勇敢であつた。

【餘論】紀昀は此詩を評して、純用諫臣從諷之意、而語特明透、と言つて居る。

新渠詩 并敘

新渠の詩 并に敘

庚子正月、予過唐州。太守趙侯始復三陂。疏召渠、招懷遠人。散耕於唐。予方爲旅人、不得親執壺漿、簞食以與。侯勸逆四方來者、獨爲新渠詩。

五章以告於道路致侯之意其詞曰

【調讀】庚子正月、予唐州を過ぐ、太守趙侯始て三陂を復し、召渠を疏し、遠人を招懐して唐に散耕せしむ。予方に旅人となり、親ら壺漿箠食を執りて以て侯と四方の來者を勸進することを得ず、獨、新渠詩五章を爲りて以て道路に告げ、侯の意を致す。其の詞に曰く、

【字解】【一】庚子、宋、仁宗の嘉祐五年（皇紀一七二〇年、西曆一〇六〇年）。【二】唐州、十道志に、唐州淮安郡、秦爲南陽郡と見ゆ。秦、唐侯之國、唐置唐州、明降爲縣、明清、皆屬河南南陽府、民國改爲北源縣。太平寰宇記に、武德五年、分置唐州。【三】太守趙侯、宋の趙尙寬、字は濟之、安仁の子。仁宗の時、知唐州。唐州は沃壤であつたが、五代の亂で、土曠民稀。尙寬は圖記を按視し、漢の召信臣が陂渠の故迹を得、三陂一渠を疏し、田に溉ぐ萬餘頃。【四】三陂、水經註に、東荆州有馬仁陂、南陽陂、唐子陂。【五】召渠、召信臣の渠、輿地記に、漢召信臣爲南陽守、興水利、鑿宿豫耕、民呼爲召父有召渠、在今唐縣界內。【六】壺漿箠食、孟子、陳惠王簡子、尊食漿、以迎王師。食は飯、漿は飯を入れる竹製の器。漿は米汁で作つた飲料、壺は瓶。

新渠之水其來舒舒
溢流於野至於通衢
渠成如神民始不知
問誰爲之邦君趙侯
新渠之田在渠左右

新渠の水、其の來る舒舒。
流れて野に溢れ、通衢に至る。
渠成る神の如く、民始め知らず。
問ふ誰か之を爲る、邦君趙侯。
新渠の田、渠の左右に在り。

渠來奕奕如赴如湊
如雲斯積如屋斯溜
嗟唐之人始識秬稌
新渠之民自淮及潭
挈其婦姑或走而顛
王命趙侯宥我新民
無與王事以訖七年
侯謂新民爾既來止
其歸爾邑告爾鄰里
良田千萬爾擇爾取
爾耕爾食遂爲爾有
築室於唐孔碩且堅
生爲唐民飽粥與饘
死葬於唐祭有鷄豚

渠來る奕奕、赴くが如く湊ぐが如く、
雲の如く斯れ積み、屋の如く斯れ溜る。
嗟唐の人、始て秬稌を識る。
新渠の民、淮より潭に及ぶ。
其の婦姑を挈へ、或は走りて顛へる。
王、趙侯に命じて、我新民を宥けて、
王事に與るなからしめ、以て七年を訖る。
侯新民に謂ふ、爾既に來り止まる。
其れ爾の邑に歸り、爾の鄰里に告げよ。
良田千萬、爾擇び爾取れ、
爾耕し爾食へ、遂に爾の有となる。
室を唐に築く、孔碩に且つ堅し。
生きて唐の民と爲り、粥と饘とに飽く。
死して唐に葬られ、祭るに雞豚あり。

天子有命我惟爾安。天子命あり、我爾の安きを惟ふ。

【字解】(一) 舒舒、ゆるやかな貌、韓退之の詩に、淮之水舒舒。(二) 通衢、四方に通ずるちまた、漢書東方朔傳に、婚之於四通之衝。(三) 奕奕、盛なる貌、詩の魯頌に新廟奕奕、詩の大雅に奕奕嶽山。(四) 抗抗、抗は硬、強はもちこめ。同じく東坡の詩に、但願飽抗抗、年年樂秋成。(五) 潭州、元和郡縣志に、江南道有潭州。(六) 乾七年、趙尙寬は、仁宗の至和元年(皇和)一七二四年、西曆一〇五四年)を以て、唐州に知となり、嘉祐五年に至る、故に詩に七年といふ。乾はなほ、卒と同じ。(七) 孔、古文では甚に同じ、詩に、兄弟孔懷。後世は韻文でなければ用ひない。(八) 勞與、左傳昭公七年の註に、飽餐、飽屬。禮弓の疏に厚曰飽、希曰勞。

【題義】趙尙寬が唐州の知事となるや、圖記を按視して召信臣が故迹を得、卒を發して三大陂と一大渠とを復し、田に溉ぐこと萬餘頃。又、民をして自ら支渠を爲り、轉相浸灌せしむ。四方の民が雲集すると、尙寬は復、請うて荒田を民の口數に應じて授け、民に官錢を貸して耕牛を買はしむ。三年に及ぶ頃、廢田が盡く膏腴となつた。其の結果、獨、流民が自ら歸するばかりでなく、淮湖の民、至るもの萬餘戸といふことである。此詩は之を詠じたもので、一章と二章とは唐の民に告げるもの。三章と四章とは、流民に告げるもの、そして第五章は全章を總結して居る。

【詩意】(第一章は)新渠の水は、ゆるやかに流れ來つて、四方に通じ、灌溉の用をする。これ誰の力、邦君趙司寬の力である。(第二章は)新に渠が出来て、水が赴くが如く澆ぐが如くに來る。お蔭で、唐の人は稷や糯の味を知る。(第三章は)潭州より潭州に至る多くの民が七年の久しき趙侯の善政を慕つたことを言ふ。(第四章は)自作自給を勧め、流民となるを免れしむ。(第五章は)子來の民は唐州に

家を造る、大きくて堅い。生きて唐州の民となり、死して唐州に葬らる。(それは王様の餘澤である)ことを言ひて全章を總結したのである。

雙鳧觀

雙鳧觀

王喬古仙子。時出觀人寰。王喬は古の仙子、時に出でて人寰を觀る。

常爲漢郎吏。厭世去無還。常て漢の郎吏となり、世を厭ひて去つて還るなし。

雙鳧偶爲戲。聊以驚世頑。雙鳧偶戲をなすは、聊か以て世頑を驚かす。

不然神仙迹。羅網安能攀。然らずんば神仙の迹、網に羅つて安んぞ能く攀せん。

紛紛塵埃中。銅印紆青綸。紛紛たる塵埃の中、銅印は青綸を紆ふ。

安知無隱者。竊笑彼愚奸。安んぞ知らん隱るるなきもの、竊に彼の愚奸を笑ふことを。

【字解】(一) 雙鳧、東坡自註にいふ、在葉縣と。元和郡縣志に、汝州葉縣、後漢書謂之小長安、開元三年、於縣置仙州、以漢時王喬於此得仙也。(二) 王喬、後漢王喬傳に、顯宗世爲葉令。(三) 人寰、人の世、葉は界、白居易の長恨歌に、問下窺人寰處。(四) 爲漢郎吏、王喬は顯宗の世、尙書郎となり、出でて葉令となる。(五) 銅印紆青綸、論は青綸の綬、前漢書百官公卿表に、凡吏秩比六百尺以上、皆銅印墨綬。(六) 竊笑、戰國策に、臣竊笑之。

【題義】後漢の王喬は、葉令となつたが、神仙の術がある。漢の法に、畿内の長史は、節朝に朝することになつて居る。喬は毎月朔旦に、常に縣から來朝する。帝は其の來ることが數りで、車騎を見ざ

るを怪しみ、密に太史をして之を伺はしめた所、將に至らんとするとき、雙鬼が南から来る。是に於て鬼の至るを候ひ、羅を擧げて之を張つて、但、二つの鼻を得た。それは嘗て賜うた所の尙書履であつたといふことである。此詩は此の故事に就いて詠じたものである。

【詩意】古仙人王喬は、天上にあるべきを、時に人界に出で、尙書郎となり、葉縣の令となる。仙人は人界を厭うたから、去つて還らない筈であるのに、雙鬼となつて朔旦に朝するのは、如何なる譯か、それは世の分別のない頑なものを警醒する爲めであらう。なせといふに、既に神仙の術を得たものが、網に罹つて飛行の出来なといふ道理はないからである。もし又、紛紛たる塵埃の此の中に下つて、銅印を帯び、青絲綬をまとへることに心のあるならば、安んぞ知らん、隠れない人間界のものは、心切に彼の愚であり蠢であることを笑ふであらう。

許州西湖

許州の西湖

西湖小雨晴 澹澹春渠長

西湖小雨晴れ、澹澹として春渠長し。

來從古城角 夜半轉新響

來る古城の角よりし、夜半新響を轉す。

使君欲春游 浚沼役千掌

使君春游を欲し、沼を浚うて千掌を役す。

紛紛具春鏞 鬧若蟻運壤

紛紛として春鏞を具へ、鬧すること蟻の壤を運ぶが若し。

天桃弄春色 生意寒猶快

天桃春色を弄す、生意寒うして猶は快む。

惟有落殘梅 標格苦矜爽

惟落殘の梅あり、標格苦だ矜爽。

游人笠已集 挈榼三且兩

游人笠として已に集る、挈榼三且つ兩。

醉客臥道旁 扶起尙偃仰

醉客道旁に臥す、扶け起すも尙は偃仰。

池臺信宏麗 貴與民同賞

池臺信に宏麗、貴きは民と同じく賞す。

但恐城市歡 不知田野愴

但恐る城市歡びて、田野の愴むを知らざるを。

潁川七不登 野氣長蒼莽

潁川は七たび登らず、野氣長へに蒼莽。

誰知萬里客 湖上獨長想

誰か知らん萬里の客、湖上獨長く想ふ。

【字解】(一) 許州、春秋時代の許國、漢の潁陰縣、清の時に河南省に屬し、民國となつて許昌縣と改めた。一誌志に、河南西湖、一在許州、一在潁陰。(二) 澹澹、水波のたゞよひ動く貌、何遜の詩に、杳杳與沙靜、澹澹逐波輕。(三) 春渠、劉孝綽の詩に、

樓殿臨春渠。(四) 使君欲春游、使君は刺史をいふ、前に出づ。宋の宮公、此州の太守となつたとき、黃河を起して此の西湖に導き、村夫が之を浚治すと傳ふ。(五) 春鏞、土を運ぶもつこ、土を擲る鏞。晉の東晉が廣農議に、雲雨生於春鏞。蟻運壤、管子に、

蟻運日、蟻運寸而有水云云。(六) 天桃、詩の周南桃夭篇に、桃之夭夭、灼灼其華。(七) 快、廣韻に、快、愜也と見ゆ。情が満足しないこと、漢書簡望之の傳に、奉其快快心。(八) 標格、高い品格、杜甫の詩に、早年見標格。(九) 笠已集、笠は集る意、唐書の儒學傳に、笠集京師。(一〇) 翠榼、榼は酒器、劉伶の酒德頌に、止則操卮執觶、動則挈榼提壺、惟酒是務、焉知其餘。

(一一) 宏麗、鮑照の清河頌序に、宮宇宏麗。(一二) 不登、登は成なり、漢書文帝紀に、詔曰、歲一不登、民有飢色。(一三) 蒼莽、郊外の野色あをあとしたるをいふ、莊子逍遙遊に、適莽蒼者、三變而反、觀猶果然。

【題義】詩曲の西湖は、其の始は唐の曲環が鎮を作した時、土を取つて城を築き、水を導きて灌へたものである。宋の苧公が太守となつて、黃河を起し、村夫をして之を浚治せしめ大きくなつたものだから、整開魚鳥忘情地、展盡江湖極目天といふ詩が、其の時の光景である。此詩の結びの處は、杜甫の觀打魚の詩から化し來つたもので、忽歸莊論二妙、非迂詞と古人も評して居る。

【詩意】許州の西湖の眺は格別で、小雨が晴れると、古城の一角から濼濼として波を逐うて渠水が流れ、夜半に新響を傳へる。太守苧公は風流を好み、春遊のために、村夫千人をして沼を浚はした。土を運ぶ杵や、土を掘る鋤が縦横して、恰も蟻の壤を運ぶ聞ぎであつた。桃李の春が來たが、生意は寒氣の爲に十分ではなかつた。ただ落残りの梅が、氣高い姿を呈して居る。それで春を探る遊人は盆として聚る。一瓢の春酒兩三人、時に醉客の道の傍に臥すを見る。扶け起しても、起きたり倒れたりする。池臺の建築は廣くて美しい。太守の民と賞翫を同じうする所は、欣ばしいが、ただ恐れることは城中の人だけが歡樂を得て、田野の惰める實情を知らないことである。事實、颯川は七年の不作である。野氣は蒼莽である。誰か知らん萬里の客、湖上に立ちて感懐に堪へないことを。

阮籍嘯臺

阮籍の嘯臺

阮生古狂達、遁世默無言。
猶餘胸中氣、長嘯獨軒軒。

阮生は古の狂達、世を遁れ默して言なし。
猶は餘す胸中の氣、長嘯獨軒軒。

高情遺萬物、不與世俗論。

高情萬物を遺れ、世俗の論に與らず。

登臨偶自寫、激越蕩乾坤。

登臨偶自ら寫し、激越乾坤を蕩かす。

醒爲嘯所發、飲爲醉所昏。

醒むれば嘯の發する所となり、飲めば醉の昏する所となる。

誰能與之較、亂世足自存。

誰か能く之と較せん、亂世自ら存するに足る。

【字解】【一】嘯臺、太平寰宇記に、阮籍臺在尉氏縣東南二十步。尉氏縣は、春秋時代の鄭邑、今は河南開封道に屬す。【二】狂、世説に、箕子、古之達狂。【三】猶餘胸中氣、阮籍は濟世の志があつたが、魏晉の際、天下多事で、名士の全きを得るものが少いのを見、世事に與らず酣飲を常とした。【四】軒軒、舞ふ貌、淮南子に、見一士軒軒然方迎風而舞。【五】高情、謝靈運の詩に、高情閑天賞。【六】激越、音聲がはげしく、清くあがる、班固の西都賦に、聲激越、管風天。

【題義】陳留の阮籍は、所謂竹林七賢の一人で、酒を嗜み、能く嘯いて琴を弾くことが上手であつた。嘗て蘇門山で、孫登に遇ひ、與に精神導氣の術を商つたが、孫登は應へなかつた。籍は長嘯して退いて半嶺に至ると、不思議や、谷間に鸞鳳の音響がする。孫登の嘯いて居るのであつたといふ話がある。陳留に阮公の嘯臺があり。此詩は、阮籍の此臺に登つて、長嘯し、酣醉したことを詠じたのである。

【詩意】阮籍字は嗣宗、古の達觀した狂生である。世を遁れて、物を言はないが、併し全く世を顧みないのではない。胸中の氣は、依然として存し、世を濟ふの志が見える。其の長嘯軒軒、高情萬物を遺れるのは、時事が日に非であるから、禍を避けるが爲めであらう。嘯臺に登つて發する激越の

音は、天地を動かすべく、醒めては長嘯し、酔ひては昏昏として眠むる。これが亂世に在つて自ら存する所以である。

大雪獨留尉氏有客入驛呼與飲至醉詰旦客南去竟不知其誰

大雪、獨尉氏に留る、客あり驛に入る、呼んで與に飲み、醉に至る、詰旦、客南に去る、竟に其の誰なるかを知らず

古驛無人雪滿庭

古驛人無くして雪庭に滿つ、

有客冒雪來自北

客あり雪を冒して來る北よりす。

紛紛笠上已盈寸

紛紛として笠上已に寸に盈つ、

下馬登堂面蒼黑

馬を下り堂に登りて面は蒼黑。

苦寒有酒不能飲

苦寒酒あれども飲むこと能はず、

見之何必問相識

之を見る何ぞ必ずしも相識を問はん。

我酌徐徐不滿觥

我酌む徐徐觥に滿たず、

看客倒盡不留漚

客を看るに倒盡して漚を留めず。

【字解】尉氏、縣の名。もと鄭國之東部、鄭の大夫尉氏の邑であつた所から邑の名となつた。太平寰宇記に、晉時南院所居。九域志に、在開封南九十里。古驛、漢書の註に、傳若今之驛。古は車を以てするを傳車といふ。其の後、又單に驛を置く、之を驛驛といふ。

【】笠、蓑笠、蓑草の皮で爲つた笠、時に、被郡人士、蓑笠細操とある。【】不留漚、東坡、又、飲酒而留漚の句あり、蜀中の語なるべし。【】短策、左傳襄公十七年に、左師爲己短策。同、文公十三年に、饒朔贈之以策。註にいふ、馬適と。

千門晝閉行路絕

千門晝閉ちて行路絶え、

相與笑語不知夕

相與に笑語して夕を知らず。

醉中不復問姓名

醉中復姓名を問はず、

上馬忽去橫短策

馬上に上り忽ち去りて短策を横ふ。

【題義】東坡が大雪に逢つて、尉氏縣に逗留し、客と對飲したことを感したのである。尉氏縣は、春秋時代に鄭邑であつたことは、前にも述べたが、漢の時に縣となり、明清には、河南開封府に屬し、今は河南開封道に屬して居る。

【詩意】尉氏縣の古驛は、大雪の爲に、往來の人も絶えた。此時、雪を冒して北方から來た客がある。笠の上に積つた雪は一寸餘、面色は疲れて青黒い。寒さがあまり強いので、最初は酒も飲めなかつた。雪中の遇合、必ずしも曾て相識ると否とを問はない。兩人對酌、我は酌む徐徐、酒觥に滿たないのに、彼は既に瓶を倒した。酒量は到底彼に及ばない。雪の爲に千門閉ち、行人絶ゆ。兩人して笑語、日の暮れるも知らなく、酔うて互に姓名も名乗らなかつたが、彼は馬上に上つて立ち去つた。

黃河

黃河

活活何人見混茫

活活何人か混茫を見る、

【字解】活活、水の盛んに流れる聲、詩の衝風に、河水洋洋、北流活活。一本に活活とある。

崑崙氣脈本來黃。

崑崙氣脈本來は黄なり。

濁流若解汚清濟。

濁流若し清濟を汚すを解せば、

驚浪應須動太行。

驚浪は應に須らく太行を動かすべし。

帝假一源神禹蹟。

帝一源を假して禹の蹟を神にし、

世流三患梗堯鄉。

世三患を流して堯の郷を梗ぐ。

靈槎果有仙家事。

靈槎果して仙家の事あらば、

試問青天路短長。

試みに青天に路の短長を問はん。

行山、一名五行山。

【六】 試問 大禹が治水の功績をいふ。【七】 三患 莊子天地篇に、堯は彼白雲、至る子帝鄉、三患莫至、身常無殃。三患は、病、老、死をいふ。死生を一にする、故に三患が至らない。【八】 靈槎 博物志に、昔人有て泛舟後至天河、得石舫、示靈若平、曰、是織女支機石也。

【題義】 黄河は、古、ただ河と稱した。後人、其の沙が多くて色の黄なるより黄河といふ。水源は青海に出で、東流して二大瀾となり、曲折して甘肅境に入り、又、東北して長城に出で、賀蘭山の東麓、陰山の南麓に循つて流れ、西折して南し、一大曲を成す。是を河套とす。又、南して長城に入り、壺口、龍門の諸山を経て、山西、陝西の界をなし、東折して河南の境に入り、始めて高地より平地に流る、直隸、山東を経て利津縣に至り、大清河の故道を奪つて海に入る。下游は、河南より以下常に水患があつて、河道に變遷がある。

【詩意】 黄河の水は活活と流れて居るが、其の混花を窮めたものはない。水源は崑崙山から出て、水色は黄である。濁河は終に清濟を汚すことが出来ないが、もし汚すことが出来れば、驚浪は應に太行山を動かすことが出来やう。堯の時に九年の洪水があつた。上帝は黄河の水源を假して大禹をして治水の功をなさしめ、世、病、老、死の三患を除いて堯の郷を梗いだ。又、張騫は河源を窮めたが、昔の人に槎を泛べて天河に至り支機石を得て歸つたといふものがある。靈槎果して上天が出来れば、試みに問はん、青天に至る路の短長を。それは逆も叶はないであらう。

朱亥墓

朱亥墓

朱亥の墓

昔日朱公子、雄豪不可追。

昔日の朱公子、雄豪追ふべからず。

今來遊故國、大家屈稱兒。

今來つて故國に遊ぶ、大家屈して兒と稱す。

平日輕公相、千金棄若遺。

平日公相を輕んじ、千金棄てて遺るる若し。

梁人不好事、名姓寄當時。

梁人は事を好まず、名姓當時に寄す。

魯史盜齊豹、求名誰復知。

魯史は齊豹を盜とす、名を求むるも誰か復知らん。

慎無怨世俗、猶不遭仲尼。

慎んで世俗を怨むこと無かれ、猶ほ仲尼に遭はず。

【字解】 【一】 朱亥墓 東坡の自註に、俗謂、屠兒原。太平寰宇記に、朱亥墓在封邱縣西三十里。汴京遺蹟志には、朱亥墓在開封西

南朱仙偶。どちらが正しいか分らない。【一】魯史。孔子の筆削した春秋をいふ。【二】盜。齊豹。春秋昭公二十一年に、秋、盜殺。衛侯之兄繁。此の盜とあるは、齊豹のこと。齊豹は不義のことをな爲し、亂を起して之を殺せし故に盜とした。

【題義】朱亥は、戰國魏の大梁の人。勇俠にして屠肆に隱る。侯嬴は之を魏の公子無忌（信陵君）に薦めた。秦の昭王が趙を攻める、無忌は之を救はうとしたが、兵力を要するので、朱亥をして四十斤の鐵椎を袖にし、將軍晉鄙を擊殺して、其の軍を奪ひ、遂に秦の兵を退けて趙を存した。其の朱亥の墓を訪うて懷を述べたのである。

【詩意】朱亥は賢者であつたが、世の人に知られないで屠間に隱れたのである。雄豪は常人の及ぶ所ではない。今、其の遺跡を訪ねると、屠兒原といつて、大家が兒と稱されて居る。朱亥は平生、富貴を輕んずる。梁人も元來、事を好まない。従つて名姓も、昔のままにして居る。一體、春秋の筆法によると、心術を責めるから、齊豹の不義を筆誅して盜とした。人は其の名姓を知ることが出来ない。朱亥の報じた所は私恩、負いた所は大義。然るに司馬遷は、晉鄙の死節を美めないで、朱亥の豪俠を多とするは、其の當を得ない。もし春秋の義を以て之を責めるならば、盜殺晉鄙としなければならぬ。幸にして孔子に遺はなかつたから盜名を免れた。して見ると、世俗の呼んで屠兒とするのは、辱しめたことにはならないであらう。

次韻水官詩

水官の詩に次韻す

淨因大覺禪師以闡立本畫水官遺編禮公公既報之以詩謂某汝亦作某頓首再拜次韻仍錄二詩爲一卷獻之。

【調讀】淨因大覺禪師、闡立本の畫ける水官を以て編禮公に遺る、公既に之に報するに詩を以てし、某に謂ふ、汝も亦作れと、某頓首再拜して韻に次す、仍て二詩を錄して一卷となし之を獻す。

【字解】【一】水官。水神をいふ、蘇洵の詩に、水官騎蒼龍、能行欲上天。【二】淨因院。宋の仁宗の皇祐中、淨建。明州の懷遠禪師、詔に應じて之に住し、號を大覺禪師と賜はつた。【三】闡立本。唐朝名畫錄に、立本位唐宰相、吳兄立德、齊名。【四】編禮公。蘇洵をいふ。宋史蘇洵傳に、嘉祐間除秘書校書郎、會太常修纂禮書、乃以爲禮州文安王傳、吳項城令能開、同修爲太常因奉禮一百卷、太常は官名、宗廟禮儀を掌る。續通鑑長編に、嘉祐六年七月、蘇洵同編纂禮書。又、八年三月に、禮院編纂蘇洵始書釋詩、言山陵事を載す。故に東坡の詩に編禮公と稱す。

高人豈學畫用筆乃其天。
譬如善游人。一一能操船。
闡子本縫掖。嗜昔慕雲淵。
丹青偶爲戲。染指初嘗醜。
愛之不自己。筆勢如風翻。
傳聞貞觀中。左衽解椎髻。

高人は豈畫を學ばんや、筆を用ゐるは乃ち其の天なり。
譬へば善く遊ぶ人の、一一能く船を操るが如し。
闡子は本縫掖、嗜昔雲淵を慕ふ。
丹青は偶々戲を爲すなり、指を染め初めて醜を嘗む。
之を愛して自ら已まず、筆勢は風の翻るが如し。
傳へ聞く貞觀中、左衽椎髻を解く。

南夷羞白雉。佛國貢青蓮。
 詔令擬王會。別殿寫戎蠻。
 熊冠金絡額。豹袖擁旛旛。
 傳入應門內。俯伏脫劍筓。
 天姿儼龍鳳。雜沓朝鸞。
 神功與絕迹。後世兩莫扳。
 自從李氏亡。羣盜竊山川。
 長安三日火。至寶隨飛烟。
 尙有脫身者。漂流出東關。
 三官豈容獨得此。今已編。
 吁嗟至神物。會合當有年。
 京城諸權貴。欲取百計難。
 贈以玉如意。豈能動高禪。
 惟應一篇詩。皎若畫在前。

南夷は白雉を羞め、佛國は青蓮を貢す。
 詔して王會に擬せしむ、別殿戎蠻を寫す。
 熊冠金もて額を絡ひ、豹袖旛旛を擁し、
 傳へて應門内に入る、俯伏して劍筓を脱す。
 天姿儼として龍鳳、雜沓して鸞を朝せしむ。
 神功與に迹を絶ち、後世兩ながら扳くなし。
 李氏の亡びしより、羣盜山川を竊み、
 長安三日火あり、至寶は飛烟に隨ふ。
 尙ほ身を脱せしものあり、漂流して東關を出づ。
 三官は豈獨を容れんや、此を得て今已に編す。
 吁嗟至神の物は、會合當に年あるべし。
 京城の諸權貴、取らんと欲して百計難し。
 贈るに玉如意を以てするも、豈能く高禪を動かさんや。
 惟應に一篇の詩、皎として畫の前に在るが若し。

【字解】

【一】善游云云 莊子の達生篇に、顔淵問仲尼曰、吾嘗濟乎觴深之側、津人操舟若神、吾問焉曰、操舟可學邪、曰可、善游者數能、若乃夫沒人、則未嘗見舟、而便操之也。【二】羣蠻 儒者の服、禮記儀行篇に、孔子對哀公曰、丘少居魯、衣逢掖之衣、長房宋、冠章甫之冠。【三】羣蠻 江淹の別賦に、羣蠻雲之屈妙、賈樂之華精。王子潤、楊子雲、嚴安、徐榮をいふ。一説に、漢書、終軍字子雲、王與字子潤、二人合傳、故に東坡之を羣蠻す、楊子雲にあらす。【四】丹青偶爲戲 唐の太宗、侍臣と舟を春苑池に泛ぶ。異鳥の波に浴するを見て、上之を悦ぶ。坐者に詔して詩を賦せしめ、立本を召して畫かしむ。傳呼して畫師といふ。立本此時已に主爵郎中たり、歸つて其子を戒めて曰く、吾は少にして書を讀み、今、獨、畫を以て名あり。斯役等と等せらる。汝曹、慎んで習ふこと勿れ。【五】染指初嘗 左傳宣公四年に、楚人獻黿於鄭靈公、子公之食指動、以示子家、曰、必嘗異味、及者夫解黿食、大夫、召子公而弗與也、子公怒、染指於鼎、書之而出。【六】左莊 論語靈問篇に、被髮左衽。夷狄の俗。【七】權輿 雙は鶴、唐書南蠻傳に、東謝蠻俗、權輿以爲垂於後。【八】擬王會 貞觀三年に、東魏の謝元深入朝す、中書侍郎顔師古奏す、昔周武王、治致太平、遠國歸款、乃集其事爲王會篇、可圖寫於後以彰嚴遠之德、之に従ひ、尙書開立本に命じて之を畫かしむ。【九】熊冠金絡額 舊唐書の東謝蠻傳に、貞觀三年、元深入朝、羣鳥熊皮冠、以金銀絡額、身披毛氈。【十】旛旛 釋名に旛、幡也。周禮に、通帛爲旛。唐門、天子の正門。【十一】俯伏脫劍筓 史記蘇秦傳に、俯伏侍取食。前漢司馬遷傳の註に、筓、弩弓也。【十二】龍鳳 唐書太宗本紀に、龍鳳之姿、天日之表。【十三】神功與絶迹 任昉の述、神功無紀。司馬相如の封禪文に、殊尤絶迹。【十四】其披 披は攀と同じ。【十五】長安 漢書の地理志に、長安縣、高帝五年置。【十六】三官 道家奉ずる所の神、天官、地官、水官。【十七】玉如意 胡璠別傳に、吳時陸陵類地、得白玉如意。

【題義】

蘇老泉が大覺禪師に報じた詩といふのは、水官騎蒼龍、龍行欲上天、手攀時且住、浩若乘風船、不知幾何長、足尾猶在淵、下有二從臣、左右乘魚鼈、雙鏢相顧視、風舉衣袂翩、女子侍臣側、白頰垂雙鬢、手執雉尾扇、容如未開蓮、從者八九人、非鬼非戎蠻、出水未成列、先登揚旂旛、長刀擁旁牌、白羽注強弩、雖服甲與裳、狀貌猶鯨鱣、水獸不得從、仰面以手扳、空處走。

雷霆。兩電晦。九川、風師黑虎窠、面目昏。塵烟、翼從三神人、萬里朝天關。我從大覺師、得此詭怪編、畫者古閩子、於今三百年、見者誰不愛、予者誠已難、在我猶在子、此理事非禪、報之以好詞、何必盡在前、である。此詩と東坡の詩と併せ觀て、題義を明にすることが出来る。

【詩意】閩立本は、位、宰相に居る、豈、屹屹として繪畫を學ばうぞ、丹青の巧みであるのは、其の天才である。善く遊ぶ人の水に親しむやうなものである。閩子は、もと儒生で、其の昔は終軍や王襄の文才を慕うたものである。丹青は、餘戲に過ぎない。一たび指を染めて廢められなく、筆勢は風の翻へるやうである。昔、唐の貞觀年間に、左衽の夷が椎鬘を解いて來朝し、又、南夷は白雉を、佛國は青蓮を各、貢獻した。詔して周の武王の時の故事に倣ひ、王會圖を作らしめたのである。そこで、別殿には戎蠻を寫す。烏熊の皮冠、金銀で額を結うた。豹袖で旗を擁し、王宮正門内に入る。弓劍を脱して俯伏する。天姿は儼として龍鳳の衣をめされ、鵬鳥蛇螭の象ある服を著けた卿大夫は難香して朝觀する。神功は比すべきなく、後世の及ぶ所でない。圖は之を寫したものである。唐朝が亡びて五代亂離の世となつて、羣盜が山川を竊む。此時に長安の火災で、至寶も焼けたが、此の圖は三官、即ち天神、地神、水神の力で、歸すべき所に歸する。京城の諸權貴は、之を手に入れやうとしても、それは難かしい。玉如意のやうな貴重品の品を贈つても、大覺禪師の心を動かすことは出来ない。ただ應に一篇の詩、皎として畫の前に至るが如し。これを贈物とする。

終

續國譯漢文大成

文學部 五十

309
65

缺
入



始



續國譯漢文大成

文學部第五十册(第十三帙の二)

蘇東坡詩集 一の二

吉田待郎氏
空贈本

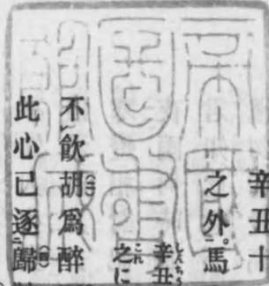


蘇東坡詩集 卷三

古今體詩 五十二首

辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門之外馬上一賦詩一篇寄之

辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門之外別れ、馬上に詩一篇を賦して之に寄す



不飲胡爲醉兀兀。此心已逐歸鞍發。歸人猶自念庭闈。今我何以慰寂寞。登高回首坡壠隔。但見烏帽出復沒。

飲まざるに胡爲れぞ酔うて兀兀たる、此心已に歸鞍を逐うて發す。歸人猶ほ自ら庭闈を念ふ、今我、何を以てか寂寞を慰せん。高きに登りて首を回せば坡壠隔たり、但見る烏帽の出で復没するを。

古今體詩 辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門之外

【字解】鄭州 元和郡縣志に、春秋鄭國、晉滅之、秦昭襄王三
年改鄭州。今の鄭縣、河南開封道に
屬す。【一】胡爲 なんすれどと願
む。【二】兀兀 酔へる狀、酒徳頤
に、兀然而酔。白樂天の對酒詩に、
所以劉阮輩、終年醉兀兀。又、不飲
長如醉、加澹亦似醉。【三】歸鞍

苦寒念爾衣裘薄。

苦寒念爾の衣裘の薄く、

獨騎瘦馬踏殘月。

獨瘦馬に騎りて殘月を踏むを。

路人行歌居人樂。

路人は行歌し居人は樂しむ、

童僕怪我苦悽惻。

童僕我が苦だ悽惻するを怪しむ。

亦知人生要有別。

亦知る人生要するに別あるを、

但恐歲月去飄忽。

但恐る歲月去つて飄忽たるを。

寒燈相對記嚙昔。

寒燈相對して嚙昔を記す、

夜雨何時聽蕭瑟。

夜雨何れの時か蕭瑟を聽かん。

君知此意不可忘。

君此の意忘るべからざるを知らば、

慎勿苦愛高官職。

慎んで高官職を苦愛することなかれ。

【一】夜雨云云 東坡自註にいふ、嘗有夜雨對牀之言、故云爾と。蘇州が元常、全真二生に與ふる時に、寧知風雨夜、復此對牀眠とある。東坡、子由と僕連辭に在り、嘗て章詩を讀み、此句に至り惘然として之に感じ、早退共に閑居の樂を爲すを約したといふことである。【三】蕭瑟 寂しい貌。

【題義】辛丑、仁宗嘉祐六年(皇紀一七二一年、西曆一〇六一年)東坡は年二十六で、制科に應じ大理寺評事簽書鳳翔府簽判(職官志に、大理寺評事正八品、諸州簽判從八品)を授けられ、任に赴く時、弟

子由は送つて鄭州に至り、其處で別れ、子由は京都に居る父(老泉、時に命を被り禮書を修めて、京師に留る)の許へ還つた。此詩は此時の作である。蘇氏兄弟の友愛に深かつたことが窺はれる。

【詩意】今、我は酒を飲まないのに、なぜ元元として酔ひたる時の心持であるか(疑問を以て筆を起した。紀昀曰く、起得飄忽、と。)それは他ではない、我が心は既に弟子由の歸鞍を逐うて發したからである。さて、歸人、即ち弟の子由は、これから去つて、京都には父上が在し、其の側に侍つて歡びを承けるのであるから、淋しくはなかるべきも、我は子由と別れた後は、獨であるから、いかなることを以て此の寂寞を慰めやうぞ。それで、別れて後も、跡を追ひ、見送りする。山路のことであるから、堤や畔の隔りがある。子由の後姿は、帽子の見えたり隠れたりするのみ。それにつけても、思念に堪へないのは、此の寒天、爾の衣裘は薄く、殊に早晩の出發、瘦せ馬に騎つて、殘月を踏み行くのであるから、風邪に冒されなければよいが只管懸念する。道上の旅人は、行くゆく歌ひ、家居の人は、圍樂して楽しんで居るのに、我は弟に別れて、苦だしく悽惻せるさまであるから、我心を知らない召使ひだけは怪んで居る。併し思ひ返へすと、人生は結局、離別といふことを免れない。で、致方はないと諦めるより外はない。ただ氣遣はれるのは、歲月は飄忽と去つてしまひ、再會の期もいかになるかとの一事である。今、子由と別れたが、後日になつても昨夜、燈前、兄弟相對して語り明かしたことを思ひ起されるであらう。されば豫て約束したやうに、あまり年寄らないうちに、官を罷め、兄弟同居して、靜に夜雨を聽きながら話をして樂まうと思ふよ。何れの日にも、我が此の願が達せられ

張説の詩に、醉舞拂舞歌。【二】庭園 父母の在す處、文選に、春無庭園。【三】放曠 堤や畔。【四】鳥帽 隋書禮儀志に、帽、古野人之服也、宋齊之間、天子宜私、著白高帽、士庶以烏。又曰く、隱居道素之士、被召謁見者、著黑介幘。又曰く、幘、尊卑貴賤皆服之、文者長耳、謂之介幘、武者短耳、謂之平上幘。【五】行歌 列子天瑞篇に、拾穂行歌。漢、朱買臣傳に、行歌負薪。【六】飄忽 たちまちに去る、宋、劉義慶の七夕詩に、飛光已飄忽。【七】嚙昔 禮記の檀弓に、嚙昔之夜。

るであらう。子由よ此意を忘れないやうに。いつまでも官職に戀戀として居つては、此の望は遂げられない。切に高官高職を苦だしく愛するだけは慎まされたい。(兄弟友愛の情、掬すべきである。)

【餘論】唐宋詩醇の評に、起句突兀有意味、前敘二既別之深情、後敘二昔年之舊約、亦知人生要有別、轉進一層、曲折適宕、孰是時年甫二十六、而詩格老成如此。とある。

和子由瀾池懷舊

子由の瀾池に舊を懷ふに和す

人生到處知何似。

人生到處知何にか似たる、

應似飛鴻踏雪泥。

應に飛鴻の雪泥を踏むに似たるべし。

泥上偶然留指爪。

泥上偶然として指爪を留む、

鴻飛那復計東西。

鴻飛んで那ぞ復東西を計らん。

老僧已死成新塔。

老僧は已に死して新塔を成し、

壞壁無由見舊題。

壞壁舊題を見るに由なし。

往日崎嶇還記否。

往日の崎嶇、還記するや否や、

路長人困蹇驢嘶。

路長く人困しみ蹇驢嘶きしことを。

【字解】(一)瀾池、戰國の韓邑、漢は縣を置く、明、清は皆、河南河南府に屬す。今の瀾池縣、河南河洛道に屬す。太平寰宇記に、瀾池、即秦趙所合之地、城與瀾池水源相對。

(二)雪泥、鴻爪、跡かたのこらな

いに喩ふ。歐陽永叔の詩に、瘦馬尋

春跡、雪泥。【三】舊題、子由詩の

註に、昔與子瞻、應、過、宿縣中

寺舍一題、老僧奉閣之壁。【四】往日

崎嶇云云、東坡自註に、往歲、馬死。

於二陵、騎、驢、瀾池、【三】蹇、驢、跛の驢馬。

【題義】紀昀いふ、前四句單行入律、唐人舊格、而意境恣逸、則東坡本色、と。子由の懷瀾池寄子瞻兄詩にいふ、相携話別鄭原上、共道長途怕雪泥、歸騎還尋大梁陌、行人已度古嶺西、曾爲縣吏君知否、舊宿僧房壁共題、遙想獨游佳味少、無言驢馬但鳴嘶。自註にいふ、轍曾爲此縣簿、未赴而中、第と。東坡は、此詩に和したのである。

【詩意】鴻の歸る、雪に爪して其の通過した所を記す。其の來るときは、雪が消えて痕が分らない。人生は、雪泥鴻爪に異らない。我曾て此地の佛寺に宿す。宿縁あつて復來れば、老僧は已に死し、舊題した自分の詩もない。先年、旅行のとき、乗つた馬が途中で斃れたので、跛の驢馬に騎つて、やつとのことで、瀾池に著いたあの時のことを思ひ出すかどうか。

次韻劉京兆石林亭之作石本唐苑中物散流

民間劉購得之

劉京兆石林亭の作に次韻す、石は本唐苑中の物、民間に散流す、劉購うて之を得

都城日荒廢。往事不可還。

都城日に荒廢し、往事還るべからず。

唯餘古苑石。漂散尙人間。

唯古苑の石を餘して、漂散す尙人間に。

公來始購蓄。不憚道里艱。

公來つて始めて購蓄し、道路の艱なるを憚らず。

古今體詩 和子由瀾池懷舊 次韻劉京兆石林亭之作

忽從塵埃中來對冰雪顏。
瘦骨拔凜凜蒼根激潺潺。
唐人唯奇章好石古莫攀。
盡令屬牛氏刻鑿紛斑斑。
嗟此本何常聚散實循環。
人失亦人得要不出區寰。
君看劉李末不能保河關。
況此百株石鴻毛於泰山。
但當對石飲萬事付等閑。

忽ち塵埃の中より、來り對す冰雪の顔。
瘦骨拔んで凜凜、蒼根激いて潺潺。
唐人は唯奇章、石を好んで古も攀することなし。
盡く牛氏に屬せしめ、刻鑿して紛として斑斑。
嗟此れ本何ぞ常あらん、聚散實に循環す。
人失へば亦人得、要するに區寰を出でず。
君看よ劉李の末、河關を保つこと能はず。
況んや此の百株の石、鴻毛の泰山に於けるをや。
但當に石に對して飲み、萬事等閑に付すべし。

【字解】【一】劉京兆 劉敞、字は原父、仁宗の嘉祐六年（皇紀一七二二年、西曆一〇六一一年）、翰林學士を以て出でて永興軍路安撫使となる。其の治は長安に在り。京兆府は即ち長安。【二】石林亭 麟游縣治の東に在る。宋の劉敞の詩、東坡の和した詩、石刻存す。【三】都城 文獻通考に、京兆府、乃周之舊都、凡周、秦、漢、晉、西魏、後周、隋至唐、皆爲之帝都。【四】公來始讀書 劉原父は博學にして古を好み、多く古器奇物を藏し、能く古文銘識を讀む、長安は、秦漢の故都であるから、時時愛稱して得た所、原父は悉く購うて之を藏す。【五】瘦骨 河圖括地象（讀緯書の名）に、地以石爲骨。【六】奇章 奇章公牛僧伽をいふ。白樂天の太湖石記に、今丞相奇章公嗜石、於此物、獨不謙讓、東第南墻、列而置之、以甲乙丙丁下品之、各刻於石陰、曰、牛氏石、甲之上、丙之中、乙之下。【七】聚散實循環 白樂天の記に、噫是石也、百千載後、散在天壤之內、轉徙隱見誰復知之。【八】區寰

字内の義、錢起の詩に、未必謝區寰。【九】劉李 劉は漢、李は唐を指す。【一〇】鴻毛於泰山 司馬遷報任安書に、死有重。於泰山、或輕於鴻毛。【一一】萬事付等閑 張翥の詩に、眼前一掃又長滿、心中萬事如等閑。

【題義】紀昀は此の詩を評して、意境開拓、理趣亦極圓澈、と言つて居る。劉京兆は、長安に在つて、古器數十を得、其の款識文字の奇古なるを愛し、因て以て三代の制度、先儒の説く所と同じからざるものを考知したのである。乃ち自ら一書を著はし、先秦古器記と號けた。劉京兆の石林亭の詩といふのは、朝廷入志返、山林往不還、念無萬世資、聊處可否閒、築基傲崔嵬、鞭石輕險巖、羣玉相磊落、萬峯正孱顏、種樹亦蒼蒼、激流復潺潺、澗渚歎在眼、崑閩若可攀、自我櫻世網、爾來鬢毛斑、邱壑誠若喪、簿書常自環、及爾滅聞見、曠若遠塵寰、豈願同避世、庶幾善閉關、子牟固懷魏、謝傳悲祖山、茲焉可娛老、詎厭終歲閒、である。子牟固懷魏といふは、莊子讓王篇に中山公子牟謂二瞻子曰、身在江海之上、心居魏闕之下、奈何、瞻子曰、重生、重生利輕、とある。

【詩意】長安の都も日に荒れて、昔の盛は見られない。ただ古苑の石は、人間に散じて考古の資料となつて居る。劉京兆が長安に来て、苦心して之を購ひ蓄へた。塵埃の中から來て氷雪に對するやうである。瘦せた石は凜凜、青い根は潺潺、林石の趣がある。唐の宰相奇章公は奇石が大好きで、其の聚めた石は、甲乙丙丁の差等を立て、石陰に牛氏石、甲之上、丙之中、乙之下などと刻んだ。ああ此の石は本轉轉として聚散が定まらない。常に循環して、人之を失へば、他の人之を得、要するに此の世界を離れない。昔、楚の共王が出遊して其の烏號の弓を亡つた。左右之を求めんと請うたとき、王の

曰く、止めよ、楚の王、弓を失つて、楚の人之を得、又何を求めんと。孔子は之を聞き、惜いかな、其の大でなかつたことを。なせ、人が弓を遺しても、人が之を得るばかりと言はなかつたかと。看よ漢の天下も、唐の天下も、末路は河關を保つことが出来なかつたではないか。まして此の百株の石、物の數にもあらぬものをや。ただ當に眼前石に對して、酒杯を傾け、心中の萬事、等閑にすべきであらう。

和劉長安題薛周逸老亭周善飲酒未七十而致仕

劉長安が薛周の逸老亭に題するに和す、周は善く酒を飲む、未だ七十ならずして致仕す

近聞薛公子早退驚常流。
買園招野鶴鑿井動潛蚪。
自言酒中趣一斗勝涼州。
翻然拂衣去親愛挽不留。
隱居亦何樂素志庶可求。
所亡嗟無幾所得不啻酬。

近ごろ聞く薛公子、早退して常流を驚かす。
園を買ひて野鶴を招き、井を鑿りて潛蚪を動かす。
自ら言ふ酒中の趣は、一斗涼州に勝ると。
翻然として衣を拂つて去る、親愛挽けども留まらず。
隱居亦何の樂かある、素志庶くは求むべからん。
亡ふ所は嗟幾もなく、得る所當に酬ゆるのみならず。

青春爲君好白日爲君悠。
山鳥奏琴筑野花弄閒幽。
雖辭功與名其樂實素侯。
至今清夜夢尙驚冠壓頭。
誰能載美酒往以大白浮。
之子雖不識因公可與遊。

青春君の爲に好く、白日君の爲に悠なり。
山鳥は琴筑を奏し、野花は閒幽を弄す。
功と名とを辭すと雖も、其の樂は實に素侯。
今に至るも清夜の夢、尙ほ驚く冠の頭を壓するを。
誰か能く美酒を載せ、往いて大白を以て浮せん。
之子識らずと雖も、公に因つて與に遊ぶべし。

【字解】【一】劉長安 前の劉敬字は原父である。【二】薛周 京兆府、萬年縣の人、駕部員外郎となる。中歲、事を謝して仕へず。【三】致仕 官を辭して退隱する、禮記曲禮に、大夫七十而致事。【四】早退驚常流 致仕の時、五六十と雖も、未だ七十ならざれば早退といふ。常流は常人に同じ、任昉の桓宣瑛傳に、遺奇取異不執常流。【五】野鶴 魯則 晉書に、如野鶴之在雞羣。左思蜀都賦に、下高鶴出漚則。【六】酒中趣 晉書に、孟嘉好酣飲、意多不亂、桓溫問、嘉酒有何好、而卿嗜之、嘉曰、公未得酒中趣耳。【七】一斗勝涼州 扶風の孟陀は、葡萄酒一斗を以て張讓に遺り、涼州刺史を得。【八】挽不留 晉書郭伋傳に、吳人歌之曰、郭侯挽不留、謝令推不去。【九】青春、白日 盧仝の詩に、天上白日悠悠懸。歐陽修の詩に、青春固非老者事、白日自爲閑人長。【一〇】素侯 史記貨殖傳に、太史公曰、今有無秩祿之奉、時色之入、而樂與之比者、命曰素封。又、千金之家、比一都之君、百萬者、乃與王者同樂、豈所謂素封者耶。【一一】以大白浮 說苑の善說篇に、魏文侯與大夫飲酒、使公乘不仁爲屬政、曰飲不屬者浮以大白、文侯不聽、不仁舉白浮君。浮は罰爵すること、白は罰爵の名。

【題義】京兆の薛周は、早く官を退いた。薛周の至和二年（仁宗、至和二年は、皇紀一七二五年、西、古今體詩 和劉長安題薛周逸老亭善飲酒未七十而致仕 一五一



曆一〇五五年十月二十九日留題樓觀といふ詩がある。薛周は能く酒を飲み、酒中の趣を解し、世の功名富貴を軽んずる。劉京兆を介して此の人と交りたいといふのが趣旨である。

【詩意】薛周は未だ七十にならないのに官を退いて、田園に野鶴を友とする。高官も一樽の酒に如かないといふのが、其の志である。友の挽くのも願みず、翻然として衣を拂つて去つた。一體、世を遁れるのは、何の樂しみか、それは、素志が求められ、別に亡ふ所もなく、青春愛すべく、白日悠悠、山の鳥は妙音を奏し、野の花も美しいからである。功名を辭しても、其の樂しみは、封侯に劣らない。今に及るも、清夜の夢、ともすれば、冠冕の頭上を壓することもある。誰か能く美酒を載せ、往いて酒杯を飲ませるものぞ。薛周の高風は、人をして共鳴せしめる。どうか劉京兆を通して之と交りを結びたいものである。

驪山三絶句

驪山の三絶句

功成惟欲善持盈。

功成つて惟欲す善く盈を持するを。

可歎前王恃太平。

歎すべし前王の太平を恃むを。

辛苦驪山山下土。

辛苦す驪山山下の土。

阿房纒廢又華清。

阿房纒に廢すれば又華清。

房 秦始皇、阿房宮を築く、十五年にして始めて成る。山河の旁に在るを以て阿房といふ。元和郡縣志に、阿房宮在長安縣西北十四里。【二】華清、開元十年に建つ。初名は温泉宮、天寶六載に華清宮と改む。長安志に、華清宮四面皆有繡嶺、内有朝元閣、長生殿、繡嶺樓。宋の時、朝元閣猶ほ存す。東坡任を罷めて、長安に至り、陳勝と驪山に遊び、朝元閣上に飲む。

【字解】【一】驪山、太平寰宇記に、驪山在昭應縣東南二里、温湯出。山下。昔の藍田山、天寶元年に、名を會昌山と改めた。【二】惟、一本に靡に作る。【三】持盈、十分の地位を保つて失はない。宋史に、顧陸下持盈守成、慎終如始。【四】阿房、秦始皇、阿房宮を築く、十五年にして始めて成る。山河の旁に在るを以て阿房といふ。元和郡縣志に、阿房宮在長安縣西北十四里。

【題義】三詩は皆、唐の玄宗の事を詠じたものである。首章は華清宮をいひ、次章は上皇をいひ、末章は朝元閣をいふ。紀昀いふ、此種却有史論之嫌と。【詩意】功業が成就した上は、ただ満つるを持して成るを守り、終を慎む始の如くすべきである。回顧するに、前王が太平を恃んで、戒愼も恐懼もしなかつた爲め、驪山の下、秦の時の阿房宮はあのやうであつた。唐の時の華清宮も同じく亂階をなしたのである。玄宗は毎年十月、華清宮に幸し、歳盡きて歸るを例とした。

幾變雕牆幾變灰。

幾びか雕牆に幾びか灰に變する、

舉烽指鹿事悠哉。

烽を擧げ鹿を指す事悠なるかな。

上皇不念前車戒。

上皇は前車の戒を念はず、

却怨驪山是禍胎。

却て怨む驪山は是れ禍胎と。

禍胎、牧養の書に、福生有基、福生有胎。

【詩意】榮枯盛衰は循環する。宮殿の雕牆も、忽ちに灰に化する。幽王、烽火を擧げて褒姒を悦ばしめたが、終に驪山の下で殺された。趙高は鹿を指して馬とし、秦の二世を欺いたが、子嬰の時に、族

【字解】【一】舉烽、周の幽王は、烽火を擧げて諸侯を會し、以て褒姒を悦ばした。【二】指鹿、秦の趙高は鹿を指して馬となし、以て二世皇帝を欺いた。【三】前車戒、漢書賈誼の傳に、前車覆、後車戒。

せられた。玄宗皇帝は、幽王や始皇の前車の覆へつた戒を念はないで、却て驪山は是れ禍の胎と怨んで居られる。

海中方士覓三山、海中の方士三山を覓む、

萬古明知去不還、萬古明かに知る去つて還らざるを。

咫尺秦陵是商鑑、咫尺の秦陵は是れ商鑑、

朝元何必苦躋攀、朝元何ぞ必しも苦に躋攀せん。

三神は、蓬萊、方丈、瀛洲。【一】商鑑、時に殷鑑不遠。【二】躋攀、相傳ふ、朝元閣の階柱、貢くに紅錦組を以てし、宮女攀援して上る。

【詩意】海中の方士、三神山を覓める。煙は深し蓬萊仙子の家。神仙は遂に得られない。秦の始皇は驪山陵を治め、徒を役する七十萬人。其の殷鑑も遠からぬのに、驪山宮の朝元閣、土木の工を費すこと夥しく、西王母の像のあるところの御階の躋は、蓮花磚を以てする。慶曆の頃には、王母の像も失せ、御階の石柱も道士に焼かれて、既に灰となつてしまつた。

次韻子由岐下詩 并序 子由が岐下の時に次韻す 并に序

予既至岐下逾月於其麻宇之北隙地爲亭亭前爲橫池長三丈池上爲短墻屬之堂分堂之北厦爲軒窗曲檻俯瞰池上出堂而南爲過廊以屬之廳廊之兩旁各爲一小池皆引汧水種蓮養魚於其中池邊有桃李杏梨棗櫻桃石榴檉槐松檉柳三十餘株又以斗酒易牡丹一叢於亭之北子由以詩見寄次韻和答凡二十一首

【訓讀】予既に岐下に至りて月を逾ゆ、其の麻宇の北隙地に於て亭を爲る、亭の前を横池となす、長さ三丈、池上に短墻を爲りて之を堂に屬す、堂の北厦を分ちて軒窗曲檻を爲り、俯して池上を瞰る、堂を出でて南に過廊を爲り、以て之を廳に屬す、廊の兩旁に、各一小池を爲る、皆汧水を引き、蓮を種ふ、魚を其中に養ふ、池邊には桃・李・杏・梨・棗・櫻桃・石榴・檉・槐・松・檉・柳三十餘株あり、又、斗酒を以て牡丹一叢に亭の北に易ふ、子由詩を以て寄せらる、韻に次し和答す、凡そ二十一首。

北亭 北亭

誰人築短牆橫絕擁吾堂、誰人か短牆を築き、横絶して吾が堂を擁する。

不作新亭檻幽花爲誰香、新亭檻を作らずんば、幽花誰が爲にか香しからん。

古今體詩 次韻子由岐下詩・北亭

【字解】短橋、東坡の自註に、舊堂北有橋、予始去之爲亭。北亭は即ち喜雨亭にして、新時未だ名あらず。

【題義】紀昀いふ、五絶分三章、模山範水、如畫家有尺幅小景、其格俱自三輔川、(王維) 爾後、輒轉相摹、漸成稟白、流連光景、作似盡不盡之詞、似解不解之語、千人可共一詩、一詩可題千處、桃花作飯、轉歸塵劫、此非叔始者過、而依草附木者過也、此二十一首、要自我行我法、固知豪傑之士、必不依託門戶、以炫俗也。東坡が鳳翔府に赴任したとき、官舎の北のあき地に亭を建て、汗水を引いて小池を爲る。池邊に花樹三十餘株あり、子由が詩を寄せられたので、次韻したものが此の二十一首である。

【詩意】北亭は、其の後、喜雨亭と名けた。舊堂の北には池があつて、多少見晴しを妨げた。そこで之を去つて新亭を築いた。新亭を築かないと、幽花も見られない。

横池

横池

明月入我池皎皎鋪紵綺。明月我が池に入る、皎皎として鋪綺を鋪く。

何日變成緇太玄吾嬾草。何れの日か變じて緇とならん、太玄は吾草するに嬾し。

【字解】紵、麻布と練絹、子由の詩に、池魚躍金碧、白鳥飛紵綺。【二】成、鋪、論衡に、白紗入緇、不染自黑。【三】太玄、揚雄が太玄を草すると、或人、玄の尚ほ白きを嘲ける。雄乃ち解嘲を作る。揚雄の解嘲に、吾默歎獨守吾太玄。

【詩意】明月の池に映る、麻や練り絹を鋪いたやうである。白紗が緇に入れば、染めないでも自ら黒い。此の麻や練り絹は、何れの日にか黒くなるであらう。昔、揚雄が太玄を草すると、或人は玄の尚ほ白きを嘲けた。そこで雄は解嘲といふ名高い文章を作つた。太玄は吾草するに嬾い。

短橋

短橋

誰能鋪白簾永日臥朱橋。誰か能く白簾を鋪き、永日朱橋に臥す。

樹影欄邊轉波光版底搖。樹影は欄邊に轉じ、波光是版底に搖ぐ。

【字解】白簾、簾は竹や葦で編んだ簾物。【二】臥、朱橋、盧綸の詩に、朱橋夜捲津。杜牧之、阿房宮の賦に、長橋臥波。【詩意】竹や葦で編んだ白い簾物を美しい朱塗の橋に鋪いて臥すと、樹の影は欄干に移り、波の光は橋板の下で動いて居る。

軒窗

軒窗

東隣多白楊夜作雨聲急。東隣白楊多し、夜雨聲を作して急なり。

窗下獨無眠秋蟲見燈入。窗下に獨眠ることなければ、秋蟲は燈を見て入る。

【字解】多、白楊、東坡の詩に、那舍何幼僧、樹涼の句あり。此の東鄰の白楊をいふ。

【詩意】東坡の官舎は府治の東に在る。白楊が多い、従つて秋蟲も少くない。夜、楊柳が雨聲をなす

ので、眠られない。燈を挑げると秋蟲は燈を見て、飛んで入る。

曲檻

曲檻

流水照朱欄。浮萍亂明鑑。

流水朱欄を照し、浮萍明鑑を亂る。

誰見檻上人。無言觀物泛。

誰か見ん檻上の人、言なくして物の泛ぶを観る。

【字解】〔一〕曲檻。廻して曲檻といふも、兼れて浮萍を除する。

【詩意】流水が朱塗の欄干に映り、浮草が水鑑を亂して居る。檻上の方は佇んで、つくづく眺めて居る。

雙池

雙池

汧流入城郭。壺壺渡千家。

汧流城郭に入り、壺壺千家を渡る。

不見雙池水。長漂十里花。

雙池の水を見ず、長く漂はす十里の花。

【字解】〔一〕雙池。東坡の爲つた池で、府治より水を通ずる。東坡の詩に、使君尙許分池。蘇の句がある。〔二〕汧流。汧山の南麓から出て渭水に入る、前に註す。東坡の詩に、北池近所壺。中有汧水碧。汧流を一本に汧流に作るは誤である。〔三〕壺壺。水の流れ進む貌、左思の吳都賦に、清流壺壺。

【詩意】東坡の爲つた池で、府治から水を通はせる。水は壺壺として千家を渡り、雙池の水を見ない。

それは、いつも十里にわたつて花を漂はして居るからである。

荷花

荷花

田田抗朝陽。節節臥春水。

田田朝陽に抗し、節節春水に臥す。

平鋪亂萍葉。屢動報魚子。

平に鋪いて萍葉を亂り、屢動して魚子を報す。

【字解】〔一〕田田。荷葉が水に浮べる貌、古樂府に、江南可採蓮、蓮葉何田田。〔二〕節節。續博物志に、藕生塵月、間月益二節。顧況の詩に、藕泥封藕節。晉俳歌に、節節爲雙。〔三〕魚子。謝朓の詩に、魚戲新荷動、丘遲の詩に、荷亂新魚戲。〔詩意〕荷葉は水に浮んで、朝日を受けて居る。蓮の根は、節節生長して水に臥す。風なくて荷葉と浮草との折折動くのは、池中の魚が泳いで居るからである。

魚

魚

湖上移魚子。初生不畏人。

湖上魚子に移す、初め生じて人を畏れず。

自從識釣餌。欲見更無因。

釣餌を識りしより、見んと欲するに更に因なし。

【字解】〔一〕更無因。列子御風の事より化し出す。列子に、海上有好鴈鳥者、往海上從鴈遊、其父曰、汝取來、吾觀之、明日之海上、鴈舞而不下。

【詩意】湖上に魚に移す、最初は人を畏れなかつたが、釣餌にかかつてからは、とんと見えなくなつ

た。(此種の細微な處、他人は意を留めないが、東坡は必ず觀察を怠らない。)

牡丹

牡丹

花好長患稀花多信佳否

花好ければ長へに稀なるを患ふ、花多き信に佳なるや否や。

未有四十枝枝枝大如斗

未だ四十枝にして、枝枝大さ斗の如きはあらず。

【字解】四十枝 東坡の自註に、牡丹花有四十餘枝。

【詩意】花の富貴なるもの、大きいのが好い。花が多くて、四十枝にもなると、大さ斗の如しといふ佳なものは見られない。

桃花

桃花

爭開不待葉密綴欲無條

争ひ開いて葉を待たず、密に綴つて條なからんと欲す。

傍沼人窺鑑驚魚水濺橋

沼に傍うて人鑑を窺へば、魚を驚かして水橋に濺ぐ。

【字解】人窺鑑 人面桃花の意、唐の崔護の詩に、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不知何處去、桃花依舊笑春風。

【詩意】花が枝に満ちて、葉も條も見えない。沼に傍うて水に映る花の影を見ると、魚を驚かして跳ねる水が橋に濺ぐ。(人面桃花相映じて紅なりの句が思ひ浮ばれる。)

李

李

不及梨英軟應慚梅萼紅

梨英の軟なるに及ばず、應に梅萼の紅なるに慚づべし。

西園有千葉淡佇更纖穠

西園に千葉あり、淡佇更に纖穠。

【字解】千葉 東坡の自註に、城西有千葉李、如茶葉。

【詩意】李の花は梨の花の軟なるには及ばないし、梅の花の紅なるにも劣つて居る。併し城西の千葉李は、茶葉のやうで、淡く佇んで居り、又、しげくたをやかである。(茶葉は蔓生の灌木で、香氣が多い。)

杏

杏

開花送餘寒結子及新火

花を開いて餘寒を送り、子を結んで新火に及ぶ。

關中幸無梅汝彊充鼎和

關中幸ひに梅なし、汝彊ひて鼎和に充てられん。

【字解】及新火 周禮の註に、夏取棗杏之火。

【詩意】餘寒を送つて花が開き、初夏が来て實を結ぶ。鹽と梅とを以て鼎味を和するが、關中には、其の梅がないから、汝杏は梅に代つて鼎和に充てられるのである。

梨

梨

霜降紅梨熟柔柯已不勝。

霜降つて紅梨熟し、柔柯已に勝へず。

未嘗獨夏渴長見助春水。

未だ嘗て夏渴を獨かす、長く見る春水を助くるを。

【字解】【一】紅梨 杜甫の詩、紅梨迴得霜。【二】助春水 梨の性は冷利。陶弘景、之を快果といふ。蓋し助春水の意。春水、一本に、冬水に作る。

【詩意】霜が降つて梨の實も熟する。梨の性は冷利である。陶弘景は之を快果と言つたが、夏過ぎて實を結ぶので夏渴を醫することが出来ない。長く春水を助けるのみである。

棗

棗

居人幾番老棗樹未成椹。

居人幾番の老ぞ、棗樹は未だ椹を成さず。

汝長才堪軸吾歸已及瓜。

汝長するも才に軸とするに堪ふ、吾歸る已に瓜に及ぶ。

【字解】【一】幾番 元、無盡の時に、幾番山雨月中生。【二】椹 杜甫の詩に、奉使虛隨八月椹。【三】才堪軸 東坡自註に、棗樹至難長。白樂天が杏園中棗樹の詩に、君求悅目難、不敢爭桃李、君若作大車、輪軸材須此。【四】及瓜 左傳莊公八年に、齊侯使、過郟、管至父皮、交郟、瓜時而往、曰、及瓜而代。

【詩意】居人は、どれ程、老いたであらう。棗樹は成長し難くて椹を成さない。美を桃李と争はず、大車の輪軸には此材を用ゐると言つた所で、才に軸となるに留まる。我が歸る時が来たが、八月の椹

がない。

櫻桃

櫻桃

獨遠櫻桃樹酒醒喉肺乾。

獨櫻桃樹を遠る。酒醒めて喉肺乾くならん。

莫除枝上露從向口中漚。

枝上の露を除くこと莫れ、口中に向つて漚たるに従せよ。

【字解】【一】向口中漚 漚は露多き貌。東坡が橄欖の詩に、特得餘甘已向口中漚。漚は露多き貌。東坡が橄欖の詩に、特得餘甘已向口中漚。漚は露多き貌。東坡が橄欖の詩に、特得餘甘已向口中漚。

【詩意】獨、櫻桃の樹を遠る。酒も醒めて喉の乾くとき、枝上の露を除くなれ、口中を濕はすに任せよ。(東坡が橄欖樹の詩に、已輸崖密十分甜とあるが、崖密といふは櫻桃のことだといふ。)

石榴

石榴

風流意不盡獨自送殘芳。

風流意盡さず、獨自ら殘芳を送る。

色作裙腰染名隨酒盞狂。

色は裙腰の染むるを作し、名は酒盞の狂に隨ふ。

【字解】【一】獨自 一本に獨是に作る。【二】裙腰染 樂元帝の詩に、芙蓉爲帶石榴裙。【三】名隨酒盞狂 東坡の自註に、酒名有石榴。樂開文帝の詩に、金杯石榴酒。

【詩意】風流未だ盡きないで、梅雨中にも深紅の花を開き、百花に殿する。色は裙腰の染物によく、名は酒盞の狂するに隨ふ。(酒の名に石榴といふがある。)

古今體詩 次韻子由跋下詩・梨・棗・櫻桃・石榴

楞

楞

自昔爲神樹。空聞蜩鳴。

昔より神樹と爲すも、空しく聞く蜩鳴の鳴くを。

社公煩見輟。爲爾致羊羹。

社公暇めらるるを煩はす、爾の爲に美羹を致さん。

【字解】(一) 神樹 魏志の鄧原傳の註に、原嘗行得遺錢、以聚樹枝、而聚錢者愈多、謂之神樹、原乃辨之里中、遂斂其錢、以爲社供。(二) 蜩 蜩は青斑ある蟬、脚は伯勞。(三) 社公 地の神、禮記の註に、今人謂社神爲社公。後漢書、費長房傳に、穰谷百鬼、及區使社公。(四) 致羊羹 東坡の自註に、楞、舊爲土地廟所藏、余始遷、願歸北、戰國策に、中山君饗都士大夫、司馬子期在焉、羊羹不備、司馬子期、怒而走於楚。

【詩意】 古來神樹となすも、空しく蟬や伯勞が樹上に鳴くのみ。東坡の鳳翔府に居つた時、楞が廟牆に蔽はれたので、牆を北に運した。社神が迷惑をしたから、祭りて羊羹を供する。(楞、和名あふち。)

槐

槐

採挿殊未厭。忽然已成陰。

採挿殊に未だ厭はず、忽然として日に陰を成す。

蟬鳴看不見。鶴立赴還深。

蟬鳴いて看れども見えず、鶴立ちて赴くこと還深し。

【字解】(一) 採挿 つまみとる、謝朓の詩に、過君採挿、玉座奉金殿、抱朴子に、槐子服之補腦、令人髮不白而長生。(二) 成陰 左太神の魏都賦に、槐以蔭堂。(三) 鶴立 東坡の自註に、上有野鶴三四。

【詩意】 君に遇うて、實をつまみとつた槐も、成長して陰を成し蟬も鳴く。上には野鶴が三四羽居る。

松

松

強致南山樹。來經渭水灘。

強ひて南山の樹を致し、來つて渭水の灘を經。

生成未有意。鴉鵲莫相干。

生成未だ意あらず、鴉鵲相干すこと莫れ。

【字解】(一) 鴉鵲莫相干 柏葉松身を楡となす。東坡の石經院の詩に、天矯庭中楡、枯枝隨園市。此詩意と正に同じ。

【詩意】 南山の樹を拉し來つて渭水の灘を過ぎるので、生成を必とすることが出来ない。鴉も鵲も枝を踏み消すな。

楡

楡

依依古松子。鬱鬱綠毛身。

依依たり古松子、鬱鬱たり綠毛の身。

每長須成節。明年漸庇人。

長する毎に須らく節を成すべし、明年漸く人を庇ふ。

【字解】(一) 依依 枝の茂る貌、詩の小雅、楊柳依依。(二) 綠毛身 列仙傳に、優住好食松實、體生毛。(三) 成節 楸物體論に、松樹條何多節。又、真宏の松の詩に、森森千丈松、磊磊非二節。

【詩意】 柏葉松身を楡とする。依依たり古松子、鬱鬱たり、綠毛の幹、生長するに随つて節をなす。明年頭は人を庇ふ程に繁茂するであらう。

柳

柳

今年手自栽，問我何年去。

今年手自栽，我問何れの年か去ると。

他年我復來，搖落傷人思。

他年我復來らば、搖落して人思を傷ましめん。

【字解】「○」舊人思。世説に、桓温北征經金城見前爲瑣時、種柳、皆已十圍、慨然歎曰、物猶如此、人何以堪、攀枝執條、泫然流涕。

【詩意】今年手植の柳、他年、我復此地に來らば、搖落して人の思を傷ましめるであらう。(昔、桓温が北征して金城を經、先年種えた柳の十圍もあるやうになつたのを見て、泫然として涕を流したといふことがあるが、此詩も此意である。)

次韻子由除日見寄

子由が除日に寄せられしに次韻す

薄官驅我西，遠別不容惜。

薄官我を驅つて西せしむ、遠別は惜むを容さず。

方愁後會遠，未暇憂歲夕。

方に愁ふ後會の遠きを、未だ歲夕を憂ふるに暇あらず。

強歡雖有酒，冷酌不成席。

強ひて歡ぶは酒ありと雖も、冷酌席を成さず。

秦烹惟羊羹，隴饌有熊腊。

秦烹は惟れ羊羹、隴饌に熊腊あり。

念爲兒童歲，屈指已成昔。

念ふ兒童たりし歳を、指を屈すれば已に昔と成る。

往事今何追，忽若箭已釋。

往事は今何ぞ追はん、忽ち箭の已に釋くが若し。

感時嗟事變，所得不償失。

時に感じて事變を嗟く、得る所は失ふを償はず。

府卒來驅讎，矍鑠驚遠客。

府卒は來つて驅讎し、矍鑠遠客を驚かす。

愁來豈有魔，煩汝爲攘磔。

愁來るも豈魔あらんや、汝を煩す爲に攘磔せよ。

寒梅與凍杏，嫩萼初似麥。

寒梅と凍杏と、嫩萼初は麥に似たり。

攀條爲惆悵，玉蕊何時折。

條に攀ちて爲に惆悵す、玉蕊何時か折る。

不憂春豔晚，行見棄夏馥。

春豔の晚きを憂へず、行くゆく夏馥を棄てらる。

人生行樂耳，安用聲名籍。

人生は行樂のみ、安んぞ聲名の籍たるを用ひん。

胡爲獨多感，不見膏自炙。

胡爲れど獨多く感じて、膏の自ら炙るを見ざる。

詩來苦相寬，子意遠可射。

詩來つて苦だ相寬うす、子が意は遠くして射るべし。

依依見其面，疑子在咫尺。

依依として其の面を見る、疑ふらくは子咫尺に在り。

兄今雖小官，幸忝佐方伯。

兄は今小官と雖も、幸ひに忝なく方伯を佐く。

北池近所鑿，中有汧水碧。

北池は近所鑿つ所、中に汧水の碧なるあり。

臨池飲美酒，尙可消永日。

池に臨みて美酒を飲ひ、尙ほ永日を消すべし。

古今體詩 次韻子由除日見寄 次韻子由除日見寄

但恐詩力弱，關健未免減。

但恐詩力弱，關健未免減。但恐詩力弱，關健未免減。但恐詩力弱，關健未免減。

詩成十日到，誰謂千里隔。

詩成十日到，誰謂千里隔。詩成十日到，誰謂千里隔。詩成十日到，誰謂千里隔。

一月寄一篇，憂愁何足擲。

一月寄一篇，憂愁何足擲。一月寄一篇，憂愁何足擲。一月寄一篇，憂愁何足擲。

【字解】一、薄官賦我西。陶淵明詩：飢來驅我老。史記鄒陽傳：年少官薄。然其間遊知交，皆其大父行，天下有名之士也。二、強歌。新論：強歌者，雖笑不樂。三、羊。羊のあつもの、職圖衆に、中山君饗都士大夫、羊羹不置。前にも出づ。

【詩】今の體賦は、陝西關中道に屬す。【二】無。語は乾肉、淮南子に、熊當心有白脂如玉、味甚美、俗呼熊白。周禮に、豕人、掌乾肉。【三】風指。白樂天之詩に、請君屈十指、爲我數交親。【四】驅。歲暮に疫鬼を逐ひ掃ふ、月令に、季冬之月、命有司大雩勞。註にいふ、此月有風鬼、將驅之強陰、出害于人。旁處於四方之門、驅也。後漢書志に、季冬先臘一日大雩、謂之逐疫、選中黃門子弟十歲以上、十二以下百二十人爲儂子、皆赤練單製、執大鏡以逐惡鬼於殿中。【五】雙。老健者ないふ、後漢書光武紀に、雙鬚是翁也。【六】嫩。初似麥、關中には梅がない。今、嫩薄似麥といふ、其の長じ難いことを言つたものである。嫩は粟の俗字、草木の若き芽。【七】。學。徐爲憫悽。文選、古詩に、樂於折其榮、悽悽ば、うちみいたむ、白居易の題思恩寺の詩に、悽悽尋歸留不得、紫羅花下兩黃昏。【八】夏。夏。夏は通じて核に作る、李梅の屬ないふ。前漢書、陳平傳に、食、雜聚耳。【九】人生行樂耳。漢書楊惲傳に、人生行樂耳、須富貴何時。【一〇】。聲名籍。漢書、賈賈傳に、名聲籍甚。【一一】。香自笑。漢書兩儀傳に、關卿飲食せずして死す、父老來り叩するあり、哭する甚だ哀し、既にして曰く、嗟乎、香以香自笑、香以明自銷、關生竟天。天年、弄香徒也と、遂に起りて出づ、其の誰なるを知らず。【一二】。方伯。魏記王制に、千里之外、設方伯州有伯。【一三】。弄水。爾雅に、水決之澤爲弄水。水經の註に、泗水過陳倉縣西、弄水入焉。【一四】。水日。詩に、且以喜樂、且以水日。【一五】。詩力。鄒谷の詩に、暮年詩力在。【一六】。賦。詩の巻頭に、頌嬌虎臣、在伴獸賦。【一七】。千里隔。謝朓の月賦に、隔千里兮分共明月。

【題義】子由が寄せた原詩は、辛丑即ち仁宗の嘉祐六年（皇紀一七二二年、西曆一〇六一一年）の除日

の作であるから、東坡の此詩は、翌七年正月の十日に出来たことは言ふまでもない。詩中に詩成十日到の句、之を證するに足る。註家の子由が原題に由つて、辛丑の末に作つたとするのは宜しくない。

【詩意】我は小官となつて、西邊に遣された。遠く離れるのは別に惜まないが、復、何時會ふことかと愁へるのである。従つて除夜などの所感はない。強ひて歡ぶといふのでは、酒も發しない。我が故郷の食膳をいふと、羊の羹、熊の乾肉、舌鼓が打たれる。兒童の時の樂も、指を數へれば、早や昔となつた。往事は菟を脱した箭の如く、逆も追ひ付くことは出来ない。世事轉轉、我が得た所は、失つた所を償はない。歳暮に、疫鬼を逐ひ掃ふといふ驅儂がある。府卒が來つて之を行ふ。其の老健なものには魔物も消えてしまふ。汝に面倒をかけるが、四方を攘つて惡鬼を逐へ。蜀の地には梅が乏しい。寒梅と凍つた杏、若い芽は麥のやうで、生長し難い。何時花を折ることが出来ようかと、條に攀ちていたむ。春色の晚きは憂へない。夏實の棄てられるを歎く。人生は行樂のみ、聲名の揚がるを求めない。薫は香を以て自ら焼き、膏は明を以て自ら銷するからである。子の詩が著いて心を寛うした。詩を誦して其の意を知り、其の面を見る心地がする。子の兄の我は、今小官で、地方の長官を佐けて居る。官宅に近く北池を鑿つたが、沝水を入れて、水が碧りである。此の池に臨んで美酒を飲むと、日を消することが出来る。ただ詩の力が弱くて健闘しても耳を斬られるであらう。子の寄せた詩は十日目に著いた。かくお互に千里を隔てて居つても一月に詩一篇を寄せられると、世の憂ひ、心の愁ひなど、くよくよするには足らない。

壬寅二月有詔令郡吏分往屬縣減決囚禁自
十三日受命出府至寶雞號郡蓋屋四縣既畢
事因朝謁太平宮而宿於南谿谿堂遂竝南山
而西至樓觀大秦寺延生觀仙游潭十九日乃
歸作詩五百言以記凡所經歷者寄子由

壬寅二月詔あり、郡吏をして分ちて屬縣に往いて囚禁を減決せしむ。十三日より命を受け府を出で、寶雞・號・郡・蓋屋四縣に至る。既に事を畢へ、因て太平宮に朝謁し、南谿谿堂に宿し、遂に南山に竝びて、西のかた樓觀・大秦寺・延生觀・仙游潭に至り、十九日乃ち歸る、詩五百言を作り、以て凡そ經歷せし所のものを記して子由に寄す

遠人罹水旱王命釋俘囚
分縣傳明詔尋山得勝遊
蕭條初出郭曠蕩實消憂
薄暮來孤鎮登臨憶武侯

遠人水旱に罹り、王命俘囚を釋す。
縣を分つて明詔を傳へ、山を尋ねて勝遊を得。
蕭條初て郭を出で、曠蕩實に憂を消す。
薄暮孤鎮に來り、登臨して武侯を憶ふ。

崢嶸依絕壁蒼茫瞰奔流
半夜人呼急橫空火氣浮
天遙殊不辨風急已難收
曉入陳倉縣猶餘賣酒樓
煙煤已狼藉吏卒尙呀咻
鷄嶺雲霞古龍宮殿宇幽
南山連大散歸路走吾州
欲往安能遂將還爲少留
回趨西號道却渡小河洲
聞道礪溪石猶存渭水頭
蒼崖雖有跡大鈞本無鉤
東去過郿塢孤城象漢劉
誰言董公健竟復伍孚讎
白刃俄生肘黃金謾似丘

崢嶸絶壁に依り、蒼茫奔流を瞰る。
半夜人呼ぶこと急なり、空に横はつて火氣浮ぶ。
天遙にして殊に辨せず、風急にして已に收り難し。
曉に陳倉縣に入れば、猶ほ餘す賣酒樓。
煙煤已に狼藉、吏卒尙は呀咻す。
鷄嶺雲霞古り、龍宮殿宇幽なり。
南山大散に連り、歸路吾が州に走る、
往かんと欲して安んぞ能く遂げん、將に還らんとして爲すに少く留めらる。
回つて西號の道に趨り、却つて小河洲を渡る。
聞道らく礪溪の石、猶ほ渭水の頭に存すと。
蒼崖ありと雖も、大鈞本なし。
東に去つて郿塢を過ぐれば、孤城漢劉に象る。
誰か言ふ董公健かなりと、竟に伍孚の讎を復す。
白刃俄に肘に生じ、黃金謾に丘に似たり。

平生聞太白。一見駐行騶。

平生太白を聞き、一見して行騶を駐む。

鼓角誰能試。風雷果致不。

鼓角誰か能く試みん、風雷果して致さんや不や。

巖崖已奇絕。冰雪更瓊鏤。

巖崖已に奇絶、冰雪更に瓊鏤。

春早憂無麥。山靈喜有湫。

春は早して麥なきを憂へ、山靈にして湫あるを喜ぶ。

蛟龍懶方睡。餅罐小容偷。

蛟龍懶くして方に睡り、餅罐小しく偷むことを容す。

二曲林泉勝。三川氣象侔。

二曲林泉勝れ、三川氣象侔し。

近山麤麥早。臨水竹篁修。

山に近くして麤麥早く、水に臨んで竹篁修し。

先帝膺符命。行宮畫冕旒。

先帝符命に膺り、行宮冕旒を畫く。

侍臣簪武弁。女樂抱笙篎。

侍臣武弁を簪し、女樂笙篎を抱く。

祕殿開金鎖。神人控玉蚪。

祕殿金鎖を開き、神人玉蚪を控く。

黑衣橫巨劔。被髮凜雙眸。

黑衣にして巨劔を横へ、被髮して雙眸凜たり。

邂逅逢佳士。相將弄綵舟。

邂逅佳士に逢ひ、相將めて綵舟を弄す。

投篙披綠荇。濯足亂清溝。

篙を投じて綠荇を披き、足を濯うて清溝を亂す。

晚宿南谿上。森如水國秋。

晩に南谿の上に宿すれば、森として水國の秋の如し。

遠湖裁翠密。終夜響颼颼。

湖を遠つて翠密を裁え、終夜響颼颼。

冒曉窮幽邃。操戈畏炳彪。

曉を冒して幽邃を窮め、戈を操つて炳彪を畏る。

尹生猶有宅。老氏舊停輶。

尹生猶ほ宅あり、老氏舊輶を停む。

問道遺蹤在。登山往事悠。

道を問ふに遺蹤在り、山に登る往事は悠し。

馭風歸汗漫。閱世似蜉蝣。

風に馭して汗漫に歸し、世を閱すること蜉蝣に似たり。

羽客知人意。瑤琴繫馬鞦。

羽客人の意を知つて、瑤琴馬鞦に繫ぎ、

不辭山寺遠。來作鹿鳴呦。

山寺の遠きを辭せず、來つて鹿鳴の呦を作す。

帝子傳聞李。嵩堂髣像綉。

帝子は李なることを傳聞す、嵩堂綉を髣像す。

輕風幃幔卷。落日髣鬢愁。

輕風幃幔卷き、落日髣鬢愁ふ。

入谷驚蒙密。登坡費挽摟。

谷に入つて蒙密に驚き、坡に登りて挽摟を費す。

亂峯攙似槩。一水澹如油。

亂峯は攙くして槩に似、一水澹として油の如し。

中使何年到。金龍自古投。

中使何れの年か到り、金龍古へより投す。

千重橫翠石。百丈見游條。

千重翠石横はり、百丈游條を見る。

最愛泉鳴洞。初嘗雪入喉。

最も愛す泉の洞に鳴るを、初めて嘗むれば雪喉に入る。

羽客知人意云云 李太白詩に、明朝有意抱琴來。【一】鹿鳴。詩の小雅、鹿鳴篇に、呦呦鹿鳴、食野之芣、我有嘉賓、薄酒設。和樂且湛。呦呦は鹿の和けるのである。【二】帝子。唐の玉真公主。【三】崑崙。女仙列傳に、西王母姓緋、其所居有元碧之堂。【四】髮像。ほのかにす、文選の海賦に、仿佛其色。【五】提兵。唐の王建が詩に、曉入溫門山、羣峰亂如戟、一木橫を壁に作る。【六】澹如油。白樂天の詩に、噴時千點雨、澄處一泓油。【七】游僧。莊子秋水篇に、儼魚出遊。【八】鹿裘。齊の晏子は布衣鹿裘以て朝す、魯公曰く、夫子の家、此の若く貧しきか、奚ぞ衣の麗しきやと。

【題義】宋史に據るに、嘉祐七年二月、命官錄三被水諸州繫囚と見えて居る。此の詔が同月の九日に鳳翔に至つた。鳳翔府では詔を奉じ、郡吏を屬縣に派遣して囚禁を減決せしめる。東坡も十三日に出張し、十九日に歸つたが、紀行の詩五百言を作つて子由に寄せたのである。鳳翔府に十縣ある。即ち天興・岐山・扶風・豐屋・郿・寶雞・麟遊・普潤・好時諸縣である。郡吏をして屬縣に分往せしめたが、東坡は寶雞・郿・豐屋の四縣に往くこととなつた。太平寰宇記によると、寶雞は、府の西南九十里に在る。郿縣は、府の南四十里に在る。鳳縣は、府の東南一百里に在る。豐屋は、府の東南二百里にあるといふことである。

【詩意】鳳翔の住民が水旱に罹つたから、王命があつて其の地方の俘囚を釋すこととなつた。府では手分をしてお上の仰せを傳達する。東坡も十三日に出發したが、圖らずも江山勝遊の機會を得たのである。初、城郭を出たときは、物さびしかつたが、已にしてひろびろとした気分、心の憂も消えた。夕暮に寶雞縣の武城鎮に着いた。昔、諸葛孔明が郝昭を陳倉に圍んだとき、此城で相攻拒したことが二十餘日、孔明の軍が退いたといふことである。登臨して諸葛武侯を憶ふ。其の形勝をいふと、峻し

く高く絶壁に依り、青青として廣く遠く奔流を見下す。夜中に人が急に呼ぶので驚いて起きると、空に火氣が横はつたが、天が遙にして辨せず、風が急に收まり難い。夜が明けて陳倉縣に入ると、城内の賣酒樓、此樓は唐の時代からの建物で、幾度かの兵火を免れたものである。其の樓も煙煤已に漲れる有様で、吏卒は聲を囁らして呼び廻はる。さて、又寶雞の東にある鷄爪峯や龍宮殿、峯には雲霞が古く、龍宮の殿宇も幽かである。縣の南は大散關で、秦・蜀往來の要道である。そして、終南山は關中の南面に横互して居る。歸路は蜀中に走る。往かうとしても往くことが出来ない。還らうとしても留められる。(以上は寶雞に在ることを述べた。)同りて西魏の道に趨り、却て小河洲を渡る。昔、太公望の釣した遺跡と傳へる確溪は、渭水の頭に在る。蒼崖に遺跡はあるものの、信せられない。太公は直鉤を以て釣る。又、其の意は魚にない。要するに自然の大釣には、人為の釣はない筈である。それから東に行いて郿塢を過ぎる。塢は塢壁で、土を築いた營居である。董卓は郿侯に封せられ、北阜に據つて塢を築き、以て長安の城形を寫した。俗に之を小長安と呼ぶ。董卓が廢立を議したとき、袁紹は勃然として天下に健なるものは、豈惟に董公のみならんやと言つたが、一體、誰が董公を健なりといふ、伍字に狙撃され、幸に之は免れたが、遂に養子の呂布の爲に刺された。變が肘腋の下に生じた譯である。董卓の塢中には、黄金の珍贖、積んで丘山の如くであつたといふ。郿縣に往く途中の太白山は、平生耳にして居るので、歩歩に騎り馬を駐めて、之を一見した。傳へいふ、太白山は、軍行鼓角を鳴らして山下を過ぎると、忽ち雷雨を致すと、果して然るかどうか、誰か鼓角を試みる。巖崖は

奇絶、冰雪は彫刻したやうである。春早して麥なきときも、山は雲にして湫あるを喜ぶ。蛟龍は情けて睡つて居るから、釣瓶で偷むことを容す。昔、河上にあ食にして、蒿を織るを以て業とするものあり、其の子淵に没して千金の珠を得しかば、父は其の子に謂つて曰く、玉は龍龍の領下に在り、子の能く珠を得しは、必ず其の睡に遣へばなりと言つたさうである。二曲即ち盤屋山には、林泉の勝がある。(盤屋を二曲といふのは、寰宇記や長安志に、山曲を盤といひ、水曲を屋といふからである。三川は、古は伊水、洛水、河水をいひ、唐以後は、劍南東西及び山南西道を三川とする。)三川の様子は似て居る。山に近く、地美にして、大麥小麦を早く生ずる。水に臨んで、官竹園が十數里絶えない。十七日、寒食の日、盤屋より東南に行く二十餘里、朝に太平宮二聖の御容に謁す。此の宮は、太宗皇帝の時、建てたものである。太宗が晉邸に在り、靈應を聞き、近侍を遣はして醜を太祖皇帝に致す。醜とは酒を供へて神を祭るのである。帝王の興る、必ず符命がある。(符命とは、天が祥瑞を降して人君に與へ、天命を受けた符とする義である。)先帝が天命を受けて、行宮に、天子の玉冠を畫き、侍臣は武人の冠を戴き、女樂は箏篋を彈く。秘殿が開くと、神人は玉蚪を控いて出る。黒い衣を着、大きな劍を佩び、髪をば亂して、兩目凜凜として居る。思ひがけもなく佳士に出會ひ、連れ立つて五色でるがいた舟を操る。篙を投じて練の水草を抜き、足を濯うて清澗を亂す。南谿の下に宿すると、水國の秋のやうな感じがする。湖水の周圍は、松や竹やが茂つて林をなし、一晩中、小風、涼風が吹いて已まない。朝早くから出かけ、幽邃の處を窮めると、虎の出るのを畏れて戈でも操りたいと思はる。樓

觀に到る。尹喜の舊宅である。昔、尹喜は函谷關の令となつて居たが、氣を候ひ、真人西游して此を過ぎるを知つたのである。(老子は青牛薄板車に乗つて、關を出る。喜曰く、子將に隠れんとす、我が爲に書を著せと。老子乃ち道德經を授けたといふことである。)遺跡はあるも、登仙の往事は遠く、風に御して、元氣の大本に歸し、世を閱する野游に似、朝に生じて暮には死す。羽客は人間の心を知つて、玉で飾つた琴を以て馬の鞅に繋ぎ、山寺の遠きを物ともしないで來て、鹿鳴の吻をする。呦呦たる鹿鳴、野の茶を食ひ、我に嘉賓あり、琴を鼓き和樂して且つ湛しむといふ詩の意味を行つたのである。睿宗の女、はじめ崇昌縣主に封せらる。俄に號を進めた所、天寶三年に上書して、妾は高宗の孫、睿宗の女、陛下の女弟、身分が賤しくない。何ぞ必しも名號を係けて貴となさん。請ふ道士となり、數百家の産を入れ、十年の命を延べんと、帝は之を許した。これが玉真公主である。崑堂に西王母をほのかに見るやうである。輕風は幃幔を卷いて、落日鬢鬢(總髮)何となく人をして愁へしむ。(玉真が遺跡の光景を狀して之を追傷するのである。)それから谷に入つて其の茂つてこまかなるに驚き、坡に登つて挽樓(樓も引く意)の力を費す。亂峰は栗のやうであり、一水は靜にして油のやうである。朝廷では内官を遣はし、金龍を此の潭に投じて祈禱した。(それは道家に金龍玉簡といふことがある。金龍は銅で製し玉簡は階石で製する。毎歲、朝廷から天下の名山洞府に金龍玉簡を投するのである。)翠石は千重に横はり百丈の下に游魚を見る。最も愛するのは、泉の洞に鳴るのである。水を嘗めると、雪が喉に入るやうである。瓶に一杯となつても耳を洗ふに由なし。(昔、堯帝が天下を巢父に讓ると、巢父

は清冷の水を過ぎ、其の耳を洗ひ、向に貪言を聞いて吾耳を汚せりと言つた故事に據つたのである。東坡の自註に、是日游崇聖觀、俗所謂樓觀也、乃尹喜舊宅、山脚有授經臺、尙在、遂與張杲之同至大秦寺、早食而別、有太平宮道士趙宗有、抱琴見送、至寺作鹿鳴之引、乃去、又西至延生觀、觀後上小山、有唐玉真公主修道之遺跡、下山而西行十數里、南入黑水谷、谷中有潭、名仙游潭、上有寺三、倚峻峰、面清溪、樹林深翠、怪石不可勝數、潭木以繩繩石數百尺、不得其底、以瓦礫投之、翔揚徐下、食頃乃不見、其清激如此、遂宿於中興寺、寺中有玉女洞、洞中有飛泉、甚甘、明日以泉一瓶歸至郡、又明日乃至府とある。其の游跡の大要が分る。忽ち思ひ浮べるのは、蝦蟇塔に游んだ際に、洞中が温いので、寒い冬の日に鹿裘を脱いだことである。東坡の自註に、昔與子由遊蟾塔、時方冬、洞中温温如三三月とある。其時と今と山川も似て居り、水石も亦同じである。ただ泉傍で酒を飲み、盃のやりとりする人（即ち子由）が居らないことが異つて居る。

太白山下早行至横渠鎮書崇壽院壁

太白山下早行、横渠鎮に至り、崇壽院の壁に書す

馬上續殘夢、不知朝日昇。

馬上殘夢を續ぎ、朝日の昇るを知らず。

亂山橫翠幃、落月澹孤燈。

亂山翠幃横はり、落月孤燈澹し。

奔走煩郵吏、安閒愧老僧。

奔走郵吏を煩はし、安閒老僧に愧づ。

再遊應眷眷聊亦記吾曾

再遊應に眷眷たるべし、聊か亦、吾が曾てするを記せよ。

【字解】一、太白山、陝西武功縣に在る、前に註せり。二、崇壽院、縣の東五十里、横渠鎮の内に在る。横渠鎮は、鳳翔府鳳縣の東方大振谷に在る。三、翠幃、みどり色の屏風。幃は障の意で、屏風の名である。四、郵吏、驛吏といふに同じ、方千の詩に、泊岸旅驛郵吏拜。五、眷眷、慕ひて忘れることが出来ない。六、吾曾、吾が曾て過ぎつたことある意。

【題義】壬寅即ち嘉祐七年（皇紀一七二二年、西暦一〇六二年）二月十六日の早旦、東坡が鄜州から鞏屋に赴く時、太白山の麓を過ぎ、崇壽院に立ち寄る。壁上に題し、宿せずして去る。唐宋詩解の評に、次聯是早行景色、妙從首句殘夢二字一生出、故日月字、不嫌雜見とある。さて、唐の劉駕（字は司南）が早行の詩に、馬上續殘夢、馬嘶時復驚、心孤多所虞、僮僕近我行、棲禽未分散、落月照孤城、莫羨居者閒、谿邊人已耕、とある。そこで、紀昀は、東坡の此詩を評して曰く、此昌黎所謂何好何惡之詩、首句直寫劉方平之詩、當由偶合、東坡非盜句者一也と。

【詩意】公事で、日程も定まつて居るから余は早行する。馬上、前夜の殘夢をつづけ、朝日の昇るをも知らないで、うつらうつらとした。途の亂山は夜前、宿處にあつた翠幃と見なし、又、前の方に見える山の落月を昨晩の孤燈と見なす。（亂山の句は、殘夢より生じ出す。）余は官人であるから、横渠鎮の驛吏だけは、迎へ送りなど奔走される。まことに煩はして氣の毒に思ふ。之に反し崇壽院の老僧は安閑として居られるので、之に對すると愧かしく感ずる。我は名利の爲に奔走するを免かれない。それを愧かしく感ずるのである。今日此寺へ參つたが、他日、眷眷の情に堪へないで、再遊をなすこと

であらう。寺僧たちに記憶して置かれるやうに、お頼みする。

留題延生觀後山上小堂 延生觀後の山上小堂に留題す

溪山愈好意無厭 溪山愈好くして意厭くことなし、

上到巉巉第幾尖 上つて巉巉たる第幾尖に到る。

深谷野禽毛羽怪 深谷の野禽毛羽怪に、

上方仙子鬢眉纖 上方の仙子鬢眉纖なり。

不慚弄玉騎丹鳳 弄玉丹鳳に騎るに慚ぢず、

應逐嫦娥駕老蟾 應に逐ふなるべし嫦娥の老蟾に駕す

澗草巖花自無主 澗草巖花自ら主なし、

晚來胡蝶入疎簾 晚來胡蝶疎簾に入る。

【字解】(一) 上方仙子 唐の玉眞公主。上方は山寺をいふ。杜子美の詩に、上方重閣曉、百里見、巖峯、(二) 弄玉騎丹鳳、列仙傳に、蕭史善吹簫、秦穆公以女弄玉妻之、遂教弄玉吹簫作鳳鳴、一旦弄玉乘鳳、蕭史乘龍昇天而去。(三) 嫦娥、淮南子に、羿、不死の藥を西王母に請ふ。姮娥之を竊んで月に奔る。姮娥は羿の妻。(四) 駕老蟾、韓退之の毛狐傳の說言に、兔竊嫦娥之跡

【題義】前の東坡の自註に據るに、西至延生觀、觀の後の小山に、唐の玉眞公主修道の遺跡があると云つたが、ここの小堂が其れである。(即ち玉眞の堂)唐睿宗の景雲元年(皇紀一三七〇年、西曆七一〇年)睿宗の第八女西城公主、第九女昌隆公主、竝に出家した。同二年に、西城は金仙に、昌隆は玉

巖に改封された。

【詩意】溪山は漸く佳境に入つて、何時まで見ても厭きが來ない。峻しい第幾峰といふに上つた。深谷の野禽も珍しく、山寺の仙子は美しく鬢眉が纖かである。かの弄玉といふ美人の丹鳳に騎つた姿にも劣らない。これでは嫦娥の老蟾に駕ると同じやうに月中に入つて月精となるであらう。谷間の草や巖上の花は、折節の移り變りを示して居り、胡蝶の疎簾に入るのが目に入つた。

留題仙遊潭中興寺東有玉女洞洞南有馬融讀書石室過潭而南山石益奇潭上有橋畏其嶮不敢渡

仙遊潭に留題す、中興寺の東に玉女洞あり、洞の南に馬融が讀書石室あり、潭を過ぎて南すれば山石益奇、潭上に橋あれども、其の嶮なるを畏れて敢て渡らず

清潭百尺皎無泥 清潭百尺皎として泥なし、
山木陰陰谷鳥啼 山木陰陰として谷鳥啼く。
蜀客曾遊明月峽 蜀客曾て遊ぶ明月峽、
秦人今在武陵溪 秦人は今武陵溪に在り。

古今體詩 留題延生觀後山上小堂 留題仙遊潭中興寺東有玉女洞

【字解】(一) 玉女洞 太平寰宇記に、襄陽縣有玉女洞、秦の穆公の女弄玉が風姿の地。(二) 讀書石室、終南圖經に、讀書臺在縣城西一百步。元和郡縣志に、馬融讀書臺在

獨攀書室窺巖竇。

獨書室を攀ちて巖竇を窺ひ、

還訪仙姝款石閨。

還仙姝を訪うて石閨を款く。

猶有愛山心未至。

猶ほ山を愛する心の未だ至らざるあ

不將雙腳踏飛梯。

雙脚を將て飛梯を踏まず。

「つて、

に武陵縣、桃花縣がある。桃花山は桃花縣の西南三十里に在り。山中に桃花洞といふのがある。陶淵明が桃源記を作つた處といふ。【一】
仙姝 仙女と同じ、玉女を指す、吳の人は、美女を姝といふ。詩に靜女其姝。【二】石閨 玉女洞門。
【題義】 玉女潭は、麟游縣（陝西關中道に屬す）の南二十里、魚塘峽内に在る。其水は永安宮前から流れて此の潭に入る。半山より飛下して、聲、巖谷に振ふといふ。山は愛するが危きを踏まない。

【詩意】 仙遊潭は深く泥がない。山木が茂つて谷間の鳥も啼いて居る。蜀の旅人（東坡自らいふ）は曾て明月峽に遊んだ。（東坡が弟子由と舟行、京師に赴いた時に經由した所）武陵桃源の話ではないが、秦時代のやうな昔の人が今に存して居る。（武陵桃源といふのは、晉の陶淵明が假設の記事で、晉の太元中、武陵の漁人が溪に緣つて行いて見た別天地である）中興寺の東に玉女洞があり、洞の南に馬融が京兆の學術といふ隱遁した學者に從つて讀書したといふ石室がある。其の石室を攀ちて巖穴を窺ひ、又、仙女を訪うて玉女洞門を叩いた。險阻を畏れて自分の兩脚を飛梯の處まで運ばなんだのは、山を愛する心が足りないであらう。

石鼻城

石鼻城

平時戰國今無在。

平時戰國今あるなし、

陌上征夫自不聞。

陌上の征夫自ら聞ならず。

北客初來試新險。

北客初めて來つて新險を試み、

蜀人從此送殘山。

蜀人此より殘山を送る。

獨穿暗月朦朧裏。

獨穿つ暗月朦朧の裏、

愁渡奔河蒼茫間。

愁へて渡る奔河蒼茫の間、

漸入西南風景變。

漸く西南に入れば風景變じ、

道邊修竹水潺湲。

道邊は修竹水は潺湲。

【字解】

【一】石鼻城 奔水の北に在る。南のかた、陳倉を去る三十里。東坡の前註にある武城鎮は石鼻寨である。【二】戰國 蜀と魏とを指す。【三】征夫 旅人。陶淵明の歸去來の辭に、問征夫以前路。【四】隱 月が將に入らんとするを隱とし、日が將に出でんとするを顯とする。

【題義】 魏の明帝が太原の郝昭をして陳倉城を營ましむ。諸葛孔明が之を圍んだが下らなかつた。潺湲の水の亮城に對する所が亮と昭と相禦いだ處である。亮の城といふのが石鼻城。此詩は之を畫き出す。

【詩意】 今の平時に、蜀と魏とが對壘したやうな戰國はない。それで路上の行人が來往に忙はしい。北から來つて蜀に入るものは、此に至つて、漸く山に入る。故に新險を試むといふ。（新險の字、甚だ新）蜀から來つて京洛に趨くものは、此に至つて已に山を出る。故に殘山を送るといふ。おぼろ月

夜に路を辿つて獨行き、蒼茫の間に奔流を渡るのも、うれはしげの心地する。(此地に於て涓河を見る) 此地より寶雞に往くは、漸く西南に入る譯になり、風景も變はつて珍らしく、道のべには長い竹が生えて居り、水は潺湲として徐に流れて行く。

礧溪石

礧溪石

墨突不暇黔。孔席未嘗煖。
安知涓上叟。跪石留雙髻。
一朝嬰世故。辛苦平多難。
亦欲就安眠。旅人讖客懶。

墨突黔むるに暇あらず、孔席未だ嘗て煖らず。
安んぞ知らん涓上の叟、石に跪いて雙髻を留むるを。
一朝世故に嬰り、辛苦多難を平ぐ。
亦安眠に就かんと欲す、旅人客懶を讖る。

【字解】(一) 礧溪 礧縣を距る十八里。(二) 墨突不暇黔 黔云 墨氏の煙突は、黒くなる暇がない。孔子の席も、煖まらない。淮南子の修務訓に、孔子無動突、墨子無煖席。班固の答賈誼に、孔席不煖、墨突不黔。(三) 涓上叟 涓水の上に釣した太公望。

【題義】太公望が釣した礧溪を借りて仕官の勞を寫し、而も渾然として跡のないやうにしたのが此詩である。史記、齊の世家に、武王已平商、而王天下、封師尚父於齊營丘、東就國、道宿行通、逆旅之人曰、吾聞、時難得而易失、客寢甚安、殆非就國者之也、太公聞之、夜衣而行、黎明至國と見えて居る。

【詩意】墨子の煙突は、轉居することが多いために、黒くならない。孔子の席は、奔走に暇がないために、煖くならない。太公望が石に跪いて動かないことを知らないのである。この太公望は、一朝世事に關係して、文王に従ひ、又、武王を輔けて紂王を伐つ。紂王を滅ぼした後、安眠を貪らうとしたが、旅人に讖られて再び起つたのである。

鄆塢

鄆塢

衣中甲厚行何懼。
塢裏金多退足憑。
畢竟英雄誰得似。
臍脂自照不須燈。

衣中の甲厚行く何ぞ懼れん。
塢裏金多くして退くも憑むに足る。
畢竟英雄誰か似るを得る。
臍脂自ら照して燈を須むず。

【題義】鄆の塢より董卓の事に及び、一種の史論をなしたのである。
【詩意】董卓は塢を鄆に築き、穀を積んで三十年の儲をなし、自ら言ふのに、事が成れば、天下に雄據し、事が成らなくても、此處を守れば、以て老を畢るに足ると。要するに之に似る英雄は至つて少ない。董卓の尸を市に暴した所、丁度熱い時分で、脂が澤山に地に流れ出した。守尸の吏が火を燒やして卓の臍中に置いた所、幾日も光明が赫いたといふことである。

【字解】(一) 鄆塢 後漢書に、董卓築塢於鄆、號萬成塢。塢はとりてをいふ。(二) 臍脂自照 卓の屍を市に暴らす。卓は肥え太つて居る。大炷を爲り、之を臍中に置いて燃やした所、光明が暗に達す、かかることが数日であった。

樓觀

樓觀

門前古碣臥斜陽

門前の古碣斜陽に臥す、

閱世如流事可傷

世を閱する流るるが如く事傷むべし。

長有幽人悲晉惠

長へに幽人あつて晉惠を悲しみ、

強修遺廟學秦皇

強ひて遺廟を修めて秦皇を學ぶ。

丹砂久窅井水赤

丹砂久窅井水赤しき、

白朮誰燒廚竈香

白朮誰か燒いて廚竈香ばきし。

聞道神仙亦相過

聞道らく神仙亦相過ぐと、

只疑田叟是庚桑

只疑ふ田叟是れ庚桑。

庚桑 莊子の庚桑楚に、老聃之徒、有庚桑楚者、偃得老聃之道、以北居長壘之山。役は弟子、師の爲に役を執るよりいふ。
【題義】樓觀は、もと周の康王の大夫尹喜が宅で、相承けて秦・漢に至り、皆、道士が之に居る。秦の始皇は、神仙を好まれ、尹先生の樓南に老君廟を立てた。

【詩意】樓觀の門前に在る古い石碑は、周の康王の大夫關令尹喜が立てた所、尹喜は老君に遇ひ、道を得た人である。門前の古い碑は、夕日に臥して居る。昔の言葉に、川は水を閱て以て川を成し、水は滔滔として日に度る、世は人を閱て世を爲し、人は再舟として行き暮るとあるが、長へに幽人は晉

の惠帝を悲しむ。帝は性昏愚で、強ひて樓觀の遺廟を修め、秦の始皇が不老不死の神仙を學んだ。晩年麴を食ひ、毒に中りて崩じた。仙術によると、丹砂は化して黄金とすることが出来る。黄金が久しく窅にあつて其の丹汁が泉に因つて漸く井戸に入り、水が赤くなる。之を飲むと壽を得る。白朮といふ藥草は能く惡氣を除いて災沓を弭めるが、今は誰が之を燒いて廚の竈を香しからしめる。要するに神仙の術も亦過去となつた。只疑ふのは、此土の田翁は、或は是れ莊子に見える庚桑其人ではなからうか。

題寶雞縣斯飛閣

寶雞縣の斯飛閣に題す

西南歸路遠蕭條

西南の歸路遠くして蕭條、

倚檻魂飛不可招

檻に倚る魂は飛んで招くべからず。

野闊牛羊同雁鷺

野闊うして牛羊は雁鷺に同じく、

天長草樹接雲霄

天長うして草樹雲霄に接す。

昏昏水氣浮山麓

昏昏として水氣山麓に浮び、

汎汎春風弄麥苗

汎汎として春風麥苗を弄す。

誰使愛官輕去國

誰か官を愛して輕しく國を去り、

此身無計老漁樵

此身を漁樵に老ゆるを計るなからしむ。

古今雜詩 樓觀 題寶雞縣斯飛閣

【字解】(一)樓觀 崇勝觀をいふ、東坡の自註に、秦始皇立老聃廟於觀南晉惠始修此廟。元和郡縣志に、樓觀在靈屋縣東三十七里。

(二)古碣 古い堅石、均しくたて石であるが、其の形の角なるを碑といひ、圓なるを碣といふ。(三)丹砂 久魯云云 抱朴子に臨沅縣有彭氏、家世壽考、後徙去、子孫轉天折、他人居其故宅、復如舊、後累世壽考、疑其井水殊赤、乃試掘井左右、得古人埋丹砂數十斛、丹汁因泉漸入井、是以飲其水而得壽。

(四)白朮 是れ以て煉を執るよりいふ。

(五)聞道 聞ひて、

(六)只疑 只疑ふ、

(七)田叟 田舎の翁、

(八)庚桑 庚桑楚、

(九)秦 秦の始皇、

(一〇)強修 強ひて修む、

(一一)丹砂 丹砂、

(一二)窅 窅、

(一三)井水 井の水、

(一四)赤 赤、

(一五)白朮 白朮、

(一六)誰燒 誰か燒く、

(一七)廚竈 廚の竈、

(一八)香 香、

(一九)聞道 聞ひて、

(二〇)神仙 神仙、

(二一)亦相過 亦相過ぐ、

(二二)只疑 只疑ふ、

(二三)田叟 田舎の翁、

(二四)是 是れ、

(二五)庚桑 庚桑楚、

(二六)秦 秦の始皇、

(二七)強修 強ひて修む、

(二八)遺廟 遺廟、

(二九)學 學ぶ、

(三〇)秦皇 秦の始皇、

(三一)學 學ぶ、

(三二)丹砂 丹砂、

(三三)窅 窅、

(三四)井水 井の水、

(三五)赤 赤、

(三六)白朮 白朮、

(三七)誰燒 誰か燒く、

(三八)廚竈 廚の竈、

(三九)香 香、

(四〇)聞道 聞ひて、

(四一)神仙 神仙、

【題義】此詩は、寶鷄の斯飛閣を過ぎ、宋遷といふ人の鳳翔の任を罷めて去るを懐ひ、人が官を愛して輕しく國を去り、其の身を漁樵の安きに返らしめることが出来ないのである。

【詩意】西南の歸路は、遠くして寂しい。宋玉の言葉に、魂よ來り歸れ（魂今來歸）などあるが、魂は飛んで招くことが出来ない。見渡せば、野原は廣くして、青天に連り、地に居る牛羊は、空に翔ける雁や、鶯と同じ處に居るやうである。又、天は長くして、地上の草樹は、雲霧に接するやうである。水氣が山の麓に浮んで昏昏である。春風が麥苗を弄して汎汎（廣く流れる）である。仕官を愛して漁樵の安きに返ることの出来ないのは、情ないのである。

壬寅重九不預會獨遊普門寺僧閣有懷子由

壬寅重九、會に預らず、獨普門寺の僧閣に遊び、子由を懷ふあり

花開酒美盃不歸。 花開き酒は美なり盃ぞ歸らざる、
來看南山冷翠微。 來り看る南山翠微冷なるを。
憶弟淚如雲不散。 弟を憶ふ涙は雲の散せざるが如く、
望鄉心與雁南飛。 鄉を望む心は雁と南に飛ぶ。
明年縱健人應老。 明年縱健かなるも人應に老ゆべし、

【字解】 壬寅重九 仁宗の嘉祐七年九月九日。 蒙下歲時記に、都城重九、後一日宜賞、號小重陽。重陽即重九に同じ。 普門寺 鳳翔府志に、普門寺在東門外、唐建、金大定六年重修。 翠微 山の八合目位の處、爾雅に未及上曰翠

昨日追歡意正違。 昨日追歡意正に違ふ。

不問秋風強吹帽。 秋風強ひて帽を吹くを問はず、

秦人不笑楚人譏。 秦人は笑はず楚人は譏る。

【題義】 仁宗の嘉祐七年、東坡は大理事評事、簽書鳳翔の節度判官であつたが、九月九日の節句に府會に與らなかつたので、獨遊んで此に至つた。舍弟を懷うて已まないから此詩を寄せたのである。

【詩意】 花も笑ひ、酒も美しい。いざ歸らうと、出でて南山の八合目邊の涼しいのを見る。弟を憶ふ涙は曇りがちであるし、郷里を思ふ心は、雁の南に飛ぶやうで、早く歸りたくて堪らない。明年たとひ此身は健であつたとしても、此の人は老ゆるであらう。實は、昨日は樂を尋ねたが樂を得なかつた。昔、桓温が僚佐を招宴した時、孟嘉は風の爲に帽を吹き落された。其を少しも心付かなかつた。併し、秋風が帽を吹き落すなどは問題でないから、どうでもよい。其の舉止に性格が見はれる、秦人は笑はないし楚人は譏るのである。

客位假寐

謁入不得去、兀坐如枯株。 謁入りて去るを得ず、兀坐枯株の如し。

古今體詩 壬寅重九不預會獨遊普門寺僧閣有懷子由 客位假寐

豈惟主忘客。今我亦忘吾。
 同僚不解事。慍色見髻鬚。
 雖無性命憂。且復忍須臾。

豈惟主の客を忘るのみならん、今我亦吾を忘る。
 同僚事を解せず、慍色髻鬚に見はる。
 性命の憂なしと雖も、且く復須臾を忍べ。

【字解】(一) 客位假寐。客位は客次に同じ、來客に應接する所、五代史に、進奏官至客次、通名。假寐はうたたね、詩、小雅の小弁に心之憂矣、不遑假寐。(二) 兀坐。肩をそびやかして坐する。(三) 忘吾。莊子の齊物論に、今者吾喪我。同じく田子方に、離忘乎故吾。(四) 同僚不解事。杜子美の詩に、小兒強解事。時に王彭驚。府諸軍、於公朝、未嘗降色辭。(五) 雖無性命憂。云云。晉書の鄧超傳に、進中書侍郎、謝安與王文度共詣超、日吁未得前、文度便欲去、安曰、不能爲性命忍。戲頃。祁。

【題義】此詩は東坡の自註に據ると、鳳翔府の守陳公弼に謁するに因つて作つたのである。陳公弼は郷里の長老を以て自ら居り、東坡は少年氣剛に少しも下らない。東坡と陳公弼とは相叶はなかつたので、謁入の時も見ゆることが出来なかつた。此詩を作つた所以である。此詩は解嘲の意、同僚に慍色のものがあつたから、戲をなしたまでである。

【詩意】東坡は陳公弼に謁したが、應接間に待たされて、肩を聳かし、枯木のやうに坐して居つた。主人が客を忘れたばかりではなく、我も亦吾自身を忘れたのである。同僚の王彭は事を解しないので、陳公弼の態度を憤慨し、顔色を變へた。そこで我は性命の憂がなくとも、まあ暫く忍びたまへと注意した。これは昔、謝安が王文度と共に都超の許に詣つたとき、日が吁けても前むことが出来なかつたので、文度は去らうとすると、謝安は性命の爲に俄頃を忍ぶこと能はざらんやと言つた故事に據つたものである。

ものである。

九月二十日微雪懷子由弟 二首 九月二十日微雪子由弟 二首

岐陽九月天微雪、
 已作蕭條歲暮心。

岐陽九月天微雪し、
 已に蕭條たる歳暮の心を作す。

短日送寒砧杵急、
 冷官無事屋廬深。

短日寒を送りて砧杵急なり、
 冷官事無くして屋廬深し。

愁腸別後能消酒、
 白髮秋來已上簪。

愁腸別後能く酒に消し、
 白髮秋來已に簪に上る。

近買貂裘堪出塞、
 忽思乘傳問西琛。

近う貂裘を買へば出塞するに堪へたり
 忽ち思ふ傳に乗じ西琛を問はんことを。

【字解】(一) 岐陽。鳳翔府である。元和郡縣志に、岐陽縣、漢杜陽。地岐山之南にあるから岐陽といふ。(二) 短日。韓退之の詩に、陰風慘。短日。(三) 砧杵。きわたのきね、鋪光義の詩に、秋山響砧杵。(四) 冷官。杜子美の詩に、廣文先生官調冷とあるが、詩に冷官を用ゐるのは、必しも廣文には定まつて居ない。(五) 白髮。上。簪。杜子美の詩に、白髮不勝簪。(六) 貂裘。貂の皮で作つた裘。輕くて暖かい。蘇季子の裘であることは、史記に見ゆ。(七) 琛。寶である。詩の巻頭に、惟彼淮夷、來獻其琛。懷は遠行の貌。

【題義】陳公弼が東坡に命じて府學教授を兼ねしめたから、詩中に、冷官無事云云と言つて居ると論ずるものがある。これは、治平甲辰八月、東坡が和園中草木詩の自註に、夜宿府學の語あるより

附會したものである。樂城集の和詩に、離思隔年の句があるのに據ると、確に壬寅の作である。紀昀は、居下僚而不得志、憤激而爲立功邊外之思、鬱抑時實有此想、騷君若不相屬也、と説いて居る。

【詩意】頃は九月の二十日、岐陽に微雪が降つたので、何とはなしに物寂びしい歳の暮氣分となつた。日が短く、子夜に打つ砵の音も寒を透つて急である。官も薄く事もなくて、茅屋に引込んで居る。相別れて居るといふ愁も酒の力で少しく消して居るが、白髪は已に長く簪に上つた、近頃、軽くて暖な貂裘を買つたから、北方の寒を出ることが出来る。すると忽ち驛傳に乗つて西の實を問ひたいと思ふのである。

江上同舟詩滿篋

江上舟を同うして詩篋に滿つ、

鄭西分馬涕垂膺

鄭西に馬を分ちて涕膺に垂る。

未成報國慚書劍

未だ國に報ゆるを成さず書劍を慚づ、

豈不懷歸畏友朋

豈歸るを懷はざらんや友朋を畏る。

官舍度秋驚歲晚

官舍秋を度りて歲晩に驚く、

寺樓見雪與誰登

寺樓雪を見る誰と與にか登らん。

【字解】

鄭州は今は鄭縣、河南省開封道に屬す。【書劍】昔、鄭生は書を或め劍を學びしも、兩つながら成らなかつた。【豈不懷歸】左傳莊公二十二年に、詩云、豈不懷歸。長此友朋。【讀易】東坡と子

遙知讀易東窗下

遙に知る易を東窗の下に讀み、

車馬敲門定不響

車馬門を敲くも定ず響へざるを。

作易傳未完、命二子述其志。【敲】説文に、以首對也。類當に答言也。

【詩意】昔、子由と舟を泛べて京師に趨いたが、遊草が篋に一杯となつた。南行集といふのが、其時の詩を集めたものである。鄭州の西門外で分れ、離別の涕は膺に垂れた。國に報ゆること出来なく、書も劍も成就しなかつた。自分は郷里に歸りたいは山山であるが、朋友の手前を畏れる。官舍も秋を経て、やがて歲晩となつた。寺の二階から雪景色を眺める。一體誰と共にか登らう。遙に知る易を東窗の下で讀んで、心を専にし、車馬が門を叩いても響へないであらうことを。

病中聞子由得告不赴商州 三首

病中に子由が告を得て商州に赴かざるを聞く 三首

病中聞汝免來商

病中聞く汝が商に來るを免ると、

旅雁何時更著行

旅雁何れの時か更に行を著けん。

遠別不知官爵好

遠く別れて官爵の好きを知らず、

思歸苦覺歲年長

歸るを思うて苦に覺ゆ歲年の長きを。

【字解】

商州、今の商縣、陝西關中道に屬す。輿地廣記に、商州、商契始封於此。聖儀が楚に贈うたといふ商於の地六百里は此地である。【更著行】子由若し商州

著書多暇真良計

著書暇多きは真に良計

從官無功漫去鄉

從官功なく漫に郷を去る

惟有王城最堪隱

惟王城の最も隱るるに堪へたるあり、

萬人如海一身藏

萬人海の如く一身藏る

に赴かば、以て鳳翔に至るべし。今然らず、これ朝族之無不著行となす。【王城最堪隱】子由尙在京師に在るをいふ。王城は京師を指す。

【題義】子由は商州の推官に除せられたが、知制誥王介甫が其の辭命を下さなかつた。東坡は是より先に鳳翔に赴いて居る。已にして子由は告（賜暇）を得、親を養ふ三年を乞うて許されたから、商州に赴かないで、遂に詩を東坡に寄せ、東坡は病中に之を聞いて此の三首を作つたのである。

【詩意】商州は山南西道に屬しては居るが、鳳翔の東南に在る。子由が若し商州に赴くなら、鳳翔にも至るべきであるのに、今は其事が叶はない。是れ旅雁の翔けることを得ないと同じである。遠く別れては、官爵の好きを知らず。歸るを思うては、一日が千秋である。書を著すものの暇の多いのは、真に良計であるが、官遊功なくして漫に郷を去るは残念である。ただ弟子由が商州に赴かないで、尙は京師に居るから、隱れることが出来る。併し、萬人は海の如く、容るる所があるから、一身は藏れるのである。

近從章子聞渠説、苦道商人望汝來。

近ら章子に従つて渠の説を聞く、苦に道ふ商人は汝の來るを望むと。

【字解】【子】章子、章子惇を指す。宋史に、章惇、字子厚、浦城人。東坡が鳳翔節度判官に任じたとき、

説客有靈慚直道

説客靈あらば直道に慚ぢん、

逋翁久歿厭凡才

逋翁久しく歿して凡才を厭ふ。

夷音僅可通名姓

夷音は僅に名姓を通すべし、

瘠俗無由辨頸顛

瘠俗は頸顛を辨するに由なし。

答案不堪宜落此

答案堪へざれば宜しく此に落つべし、

上書求免亦何哉

上書して免るを求むる亦何ぞや。

【詩意】説客は商の令となる。二人相得て甚だ歎ぶ。【逋翁】説客、張儀を指す。張儀は楚を欺いたが、其の行爲の卑劣であることは言ふまでもない。もし靈あらば直道を行ふ子由に對して慚づべきであらう。商山の四皓歿して久しく、凡才は厭ふべきである。商山の人は言葉が夷人の如くであるから、僅に名姓を通すべし。商の人には頸顛が多いので、頸と顛とが分らない。子由が對策納れられなければ宜しく之と運命を共にすべく、上書して免るを求めるなどはよろしくない。(子由は年二十三で、直言に擧げらる。仁宗は之を親策した。答案が時政の得失を極言したので、

考官中には、色色議論もあつたが、仁宗は以三直言召人而以直棄之、天下謂「我何」と言はれたから、宰相は已むを得ず、商州の推官に除した。

辭官不出意誰知。

官を辭して出でず意誰か知らん、

敢向清時怨位卑。

敢て清時に向つて位の卑きを怨む。

萬事悠悠付杯酒。

萬事悠悠杯酒に付し、

流年冉冉入霜鬢。

流年冉冉霜鬢に入る。

策曾忤世人嫌汝。

策曾て世に忤ひ人汝を嫌ふ、

易可忘憂家有師。

易は憂を忘るべく家に師あり。

此外知心更誰是。

此外に心を知る更に誰か是なる、

夢魂相覓苦參差。

夢魂相覓めて苦た參差。

【字解】「清時」治まれる世、

李陵が蘇武に答ふる書に、策名清時。

「流年」王粲の詩に、撫轡駐流年。

「家有師」老蘇に易傳の著がある。

「知心」韓退之の賦に、惟知心而難得。神月師賈休の詩に、此心能有幾人知。

「夢魂」二人爲り友、每相思不能得。高惠、二人爲り友、每相思不能得。具、敏便於夢中、往尋、但行至半道、即迷不知路、遂問、劉禹錫の詩に、

夢尋歸路多參差。

【詩意】官を辭して出でない本意を誰が知らうぞ、治まれる世に位の卑きを怨むのは陋である。萬事は悠悠杯酒に付して心に置かない。歲月は冉冉として進み行き鬢も白くなる。對策して極言し、世に忤うたので、人は汝を嫌ふ。併し、易經を讀むと煩悶を忘れるが、幸に易は家學で、父蘇老泉には易路が分らない。

傳といふ立派な著書がある。此外に心を知るは誰である。(我より外にはない)夢魂は相覓めて迷うて路が分らない。

病中大雪數日未嘗起觀號令趙薦以詩相屬

戲用其韻答之

病中、大に雪ふる數日、未だ嘗て起つて觀ず、號の令趙薦詩を以て相屬す、戲れに其の韻を用ひて之に答ふ

經旬臥齋閣終日親劑和

旬を経て齋閣に臥し、終日劑和に親しむ。

不知雪已深但覺寒無奈

知らず雪の已に深きを、但覺ゆ寒の奈んともするなきを。

飄蕭窗紙鳴堆壓簷板墮

飄蕭として窗紙鳴り、堆壓して簷板墮つ。

風颺助凝冽幃幔困掀簸

風颺凝冽を助け、幃幔掀簸に困しむ。

惟思近醇醲未敢窺瓌瑳

惟思ふ醇醲に近く、未だ敢て瓌瑳を窺はざるを。

何時反炎赫却欲躬白磨

何れの時か炎赫を反し、却つて白磨を躬かせんと欲す。

誰云坐無氍尚有裘充貨

誰か云ふ坐に氍なしと、尙ほ裘の貨に充つるあり。

西鄰歌吹發促席寒威挫

西鄰歌吹發り、席を促して寒威挫く。

崩騰踏成逕、繚繞飛入座。

崩騰踏みて逕を成す、繚繞飛んで座に入る。

人歎瓦先融、飲雋餅屢臥。

人歎びて瓦先づ融け、飲雋餅屢々臥す。

嗟予獨愁寂、空室自困圯。

嗟予獨愁寂、空室自ら困圯。

欲爲後日賞、恐被遊塵瀉。

後日の賞を爲さんと欲するも、恐くは遊塵に瀉されん。

寒更報新霽、皎月懸半破。

寒更に新霽を報じ、皎月懸りて半ば破る。

有客獨苦吟、清夜默自課。

客ありて獨苦吟、清夜默して自ら課す。

詩人例窮蹇、秀句出寒餓。

詩人は窮蹇を例とす、秀句は寒餓に出づ。

何當暴霜雪、庶以躡郊賀。

何か當に霜雪を暴かすべき、庶くは以て郊賀を躡まん。

【字解】【一】 饑令 元和郡縣志に、饑縣在鳳翔府北三十里、古饑國、周文王弟饑叔所封。【二】 趙國 字は實與、臨邛の人。

【三】 無句 韓愈の詩に、茲遊苦不數、再到逢無句。【四】 州和 まで合せた製藥、漢書藝文志に、醫經者、調百藥齊和之所宜。【五】 風蕭 杜詩に、風蕭聲素榮。【六】 當板 東坡の自註に、關中皆以板爲當。【七】 風鳴 あらゆるむじ風、爾雅に、暴風從下上、曰風。【八】 醉醺 厚酒、魏都賦に、若朝風之醉醺。註にいふ、以酒之醺、喻政厚。【九】 寒瑤 玉を以て雪の明に比する。【一〇】 反交絲 韓退之の詩に、初關天日恒交瑤。東坡の詩に、皇天何時反交瑤。【一一】 朝白 後漢書馮衍妻、常自操井臼、勞則體中生熱。【一二】 坐無氈 杜子美が鄭處に贈る詩に、才名三十年、坐客寒無氈。【一三】 寒光 賈 西京雜記に、司馬相如、初與卓文君還成都、居貧、愁慙、以所著錦囊賣、成都市人爲昌貴酒、與文君爲歡。【一四】 綠綺 まつばりめぐる、潘岳の射雉の賦に、周禮禮復、綠綺琴。【一五】 瓦先融 韓退之の詩に、坐暖銷那怪。章孝楫の雪の詩に、朱門到鴨難盈尺、重足三軍喜氣銷。

歐陽永叔の詩に、喜氣銷殘雪。【一六】 醉屢 張籍の詩に、酒盡臥空醉。歐陽永叔の詩に、不覺長瓶臥。【一七】 愁寂 杜子美の詩に、愁寂故山薇。【一八】 困圯 珂は坎圯、行きなやむ。【一九】 被遊塵瀉 韓退之の詩に、勿使塵泥瀉。【二〇】 半破 韓退之の詩に、新月憐半破。【二一】 郊賀 孟郊と李賀、並に唐の詩人。孟郊字は東野、韓愈と忘年の交をなす。李賀字は長吉、盧宗の朝に、爲侍郎となる。

【題義】十一月に大に雪降る數日、東坡は病を抱いて未だ起きない。彼の令趙國は詩を寄せたので、和詩を作つたのである。和韻の詩、彈丸の手を脱するが如く峻拔であるのは、東坡の長所である。

【詩意】十日も病室に臥して藥餌に親しんで居り、雪の降り積つたのも知らなかつた。但寒氣の厳しくて、どうすることも出来ないことを覺ゆ。風は飄蕭として紙窓に鳴り、雪は堆壓して簷の板も墜ちた。風雪交、到りて凝冽を助け、椽榭も巻き揚げられる。ただ厚酒の如き善い政に近づいて、瑤瑤たる冰雪を窺はないやうにと思ふ。何れの時か炎赫を反し、馮衍の妻のやうに臼磨を躬らして、體を暖めたいものである。誰か坐客寒うして氈なしといふ、尙ほ錢に代ふべき裘を有つて居る。已にして西鄰に音樂が起つたので、席を促して寒威も挫ける。舞ひ蹈みて逕が出来、まつはりめぐつて座に入る。人の歡喜で瓦の雪が先づ融ける。酒も飲み盡して空餅が横はる。皆人は楽しんで居るのに、ああ予は獨り寂しく愁へて、空室に困し難んで居る。後日の遊賞をなさうと思ふが、塵泥に瀉されることを恐れる。寒さが加はつて更に新霽を報じ、皎月半ば破れて中天に懸る。客が獨り苦吟し、清夜にも黙して自ら作つて居る。詩人は不遇を常とする、従つて秀逸の句は寒餓の中から出るやうである。何か霜雪を乾かすであらう。すると、孟郊や李賀の後を躡むことが出来ようと思ふ。

古今體詩 病中大寒數日饑令趙國以詩相屬戲用其韻答之

歲晚相與饋問爲饋歲酒食相邀呼爲別歲至
除夜達旦不眠爲守歲蜀之風俗如是余官於
岐下歲暮思歸而不可得故爲此三詩寄子由

歲晚相與に饋問するを饋歲と爲す、酒食相邀呼するを別歲と爲す、除夜に至り且に達して眠らざるを守歲となす、蜀の風俗是の如し、余岐下に官し、歲暮歸を思ひ、而も得べからず、故に此の三詩を爲り、子由に寄す

饋歲

饋歲

農功各已收歲事得相佐

農功各の已に收め、歲事相佐くるを得

爲歡恐無及假物不論貨

歡を爲す及ぶなきを恐る、物を假り貨を論せず

山川隨出產貧富稱小大

山川出產に隨ひ、貧富小大に稱ふ

眞盤巨鯉橫發籠雙兔臥

盤に眞いて巨鯉横はり、籠を發して雙兔臥す

富人事華靡綵繡光翻座

富人は華靡を事とし、綵繡光座に翻へる

貧者愧不能微擊出春磨

貧者は能はざるを愧ぢ、微擊春磨より出だす

官居故人少里巷佳節過

官居故人少く、里巷佳節過ぐ

亦欲舉鄉風獨唱無人和

亦た鄉風を舉げんと欲す、獨唱へて人和するなし

【字解】【一】饋歲 歲の暮に、親族 舊の間に於て、物の贈答を爲すをいふ。饋は饋に同じ。【二】邀呼 ひかへて招く。邀は招なり、晉書陶潛傳に、王弘令酒故人酒於牛道邀之。【三】岐下 岐山の下、東坡の奉職地、鳳翔府。【四】農功各已收 農家の收穫し終る、左傳襄公十七年に、訪於農收。【五】綵繡 小袖や袋物などいふ。【六】貧者愧不能 王符の潜夫論、浮修篇に、富貴雖欲相過、貧者恥不逮及。【七】微擊 擊は贊と通ず、僅かばかりのみやげ物。【八】出春磨 うすつき、うすひきなどして得た賃錢でとのへる意。【九】鄉風 故郷の風俗、何遜の詩に、鄉鄉自風俗、處處皆城市。

【題義】紀昀いふ、三首俱謹嚴有法、第一首、歸思自在言外、第二首、氣息特古。第三首、用古韻。と。皆、壬寅の作である。壬寅は、仁宗の嘉祐七年（皇紀一七二二年、西曆一〇六二年）である。此の時、老泉は五十四歳で、京師に在つて禮書を修め、子由は二十四歳で、老蘇に侍して京師に在る。東坡は奉職して鳳翔府にあるから、歲末になつても、故郷蜀の風俗に従ひ、饋歲、別歲、守歲の三事を爲すことが出来ない。歸りたくても仕官の身で、ままにならない。そこで此の三詩を作つて弟に寄せたのである。

【詩意】農家の收穫も終つて、歲事として正月の用意をなしては、互に佐け合ふ。歡びを盡すこと及ばざるを恐れるので、市中に買物に出かけ、代價を後にして借りて来る。思ふ品があれば代價の高下は問はない。そこで贈り物とはいふに、其の土地の産出に隨ふから、必しも同じでない。大きな鯉もあれば、兎もある。又、家の貧富に應じて多い少いの別がある。金持の人は、小袖や袋物の綵繡に念を入れ、貧しいものは勞働して得た賃錢で買ひとのへる。今、我は官居で、知人も少い。佳節は空し

く過ぎてしまふ。故郷蜀の風俗を行ひたいと思つても、自分獨で唱へるだけで、誰も和してはくれな

別歲

別歲

故人適千里臨別尙遲遲。人行猶可復歲行那可追。問歲安所之遠在天一涯。已逐東流水赴海歸無時。東鄰酒初熟西舍彘亦肥。且爲一日歡慰此窮年悲。勿嗟舊歲別行與新歲辭。去去勿回顧還君老與衰。

故人千里に適く、別に臨みて尙ほ遲遲。人行くは猶ほ復るべし、歳行くは那ぞ追ふべけん。歳に問ふ安くに之く所、遠く天の一涯に在り。已に東流の水を逐ひ、海に赴いて歸る時なし。東鄰酒初めて熟し、西舍彘亦肥ゆ。且つ一日の歡を爲し、此の窮年の悲みを慰む。嗟する勿れ舊歳の別、行くゆく新歳と辭せん。去去回顧する勿れ、君に老と衰とを還さん。

【字解】(一) 別歲 忘年の意。(二) 臨別尙遲遲 莊子逍遙遊に、適千里者、三月乘輪。遲遲は徐行する貌、詩の野風谷風に、行道遲遲。(三) 天一涯 古詩に、各在天一涯。(四) 東流水赴海 白居易の詩に、去復去兮如長河、東流赴海無回波。古樂府に、百川東到海、何時復西歸。李太白の詩に、黃河之水天上來、東流到海不復回。又、東流不作西歸水。(五) 東鄰西舍

李白の江夏行に、東家西舍同時發。(六) 且爲一日歡 列子楊朱篇に、舜禹孔丘、彼四聖者、生無一日之歡、死有萬世之名。謝靈運の詩に、且盡一日歡。韓退之の詩に、無念百年、聊樂一日。(七) 窮年悲 淮南子に、木葉落長年悲。莊子、富貴に、所以窮年。(八) 去去勿回顧 曹植の詩に、去去莫復道。

【詩意】 故人が遠遊すると、別れが惜まれる。併し、人の行くのは、復復る。歳に行くのは追ふことが出来ない。歳よ君は何れの處へ行かれるぞ。歳は答へていふ、遠く天の一涯に去るのである。そして、東流の水を逐ひて海に赴けば再び歸り來る時はないのである。歳に別れを惜みて、酒や肴を供へて相邀へて呼ぶ。一日の歡樂をなして此の歳終の悲みを慰めて年を忘れる。窮年は、一年のをはりをいふ。されど、舊年の別は歎くには足らない。來るべき新年とも、何れ別れを告げねばならない。かく觀じ來れば、別れは少しも惜しむに足らない。歳よ、爾は速に去れ去れ、後を顧みることなから。我身の老と衰といふ厄介ものまでも御返し申さう程に、とくとく連れて行かれよ。

守歲

守歲

欲知垂盡歲有似赴壑蛇。脩鱗半已沒去意誰能遮。況欲繫其尾雖勤知奈何。兒童強不睡相守夜謹譁。

盡るに垂んたる歳を知らんと欲せば、壑に赴く蛇に似た脩鱗半ば已に沒す、去意誰か能く遮らん。況んや其の尾を繫がんと欲す、勤むと雖も知る奈何せん。兒童強ひて睡らず、相守りて夜謹譁す。

古今體詩 別歲 守歲

晨雞且勿唱更鼓畏添燭。
 坐久燈燼落起見北斗斜。
 明年豈無年心事恐蹉跎。
 努力盡今夕少年猶可誇。

【字解】「晨雞」李商隱的芙蓉甲集に、赴、雞而一去無還。「更鼓」一音書の買后傳に、后曰、擊物、當、擊鼓、今反擊其尾。「坐久」更鼓長、添、燭、更鼓は、夜中、時刻を知らせる爲の太鼓。燭は鼓を擊つ棒。「少年猶可誇」白樂天の詩に、猶有、誇、少年、處、笑呼、張丈、喚、散兒。

【詩意】大晦日が来た、歳の盡くるは、譬へば蛇の壑に赴くやうなもので、之を引き止めようとするは、蛇の尾を繋ぐと同じで、動いても無益である。除夜の實況をいふと、兒童は強ひて睡らない。喧すしく一夜を過ごす。晨雞時を告ぐるなかれ、夜の時を知らせる太鼓の数が加はるのも、氣が氣でない。坐久しうして燈も燼し、北斗星の斜なるを見る。努力して行樂し、今年の今夕を惜しむべし。明朝にならない間は、なほ少年を以て誇るべきである。

【餘論】全幅矯健、三首の冠である。結句猶可誇者、非、幸詞、正、以見、去日之苦多而盛年之不、再也と古人は評して居る。

讀開元天寶遺事 三首 開元天寶遺事を讀む 三首

姚宋亡來事事生、
 一官銖重萬人輕。
 朔方老將風流在、
 不取西蕃石堡城。

【字解】「開元天寶遺事」唐、大原の王仁裕撰す。一百五十九條あつて、一卷を成し、前史に載せてない事を記してある。「朔方老將」姚崇と宋璟は唐の開元九年に歿し、宋璟は同じく二十九年に歿す。

姚宋亡して來、事事生ず、一官は銖も重く萬人は輕し。朔方の老將風流在り、取らず西蕃の石堡城。

姚崇と宋璟との二人は、唐の太宗の時の房玄齡、杜如晦以來の名相と稱せられてゐた。元徽之の逐昌宮詞に、開元之末姚宋死、朝廷漸漸由二紀子。「銖重」銖も重しと訓み、官はたとひ銖銖の如きものでも之を重んずる意。「朔方老將」王忠嗣を指す。王忠嗣は、天寶四年に、朔方の節度使となつた。朔方は今の内蒙古の鄂爾多斯。「石堡城」唐書、王忠嗣の傳に據ると、天寶六載、上、王忠嗣をして、吐蕃の石堡城を攻めしむ。

【題義】此詩は宋、神宗の熙寧六、七年頃の作なるべく、神宗が西夏を伐つたことを諷し、王韶等を諷つたものである。紀昀いふ、三詩、皆有、三、委致、詠史小詩、宜、如此作也。

【詩意】唐は開元以後は、姚崇も沒し、宋璟も亡くなつた。それ以來は、天下の事、失策ばかりである。諸將はただ己の官爵を重んずるのみで、萬人の生命を輕んずる。然るに王忠嗣は官爵を輕んじ、人命を重んずる。王忠嗣の傳に、忠嗣、豈數萬の人命を以て、一官に易へんやと見えて居る。天寶六年(皇紀一四〇七年、西曆七四七年)玄宗は王忠嗣をして吐蕃の石堡城を攻めしめた。忠嗣奏す。石堡城は要害が險固である上に、吐蕃は其の國を擧げて之を守つて居る。今、兵を此の堅城の下に屯す。恐らくは、得る所が失ふ所に如かないであらうと。上は悦ばれなかつた。哥舒翰に命じて之を攻

取せしむ。大舉して之を抜いたが、戦死したものが大半で、竟に忠嗣の言の如くであつた。

潭裏舟船百倍多。

潭裏の舟船百倍多し、

廣陵銅器越溪羅。

廣陵の銅器越溪の羅。

三郎官爵如泥土。

三郎の官爵泥土の如し、

爭唱弘農得寶歌。

争うて唱ふ弘農得寶の歌。

【字解】(一) 三郎 玄宗兄弟六人、其の一は早く亡す、寧王、薛王は兄、申王、岐王は弟、故に三郎と稱す。(二) 弘農得寶歌 潭裏舟船間、揚州銅器多、三郎當殿坐、看唱得寶歌。

【詩意】天寶元年、韋堅は陝郡の太守、水陸轉運使に擢でられた。廣運潭を穿ちて以て舟楫を通じた。潭裏の舟が百倍にもなる。同じく二年の三月、玄宗は望春樓に幸して新潭を観る。韋堅は新船數百艘を以て郡名を扁榜し、各郡中の珍貨を船背に陳ねる。廣陵郡船の如きは、廣陵から出る錦鏡、銅器、海味等、會稽郡船の如きは、銅器、羅、吳綾綺紗等。かくて、船を取る約三百、所在の方物を置き、倡人をして船前に立つて、弘農得寶の歌を唱へしめ、鼓笛之に應ず。玄宗は悦びたまひ、官爵をば惜氣もなく賜はつた。

琵琶絃急哀梁州。琵琶絃急にして梁州を哀す。羯鼓聲高舞臂鞦。羯鼓聲高うして臂鞦を舞はす。

破費八姨三百萬。

八姨の三百萬を破費して、

大唐天子要纏頭。

大唐の天子纏頭を要す。

【字解】(一) 在梁州、明皇雜錄に、上歸自蜀、乘月登樓、命歌。涼州、即貴妃所製。涼州は今は轉じ

大異外傳に、八姨爲秦國夫人、上製舞、曲經、上殿詩、一纏頭、進出三百萬。(二) 纏頭 舊俗、歌舞の人を賞する、錦綵を以て之を頭上に置き、之を纏頭といふ。

【詩意】音が播遷してから、内地の古樂は、遂に分散した。符堅が涼を滅ぼし、始めて漢魏清商の樂を得。宋の武帝が關中を定めて、之を收め、樂は江南に入る。隋が陳を平げて之を獲。文帝曰く、此れ華夏の正聲であると、煬帝は清梁西涼等九部を立つ。涼州は今梁州となつた。要するに唐の樂は邊聲が混じり、其の音節の雄繁を取る。絲聲を以て起して、竹聲之に次ぐ。琵琶は、もと胡地から出で、馬上で之を鼓したさうである。絃聲が急であつて、遂に梁州の音を衰した。又、羯鼓は其の狀漆桶の如く、羯の地から來たから羯鼓と名く。雄壯の聲、ひちあてを付けて舞ふ。八姨の秦國夫人が羯鼓の曲を上る。曲が罷んで、玄宗は戯むれて祝儀の事に及ぶと、秦國夫人は、豈、大唐天子の阿姨、錢なからんやと言ひ、遂に三百萬を破費して一局をなしたといふことである。

て梁州となる。天寶中の樂府は、皆、邊地を以て名となす、涼州甘州の如きは是なり。(二) 破費八姨三百萬、

蘇東坡詩集 卷四

古今體詩 三十八首

和子由踏青

子由の踏青に和す

東風陌上驚微塵。
遊人初樂歲華新。
人閒正好路傍飲。
麥短未怕遊車輪。
城中居人厭城郭。
喧闐曉出空四鄰。
歌鼓驚山草木動。
簞瓢散野鳥鳶馴。
何人聚衆稱道人。

東風陌上微塵を驚かし、
遊人初めて楽しむ歳華の新なるを。
人閒にして正に好し路傍の飲、
麥短くして未だ怕れず遊車の輪。
城中の居人城郭に厭き、
喧闐曉に出でて四鄰を空しうす。
歌鼓山を驚かして草木動き、
簞瓢野に散じて鳥鳶馴る。
何人か衆を聚めて道人と稱し、

古今體詩 和子由踏青

【字解】踏青 李紳の歲時

記に、上巳日、都人於曲江、競飲踏青草、曰踏青。

東風 一本、春風に作る。

歲華 年月をいふ、華は日月の光。

喧闐 やかましく人が一杯になる、闐は滿つる意。新國史補に、郡邑爲之喧闐。

道人 道家の説を修める人、智度論に、得道者、名曰道人。

遮道賣符色怒嗔。

道を遮り符を賣つて色怒嗔す。

宜蠶使汝繭如麩。

蠶に宜しく汝の繭をして麩の如からしむ。

宜蓄使汝羊如儻。

蓄に宜しく汝の羊をして儻の如からしむと。

路人未必信此語。

路人は未だ必しも此語を信ぜざるも、

強爲買服禳新春。

強ひて爲に買服して新春を禳ふ。

道人得錢徑沽酒。

道人は錢を得て徑に酒を沽ひ、

醉倒自謂吾符神。

醉倒して自ら謂ふ吾が符は神なりと。

【題義】子由が踏青の詩跋に、眉之東門十數里有山、曰三墓頤、山上有亭榭松竹、山下臨大江、每正月人日、士女相與遊嬉、飲酒於其上、謂之踏青也、とある。陸放翁の詩に、只怪今朝空巷出、使君人日宴三墓頤とは、眉州の故事を言つたものであらうが、劉禹錫の詩に、昭君坊中多女伴、永安宮外踏青來、とあるなど、踏青の俗は、所在皆然り、獨眉州のみではない。子由の東坡に寄せた二首は、一を踏青といひ、一を蠶市といふ。

【詩意】春風が街上を吹いて塵が少し起つた。遊びの人は、年光の新になつたのを樂しむ。どこなく世間が静かで、酒を郊外に攜へるによろしく、麥もまだ短いから、遊車の過ぎるを怕れない。城中の人人は城郭を空うして、朝からどしどし出かける。歌ひ囃して草木も動き出し、酒肴の籠も野に敷かれて鳥も馴れ近づく。此時羣衆を聚めて道人と稱するは何人ぞ。道を遮り神符を賣つて顔色怒れるやうである。曰く、此符を戴けば蠶に宜しい、繭は羊のやうに大きな物が出来る。(太平廣記に、園客者、濟陰人、嘗種五色香草、積數十年、服食其實、忽有五色蛾、集香草上、客收而薦之以布、生華蠶焉、至蠶出時、有二女、自來助客養蠶、亦以香草飼之、得繭百二十頭、繭大如錢、每一繭繰六七日乃盡、繰訖俱去。)曰く、此符を戴けば家畜に宜しい、羊は麩の如くなる。道路の人は、必しも此の言葉信じないが、強ひて買つて新春の禳をする。道人は得た錢で直ぐに酒を沽ひ、酔ひ倒れて自ら謂ふ吾が符は神であると。

和子由蠶市

子由が蠶市に和す

蜀人衣食常苦艱。

蜀人は衣食常に艱きを苦しむ、

蜀人遊樂不知還。

蜀人は遊樂して還るを知らず。

千人耕種萬人食。

千人耕種して萬人食ふ、

一年辛苦一春閒。

一年辛苦し一春閒なり。

閒時尙以蠶爲市。

閒時なるも尙は蠶を以て市を爲す、

古今體詩 和子由蠶市

【字解】

蠶市 眉州城内官市に在る、毎歲二月望日に相聚まりて、蠶器を此に攜ぐ。併し、この蠶市は、歲首に行ふ郷俗である。千人耕種萬人食 前漢賈誼傳に、一人耕之、十人聚而食之、欲天下亡飢、不可得也。また、後漢王符滎夫論の浮侈篇に、一人耕、百人

恐忘辛苦逐欣歡。

恐くは辛苦を忘れて欣歡を逐はん。

去年霜降斫秋荻。

去年霜降りて秋荻を斫り、

今年箔積如連山。

今年箔積むこと連山の如し。

破瓢爲輪土爲釜。

破瓢を輪となし土を釜となし、

爭買不啻金與執。

争ひ買ふこと管に金と執とのみ」

憶昔與子皆童卵。

憶ふ昔は子と皆童卵。 「ならず。

年年廢書走市觀。

年年書を廢てて市に走つて觀る。

市人爭誇鬪巧智。

市人は争ひ誇つて巧智を鬪はす、

野人暗啞遭欺謾。

野人は暗啞欺謾に遭ふ。

詩來使我感舊事。

詩來つて我をして舊事を感せしめ、

不悲去國悲流年。

國を去るを悲まずして流年を悲しむ。

流年 流光といふに同じ、過ぎ行く年月、杜甫の時に、鬱鬱流年度。

【題義】蜀に露市といふがある。毎年正月より三月に至る間に、州城及び屬縣で行ふ。相傳ふ、古々蠶叢氏が蜀の主となつて、民に定居がない。蠶叢の在る所に隨つて市居を致したさうで、其の遺風で

ある。毎年、養蠶の時節に先ち、蠶農の具及び果藥雜物を商ふのである。子由の原題に、記歳首郷俗一寄三子瞻二首、一曰踏青、二曰露市とあるから、ここの露市も亦正月人日(七日)の事である。

【詩意】蜀人は、兎角、生産的に働くものが少いので、衣食が足らざるを苦しむ。千人が耕作して萬人が之を食ふ。それで勞働する人は一年中、辛苦して、僅に一春閑である。其の閑な時でも、蠶の市をする。これは其の辛苦を忘れて欣歡する。去年霜の降る時分に刈つた荻で蠶籠を造り、今春の市に積むこと連山のやうである。又、破瓢で輪を爲り、土で釜を爲る。秋箔は蠶に薦ぐ具、瓢輪と土釜とは、絲を繰るもの、此の三者は養蠶時の必需品で、之を争ひ買ふことは、金や執(白いねり絹)よりも甚だしい。昔、お互に幼かつた時、いつも正月は書を展めて市に走つて觀たものである。市人は巧智を鬪はすも、野人は、口言ふこと能はずして、常に欺かれる。今、汝の寄せた詩で舊い記憶が新に浮び、感慨に堪へない。我は國を去るを悲しまないで、寧ろ過ぎ行く年月を悲しむのである。

次韻子由論書

子由が書を論ずるに次韻す

吾雖不善書、曉書莫如我。

吾書を善くせずと雖も、書を曉るは我に如くなし。

苟能通其意、常謂不學可。

苟も能く其意に通せば、常に謂らく學ばずして可なりと。

貌妍容有曠、壁美何妨糝。

貌妍なれば曠するあるべく、壁美なれば何ぞ糝なるこ」

「とを妨げん。

食之、一婦桑、百人衣之、一以奉
百、執御供之。【二】箔 蠶農、養
蠶に用ふる具、韓愈の時に、亦蠶者、
滿箔。高啓の時に、葉箔夏分。蠶。
【三】執 白い熟絹、同じねり絹で
も、粗厚のものを絹といひ、輕細の
ものを執といふ。【四】童卵 なま
なき小供、卵は東夷の貌、時に龜角卵
分。【五】廢書 止記に、未嘗不
廢書兩泣也。【六】暗啞 口をつ
ぐむ、管子に、嚶言暗啞。東坡の時に、
撫掌笑先生、年來效暗啞。【七】
欺謾 あざむき侮る、漢書の宣帝紀
に、移爲欺謾、以避其諱。韓退之の
時に、嚴罪在欺謾。【八】悲去國
杜子美の時に、去國悲王粲。【九】

端莊雜流麗剛健含婀娜

端莊流麗を雜へ、剛健婀娜を含む。

好之每自譏不獨子亦頗

之を好むも毎に自ら譏る、獨子も亦頗るのみならず。

書成輒棄去繆被旁人裹

書成りて輒ら棄て去る、繆つて旁人に裹まる。

體勢本闊落結束入細麼

體勢本闊落、結束細麼に入る。

子詩亦見推語重未敢荷

子が詩も亦推さる、語重うして未だ敢て荷はず。

爾來又學射力薄愁官笥

爾來又射を學ぶ、力薄うして官笥を愁ふ。

多好竟無成不精安用夥

多く好めば竟に成るなし、精しからずは安んぞ夥を用ひん。

何當盡屏去萬事付懶惰

何か當に盡く屏去して、萬事懶惰に付すべき。

吾聞古書法守駿莫如跛

吾聞く古の書法、跛を守るは跛に如くなしと。

世俗筆苦驕衆中強嵬駸

世俗筆苦だ驕る、衆中強ひて嵬駸。

鍾張忽已遠此語與時左

鍾張忽ち已に遠く、此の語時と左ふ。

【字解】(一)有、廣、曠は聲に同じ、顔をかめる、莊子天運篇に、西施病心而顰其里。(二)翽、長圓形をいふ、爾雅に、鵞、小爾雅。註にいふ、即小貝類、謂狹而長と。(三)端莊、正しくおごそか、朱熹が詩に、退息常端莊。(四)婀娜、美女のしなやかなる貌、曹植の洛神賦に、華容婀娜、令我忘餐。(五)不獨、一本に不謂に作る。(六)細麼、班彪の王命論に、么麼不及、數子。註にいふ、細小曰麼と。(七)官笥、官符、曾侯乙墓、東坡の自註に、官笥十二把、吾能二十一把箭一耳。周禮の考工記に、矜謂之笥。註に

いふ、矜謂、胡子之圖、在楚旁、矜、矢幹也と。(八)不精安用夥、前漢書の陳涉傳に、夥謂、涉之爲王、比此者。註にいふ、楚人謂多爲夥と。後漢書の馬融傳に、鄭君博而不精。(九)嵬駸、安帖ならずる貌、說文に、謂馬將項曰駸。(一〇)鍾張、鍾繇、張芝(字は元常)と張芝(字は伯英)。(一一)與、時、左、時、の字、一本に時に作る。韓退之の書に、身勳而事左、非計之得也。事宜に違はないの左計といふ。

【題義】東坡が子由と書を論じた詩である、子由の原作は、堂上岐陽碑、吾兄所與我、吾兄自善書、所取無不可、歐陽弱而立、商隱瘦且臍、小篆妙詰曲、波字美婀娜、譚藩居顏前、何類學顏頗、魏華自削淬、峻秀不包裹、九成列賢俊、磊落雜五麼、英公與襄鄂、戈戟聞自荷、何年學操筆、終歲惟箭筈、書成亦可愛、藝業嗟獨夥、余雖謬學文、書字每慵惰、車前獨驅驪、車後繫羸跛、逾年學舉足、漸亦成駸駸、古人有遺蹟、寔短不及鎖、願從兄發之、洗硯處兄左、本詩は、此の次韻である。

【詩意】書を學ぶものは、須らく書外の意を得べきである。我は字を書くことが拙いけれども、書の意を曉つて居ると信ずる。(魯直常に謂ふ、東坡心通於翰墨之外、其の意に通せば、其の事は學ばないでも可いと思ふ。西施のやうな美人であれば、髪しても亦美しい、立派な壁であれば形は橢圓でも宜しい。書の風は、正しくおごそかな處に、流麗を雜へ、剛健な處に、しなやかな點を含むべきである。余は書を好むも、毎に自ら譏る。子だけが頗つて居ると言はない。それで時に字を書いて、直ぐ棄ててしまふ。繆つて傍人に拾ひ取られることもある。字の體勢は、快闊磊落であらねばならないが、結束の處は、細心に書かなければならない。子が此度の詩も、亦余(東坡)の書を推して居らるる

が、敢て當らない。又、其の後、射術を學んだが、力が薄いので逆も官筋は引けない。すべて多く好めば成功しない。精しくなければ多くても役に立たない。何の時か書も弓も一切棄て去つてしまひたい。吾聞く、古の書法は、馬でいふと、千里の駑馬を守るよりは、あしなへ馬を守る方がよい。これは愚を守る意であらう。世俗の運筆は、甚だ驕つて居る、衆中、無理に形づくつて安らかでない。孫過庭の書譜に、子敬之不_レ及_二逸少_一、猶_二逸少之不_レ及_二鍾張_一、とあるが、實際、子敬（王獻之）の逸少（王羲之）に及ばないことは、王羲之の鍾繇や張芝に及ばないやうなもので、いよいよ遠ければ、いよいよ氣韻が高い。此の語は、今時の考へとは違つて居る。

記所見開元寺吳道子畫佛減度以答子由

見る所の開元寺吳道子畫佛減度を記して以て子由に答ふ

西方真人誰所見
衣被七寶從雙狻
當時修道頗辛苦
柏生兩肘鳥巢肩
初如濛濛隱山玉

【字解】
【一】吳道子 名畫記に、唐の吳道元は陽翟の人、畫に工みなり。初名は道子、玄宗召して禁中に入れ、名を道元と改む。
【二】佛減度 釋迦牟尼佛の涅槃に入りしをいふ。法華經に、衆見我減度、廣供養舍利。
【三】西方真人 列子の仲尼嘗に、西方之人有_二聖者焉_一。【四】七寶 二種ある、一は金、銀、琉璃、玻璃、珊瑚、瑪瑙、硃璣。一は金輪寶、象寶、紺馬寶、神珠寶、主藏臣寶、玉女寶、兵主臣寶。
【五】雙狻 穆天子傳に、獲狻、日走五百里。狻狻は獅子、一名狻、獸中の王。
【六】柏生兩肘 莊子の至樂篇に、支離叔與_二滑介叔_一、觀_二於冥伯之丘_一、崑崙之虛、黃帝之所_レ休、俄而柳生_二其左肘_一。王稚、龍顏師碑銘に、蓮花承_二足_一、揚枝生_二肘_一。
【七】濛濛 雨霧などのをぐらい貌、王昌齡の詩に、玉清壇上雨濛濛。【八】濯濯 美しく光澤なる貌。世説に、濯濯如_二春月柳_一。
【九】悲_二人天_一 劉孝綽の詩に、辨論悅_二人天_一。【一〇】國邸 足蹟少する、荀子禮論の註に、國邸、以_レ足跡_二地也_一。【一一】龐眉 大なる眉。【一二】彈指 經賦の詩に、三過門前老樹死、

漸如濯濯出水蓮
道成一旦就空滅
奔會四海悲人天
翔禽哀響動林谷
獸鬼躑躅淚迸泉
龐眉深目彼誰子
繞牀彈指性自圓
隱如寒月墮清晝
空有孤光留故躔
春遊古寺拂塵壁
遺像久此霏香煙
畫師不復寫名姓
皆云道子口所傳
縱橫固已蔑孫鄧

漸く濯濯として水を出づる蓮の如し。
道成りて一旦空滅に就き、奔會して四海人天悲しむ。
翔禽哀響、林谷を動かし、獸鬼躑躅、涙を迸らす。
龐眉深目は彼れ誰の子、牀を繞りて指を弾じ性自ら圓かなり。
隱として寒月の清晝に墮つるが如く、空しく孤光の故躔に留まるあり。
春古寺に遊んで塵壁を拂ひ、遺像久しく此に香煙霏し。
畫師復名姓を寫さず、皆道子と云ふは口の傳ふる所。
縱橫固より已に孫鄧を蔑んじ、

古今體詩 記所見開元寺吳道子畫佛減度以答子由

有如巨鰐吞小鮮。巨鰐の小鮮を呑む如きあり。

來詩所誇孰與此。來詩誇る所は此に孰與ぞ、

安得攜挂其旁觀。安んぞ其の旁に攜挂して觀るを得ん。

人、工畫佛像見神。

【一〇】小鮮。小きき生魚。

老子に治大國若烹小鮮。

【一一】來詩所誇。子由題畫文殊、普賢を指す。

【一二】故。日月の行る所を謂ふといふ。

【一三】孫知。孫知微と鄧隱、圖畫見明志に、孫知

數字太古、通義彭山人。鄧隱、梓州

【題義】紀昀いふ、題不了了、當云子由以畫文殊・普賢詩見寄、因記所見開元寺吳道子畫佛滅度以答之、不然末二句不知爲何語。鳳翔開元寺大殿九間の後壁吳道元の畫は、釋迦の始生より修行、說法、滅度に至るまでが畫いてある。其の滅度の如きは、諸比丘（比丘は梵語僧の稱）は悲慟自ら勝へざるもの如く、飛鳥走獸までも號頓の狀を作して居る。獨、普薩は淡然として傍に在つて平時の如く、略哀戚の容がない。其の能く生死の致を盡して居るからである。

【詩意】西方の真人は、七寶を著け、二匹の獅子を従へて居る。當時の修道は、餘程骨の折れたもので、深く禪定に入り、柏が兩肘に生じ、烏が肩に集うたといふことである。釋迦が道を修して居られたときは、深淵として光無く山に隠れたる玉の如くであつたが、後に道が成就すると、濯濯として光潔に水を出づる蓮花のやうであつた。成道の後、衆生を教化せられたが、一朝、涅槃に入られた。すると四海人天悲しみ、翔る鳥も、走る獸も皆哭す。是時大眉深目の羅漢あり、北首せる佛の牀を繞り、指を彈いて淡然として居る。隱として寒月の清畫に墮ちるやうである。（月墮清畫は、佛の滅度に譬ふ。）孤光の故塵に留まるありといふのは、佛は寂滅はしても、猶ほ存在して居るに譬ふ。春、古寺に

遊んで塵壁を拂ひ、釋迦の遺像も香煙に籠められて霞い。畫師は姓名を書かない。道子の畫であると云ふのは、世人の口碑に傳へる所である。筆力が縦横で、孫知微や鄧隱などの畫伯を蔑んじ、大きな鰐が小魚を呑むやうである。子由が寄せられた詩中にある文殊、普賢の像は、此と比較して如何で御座る。どうか攜へて其の傍に掛けて見たいものである。（子由の詩に、吾兄子瞻苦好異、敗繪破紙收明鮮、自從西行一止得此、試與記錄一代觀、とある。）

和子由寒食

子由の寒食に和す

寒食今年二月晦。

寒食今年二月の晦。

樹林深翠已生煙。

樹林深翠已に煙を生ず。

遠城駿馬誰能借。

城を遠る駿馬誰か能く借さん、

到處名園意盡便。

到處名園意盡く便す。

但挂酒壺那計盞。

但酒壺を挂く那ぞ盞を計らん、

偶題詩句不須編。

偶詩句を題して編むことを須ひず。

忽聞啼鴉驚羈旅。

忽ち啼鴉を聞いて羈旅に驚く、

江上何人治廢田。

江上何人か廢田を治めん。

【字解】【一】寒食。荆楚歲時記

に據るに、冬至の後、一百五日にし

て疾風甚雨あり、之を寒食といふ。

郡中記には、并州の俗、冬至の後百

五日、介子推の爲に、火を斷じ冷食

す、之を寒食といふとある。【二】

深翠。濃き緑、王昌齡の詩に、江明

深翠引三詩。【三】啼鴉。詩、幽

風に、七月啼鴉。註にいふ、鴉、伯

勞也と。

【題義】子由は寒食前一日、東坡に詩を寄せていふ、寒食明朝一百五、誰家冉冉尚廚煙、桃花開盡葉初綠、燕子飛來體自便、愛客漸能陪痛飲、讀書無思懶開編、秦川雪盡南山出、思共肩輿看麥田、と。本詩は是に和したのである。

【詩意】今年の寒食は、二月の晦に當つて居るが、濃き緑の森には已に春煙を生じた。誰でも駝馬を借してくれば、之に乗つて、到處の名園で、くつろいで休まう。ただ酒壺を掛けて、酒杯を傾けることをば考へない。なまたま詩句を題しても、之を編まうともしない。忽ち鶉の鳴くを聞く、耕すことを催はす聲がする。此の聲を聞くにつけても、人は廢田を治むべきである。一體、此の鳥は、三月に入つてから、當に鳴くべきを、二月の晦に之を聞いたので、編旅の驚きは知るべきである。江上廢田を治めるは何人であらう。

【餘論】後漢書の周舉傳に、太原一郡、舊俗以介子推焚骸、有龍忌之禁、(龍忌とは火を焚くことを禁ずるのである)至其六月、咸言、神靈不樂舉火、由是士民每冬中、輒一月寒食、莫敢煙爨、舉既到州、乃作弔書置子推之廟、言、盛冬去火殘損民命、非賢者之意、以宜示愚民、使還溫食云云。是に據ると、漢以前の寒食は、冬中に在つて二三月にはないやうに見える。

次韻和子由欲得驪山澄泥硯

次韻して子由が驪山の澄泥硯を得んと欲するに和す

舉世爭稱鄴瓦堅、舉世爭稱鄴瓦の堅きを、
一枚不換百金頒、一枚換へず百金の頒ちに。

豈知好事王夫子、豈知らん好事の王夫子、
自採臨潼繡嶺山、自ら採る臨潼の繡嶺山。

經火尚含泉脈暖、火を經て尚ほ含む泉脈の暖かなるを、
弔秦應有淚痕漬、秦を弔して應に淚痕漬たるあるべし。

封題寄去吾無用、封題寄せ去る吾用ゐるなし、
近日從戎擬學班、近日戎に從つて班を學ぶを擬せん。

【字解】(一)澄泥硯、唐人品硯、以爲第一。澄泥硯は、細絹二重を以て泥を淘して、之を澄ましめ、施めて細なるものを取り、焼いて硯としたものである。(二)鄴瓦、魏は鄴都に銅雀臺を建つ、後世、其の瓦を以て硯を作り、世に貴重さる。(三)臨潼、古の驪山、今は縣、陝西關中道に屬す。驪山は南に在る。(四)繡嶺、山海經に、驪山左右皆峻嶺、雲霞繡錯、因有繡嶺之名。(五)泉脈、泉脈、龍照の詩に、金潭潤泉脈、こは臨潼の温泉をいふ。(六)漢班超、史記に、非始皇驪山。(七)學班、後漢の班超傳に、常爲官借書、舉世爭稱鄴瓦堅、大丈夫無他志略、猶當效傳介子、班超立功異域、以取封侯、安能久事筆硯間乎。

【題義】驪山の澄泥硯は、第一品で、綠色春波の如く、子由が欲しがつて之を詩に述べたのを次韻したのである。子由の詩の末句に報君湘竹筆身斑とある。今、東坡は班の字を押したので原唱と同じからずと難するものがあるが、班、班は便に隨つて押したもので、必しも論じない。

【詩意】世人は争うて鄴瓦の青色硯を稱する。其の内、平瑩で厚さ寸許に及ぶものには、多く工人の姓氏を印してあり、文字は皆、八分もしくは隸書である。此の硯は、一枚百金以上である。好事の王

夫子(王頤字は正父、時に武功縣を爲む)は自ら臨潼驪山から採り、之を燒いて硯を製する、久しきを經ても温かである。古を懐ふと、驪山は秦の始皇を葬つた地で、之を憑弔して涙下る。封題寄せ去る、我には用なし。我は近日、昔の班超を學んで筆を投じて戎軒を事としよう。(時に夏人が大舉入寇し、聲三輔を搖かす。朝廷方に王素を遣はし師を平涼に視る、因つて此句がある。)

次韻和子由聞予善射

次韻して子由予が射を善くすと聞くに和す

中朝鸞鷲自振振

中朝の鸞鷲自ら振振たり、

【字解】【一】中朝鸞鷲 中朝は中國をいふ。鸞鷲は、食餌の威儀にいふ。鸞は神鳥、鳳凰の屬。鷲は白さき。【二】振振 詩の魯頌に、振振鷲、振振鷲、鸞鷲の聲に、大鼓謂之樂。【三】破的 晉書王濟傳に、一發破的。【四】穿楊 幾由基は楊葉を去ること百歩にして之を射、百發百中す。【五】猿臂 猿の臂は目に通ず。前漢李廣傳に、

豈信邊隅事執藝

豈信せんや邊隅に藝を執るを事とす

共怪書生能破的

共に怪む書生の能く破的を破るを、

也如驍將解論文

也驍將の解く文を論ずるが如し。

穿楊自笑非猿臂

楊を穿ちて自ら笑ふ猿臂にあらず、

射隼長思逐馬軍

隼を射て長く思ふ馬軍を逐ふを。

觀汝長身最堪學

觀る汝長身最も學ぶに堪ふるを、

定如髯羽便超羣

定ず髯羽の如く便ち羣を超えん。

爲人長鬣臂、其善射亦天性。【一】射隼 鳥に、公用射隼于高墉之上。【二】馬軍 杜子美の詩に、洗心獨對馬軍。

【題義】豈信邊隅事執藝の句あるより見るも、此詩は邊を犯すに因つて發したのである。

【詩意】中朝の威儀ある、鸞鷲の羣り飛ぶがやうである。それで、國境に、戰があるとは信せられぬ。共に怪しむのは、書生が射を善くすることである。それは恰も驍將の文事を論ずるのと同じである。昔の養由基は楊葉を百歩の外に射て百發百中といふことであるが、自ら笑ふ、射術が工でも臂の長いのではない。隼(鷹の一種)を高墉(小城)の上に射、馬軍を逐はうとする。就いては、汝は長身にして最も學ぶに堪へる。必ず髯羽の如く拔羣の士となるであらう。(三國蜀志、關羽傳の諸葛亮が羽に答へる書に、孟起(馬超の字)一世之傑、髯・彰(蘇布、彰越)之徒、當與益德(張飛の字)並驅爭先、未若若髯之絕倫逸羣也とある。羽は鬚髯が美であるから、亮は之を髯と謂つたのである。)

次韻子由彈琴

子由が彈琴に次韻す

琴上遺聲久不彈

琴上の遺聲久しく彈せず、

琴中古義本長存

琴中の古義本長へに存す。

苦心欲記常迷舊

苦心記せんと欲して常に舊に迷ひ、

信指如歸自著痕

指に信せて歸るが如く自ら痕を著く。

應有仙人依樹聽

應に仙人樹に依つて聽くあるべく、

古今雜詩 次韻和子由聞予善射 次韻子由彈琴

【字解】【一】琴 伏羲の作つた樂器、古は五絃、後、七絃を用ふ。【二】仙人依樹聽 昔、王質が山に入り木を伐り、童子の琴を彈くを見る。質因つて留まり斧柯に臥して之を聽く、俄頃にして起つ、坐せし所の斧柯爛れ盡くす。【三】鶴舞 韓非

空教瘦鶴舞風鸞。誰知千里溪堂夜。時引驚猿撼竹軒。

空しく瘦鶴をして風に舞つて驚ば。誰か知らん千里溪堂の夜、時引驚猿を引いて竹軒を撼かす。

子の十過に、鶴舞公管に之く、平公之を驚す。雷公起ち、師清を召し、琴を授りて之を撫せしむ。師清曰く、此れ清南なり、清微に如かずと。師

清琴を授りて鼓す、一たび之を奏すれば、玄鶴二八あり、南方より来る。再び之を奏すれば列なり、三たび之を奏すれば、猿を延べて鳴き、翼を舒べて舞ひ、音は宮商の聲に中る。溪堂 東坡の自註に、過終南日、命道士趙宗有彈琴溪堂。

【題義】東坡の父、蘇老泉が久しく彈琴を廢したのを、たまたま人から雷琴を借りて舊曲を記した。そこで子由が詩を作つて父に呈した。東坡の此詩は、之に次韻したものである。

【詩意】琴上の遺聲は久しく弾じないが、琴中の古義は長も心に存する。苦心して記せんと欲して、いつも舊に迷ひしも、指に信せて歸るが如く、自ら痕を著けて迷はない。應に王質のやうな仙人が樹に依つて聽くであらう。空しく瘦せた鶴をして舞はしめる。誰か知らん千里終南を過ぐる日、一夜、溪堂で琴を弾き、驚猿をして聲に感せしめ、之を引き付けて竹軒を撼かしたことを。

中隱堂詩 五首

中隱堂の詩 五首

岐山宰王君紳其祖故蜀人也避亂來長安而遂家焉其居第園圃有名長安城中號中隱堂者是也予之長安王君以書戒其子弟邀予遊且乞詩甚勤因爲作此五篇

【題義】岐山の宰王君紳、其の祖は故蜀人なり。亂を避けて長安に來つて遂に家す。其の居第園圃名あり。長安城中に中隱堂と號するもの是なり。予長安に之く。王君書を以て其の子弟を戒め、予を邀へて遊び、且つ詩を乞ふこと甚だ勤む。因りて爲に此の五篇を作る。

【字解】岐山 關は秦墓を種うる處であるが、山麓ある遊山所なしいふ。園は種々菜蔬。

【題義】王紳は岐山の宰であつた。其の居第園亭が長安城中に在る。東坡が長安に至つたとき、紳は書を以て其の子弟を戒め、東坡の臨存を乞ひ、因て以て詩を乞うたのである。本詩の第三首に、二月驚梅晚、幽香此地無、依依慰遠客、皎皎似吳姝云々と、關中には梅がなく、公麻宇池亭に、樹を植うる三十餘本もあつて、獨、梅の樹が無い。茲に二月に、長安王紳の家に在つて之を見る。覺えず驚喜して此を賦し、依依慰遠客と言つた譯である。

去蜀初逃難。遊秦遂不歸。蜀を去りて初て難を逃れ、秦に遊びて遂に歸らず。
園荒喬木老。堂在昔人非。園は荒れて喬木老い、堂在るも昔人は非なり。
鑿石清泉激。開門野鶴飛。石を鑿ちて清泉激し、門を開いて野鶴飛ぶ。
退居吾久念。長恐此心違。退居吾久しく念ふ、長へに恐る此心の違ふを。

【字解】喬木 年を經た高い木。詩小雅伐木篇に、出自幽谷、遷于喬木。野鶴飛 杜子美の詩に、野鶴清溪飛。

古今體詩 中隱堂詩五首

【詩意】王君の祖は蜀人であるが、亂を避けて、蜀を逃れ、長安に遊んでまた歸らない。其の住はれた宅の園は荒れて、年を経た高い木が昔を語る。中隱堂は今も在るが、昔の人は居ない。石を鑿ちて清泉が湧き出で、門を開いて野鶴が飛ぶ。王君のやうに退居することは余の宿志であるが、いつも其の遂げないことを恐れて居る。

徑轉如修蟒。坡垂似伏龍。

徑は轉じて修蟒の如く、坡は垂れて伏龍に似たり。

樹從何代有人與此堂高。

樹は何れの代よりかある、人は此堂と高し。

好古嗟生晚。偷閒厭久勞。

古を好みて生の晩るるを嗟き、閒を偷みて久勞を厭ふ。

王孫早歸隱。塵土汗君袍。

王孫早く歸隱せよ、塵土君の袍を汗さん。

【字解】【一】修蟒、長いはばみ、巨蟒、王蛇などいふに同じ。【二】伏龍、蓋は大きな海がめ。【三】嗟、轉退之の石の詩に、嗟予好古生苦晚。【四】久勞、久しい間、骨を折る、史、魯の世家に、久勞子外。詩、幽風の我祖東山之註に、我往之東山、既久勞矣。【五】王孫早歸隱、劉安の招隱士に、王孫遊兮不歸。【六】塵土汗君袍、晉書に、王導嘗て西風の起るに塵ひ、扇を舉げ自ら扇うて曰く、元規塵汗、人と。轉退之の詩に、勿使塵土汗。白樂天の詩に、青袍塵土泥。

【詩意】路は轉じて長い蟒の如く、坡は伏した海龜のやうである。樹木は何れの時代からのものか、人は此の堂とともに高い。古を好んで、世に出たことの後れたのを嗟き、閒を偷んで久しく外に勞するを厭ふ。昔の言葉に、王孫遊兮不歸とあるが、どうか早く歸つて隱退せよ、塵土が君の著物を汚すであらう。

すであらう。

二月驚梅晚。幽香此地無。

二月梅の晚きに驚く、幽香此地に無し。

依依遠客皎皎似吳妹。

依依として遠客を慰め、皎皎として吳妹に似たり。

不恨故園隔空嗟芳歲徂。

恨まず故園の隔るを、空しく嗟く芳歲の徂くを。

春深桃杏亂笑汝益羈孤。

春深うして桃杏亂れ、汝が益々羈孤なるを笑ふ。

【字解】【一】二月驚梅晚、轉退之の詩に、二月初驚見草芽。【二】此地無、杜子美の詩に、丹橘黃柑此地無。【三】依依、枝のしなやかな貌、詩、小雅に、楊柳依依。【四】吳妹、妹は美好の人、陳後主の詩に、淇上特吳妹。【五】芳歲徂、離別の詩に、節候芳歲徂。【六】笑、杜子美の決明花の詩に、涼風蕭蕭吹汝笑。【七】羈孤、旅客孤子、謝希逸の月賦に、羈孤遷適。

【詩意】長安には、梅花が最も少い。そして開くことも、ただ晚い。氣候がやや晚いから、凡そ開くものが、皆、晚いのである。獨、梅花ばかりではない。兎に角、奥床しい香がないのに、王紳の家に入つて、圓らすも梅花を見たのは喜ばしい。依依として遠客（東坡自らを指す）を慰める。花の色が真白で、美しいことは吳の美人に似て居る。之に對すれば、故郷を離れて居ることを恨みないで、空しく花の季節の過ぎ行くを嗟くのである。既に此地には梅が少く、開くことも晚い。桃や杏の咲き亂れる時分に當つて、梅の羈孤であることを知るべく、他の花に笑はれるであらうよ。（此篇は専ら梅花を詠じたもので、落句の汝の字は、梅花を指す。）

翠石如鸚鵡何年別海墻。

翠石鸚鵡の如く、何れの年か海墻に別るる。

貢隨南使遠載壓渭舟偏。

貢は南使に隨つて遠く、載は渭舟を壓して偏し。

已伴喬松老那知故國還。

已に喬松に伴つて老ゆ、那ぞ故國の還るを知らん。

金人解辭漢汝獨不泚然。

金人は漢を辭するを解す、汝獨泚然たらざらんや。

【字解】翠石、皮日休の詩に、翠石數百步。

【詩意】石も奇である。綠色の石は鸚鵡のやうに美しく、海邊に別れて來たのは何れの年であつたらう。翠石の貢は南使に隨つて遠く、渭水を渡る舟に滿載して來る。已に喬松に伴ふのである。故國の還るなどは、知つたことでない。(此の石は、漢唐故苑中のものであるから、斯やうに言つたのである。昔、漢の武帝は、金洞仙人を鑄た。其の仙人は盤を捧げ露を承けて居る。魏の明帝の時、取りて洛に歸つたが、其の漢を辭するとき、宮官が既に盤を拆き、仙人は戴に臨んで、泚然として泣いたといふことである。金人は漢を辭することを解するに、汝、翠石は獨泚然たらざらんや。

【字解】喬松、高大な松樹。一説に、喬は王子喬、松は赤松子、共に不死の仙人。

【詩意】班固の西都賦に、三成帝畿とある。其の註にいふ、周・秦・漢也と。周の姓は姬、秦の姓は嬴、前漢之に都し、姓は劉、前秦之に據り、姓は苻、後秦又之に據り、姓は姚、そして唐之に都し、姓は李。故に都城更幾姓と言つたのである。現に到る處に殘碑がある。(起二句は、故らに間筆を作し、實は乃ち挽いて王氏の圖を得るに到るのである。其の殘碑に就いていふと、古い隧道に蟬蚪の書即ち古文の碑がある。崩れた甍に伏龜を露はして居る。之を安排して亭榭を壯にし、之を收拾して金貨を費す。神禹碑のある駒樓山は何ぞ到るを須かん。韓退之は、駒樓山尖神禹碑、字青石赤形摹奇、云云の詩を作つたが、それは浪りに自ら悲しむものと謂ふべきである。

都城更幾姓到處有殘碑。 都城幾姓を更ふる、到處に殘碑あり。
古隧埋蟬蚪崩崖露伏龜。 古隧蟬蚪を埋め、崩崖伏龜を露す。

安排壯亭榭收拾費金賞。

安排亭榭を壯にし、收拾金賞を費す。

駒樓何須到韓公浪自悲。

駒樓何ぞ到るを須かん、韓公浪に自ら悲む。

【字解】都城、左傳隱公元年に、都城過百雉、國之害也。都は都鄙の都、都城といへば、其の都の周圍を周して城を築き、市街し其内にあり、商工も其の内に住せり。

【詩意】班固の西都賦に、三成帝畿とある。其の註にいふ、周・秦・漢也と。周の姓は姬、秦の姓は嬴、前漢之に都し、姓は劉、前秦之に據り、姓は苻、後秦又之に據り、姓は姚、そして唐之に都し、姓は李。故に都城更幾姓と言つたのである。現に到る處に殘碑がある。(起二句は、故らに間筆を作し、實は乃ち挽いて王氏の圖を得るに到るのである。其の殘碑に就いていふと、古い隧道に蟬蚪の書即ち古文の碑がある。崩れた甍に伏龜を露はして居る。之を安排して亭榭を壯にし、之を收拾して金貨を費す。神禹碑のある駒樓山は何ぞ到るを須かん。韓退之は、駒樓山尖神禹碑、字青石赤形摹奇、云云の詩を作つたが、それは浪りに自ら悲しむものと謂ふべきである。

【字解】蟬蚪、古文をいふ、蒼頡の制した文字は、水蟲の蟬蚪に似て居る。

【字解】伏龜、有、駒樓峰、禹登此得金簡玉牒治水之書云云。

鳳翔八觀并序 鳳翔八觀并に序

鳳翔八觀詩記可觀者八也昔司馬子長登會稽探禹穴不遠千里而

李太白亦以七澤之觀至荆州。二子蓋悲世悼俗自傷不見古人而欲一觀其遺跡。故其勤如此。鳳翔當秦蜀之交。士大夫之所朝夕往來。此八觀者。又皆跬步可至。而好事者有不能徧觀焉。故作詩以告欲觀而不知者。

【訓讀】鳳翔八觀の詩、觀るべきもの八を記す。昔、司馬子長、會稽に登り、禹穴を探り、千里を遠しとせず、而して李太白も、亦七澤の觀を以て荆州に至る。二子蓋し世を悲しみ俗を悼み、自ら古人を見ざるを傷んで、一たび其の遺跡を觀んと欲す、故に其の勤むること此の如し。鳳翔は秦蜀の交に當り、士大夫の朝夕往來する所、此の八觀は、又皆跬歩して至るべし。而して好事のもの、徧く觀る能はざるあり。故に詩を作り、以て觀んと欲して知らざるものに告ぐ。

【字解】(一) 鳳翔、今の陝西、鳳翔縣。元和郡縣志に、鳳翔項羽封三章郡爲漢王、即此地、漢爲右扶風云云。(二) 跬歩、兩歩と同じ、牛歩をいふ。禮記の祭義に、故君子跬歩而不忘孝也。

石鼓

冬十二月歲辛丑。

冬十二月歳の辛丑。

我初從政見魯叟。

我初從政、從つて魯叟に見ゆ。

石鼓

【字解】(一) 石鼓、周の宣王の時、史宓が頤を作りて功を記し、石に刻して鼓形となしたもので、凡そ十あつて、文を其上に鐫る。今尙ほ北

舊聞石鼓今見之。

舊石鼓を聞いて今之を見る、

文字鬱律蛟蛇走。

文字鬱律として蛟蛇走る。

細觀初以指畫肚。

細に觀初指を以て肚に畫し、

欲讀嗟如箝在口。

讀まんと欲し箝の口に在る如くなる

韓公好古生已遲。

韓公は古を好むも生已に遲し、

我今況又百年後。

我今況んや又百年の後なるをや。

強尋偏旁推點畫。

強ひて偏旁を尋ねて點畫を推し、

時得一二遺八九。

時に一二を得るも八九を遺す。

我車既攻馬亦同。

我が車既に攻く馬も亦同じ、

其魚維鯁貫之柳。

其の魚維れ鯁之を柳に貫く。

古器縱橫猶識鼎。

古器縱橫なるも猶ほ鼎を識り、

衆星錯落僅名斗。

衆星錯落たるも僅に斗を名ぞす。

模糊半已隱癡牴。

模糊半は已に癡牴に隱れ、

詰曲猶能辨跟肘。

詰曲猶ほ能く跟肘を辨す。

古今體詩 鳳翔八觀并序 石鼓

二二三

東園子監に存す。其の文見るべきもの四百六十有五、磨滅して讀るべからざるもの過半。文の内容は周宣王遺蹟の事を記したものである。(一) 歲辛丑、宋仁宗の嘉祐六年。起句に讀の干支を用ゐること唐詩に同じある。杜甫の北征詩、盧仝の月蝕の詩、白樂天の賀雨詩等。(二) 從政、論語、雍也篇に、仲由可使從政也云云。(三) 魯叟、孔子を指す。孔子は魯の人、叟は長老の稱。李白の贈葉十七仲塔詩に、魯叟應龍瓜。陶潛明の詩に、汲汲魯中叟。東坡の渡海詩に、空餘魯叟乘桴意。(四) 鬱律、文選の西京賦に、鬱鬱鬱律。註にいふ、昔、阪曲の貌と。揚雄の甘泉賦に、鬱鬱鬱律於殿梁。(五) 以指畫肚、虞世南は書を學び、常に被下に於て指を以て肚に畫す。(六) 箝在口、讀むこと難きを

娟娟缺月隱雲霧
濯濯嘉禾秀稂莠
漂流百戰偶然存
獨立千載誰與友
上追軒頡相唯諾
下挹冰斯同穀穀
憶昔周宣歌鴻雁
當時猶史變蝸蚪
厭亂人方思聖賢
中興天爲生耆耇
東征徐虜闕虓虎
北伐犬戎隨指嗾
象胥雜沓貢狼鹿
方召聯翩賜圭卣

娟娟たる缺月は雲霧に隠れ、濯濯たる嘉禾は稂莠に秀づ。百戰に漂流して偶然に存し、千載に獨立して誰か與に友とする。上は軒頡を追うて相唯諾し、下は冰斯を挹して穀穀に同じ。憶ふ昔周宣鴻雁を歌ひしとき、當時猶史蝸蚪を變ず。亂に厭いて人方に聖賢を思ひ、中興天爲に耆耇を生ず。東のかた徐虜を征して虓虎闕たり、北のかた犬戎を伐ち指嗾に隨はしむ。象胥雜沓して狼鹿を貢し、方召聯翩として圭卣を賜ふ。

いふ、韓退之の苦寒の時に、兩脚沸入、喉、口角如斬、蘇。厥陽水叔の時に、有レ口欲、愛、如、拮。【△】韓公好古、韓退之の石鼓歌に、嗇子好古生吾晚、對レ此滄溟變紛沓。【△】我車既攻云云、東坡の自註に、石鼓文之辭云、我車既攻、我馬亦同。又曰、其魚維何、維鱖維鯢、何以貢之、維鱖與鯢、惟此六句可讀、餘多不可通。鱖、助に似た魚。【△】鱖、鱖、同レ鱖。唐の崔暉が詩に、錦帶金縷甲、雲華細風衣。【△】機、分明ならざる貌、機杼とも書く、機は機の俗字。杜子美が詩に、龍骨錦機。【△】緘、緘は緘の處が已に愈えて痕あるをいふ。既は附。文字が漫漶して、半ば已に番商の痕の如く、又、手足の既、凍裂したるに似る。【△】詰曲、字體結構の怪しく勁きこと。【△】韻計、くびす

遂因鼓擊思將帥
豈爲考擊煩臆腹
何人作頌比嵩高
萬古斯文齊岫屨
勳勞至大不矜伐
文武未遠猶忠厚
欲尋年歲無甲乙
豈有名字記誰某
自從周衰更七國
竟使秦人有九有
掃除詩書誦法律
投棄俎豆陳鞭杻
當年何人佐祖龍
上蔡公子牽黃狗

遂に鼓擊に因つて將帥を思ふ、豈考擊の爲に臆腹を煩はさんや。何人か頌を作つて嵩高に比する、萬古斯の文岫屨に齊し。勳勞至つて大なれども矜伐せず、文武未だ遠からず猶ほ忠厚。年歲を尋ねんと欲するに甲乙なし、豈名字の誰某を記するあらんや。周衰へてより七國を更へて、竟に秦人をして九有を有たしむ。詩書を掃除して法律を誦し、俎豆を投棄して鞭杻を陳す。當年何人か祖龍を佐くる、上蔡の公子黃狗を牽く。

とひち、説文に、頤、足腫也、肘、臂節也。【△】娟娟、美好の貌。【△】濯濯、肥澤の貌、詩の大雅に、鹿濯濯。【△】稂莠、稂は禾粟の穂が生じて成らないもの、莠は稗に似て實がない。詩の小雅に、不稂不莠。【△】軒頡、軒は軒轅即ち黃帝、黃帝の時、文を以て結繩に代ふ。頡は蒼頡、鳥跡を見て文字を製す。【△】唯諾、曲禮上に、必價唯諾。註にいふ、唯諾、皆應辭、當レ價於應對也と。【△】挹、挹、一に挹に作る、同じ意である。氷は唐の李陽氷、小篆を善くす。斯は秦の李斯、大秦の篆きものを刪略して、其の合體を取り、參へて小篆を爲る。【△】聖穀、鳥の子、母鳥の之を食ふを須つもの、之を聖といふ、燕や雀の類である。爾雅に、生れて哺するは穀なりと見ゆ。穀は乳なり、楚人乳を

登山刻石頌功烈
 後者無繼前無偶
 皆云皇帝巡四國
 烹滅強暴救黔首
 六經既已委灰塵
 此鼓亦當遭擊掊
 傳聞九鼎淪泗上
 欲使萬夫沈水取
 暴君縱欲窮人力
 神物義不汚秦垢
 是時石鼓何處避
 無乃天工令鬼守
 興亡百變物自閒
 富貴一朝名不朽

山に登り石に刻して功烈を頌す、
 後なる者繼ぐことなく前にも偶なし。
 皆いふ皇帝四國を巡り、
 強暴を烹滅して黔首を救ふと。
 六經既に已に灰塵に委す、
 此鼓も亦當に擊掊に遭ふべし。
 九鼎泗上に淪むと傳聞して、
 萬夫をして水に沈んで取らしめんとし
 暴君欲を縱にして人力を窮むるも、
 神物は義として秦垢に汚されず。
 是時石鼓は何れの處にか避けん、
 乃ち天工鬼をして守らしむる無らんや
 興亡百變すれども物自ら閒なり、
 富貴は一朝なれども名は朽ちず。

謂つて戦といふ。【三】歌詞、
 詩小雅の篇名。周室中頌褒へて、萬
 民靡散す。然るに宣王能く之を勞來
 し、安集する。故に流民之を喜んで
 此詩を作る。【三】駟、駟、駟、駟の
 子、古文の形之に似る。【三】者、
 曲禮上に、六十曰耆、若は人老いて
 面撃うして振くが如し。【三】駟、
 駟虎、詩の大雅に、駟如駟虎、駟は
 虎の怒る貌。【三】伐、伐、伐、伐、
 一本に伏に作る。【三】指、指、指、
 使、大。【三】象、象、象、象、
 周禮、秋官に、象者掌、象、象、
 狄之國使、象、象、象、象、
 【三】賈、賈、賈、賈、
 四の白狼、四の白馬を得て勝る。宣
 王の時の事ではないが、此に借り用
 ひて、大戎に克つて功あるをいふ。
 【三】方、方、方、方、
 疾飛なり。方叔、召虎、共に賞を得

細思物理坐嘆息
 人生安得如汝壽

細に物理を思うて坐に嘆息す、
 人生安んぞ汝の如く壽なることを

て感傷揚揚たるをいふ。【二】坐、
 山は酒を盛る器、大樽を美、中樽を
 出、小樽を稱といふ。【三】鼓、
 子有鐘鼓、亦鼓也。又曰く、
 【三】九有、天下といふ義、詩の商頌
 【三】報、報、報、報、
 【三】登、山、刻、石、
 山の上つて、石を刻んで秦を頌す。

【題義】韓退之が既に石鼓の歌を作つたから、之を後石鼓歌といふ。東坡が二十六歳の時、即ち仁宗の嘉祐六年（皇紀一七二一年、西暦一〇六一一年）に制科に應じて鳳翔に在つたが、是年、鳳翔八觀の詩を作つた。此は其の一つである。歐陽永叔いふ、石鼓有十、其一無文、其九有文、可レ見者四百一十七字、可レ識者二百七十二字と。

【詩意】仁宗の嘉祐六年に、我（東坡）は試験に及第し、冬、鳳翔に赴任した。初て孔子の廟で、豫

聞いた石鼓を見る。石鼓は周宣王の時のもので、孔子廟に在る。其の文字は險曲で、蚊蛇の競ひ走るやうである。一覽して讀み得べきでないから、仔細に觀て、心に擬議し、指で肚の上に畫し、それかこれかと尋ね索めて今の字に譯して見る。試に讀まうとするも、箝（竹で作）り、口に挿ませて、言ふことを得ざらしめる具）が挿んで口中に在るやうで一句も讀み得られない。ただ口をつぐんで居る。韓

退之も、嘗て歎じて我古を好むも、生るること已に遅くて、上古の文字に通じない。僅に缺畫の餘を見て完好なるを見るに及ばずと言つた。まして韓公よりは百年も後に生れた我の時、缺畫がますます多く、文字いよいよ曉り難い。缺畫の餘を認め、強ひて偏旁を尋ね思つて、その字かこれの字かと點畫を推し案める。時に或は一二某の字なるを知り得るも、十に八九は讀み得ない。我車既攻云の六句のみ讀み得て、其餘は通じ難い。(韓愈の石鼓の歌に、辭嚴義密讀難曉、字體不類隸與科とある。)石鼓の文數百言の中、僅に六句を識り得、これ古器縱横に奔散して多い中で、僅に鼎を識りて怪まないと同じく、又、天上衆星の錯落と雜り布いて多い中に、只、北斗の七星を識りて名指しいふやうである。糶糊として文理なく、半は瘡痍の痕の如く、又、手足の皸凍裂したるに似て居る。既に文字漫滅して完全でなく、僅に残つて詰曲たる所を認めて偏旁の餘畫を視る。人體の全きを見ないで、僅に一眼一肘を見るやうなものである。殘畫の僅に見えたるは娟娟と光のうるはしい缺月が半ば雲霧に隠れて少し見えたるを望むに似て居る。又、濯濯たる嘉禾の稂莠の間から秀で抽いたるがやうである。周より唐に至るまで百戦を経て漂流すれども、遂に毀壞もしないで、偶然として今に存在する。千載の久しきを経て獨立する石鼓の壽に均しきものはない。其れ誰と與にか友たらん、天下に之と均しきものはない。石鼓の文、上は文字の祖黃帝や蒼頡と相並んで互に唯諾して讓ることはない。又、史籀が文よりして、下、李陽氷や李斯の書を視れば、二子は、未だ獨りて啄飲し得ざる鳥雞の如く微小である。(起句より此に至る、見る所の石鼓と其の詞とを敘す。)憶ふ昔、周の宣王は、亂を治めて民を安

んず、故に民は鴻雁の詩を歌つて之を喜ぶ。此時、史籀は蝌蚪を變じて大篆の體となした。凡そ亂が極まると、人、必ず治を思ふ。周は厲王の時亂れたが、宣王が立つて天子となり、其の亂を撥め民を拯うて、中興の周を定む。天帝之が爲に、耆考の老臣を生じて聖治を輔けしめらる。(生三耆考とは、史籀を始め、方叔、召穆公、申伯、仲山甫、尹吉甫等をいふ。)夷王厲王の世より、周室衰弱となつたのを、宣王中興の主となつて、自ら徐虜を征し、滅虎の關たる如き兵を進めると、徐虜も震蕩して遂に來庭し、犬戎を伐つと犬戎も王命に従ふ。(指曠は、指し使ふ聲に隨つて役せらる。曠の字は、犬の字より出で来る。)かくて通事に憑つて狐鹿を貢し、衆賁が集る。方叔も召虎も、共に賞を得て、威儀揚揚。王は召虎に命じて圭(古、諸侯を封するしるしに用ふ)の玉と租鬯(黒きびと香草とを合せて造つた酒)一亩とを錫ふ。かく宣王は亂を撥め、戎を伐ちて、四海平治したが、治に居て亂を忘れぬ。鞞鼓を見て將帥の臣を思ふの義により、石鼓を作る。與に天下を守らんことを欲するからである。考擊して樂をなし、矇瞍の樂師を煩はして音を奏せしめるのではない。何人か此の石鼓の文を作つて宣王を頌する詞を刻んで嵩高の詩に比したるや(嵩高は詩の大雅の篇名、宣王の時の詩)石鼓の文は、萬古、灼燼山上の神禹の碑に齊しいので天下の寶である。宣王は文・武・成・康の遺風に法つて徳教を布き、海内治まつて、天下周を宗とした。中興の勳勞は至つて大であるが、其の文を按ずるに、矜り伐るの辭がない。文・武の世を去ることが遠くなく、風俗猶ほ忠厚であるからであらう。石鼓の文を作つた年代は、甲乙の紀年もないから尋ねやうがない。又、文を作つたものの名字は、誰某と記すこともな

い。年紀でさへ記さないから、作者の名字は、猶ほ以て知り難い。周は幽王より漸く衰へ、威烈王に至つて極まる。七國相争ひ、秦人をして天下を一統せしむ。秦天下を有つて、詩書を焼き去つて悉く之を掃除し、只法律を誦して、禁を避け、令に従はしむ。秦は先王の禮樂を投げ棄てて用ひない。(俎豆は、論語衛靈公篇に、孔子曰、俎豆之事、則嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也とある。東坡は之に本づいたのであらう。)そして鞭紐の具を陳ねて、刑法を峻にした。當時何人が始皇を佐けて此の如き政をなしたか、即ち彼の上秦の公子、死に臨んで黃狗を牽みて兎を逐はんことを思ふと言つて哭した李斯其の人が爲である。(李斯を謂ふに、刑に臨む時の語を引いたのは之を惡んだからである。)石に刻むの文は、皆秦の天下を并せ有つの功烈を誇り頌して居る。秦の世、無窮に傳はつて、後、繼ぐものもなく、秦が一統和平の治、前代の聖王も能く偶をなすなしといふのであらう。皇帝、四方の國を巡つて、強暴を滅し、貽首を救ふといふのは、石に刻んだ文辭である。石鼓は秦の暴を歴て恙なく今に存する。六經の書、皆、焼かれて灰塵に委ねたれば、石鼓も共に擊拵されて、毀壞すべきである。傳へ聞く、虞夏以來の九鼎は、周の顯王の時、淪んで泗水に入る。始皇、萬夫をして泗水に沈み、鼎を求めしめたが、終に得なかつた。始皇が欲を繼にし、人力を窮めて無道をなすに因つて、鼎は神物であるから、秦の垢に汚されぬやうにと隠れて出でなかつたのであらう。神鼎已に淪んで自ら隠るれども、暴君始皇は猶ほ探り求めて之を得んと欲す。是時、此の石鼓は、何れの處に逃げ隠れて、秦の宮に入らないで、暴朝の垢に汚されなかつたか。これは天工より鬼神を役して衛護せしめたのではな

からうか、もし然らずば、燒き滅されるか、徙し納められた筈である。周より宋に至るまで、興亡百變するが、此物は、依然として閒である。因つて思ふ、人生の富貴は一朝にして休す。ただ名譽のみは、長く傳はつて朽ちない。細に事物の道理を思つて坐に歎息する、人生の聲名は、安んぞ石鼓の壽にして不朽なるが如くなるを得んや。

詛楚文

詛楚文

崢嶸開元寺髣髴祈年觀

崢嶸開元寺、髣髴祈年觀。

舊築掃成空古碑埋不爛

舊築は掃うて空となるも、古碑は埋もれて爛れず。

詛書雖可讀字法嗟久換

詛書讀むべしと雖も、字法久換を嗟く。

詞云秦嗣王敢使祝用瓚

詞にいふ秦の嗣王、敢て祝をして瓚を用ひしむ。

先君穆公世與楚約相捍

先君穆公の世、楚と約して相捍ぐ。

質之於巫咸萬葉期不叛

之を巫咸に質し、萬葉叛かざるを期す。

今其後嗣王乃敢構多難

今其後の嗣王、乃ち敢て多難を構へ、

刳胎殺無罪親族遭圍絆

胎を刳き罪なきを殺し、親族圍絆に遭ふ。

計其所稱訴何啻桀紂亂

其所稱訴する所を計るに、何ぞ啻に桀紂の亂のみならん。

吾聞古秦俗、面詐背不汗。

吾聞古之秦俗、面のあたり詐りて背に汗せず。

豈惟公子印、社鬼亦遭謾。

豈惟に公子印のみならんや、社鬼亦謾に遭ふ。

遠哉千載後、發我一笑祭。

遠なるかな千載の後、我が一笑祭を發す。

【字解】【一】詛楚 詛は呪ふ意、楚王熊相の盟に倍き盟を犯したことを責め、諸を名章に著はし、以て大神の成神に盟ふ。【二】嘲 山の峻しき貌。【三】虜 虜に同じ、明かならざる貌。【四】新年 雍縣の中牟井に在る秦の惠公の故居。【五】用 周禮、冬官に、僕用瑋、伯用將。瑋も亦圭である。瑋の言は實進なり、以て神に通むる意である。【六】巫成 莊子の應帝玉篇に、鄭有、神巫曰、季成、知人之死生存亡禍福壽夭、期以、成月旬日、若神。【七】萬葉 萬代に同じ、葉は世。顯慶年の曲水詩序に、國萬葉而爲意。【八】開 開 四ばれつながら。【九】笑祭 郭璞詩に、靈祀顯我笑、樂然啓玉齋。殷鑒傳の昭公四年に、軍人樂然皆笑。

【題義】秦祀巫成神は、今、流俗之を詛楚文といふ。首として秦穆公と楚の成王との事を述べ、遂に楚王熊相の罪に及ぶ。巫成は、古の神巫で、殷の中宗の世に降下したといふことである。詛楚文の石碣に三つある。(一)渭水より得たもの、(二)祈年觀下のもの、(三)洛水出す所のもの。東坡の自註に、碑獲於開元寺土下、今在太守便廳、秦穆公葬於雍秦泉祈年觀下、今墓在開元寺之東南數十步、則寺豈祈年之故基耶、淮南王遷於蜀、至雍道一病卒、則雍非長安、此乃古雍也、とある。

【詩意】開元寺は峻く聳え、祈年觀は髣髴として見ゆ。觀は秦孝公の時代に起したもので、秦より宋の嘉祐に至る千餘年の久しきであるから、舊日の版築は地を掃うて盡く。ただ古碑は埋れて爛れない。(靈成の歌に、南山祭、白石爛)詛書は讀めるけれども、字法が久しく時代を経た爲に換つて居る。其の

詞にいふ、秦の嗣王敢て祝(神官)をして瓊を用ひて神前に進めしめる。先君穆公の世に、楚と約して相擯ぎ、之を巫成に質し、萬代叛かないことを期した。然るに其の嗣王が、敢て多難を構へ、孕婦を刺したり、罪のないものを殺したりして、親族は囚はれて繋がる。其の稱訴する所を計るに、何ぞ嘗に夏の桀王や殷の紂王の亂暴のみではない。(秦の嗣王より此に至るまで、皆詛楚文中の語である)吾聞く、古の秦の風俗は變詐で、面と向つて詐り、而も少しも愧ぢることを知らない。欺かれるものは、ただ彼の公子印ばかりではない。(史記の商鞅傳に、孝公使衛鞅將而伐魏、魏使公子印將而擊之、軍既相距、鞅遣魏將公子印書曰、吾始與公子一驩、今俱爲兩國將、不忍相攻、可與公子一面相見、盟樂飲而罷兵、以安秦魏、公子印以爲然、會盟已飲、而衛鞅伏甲士二而襲虜公子印、因攻其軍、盡破之以歸秦。)社鬼も謾かれる。昔、周の雍門周(琴を鼓して孟嘗君之を悲しむ)は孟嘗君に謂つて曰く、千秋萬歲の後、高臺は已に傾き、曲池は已に平かなりと謂つたが、遠なるかな千載の後、我が一笑祭を發するのである。

王維吳道子畫

王維吳道子畫

何處訪吳畫、普門與開元。

何れの處に吳畫を訪はん、普門と開元と。

開元有東塔、摩詰留手痕。

開元に東塔あり、摩詰手痕を留む。

吾觀畫品中、莫如二子尊。

吾畫品中を觀るに、二子の尊きに如くはなし。

道子實雄放，浩如海波翻。
當其下手風雨快，筆所未到氣已吞。
亭亭雙林間，彩暈扶桑暎。
中有至人談寂滅，悟者悲涕迷者手自捫。
蠻君鬼伯千萬萬，相排競進頭如龜。
摩詰本詩老，佩芷襲芳蓀。
今觀此壁畫，亦若其詩清且敦。
祇園弟子盡鶴骨，心如死灰不復溫。
門前兩叢竹，雪節貫霜根。

道子は實に雄放、浩として海波翻へるが如し。
其の手を下すに當り風雨快し、筆未だ到らざる所氣已に呑む。
亭亭雙林の間、彩暈扶桑の暎。
中に至人の寂滅を談するあり、悟るものは悲涕し、迷ふものは手自ら捫す。
蠻君鬼伯千萬萬、相排し競ひ進み頭は龜の如し。
摩詰は本詩老、芷を佩び芳蓀を襲ぬ。
今此の壁畫を観るに、亦其の詩の清且つ敦なるが若し。
祇園の弟子盡く鶴骨、心は死灰の復温かならざるが如し。
門前兩叢竹、雪節霜根を貫く。

交柯亂葉動無數。

交柯亂葉動いて數なし。

一一皆可尋其源。

一一皆其の源を尋ぬべし。

吳生雖妙絕，猶以畫工論。

吳生妙絶と雖も、猶ほ畫工を以て論す。

摩詰得之象外。

摩詰は之を象外に得。

有如仙，翻謝籠樊。

仙翻の籠樊を謝するが如きあり。

吾觀二子皆神俊。

吾二子を觀るに皆神俊。

又於維也，斂衽無間言。

又維也に於て衽を斂めて間言なし。

【字解】【一】王維、名畫記に、王維字は摩詰、太原の人、開元の初、年十九にして進士となり、第に擧んでられ、同舉を以て名を知られ、又、畫に工である。官は尚書右丞に至る。【二】吳道子、國畫寶鑑に、吳道玄、字は道子、陽翟の人。其の筆法超妙にして、百代の畫聖となす。【三】普門、開元二寺の名、俱に鳳翔府に在り。鳳翔府志に、開元寺在城北街、唐開元元年建、内有祖梵文及吳道子畫佛、王維畫竹。【四】畫放、輟筆餘に、買置之後、司馬之輩放。【五】海波翻、韓退之の詩に、助叫波翻海波。【六】風雨快、杜子美の詩に、筆落驚風雨。【七】亭亭雙林間、亭亭は聳えたるさま、釋迦、法を雙林樹下に説き、二月十五日、大涅槃に入る。譯して滅度といふ。【八】彩暈扶桑暎、彩暈は五色のくもり、扶桑暎は朝日ないふ。扶桑は日所出之處、暎は日光。杜子美の詩に、絕壁上朝暎。【九】鬼伯、古高麗曲に、鬼伯一何相催促。【一〇】頭如龜、龜はおほ龜、晏子春秋に、古冶子得龜頭、鮪躍而出。【一一】詩老、王維の詩に、宿世謬詞客、前身應畫師。【一二】芷、水に生する一種の香草。【一三】芳蓀、香草。謝靈運の詩に、池邊露芳蓀。【一四】祇園、祇園給孤獨園の略。釋迦、法を祇園に説く。【一五】鶴骨、齊魯の詩に、瘦影成鶴骨。【一六】死灰、莊子齊物論に、形固可使如槁木、心固可使如死灰乎。【一七】交柯、水經の註に、交柯雲野。【一八】亂葉、李古今體詩、鳳翔八觀并序、王維吳道子畫

調の時に、亂葉落寒城。【二】 仙題 列仙傳に、王次仲騰身爲鶴、始皇召之不至、次仲化爲大鳥振翼而起、以三大扇鼓翼、使者始皇因名爲三扇仙。【三】 問言 辭を加へること、張顛傳に、至三張顛會無問言。

【題義】 此篇は、東坡が鳳翔府の簽判となつた時作つたもの、前の鳳翔八觀の詩の一つである。唐の米景元の畫斷に、道子を以て神品上上となし、摩詰を以て、妙品上上となす。

【詩意】 何れの處にか吳道子の畫を訪はん。吳生の畫佛は、此の開元寺に在り、又、其の東塔には摩詰の畫もある。吾、畫品中を觀るに、二子の尊きに如くものはない。(前の四句を一括して、王と吳との畫品が最も尊きを説く。此れ以下は、吳生の筆力の雄放奇拔なるを敘す。)道子の畫は雄放で、海波の翻へるが如し。其の手を下す、風雨快く、筆未だ到らない内に、氣既に吞む。其の畫は彼の跋提河邊の娑羅雙樹の下に於て、佛が涅槃に入るときに相を寫したものである。其の有様をいふと、娑羅雙樹の間に、佛の頂の後に圓光を放つて居る。それは恰も朝日のまはりに、五色の雲がかかつて居るやうである。(佛の圓相を説く)中に至人(佛をいふ)が入滅の時に、涅槃經を説いて、寂滅の理を談ずるとき、悟るもの、即ち菩薩の輩は、感泣して居る。迷ふもの、即ち聲聞の輩は、捫覓し、唯手を以てあがいて居る。又、異形不思議な野蠻の頭ども、鬼の頭どもが、佛の涅槃に入るのを見たいと、競ひ進み來る、其の有様は龍が水中から頭を出して狂ひまはつて居るやうである。(以上吳生の畫を敘す。以下は摩詰が畫ける所の、開元寺の東塔の畫を敘す。)さて王維は時に老いたもので、其の韻度の清絶超高なことは、譬へば香のよい芷を佩びたものが、芳華を襲ねたやうなものである。今、此の東

塔の壁畫を觀るに、亦其の詩のやうに清絶な中に、敦厚の旨趣がある。(禮記に、溫柔敦厚は、詩の教とある)又、其の畫いた釋迦の十大弟子のさまをいふと、何れも瘦せて骨高く、鶴のやうである。又、無心であつて、死灰の再び温かならざるやうである。更に王維の畫ける門前にある兩叢の竹は、雪霜の中に、凜然たる氣節を見ることが出来る。殊に交はりたる枝、亂れた葉は、動いて居るやうに見える。其の數は、數へきれぬ程であるが、畫く法があつて、其の原理を尋ねることが出来る。吳生の伎倆は妙絶であるが、畫工といふまでである。摩詰の畫に至つては、形象の外に、絶妙の趣を加へる。仙禽が籠から出て自由に飛び舞つて居るやうである。此二人の畫を觀るに、皆神俊の絶藝である。そして王維の畫は、尋常畫工の出来ない象外の妙趣があるから、之に對しては敬意を表し、筆をかいつくりひて一言の世難のしやうがない。(道子と摩詰とを合論して、重きを摩詰に歸する。)

維摩像唐楊惠之塑在天柱寺

維摩の像、唐の楊惠之の塑、天柱寺に在り

昔者子輿病且死、昔子輿病みて且に死なんとす、
其友子祀往問之、其の友子祀往いて之を問ふ。
跼蹐鑿井自嘆息、跼蹐として井に鑿みて自ら嘆息す、
造物將安以我爲、造物將に安に我を以て爲さんとす。

【字解】 【一】 維摩 維摩詰は、

釋尊と時代と向うし、家に在りて菩薩の道を行はせり。 【二】 鑿 鑿像、土で作つた像。 【三】 子輿病且死 云云 蘇子の大宗師に、子輿有病、

古今體詩 鳳翔八觀并序・維摩像唐楊惠之塑在天柱寺

今觀古塑維摩像。病骨磊砢如枯龜。乃知至人外生死。此身變化浮雲隨。世人豈不頷且好。身雖未病心已疲。此叟神完中有恃。談笑可却千熊羆。當其在時或問法。俛首無言心自知。至今遺像兀不語。與昔未死無增虧。田翁里婦那肯顧。時有野鼠銜其髭。

今、古塑維摩の像を観るに、病骨磊砢枯龜の如し。乃ち知る至人は生死を外にし、此身の變化浮雲に隨ふを。世人豈頷に且つ好からざらんや、身未だ病まずと雖も心已に疲る。此の叟神完く中恃むあり、談笑して千熊羆を却くべし。其の在しし時に當り或ひと法を問ふ、首を俛して言なく心自ら知る。今に至るまで遺像兀として語らず、昔未だ死せざると増虧なし。田翁里婦那ぞ肯て顧みん、時に野鼠あつて其の髭を銜む。

子祀往問之、曰俛哉夫造物者、將以予爲此拘拘也。曲盡發骨、上有五管、顯隱於齊、顯高於頂、句繫指天、陰陽之氣有涉、其心閒而無事、辭靡而嚴。子井曰、嗟乎夫造物、又將以予爲此拘拘也。【一】辭靡、ひよろひよろと歩む貌。莊子の註に、病而不行貌とある。【二】枯龜、論衡に、枯龜之骨といふ語がある。【三】浮雲隨、維摩經に、是身如浮雲、須臾變滅。【四】神完、韓退之の詩に、神完骨脚則不掉。【五】談笑云云、文選左太神の詩に、談笑御秦軍。熊羆、猛き士。【六】俛首無言、維摩經に、文殊師利、維摩詰に問ふ、維摩詰、默然として言なし。文殊師利歎じて曰く、善いかな善いかなと。【七】自失、莊子應帝王篇に、神巫見畫子、自失而走。

見之使人每自失。之を見て人をして毎に自失せしむ、

誰能與詰無言師。誰か能く詰と無言の師たらん。

【題義】唐の楊惠之は吳道子と同じく張僧繇(唐の人、丹青絶代と稱さる)の筆蹟を師とし、畫友となつて工藝並に著はれたが、道子の聲光獨顯はれたので、遂に筆硯を焚き棄て、憤を發して思を塑作に専らにした。能く僧繇の畫相を奪ひ、道子と銜を争うた。名勝志に、維摩詰像在鳳翔縣天柱寺とある。此詩は楊惠之の手に成つた維摩詰の塑像を直寫したのである。

【詩意】昔、子輿が病むと、其の友子祀は見舞つた。子輿は、ひよろひよろとして井水に其の影を寫し、歎じて曰く、ああ造物者我をして此病をなさしむ。一體、我をどうする考へであらうかと。今、維摩の古い塑像を観るに、磊砢として、枯れた龜骨のやうである。して見ると、至人は、生死を外にし、此身の變化は浮雲に隨ふことが解る。世の人には、身體も大きく、又立派なものがある。身未だ病まないが心は已に疲る。然るに此叟は神完くして、中恃むものがある。談笑の間に、猛き武夫を却ける剛勇がある。其の在世の時に、或人が法を問ふと、首を俛して言なきも、心の中では之を知る。今に至るまで遺像は兀として居つて語らない。昔、まだ死なない時と増しもしないし虧けもしない。田翁も里婦も顧みない。時に野鼠があつて、其の髭を銜んだので、人をして自失せしめた。誰か能く維摩詰と無言の師となるであらう。

東湖

吾家蜀江上。江水清如藍。
爾來走塵土。意思殊不堪。
況當岐山下。風物尤可慚。
有山秃如赭。有水濁如泔。
不謂郡城東。數步見湖潭。
入門便清奧。恍如夢西南。
泉源從高來。隨波走涵涵。
東去觸重阜。盡爲湖所貪。
但見蒼石螭。開口吐清甘。
借汝腹中過。胡爲目耽耽。
新荷弄晚涼。輕棹極幽探。
飄飄忘遠近。偃息遺珮簪。
深有龜與魚。淺有螺與蚌。

東湖

吾蜀江の上に家す、江水は清うして藍の如し。
爾來塵土に走り、意思殊に堪へず。
況んや岐山の下に當り、風物尤も慚すべきをや。
山あれども秃にして赭の如し、水あれども濁りて泔の如し。
謂はず郡城の東、數歩に湖潭を見んとは。
門に入れば便ち清奧、恍として西南を夢るが如し。
泉源高きより來り、波に随ひ走つて涵涵。
東に去つて重阜に觸れ、盡く湖の貪る所となる。
但見る蒼石螭、口を開いて清甘を吐く。
汝が腹中を借りて過ぐ、胡爲れぞ目耽耽たる。
新荷晚涼を弄し、輕棹幽探を極む。
飄飄として遠近を忘れ、偃息珮簪を遺る。
深きに龜と魚とあり、淺きに螺と蚌とあり。

曝晴復戲雨。戢戢多於蠶。
浮沈無停餌。倏忽遽滿籃。
絲繆雖強致。瑣細安足戡。
聞昔周道興。翠鳳棲孤嵐。
飛鳴飲此水。照影弄銚銚。
至今多梧桐。合抱如彭聃。
彩羽無復見。上有鷓搏鷄。
嗟予生雖晚。好古意所耽。
圖書已漫漶。猶復訪僑鄰。
卷阿詩可繼。此意久已含。
扶風古三輔。政事豈汝諳。
聊爲湖上飲。一縱醉後談。
門前遠行客。劫劫無留驂。
問胡不回首。毋乃趁朝參。

曝晴復戲雨、戢戢として蠶より多し。
浮沈して停餌なく、倏忽遽に籃に滿つ。
絲繆強ひて致すと雖も、瑣細安んぞ戡つに足らんや。
聞く昔周道興り、翠鳳孤嵐に棲む。
飛鳴して此水を飲み、照影銚銚を弄す。
今に至るまで梧桐多く、合抱彭聃の如し。
彩羽復見るなく、上に鷓の鷄を搏つあり。
嗟予生ること晚しと雖も、古を好む意耽む所。
圖書已に漫漶、猶は復僑鄰を訪ふ。
卷阿の詩繼ぐべし、此意久しく已に含む。
扶風は古の三輔、政事は豈汝諳んせんや。
聊か湖上の飲を爲し、一縱醉後に談せん。
門前遠行の客、劫劫驂を留むるなし。
問ふ胡ぞ首を回さざる、乃ち朝參に趁くなからんや。

でないが、猶は博物の君子鄭の子産や郷子を訪うて古を知ることが出来る。又、かの詩經大雅の卷阿の詩（鳳凰鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽）も繼ぐことが出来よう。此の意は以前から含んで居る。政事は汝には解るまい。聊か湖上の飲をなし、酔後に談することしよう。門前遠行の客、劫劫として進み、驂馬を留めぬまい。何んで首を回さないのか、朝參に遅く爲めでもあらうか。予は今正に疎懶、自分ながら愛想が盡きる。然るに官長が幸に寛容されて、辭職もしないで日に遊ぶこと二年。（此の二句は、太守宋選の厚遇を指す）行くゆく恐らくは三年にならうとする。官を守つて三年に及ぶと考積される例である。之を頼みとして居る。暮に歸り、また倒載して知る所がない。鐘鼓は既に齟齬として微かである。

眞興寺閣

眞興寺閣

山川與城郭、漠漠同一形。
市人與鴉鵲、浩浩同一聲。
此閣幾何高、何人之所營。
側身送落日、引手攀飛星。
當年王中令、斫木南山楨。

山川と城郭と、漠漠同一形。
市人と鴉鵲と、浩浩同一聲。
此閣は幾何高き、何人の營む所。
身を側てて落日を送り、手を引いて飛星を攀づ。
當年王中令、木を斫り南山楨し。

寫眞留閣下、鐵面眼有稜。

眞を寫し閣下に留む、鐵面眼に稜あり。

身長八九尺、與閣兩崢嶸。

身長八九尺、閣と兩ながら崢嶸。

古人雖暴恣、作事今世驚。

古人暴恣と雖も、事を作す今世驚く。

登者尙呀喘、作者何以勝。

登る者尙ほ呀喘、作る者何を以て勝へむ。

曷不觀此閣、其人勇且英。

曷ぞ此閣を観ざる、其の人勇且つ英。

【字解】(一) 眞興寺閣 鳳翔志に、眞興寺閣、宋節度使王彦超建、在城中、高十餘丈。(二) 側身 楚辭に、側側身而無所。(三) 鐵面 佛文公の詩に、危樓高百尺、手可摘星辰、不敢高聲語、恐驚天上人。(四) 王中令 名は彦超、周の末、宋の初に、中書令鳳翔の節度使となる。(五) 引 赤色、騎ほ騎山といふが如し。(六) 身長 杜子美の詩に、張公一生江海客、身長九尺餘、一本に身強に作る。(七) 呀喘 息が急に出て、あへき苦しむ。

【題義】此詩も、鳳翔八觀の一である。體裁をいふと、古人の意を用ひて、其の字を取らない。即ち杜子美が登慈恩寺塔詩に、泰山忽破碎、涇渭不可求、俯視但一氣、焉能辨皇州、とある。

【詩意】高閣の上から下観すると、山川も、城郭も、平遠漠漠として、同じやうに見える。又、人語鳥聲も同じやうに聞える。四句、此閣の高きを狀す。此の閣の高さはどれだけ、何人が營める。日の落ちるも目前に在れば、我のみ日を送るが如く、天上の星をも、手でつまみ取ることが出来るやうである。（此閣云云の二句は自ら問を發し、側身云云の二句は、第一句を承けて、其の高きを狀す。そして側身は遠望をいひ、引手は其の高きをいふ。當年の王彦超は、此閣を造る爲に、南山の木を斫

り盡くし、それが爲に、南山は禿げて赤くなつたといふことである。(此二句は、前の第二句、何人所營の句を承く)王彦超は、自分の眞影を此閣の下に留めた。此を觀るに、面は黒くて鐵のやうであり、其の眼には稜がある。(晉書の桓温傳に、劉劭嘗て之を稱して曰く、温眼如紫石稜と)其の身の長も非常なもので、此閣と兩つながら峰嶽(高く聳える)である。王彦超は暴恣(てあらくほしいま)ま)おこつて無益なものを造つたなどと言ふものもあるが、其の氣宇は大で、今人は逆も及ばない。ただ驚くばかりである。此閣に登るだけでも、其の高さに勝へないで、喘ぎ苦しむのである。此閣を作つた人人の苦辛は、いかばかりであつたらう。(嗚、勝へ難かりしならん)よく建築を見られよ、大なる志、膽力のあるものでなければ、かかる大構造は、出來ない。之を作つた人は、千萬人にすぐれたもので、殊に勇氣に富んだ人である。(李太白の詩に、張子勇且英とある。末句は此の字面を用ゐたものである。)

李氏園

李氏の園

朝遊北城東回首見修竹。

朝に遊ぶ北城の東、首を回せば修竹を見る。

下有朱門家破牆圍古屋。

下に朱門の家あり、破牆古屋を圍む。

舉鞭叩其戶幽響答空谷。

鞭を擧げて其戸を叩けば、幽響空谷に答ふ。

入門所見夥十步九移目。

門に入れば見る所夥し、十歩に九たび目を移す。

異花兼四方野鳥喧百族。
其西引溪水活活轉牆曲。
東注入深林林深窗戶綠。
水光兼竹淨時有獨立鶴。
林中百尺松歲久蒼鱗蹙。
豈惟此地少意恐關中獨。
小橋過南浦夾道多喬木。
隱如城百雉挺若舟千斛。
陰陰日光淡黯黯秋氣蒼。
盡東爲方池野雁雜家鶩。
紅梨驚合抱映島孤雲馥。
春光水溶漾雪陣風翻撲。
其北臨長溪波聲卷平陸。
北山臥可見蒼翠間磽秃。

異花四方を兼ね、野鳥百族を喧しくす。
其の西は溪水を引き、活活として牆曲に轉ず。
東に注いで深林に入り、林深くして窗戶綠なり。
水光竹と淨く、時に獨立の鶴あり。
林中百尺の松、歳久うして蒼鱗蹙る。
豈惟に此地に少きのみならんや、意ふに恐くは關中に獨。
小橋南浦を過ぐ、道を夾んで喬木多し。
隱として城百雉の如く、挺として舟千斛の若し。
陰陰日光淡く、黯黯秋氣蒼ふ。
東を盡くして方池を爲り、野雁に家鶩を雜ふ。
紅梨合抱に驚き、島に映じて孤雲馥し。
春光水溶漾、雪陣風翻撲。
其の北は長溪に臨み、波聲平陸を卷く。
北山は臥して見るべく、蒼翠磽秃に間はる。

我時來周覽問此誰所築
 云昔李將軍負險乘衰叔
 抽錢算間口但未權羹粥
 當時奪民田失業安敢哭
 誰家美園囿籍沒不容贖
 此亭破千家鬱鬱城之麓
 將軍竟何事蟻蝨生刀韞
 何嘗載美酒來此駐車轂
 空使後世人聞名頸猶縮
 我今官正閑屢至因休沐
 人生營居止竟爲何人卜
 何當辦一身永與清景逐

我時に來つて周覽す、問ふ此れ誰が築きし所ぞ。
 云ふ昔李將軍、險を負みて衰叔に乘じ、
 錢を抽いて間口を算し、但未だ羹粥を權せず。
 當時民の田を奪ふ、業を失ふ安んぞ敢て哭せん。
 誰が家の美園囿、籍沒して贖ふべからず。
 此亭は千家を破る、鬱鬱城の麓。
 將軍竟何事、蟻蝨刀韞に生ず。
 何ぞ嘗て美酒を載せ、此に來りて車轂を駐むる。
 空しく後世の人をして、名を聞くら頸猶は縮ましむ。
 我今官正に閑、屢至るは休沐に因る。
 人生居止を營む、竟に何人の爲に卜する。
 何か當に一身を辦じて、永く清景と逐ふべき。

【字解】【一】條竹、長く延びた竹、北史、柳弘傳に、條竹夾池。【二】朱門、晉書趙允傳に、南開朱門、北望青樓。【三】異花、四方、杜子美の詩に、異花開麗城。【四】活活、水の處に流れる聲、詩の雷風に、河水洋洋、北流活活。【五】水光、竹

杜子美の詩に、道水兼天淨。【六】若麟、買島の詩に、青松樹有麟。【七】南浦、江淹の別賦に、送君南浦。【八】隱如城、後漢書の吳漢傳に、隱若一敵國矣。左傳の都城百雉の註に、方丈曰堵、三堵曰雉。【九】關關、陳琳の詩に、關關天雉。【一〇】映鳥、孤雲、韓退之が詩に、秋、知花鳥處、水上覓紅雲。【一一】溶溶、ただよふ、杜牧之の詩に、洛洛漢漢白濁飛。【一二】雪陣、皮日休の詩に、雪陣千萬戰、蘇轍の詩に、雲飛雪陣散、願倒玉山舞。【一三】衰叔、衰世、叔世をいふ。叔世は末世に同じ、漢書の刑法志に、三辟之異、皆叔世也。【一四】間口、間架梁や戸口。【一五】權、税を賦課する。漢書武帝紀の初、權酒。【一六】蟻蝨、財産を官に没収する、三國志の王修傳に、太祖權沒番配家財物貨、以爲萬數。【一七】破千家、買島の詩に、破却千家爲一池、不裁統李種善哉。【一八】蟻蝨生刀韞、漢書嚴安傳に、介買生蠶蝨、民無所告。【一九】載美酒、漢書楊雄傳に、家貧嗜酒、時有好事者、載酒有從遊學。【二〇】蟻蝨、韓退之の送窮文に、蟻蝨縮頭。東坡の自註に、俗呼皇后園、蓋茂貞謂其妻也。【二一】休沐、史記に、石建爲郎中令、每五日洗沐歸謁親。漢書安世の傳に、休沐未嘗出。【題義】東坡は休沐（官吏の暇を得て休息すること）を以て城北の李氏園に遊んだ。李氏園は、東坡の自註に、李茂貞園也、今爲王氏所有とある。李茂貞は本姓は宋、名は文通、唐の僖宗の世、鳳翔節度使となる。昭宗の世、一時叛いた。唐亡び、梁の太祖即位するに及び、岐に居る。後唐の莊宗、梁を破りて洛に入るや、上表して臣と稱す。紀昀は此詩を不惟掃倒茂貞、乃并圖字、一齊掃倒、一篇累贅文字、忽然結歸虛空、真爲超妙之筆と評して居る。【詩意】休暇を賜はつて、朝に城北の李氏園に遊ぶ。首を回して修竹を見、下には古い朱門の破れ家がある。其の戸を叩くと、幽かな響が空谷に答へる。門内には、珍しいものが多く、應接に暇がない。四方の異花は、目を眩くし、色色の野鳥は耳を眩すしくする。（紀昀いふ、竟以鼓記體一行之、樸老無敵、而波瀾又極壯闊云云と。）其の西は、溪水を引き、水聲活活、東に注いで深林に入る。

古今體詩 鳳翔八觀并序・李氏園

林が深く、窗戸も縁である。時に鶴（白鳥）が、獨林中に立つて居る。又、林中百尺の松は、歳久うして蒼い鱗が生じて居る。これは此地で珍らしいばかりでなく、恐くは關中にも類はなからう。小橋を渡つて南浦を過ぎると、道の兩側に喬木が多い。隱（殿と通ず、盛なる貌）として百雉の都城の如く、挺（拔んづる）として千斛の舟のやうである。（唐の李荃の太白陰經に、船の關狹長短は、皆、米を以て率となす。一人の重は米二石。日の光は陰陰、秋の氣は黯黯、東の端に方池を爲つて、野雁に家鷺を雜へて居る。紅梨の合抱もあるに驚き、孤雲が島に映りて靄しい。春光水にただよひ、雪陣も風に散らされる。北は長溪に臨み、波の聲が平陸を卷く。北山は臥して見ることが出来、蒼翠が硯秃（石多き瘠せ地）に間つて居る。我來つて周覽し、一體、此處は誰が築いたかと問ふ、云ふ、昔、李將軍が嶮岨を負んで五代の末世に乗じ、人民より貨財を誅求して、口饑や間架税を取り立てる。（漢律に據ると、民は年七歳より十五に至る、口饑を出さしむ。唐の徳宗に至り、屋間架に税した。之を間架税といふ。屋の間架大小を視て、課税するのである。間架は梁と梁との間、架は桁と桁との間をいふ。）また、藁や粥には、さすがに賦課したり、之を專賣したりなどはしない。當時、亂暴にも民の田地を奪ふ。奪はれて業を失ふも、安んぞ敢て哭しようぞ。（李茂貞が田を奪ひ園を開いたのは唐末の事である。）誰が家の美園園か、籍没しても、民の損失を贖ふことは出来ない。此事は民の千家を破つて造つたもので、城の窟に鬱鬱として立つて居る。かかる横暴を、恣にした李將軍も、竟に如何、熾盛は刀鬪（弓衣）に生じたのである。將軍は嘗て美酒を載せ、此に來りて車を駐め、空しく後世の人をし

て、其の名を聞いただけでも頭を縮めしめる。我（東坡）は今、役は閒であるから、休暇を賜はつて屢來た。人生は居止を管むも、竟に何人の爲にする。何日か當に一身を處辨して、永く清景を尋ねたいものである。

【餘論】李茂貞は嘗て、地狹く賦が薄いといふので、令を下して油を權（專賣の意）せしめ、城門に松薪を内れることを禁じた。其れは炬となして明を取ることが出来るからであつた。一僱者が之を請つて、臣請并禁三月明と言つた所、茂貞は笑つて怒らなかつたといふことである。

秦穆公墓

秦穆公の墓

秦泉在城東。

秦泉城東に在り、

墓在城中無百步。

墓は城中に在つて百歩なし。

乃知昔未有此城。

乃ち知る昔未だ此城あらざるを、

秦人以泉識公墓。

秦人は泉を以て公の墓を識る。

昔公生不誅孟明。

昔公生きて孟明を誅せず、

豈有死之日而忍

豈死するの日にして其の良を用ゐるに

用其良。

忍ぶあらんや。

【字解】【一】秦穆公墓 秦泉宮、

新年親の下に在る。【二】秦泉 城内の東南隅に在り、秦の穆公、宮を上に建つ。【三】不誅孟明 左傳文公元年に見ゆ。【四】用其良 左傳文公六年に、秦伯任好卒、以子車氏之三子奄息、仲行、鍼虎、爲殉、皆、秦之良也。【五】齊之二子從 田橫 前漢書に、高帝詔田橫、來、橫乃與其客二人、乘傳詣、健陽、自到、高帝爲之流涕、拜其二客爲

乃知三子殉公意。乃知三子の公に殉するの意、亦如齊之二子從田橫。亦、齊の二子の田横に従ふが如きを。

都尉以三王者禮葬、既葬、客二穿其塚旁、曾自剄從之。【一】感一飯尚能殺其身。靈輓の故事、左傳宣公二年に見ゆ。

田橫

古人感一飯。古人は一飯に感ずるも、

尚能殺其身。尚は能く其身を殺す。

今人不復見此等。今人復此等を見ず、

乃以所見疑古人。乃ち見る所を以て古人を疑ふ。

古人不可望。古人は望むべからず、

今人益可傷。今人は益々傷むべし。

【題義】東坡は秦泉の遺址を訪ひ、因りて秦の穆公の墓に至り此詩を作る。内容は詩の秦風黃鳥の篇に本づき、之を翻案して東坡一流の史論をなしたものである。黃鳥の篇は、三良（奄息・仲行・鍼虎）を哀しみ、穆公が人を以て死に従はしめたことを刺つたものである。

【詩意】秦泉は城の東南隅に在る。墓は城中に在つて、墓地は十二畝強。昔は此城もなかつた。秦の人は、泉のある處によつて、公の墓處を識る。昔、穆公の世に在る、殺の役に、孟明視等が敗れて歸ると、秦の大夫及び左右の人は、皆、秦伯に言つて曰く、是の敗や、孟明之罪なり、必ず之を殺せしむ。秦伯（穆公）曰く、是れ孤の罪なり、孤實に貪り以て夫子に禍す。夫子何の罪あらんと、復、政を爲さしむ。穆公既に生時、孟明を誅するに忍びなかつた。豈、死するの日、子車氏の三子（奄息・仲行・鍼虎）を殉せしむる理あらんや。乃ち知る、三子が公に殉死した意は、恰も齊の二子が田横の死に従つたやうなものであることを。古人は恩義を忘れない。一飯の恵にも尚は能く其の身を殺した。（晉の趙宣子が首山に田したとき、醫桑で靈輓といふ餓えた人に食を與へたことがある。後、晉侯に攻められたとき、侯の士の内に、殺を倒にして禦いでくれたものがある。之を問うと、醫桑の餓人だと答へて退いた。）今人には此等のことは見られない。乃ち其の心を以て古人を疑ふのはそもそ間違つて居る。古人は望まれない。今人はますます傷むべきである。

【餘論】此の詩の本旨を推すに、東坡は秦の穆公の遺命を罪するを欲しないから、三子が自ら恩に感じて死んだものとする。曰く、孟明を殺さなかつた穆公は三子を殉せしめるに忍びない譯である。田横の客が、其の主の死に従つた心事を察すれば、三良の死も亦必ず自發のものであらうと。秦の穆公が、嘗て羣臣と飲み、酒が酣にして、公曰く、生共此樂、死共此哀と。奄息・仲行・鍼虎は許諾した。公が薨すると、皆、従つて死んだといふことである。果して然らば、東坡の詩意は之を翻用したものである。

和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書

子由が子瞻の將に終南太平宮の谿堂に如きて書を読まんとするを聞くに和す

役名則已勤、殉身則已媮。名に役せらるれば則ち已に勤め、身に殉すれば則ち已に

我誠愚且拙、身名兩無謀。我は誠にして愚にして且つ拙、身名兩ながら謀るなし。

始者學書判、近亦知問囚。始は書判を學び、近亦問囚を知る。

但知今當爲、敢問向所由。但今當に爲すべきを知り、敢て向の由る所を問ふ。

士方其未得、惟以不得憂。士其の未だ得ざるに方りては、惟得ざるを以て憂ふ。

既得又憂失、此心浩難收。既に得又失ふを憂ふ、此心は浩として收め難し。

譬如倦行客、中路逢清流。譬へば倦める行客の如し、中路清流に逢へば、

塵埃雖未脫、暫憩得一漱。塵埃未だ脱せずと雖も、暫く憩ひて一漱を得。

我欲走南澗、春禽始喫吻。我南澗に走らんと欲す、春禽始めて喫吻。

鞅掌久不決、爾來已徂秋。鞅掌久しく決せず、爾來已に秋に徂く。

橋山日月迫、府縣差抽。橋山日月迫り、府縣差抽を煩はす。

王事誰敢愬、民勞吏宜羞。王事誰か敢て愬へん、民の勞するは吏宜しく羞づべし。

中間早曠に懼り、雨を喚ぶ鳩を學ばんと欲す。

千夫一木を挽き、十歩に八九たび休む。

渭水は濁れて泥なく、菑堰旋挿修。

之に對して食飽かざれば、餘事更に求むるに遑あらんや。

近日秋雨足り、公餘新鷲を試む。

秋風追つて帽を吹く、西阜縱游すべし。

聊か一日の樂みを爲し、此の百年の愁へを慰む。

【字解】【一】谿堂讀書 太平宮の道藏の書を讀むをいふ。道藏とは、道家諸書の彙刻をいふ。【二】媮 苟且。偷に通ず。【三】

書判 唐の世、人を取らに、身言書判の四事を以てす。唐書の選舉志に、凡擇人之法有四、一曰身、言體貌聲像、二曰言、言

之、既得之、患之失之。【四】鞅掌 詩の小雅北山篇に、王事鞅掌。魯康の與、山巨源書に、心不耐煩、而官事鞅掌。【五】橋

山 史記に黃帝崩、葬橋山。今の寧州眞寧縣に在る。【六】日月迫 一本に迫を追に作る。【七】喫吻 續博物志に、暮鳩鳴即

小南。【八】春禽 前漢書の溝洫志に、武帝歌曰く、積林竹兮鑿石萬と。蓋は水決の口を塞ぐ處に竹を樹て、其の中に草と木

とを填めたもの。石雷は石を立て、土を填塞する。【九】初鷲 鷲は酒尊、酒を漉す具。【一〇】鞅掌 骨折りてつかる、詩、小

雅に寔寔父母、生我劬勞。【一一】西阜 岷をいふ、岷、河渠書に、舉、鋪如雲、決、渠爲雨。

古今體詩 和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書

二六五

【題義】此詩は、仁宗嘉祐八年（皇紀一七三三年、西曆一〇六三年）の九月、東坡が終南太平宮の錦堂に赴き、道家の諸書を讀まうとした時、子由が詩を寄せられたから、之に和したのである。秋風追吹、帽の句がある所からいふと、九月の初に作つたものであらう。太平宮は、上清太平宮のこと、太宗の時に出来たものである。上清といふは、道家三清の一である。上清の天は、絶覆の外に在つて、八皇老君が九天の仙を運して上清の宮に處ると、かやうに道家では説いて居る。

【詩意】名に使はれると、骨が折れるし、身に殉へば苟安に流れる。我は愚であり拙であつて、身も名も兩つながら謀らない。始は楷法と文理とを學び、（唐の制に、書判拔萃科あり）近頃は亦、問囚（訊罪を問といふ）を知る。今當に爲すべきを知り、敢て先例の由る所の道を問ふ。（以上四句は、陳公弼在內簽判一語斷不是、宋子才任內簽判一語熟讀、との評があるから、故に東坡に此の言がある。按するに、宋に簽書判官廳公事あり、是を幕職となし、簽判と簡稱す。其の衙署之を簽廳といふ。簽廳は文書を掌る官である。）凡そ士は、其の未だ地位を得ない時分は、ただ之を得ないことを憂へ、既に得ると、また之を失ふを憂へる。（陳公弼は實に舉劾の事があつたから、憂得憂失は、泛言ではない。）我が心は水の浩然たるが如くで收め難い。譬へば倦める旅人が途中で清流に逢ふやうなものである。塵埃は脱れないが、暫く憩ひて一たび激ぐことを得るのである。（此に至つて、直に得失を憂ふことを以て戲事となす）我は南澗（谷川）に行かうとする。それは春禽が始めて相和して鳴いた時であつた。併し王事忙しくて久しく決するなく、爾來已に秋となつた。橋山の事も日月迫り、（黃帝は崩じこ

橋山に葬る。嘉祐八年三月に、仁宗は上仙され、十月に永昭陵に葬る。）秋に方り、府縣は山陵の事で忙はしく、差袖を煩はす。（宋の官制によると、凡授正官者、皆屬虛名、實不任事、其内外政務、皆別立名稱、以他官主之、謂之差遣。）王事であれば、誰か敢て其の苦を懸へん。併し民をして徒に勞せしめるは、更たるもの宜しく差すべきである。既にして早曠となつたので雨乞をしようとした。（山陵に執掌する時、又、雨を禱るを以て礮溪に至る）千夫で一木を挽き、十歩に八九たび休む。其の勞苦思ふべし。其の木は洪水の口を塞ぐが爲めである。涸水は潤れて泥がなく、堰に挿し入れる木石も、やや長いのを要する。之に對すると食することも十分に出来ない。（木を挽くは、東坡の專職であるから、之に對して食飽かないのである。）此の外の事は、更に求むるに遑がない。近日、秋雨も十分あつて、公事の餘暇に、新酒を醸さうと思ふ。骨折も一段落つき、朽鈍の我は春鍾の事に任へない。秋風が帽を吹き、西阜は縦遊するによい。聊か一日の樂をなして、此の百年の愁を慰めよう。

將往終南和子由見寄

將に終南に往かんとし、子由の寄せらるるに和す

人生百年寄鬢髮

人生百年鬢髮に寄す、

富貴何啻葭中葦

富貴は何ぞ葭に葭中の葦のみならん。

惟將翰墨留染濡

惟翰墨を將て染濡を留む、

【字解】葭中葦 葦の中にある薄い葦、葦は葦の未だ秀でないもの、葦は葦の葦の中にある白い薄皮。漢書、中山靖王傳に、今葦區葦

絶勝醉倒蛾眉扶。
 我今廢學如寒筍。
 久不吹之澀欲無。
 歲暮矣嗟幾餘。
 欲往南溪侶禽魚。
 秋風吹雨涼生膚。
 夜長耿耿添漏壺。
 窮年弄筆衫袖烏。
 古人有之我願如。
 終朝危坐學僧趺。
 閉門不出間履屨。
 下視官爵如泥淤。
 嗟我何爲久踟躕。
 歲月豈肯與汝居。

有「直學之親、鴻毛之重」。
 李義山の詩に、「潘集大筆、何將滿」。
 【一】蛾眉、美人の眉、詩の衛風碩人篇に、「總角蛾眉」。
 【二】廢學、禮記の學記に、「燕辟廢其學、燕辟は燕私の俗法をいふ」。
 【三】如、寒筍、云云、筍は筍の類、古は三十六管、後世は十九管、管の排列は參差として鳥の翼にかたどる。韓非子、内儲說上篇に、「齊宣王使二人吹竽、必三百人、南郭處士請爲、王吹竽、宣王說之、處士以數百人、宣王死、湣王立、好一一聽之、處士逃」。
 【四】歲暮矣、詩の唐風、蟋蟀篇に、「蟋蟀在堂、歲聿其莫、今我不樂、日月其除」。
 【五】耿耿、心安からざる貌、詩の衛風に「耿耿不寐」。
 【六】漏壺、水時計、漏刻ともいふ。古、時を測る器、蓋に孔があつて、筒を挿む、漏箭といふ。箭の管に四十八の

僕夫起餐秣吾駒

僕夫は起ちて餐し吾が駒に秣ふ。

小見はる。一晝夜四十刻、一時を四刻とす。【一】窮年、己の一生、荀子榮辱篇に、人欲「夫餘財蓄積之富也、然而窮年累世、不知足」。
 【二】衫袖烏、道安非が草書歌に、「十日一筆、月數凡墨、領袖如草、屏面皆黑」。
 【三】危坐、危坐は端坐に同じ、危は高い義で、正しく坐われば高くなる。跣は跣坐、足なくして坐する。南史劉穆之の傳に、「終日欲跣危坐」。
 【四】履屨、白鳥易の詩に、「尙書履屨」。
 【五】泥淤、どろ、白樂天の詩に、「人間榮與利、掃掃如泥淤、掃掃は、はらひ除く」。
 【六】踟躕、行いて進まざる貌、詩の唐風に、「搔首踟躕」。
 【七】林吾駒、韓退之が文に、「膏吾車、吟林吾馬」。

【題義】東坡、將に終南に往かんとし、子由の寄せられしに和したものは、磔露橋雨の詩、讀道藏の詩等がある。何れも前の鑑堂讀書の詩と同趣のものである。紀昀は此詩を評して意不必新、而語特道健、と言つて居る。

【詩意】人生百年、鬢鬢に寄せて居る。思へば果敢無いもので、富貴は霞の中の草にも當らない。筆墨を弄して日を消するは、醉倒して婦人に扶けられるよりも、餘程勝つて居る。我今學を廢する、南郭處士の竿の如く、實力がないから、久しく吹かないと、澀りて全く無くなつてしまふであらう。歲はここに暮れた。ああ幾日もない。南溪に往いて禽や魚を伴として樂まうよ。秋風は吹いて涼しい、夜長くして耿耿として寐られない。漏刻に添うて夜の明けるを待つ。一生涯、筆を弄して、衫も袖も烏のやうになる。これは古人にもあるが、我が願も同じである。終朝端坐して僧侶の趺坐を學び、門を閉ちて出でず、履は屨を曳く、官爵を視る泥淤の如し。ああ我はなんで久しく踟躕する。歲月は人を

待たない、豈汝と居らんや。されば、僕夫は起ちて食事し、我が馬に秣かひて出立の用意をする。

讀道藏

道藏を讀む

嗟余亦何幸、偶此琳宮居。
宮中復何有、戢戢千函書。
盛以丹錦囊、冒以青霞裾。
王喬掌關籥、蚩尤守其廬。
乘閒竊掀攪、涉獵豈暇徐。
至人悟一言、道集由中虛。
心閒反自照、皎皎如芙蕖。
千歲厭世去、此言乃籙條。
人皆忽其身、治之用土直。
何暇及天下、幽憂吾未除。

嗟余亦何の幸か、偶此の琳宮の居。
宮中復何かある、戢戢千函の書。
盛るに丹錦囊を以てし、冒すに青霞裾を以てす。
王喬關籥を掌り、蚩尤其の廬を守る。
閒に乗じて竊に掀攪、涉獵豈徐ろにするに暇あらんや。
至人は一言を悟り、道の集るは中虛に由る。
心閒なれば反つて自ら照す、皎皎として芙蕖の如し。
千歲世を厭ひて去らば、此言は乃ち籙條。
人は皆其身を忽にす、之を治むるに土直を用ふ。
何の暇あつて天下に及ばん、幽憂吾未だ除かず。

【字解】【一】道藏 前に出づ、即ち道家諸書の彙刻である。因にいふ、明に正統と萬曆との二朝がある。共に收める所に古子書が多い。故に明代に刻すと雖も實は宋に根源する。【二】琳宮 寺をいふ、唐の殷亮落の詩に、昔日牛欄明、琳宮事事清。【三】戢

戢 聚まる、精選之が並立之に贈る詩に、戢戢已多如東箱。【四】丹錦囊 漢武内傳に、帝、西王母に見ゆ。巾箱中に一卷の小書あり、盛るに錦錦の囊を以てす云云。【五】青霞裾 何遜之が光武の殿に遊んだとき、一翁の雨笠して吟するを見る。讀之執へんとすれば、墮つて雨中に入る。一狐の跳れ出づるを見、几案の上に、一帖紙に、何以蒼髭覆袂裳袖と書いてあつた。【六】王喬 王子喬は周靈王の太子晉である。好んで笙を吹き、鳳凰鳴を作し、伊洛の間に遊ぶ。後、白鶴に乗じて去る。【七】蚩尤 神の名、史記に黄帝與蚩尤戰於涿鹿之野。【八】關籥 前漢書趙充國の傳に、得乘閒之勢。陸龜蒙の詩に、憤曾掀攪火筆多。【九】涉獵 博覽して專精ならざるをいふ、涉獵書記、不細爲解。【一〇】由中虛 莊子の人間世に、惟道集虛、虛者心齋也。【一一】如芙蕖 道家の存想法、當想心如未開蓮花。【一二】千歲厭世 堯の時、郭の封人曰く、千歲厭世、去而上僊。【一三】乘閒 桓竹所をいふ、晉書に、皇帝親自爲非送之制、氣絕之後、以靈柩蓋尸、不用棺槨。【一四】土直 義草、莊子の讓王篇に、其土直以治天下。【一五】幽憂 莊子讓王篇に、堯以天下讓子州支父、姓は子、名は州、字は支父、子州支父曰、我適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也。

【題義】終南縣にある上清太平宮には、道家諸書の彙刻がある。其の道藏は、先朝の賜ふ所の書である。東坡が道家の諸書を流覽しての感想である。紀昀此詩を評して、作僧家詩、不可有僧氣、一作道家詩、不可有章句氣、此固未免於章句一と言つた。

【詩意】余は偶然にも此の琳宮に居ることの出来たのは、何たる幸ぞ。琳宮の中には何かあるかといへば、戢戢として千函の書がある。(函は文匣)何れも丹錦囊に入れ、青霞裾を覆うてある。仙人王子喬が關籥(關籥と同じ、くわんぬき、ちやう)を掌り、蚩尤が其の廬を守つて居る。(といふのは、道藏中には、蚩尤守禦の状を畫いたものが多いからである)閒に乗じて竊に之を擧げ亂して見る、見るべきものが多いから、流覽して徐ろにすることが出来ない。眞人は一言を悟る、即ち至道は中虛にあ

る。心が問であれば、心を失はないで、自らを照す、其の潔白であることは、蓮花のやうである。千歳世を厭ひて去らば、此の言は乃ち散れた竹器同様である。人は皆、其の身を忽にして、之を治めるに土直(肥料)にするあくたを用ゐる。何ぞ天下に及ぶ暇があらうぞ。子州支父の言葉借りると、我はたまたま幽憂の病がある。方に且つ之を治めるので、未だ天下を治める暇がない。

眞興寺閣禱雨

眞興寺閣に雨を禱る

太守親從千騎禱

太守親ら千騎を從へて禱る、

神翁遠借一杯清

神翁遠く借す一杯の清きを。

雲陰黯黯將嘯遍

雲陰黯黯將に嘯遍ならんとす、

雨意昏昏欲醞成

雨意昏昏醞成せんと欲す。

已覺微風吹袂冷

已に覺ゆ微風の袂を吹いて冷なるを、

不堪殘日傍山明

殘日の山に傍うて明なるに堪へず。

今年秋熟君知否

今年の秋熟君知るや否や、

應向江南飽食稷

應に江南に向つて稷を飽食すべし。

【題義】仁宗の嘉祐七年三月十九日、久しく雨ふらず、東坡は太守宋選に從つて眞興寺閣に雨を禱つ

て作つたのが此詩である。

【詩意】太守宋選が千騎を從へ、内に省みて己を責め、民の爲に福を祈る。太白山神は遠く一杯の清水を借してくれた。時に往いて酒水を取る、故にいふ。吾は雨を郊外に待つ。百姓奔つて赴くもの數千人。水は未だ至らないが、油雲蔚興、天日慘變、併し雨はまだ下らない。微風は袂を吹いて冷かに、殘日は山に傍うて明かである。今年の秋の收穫は、君知るや否や。應に江南に向つて、稷を十分に食べるであらう。

七月二十四日以久不雨。出禱磻溪。是日宿虢

縣。二十五日晚。自虢縣渡渭。宿於僧舍曾閣。閣

故曾氏所建也。夜久不寐。見壁間有前縣令趙

薦留名。有懷其人。

七月二十四日、久しく雨ふらざるを以て、出でて磻溪に禱る、是日虢縣に宿す、二十五日晚、虢縣より渭を渡り、僧舍の曾閣に宿す、閣は故曾氏の建つる所なり、夜久うして寐ねられず、壁間を見るに、前の縣令趙薦名を留むるあり、其の人を懷ふあり

龔燈明滅欲三更

龔燈明滅して三更ならんと欲す、

【字解】龔 磻溪、

古今體詩 眞興寺閣禱雨 七月二十四日以久不雨出禱磻溪

欬枕無人夢自驚。
 深谷留風終夜響。
 亂山銜月半牀明。
 故人漸遠無消息。
 古寺空來看姓名。
 欲向磻溪問姜叟。
 僕夫屢報斗杓傾。

【一】欬枕、今の
 陝西寶雞縣城。【二】磻溪、寺塔
 の燈、温庭筠の詩に、磻溪磻溪寺。
 【三】三更、夜半十二時。更は夜間
 の時刻のかはりめ、一夜を五更に分
 つ。初更は、今の午後八時、二更は
 十時、三更は十二時、四更は午前二
 時、五更は四時。【四】欬枕無人
 夢自驚、煙花錄に、陳後主の詩を載
 せていふ、午醉醒來曉、無人夢自驚
 史記の天官書に、攝提者、直斗杓

【題義】七月早が甚しいので、太白山に騰つたが、験がない。出でて磻溪に騰る。磻溪求雨の諸
 詩は、嘉祐八年の作である。

【詩意】寺塔の燈も明滅して、夜も三更ならんとする。枕を欬て人も居らなくても、夢自ら驚く。
 深谷の風は終夜聞え、亂山の月は半牀に入つて明かである。(寫景が神に入る。)故人と離れて漸く遠
 く、音信もない。古寺に來つて、空しく趙叟其人の姓名を見る。磻溪に向つて、姜叟(太公望)の古
 を問はんとする。僕夫はしばしば斗杓の傾けるのを報告する。(一體、祭儀は必ず黎明にする。又、必

す五更に於てする。故に夜が久しくて寐られない。起つて開行して始めて前縣令趙叟の題壁を見て詩
 を作つた譯である。それでも猶ほ五更には間がある。因つて屢僕夫に時を問ふ。山中には漏刻はな
 い、ただ空を仰ぎ斗杓の在る所を見て験とするのである。)

【餘論】紀昀は此詩を評して、後四句自不相貫、問姜叟二雖切、磻溪却與三麟雨無涉、東坡詩往
 往有疎於律一處、不得一概效之と言つて居る。然るに王文誥は之を駁して、曉嵐(紀昀)不讀
 全集、故有疎於律法之議、既欲評論、何以不讀全集也、と言つて居る。

二十六日五更起行至磻溪天未明

二十六日、五更起つて行き磻溪に至る、天未だ明けず

夜入磻溪如入峽。
 照山炬火落驚猿。
 山頭孤月耿猶在。
 石上寒波曉更喧。
 至人舊隱白雲合。
 神物已化遺蹤跡。

【字解】【一】五更、午前四時、
 前詩の註に出づ。【二】炬火、松明。
 史記の田單傳に、牛尾炬火。後漢書
 の任光傳に、各持炬火。【三】至
 人舊隱、太公の舊跡をいふ。【四】
 神物、急激に鳴る雷、神愈の文に、
 雷聲霹靂。【五】天、神遊之の詩
 に、舉、飄、天、李靖微なる時、

安得夢隨霹靂駕、安んぞ夢に霹靂に隨つて駕し、
馬上傾倒天瓢翻、馬上傾倒して天瓢翻へるを得む。

龍女、二子俱に出たり、天命じて雨を行らしむ、一行を傾けさんと欲すと、乃ち一小瓶子を出す。

【題義】此詩は嘉祐八年、東坡が鳳翔に在つて作つたもの。七月二十六日、五鼓、馳せて礮窟に赴き、礮雨文を宣した。(本集に礮窟礮雨の祝文が載つて居る。其の時に并せ記したものが此詩である。

【詩意】夜、礮窟に入る、峽中に入つたやうである。山を照す松明の火は、猿を驚倒せしめる。山頭の月は明かに、石上を打つ波は喧し。太公望の舊跡も白雲に鎖され、神物は已に化して、遺蹤が腕る。(腕は足の屈する意。)どうか、夢に雷霆の霹靂に駕し、馬上天瓢を傾倒して沛然たらしめたいものである。

【餘論】酉陽雜俎(唐の段成式撰)に、李鄴在二北都介休縣、百姓送解廬、夜止晉祠宇下、夜半有二人叩門云、介休王暫借霹靂車、至介休收麥、良久數人共持一物、如轆、上綴旂旛、凡八十葉、有光如電以授之、次日介休大雷雨、損麥千餘頃。

是日自礮溪將往陽平憩於麻田青峰寺之下

院翠麓亭

是日礮溪より將に陽平に往かんとし、麻田青峰寺の下院翠麓亭に憩ふ

不到峰前寺、空來渭上村、到らや峰前の寺、空しく來る渭上の村。

此亭聊可喜、修徑豈辭捫、此の亭聊か喜ぶべし、修徑豈捫するを辭せんや。

谷映朱欄秀、山含古木尊、谷は朱欄に映じて秀で、山は古木を含んで尊し。

路窮驚石斷、林缺見河奔、路窮まつて石斷に驚き、林缺けて河奔を見る。

馬困嘶青草、僧留薦晚飧、馬は困んで青草に嘶き、僧は留めて晩飧を薦む。

我來秋日午、早久石牀溫、我來る秋日の午、早久しくして石牀溫なり。

安得雲如蓋、能令雨瀉盆、安んぞ雲の蓋の如きを得て、能く雨をして盆に瀉がしめ、

共看山下稻、涼葉晚翻翻、共に看ん山下の稻の、涼葉晩に翻翻たるを。

【字解】渭平、九域志に、隴縣有渭平鎮。翠麓亭、岐山縣志に、亭在縣東南一百八十里、青峰禪寺之下。石

牀、南史、宋の武帝紀に、帝嘗有熱病、坐臥常須冷物、後有道人獻石牀、寢之、極以爲佳、乃嘆曰、木牀且毀、而況石耶、即令毀之。雲如蓋、孔穎の白雲抱幽石詩に、白雲浮遠蓋、圓飄透石飛。重思尋の跡、雲詩に、帝鄉白雲起、飛蓋上天衢。

【題義】是日といふは七月二十六日、礮窟から陽平鎮に往いて、麻田青峰寺の翠麓亭に憩ふ。蜀鑑(宋の郭允蹈撰す)に據ると、襄谷の西北に、古陽平關がある。其の地は、梁州襄城縣の西北にある。翠麓亭に憩うた時の口占である。

【詩意】峰前の寺に到ることが出来ないで、空しく渭水の上の村に來つた。此の翠麓亭は、風光喜ぶべ

古今體詩 是日自礮溪將往陽平憩於麻田青峰寺之下院翠麓亭

く、長い徑は、捫（さぐる）するに宜しい。谷は朱塗の欄干に映つて秀で、山は古木を含んで尊い。
（王文誥曰く、此尊字押得玲瓏剔透、惟久於山行者知之、若僅以「厚重」論、則失「之淺」矣。路の窮まる所に斷崖がある。森の缺けて居る所は奔河である。馬も困しく、青草を望んで嘶き、寺僧は留めて晩飯を薦める。我の來たのは、丁度、秋日の午の刻であつた。何分、早が久しかつたので、石の巖臺も溜かであつた。どうか、天を蓋ふばかりの雲を得て、能く白雨をして盆を濁ぐやうにあらしめ、共に山下の稻の涼しい葉が夕暮に翻翻たるを看たいものである。

二十七日、自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺

二十七日、陽平より斜谷に至り、南山中蟠龍寺に宿す

横槎晚渡碧澗口。
騎馬夜入南山谷。
谷中暗水響瀧瀧。
嶺上疎星明煜煜。
寺藏巖底千萬仞。
路轉山腰三百曲。

【字解】 蟠龍寺、鳳翔府志に、蟠龍寺在縣西南三十里。元和郡縣志に、郿縣亦曰斜城、城南富斜谷、因爲斜口。槎、横也。車也。物の時に、檢御製、枯葉、風雨倒、横槎。謝靈運の時に、朝霞映、碧澗。煜煜、光かがやく。瓊簡文帝の詠、朝日、斜谷、煜煜、層峰。

風生饑虎嘯空林。
月黑驚鷹竄修竹。
入門突兀見深殿。
照佛青燐有殘燭。
愧無酒食待遊人。
旋斫杉松煮溪蕨。
板閣獨眠驚旅枕。
木魚曉動隨僧粥。
起觀萬瓦鬱參差。
目亂千巖散紅綠。
門前商賈負椒苳。
山後咫尺連巴蜀。
何時歸耕江上田。
一夜心逐南飛鶴。

風生じて饑虎空林に嘯き、月黒うして驚鷹修竹に竄る。門に入つて突兀として深殿を見、佛を照して青燐殘燭あり。愧くは酒食の遊人を待するなきを、旋く杉松を斫つて溪蕨を煮む。板閣獨眠つて旅枕驚き、木魚曉に動いて僧粥に隨ふ。起つて觀れば萬瓦鬱として參差、目亂れて千巖紅綠を散す。門前の商賈椒苳を負ひ、山後は咫尺にして巴蜀に連る。何れの時か歸耕せん江上の田に、一夜心は逐ふ南飛の鶴。

古今體詩 二十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺

【突兀】 高くぬきんで立つ、杜子美の時に、夜深殿突兀、風動金瑣。【青燐】 東坡の文に、燈火青燐。【板閣】 太平寰宇記に、斜谷有板閣二千九百八十九間、板閣二千九百九十二間。【木魚】 朱熹の時に、粥飯何時共木魚。【萬瓦】 虞世南の時に、萬瓦齊光耀。【參差】 長短の齊しからざる貌、劉孝綽の時に、城寺參差。【椒苳】 椒は山椒、苳は晚く取つた茶。

【題義】七月二十七日、陽平鎮より斜口に入り、南山蟠龍寺に宿した時の作である。斜口は、長安志に、襄斜谷長一百七十里、南口曰襄、北口曰斜、とある。

【詩意】襜褕を横へて、晩に碧澗口を渡り、それから馬に騎り、南山の谷に入つたのは夜であつた。谷中は暗くて水の色も分らないが、響が瀟瀟（水の音）と聞える。嶺上の疎星もかがやいて居る。寺は千萬切の巖底に藏れて居り、路は山腰を數へきれない程も轉じて居る。風生じて虎嘯き、月が暗いので麋（鹿の屬）も驚いて修竹に竄れる。殘燭は佛を照して青燐（燈火の青く光る）寺僧はいふ、愧らくは游人を接待する酒食がない。（寺僧の致詞を述べる）それで、しばらくの間、杉松を焼いて溪菰（菰は野菜類）を煮よう。（寺僧の客に供するを彼す）斜谷の板閣に獨眠つて旅枕驚き、木魚曉に動いて粥飯に就く。（以上、日暮より寫して黎明に至る）起つて萬瓦を觀れば鬱として參差。はじめ、寺に來たときは深黒、何も見えなかつた。夜が明けて一切皆見はる。ただ早起したばかりで、目は之が爲に眩す。千巖の綠なるは是れ南山、紅なるは是れ蟠龍寺、目亂れ散する是れ曉色である。門前の商賈は、椒苻を負ふ。山の後は咫尺にして巴蜀に連る。歸つて江上の田を耕すは何れの時か、一夜、心は南に飛ぶ鶴を逐うて、懷郷の念に堪へない。

是日至下馬磧、憩於北山僧舍。有閣曰懷賢南直斜谷西臨五丈原諸葛孔明所從出師也。

是の日下馬磧に至り、北山の僧舍に憩ふ、閣あり懷賢といふ、南は斜谷に直り、西は五丈原に臨む、諸葛孔明の從りて師を出しし所なり

南望斜谷口三山如犬牙。

南斜谷口を望めば、三山犬牙の如し。

西觀五丈原鬱屈如長蛇。

西五丈原を觀れば、鬱屈長蛇の如し。

有懷諸葛公萬騎出漢巴。

諸葛公が、萬騎漢巴を出でしを懷ふあり、

吏士寂如水蕭蕭聞馬櫓。

吏士寂として水の如し、蕭蕭として馬櫓を聞く。

公才與曹丕豈止十倍加。

公の才と曹丕と、豈止十倍加はるのみならん。

顧瞻三輔間勢若風捲沙。

三輔の間を顧瞻し、勢風の沙を卷くが若し。

一朝長星墜竟使蜀婦壘。

一朝長星墜ち、竟に蜀婦をして壘せしむ。

山僧豈知此一室老煙霞。

山僧豈此を知らんや、一室煙霞に老ゆ。

往事逐雲散故山依渭斜。

往事雲を逐ひて散じ、故山渭に依つて斜なり。

客來空弔古清淚落悲笳。

客來り空しく古を弔す、清淚悲笳に落つ。

【字解】【一】是日、嘉祐八年七月二十七日。（東坡の二十七歳の時。）【二】懷賢閣、孔明を懷ふ意を寄せたりもの。【三】五丈原、諸葛孔明が兵を屯した處、元和郡縣志に、五丈原在、壽縣西南二十五里。【四】如犬牙、漢書文帝紀に、高帝王子弟、地犬牙相制。地形が犬の牙の入り交はる如きをいふ。【五】懷賢、懷軒といふに同じ、山阪などの曲りくくれる貌。【六】漢巴、漢中と巴蜀、即ち

古今體詩 是日至下馬磧憩於北山僧舍

蜀の國。【七】蕭蕭 蕭蕭ならざるをいふ、詩に蕭蕭馬鳴。東坡の詩は此意を用ふ。【八】風捲沙 李太白の詩に、颯風捲沙。【九】一朝長足 孔明の死をいふ。蜀志に建興十二年八月、亮卒於軍、時年五十四、名勝志に、五丈原西有落風村。【一〇】蜀 蜀人の喪中に給ふ聲、儀禮の士喪禮に、婦人重於室。【一一】故山依渭斜 渭水は武功縣の北を行く。【一二】悲笳 笳は胡人が塵の素を吹いて、聲をなすもの、其の聲は甚だ悲しいから悲笳といふ。杜子美の詩に、客淚隨悲笳。魏文帝與吳質書に、清風夜起、悲笳數吹。

【題義】嘉祐八年七月二十七日、東坡は斜谷から下馬嶺に至り、北山の僧舎に憩ふ。懷賢閣上、孔明の古を懐うて作つたのが此詩である。蜀志に、建興十二年、諸葛亮は大衆を悉くし、斜谷より出で、武功の五丈原に據り、魏の司馬仲達と渭南に對壘し、民を分つて屯田し、久駐の基を爲したことが見えて居る。

【詩意】此の懷賢閣から、南方の斜谷口を望むと、三山連接して、犬の牙の入り交はるがやうである。又、西の方を觀ると、これは山に據り、岡に廻り、鬱屈と曲りくねつて長蛇の蟠まれるやうである。(以上の四句は、句を隔てて對せるもの、之を扇對法といふ) 諸葛公が萬騎、蜀の國を出たことを懷ふのである。公の軍律は嚴肅であるから、吏士は寂然として水の如く、軍中はただ馬鞭(總鞭)の蕭蕭たる聲を聞くのみ。(聞馬鞭の句は、枚を街んで疾走し、號令を聞かざる景狀) 蜀志、諸葛亮の傳に、先主が病篤くなつたとき、亮を召し、君が才は曹丕に十倍す、必ず能く國家を安んじ、大事を定めんと。諸葛公が大軍を帥ゐて、三輪(京兆・扶風・馮翊)の間に打ち出た時の勢は、恰も風が沙を卷く如くであつた。然るに一朝、赤くて芒角のある星が東北より西南に流れ、亮の營に投ず、俄

にして亮は卒した。(年五十四) 遂に蜀の婦人をして麻を以て髪を約せしむ。(蜀人の喪に服するをいふ) 一體、婦人が弔するとき髪するは禮である。其の起りをいふと、昔、魯の臧紇が狐貍(山の名)に敗れたとき、國人の喪を逆へるもの、皆髪したといふことである。孔明が卒しただけで、蜀兵が皆死んだのではないが、孔明の死によつて、蜀の敗亡を致さうとするから、蜀の士卒の妻は、皆其の夫の喪に服して髪したのであらう。併し、北山僧舎の山僧等は、孔明が出處進退の卓絶なることを知らないで、ただ坐禪などして、煙霞の裏に老い果ててしまふ。(山僧豈知此は、懷賢を翻し出す。知の字は即ち懷、此の字は即ち賢。そして、次の句の一室は閣の字を點する) 昔の事は、雲煙を逐ひて散じてしまひ、何も遺つたものはないが、ただ故山(東坡は蜀人) 即ち蜀の山は渭水に依つて斜に流れて居る。(これだけは昔と變らないと言つて、孔明の故事を想ひ、并せて故郷のことを憶ふ) 客(東坡自らいふ、山僧に對せる辭) 即ち吾は今、此處に來つて、空しく古を弔するも、かかる先賢の舊跡であるから、涙を洒ぐに足る。まして此の悲笳の聲を聞いては其の悲しみはいかばかりであらうぞ。

撻雲篇

撻雲篇

余自城中還道中雲氣自山中來如羣馬奔突以手掇開籠收其中歸家雲盈籠開而放之作撻雲篇

【訓讀】余城中より道中へ還る、雲氣山中より來る、羣馬の奔突するが如し、手を以て掇り、籠を開

いて其中に收む、家に歸れば、雲龍に登つ、開いて之を放ち、攬雲笥を作る。

【字解】「攬」攬は抜き取ること、莊子の至樂篇に、寧は攬と同じ。揚子方言に、攬、取也。

物役會有時。星言從高駕。物に役せらるる會ず時あり、星みて言に高駕に従ふ。

道逢南山雲。歛吸如電過。道に南山の雲に逢ふ、歛吸電の過ぐるが如し。

竟誰使令之。袞袞從空下。竟に誰か之を使令する、袞袞として空より下る。

龍移相排擗。鳳舞或頽亞。龍移りて相排擗し、鳳舞ひて或は頽亞。

散爲東郊霧。凍作枯樹稼。散りて東郊の霧となり、凍りて枯樹の稼となる。

或飛入吾車。偏仄礙肘脰。或は飛んで吾が車に入り、偏仄として肘脰を礙ぐ。

擗取置笥中。提攜返茅舍。擗取して笥中に置き、提攜して茅舍に返る。

開絨乃放之。掣去仍變化。絨を開いて乃ち之を放ち、掣去し仍て變化す。

雲兮汝歸山。無使達官怕。雲よ汝は山に歸れ、達官をして怕れしむるなかれ。

【字解】「星言從高駕」詩鄭風に、星言夙駕、說子桑田。王僧達の時に、君子樂高駕。【道逢南山雲】禮記に、天降時雨、山川出雲。【歛吸】風雲などの吹き過ぐる貌。謝朓の高松賦に、卷風騰之歛吸。【擗擗】擗、擗をいふ、韓退之の雲の時に、崩隆相擗擗、龍風交擗擗。【後漢書】、河南張楷字公超、能作五里雲、時隨西人裴俊亦能作三里雲。【提攜】、

樹稼、木介とも、樹稼ともいふ。春秋成公十六年、雨木稼。雨ふりて木に氷りつく。【偏仄】偏側といふに同じ、相迫る意、杜

子美の時に偏仄行あり。【茅舍】茅舎、かや葺きの家、蜀志の姜丞相に、解衣在茅舎。【開絨】謝惠連の時に、幽絨待君開。

【題義】此詩は東坡が太守宋選と雨乞ひして、秋水を迎へた時の作である。東坡は百姓數千人と郊外

に待ち、因つて真興寺閣に構つて城に入る。是に至つて橋が畢り、又、城を出づ。故に自城中還道

中と言つたのである。

【詩意】物に役せられるは、何時でもよいといふ譯にはゆかない、必ず其の時がある。朝早く星を見

て、車を駕し、途中で南山の雲に逢ひ、吹き行くことの疾き、電の過ぐるがやうである。誰か之を使

令する。袞袞として空より下る。龍が移つて密擗するがやうであり、鳳が舞うて或は頽れ亞ぐやうで

もある。やがて、散つて東郊の霧となり、凍つて枯樹の稼となる。雲氣が樹木に著き、結んで氷とな

る。或は吾が車の中へ飛び入り、相迫つて肘や脰を礙げる。手に取りて笥の中に入れて、茅舎に返つ

た。絨を開いて之を放ち、掣き去ると、仍つて變化する。雲よ汝は山に歸れ、顯官をして怕れしめる

こと勿れ。(それは、唐の諺に、木若稼、達官怕、といふがあるから言つたものである。五行傳に、木

介、甲冑兵之象。)

【餘論】謝氏詩源に、更羸之妻、能作鎖雲囊、佩之陟高山有雲處、不必開囊、而自然有雲氣、

入其中、歸家啓視、皆有雲氣、白如綿自囊而出。

妒佳月

佳月を妬む

狂雲妒佳月。怒飛千里黑。

狂雲佳月を妬み、怒り飛んで千里黒し。

佳月了不嗔。曾何汚潔白。

佳月は了に嗔らず、曾ち何ぞ潔白を汚さん。

爰有謫仙人。舉酒爲三客。

爰に謫仙人あり、酒を舉げて三客となる。

今夕偶不見。沈瀾念風伯。

今夕偶に見ず、沈瀾風伯を念ふ。

毋煩風伯來。彼也易滅沒。

風伯の來るを煩はすこと毋れ、彼や滅沒し易し。

支頤少待之。寒空淨無迹。

頤を支へて少く之を待て、寒空淨うして迹なく、

粲粲黃金盤。獨照一天碧。

粲粲黃金の盤、獨照す一天碧。

玉繩慘無輝。玉露洗秋色。

玉繩慘として輝なく、玉露秋色を洗ふ。

浩瀚玻璃瑣。和光入胸臆。

浩瀚玻璃瑣、和光胸臆に入る。

使我能永延。約君爲莫逆。

我をして能く永延ならしむ、君に約して莫逆となる。

【字解】

【一】怒飛 莊子逍遙遊に、怒而飛、其翼若垂天之雲。【二】千里 鮑照の詩に、三五二八時、千里與君同。【三】三客 李太白の詩に、舉杯邀明月、對影成三人。【四】沈瀾 滯を流す貌、余時滯沈瀾。馮衍の願志賦に、浪沈瀾而雨集。【五】風伯 姓は方、名は遺影。韓非子に、黃帝合鬼神於泰山、風伯造掃雲霓七義。【六】易滅沒 列子說符篇に、若滅若沒。【七】支頤 莊子漁父篇に、漁父左手持膝、右手持頤以聽。【八】黃金盤 杜子美の詩に、月落如金盤。【九】玉繩 星の名、玉

新の北に在る。【一〇】玉繩 李太白の詩に、秋露如白玉。【一一】浩瀚 淮南子俶眞訓篇に、浩浩瀾瀾。【一二】莫逆 莊子大宗師篇に、四人相視而笑、莫逆於心、遂相與爲友。

【題義】首句を摘んで題となす、却て是れ古例である。此詩は上官に合はない所から作つたもので、其の詞が太だ過激であり、又、太だ露骨である。

【詩意】狂雲が佳月を妬み、怒りて飛べば千里暗黒となる。併し、佳月は終に嗔らない。汝は汝、我は我、汝が黒きを行つても、決して我の潔白を汚すことは出来ない。ここに謫仙人(李白を指す)があつて、月に向ひ酒杯を舉げて三人となる。今夕は偶、月を見ないので、涕を流して風伯を念ふ。(雲を掃はんが爲めである)風伯の來るを煩はすことなかれ。彼は滅沒し易い。頤を支へて暫し之を待て。寒空は淨うして迹なく、衆として黃金盤のやうである。獨、青天を照らし、あはれ、空の星も其の光を失つて池上の玉露は秋色を洗ふ。浩月は玻璃の瑣(小さき玉のさかづき)に浮び、和光は胸臆に入る。我をして永延ならしめるものは月であるから、君と約して莫逆の友とならう。

太白詞

太白詞

岐下頻年大旱。禱於太白山。輒應故作迎送神辭一篇五章。

【訓讀】岐下頻年大旱、太白山に禱れば輒ち應ず、故に迎送神辭一篇五章を作る。

【字解】太白山 驪縣に在る。

古今體詩 伊佳月 太白詞

雷闐闐山晝晦風振野

雷闐闐山晝晦く、風野を振ひ、

神將駕載雲罕從玉蚪

神將に駕せんとし、雲罕を載せ、玉蚪を従ふ。

早既甚暨往救道阻修兮

早既に甚し、暨き往いて救ふ、道阻修なり。

【字解】【一】闐闐、雷の聲、楚辭九歌に、雷填填兮雨冥冥。宋玉の九辨に、屬雷師之闐闐。【二】雲罕、雲の旗、司馬相如の上林賦に、載雲罕とある。【三】玉蚪、楚辭に、願玉蚪以乘騎。【四】阻修、へたつて遠い、白居易の詩に、雲雨多分散、關山苦阻修。

【題義】嘉祐七年九月、太白山に雨を禱つたのは、去年の九月から雨が降らないので、父老咸いふ、此山には舊湫水がある。試に禱請を加へなば、必ず響應を得むと。既に至るの日、油雲蔚興、化して大雨となつたと言ひ傳ふ。此の太白山迎送神詞は、漢の郊祀諸歌の作に倣つたものである。

【詩意】雷はごろごろと鳴つて、山は晝も晦く、風は野を振ふ。雷神は將に出かけんとして雲の旗を立て玉蚪（龍の子の角あるもの）を従へる。早が甚しいので雷神は急いで往いて救はんとするも、何分、道が阻つて且つ遠い。

旌旂翻疑有無日慘變

旌旂翻り、有無を疑ふ、日慘變、

神在塗飛赤篆訴闐闐

神塗に在り、赤篆を飛ばし、闐闐に訴ふ。

走陰符行羽檄萬靈集兮

陰符を走らし、羽檄を行ふ、萬靈集る。

【字解】【一】闐闐、天上界の最初の門、淮南子の原道訓に、排闐闐而進天門。【二】陰符、陰符經といふ兵書、戰國策に、得太公陰符之脈。【三】羽檄、鳥羽につけた題文、漢書高帝紀に、吾以羽檄徵天下兵。【四】萬靈、よろづの神、史記自序に、萬靈同不離祀。

【詩意】旌旂（はたの總稱）は翻るが、有るでもなく無いでもない。日は慘しく變はり、雷神は塗に在り、赤い篆書のやうな電光を空に飛ばして、天門に訴ふ。兵書を走らし、急に題文を行つたので、萬の神が集つた。

風爲幄雲爲蓋滿堂爛

風を幄となし、雲を蓋となし、滿堂爛たり、

神既至紛醉飽錫以雨

神既に至る、紛として醉飽、錫ふに雨を以てし、

百川溢施溝渠歌且舞兮

百川溢れ、溝渠に施す、歌ひ且つ舞ふ。

【字解】【一】滿堂、楚辭九歌に、滿堂兮美人。

【詩意】風を幄となし、雲を蓋となし、滿堂はきらきらと光る。雷神既に至る、十分酒食に飽き、錫ふに雨を以てす。百川も水溢れて溝渠に入る。かくて歌ひつ舞ひつして喜ぶ。

騎裔裔車斑斑鼓簫悲

騎裔裔、車斑斑、鼓簫悲しく、

神欲還、轟振凱、隱林谷。

神還らんと欲し、振凱を轟かし、林谷に隱たり、

執妖厲、歸獻馘、千里肅兮。

妖厲を執へ、歸りて馘を獻じ、千里肅たり。

【字解】【一】 轟、宋玉、神女の賦に、步商所、轟、殿堂。【二】 振凱、左傳僖公二十八年に、振旅復以入於晉。

【詩意】 騎は奇裔（行く貌）、車は斑斑（まだらなる貌）、鼓の音響の聲も悲しい。雷神が還らうとして勝関が轟き、林谷に隱として盛に、妖厲を執へ、歸つて馘（きりたる敵の首）を獻じて、千里も肅然として治まる。

神之來、悵何晚、山重復。

神の來る、悵として何ぞ晚き、山重復

路幽遠、神之去、飄莫追。

路幽遠、神の去る、飄として追ふなし。

德未報、民之思、永萬祀兮。

德未だ報いず、民之れ思ひ、永く萬祀す。

【字解】【一】 悵、憂恨の意、楚辭九辯に、悵恨兮而私自憐。【二】 重復、頻延年の時に、河山信重復。【三】 幽遠、莊子山木篇に、道幽遠而無入。

【詩意】 神の來る何ぞ晚き、悵めしい。山は重復して路も幽遠である。神の去るは飄として之に追付くことは出来ない。神德未だ報いず、民は之を思うて已まない。土を累ね壇を立て、永く祭祀をなして怠らない。

扶風天和寺

扶風の天和寺

遠望若可愛、朱欄碧瓦溝。

遠望愛すべきが若し、朱欄碧瓦溝。

聊爲一駐足、且慰百回頭。

聊一駐足を爲し、且つ慰む百回の頭を。

水落見山石、塵高昏市樓。

水落ちて山石を見、塵高うして市樓昏し。

臨風莫長嘯、遺響浩難收。

風に臨んで長嘯する莫れ、遺響浩として收め難し。

【字解】【一】 天和寺、扶風縣志に、天和寺在城南。東坡詩み巖壁に題す。【二】 長嘯、言詞を長くしてうそぶく、王維の詩に、獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。【三】 遺響、東坡赤壁の賦に、託遺響於悲風。

【題義】 此詩の石刻は、扶風縣南山の馬授祠中に在る。東坡自ら其後に題して、癸卯九月十六日挈家來遊云云といふ。紀昀曰く、一起真景以淡語寫出、と。

【詩意】 天和寺は高岡の上になつて、遠望愛すべきである。（扶風南山に、此詩の首句を取つて遠愛亭といふがある。）朱塗のてすりや青い瓦が城壁と映じて居る。聊か一たび足を駐めて、百たび頭を回すの勞を慰める。（此二句は、其の登陟の易からざるをいふ。）水が退いて山石が見はれ、塵が高いので、市樓も見えない。風に臨んで長く嘯くと、其の遺響は逆も收め難いであらう。

蘇東坡詩集 卷五

古今體詩 四十五首

和子由記園中草木

十首 子由が園中の草木を記するに和す 十首

煌煌帝王都赫赫走羣彥

煌煌たり帝王の都、赫赫羣彥を走らす。

嗟汝獨何爲閉門觀物變

嗟汝獨何を爲す、門を閉ちて物變を觀る。

微物豈足觀汝獨觀不倦

微物を豈觀るに足らんや、汝獨觀て倦まず。

牽牛與葵蓼採摘入詩卷

牽牛と葵蓼と、採摘して詩卷に入る。

吾聞東山傳置酒攜嬾婉

吾聞く東山の傳、酒を置きて嬾婉を攜ふ。

富貴未能忘聲色聊自遣

富貴未だ忘る能はず、聲色聊か自ら遣る。

汝今又不然時節看瓜蔓

汝今又然らず、時節瓜蔓を看る。

懷寶自足珍藝蘭那計晚

寶を懷いて自ら珍とするに足る、蘭を藝る那ぞ晚を計

吾歸於汝處慎勿嗟歲晚

吾歸り汝に於て處らん、慎みて歲晚を嗟する勿れ。らん。

【字解】(一) 煌煌 光明の貌、古樂府に煌煌京洛篇がある。(二) 赫赫 盛明の貌、詩の大雅に、赫赫明明。(三) 牽牛 本草に、牽牛生花、作紫色、結實。西陽雜俎には、之を益飯草といふ。(四) 葵藿 本草に、藿有七種。(五) 東山傳 晉の謝安は東山に棲居し、情を丘壑に放すと雖も、遊賞する毎に、必ず妓女を以て従ふ。後に太傅を贈らる、故に東山の傳といふ。(六) 蘭鏡 美人のさま、詩の楚風新臺篇に、燕婉之求、蘭鏡不鮮。(七) 瓜蔓 瓜期の義、時節の推し移つて、物の變するをいふ。蘭蘭の九州志に、五月瓜蔓水。(八) 慎實 論語の陽貨篇に、慎其實而遂其邦。(九) 明 蘭のはたけ、楚辭の註に、十二畝を囑となすと見ゆ。

【題義】此和詩十首は嘉祐八年、鳳翔府に在つて作つたもので、東坡は時に二十八歳、子由は老蘇に侍して京都南園に居つたのである。(南園は京師宜秋門内に在る)子由の原作は、園中有る所を賦した十首で、其の自註によると、時在京師、其詩、一萱草、二竹、三種蘆、四病榴、五葡萄、六叢鬱、七果麻、八牽牛、九柏、十葵、每章十二句、と。東坡、此の十詩に和したが、必しも原作の園中草木とは一致しない。紀昀いふ、首首寓慨而不露怒張、句句涉理而不入迂腐、音節意境皆逼真古人、亦無刻畫之迹也。

【詩意】煌煌たる帝王の都には、赫赫として羣彦(多くの秀れたる人)が活躍して居る。(此二句は京師に人材の盛なるをいふ)ああ汝(子由を指す)は、今何をして居るか、聞けば園中に閑居して草木を植ゑ、世間へは出ないで、草木の盛衰によつて、物の變化を觀て居らるとか、其の高尙の趣、知るべきである。草木は微物で、觀るに足らないが、高尚な志を養はんが爲には可い。牽牛や葵などの草花を採摘して姑く詩巻に入れて娛み居られるのは、まことに喜ばしい。昔、東山の傳(晉の謝安)は、情を丘壑に放にしたが、遊賞する毎に、妓女を従へる。それは未だ富貴を忘れることが出来なから、聲色(妓樂)を以て聊か心を慰めるのみである。汝(子由)はさうでない。草木を觀て、時運の推移に感じ、胸中には、富貴の念を留めない。(子由を掲げて、謝安を抑ふ)子由の才器徳香は、恰も寶玉を抱き居るが如く、自ら珍重するに足る。故に園中に多くの蘭を植ゑるのは、相當のことである。晚(蘭のはたけ)を計るには及ばない。余も其のうちには、歸つてお前の家に於て同居することにしよう。されば、十分に談笑して樂むことが出来ようから、歲晚のことなど嗟くには足るまい。(歲晚とは、歸隱することの遲きを言つたのであらう。)

荒園無數畝草木動成林。
春陽一以敷妍醜各自矜。
蒲萄雖滿架困倒不能任。
可憐病石榴花如破紅襟。
葵花雖粲粲蒂淺不勝簪。
叢蓼晚可喜輕紅隨秋深。
物生感時節此理等廢興。

荒園數畝なく、草木動もすれば林を成す。
春陽一たび以て敷き、妍醜各自自ら矜る。
蒲萄架に滿つと雖も、困倒れて任ふる能はず。
憐むべし病石榴、花は紅襟を破るが如し。
葵花粲粲と雖も、蒂淺くして簪に勝へず。
叢蓼晚に喜ぶべく、輕紅秋に隨ひて深し。
物生時節に感ず、此の理廢興に等し。

飄零不自由。盛亦非汝能。

飄零自由ならず、盛も亦汝の能にあらす。

【字解】 〔一〕 荒園 東坡の居る鳳翔府官舎の園。〔二〕 蒲菊 蒲菊とも、蒲桃とも書く、漢書西域傳に、漢使采蒲陶目宿種歸。博物志に張騫使西域、得蒲桃。〔三〕 困倒 倉に貯へたものを盡く出す、韓退之の書に、倒廩傾困。〔四〕 石榴 博物志に、張騫使西域、得罽林安石榴種、以歸、故名安石榴。〔五〕 紅糝 丁仙芝の餘杭詩に、曉暮紅糝香。〔六〕 飄零 木葉がひるがへり落ちる、轉じて身世の不幸に喩ふ。陳游の詩に、不敢欺飄零。

【詩意】 鳳翔府にある官舎の荒園は數畝もないが、草木は動もすると林をなす。春陽の好時節になると、妍しきも醜いも各自自ら矜つて居る。(妍醜は、草木の佳惡を人に見たてていふ。故に次に、各自矜と言つたのである。) 蒲菊は實つて、架に滿ちても、冬に禁へなく、屈盤して自立が出来ない。(不能任とは、自立の出来ないことをいふ、子由の蒲菊詩にいふ、蒲桃不禁冬、屈盤似無氣、春來乘盛陽、覆架青綾被、と) 衰へた石榴も、かはいさうで、花は紅標を破つたやうである。(子由が病石榴の詩に、堂後病石榴、及時亦開花、身病花不齊、火候漸已差。葵の花は、榮榮として美しいが、(子由が葵の詩に、葵花開已闌、結子壓枝重、憶初始放花、岌岌旌節聳。葵は淡紅色の花を開いて、晚秋特に喜ぶべし。(子由の原作には葵詩なし。蒲菊以下の八句は、園中ものを撮みあぐ。) 萬物の生、即ち草木の榮衰は、人間の事と同じで、皆、造物者の然らしめるものである。して見れば、榮枯盛衰は、汝(草木を指す)の能くすることではない。(此詩は、蒲菊・榴・葵の三首に答へたものである。園中より入手、中間蒲菊・榴・葵、各二句、三實一虛、板に落ちない。)

種柏待其成。柏成人已老。

柏を種る其の成るを待つ、柏成りて人已に老ゆ。

不如種叢簕。春種秋可倒。

如かず叢簕を種るんには、春種秋倒すべし。

陰陽不擇物。美惡隨意造。

陰陽物を擇ばず、美惡意に隨つて造る。

柏生何苦艱。似亦費天巧。

柏の生する何ぞ苦艱なる、亦天巧を費すに似たり。

天工巧有幾。肯盡爲汝耗。

天工巧幾かある、肯て盡く汝の爲に耗す。

君看藜與藿。生意常草草。

君看よ藜と藿と、生意常に草草。

【字解】 〔一〕 柏 常綠喬木の總稱。〔二〕 叢簕 帯竹をいふ、簕は藜、史記、高祖紀に、太公無功。〔三〕 困倒 東坡が孟子賦に、細草橫附隨叢生。〔四〕 藜與藿 あかざとまめのは、前漢書の藜藿傳に、山有藜藿、藜藿爲之不采。

【詩意】 柏を種えて其の成長を待つ。柏の生長する時分には、人已に老ゆ。(子由の原作柏の詩に、南園地性惡、雙柏不得長、柏生嗟幾年、失意自悽愴) 叢簕を種えた方が餘程よい。なせといふに、春種て秋は倒すことが出来るからである。(子由の原作藜の詩に、鄰翁笑我拙、教我種叢草、經霜斫爲簕、不讓秋竹好。) 大自然は物を擇ばない。美しきも惡きも意に隨つて造る。然るに柏の生するは、まことに苦艱であつて、天巧を費すに似て居る。(韓退之が詩に、柏生兩石間、萬歲終不大。) 天工の巧みは、どれ程か分らないが、盡く汝の爲に耗してしまつた。君看よ、藜と藿との生意が常にいそがはしいことを。(此詩は柏藜の二首に答へたものである。)

萱草雖微花（三）孤秀能自拔

萱草は微花と雖も、孤秀能く自ら拔く。

亭亭亂葉中、一一芳心插

亭亭たり亂葉の中、一一芳心插む。

牽牛獨何畏、詰曲自芽蘖

牽牛獨何を畏る、詰曲芽蘖よりす。

走尋荆與榛、如有夙昔約

走りて荆と榛とを尋ね、宿昔の約あるが如し。

南齋讀書處、亂翠曉如潑

南齋書を讀む處、亂翠曉潑するが如し。

偏工貯秋雨、歲歲壞籬落

偏に工に秋雨を貯へ、歲歲籬落を壞る。

【字解】萱草、忘れ草、葶草に同じ、詩の審風に、焉得葶草、註にいふ説、忘也、食之、令人忘憂者。【三】孤秀、唯の昭明太子の啓に、儼然孤秀。【二】亭亭、高く聳え立つ、周穆王が愛惠の説に、亭亭淨植。【一】潑、そそぐ、畫斷に、以潑潑

【詩意】萱草は微花ではあるが、亂葉の中に亭亭として秀出する。一一芳心が挿んで居る。之を君子に譬へる。（子由の萱詩に、萱草朝始開、呀然黃鶴背、仰吸日出光、口中爛如綺、美女生山谷、不解歌與舞、君看野草花、可以解憂悴。）牽牛花は芽蘖（めや、ひこばえ）の時分よりして屈曲し、直に荆様にとりすがる。其のさまは昔から約束をなせるものやうである。之は小人に譬へる。（子由の牽牛の詩に、牽牛非佳花、走蔓入荒榛、開花荒榛上、不見細蔓身。）南の書齋、亂翠のあざやかなことは、曉に水をそそいだやうである。又、其の籬をいふと、巧に雨を貯へるから、歲歲垣根を毀される。（小人の家園を敗るに喩ふ。）

蘆筍初似竹、稍開葉如蒲

蘆筍初は竹に似たり、稍開けば葉は蒲の如し。

方春節抱甲、漸老根生鬚

春に方り節に甲を抱き、漸く老いて根に鬚を生ず。

不愛當夏綠、愛此及秋枯

夏に當りて綠なるを愛せず、此の秋に及びて枯るるを愛す。

黃葉倒風雨、白花搖江湖

黃葉風雨に倒れ、白花江湖に搖く。

江湖不可到、移植苦勤劬

江湖到るべからず、移植苦に勤劬す。

安得雙野鴨、飛來成畫圖

安んぞ雙野鴨、飛び來り畫圖を成すを得ん。

【字解】竹、子由の蘆の詩に、蘆生井欄上、蘆葉大如竹。【二】及秋枯、子由の蘆の詩に、萱青甲未解、枯葉已可束。【三】勤劬、勉は勤勞の意。

【詩意】蘆の生長した初は、竹筍の如きであるから、蘆筍といふ。やや開けば、葉は蒲のやうである。春に方りては、其の節に、皮があり、次第に老いては、根に鬚が生ずる。蘆は、夏天の綠葉は、愛するに足らない。ただ秋を迎へて、枯れたときの黃葉と白花とは、江湖を粧點して、尤も愛すべきである。仕官の身は、江湖へは到ることが出来ない。そこで、江湖の物、即ち蘆を勤苦して移し植ゑたのである。（子由の蘆の詩に、移來種堂下、何爾短局促、強移性不遂、灌漑水惱童僕）此上の望みといふは、二足の野鴨が、此の蘆間へ飛び來つて、畫圖の趣を成すやうにありたい。（雙野鴨は、先生兄弟が相聚る意を寄せたものであらう。）

行樂惜芳辰。秋風常苦早。

行樂芳辰を惜み、秋風常に早きを苦しむ。

誰知念離別。喜見秋瓜老。

誰か知らん離別を念ひ、喜びて秋瓜の老ゆるを見る。

秋瓜感霜霰。莖葉颯已槁。

秋瓜霜霰に感じ、莖葉颯として已に槁る。

宦遊歸無時。身若馬繫阜。

宦遊歸る時なく、身は馬の阜に繋るるが若し。

悲鳴念千里。耿耿志空抱。

悲鳴千里を念ひ、耿耿として志空しく抱く。

多憂竟何爲。使汝玄髮縞。

多く憂るも竟に何をか爲さん、汝が玄髮をして縞からしむ。

【字解】「行樂」樂みをなす、前漢書楊惲の詩に、人生行樂耳、須富貴何時。李白詩に、行樂須及時。【芳辰】春の時節、辰は時の意。謝靈運の序に、良辰、美景、賞心、樂事、四者難并。【秋瓜】詩の陶風、七月篇に七月食瓜。【繫阜】繫、連なり。阜、高き處。飛黃、駿馬。【耿耿】小なり、謝靈運の詩に、秋河耿耿。心に存する所があつて、忘れることの出来ない貌。

【詩意】人生は行樂のみ、樂をなす須く春の時節に於てすべく、秋風がいつも早く來るので困る。誰か知らん、春の離別を念ひつつも、秋となつて甜瓜の老ゆるを喜ぶを。秋瓜も霜や霰に感じ、莖も葉も颯として已に槁れる。仕宦して外に在つて、何時歸るといふあてもない。此の身は恰も馬が馬閑(馬を繋ぎ置く處)に繋れて居るやうなものである。悲鳴して千里を念ひ、耿耿として空しく志を抱いて居る。(魏武帝の樂府に、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已)心配した所で、何も役に立たない。汝の黒髮をして白からしめるばかりである。(前の二、三、四、五の四首は、皆、園中の草木に

答へたのに、此詩は忽ち瓜期の感に觸れ、宦遊歸無時云云に入り、原作を不問に置く。)

官舍有叢竹。結根問囚廳。

官舍叢竹あり、根を結ぶ問囚廳。

下爲人所徑。土密不容釘。

下は人の爲に徑せらる、土密にして釘を容れず。

殷勤戒吏卒。插棘護中庭。

殷勤吏卒を戒め、棘を挿んで中庭を護す。

遠砌忽填裂。走鞭瘦踰堦。

砌を逸りて忽ち填裂、鞭を走らし瘦せて踰堦。

我常攜枕簟。來此蔭寒青。

我常に枕簟を攜へ、此に來つて寒青に蔭す。

日暮不能去。臥聽窗風冷。

日暮れて去る能はず、臥して聽く窗風の冷なるを。

【字解】「不容釘」晉書の陶侃傳に、以所貯竹頭作釘裝船。【殷勤】殷勤と同じ、委曲の貌。【中庭】階の下の庭。【填裂】左傳僖公四年に、公祭之地、地墳。註にいふ、高起也。【踰堦】堦、竹根。【堦】階の下の、拾得、行不正也。

【詩意】鳳翔府の官舎には、叢竹がある。竹の根は、門囚廳の邊で結んで居り、其の下は人が往來して小徑が出來た。土が密であつて筒も生じない。(竹頭を以て釘を作つたといふ陶侃の故事により釘は竹萌の義に取る)懇に吏卒を戒め、棘を挿んで、中庭を護る。鞭を逸りて筒が忽ち填ち裂ける。竹根を走らし、瘦せて歩くことも正しくない。我は常に枕や簟を攜へ、此に來つて寒青(寒玉と同じ、竹の異名)に蔭する。日が暮れても去ることが出來ない。臥して窗風の冷かなるを聞く。(手近い所に

目を寄せて詠じたのである。)

芎藭生蜀道。白芷來江南。

芎藭は蜀道に生じ、白芷は江南に來る。

漂流到關輔。猶不失芳甘。

漂流して關輔に到るも、猶は芳甘を失はず。

濯濯翠莖滿。惇惇清露涵。

濯濯として翠莖滿ち、惇惇として清露涵す。

及其未花實。可以資筐籃。

其の未だ花實らざるに及んで、以て筐籃を資くべし。

秋節忽已老。苦寒非所堪。

秋節忽ち已に老い、苦寒堪ふる所にあらず。

剛根取其實。對此微物慙。

根を刷りて其實を取り、此の微物に對して慙づ。

【字解】【一】芎藭、女菀と稱する香草。四川省の産を佳とするが故に川芎ともいふ。【二】白芷、よろひ草、水に生ずる一種の香草。本草に白芷生河東川谷。【三】關輔、關中の三輔、京兆、右扶風、左馮翊。【四】濯濯、光潔なる貌、世説に、濯濯如春月柳。【五】惇惇、深くしづかなる貌。傅咸の鳩賦に、蕙濯濯之惇惇。【六】苦寒、嚴しい寒さ、杜甫の詩に、豐稔長老應苦寒。

【詩意】芎藭は蜀中に生ずる、故に川芎ともいふ。白芷は河東に生じ、江南に來る。漂流して三輔に到るも、猶は芳しい甘味を失はない。濯濯として青い莖が滿ち、惇惇として清い露が涵して居る。まだ花が實らないうちは、以て筐籃に入れることが出来る。(芎藭、名は蘼蕪、以て菜とすることが出来る。芷葉、名は蒿麻、以て浴湯とすることが出来る。これ所謂資筐籃ものである。秋の季節となつては、忽ち已に老い、嚴しい寒さに堪へられない。根を刷りて其實を取る。此の微物にして慙ぢる所がある。

自我來關輔。南山得再遊。

我關輔に來りしより、南山に再遊することを得たり。

山中亦何有。草木媚深幽。

山中亦何かある、草木深幽に媚ぶ。

菖蒲人不識。生此亂石溝。

菖蒲人識らざるも、此の亂石溝に生ず。

山高霜雪苦。苗葉不得抽。

山高うして雪霜に苦められ、苗葉抽くことを得ず。

下有千歲根。蹙縮如蟠蚪。

下に千歳の根あり、蹙縮して蟠蚪の如し。

長爲鬼神守。德薄安敢偷。

長も鬼神の爲に守らる、德薄ければ安んぞ敢て偷まん。

【字解】【一】菖蒲、葉字記に、咸平(宋、真宗の年號)中、姚成市といふもの、常に菖蒲を園圃に採る。一丈夫に遇ふ。市に謂つて曰く、此の菖蒲は、安期生の餌する所、以て老を忘るべしと、忽ち見えず。【二】有千歲根、神仙傳に、茅君丹砂二千歲乃結成、上帝常使鬼神毒蛇守焉。【三】鬼神守、物類相感志に、趙隱之が母傅氏、曾て山園中に於て、菖蒲の花、大さ車輪の如く、傍に神人の守護するあるを見る云云とある。【四】德薄安敢偷、抱朴子の仙藥篇に、凡庸道士、心不專精、行誼薄薄、亦終不能得也。

【詩意】我は關中の三輔(長安城中をいふ、前詩の註にあり)に來つて、南山に再遊が出來た。山中には何かがある、草木が茂つて深幽である。仙人安期生の餌とする菖蒲は、人は識らないが、此の亂石溝に生じて居る、山高くして霜や雪に苦められ、苗葉を抽くことが出来ない。下に千歳の根があり、蹙縮して蟠つた蚪のやうである。いつも鬼神の爲に守られる。德が薄ければ、善根を種えなにか

ら、誰も萬蒲を偷むこともなからう。(法華經に、薄徳之人、不種善根。)

野菊生秋澗。芳心空自知。

野菊秋澗に生じ、芳心空しく自ら知る。

無人驚歲晚。惟有暗蛩悲。

人の歳晚に驚くなく、惟暗蛩の悲しむあり。

花開澗水上。花落澗水湄。

花開く澗水の上、花落つ澗水の湄。

菊衰蛩亦蟄。與汝歲相期。

菊衰へ蛩亦蟄す、汝と歳に相期す。

楚客方多感。秋風咏江蘼。

楚客方に感多く、秋風江蘼を咏す。

落英不滿掬。何以慰朝饑。

落英掬するに満たず、何を以て朝饑を慰めむ。

【字解】(一) 芳心 芳志に同じ、呂温山櫻詩に、幽處竟誰見、芳心空自知。(二) 澗、みづぎは、詩の兼風に、在水之澗。(三) 蛩、こほろぎ、爾雅、釋蟲に、蟋蟀、註にいふ、今促織也。(四) 江蘼、香草の名、香草は江中に生ず、故に江蘼といふ。本草綱目に、蘼蕪、一名江蘼。

【詩意】野菊は澗に生じて、誰にも知られない。其の芳心は、空しく自ら知るのみである。世と遠かつた隠者であるから、別に歳晚にも驚かないが、ただ暗蛩(蛩は蟋蟀)の悲しむあるのみ。花は澗水の上を開き、花は澗水の湄に落ちる。菊衰へ蛩亦蟄する。(蛩は隠れる)汝と毎年相會ふことを約束する。楚の詩人は感慨が多いので、秋風が吹いて、江蘼(楚辭、離騷に、扈江離與辟芷兮)を詠する。

又、楚辭に、夕餐秋菊之落英」とあるが、落英は掬するに満たないから、何を以て朝饑を慰めることが出来ようぞ。

紀夢

夢を紀す

我歸自南山。山翠猶在目。

我南山より歸れば、山翠猶ほ目に在り。

心隨白雲去。夢繞山之麓。

心は白雲に隨つて去り、夢は繞る山の麓。

汝從何方來。笑齒粲如玉。

汝何れの方より來る、笑齒粲として玉の如し。

探懷出新詩。秀語奪山綠。

懷を探つて新詩を出す、秀語山綠を奪ふ。

覺來已茫昧。但記說秋菊。

覺め來つて已に茫昧、但記す秋菊を説くを。

有如採樵人。入洞聽琴筑。

樵を探る人の、洞に入つて琴筑を聴き、

歸來寫遺聲。猶勝人間曲。

歸り來つて遺聲を寫すに、猶ほ人間の曲に勝れるが如き。

【字解】(一) 山翠、庾肩吾が詩に、山翠下添流。(二) 樂如玉、樂は白商を出して盛に笑ふ。穀梁、昭公四年に、軍人樂然皆笑。(三) 茫昧、ぼんやりとして知り難い。昧は暗、陶潛の詩に、天道幽且遠、鬼神茫昧然。

【題義】東坡の自註によるに、八月十一日夜、宿三府學、方和三此詩、夢與弟游南山、出詩數十首、夢中甚愛之、及覺但記一句云、蟋蟀悲秋、菊」とある。(時に陳公純は、東坡に命じて、府學の教授を

兼ねしむ。故に夜、府學に宿すと云つたのである。此詩は、子由十首に和するの總結である。
 【詩意】我は南山の遊から歸つたが、山翠は猶ほ目を離れない。心は白雲に随つて去り、夢は山の麓を繞つて居る。一體、汝(子由を指す)は何れの方面から來つた。汝の笑ふ齒は、粲然として玉のやうである。懐を探つて新詩を示さる。秀逸の語は山縁を奪ふ程であつたが、覺め來つて已に茫味、ただ蟋蟀悲秋菊の一句を記するのみ。それは恰も樵を探る人が山洞に入つて琴や筑(箏に似た樂器)を聞き、歸り來つて遺聲を寫すに、猶ほ人間の曲に勝るがやうなものである。

次韻子由種菜久旱不生

子由が菜を種ゑて久しく旱して生せずといふに次韻す

新春階下筍芽生。 新春階下筍芽生す、
 廚裏霜蓋倒舊器。 廚裏霜蓋舊器を倒す。
 時繞麥田求野薺。 時に麥田を繞りて野薺を求め、
 強爲僧舍煮山羹。 強ひて僧舍を爲りて山羹を煮る。
 園無雨潤何須歎。 園に雨潤なきも何ぞ歎くを須ゑん、
 身與時違合退耕。 身時と違ふ合に退耕すべし。

【字解】(一)野薺、なつな、詩、
 野風に、露謂菜薺、其甘如薺。【二】
 合退耕、史記、吳世家に、子胥退
 而耕于野。【三】年華、年光とい
 ふに同じ、皮日休の詩に、居茲老復
 老、不解歎年華。庾信が杜賦に、
 年華未暮。【四】秋色兩三莖、子
 由の詩に、家居閑暇賦、長日欲看

年華一上東莖。

欲看年華自有處。

年華を看んと欲す自ら處あり、

鬢間秋色兩三莖。

鬢間の秋色、兩三莖。

【題義】子由が種菜時に、久種春蔬旱不生。園中汲水亂瓶甕とあるが、園中は南園である。此詩は、英宗の治平元年(皇紀一七二四年、西暦一〇六四年)正月の作で、東坡が二十九歳の時である。

【詩意】新春は、生意が盛で、階下に筍の芽が生じ、廚の裏の鹽づけの菜も、舊い瓶を倒して新しくなる。折折、麥畑を繞つて野薺を求め、僧舍を造つて羹を煮る。園に雨が降らなくても、心配するには及ばない。朝夕の食事に不自由はない。それで時と合はなければ、退いて耕すがい。子由の詩に、強有入功趣節令、恨無甘雨因耘耕とあるから、之に答へたのである。年光の過ぎ行くを知らうと欲せば、鬢間に秋色兩三莖のあるを看られよ。

大老寺竹間閣子

大老寺竹間閣子

殘花帶葉暗新筍出林香。 殘花葉を帯びて暗く、新筍林を出でて香し。
 但見竹陰綠不知汙水黃。 但見る竹陰綠に、知らず汙水の黄なるを。
 樹高傾隴鳥池浚落河魴。 樹高うして隴鳥を傾け、池浚うして河魴を落す。

古今體詩 次韻子由種菜久旱不生 大老寺竹間閣子

栽種良辛苦，孤僧瘦欲死。種を栽う良に辛苦、孤僧瘦せて死せんと欲す。

【字解】(一) 大老寺 鳳翔志に、竹園在城東北五里。(二) 泚水 水經註に、泚水、出陝西醜縣西北奔山南麓、東南流合北河、即古龍魚川。(三) 樹高云云 詩、小雅、小弁に、莫高匪山、莫浚匪泉。(四) 河魴 詩の陳風、衡門に、豈其食魚、必河之魴。(五) 忘 無價をいふ、禮記の註に、瘠病之人也。

【題義】唐の僖宗の光啓中、李茂貞が建てた竹園は、後に大老寺となつた。此詩も前詩と同じく英宗の治平元年三月、大老寺に題したのである。紀昀いふ、太不成語、恐非真本、編詩者、搜輯以炫博、轉爲古人之累也。然るに王文誥は考其詩境、信出三公手、氣息皆是、と言つて居る。

【詩意】殘花は葉を帯びて暗く、菊は新しく出来た。竹の陰が縁となつて、泚水の黄なるが分らない。(泚水は縣の西二十里に在り、汧陽縣の西から、又、南流して寶雞に入る。)樹が高いので、隴の鳥を傾け、池が深いので、河の魴(折敷魚)を落す。種を栽えるのは、まことに骨が折れる。孤僧は瘦せて儂々とならうとする。

周公廟、廟在岐山西北七八里、廟後百許步、泉依山、湧冽異常、國史所謂潤德泉、世亂則竭者也。

周公廟、廟は岐山の西北七八里に在り、廟後百許步、泉あり、山に依る、湧冽異常、國史に所謂潤德泉、世亂るれば竭くるものなり。

吾今那復夢周公。

吾今那ぞ復周公を夢みん、

尙喜秋來過故宮。

尙ほ喜ぶ秋來故宮を過ぐるを。

翠鳳舊依山碑兀。

翠鳳は舊依る山の碑兀に、

清泉長與世窮通。

清泉は長く世と窮通す。

至今游客傷離黍。

今に至るまで游客離黍を傷み、

故國諸生咏雨濛。

故國の諸生は雨濛を咏す。

牛酒不來烏鳥散。

牛酒來らず烏鳥散じ、

白楊無數暮號風。

白楊無數暮に風に號ぶ。

の詩に、我來自東、零雨其濛。(一) 號風 文選、古詩に、白楊多悲風、蕭蕭愁殺人。

【題義】華山より以西の名山は七つ。其の四を岐山といふ。即ち今の岐山縣に在る。東坡の此の岐山に游んだのは、治平元年の七月で、周公廟に潤德泉を觀て、此の詩を作つたのである。

【詩意】昔、孔夫子は夢に周公を見つたが、吾は何ぞ復、周公を夢みようぞ。併し、周公の故宮を過ぎて之を拜するを喜ぶ。翠鳳は、相殘らず山の碑兀に依り、清泉は長く世と窮通す。(時平なれ

【字解】(一) 周公廟 名勝志に、

鳳山之麓有周公廟云云。廟の後に泉あつて湧き出づ。相傳ふ、時平なれば則ち流れ、時亂るれば則ち竭くと。(二) 夢周公 論語述而篇に吾不復夢見周公。(三) 碑兀 石碑の礎かでない貌。蘇轍の詩に、蒼崖碑兀起成柱、亂石散列如驚壘。(四) 離黍 詩の王風黍離に、彼黍離離、彼稷之苗。離離は、穂の垂れる貌。(五) 雨濛 詩、國風、東山

ば、清泉流れ、時亂るれば、清泉枯れるをいふ。今に至るまで、游客は離離と黍稷の垂れるさまを傷む。國が滅びて、宗廟宮室の墟、空しく烟となつたのを歎く。又、故國の諸生も、零雨其濛の詩を咏する。(此詩は、周公東征三年、歸つて歸士を勞したとき、大夫が之を美めたものである。)牛酒來らず、烏鳥も散じて、白楊は無數、暮の風に號んで居る。

戲作賈梁道詩

戲に賈梁道の詩を作る

王凌謂賈充曰。汝非賈梁道之子耶。乃欲以國與人。由是觀之。梁道之忠於魏也久矣。司馬景王既執凌歸。過梁道廟。凌大呼曰。我亦大魏之忠臣也。及司馬景王病。見凌與梁道守而殺之。二人者可謂忠義之至。精貫於神明矣。然梁道之靈。獨不能已其子充之姦。至使首發成濟之事。此又理之不可曉者也。故予戲作詩云。

【訓讀】王凌賈充に謂つて曰く、汝は賈梁道の子に非ずや、乃ち國を以て人に與へんと欲すと。是に由りて之を觀れば、梁道の魏に忠なるや久し。司馬景王既に凌を執へて歸り、梁道の廟を過る、凌大に呼んで曰く、我亦大魏の忠臣なりと。司馬景王病むに及び、凌と梁道とが守りて之を殺すを見る。二人は忠義の至精神明を貫くと謂ふべし。然れども梁道の靈、獨其の子充の姦を已むること能はず、首とし

て成濟の事を發せしむるに至る。此れ又理の曉るべからざるものなり。故に予戲に詩を作るといふ。

【字解】(一) 賈梁道 賈逵字は梁道、三國體の人。初、郡吏となり、後、茂才に擢げらる。曹操、馬超を征せしとき、召し見て事を謀り、大に之を悦ぶ。文帝の時、豫州刺史となる。(二) 王凌 字は彦雲、文帝の時、揚豫州刺史となる。甚だ軍民の歡心を得。司馬懿の不臣を惡み、且つ齊王は天位に任へざるを以て廢立を謀らんと欲す。事泄る。懿、兵を將ゐて之を討す。勢窮り、藥を飲んで死す。(三) 賈充 字は公闓、文帝の時、廷尉を歴、武帝禪を受け、佐命の功あり。専ら顯赫を以て容を取る。(四) 司馬景王 司馬懿、字は子元、懿の長子。(五) 成濟 太子舍人と爲り、司馬昭に黨す。昭、政を專にす。魏主亮、衆を率ゐて昭を攻む。濟前んで魏主亮を刺し、刃、背に出づ。昭乃ち罪を濟に歸し、捕へて之を殺す。

嵇紹似康爲有子

嵇紹は康に似て子ありとなす、

【字解】(一) 嵇紹 嵇康の子、

郗超叛鑿是無孫

郗超鑿に叛く是れ孫なし。

晉、惠帝の時、侍中となる。時に成都王穎反し、官軍敗績す。侍衛、皆潰

如今更恨賈梁道

如今更に恨む賈梁道、

郗超、身を以て捍衛し、遂に害に

不殺公闓殺子元

公闓を殺さずして子元を殺す。

遇ひ、其の血、帝の衣に滴ぐ。(二) 郗超 字は嘉賓、愷の長子。父、鎮を

積むこと數千萬、超、一日に散じて、悉く親故に與ふ。超將に死なんとす、箱を門生に授けて曰く、父もし哀悼せば、此を呈すべしと。愷、果して超を思ひて疾を成す。門生箱を呈す。皆、相温と往來せる密計なり。愷、怒つて曰く、小子死すること曉しと、遂に哭せず。(三) 鑿 字は道微、錐鑿を博覽し、射ら體上に射して吟詠倦まず。位、司掣に至り、侍中を加へらる。(四) 子元 晉の世宗景皇帝は、姓は司馬、名は懿、字は子元、宣帝の長子。

【題義】紀昀いふ、此必有爲而作、非咏古也と。

【詩意】 嵇紹は父、嵇康に似て立派な人物である。都超は、祖父鑿に叛く、是れ鑿に孫がないと謂つても宜しい。今は更に恨むのは賈梁道は其の子の賈充（字は公闕）を殺さないで、司馬景王を殺したことを（梁道の靈は、其子賈充の姦を已めることが出来ないために、成済の司馬昭に黨して魏主髦を害せしめるやうになつたことをいふ。）

南溪之南竹林中新構一茆堂予以其所處最爲深遠故名之曰避世堂

南溪の南竹林中、新に一茆堂を構ふ、予其の處る所最も深遠なるを以て、故に之を名けて避世堂といふ。

猶恨溪堂淺、更穿修竹林。
高人不畏虎、避世已無心。
隱几類如病、忘言兀似瘖。
茆茨追上古、冠蓋謝當今。
曉夢猿呼覺、秋懷鳥伴吟。
暫來聊解帶、屢去欲攜衾。

湖上行人絶、階前暮雪深。
應逢綠毛叟、扣戶夜抽簪。

【字解】 〔一〕 深遠 土地が奥深い。劉克莊が詩に、江亭僻處、穴室窮遠深。〔二〕 避世堂 名勝志に、避世堂在 藍屋 蘇東南二十五里。藍屋縣は、陝西省平安府に在る。〔三〕 高人不畏虎 高人、高士と同じ。嵇賓王の詩に、高人信有勁、與虎爭須同。晉書に、郭文少うして山水を愛す。餘杭大辟山中窮谷無人の地に入る。木を樹に倚せ、苔を其の上を履うて居る。猛獸入るも患害なし。〔四〕 隱几類如病 莊子齊物論に、南郭子綦、隱几而息、仰天而嘆、嗒焉似喪其精。〔五〕 茆茨 史記に李斯曰、堯茆茨不窮。〔六〕 冠蓋 仕官の服乘をいふ、班固賦に、冠蓋如雲、七相五公。〔七〕 解帶 沈休文の詩に、解帶臨清風。〔八〕 綠毛 史、唐宣宗の大中年間、禪師あり、南岳に居る。忽ち一物綠毛厚儂の人を見るといふ。皮日休の詩に、劉根音成道、五馬四百年、髮髮被其體、號爲綠毛仙。〔九〕 抽簪 王勃の詩に、隨興欲抽簪。

【題義】 竹林中、新に茆堂を構へて、其の深遠を愛し、避世堂と名けた。此詩は仁宗の嘉祐八年十二月の作である。

【詩意】 溪堂がまだ浅いので、更に修竹林を穿つた。それは、高士は、もと虎を畏れないし、世を避けて、己に心がなからである。高人は几に凭り、顔として（衰頹の意）病めるがやうであり、言を忘れ元として（動かない貌）瘖（啞）のやうである。其の住居も、上古の茅葺であつて、仕宦の服乘などには少しも目を付けない。曉の夢は猿に破られ、秋懷は鳥と共に吟する。暫く來つて寛ぐ。湖上には行人も絶え、階前には暮雪が積る。應に綠毛仙人の戸を叩いて、夜、簪を抽くに逢ふことであらう。

重遊終南子由以詩見寄次韻

重遊終南に遊ぶ、子由詩を以て寄せらる、次韻

去年新柳報春回。

去年新柳春の回るを報す、

今日殘花覆綠苔。

今日殘花綠苔を覆ふ。

溪上有堂還獨宿。

溪上堂あり還獨宿す、

誰人無事肯重來。

誰人か無事肯て重ねて來る。

古琴彈罷風吹座。

古琴彈じ罷んで風座を吹き、

山閣醒時月照杯。

山閣醒むるとき月杯を照す。

懶不作詩君錯料。

懶くして詩を作らず君錯料す、

舊逋應許過時陪。

舊逋應に許すべし時を過ぎて陪せん。

【題義】子由の寄せられた詩にいふ、定遊道士彈鳴鹿、誰與溪堂共酒杯、應有新詩還寄我、與君和取當游陪一と。

【詩意】去年來たときは、柳が芽を吹いて、春になつたことを知らせたが、今日は殘花が綠苔を覆うて居る。溪上に堂がある、また獨りて此堂に宿す。誰人か無事肯て重ねて來る。古い琴は彈き罷んで風が座に入り、(鳴鹿を彈す)山閣(南溪堂)で、酒が醒めるとき、月が杯を照らす。子由は應有新詩

詩還寄我といへるも、我は懶くして詩を作らない。君は全く料り錯る。舊い負債は何卒許されよ、他日陪債(陪債)致しませう。

自清平鎮遊樓觀五郡大秦延生僊遊往返四

日得十一詩寄舍弟子由同作

清平鎮より樓觀・五郡・大秦・延生・僊遊に遊び、往返四日、十一詩を得、舍弟

子由に寄せて同じく作らしむ

樓觀

樓觀

鳥噪猿呼晝閉門。

鳥噪猿呼晝門を閉づ、

寂寥誰識古皇尊。

寂寥誰か識らん古皇の尊きを。

青牛久已辭轅軛。

青牛久しく已に轅軛を辭し、

白鶴時來訪子孫。

白鶴時に來つて子孫を訪ふ。

山近朔風吹積雪。

山近くして朔風積雪を吹き、

天寒落日淡孤村。

天寒うして落日孤村淡し。

【字解】(一) 清平鎮 宋史に建

原縣清平鎮を載す。徽宗大觀元年(皇

紀一七六七年、西曆一一〇七年)升

して軍となし、復、終南縣を置く。

(二) 樓觀 本、尹喜の居、草樓が

ある。後人、道宮を創立し、名づけ

て樓觀といふ。今、終南の陰の盤屋

縣に在る。(三) 寂寥 物まびしい、

寂寞に同じ。楚辭に、聲嗷嗷以寂寥

古今體詩 重遊終南子由以詩見寄次韻 自清平鎮往返四日得十一詩・樓觀

道人應怪遊人衆

道人應に怪むべし遊人衆くして、

【註】白鶴時來云云 樓神後記

汲盡階前井水渾

階前の井水を汲み盡して渾らしめしを。

【註】丁令威、鶴に化して遼東に歸り、郡表柱に集る。言つて曰く、市

鳥有、鳥丁令威、去家千年今來歸、城郭如故人民非、何不學、仙家樂業。【二】吹、積雪。【三】井水渾、杜子美の詩に、胸未少汲、水、汲多井水渾。

【二】吹、積雪。【三】井水渾

古樂府に、朔風吹、積雪。【四】井水渾

【題義】英宗の治平元年、正月十九日、東坡、清平鎮より蓋屋に至り、二十日、商洛の令、章惇來り調し、同じく樓觀・五郡・大秦寺・延生觀に遊び、仙游潭に至る。樓觀より玉女洞に至る九首、別に二首あり、合せて十一首となる。

【詩意】關令尹喜の草樓は、鳥が噪ぎ、猿が呼ぶので、晝も門を閉ちて居る。物寂しくて、此處が道君のおはす仙居とも思はれない。昔、老子は青牛薄板車に乗つて關を過ぎたといふが、其の青牛は、久しく已に轆轤を辭したのである。轆轤はながえ、輻は車の轆の端の横木、馬の首を扼するもの。又、丁令威が化したといふ白鶴は、時時來つて、子孫を訪れる。山が近うして、北風が積雪を吹き、天寒うして落日が孤村に淡い。樓觀の道人は、遊人が多くて階前の井水を汲み盡して渾らしたことを怪しむであらう。

五郡

五郡

【字解】【一】五郡 名勝志に、

古觀正依林麓斷

古觀正に林麓の斷ゆるに依り、

靈風縣有五郡城、舊説に、兄弟五人此に並び居る。後、道觀となつたといふ。【二】香火 北齊書、陳法祖の傳に、有香火因緣。【三】符命 天が祥瑞を降して人君に與へ、天命を受けし符とする。唐、李暉の翰林志に、帝王之興、必有符命。

居民來就水泉甘

居民來つて水泉の甘きに就く。

亂溪赴渭爭趨北

亂溪渭に赴いて争うて北に趨き、

飛鳥迎山不復南

飛鳥山を迎へて復南せず。

羽客衣冠朝上象

羽客衣冠上象に朝し、

野人香火祝春蠶

野人香火春蠶を祝す。

汝師豈解言符命

汝が師豈符命を言ふを解せん、

山鬼何知託老聃

山鬼何ぞ知らん老聃に託するを。

【詩意】林麓の斷えた處に、古い道觀がある。居民は來つて水泉の甘きに就く。亂溪の水は、渭水に入り、争うて北に流れ、飛鳥は、山を迎へて、復、南しない。雁北に向ふの意。羽客は、衣冠して天帝（上象は上天をいふ）に朝し、野人は、香火（香をたく火）して春蠶を祝する。汝が師に、符命のことは解らないし、山鬼も老聃に託することを存じない。（東坡の自註に、觀有明皇碑、言夢老子告以三享、國長久之意。）

授經臺

授經臺

劍舞有神通草聖。

劍舞神あり草聖に通ず、

海上無事化琴工。

海上事なく琴工を化す。

此臺一覽秦川小。

此の臺一覽秦川小、

不待傳經意已空。

經を傳ふるを待たずして意已に空し。

【字解】(一)授經臺 名勝志に、授經臺は鳳翔城南。東坡の自註に、

乃南山一峰耳、非東坡有臺處。(二)

草聖 杜子美の詩に、張旭三杯草聖

傳。(三)一覽秦川小 杜子美の詩

に、一覽秦川小。地理志に、陸川既之

平川盡處、過此而東則秦之秦川也。

【詩意】授經臺は、鳳翔城の南に在る。尹喜が老子に見え、五千言の道德經を授かり、退いて此に居つたと傳へて居る。昔、張旭は草書を善くし、自ら言ふ、公孫氏の舞劍を見て、筆法の神を得と。海山事なく琴工を化すとは、昔、伯牙は、琴を成連先生に學んだが、三年にして成らなかつた。成連いふ、吾が師方子春は、今東海中に在つて、能く人情を移すと、乃ち伯牙と俱に往いて蓬萊山に至つて留まり宿す。曰く、吾將に師を迎へんとすと、船に棹して去つたまま、旬日返らない。伯牙延望するも人無く、ただ海水涸洞(相連なる貌)崩圻の聲、山林宵冥、羣鳥悲號を聞き、悄然として歎じて曰く、先生將に我情を移さんとすと、乃ち琴を授つて歌ひ、遂に天下の妙技となつたといふことである。此臺で一覽すると、衆山の小なるを見るから、道德經を傳へるを待たないで、意已に空しい。(劍舞を觀て、草聖の神に通じ、海山に在つて、彈琴の妙を得。相傳は文字の外に在るをいふ。)

大秦寺

大秦寺

晃蕩平川盡坡隨翠麓橫。

晃蕩として平川盡き、坡隨として翠麓横はる。

忽逢孤塔迴獨向亂山明。

忽ち逢ふ孤塔迴に、獨亂山に向つて明かなり。

信足幽尋遠臨風却立驚。

足に信せて幽尋遠く、風に臨んで却立して驚く。

原田浩如海滾滾盡東傾。

原田浩として海の如く、滾滾として盡く東に傾く。

【字解】(一)大秦寺 法苑珠林に、終南山有大秦樹竹林寺。(二)晃蕩 光の定まらない貌、蘇軾の詩に、離離含高舉、晃蕩射晴壁。(三)坡隨 平かならざる貌、司馬相如の賦に、登峻隨之長坂二分。(四)幽尋 李太白の詩に、幽尋無前期、猿與不覺遊。(五)却立驚 史記關相如傳に、卻立倚柱。(六)原田 左傳僖公二十八年に、原田每每。名勝志に、周原在岐山縣東四十里、東西橫亘、肥美寬平。(七)滾滾 杜子美の詩に、不盡長江滾滾來。

【詩意】目も遙かに平川の流が盡き、斜に傾いて翠の麓が横はつて居る。忽ち孤塔迴に、亂山に向つて明かであるのに逢ふ。足に信せて遠く尋ね入つたが、風に臨んで却立して驚く。原田(周原は岐山の南に在る)は浩として海の如く、滾滾として盡く東に傾いて居る。

僊游潭

僊游潭

翠壁下無路何年雷雨穿。

翠壁の下路なし、何れの年か雷雨穿つ。

光搖巖上寺深到影中天。

光は搖く巖上の寺、深く到る影中の天。

古今體詩 自清平僊往返四日得十一詩・授經臺・大秦寺・僊游潭

我欲燃犀看龍應抱寶眠。誰能孤石上危坐試僧禪。

我犀を燃して看んと欲す、龍應に寶を抱いて眠るべし。誰か能く孤石の上、危坐して僧禪を試みん。

【字解】【一】翠壁、江總の賦に、翠壁、以臨危。【二】燃犀、晉書温峤傳に、峤、武昌、至牛渚磯、水深不可測、世云、其下多怪物、峤燃犀角而照之、俱見、見水底燄火、奇形異狀。【三】龍應、抱寶眠、靈明傳奇に、周部有奴、善入水、名曰水精、相州八角井、夜常有光如紅、郡命水精入井、良久出曰、有一黃龍、大、抱數顆明珠、游泉。

【題義】傳游潭五首、又、潭、南寺、北寺、馬融石室、玉女洞に分つ。潭の下、絕壁萬仞に臨み、木を横へて渡となす。(東坡の自註に、潭水深不可測、上一以一木爲橋云云)東坡は橋を渡らないで、南寺に至る。復、北寺に遊び、馬融石室、玉女洞に至る。

【詩意】翠壁の下には、別に路もなかつたが、何れの年か、雷雨が穿つて、人が通れるやうになつた。巖上の寺に光が搖いて居るので、之に向つて深く到つた。昔、温峤は犀角を燃し、水を照らして種種の怪物の姿をあらはしたといふが、犀を燃して看れば、黃龍が明珠を抱いて眠つて居るを見るであらう。誰か能く孤石の上に危坐して僧禪を試みるであらう。(禪定すれば、深きに臨んでも懼れない。)

南寺

南寺

東去愁攀石西來怯渡橋。碧潭如見試白塔苦相招。

東に去つて石を攀づるを愁へ、西に來つて橋を渡るを怯る。碧潭試らるる如く、白塔苦に相招く。

野饋慚微薄村沽慰寂寥。路窮斤斧絶松桂得干霄。

野饋微薄を慚ぢ、村沽寂寥を慰む。路窮して斤斧絶え、松桂霄を干すを得。

【字解】【一】野饋、饋は食物をおくる。【二】村沽、村酒に同じ。【三】斤斧、斤斧といふに同じ、淮南子に、草木未嘗斤斧不得入山林。【四】干霄、唐書、劉道真に、干霄裏日掛樹也。

【詩意】東に去つて石に攀づるを愁へ、西に來つて橋を渡るを怯る。それで南寺に塔があり、之を望むに愛すべきも、終に到ることが出来ない。章惇と同じく傳游潭に至つたから、野饋村酒で其の寂寥を慰藉する。路が險阻であつて、斤斧が入らないから、松や桂が十分に成長して霄を干して居る。

北寺

北寺

唐初傳有此亂後不留碑。畏虎關門早無村得米遲。

唐の初傳へて此あり、亂後碑を留めず。虎を畏れて門を關つる早く、村なくして米を得ること遅し。

山泉自入甕野桂不勝炊。信美那能久應先學忍饑。

山泉自ら甕に入り、野桂炊ぐに勝へず。信に美なるも那ぞ能く久しからん、應に先づ饑を忍ぶを。

【字解】【一】得米遲、杜子美の時に、小市常爭米、孤城早閉門。【二】野桂不勝炊、戰國策に、楚國之食、貴於玉、薪貴於桂。【三】信美那能久、王粲の登樓賦に、雖信美而乖、香土二分、曾何足以少留。

古今體詩 自清平韻往返四日得十一詩 南寺・北寺

【詩意】唐の初は、北寺があつたが、亂後には其の碑まで遺らない。虎を畏れて早く里門を關ぢる。村がないので米を得ることが容易でない。山泉が自然に甕の中に入り、野桂は炊ぎきれないほど多くある。美いけれども、永く續きはしないから、先づ饑を忍ぶことを學ぶ方がよいであらう。

馬融石室

馬融の石室

未應將軍聘。初從季直游。

未だ將軍の聘に應せず、初季直に從つて遊ぶ。

絳紗生不識。蒼石尙能留。

絳紗生識らず、蒼石尙ほ能く留む。

豈害依梁冀。何須困李侯。

豈梁冀に依るを害せんや、何ぞ須ひん李侯を困しむるを。

吾詩慎勿刻。猿鶴爲君羞。

吾が詩慎みて刻すること勿れ、猿鶴君の爲に羞づ。

【字解】【一】馬融、風雅志に、馬融、扶風人、今縣東南二十里有歸德村。【二】季直、樂物の子、樂物は南山に隱る。融は之に従つて學ぶ。【三】蒼石尙能留、觀志明帝紀に、大初谷口、衣微波湧溢、映而有蒼石、立水中、白石叢之爲馬牛島、八許玉映之象、皆隆起、其文曰、大初曹云云、帝惡之使遷去、以蒼石望之、初曹而白石流焉、至晉初其文愈明云云。【四】困李侯、梁冀誅李固、馬融爲冀草草、吳祐謂融曰、李公之罪成於卿手云云。【五】猿鶴爲君羞、北山移文に、靈樞夜鶴、山人去兮鶴猿羞。

【詩意】大將軍鄧融は、馬融の名を聞いて、召して舍人としたが、馬融は其の命に應じなかつた。馬融は初、南山の樂物に従つて學び、博く經籍に通ず。嘗て高堂に坐し、絳紗を帳前に施し、前は生徒

に授け、後は女樂を列したといふことである。諸生常に手を以て數へ、次を以て相傳へ、其室に入るものが鮮かつたと傳へて居る。馬融は梁冀の爲に李固を罪する上奏を草したといふので非難されて居る。昔、魏の明帝の時、水中の蒼石、尙能く曹を討するの文を留めたから、梁冀に依るもよいであらうが、何ぞ李固を困めるのであるか。吾が詩は、慎んで刻する勿れ、猿も鶴も君の爲に羞ぢるのである。

玉女洞

玉女洞

洞裏吹簫子。終年守獨幽。

洞裏簫を吹くの子、終年獨幽を守る。

石泉爲曉鏡。山月當簾鉤。

石泉曉鏡を爲し、山月簾鉤に當つ。

歲晚杉楓盡。人歸霧雨愁。

歲晚れて杉楓盡き、人歸つて霧雨愁ふ。

送迎應鄙陋。誰繼楚臣謳。

送迎應に鄙陋なるべし、誰か繼がん楚臣の謳。

【字解】【一】爲曉鏡、潘岳の懷春賦に、俯鏡泉流。【二】山月當簾鉤、杜子美の月詩に、幽照元開鏡、風簾自上鉤。

【詩意】洞中で簫を吹く女子は、一年中、獨幽を守つて居る。曉に起きて石泉を鏡とし、山月を簾鉤(すだれかけ)に當てる。歲晚れて杉も楓も衰へ、人歸つて霧も雨も愁へる。神を送迎するの辭、まさか鄙陋なるべし。誰か楚臣の謳に繼ぐものぞ。(紀昀いふ、結二句、自負と。)

【餘論】沅湘の間では、其の俗、鬼を信じ、歌舞を作して諸神を樂ましめる。屈原が放逐されて、沅

潮に至るや、其の辭の鄙陋なるを見て、爲に九歌の曲を作つた。屈原外傳に、原棲玉笥山、作九歌、至三山鬼篇成、四山忽歌歌、若啼嘯、聲聞三十里外、草木莫不萎死。

愛玉女洞中水既致兩瓶恐後復取而爲使者

見給因破竹爲契使寺僧藏其一以爲往來之

信戲謂之調水符

玉女洞中の水を愛し、既に兩瓶を致す。後復取りて使者の爲に給むかれんことを恐れ、因りて竹を破りて契となし、寺僧をして其の一を藏めしめ、以て往來の信となし、戲れに之を調水符といふ。

欺謾久成俗關市有契繻

欺謾久しく俗を成し、關市に契繻あり。

誰知南山下取水亦置符

誰か知らん南山の下、水を取るに亦符を置かんとは。

古人辨淄澠皎若鶴與鳧

古人淄澠を辨ず、皎として鶴と鳧との若し。

吾今既謝此但視符有無

吾今既に此を謝し、但符の有無を視る。

常恐汲水人智出符之餘

常に恐る水を汲む人の、智符の餘に出でんことを。

多防竟無及棄置爲長吁

防多きも竟に及ぶことなからん、棄置して爲に長吁す。

【字解】

調水符 調は發發の聲。【】 欺謾 あざむき侮る、漢書、宣帝紀に、上計簿、具文而已、暮爲欺謾以聽其罪。【】 關市 關所と市場、孟子、公孫丑篇に、關市與而不征。【】 契繻 漢書の註に、繻、帛邊也、番關出入、皆以繻、繻邊、因製繻頭、合以爲符信、傳は驛馬。【】 辨淄澠 列子、說符篇に、孔子曰、淄澠之合、易牙嘗而知之、易牙は能く二水の味を知る。【】 鶴與鳧 莊子の群鶴篇に、鳥既難短、鱗之則寒、鶴難短、鱗之則寒。

【題義】 東坡は僊遊潭の中興寺に留題し、自註にいふ、中興寺有玉女洞、洞中有飛泉、焉甚甘と。洞中の水を愛して此詩が出来たのである。紀昀いふ、運意頗深、而措語苦淺、と。

【詩意】 欺謾することが世の習ひとなつて、關所でも市場でも契繻が必要となつた。南山の下で水を取るにも、符を置く。昔、齊の易牙は、能く淄水と澠水との味を知つた、桓公は之を信じなかつたが、之を試した所、果して驗があつた。各、特質がある。鳧の脛、短しと雖も、之を續がば、憂へなん。鶴の脛、長しと雖も、之を斷たば、悲しみなん。我、今、此をすて、ただ符の有無を視る。水を汲む人の智が符の外に出でんことを恐れる。防いでも效かない。之を棄置して長吁する。

自僊游回至黑水見居民姚氏山亭高絕可愛

復憩其上

僊游より回り、黑水に至り、居民姚氏の山亭を見る、高絶愛すべし、復、其の上に憩ふ。

山鷄曉辭谷似報遊人起。

山鷄曉に谷を辭す、遊人の起くるを報ずるに似たり。

出門猶屢顧。慘若去吾里。

門を出でて猶屢顧みる、慘として吾里を去るが若し。

道途險且迂。繼此復能幾。

道途險にして且つ迂、此に繼いで復能く幾ぞ。

溪邊有危構。歸駕聊復柅。

溪邊危構あり、歸駕聊か復柅む。

愛此山中人。縹緲如仙子。

此の山中の人を愛す、縹緲仙子の如し。

平生慕獨往。官爵同一屣。

平生獨往を慕ふ、官爵同一屣。

胡爲此溪邊。眷眷若有埃。

胡爲れど此溪の邊、眷眷埃つあるが若し。

國恩久未報。念此慙且泚。

國恩久しく未だ報いず、此を念へば慙且つ泚。

臨風浩悲叱。萬世同一軌。

風に臨み浩として悲叱、萬世同一軌。

何年謝簪紱。丹砂留迅晷。

何れの年か簪紱を謝し、丹砂迅晷を留めん。

【字解】

【黑水】 谷の名。【鳴】 鳴と同じ、廣雅に、純黑反哺者、謂之鳴。【鳥】 鳥車の下に在つて輪を止むる木、鳥に象於金瓶。【縹緲】 はるかかひろい、杜子美の詩に、紫房仙縹緲、杜牧の詩に、神仙高縹緲。【獨往】 杜子美の詩に、野人時獨往。【溪邊】 韓退之の滄吏詩に、胡爲此水邊、神色久愴愴。【未報】 國恩久未報云云。韓退之の滄吏詩に、叩頭謝吏官、始數今更進、歷官二十餘、國恩竟未報。【悲叱】 郭璞の詩に、撫心獨悲叱。【丹砂】 丹砂冠をとめるかうがひと、官印の紐、李華玉の詩に、白衣謝簪紱。

【題義】 滄游潭から回つて黑水谷に至り、居民姚氏の山亭を見、高絶愛すべきであつたから、其の上
に憩ひて詩を作り、又、文同（字は與可）と鼓下に遇うて遂に交を訂んだ。

【詩意】 山鷄の曉に鳴くのは、遊人の起きたのを報らせるに似てゐる。門を出てからも、猶屢々後
を顧みる。我が里を去ることを惨むからである。道は險しく迂回して居る。これから、復、よく幾何
ぞ。溪邊に高い構があるから、聊か車を留める。此山中の人は縹緲として仙人のやうである。平生、
獨、往くことを好む。官爵を視ること屢のやうである。それで、此の溪の邊、特に心が引かれてなら
ない。我は國恩久しく未だ報いないので、慙愧の至りである。風に臨み、心を撫でて悲叱する。何れ
の世も同じことである。何れの日にか官爵を棄てて、仙遊の樂を得たいものである。

南溪有會景亭。處衆亭之間。無所見。甚不稱其名。予欲遷之。少西。臨斷岸。南向。可以遠望。而力未暇。特爲製名曰招隱。仍爲詩以告來者。庶幾遷之。

南溪に會景亭あり、衆亭の間に處る、見る所なく、甚だ其の名に稱はず、予之を少しく西に遷さんと欲す、斷岸に臨んで南向、以て遠望すべし、而して力未だ暇あらず、特に爲に名を製して招隱といふ、仍つて詩を爲り以て來者

に告ぐ、庶幾くは之を選さん

飛簷臨古道、高榜勸遊人。

飛簷古道に臨み、高榜遊人を勸む。

未即令公隱、聊須濯路塵。

未だ即ち公をして隠れしめず、聊か路塵を濯ふを須ふ。

茆茨分聚落、煙火傍城闈。

茆茨聚落を分ち、煙火城闈に傍ふ。

林缺湖光漏、窗明野意新。

林缺けて湖光漏れ、窗明かにして野意新なり。

居民惟白帽、過客漫朱輪。

居民は惟白帽、過客漫に朱輪。

山好留歸屐、風廻落醉巾。

山好く歸屐を留め、風廻りて醉巾を落す。

他年誰改築、舊製不須因。

他年誰か改築する、舊製因るを須ひず。

再到吾雖老、猶堪作坐賓。

再び到る吾老ゆと雖も、猶ほ坐賓と作るに堪へん。

【字解】(一)相隨 隨者を相尋する意。(二)聚落 落は村里、湖目集賢に、人所聚居、故謂之村落、屯落、聚落。(三)煙火 人煙といふに同じ、飯を炊く煙、史記、休齊に、鳴鐘吹狗、煙火萬里、可謂和樂乎。(四)城闈 城の門、魏晉、崔光傳に、近在城闈、鮑照の詩に、區駕越城闈。(五)白帽 隨者の服、杜子美の詩に、曾念著白帽、采桑青雲端。(六)朱輪 漢の制、高貴の人は、馬車の輪を赤塗にする。漢、楊惲傳に、乘朱輪者十人。(七)留歸屐 南史に、謝靈運嘗に木屐を著け、山に上るときは則ち其の前歯を去り、山を下るときは、其の後歯を去る。(八)坐賓 劉向の詩に、惟甘樹餅日、余爲坐上賓。

【詩意】高い簷が古道に臨み、高い榜が遊人を勧める。全くの隠棲(かくれすむ)ではなくて、浮世の紅塵を濯ふのである。茆葺の家は、ここかしこに村里をなし、飯を炊く煙は、城門に傍うて居る。森の缺け目に湖面が見え、窓が明るく、野趣が新である。ここに住つて居る人は、白紗帽で、裙(下裳)を反して項を覆うて居る。過客は朱塗の車、山の眺めがよくて歸屐を留め、風が來つて、醉巾を吹き落す。他日、誰が此の亭を改築するであらう。必しも舊製に由るを須ひない。吾は老いたけれども、再び到るときは、坐上の賓となるであらう。

凌虛臺

凌虛臺

才高多感激、道直無往還。

才高くして感激多く、道直くして往還なし。

不如此臺上、舉酒邀青山。

如かず此臺上、酒を舉げて青山を邀へんには。

青山雖云遠、似亦識公顏。

青山は遠しといふと雖も、亦公の顔を識るに似たり。

崩騰赴幽賞、披豁露天慳。

崩騰して幽賞に赴き、披豁して天慳を露はす。

落日銜翠壁、暮雲點煙鬟。

落日翠壁を銜み、暮雲煙鬟を點す。

浩歌清興發、放意末禮刪。

浩歌清興發し、放意末禮刪る。

是時歲云暮、微雪洒袍斑。

是時歲云に暮れ、微雪袍に洒いで斑なり。

吏退跡如掃，賓來勇躡攀。
 臺前飛雁過，臺上雕弓彎。
 聯翩向空墜，一笑驚塵寰。

聯翩空に向つて墜ち、一笑塵寰を驚かす。

【字解】 〔一〕 凌虛臺。鳳翔府の後園に在る。解は官舎。〔二〕 早酒。何遜の詩に、鐘鼎擲華酒。〔三〕 幽賞。靜に風景を賞玩する。李白の春夜宴桃李園序に、幽賞未已、高談轉清。〔四〕 披簪。晉書の陸抗傳に、披簪理髮。〔五〕 天堡。朱子の詩に、洪源瀉天堡。〔六〕 落日橫紫壁。李太白の烏棲曲詩に、青山對斷牛邊日。〔七〕 煙鬟。雲の黒く美しい形容、暮退之の詩に、櫻玉紆煙鬟。〔八〕 放意。列子楊朱篇に、不返世故、放意所好。〔九〕 跡如掃。杜子美の詩に、山林遠却掃。〔一〇〕 躡攀。登りよちる。杜甫の詩に、一丘瀟湘折、雙步有躡攀。〔一一〕 聯翩。聯綿の文賦に、浮瀟聯翩、若輪鳥翻、維而靡層雲之峻。

【題義】 凌虛臺は、陳希亮が鳳翔に知となつた時に建てた臺である。英宗の治平元年十月、陳希亮が此臺に招集し、相與に南山を望み、酒を酌み、雁を射、樂を爲して詩を作る。此の詩は、其の時の作である。

【詩意】 鳳翔の守、陳公弼は清勁寡欲、才高くして、感激が多く、道直くして、人と往來が少い。故に此の凌虛臺で酒を舉げて青山を相手とする。青山は遠いが、亦、公（陳公弼をいふ）の顔を知つて居るやうである。山の崩騰する状は、幽賞に値し、天の倍める景色をもさらけ出す。夕日は翠の壁に映じ、暮雲は煙の鬟（總髻）をあらはす。清興に乗じて、浩歌が起り、思のままに寛いで末禮を廢する。歳はここに暮れる。（東坡の詩中、九月十月となると、常に歳暮と稱する）微雪は袍（綿入）に酒

いで斑となる。役人も退散して、跡掃ふがやうである。然るに珍客が訪はれて、攀ち登らる。臺の前には飛雁過ぎ、臺の上では雕弓（より飾つた弓）を彎く。雁を聯ねて、空に向つて墜ち、一笑塵寰を驚かすやうである。（韓退之の雉帶箭の詩の意を取つて、句を變じたものである。雉帶箭の詩に、衝人決起百餘尺、紅翎白鐵隨傾斜、將軍仰笑軍吏賀、五色離披馬前墜、とある。）

竹颺

竹颺

野人獻竹颺，腰腹大如盎。
 自言道旁得，采不費置網。
 鷓夷讓圓滑，混沌慙瘦爽。
 兩牙雖有餘，四足僅能髡。
 逢人自驚蹶，悶若兒脫襁。
 念此微陋質，刀几安足枉。
 就禽太倉卒，羞愧不能饜。
 南山有孤熊，擇獸行舐掌。

【字解】 〔一〕 竹颺。竹の根ぐひ鼠。食物本草に鼠食竹根。居土穴中、大如兎、人多食之、味如鴨。竹を食ふ、故に竹颺とい

【一】 鹿大。韓退之の詩に、鹿鹿大何能爲。【二】 鴟夷。酒を盛る革囊、楊華の酒箴に、鴟夷滑精似大壺。滑精は圓轉能捨無窮の狀。【三】 混池。神異經に、崑崙西有歐焉、其狀如大、長而四足以陸、名爲混池。【四】 陸龜蒙の詩に、奴懸自驚。【五】 脫。易林に脱於權權、權權は小兒を負ふ衣。【六】 就。念大倉卒。宋書武帝紀に、係頸就擒。漢書、王嘉の傳に、臨事倉卒。【七】 擇。張行所。韓退之の詩に、擇肉於羶膾、膾。免與。庾信の詩に、熊羆自食。豈。增。熊羆に、熊羆豈不能食、鼠則自食。其家。故其美在。家。

【題義】 野人が竹籬（竹根を食ふ鼠）を獻じたので、此詩を作つた。紀昀いふ、寓意而不甚露、由於措語和平と。

【詩意】 野人の送つた竹籬は、腰も腹も大きくて、益（益）のやうである。道ばたで捕へたもので、置網の力を借りたのではない。鴟夷は革囊の酒器であるが、其の鴟夷も、圓滑は竹籬に及ばない。肥えて居る混池獸も、竹籬に對しては、瘦爽を感ずるであらう。そして兩牙は餘あるも、四足は僅によく劈斷して居る。人を見ると、驚き厥く。悶すること、兒の糞（むつき）を脱するやうである。此の微陋の質に對して、刀几を加へるには足らない。掬に就いたが、倉卒の際で擲することが出来ない。此の南山に狐熊がある。獸を擇んで、熊を取り其の掌を舐る。美味言ふべからざるものがある。（紀昀いふ、有安問狐狸之慨と。）

漢陂魚
霜筠細破爲雙掩

漢陂の魚
霜筠細に破りて雙掩を爲る、

【字解】 漢陂。元和縣志に、漢陂在縣西五里、周圍十四里。陂は魚を産す、甚だ美、因て之

中有長魚如臥劍。
紫荇穿腮氣慘悽。
紅鱗照座光磨閃。
攜來雖遠鬣尙動。
烹不待熟指先染。
坐客相看爲解顏。
香梗飽送如填塹。
早歲嘗爲荆渚客。
黃魚屢食沙頭店。
濱江易採不復珍。
盈尺輒棄無乃慳。
自從西征復何有。
欲致南烹嗟久欠。
游脩瓊細空自腥。

中に長魚臥劍の如きあり。
紫荇腮を穿ちて氣慘悽、
紅鱗座を照して光磨閃。
攜へ來る遠しと雖も鬣尙は動く、
烹て熟するを待たず指先づ染む。
坐客相見て解顔を爲す、
香梗飽送塹を填むるが如し。
早歲嘗て荆渚の客となり、
黃魚屢食沙頭の店。
濱江採り易く復珍とせず、
盈尺輒ち棄つ乃ち慳するなからんや。
西征より復何かあらん、
南烹を致さんと欲して久欠を嗟く。
游脩瓊細空しく自ら腥し、

を名く。【一】 雙掩。掩は掩と同じ、曲體に、大夫不持。掩は獲取の義、今、用ひて魚具の名とする。【二】 如臥劍。孟浩然の詩に、遊魚捕劍死。西漢書に、何遜の詩を引いていふ、鰓魚如掩劍と。【三】 紅鱗。杜子美の詩に、遊越空頭、遊。梁克儉悽。【四】 紅鱗。白樂天の詩に、贈陸浩紅鱗。【五】 指先染。指を入れて味を試みる、左傳宣公四年に、子公怒、染指於鼎、嘗之而出。子公は公子宋。【六】 解顏。喜び笑ふ、列子の黃帝篇に、五年之後、夫子始一解顏而笑。【七】 香梗。香ひよき米、唐書の地理志に、蘇州吳郡、貢大小香梗、梗は稊の俗字。【八】 黃魚屢食。杜子美の詩に、頓頓食黃魚。【九】 沙頭店。荆南府に屬す。【一〇】 嗟久欠。韓退之の南食の詩に、我來無。頓。頓。自宜

亂骨縱橫動遺砭。

亂骨縱橫動もすれば砭に遺ふ。

故人遠饋何以報。

故人の遠饋何を以て報いん、

客俎久空驚忽贍。

客俎久しく空しく忽ち贍るに驚く。

東道無辭信使頻。

東道辭なく信使頻なり、

西鄰幸有庖壘醞。

西鄰幸に庖壘醞あり。

【題義】東坡の自註に、

東坡の自註に、東坡在鄂縣にありと。魚は鄂縣の令が饋つたものである。當時有司の力でなければ、生物を遠くに饋ることは出来ない。杜子美の詩にも、漢陂行といふがある。陂中の魚美なるより名を得たのである。漢陂の魚を誦する所、居然杜詩の意がある。紀昀いふ、窄韻巧押、神鋒駿利、東坡本色、と。

【詩意】竹を細に劈いて二つの筥(漁具)を爲る。中に劍を擁する如き長魚がある。紫の荇で腮(鰓)の俗字、魚のあざと)を穿つて慘悽(かなしみ痛む)の状である。赤い鱗が際立ちて光り閃めく。遠くから擲へ来れるも鼈(魚肢)が尙ほ動いて居る。之を烹て、まだ熱しないうちに味はつて見る。坐客も相見て喜び笑つた。恰も香よきうるしねを十分に送り來つて壘を填めた時のやうであつた。昔、若い時分に、荆楚に旅行したことがある。(東坡が制科に應じた時、子由と父に侍し、舟行楚に適く)

沙頭店でも、度度黃魚に舌鼓を打つた。漢江では採り易いから、珍しいともしない。尺に盈つれば、則ち棄てる、極端ではなからうか。西征より以來、復、何も無い。南方の黃魚を烹ようと欲しても、久しく不足である。鱈魚は腥しい、亂骨が縦横、ともすると、砭(石鍼)で刺される思をする。故人の遠く心からの饋は、何を以て報いよう。客の俎は久しく何も無い時に忽ちこの漢陂の魚で贍る。來客の世話する主人、辭なきも、使者は頻に至る。西鄰には幸ひ庖廚に、鹽づけもあり酢もあるから、立派な料理が出来る。漢陂の美を味はうではないか。

十二月十四日夜微雪明日早往南溪小酌至晚

十二月十四日夜微雪、明日早往南溪に往き、小酌晚に至る

南溪得雪真無價。

南溪雪を得て真に價なし、に及ぶ。

走馬來看及未消。

馬を走らして來り見て未だ消せざる

獨自披榛尋履迹。

獨自ら榛を披て履迹を尋ね、

最先犯曉過朱橋。

最も先づ曉を犯して朱橋を過ぐ。

誰憐屋破眠無處。

誰か憐まん屋破れて眠るに處なきを、

坐覺村饑語不羈。

坐に覺ゆ村饑えて語羈しからざるを。

古今遺詩 十二月十四日夜微雪明日早往南溪小酌至晚

【字解】走馬來看、韓退之の詩に、大明宮中給事騎走馬來看立不正。【披榛】一本に得に作る。【履迹】履木をひらく、實の遺棄痕が踏及奔に與ふる書に、涉潭求履、披榛覓路。【屋迹】東郭先生雪中履迹の故事を用ふ。【村饑語不羈】杜牧之の詩に、

惟有暮鴉知客意。惟暮鴉の客意を知るあつて、驚飛千片落寒條。驚飛すれば千片寒條より落つ。

【題義】此詩を甲辰十二月（英宗の治平元年）の作とするものが多いが、王文誥は、公以甲辰十二月十七八間、離岐下、必不以二十五日往南谿、小酌至晚也、況甲辰九月、公未嘗至南谿、何由十二月錄其九月所題竹上之詩乎、此乃八年所作云云と。論じて居る。八年は嘉祐八年癸卯で、東坡が二十八歳の時である。

【詩意】南溪に雪が降つて珍しいから、馬を走らして未だ消えないうちに來り看る。雜木を披いて人跡を免め、真先に曉を犯して朱塗橋を過ぎる。屋が雪に破られて眠る處もない憐れな人もあり、村が飢えて、人語も聞えない。ただ暮の鳥が客あるを知り、驚いて飛ぶと、澤山の雪片が寒い枝から亂れ散る。（杜子美の茅屋爲秋風所破歌に、牀牀屋漏無乾處、兩脚如麻未斷絕、安得廣厦千萬間、大庇天下寒士俱懷顏、風雨不動安如山、嗚呼何時眼前突兀見此屋、吾廬觸破受凍死亦足。）

九月中曾題二小詩於南溪竹上既而忘之昨日再遊見而錄之

九月中、曾て二小詩を南溪の竹上に題す、既にして之を忘る、昨日再び遊び、

見て之を録す

湖上蕭蕭疎雨過

湖上蕭蕭疎雨過

山頭靄靄暮雲橫

山頭靄靄暮雲橫

陂塘水落荷將盡

陂塘水落荷將盡

城市人歸虎欲行

城市人歸虎欲行

誰謂江湖居

誰か謂ふ江湖の居にして、

而爲虎豹宅

虎豹の宅となると。

焚山豈不能

山を焚く豈能はざらんや、

愛此千竿碧

此の千竿の碧を愛す。

【題義】前詩南溪に往いて小酌した時、去る九月に題した竹上二詩をも併せ録して歸つた。

【詩意】湖上を物寂しく疎雨が過ぎ、山頭には暮雲が靄靄として横はる。陂塘は水が退げ、荷も將に盡きんとする。城市は日暮れて人去り、虎は行かうして居る。誰かいふ人間の居が、虎や豹の宅となると、東坡は、前に終南よりして西す。縣尉、甲卒を以て相送るといへば、南溪の一路には信に虎があつたらしい。山を焚くのは、別に難しいことではないが、此の千竿の綠竹を愛するから、斷行が出來ない。（紀昀いふ、投鼠忌器之意。）

【字解】蕭蕭、ものさびしい。史記刺客傳に、風蕭蕭兮易水寒。靄靄、雲の盛なる貌、韓退之の詩に、靄靄春空雲。江湖、世間の意、陶潛の詩に、江湖多艱實。

司竹監燒葦園因召都巡檢柴貽昂左藏以其徒會獵園下

司竹監葦園を燒く、因つて都巡檢柴貽昂左藏を召し、其の徒を以て園下に會獵す

官園刈葦留枯槎、
深冬放火如紅霞、
枯槎燒盡有根在、
春雨一洗皆萌芽、
黃狐老兎最狡捷、
賣侮百獸常矜誇、
年年此厄竟不悟、
但愛蒙密爭來家、
風迴鐵卷毛尾熱、
欲出已被蒼鷹遮、

官園葦を刈りて枯槎を留む、
深冬火を放ちて紅霞の如し、
枯槎燒き盡くして根のあるあり、
春雨一洗皆萌芽す、
黃狐老兎最も狡捷、
百獸を賣り侮りて常に矜誇す、
年年此の厄竟に悟らず、
但蒙密を愛して爭ひ來り家す、
風廻り鐵卷いて毛尾熱す、
出でんと欲して已に蒼鷹に遮らる。

【字解】司竹監 元和郡縣志に、司竹園、周回百里、監監丞掌之。唐六典に、司竹監掌植葦園竹之事、副監爲之、凡官披及百官所須葦籠篋之屬、命工人擇其材幹以供之。都巡檢 宋史職官志に、諸縣巡檢司、有沿邊溪洞都巡檢。左藏 職官志に、左藏、掌受四方財賦之人、以待邦國之經費。愛蒙密 云云 蒙密は茂りてまかななること、唐僧が句に、蒙密今見。韓退之が墓誌に、獵於所家、無能所宮。蒼鷹 鷹の一種、羽毛若門を帯ぶ、獵園策に、蒼鷹擊子于上。

野人來言此最樂、
徒手曉出歸滿車、
巡邊將軍在近邑、
呼來颯颯從矛叉、
戍兵久閒可小試、
戰鼓雖凍猶堪搥、
雄心欲搏南澗虎、
陣勢頗學常山蛇、
霜乾火烈聲爆野、
飛走無路號且呀、
迎人截來看逢箭、
避犬逸去窮投置、
擊鮮走馬殊未厭、
但恐落日催棲鴉、

野人來り言ふ此れ最も樂し、
徒手曉に出で歸るとき車に滿つと、
巡邊の將軍近邑に在り、
呼び來りて颯颯矛叉を從ふ、
戍兵久しく閒なり小試すべし、
戰鼓凍ると雖も猶搥つに堪へたり、
雄心搏たんと欲す南澗の虎、
陣勢頗る學ぶ常山の蛇、
霜乾き火烈しく聲野に爆す、
飛走路なく號し且つ呀す、
逢ふ、
人を迎へ截り來つて看として箭に、
犬を避け逸し去つて窮して置に投ず、
鮮を撃ち馬を走らし殊に未だ厭かず、
但恐る落日棲鴉を催すを。

古今體詩 司竹監燒葦園因召都巡檢柴貽昂左藏以其徒會獵園下

弊旗仆鼓坐數獲
鞍挂雉兔肩分獲
主人置酒聚狂客
紛紛醉語晚更譁
燎毛燔肉不暇割
飲啖直欲追羲媧
青邱雲夢古所咤
與此何啻百倍加
苦遭諫疏說夷羿
又被詞客嘲淫奢
豈如閒官走山邑
放曠不與趨朝衙
農工已畢歲云暮
車騎雖少賓殊嘉

旗を弊し鼓を仆し坐して獲を數ふ、
鞍に雉兔を挂け肩に獲を分つ。
主人酒を置き狂客を聚め、
紛紛たる醉語晚に更に譁す。
毛を燎き肉を燔き割くに暇あらず、
飲啖直ちに羲媧を追はんと欲す。
青邱雲夢は古の咤する所、
此と何ぞ啻に百倍加はるのみならん。
苦に諫疏夷羿を説くに遭ひ、
又詞客に淫奢を嘲らる。
豈如かんや閒官山邑に走り、
放曠朝衙に趨るに與らざるに。
農工已に畢る歳云に暮れ、
車騎少しと雖も賓殊に嘉なり。

九、於其背巾、曾不帶芥。〔三〕
諫疏夷羿、左傳、襄公四年、
魏絳曰、於虞人之箴曰、在帝夷羿、
冒于原獸云云、於是晉侯好田、
故魏絳及之。又、前漢司馬相如傳
に、嘗て上に從ひて長揚に至りて獵
す。因りて箴を上りて諫む。〔四〕
詞客一本に賦客に作る。司馬相如、
揚子雲を指す。司馬相如の子虛賦
に、烏有先生曰、足下不稱楚王之
德厚、而盛推雲夢、以爲高帝、實
也。揚雄傳に、上將大誇、胡人以
多禽獸、雄從至射熊館、邊上長
揚賦、以興諫。〔五〕放曠、うち
開いて廣い。蒼苔、桓石秀の傳に、
性放曠、嘗弋釣林澤。〔六〕朝衙
朝早く朝廷に出動する。白居易の詩
に、城上擊鼓、朝衙復晚衙。〔七〕
遊獵、風の吹くこと、文選、鮑照の

酒酣上馬去不告

獵獵霜風吹帽斜

酒酣にして馬上に上り去つて告げず、

獵獵たる霜風帽を吹きて斜なり。

【題義】英宗の治平元年十一月、東坡が蕪屋縣（陝西平安府、宋の時、鄂、蕪屋一監、鳳翔に在り。）に赴いた時、たまたま司竹園の監が葦園を焼いた（蕪屋縣の南界、芒水の曲に竹林が多い）因りて都巡檢柴貽昂左藏を召して、其の徒を以て園下に會獵し、鷹を炮り、兔を燔き、豪飲して歸り詩を作る。【詩意】芒竹園は、蕪屋縣に在る。其の園の葦を焼くは、官司の年例である。葦を刈り、枯槎を焼くも、槎の葉は、春雨に逢うて萌芽する。黃狐や老兔は最も狡猾敏捷で、百獸を驅しては、自ら跨つて居る。而も年年此の厄あることを悟らない。ただ茂つて密なる處を愛して、争ひ來つて隠れ家を造る。風廻り、焰巻いて、毛も尾も熱くなり、出ようと思つても、已に蒼鷹に遮られる。野人來り言ふ、これ最も樂し、曉に出たときは徒手でも、歸るとき、獲物は車に滿つと。巡邊の將軍は近邑に在つて成兵を呼び集めると、颯颯として矛又（刺股）を從へる。戍兵は久しく閒で、武事に習はないから、少しく試みるべく、戰鼓は凍つても、猶ほ過つに堪へる。雄心が勃勃として起り南洲の虎を搏たうとする。狩場に於ける陣勢は、常山の蛇を學ぶ（常山の蛇といふは、其の首を撃てば尾應じ、其の尾を撃てば首應じ、其の中を撃てば、首尾俱に應ずるのである）霜乾き、火烈しく、聲が野に裂け破れる。飛び走るに路なく、號び且つ呀する（口を張る）人を迎へ截り來つて、若然として箭に中るもあれば、獵犬を避け、逸し去つて、進退谷まつて置に懼るもある。鮮（新しい肉）を撃ち、馬を走らして厭く

ことを知らない。ただ恐る、落日栖鴉の鳴くを催すを、旗を弊し鼓を仆して今日の獲物を數へる。鞍に雉や兔を掛け、肩には鷹を分ける。主人は酒宴を開いて狂客を聚め、紛紛たる醉語は、曉となつて、更に八釜しい。毛を焼き肉を焼き、之を割くに暇がない。飲み咳ふこと、直に伏羲氏女媧氏の古代に返らうとする。(禮記に、昔者、先王未レ有火化、食鳥獸之食、茹毛飲血。)子虛の賦にある青邱の話を、雲夢大澤の話は、古人が世に咤つた所である。其の大きいことは、之よりも百倍加はるばかりではない。而も當時は懇に諫疏を上つて曰く、帝夷羿が竊立するに及び、原野にすむ獸類をのみ冒り取らうとして、其國の大事を打ち忘れ、只管、田獵の事のみを考へたから、其の終りを好くしなかつたと。魏絳は、虞人の箴を引いて、晉侯を諫めたのである。又司馬相如や揚子雲等の詞客にも淫奢を嘲けられる。して見ると、閒官となつて山邑に走り、放曠、林澤に弋釣し、朝早く出勤するやうな面倒なことには與らない方がよい。農事工事も、已に畢つて、歳ここに暮れ、車騎は少いが、賓客は殊に嘉である。酒酣にして馬に騎つて去る。獵獵たる霜風は、帽を吹いて斜である。(北史に、獨孤信嘗因獵、日暮馳馬入城、其帽微側、詰旦吏民有戴帽者、咸慕信而側帽焉。)

和子由木山引水二首 子由が木山に水を引くに和す 二首

蜀江久不見滄浪。蜀江久しく滄浪を見ず、

江上枯槎遠可將。江上の枯槎遠く將ゆべし。

【字解】(一) 木山 木假山。老泉の木假山記に詳なり。(二) 滄浪 漢水のことであるが、ここは水色を

去國尙能三犢載。國を去りて尙ほ能く三犢に載す、

汲泉何愛一夫忙。泉を汲む何ぞ愛まむ一夫の忙はしきを。

崎嶇好事人應笑。崎嶇好事人應に笑ふべし、

冷淡爲歡意自長。冷淡爲に歡び意自から長し。

遙想納涼清夜永。遙に想ふ納涼清夜永く、

窗前微月照汪汪。窗前の微月汪汪を照らすを。

いふ。犢の詩に、犢影滄浪泉。
【一】三犢載 犢は牛子、歐陽修の妻
羨石の詩に、愛之遠從向、幽谷、曳
以三犢載、兩輪。【二】汪汪 微
漢書の黃憲傳に、叔度汪汪若千頃之
陂。

【題義】子由の木山引水詩に、引水穿牆接竹梢、谷藏峰底大容瓢、將流旋滴廬山瀑、已盡還

來海上潮、亂點落池驚睡覺、半山含潤沃心焦、瓦盆一斛何勝滿、溢去猶能浸菊苗、其の二にいふ、蒼下枯槎拂杖梢、山川迤邐費公瓢、幽泉細細流巖鼻、盆水瀾瀾漲海潮、但愛堅如湖上石、誰憐收自甕中焦、蒼崖寒溜須佳蔭、尙少冬青石蘭苗。此詩に和したのである。

【詩意】蜀江も久しく滄浪の水色を見ないから、江上の枯れた槎は遠く行くべきである。國を去るも尙ほ能く三犢に載することが出来る。泉を汲むには、一夫を勞すれば事足る。我的崎嶇(山のけはしきより轉じて人の困難の状をいふ)物好きには、人まさに笑ふことであらう。併し、世味に冷淡でも、心は自ら長閑である。遙にそなたの方を思ふに、納涼清夜の永くして、窗前の微月は汪汪(水の廣く深いことより轉じて度量の廣きに喩ふ)の心を照らすことであらう。

千年古木臥無梢。千年の古木臥して梢なく、
浪捲沙翻去似瓢。浪沙を捲いて翻して去つて瓢に似たり。
幾度過秋生蘚暈。幾度か秋を過ぎて蘚暈を生じ、
至今流潤應江潮。今に至るまで流潤江潮に應ず。
泫然疑有蛟龍吐。泫然として蛟龍吐くあるかと疑ふ、
斷處人言霹靂焦。斷つ處人は言ふ霹靂焦すと。
材大古來無適用。材大にして古來適用なし、
不須鬱鬱慕山苗。須ひず鬱鬱として山苗を慕ふを。

【字解】(一) 霹靂焦 唐柳宗元の
新羅等贊序に、蛤枯樹生石上、
者言、蛟龍伏其裏、一夕暴震火之、
焚之且乃已、其餘砮然倒臥道上、
超道人取以爲三琴。(二) 適用
晉書職官志に、或隨時適用。

【詩意】千年の古木は、臥して梢もなく、浪は沙を捲いて、翻して去つて瓢の形を成す。幾度か秋を過
ぎて、木の上に蘚の暈を生じ、今日に至るまでも、江潮に潤されて居る。(江に潮が来ると、枯木が相
潤ふ。恰も相應するがやうである。)泫然として(涙の流れる貌)蛟龍が吐いたのかと疑はれる。古木
の斷つた處は、霹靂の焦したものと人は言ふ。古來、材大なれば用を爲し難いと、(杜子美の詩に、
志士幽人莫怨嗟。古來材大難爲用。)鬱鬱として山上の苗を慕ふにも及ぶまい。(左太沖の詠史に、
鬱鬱澗底松。離離山上苗。以彼徑寸莖。蔭此百尺條。)

和子由苦寒見寄

人生不滿百、一別費三年。
三年吾有幾、棄擲理無還。
長恐別離中、摧我鬢與顏。
念昔喜著書、別來不成篇。
細思平時樂、乃爲憂所緣。
吾從天下士、莫如與子歡。
羨子久不出、讀書蟲生甑。
丈夫重出處、不退役當前。
西羌解仇隙、猛士憂塞墻。
廟謨雖不戰、虜意久欺天。
山西良家子、錦緣貂裘鮮。
千金買戰馬、百寶粧刀鏤。
何時逐汝去、與虜試周旋。

子由が苦寒に寄せらるるに和す

人生百に満たず、一別三年を費す。
三年吾幾かある、棄擲して理還るなし。
長く恐る別離の中、我が鬢と顔とを摧くを。
念ふ昔著書を喜び、別來篇を成さず。
細思平時の樂み、乃ち憂の緣の所となる。
吾天下の士を從ふるは、子と歡するに如くはなし。
羨む子久しく出でず、書を読んで蟲甑に生ず。
丈夫出處を重んず、退かずして當に前むべきを要す。
西羌仇隙を解し、猛士塞墻を憂ふ。
廟謨はすと雖も、虜意久しく天を欺く。
山西良家の子、錦緣貂裘鮮し。
千金戰馬を買ひ、百寶刀鏤を粧ふ。
何れの時か汝を逐うて去らしめ、虜と試みに周旋せん。

【字解】(一) 苦寒 杜市の詩に、鞭笞長老惡苦寒。(二) 人生不滿百 文選古詩に、生年不滿百、當懷千歲憂。(三) 從天下士 史記魯仲連の傳に、新垣衍起再拜、謝曰、始以先王爲主、今乃知先生爲天下之士也。(四) 西羌解仇隙 前漢書、趙充國傳に、元康三年、先零與諸羌種羌二百餘人解仇交、實盟盟、仇言ある毎に、往來相報いたしものを、仇を解いて實を交へるものは、自ら相親結し、漢に入りて寇をなさんとするのである。(五) 塞垣 塞垣は塞垣、墻は墻外の短き垣、漢書、申屠嘉傳に、太上皇廟垣、註にいふ、宮外垣餘地也。垣は墻と同じ。(六) 崩潰 杜子美の詩に、崩潰長策、從漢光武紀實に、明崩潰。(七) 山西良家子 前漢趙充國傳に、以六郡良家子、善騎射。又、贊にいふ、山西出將。(八) 千金買馬 云云 杜子美の詩に、千金買馬、百金買刀頭。(九) 與虜周旋 左傳、僖公二十三年に、重耳曰、左執鞭撻、右握繡、以君周旋。晉書に、令將士周旋。

【題義】此詩は殿しい寒さの時、子由が寄せられた詩に和したもので、治平元年十一月の作である。紀昀いふ、此不得志之憤詞、不必然有此想也と。

【詩意】人生は百に満たない。貴い光陰を一別三年も費した。(東坡は嘉祐六年十一月、鳳翔の任に赴き、治平元年に至る。正に三年である。三年といへば永いが、吾に幾もなかつた。塞郷したものは、悔みても還る道理はない。いつも恐れるのは、別れて居る間に、我が鬢と顔とが推け衰へることである。昔は著書を喜んだ我も、別れて後は、一篇も出来ぬ。細思して文を成すは平生の樂であつたが、今は却て憂の縁となる。天下の士を従へるは、人の欲する所であらうが、吾は子と共に歡する方がよい。子が久しく門を出でないで、朝夕書物に親しみ、敵の艦に生ずるを覺えない境遇は、まことに羨しい。丈夫は出處進退を重んずる。退かないで、當に前むべきである。西羌は今や仇隙を解いて

團結を固うした。漢に入つて寇を爲す準備ではあるまいか。言ふまでもなく、朝廷の議は、戰を欲しないが、虜の意は、いつも朝廷を欺いて、平和を破る。(夏人大舉して邊を犯す。王素に、詔して之を治めしむ。素至るに及び、夏人即日解け去る。)昔から山西は將を出すと言ひ傳へ、風俗武勇を尙び、良家の子も錦緣朝裘(てんの皮で作つた裘)のものが少い。千金で戰馬を買ひ、百金で刀頭を裝ふ。何れの時か、汝を逐うて行かしめ、虜と戰を交へたいものである。

寄題興州晁太守新開古東池

興州晁太守新に古東池を開くに寄せ題す

百畝清池傍郭斜、
居人行樂路人誇。
自言官長如靈運、
能使江山似永嘉。
縱飲座中遺白帽、
幽尋盡處見桃花。
不堪山鳥號歸去、
長遣王孫苦憶家。

【字解】(一) 興州 漢中府、興安州。(二) 晁太守 名は仲約。

【詩意】行樂 樂みをなす、描像の詩に、人生行樂耳、須當賞何時。李白の詩に、行樂須及春。(三) 似 似、永嘉 太平寰宇記に、永嘉有南亭、北亭、白幹亭、楠溪、石帆、石室、謝公池、謝公屐諸名勝、靈運嘗有詩。(四) 白帽 帽をいふ、魏初、白帽の製あり、猶ほ白接脚、白輪巾の如し。白帽は晉書、五行志に、白

接應は山簡傳に、白鶴巾は謝靈運に見ゆ。【六】見桃花、陶淵明記に、晉武陵人、捕魚爲業、後、行、逢桃花林。【七】歸去、子規啼いていふ、不如歸去。【八】王孫、楚辭に、王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋。

【題義】此詩は治平元年十二月の作である。文與可の東池晴碧亭に題する詩に、鄭谷題詩處、荒涼不復知、使君來問日、景物欲歸時とある。新に古東池を開いたので、特に詩を寄せ題したのである。【詩意】百畝の清池は、城郭に傍うて斜になつて居る。ここに住つて居る人は、ただ行樂に其の日を送り、路行く人も、觀光を誇つて居る。皆いふ官長は昔の謝靈運のやうであるから、能く江山をして永嘉郡の如からしめると。(宋書に、謝靈運爲永嘉太守、郡有三名山水、素所愛好、既不得去、遂肆意遊遊、所至輒爲詩詠以致其意。)永嘉郡には名勝が多い。酒を十分に飲んで、座中に白鶴を遣れ、幽尋して盡くる處に桃花林を見る。山鳥の不如歸去と鳴くを聞くに堪へない。遊んで歸らない王孫をして苦に家郷を思はしめる。

華陰寄子由

華陰子由に寄す

三年無日不思歸、三年日として歸るを思はざるなし、
 夢裏還家旋覺非、夢裏家に還つて旋非を覺ゆ。
 臘酒送寒催去國、臘酒寒を送りて去國を催し、
 東風吹雪滿征衣、東風雪を吹いて征衣に滿つ。

【字解】【一】華陰、元和郡縣志に、華州華陰縣、漢屬弘農郡。【二】臘酒、半多詩に、臘酒飲未盡。【三】三峰、名山記に、華岳有三峰、直上數千仞、峯巒而峻、有如削成。【四】四扇行看云云、韓退之の詩に、荆山已去華山來、日出潼關四扇開。

三峰已過天浮翠、三峰已に過ぐ天の浮翠、
 四扇行看日照扉、四扇行くゆく看る日照の扉。
 里塚消磨不禁盡、里塚消磨盡くるを禁せず、
 速攜家餉勞驂駢、速かに家餉を攜へて驂駢を勞す。

【一】里塚、柴は土を封じて墓を爲り、以て里を記す。韓退之が路傍塚の時に、堆堆路傍塚、一雙復一雙。【二】里塚、歐陽修、豊樂亭記に、剗削消磨。【三】驂駢、驛馬の兩旁に在るもの、蔡邕の文に、車服照路、驂駢如舞。

【題義】治平元年十二月、東坡が華陰縣に至つた時、子由に寄せた詩である。太華山は縣の南八里に在る。詩中に三峰とあるは、太華の三峰である。【詩意】家を離れて三年、一日として歸るを思はないことはない。夢の中に、家に還つたが、暫くして其の然らざるに氣付いた。臘酒(十二月祭日に用ふ)を飲んで寒を送るも、去國の念を催し來る。既にして春風は雪を吹いて旅衣に滿つるも、太華の三峰は、已に天の浮翠である。四方がだんだんに照らされる。一里塚を消して無くし、速に家餉を攜へて出發しよう。

和董傳留別

董傳の留別に和す

蠶繒大布裹生涯、蠶繒大布生涯を裹み、
 腹有詩書氣自華、腹に詩書あり氣自ら華なり。

【字解】【一】董傳、字は至和、洛陽の人。詩名あり。嘗て風翔に在りて、東坡と相從ふ。【二】蠶繒大布、繒は布の總名、古は帛といひ、

厭伴老儒烹瓠葉。
 強隨舉子踏槐花。
 囊空不辦尋春馬。
 眼亂行看擇瘠車。
 得意猶堪誇世俗。
 詔黃新濕字如鴉。

漢代は繪といふ。陶潜の詩に、大布
 蕭蕭以應。【一】腹有詩書、
 詩退之の詩に、由來腹有詩書。【二】
 烹瓠葉、詩小雅に、饔飩瓠葉采之
 烹之。【三】轡轡は、ひるがへる貌。【四】
 舉子、官吏の登用試験に應ずる人。
 【五】尋春馬、孟郊及第の詩に、春
 風得意馬蹄疾、一日看盡長安花。
 【六】瘠車、唐進士の開宴は、常

【詩意】人は清貧を尚ぶ、蠶帛大布で生涯を裹めるも、腹に詩書を蓄へれば、氣自ら華かである。老儒に伴つて瓠葉を烹るを厭ひ、(後漢書に、劉昆教二授弟子、恆五百餘人、每春秋獵射、常備二列典儀、以三素木瓠葉爲二俎豆。)強ひて舉子(試験に應ずる人)と槐花を踏む。(長安の舉子、六月より後、落第者は京に出ない。之を過夏といふ。多くは靜坊廟院を借りて新文章を作る。之を夏課といふ。時に話して曰く、槐花黃、舉子忙と。)財囊も空しくなつて春を尋ねる馬を辨じられない。眼亂れて行くゆ

【題義】此詩も治平元年十二月の作、東坡が鳳翔を罷めて朝に還る時、董傳の寄せた詩に和したのである。紀昀いふ、句句老健。又曰く、結二句乃期許之詞、言外有炎涼之感、非有所不足於董傳也。

【字解】【一】楊者(者一に疊に)西蜀の楊者二十年前、之を見るに甚だ貧し、今之を見る亦貧し、昔に異る所の者は、蒼顏華髮のみ、女は美惡となく富めるものは妍、士は賢不肖となく貧きものは鄙、其をして時に逢ひ遇合せしめば、豈當世の士に減せんや、頃扶風驛舍に宿す、泣く者を聞くに甚だ怨む、之を問へば乃ち昔富みて今貧しきもの、乃ち一時を作る、今以て楊君に贈る

西蜀楊者二十年前見之甚貧今見之亦貧所
 異於昔者蒼顏華髮耳女無美惡富者妍士無
 賢不肖貧者鄙使其逢時遇合豈減當世之士
 哉頃宿扶風驛舍聞泣者甚怨問之乃昔富而
 今貧者乃作一詩今以贈楊君

孤村微雨送秋涼。孤村微雨秋涼を送り、

古今體詩 西蜀楊者二十年前見之甚貧今見之亦貧

【字解】【一】楊者(者一に疊に)

逆旅愁人怨夜長。
不寐相看惟握馬。
悲歌互答有寒蟻。
天寒滯穗猶橫畝。
歲晚空機尙倚牆。
勸爾一杯聊復睡。
人間貧富海茫茫。

作る。應試の秀才であつたが、學未だ成らず、行囊已に竭きたもの。【一】若頭華髮、年老いて衰へたるもの頭と髮、歐陽修、醉翁亭記に蒼頭白髮。晉、傅玄の詩に、十五入君門、一別終華髮。【二】遇合時に合ひて用ひられる、史記留侯傳に、力田不若逢年、善仕不若遇合。【三】扶風縣令、一本に長安縣令に作る。【四】微雨、一本に漸雨に作る。【五】迎也、旅、客也、迎、止

【一】送秋涼、送の字、一本に送に作る。【二】逆旅、寄合をいふ、左傳、僖公二年逆旅の疏に、逆、迎也、旅、客也、迎、止賓客之處也と見ゆ。【三】握馬、杜子美の守歲詩に、盤餐唯握馬。【四】寒蟻、方音の註に、寒蟻蟻也。【五】滯穗、とり留らした種、詩、小雅に、彼有遺秉、此有遺穗。【六】空機、柳子厚の詩に、機杼空倚壁。【七】勸爾一杯、孫皓の爾汝歌に、昔與女爲鄰、今與汝爲區、上汝一杯酒、令汝壽萬春。

【題義】西蜀の楊君、來り謁したが、貧甚しく、同情に堪へなかつたから、曩に扶風驛で貧に苦んで居たものを詠じた詩を楊君に與へた。即ち雨の夜、扶風驛の逆旅で歌ふものの聲が悲しいので、之を聞へば、昔は富みて今貧しくなつたものである。東坡は慷慨として之に酒を飲ませ一詩を作つた。今日寒雨が止まない。忽ち其の事を憶ひ、且つ楊君の棧運は逆旅の貧者と異なることを念つて其の詩

を出して贈つたのである。

【詩意】扶風の一驛、微雨と共に秋涼を送り、客舎の愁人は察られないで、夜の長きを怨む。厩の馬と相看、秋の蟲と悲歌を交へて居る。天が寒うして、取り漏らした穂が、まだ田畝に横はつて居る。歳が晩れて、空の機織道具も壁に倚りかかつて居る。爾に一杯の酒を勸めて睡らしめる。昔、晉の孝武帝の末年に、長星（慧星をいふ）が見はれた。帝は心に甚だ之を惡み、華林園で酒を擧げ、之を祝して、長星勸汝一杯酒、自古何有萬歲天子耶、と言つたことがある。人間の貧富は測られない。恰も海の茫茫たるやうなものである。

夜直祕閣呈王敏甫

夜祕閣に直して王敏甫に呈す

蓬瀛宮闕隔埃氛。
帝樂天香似許聞。
瓦弄寒暉駕臥月。
樓生晴靄鳳盤雲。
共誰交臂論今古。
只有開心對此君。

【字解】【一】祕閣、崇文院中に在る。毎夜校理、校勘一人を輪して直宿せしむ。宋の時の祕閣の狀は、三館（昭文・集賢・史館）に觀へて、較早かつた。【二】蓬瀛、蓬萊と瀛洲。拾遺記に、歷蓬瀛而起碧海。之に方丈を合せて三神山といふ。【三】埃氛、宋史、王著傳に、埃氛

大隱本來無境界

大隱は本來境界なし、

北山猿鶴漫移文

北山の猿鶴漫に移文。

【題義】英宗の治平二年、東坡は鳳翔から召還されて秘閣に入り、次で史館に直することとなつた。史館に直して作つた詩である。(東坡は是時、史館を以て秘閣を兼ねて居つた。)

【詩意】神仙の宮闈は、絶えて塵ほこりの氣がない。帝は天香を愛されて、遙かに聞かしめらる。死の冬の日光に浴して居るは、駕の月に臥したやうであり、樓上に晴露の生ずるは、鳳鳥の雲に盤るやうである。誰と臂を交へて今古を論じよう。(九州春秋に、韓遂、樊稠交臂相加、共語良久。)只聞な心の此君(酒を指す)に對するあるのみ。大隱は山にあらすして市にある。本來境界はない。して見ると、かの北山移文にある夜鶴怨み、曉猿驚くの況は、草堂のみに限らない。此處にも寂寥はある。(鍾山は、都の北に在るから、北山といひ、所在に移し示す書であるから移文といふ。)

謝蘇自之惠酒

蘇自之酒を惠まるるを謝す

高士例須憐麴蘖

高士例須らく麴蘖を憐れむべし、

【字解】(一)麴蘖 かうち(酒を醸す酒母)轉じて酒のことを用ふ、轉退之の文に、何麴蘖之託、而替其

此語常聞退之說

此語は常て退之が說に聞く。

我今有說殆不然

我今說あり殆んど然らず、

麴蘖未必高士憐

麴蘖未だ必ずしも高士に憐まれず。

醉者墜車莊生言

醉ふもの車より墜つ莊生いふ、

全酒未若全於天

酒を全うするは未だ若かず天を全うするに。

達人本是不虧缺

達人は本是れ虧缺せず、

何暇更求全處全

何の暇あつて更に全處の全きを求めん。

景山沈迷阮籍傲

景山は沈迷し阮籍は傲る、

畢卓盜竊劉伶顛

畢卓は盜竊し劉伶は顛す。

貪狂嗜怪無足取

貪狂嗜怪取るに足るなし、

世俗喜異矜其賢

世俗異を喜み其の賢に矜る。

杜陵詩客尤可笑

杜陵の詩客尤も笑ふべし、

羅列八子參羣仙

羅列の八子羣仙に參す。

流涎露頂置不說

流涎頂を露し置いて説かず、

遊。王徽之浮行頰に、矯歩寫境氣。【一】天香。すぐれてよい香、李邕の詩に、馬融・仙仗・天香。【二】此君。晋の王子猷の語を用ふ。白樂天の致北山猿鶴云云。孔稚圭の北山移文に、董振空

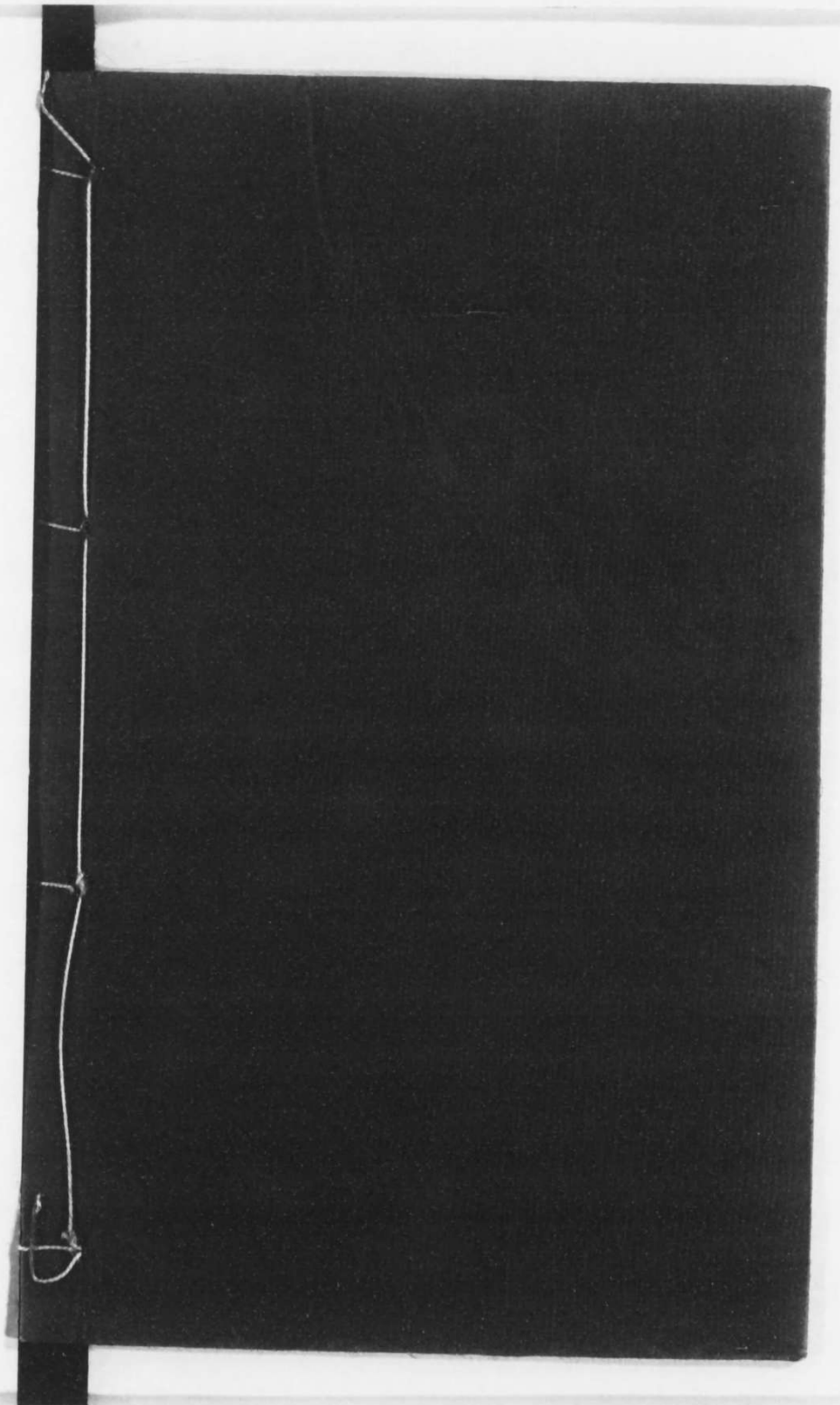
之逸形。【一】達人。道理に通達せる人、晋康の文に、柳下惠・東方朔、達人也。買直の鶴鳥賦に、達人火觀兮、物亡不可。【二】景山。魏志に、徐邈字景山、魏亡びて晉に歸す。太傅謝安之を擧げて中書舍人に補す。【三】阮籍。晋書阮籍傳に、傲然獨得、任性不羈、嗜酒能嘔。

【四】畢卓盜竊。晋書に、畢卓、字茂世、太興末爲東都郎、常飲酒廢職、比合郎廢職、卓因醉夜至其堂間、盜飲之、爲掌酒者之所縛。【五】劉伶。字伯倫、阮籍・嵇康と相過ひ、欣然として神解す。常に鹿車に乗り、一壺酒を攜へ、人をして銜を荷うて之に隨はしめ、謂つて曰く、死便埋我と。【六】杜陵詩客。杜市ないふ。長安杜陵の東南十餘里。又一説あり、少陵といふ。陵西に杜市の舊宅がある。【七】羅列八子。飲

酌くひ。琴ことは未いまだ去まらないが、聊いさか絃びんを忘わする。(晉陶潛傳に、性不レ解レ音、而善二素琴一張、絃、徽は琴節)不レ具、每ごとく朋酒之會、則撫而和之曰、但識二琴中趣、何勞二絃上聲一。我宗先生深意あつて、百里の遠方から兩器酒を贈らる。且かつついで、飲のまなくとも固もとより高たかい。舉世皆同じきも、吾獨異るは、同異どうい兩つながら共に忘れて冥みやきには如ごとかない。鹿しかを得、羊ひつじを亡なふ、すべて兒戲こゝろに等しい。須すらく此の酒を飲んで、復また、辭ことすること勿なれ。何ぞ區區くくとして醒さめたの醉ようたなど比較ひかくすることを用もちひようぞと。

309
65

終



續國譯漢文大成

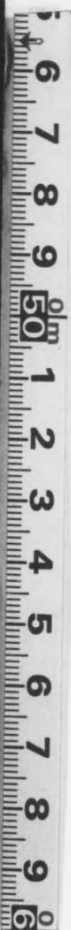
文學部 五十一

309

65

入

入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

文學部第五十一册(第十三帙の三)
蘇東坡詩集一の三



蘇東坡詩集 卷六

古今體詩 五十首

次韻柳子玉見寄 柳子玉寄せらるるに次韻す



薄雷輕雨曉晴初。
 陌上青泥未濺裾。
 行樂及時雖有酒。
 出門無侶漫看書。
 遙知寒食催歸騎。
 定把鷓夷載後車。
 他日見邀須強起。
 不應辭病似相如。

薄雷輕雨曉晴るる初。
 陌上の青泥未だ裾に濺がす。
 行樂時に及び酒ありと雖も、
 門を出づれば侶なく漫に書を見る。
 遙に寒食を知りて歸騎を催し、
 定めて鷓夷を把つて後車に載す。
 他日邀へらるれば須らく強て起つべし、
 應に病を辭する相如の似かるべからず。

【字解】(一)柳子玉 名は瓊、吳の人。王介甫と同年。其の子仲遠は、東坡の妹婿。(二)薄雷 沈佺期が詩に、流調含輕雨、虛岩應薄雷。(三)行樂 李白の詩に、行樂須及時、前に出づ。(四)鷓夷 韋諷以て酒を盛る、漢書揚雄酒箴に、鷓夷滑稽腹如大壺。(五)似相如 司馬相如、字は長卿、成都の人。漢書に、司馬相如素與臨邛令王吉相善、臨邛多富人、卓王孫、程鄭乃相謂曰、令有貴客、爲具召之、并召令、令既至、卓氏客以百數、長卿謝。

【題義】此詩は神宗の熙寧二年(皇紀一七二九年、西曆一〇六九年)二月、東坡が三十四歳の時の作。

古今體詩 次韻柳子玉見寄

寒食の前に柳暈が寄せられた時に次韻したのである。

【詩意】薄雷が鳴り、輕雨があつて、空晴れた曉、街路の春泥は、まだ裾に濺がないから、散策には好都合である。行樂（樂みをなす）は須らく春に及ぶべく酒もある。併し酒があつても、一步門を出ると、友達がない。それで中に居て、漫に書を見る。遂に寒食の節（冬至の後、一百五日）を知つて歸りたくなる。そして何時も其の場合には、酒器を後車に載せる。他日、遊へられたら、強ひて起つべく、司馬相如の真似をして、病に託けて醉するやうなことがあつてはならない。

送曾子固倅越得燕字

曾子固越に倅たるを送り、燕の字を得たり

醉翁門下士、雜選難爲賢。

醉翁門下の士、雜選賢を爲し難し。

曾子獨超軼、孤芳陋羣妍。

曾子獨超軼、孤芳羣妍を陋とす。

昔從南方來、與翁兩聯翩。

昔南方より來り、翁と兩ながら聯翩。

翁今自憔悴、子去亦宜然。

翁今自ら憔悴、子の去る亦宜しく然るべし。

賈誼窮適楚、樂生老思燕。

賈誼は窮して楚に適き、樂生は老いて燕を思ふ。

那因江鱸美、遠厭天庖羶。

那ぞ江鱸の美なるに因つて、遠に天庖の羶を厭はんや。

但苦世論隘、聒耳如蝸蟬。

但世論の隘きを苦む、耳を聒する蝸蟬の如し。

安得萬頃池、養此橫海鱸。

安んぞ萬頃の池を得て、此の横海の鱸を養はん。

【字解】(一) 曾子固 曾鞏、字は子固、唐宋八大家の一人。(二) 倅 佐武の官、宋史に、每歲冬、詔提刑一行都決因、提刑俾行、悉委倅賦、倅賦不行、復委羣屬。(三) 醉翁 歐陽修の別號。(四) 雜選 多く兼りて唯し、漢書、劉向傳に、雜選衆賢、同不重和。(五) 憔悴 瘦せ衰へる、屈原の漁父辭に、顏色憔悴、歐陽永叔、是時、參知政事を罷められ、蔡州に知たり。(六) 天庖 抱朴子に、劉安調守天庖、禮は腥き肉。(七) 聒 耳如蝸蟬、晉の荀康の書に、冀客盈座、鳴蟬聒耳。(八) 萬頃 孫綽の蘭亭集後序に、長湖萬頃。(九) 橫海 謝朓の詩に、偉哉橫海鱸、壯矣垂天翼。李太白の詩に、魯國一杯水、難容橫海鱸。【題義】 神宗の熙寧三年三月、曾鞏が越州に赴任するを送り、多くの餞送者と韻を分ちて詩を賦し、東坡は燕の字を得た。(燕の字の屬する韻で詩を作つた。)

【詩意】 歐陽永叔の門下には、人材が多いので、雜選して賢を爲し難い。曾子固は殊に超軼（すぐれてぬきんする）して居る。孤芳は羣妍を陋とする。（妍は美好、韓退之の詩に、異質忌處羣、孤芳難寄、林とある。）さて歐陽永叔が參政であつた時、曾子固も館閣にあつた。故に聯翩といつたのであらう。其の永叔も今や參知政事を罷められ、地方官となつて蔡州に知たり。（東坡の此詩を作つたのは、永叔の蔡州に至つた時である。）曾君の去るも、亦宜しく然るべきである。昔、前漢の賈誼は年少で公卿の位に任じたが、多くの朝士に毀られて長沙王の太傅に貶された。（長沙は楚の地）又、燕の樂毅は、殊を畏れて西の方趙に降る。燕王は其の子樂間を昌國君となしたから、毅は之と往來して、復、燕に通じたのである。此等の史實を思ふと、那ぞ江南の膾の美なるに因つて、遠に天庖の腥き肉を厭はうぞ。世論のまことに隘いにも因る。世論は耳を聒する蝸蟬のやうなものである。どうか萬頃の池を

得て此の横海の鐘を養ひたいものである。(曾子固の横才に比したのである。賈誼の弔屈原賦に、横江湖之鯨鯢今、固將制於螻蟻とある。)

【餘論】此詩中に、但苦世論隘、聒耳如螭蟬とあるは、近日朝廷の進用は、刻薄の人が多く、議論が偏隘駭陋、螭蟬の鳴いて聴くに足らざるが如きを諷刺したものである。又、地方へ赴任の時、館閣同舎の餞送して分韻するは舊例である。分韻の法に種種ある。古語詩句等を截つて韻とする。それは宿構をさせまい意に出づ。韻を分ち取つたものは、得某韻、若くは得某字と書するのである。分韻は、梁の庾肩吾の暮遊山水、賦韻得磧應令とあるが始めだといふ人がある。

王頤赴建州錢監求詩及草書 王頤建州錢監に赴き、詩及び草書を求む

我昔識子自武功。寒廳夜語樽酒同。酒闌燭盡語不盡。倦僕立寐僵屏風。丁寧勸學不死訣。自言親受方瞳翁。

我昔子を識る武功よりす、寒廳夜語樽酒同じ。酒闌に燭盡くれども語は盡きず、倦僕立つて寐り屏風を僵す。丁寧不死の訣を學ぶを勸む、自ら言ふ親く方瞳翁に受くと。

【字解】(一)王頤 太原の人。(二)建州錢監 福建建州建寧軍は、咸平三年に、總領錢監を置く。(三)武功 縣の名、漢書地理志に、武功屬屬右扶風、今の長安。(四)寒廳夜語 韓退之が靈敏に答ふる詩に、勸來得語讀、勿得宿寒廳。(五)燭盡 禮記に、燭不見跋、跋

嗟予聞道不早悟。醉夢顛倒隨盲聾。邇來憂患苦摧剝。意思蕭索如霜蓬。羨君顏色愈少壯。外慕漸少由中充。河車挽水灌腦黑。丹砂伏火入頰紅。大梁相逢又東去。但道何日辭樊籠。未能便乞勾漏令。宦曹似是錫與銅。留詩河上慰離別。草書未暇緣恩息。

嗟予道を聞いて早く悟らず、醉夢顛倒して盲聾に隨ふ。邇來憂患摧剝を苦しむ、意思蕭索霜蓬の如し。羨む君が顔色愈少壯なるを、外慕漸く少きは中の充つるに由る。河車水を挽いて腦の黒きに灌ぎ、丹砂火に伏し頰の紅なるに入る。大梁相逢うて又東に去る、但道何の日にか樊籠を辭せんと。未だ便ち勾漏の令を乞ふ能はず、宦曹是に錫と銅とを似す。詩を河上に留めて離別を慰む、草書未だ暇あらず恩息による。

日本。(六)盲聾 易林に耳目盲聾。(七)摧剝 臨海の時に、寛永過興宮、權制割、禹穴。(八)蕭索 物さびし、江淮の風賦に、秋日蕭索、浮雲無光。(九)霜蓬 前漢の詩に、孤蓬委霜根。(一〇)丹砂 殊砂に同じ、封禪書に、丹砂化爲黃金。(一一)大梁 云云 史記、魏世家に、惠王使治大梁。(一二)樊籠 とりかご、官職などの束縛をいふ、北史楊休之の傳に、此官定是清職、但不樂煩瑣、妨我賞適、眞是樊籠。(一三)勾漏 山の名、廣西北流縣東北十五里にある。相傳ふ、葛洪嘗て此山の最勝の處に修煉す。

【題義】熙寧二年八月の作、詩及び草書を求められたから、贈るに詩を以てす。紀昀いふ、亦是應酬之作、而筆意疎爽可誦也。

【詩意】我の君を識つたのは、武功縣が初である。共に役所に宿つて樽酒を同うしたこともある。酒闌にして燭は盡きたが、話は盡きない。(唐の柳公權は翰林學士となる。文宗、夜、召對す。燭盡而語未盡。) 僕従も退屈し、居眠を始めて、屏風を僣した。(漢書に、陳萬年病、召子、成教戒於牀下、語至夜半、成睡頭觸屏風、東坡は鳳翔に判たり、王頤は武功の令で、相與に厚善であつた。王頤は丁寧に不死の訣を學ぶを勧め、自らいふ、親しく真人から授かつたと。(真人の目は方瞳綠筋、紫色が之を貫いて居る。ああ我は道を聞いたが、まだ徹底しない。醉夢顛倒し、道に於て盲であり、聾である。其後、憂患到つて、此身が摧剝(くづれはがれる)され、心持も物寂しく霜蓬のやうである。君が顔色いよいよ少壯に、外を慕ふ念のだんだん薄いのは、實に羨しい。心の中が十分に養はれて居るからであらう。河車水を挽いて腦の黒きに灌ぐ(道家搬運の法をいふ。黃庭經に、北方正氣名河車。又、道訣に、脊腹腰曲線、黃河水逆流。) 丹砂火に伏し類(面旁)の紅なるに入る。(仙家、導引の術をいふ。古嵩子が真訣に、成其伏火朱砂、以楮汁丸如麻子、大駐顔定色云云。) 大梁で相逢うて又東に去る。(子由は京師で王頤を送り、東坡の此詩も京師で作る。故にいふ。) 但いふ、何れの日にか樊籠の束縛を離れることが出来ようか。(莊子の養生主篇に、澤雉十步一啄、百步一飲、不斲奮乎樊中。) 昔、晉の葛洪は年老いたるを以て丹を鍊らん(仙薬を欲す)と欲したが、交趾に丹を出すと聞き、勾

漏の令たらんことを求む。帝は之を許さなかつた。洪は非欲爲榮、以有丹耳、と言つたさうである。我は未だ勾漏の令を乞ふことが出来ないが、宦曹は錫と銅とを似めす。ここに詩を河上に留めて、離別の情を慰める。草書は未だ書く暇がないから、宥してもらひたい。(晉の衛恆傳に、張伯英下筆必爲楷、則曰、患患不暇草書。)

秀州僧本瑩靜照堂

秀州の僧本瑩が靜照堂

鳥囚不忘飛馬繫常念馳

鳥囚はれて飛ぶ事を忘れず、馬繫がれて常に馳するを念ふ。

靜中不自勝不若聽所之

靜中自ら勝へず、之く所に聽かすに若かず。

君看厭事人無事乃更悲

君看よ事を厭ふの人、事なくして乃ち更に悲む。

貧賤苦形勢富貴嗟神疲

貧賤は形勢するを苦み、富貴は神疲るるを嗟く。

作堂名靜照此語子爲誰

堂を作りて靜照と名く、此の語子誰と爲す。

江湖隱淪士豈無適時資

江湖隱淪の士、豈時に適ふの資なからんや。

老死不自惜扁舟自娛嬉

老死して自ら惜まず、扁舟自ら娛嬉す。

從之恐莫見況肯從我爲

之に従ふも恐くは見るなし、況んや肯て我に従ふを爲さん。

【字解】(一)秀州 五代の時、吳越王之を置く。今の浙江嘉善縣、江蘇蘇州府は、昔其の境。(二)馬繫 庚信が銘に、身

【題義】秀州の招提院内に靜照堂がある。僧慧空（本堂の字）が堂である。慧空が來訪したので東坡は爲に此詩を題した。時に熙寧二年四月である。

【詩意】鳥は囚はれても、飛ぶことを忘れない。馬は繫れても、常に馳することを念ふ。（白香山の病人多夢、醫の一章に本く。）靜に居て自ら其の靜に勝へなく、遂に其の之く所に聽す。君看よ、事を厭ふの人でも、事がなないと、乃ち更に悲しむことを。（史記に、陳軫謂犀首曰、公何好飲也、曰無事也。軫謂曰、吾請令公墜事可乎。貧賤は形を勞するを苦しみ、富貴は神の疲るるを嗜く。堂を作つて、靜照と名ける、それは一體、難である。（僧慧空である。江湖隱淪の士は、時に適ふの資格がない譯ではないが、老死して自ら惜しまず、扁舟自ら嬉嬉して居る。之に従はうとしても恐らくは見ることとも出來なからう。まして我に従つて來ることはない。（本堂の人間に在つて、亦、靜を終へること能はざるを識る。）

石蒼舒醉墨堂

石蒼舒の醉墨堂

人生識字憂患始

人生字を識りて憂患始る、

姓名蟲記可以休

姓名蟲記せば以て休むべし。

【字解】石蒼舒、字は才美、京兆の人、行草を善くし、人謂ふ、草聖三昧を得と。【二】識字、杜

子美の詩に、子雲識字終投簡。



何用草書誇神速
開卷愉悅令人愁
我嘗好之每自笑
君有此病何能瘳
自言其中有至樂
適意不異逍遙遊
近者作堂名醉墨
如飲美酒消百憂
乃知柳子語不妄
病嗜土炭如珍羞
君於此藝亦云至
堆墻敗筆如山邱
興來一揮百紙盡
駿馬倏忽踏九州

何ぞ用ひん草書神速を誇るを、
巻を開いて愉悅人をして愁へしむ。
我嘗て之を好み毎に自ら笑ふ、
君にも此病あり何ぞ能く瘳えん。
自ら言ふ其の中至樂あり、
適意は逍遙遊に異らずと。
近者堂を作りて醉墨と名く、
美酒を飲んで百憂を消するが如し。
乃ち知る柳子の語妄ならず、
病めば土炭を嗜む珍羞の如しと。
君此藝に於て亦いふ至れりと、
堆墻敗筆山邱の如し。
興來つて一揮百紙盡く、
駿馬倏忽九州を踏む。

古今體詩 石蒼舒醉墨堂

三六七

【一】姓名蟲記云云 漢書に項籍季父陳、年少時、學書不成、墮怒之、籍曰、書足記姓名而已、不足學、學萬人敵耳。【二】神速 杜子美の醉歌行に、鵝角草書又神速、世上見子雲紛紛。【三】愉悅 意を失ひて悦ばない貌。張衡の賦に、神愉悅以疑愁。【四】何能瘳 一本何年瘳に作る。【五】至樂、逍遙遊 共に莊子の篇名。【六】珍羞 珍らしくまき物、後漢書の靈帝紀に、詔減太官珍羞。【七】敗筆如山邱 國史補に、長沙僧懷素好草書、筆筆堆積埋於山下、號曰筆冢。【八】意造 南史に、曹景宗爲人自恃尙勝、每作書字、有不解、不以問人、皆以意造。【九】信手 許瑒の詩に、醉來信手兩三行。【一〇】片紙盡收、晉書の衛恒傳に、張伯英草書、寸紙不見遺。【一一】不減

我書意造本無法。

我が書意造本法なし、

點畫信手煩推求。

點畫手に信せて推求を煩はす。

胡爲議論獨見假。

胡爲れぞ議論獨假され、

隻字片紙皆藏收。

隻字片紙皆藏收せらる。

不減鍾張君自足。

鍾張に減せず君自ら足るとす、

下方羅趙我亦優。

下羅趙に方べて我亦優なり。

不須臨池更苦學。

須ひず池に臨んで更に苦學するを、

完取絹素充衾稠。

絹素を完取して衾稠に充つ。

【題義】石才美は、詞章に工に、草隸を善くす。東坡、鳳翔に判たり、長安を過ぎるとき、必ず其の家に至る。此詩は熙寧二年、京中で寄せ題したものである。

【詩意】人生、字を識つて、憂患が始まる。項羽の言つたやうに書は姓名を記すことが出来れば十分である。何ぞ草書を書いて神速を誇るを用ひようぞ。卷を開いて愉悅（失意の貌、悦は恍に同じ）人をして愁へしめる。我も嘗て之を好み、常に自ら笑つて居たが、君にも此病があると見える。其の病は能く癒えるであらうか。自らいふ、其の中に至樂の地があり、適意の心境は、莊子の逍遙遊に異らないと。近頃、一堂を作り、醃墨と名け、此の堂で美酒を飲んで百憂を銷すとされて居るやうである。か

鍾張一法帖撰素書に、玉右軍云、昔眞書過鍾、而草不減張、儻以爲眞不如何、草不及張。【三】下方羅趙云云。晉の顧愷傳に、羅愷、趙元嗣與張伯英一當時見稱於西州、而神巧自異、衆所慕之、故伯英自稱、上比崔杜不不足、下方羅趙有餘。法書要錄に、羅暉、趙雲、趙京兆人、工草書。【四】衾稠、宋史の豐稷傳に、仁宗衾稠用黃絁、服御用練錦。

の柳子厚が、病めば土炭を嗜む珍羞（珍贖に同じ）の如しと言つた言葉が、今始めて解かつた。（柳子厚が推論に答ふる書に、凡人好詞工書、皆病癖也、吾嘗見病心腹二人有思略士炭、嗜酸鹹者、不不得則大戚、觀吾子意亦已成矣。）君も此の癖に於て、亦、至れりといふ。現に堆積した敗筆は山邱のやうである。興が來ると、一たび筆を揮つて百紙も盡くる。其の筆勢は、駿馬の倏忽として九州を蹈むやうである。（草書の神速を狀する。）我が書は、自分勝手に造つたもので、點や畫も手に信せる。故に人が讀むに推求を煩はすのである。然るに胡爲れぞ人に評判され假されて、隻字片紙、皆藏收される。昔の鍾繇や張芝に劣らないとして君自ら足るとし、羅暉・趙雲に方べて我亦優る。池に臨んで字を寫して苦學するには及ばない。又、絹素に墨を塗抹するよりも、衾稠（ふすまとしとね）にした方がましである。（三國魏志、韋誕傳の註に、張伯英家之衣帛必書後練、臨池學書池水盡黑。）

送安惇秀才失解西歸

安惇秀才の失解西歸を送る

舊書不厭百回讀。

舊書厭はず百回讀むことを、

熟讀深思子自知。

熟讀深思子自ら知る。

他年名宦恐不免。

他年名宦恐くは免れず、

今日樓遲那可追。

今日樓遲那ぞ追ふべけん。

【字解】一、安惇、宋史奸臣傳に、安惇、字は處厚、廣安軍の人。

二、名宦、貴い官位、白居易の詩に、名宦老慵求、退身安草野。

三、樓遲、進む息ふ、詩の隴風衝門

我昔家居斷還往。

我昔家居還往を斷ち、

著書不暇窺園葵。

書を著はして園葵を窺ふに暇あらず。

場來東游慕人爵。

場來東游人爵を慕ひ、

棄去舊學從兒嬉。

舊學を棄て去つて兒嬉に従ふ。

狂謀謬算百不遂。

狂謀謬算百も遂げず、

惟有霜鬢來如期。

惟霜鬢來つて期の如きあり。

故山松柏皆手種。

故山の松柏皆手種、

行且拱矣歸何時。

行くゆく且に拱ならんとす歸る何れ

萬事早知皆有命。

萬事早く知る皆命あるを、

十年浪走寧非癡。

十年浪走寧ろ癡にあらず。

與君未可較得失。

君と未だ得失を較ぶべからず、

臨別惟有長嗟咨。

別に臨んで惟長く嗟咨するあり。

【題義】神宗の熙寧三年、安惇が失解して西に歸るを送つた詩である。失解は、場屋に志を得ないことである。唐の進士、郷より貢するを解といふ。紀昀は此詩を評していふ、意好而語不三精彩」と。

に、斷門之下、可三以棲遲。【一】史記に、公儀子拔三去園葵。【二】場來、漢書、司馬相如傳に、同車場來兮。前にも解せり。【三】狂謀謬算、唐書の舒元興傳に、亂謀謬算。【四】有命、前史に、比收之曰く、早知窮達有命、恨不三十年讀書。

【詩意】昔、董遇に従つて學ぶものあり、遇は教へないで、必ず當に讀むこと百回なるべし、讀書百遍にして義自ら見はると言つたさうである。舊書讀むこと百回なるを厭はない。熟讀深思して子自ら知ることであらう。他日、貴い官位に居らざるを得ないであらう。従つて今日の棲遲(游息)も永く追ふことは出来なからう。我は昔、家居して來往の交際を斷ち、園葵を窺ふに暇がなかつた。漢書に、董仲舒、孝景時、博士となり、帷を下して講誦、三年園を窺はず。既にして場來(去來といふに同じ)東游し、人爵(人が定めた官位)、孟子、告子篇に、公卿大夫、此人爵也が慕はしくなつて、舊學を棄てて、兒嬉に従ふ。狂謀謬算、何一つ成就出来なかつた。惟霜のやうな鬢となつて、恰も百歳の老人となつた心持がする。禮記曲禮に、百年曰(期頽)頭を回せば故山の松柏は、皆手づから植ゑたもの、行くゆく且に拱ならんとするのに、(左傳の僖公三十二年に、爾墓之木拱矣。)歸る日は何れの時ぞ。何事も皆、天命である。十年の浪遊は決して癡かなるのではない。(運命に任せただのである)されば今日君と得失を較べることは出来ない。離別に臨んで惟長く嗟咨するのみである。

送任(送) 伋(任) 通判(通判) 黃州(黃州) 兼寄(兼寄) 其(其) 兄(兄) 孜(孜)

任伋黃州に通判たるを送り、兼ねて其兄孜に寄す

吾州之豪任公子。

吾州の豪任公子、

少年盛壯日千里。

少年盛壯日に千里。

古今體詩 送任伋通判黃州兼寄其兄孜

【字解】【一】任伋、宋史、任孜の傳に、其弟伋亦知名、普通、判黃州、當時稱大任小任。孜は時に聞

無媒自進誰識之。

有才不用今老矣。

別來十年學不厭。

讀破萬卷詩愈美。

黃州小郡夾谿谷。

茅屋數家依竹葦。

知命無憂子何病。

見賢不薦誰當恥。

平泉老令更可悲。

六十青衫貧欲死。

桐鄉遺老至今泣。

穎川大姓誰能箠。

因君寄聲問消息。

莫對黃鶴矜爪背。

媒なくして自ら進むも誰か之を識らん、

才あれども用ゐられず今老いたり。

別來十年學んで厭はず、

讀破萬卷詩愈々美なり。

黃州小郡谿谷を夾み、

茅屋數家竹葦に依る。

命を知らば憂なし、子何を病ふる、

賢を見て薦めず誰か當に恥づべき。

平泉老令更に悲むべし、

六十青衫貧うして死せんと欲す。

桐鄉遺老今に至るまで泣く、

颯川の太姓誰か能く箠する。

君に因て聲を寄せ消息を問ふ、

黃鶴に對して爪背を矜る莫れ。

州平泉の令たり。改、字は師平、侯、

字は師中、皆、眉の名士なり。【一】

黃州、元和郡縣志に、春秋時、鄒子

之地。【二】日千里。史記、荆刺傳

に、田光曰、蘇秦壯之時、一日而

馳千里、至其發老、驚馬先之。

【三】無媒。戰國策に、女無媒而

嫁。【四】讀破萬卷。杜子美の贈

韋左丞詩に、讀破萬卷、下筆

如如有神。【五】竹葦。佛書に稻麻

竹葦の字あり、維摩經に、譬如計

藍、竹葦、稻麻、叢林云云。【六】平

泉。縣の名、太平寰宇記に、劍南西

道簡州屬平泉。【七】青衫。青色

の衣、白樂天の琵琶行に、江州司馬

青衫濕。【八】穎川大姓云云。漢書

趙廣漢傳に、遷穎川太守、郡大姓原

籍宗族極衆、吏客怨爲、監賊、前二千

石長、能制、廣漢既至、數月、原

籍首惡、郡中震懼。【九】黃鶴、

爪背、一偏に似たり、輪退之が詩に、昔逢細雨時、有似黃鶴子、田巴元老著、鶴放矜爪背。

【題義】此詩は熙寧二年の作、子由が送任師中通判黃州詩に、一別都門今五年の句がある。子由は治平二年に大名の推官となつたから、熙寧二年は、正に五年となる。東坡の此詩も亦、同時に作つたものと見える。

【詩意】吾が州の豪傑は任師中である。少年の時分は、馬でいふと盛壯日に千里であつた。一體媒がなくて自ら進むも、誰か之を識らうぞ。才があつても用ゐられなく、今は老いてしまつたといふのが、任公子のことであらう。別れてから、ここに十年、學んで厭はず、萬卷を讀破して、詩はいよいよ美しい。黃州は小郡で、谿谷を夾んで居り、茅葺きの家が數軒、竹葦に依る。韓退之が送區冊序の夾江荒茅篔簹竹之間、小吏十餘家、皆烏言夷面の語を用ゐるに似たり。任公子は今度、此處に赴かれる。人間は天命を知らば、心に愛といふものはない。君は何を病へるのである。賢者を見て之を推薦しなければ、誰の恥だと思ふ。又、平泉縣の老令任師平は更に悲しむべきである。昔、漢の朱邑（字は仲卿）病んで且に死なんとしたとき、其子に屬していふやう、我は故の桐鄉の吏であつた。其の民が我を愛したから、必ず我を桐鄉に葬れと言つたさうだが、六十老書生の境遇、悲しむべきは昔も今も變らない。地方を治める人は、趙廣漢のやうに剛直たるべきであらう。穎川の大姓原籍を何人が制したか。君に因て音信を任師平君に通ずる。黃鶴に對して爪背を矜ることのないやうにと勸める。

次韻子由初到陳州

二首 子由初到陳州に到るに次韻す 二首

道喪雖云久吾猶及老成

道喪ふ久しといふと雖も、吾猶は老成に及ぶ。

如今各衰晚那更治刑名

如今各衰晚、那ぞ更に刑名を治めん。

懶情便糶散疎狂託聖明

懶情便ち糶散、疎狂聖明に託す。

阿奴須碌碌門戶要全生

阿奴須く碌碌たるべし、門戶生を全うするを要す。

【字解】(一) 陳州、春秋時代には陳國、隋は陳州を置く、唐は府となし、河南に屬す。今の淮陽縣は其の舊治である。(二) 老成、老成人をいふ。詩、大雅に、雖無老成人、尙有典刑。(三) 衰晚、杜子美の詩に、腐儒衰晚膠漆。【刑名】史記、韓非傳に、喜刑名法術之學。刑は形と同じ。其の名を以て實を責め、老し想する所なき義。(四) 懶情、陶潛の詩に、阿舒已二八、懶情固無匹。(五) 糶散、莊子逍遙遊篇に、吾有大木、人謂之樗。又、同じく人間世篇に、曲糶糶社樹、其大蔽牛、匠石曰、散木也。(六) 疎狂、モソつかしく、氣ちがひじみる、白樂天が敬之に寄せし詩に、疎狂屬年少、間數爲官卑。(七) 阿奴須碌碌、晉、周顯母李氏傳に、阿奴碌碌、當在阿母目下耳。碌碌は人に隨從する貌。

【題義】此詩は神宗の熙寧四年(皇紀一七三一年、西曆一〇七一年)六月、東坡が杭州に通判となつた時、子由が初て陳州に到る韻に次して以て之に寄せたのである。子由の初到陳州詩は、謀拙身無向、歸田久未成、來陳爲傾計、傳道愧虛名、俎豆終難合、詩書強欲明、斯文吾已試、深恐誤諸生。其の二にいふ、久愛閒居樂、茲行恐遂不、上官容碌碌、飽食更悠悠、枕書成癖、湖邊柳散愁、疎慵愧韓子、文字化潮州。

【詩意】道德の衰へたことは、まことに久しいが、吾は猶ほ昔の老成人(經驗を積んだ人)を見るこゝとが出来た。併し、只今は爾も我も、各衰晚した。那ぞ更に刑名法術の學を治め、俗吏となつて日に事務を事としようぞ。ものうくして忘る我は、全く樗櫟散木の役に立たない人間である。そして、粗忽で、氣違染みて、聖明の世に身を託して居る。晉の阿奴の如く、碌碌として人に隨從し、門戸を好くして生を全うするを要する。(莊子の養生主篇に、可三以全生。)

舊隱三年別杉松好在不
我今尙眷眷此意恐悠悠
閉戸時尋夢無人可說愁
還來送別處雙淚寄南州

舊三年の別を隱む、杉松好在なりや不や。
我今尙は眷眷、此の意恐らくは悠悠。
戸を閉ちて時に夢を尋ね、人の愁を説くべきなし。
還り來つて別を送る處、雙淚南州に寄す。

【字解】(一) 好在、不在。白樂天の詩に、好在玉眞外、平生記得不。(二) 悠悠、憂ふる貌、詩の小雅に、悠悠我思。

【詩意】東坡は神宗の熙寧二年、蜀より朝に還つたから、同じく四年六月、此詩を作つた時まで三年である。故に詩中に三年の別を隱むと言つた譯である。願れば杉も松も、果して丈夫であるかどうか。我は今尙は眷眷の情に堪へない。(毛詩に、瞻瞻懷顧、瞻は眷と同じ)従つて此心は悠悠として憂へて居る。戸を閉ちて時に夢を尋ねる。(昌谷の詩に、楚魂尋夢風颯然。)我が爲に愁を説いてくれる人

もない。還り來りて送別の處、涙の下るを禁することが出来ない。ここに詩を作りて南州に寄する。

次韻子由綠筠堂

子由の綠筠堂に次韻す

愛竹能延客。求詩臘挂墻。

竹を愛して能く客を延き、詩を求めて臘へ墻に挂く。

風梢千叢亂。月影萬夫長。

風梢千叢亂れ、月影萬夫長し。

谷鳥驚甚響。山蜂識酒香。

谷鳥は甚の響に驚き、山蜂は酒の香しきを識る。

只應陶靖節。會取北窗涼。

只應に陶靖節、北窗の涼を會取すべし。

【字解】(一) 千叢。書は鹿牛の尾で作つた大旗。宋子京の時に、蘇竹生、和書。(二) 萬夫長。杜牧之が晚晴賦に、竹林外裏兮、十萬丈夫、甲刃縱橫、密陣而環侍。(三) 會取北窗涼。會取は一本に會聽に作る。晉陶潛傳に、高臥北牕之下、清風颯至、自謂羲皇上人。李白の詩に、何處聞秋風、極倚北窗竹。

【題義】此詩の題は諸本に、次韻子由綠筠堂に作る。併し、子由の全集に原作がない。東坡の本集に、東坡自書此詩後云、清獻先生嘗求作綠筠亭詩、曰吾鄉人梁處士之居也。清獻は宋の趙抃の諡である。

【詩意】竹を愛して能く客を延き、詩を求めて刺へ之を牆屋に挂ける。風が梢を吹いて竹葉の亂れる狀は、潭山の瀟のやうである。又、竹林の月影は、萬夫の如く長く映つて居る。谷の鳥は竹林に響く毒の音に驚き(杜子美の詩に、谷鳥鳴遷遷)山の蜂は酒の香ばしきを識る。(杜子美の詩に、花底山蜂

遠趁人) 只應に陶靖節(陶潛、辛して靖節先生と號す)のやうに北窗の涼味を會取すべきである。

送劉放侔海陵

劉放海陵に侔たるを送る

君不見阮嗣宗。

君見ずや阮嗣宗、

臧否不挂口。

臧否口に挂げざるを。

莫誇舌在齒牙牢。

誇るなかれ舌在り齒牙牢しと、

是中惟可飲醇酒。

是の中惟醇酒を飲むべし。

讀書不用多。

書を讀むも多きを用ひず、

作詩不須工。

詩を作るも工を須ひず。

海邊無事日日醉。

海邊事なく日日酔ふ、

夢魂不到蓬萊宮。

夢魂は到らず蓬萊宮。

秋風昨夜入庭樹。

秋風昨夜庭樹に入る、

蓴絲未老君先去。

蓴絲未だ老いず君先づ去る。

君先去幾時回。

君先づ去らば、幾時か回らん。

古今體詩 次韻子由綠筠堂 送劉放侔海陵

【字解】(一) 劉放。字は實父、臨江新喻の人。王安石と友たり。實父、前朝に在り、新法の不便を論じて安石の怒に觸れ、斥けられて泰州に遷りたり。(二) 海陵。泰州をいふ。泰州は清の時、江蘇揚州府に屬し、今は泰縣、江蘇淮揚道に屬す。

【阮嗣宗】晉の阮籍字は嗣宗、竹林七賢の一人。(二) 齒牙牢。韓退之が劉劭に贈る時に、羨君齒牙牢且潔、大肉硬餅如刀截。(三) 是中惟可飲醇酒。南史、謝靈運に、謝靈運嘗曰、此中惟宜飲酒。(四) 秋風昨夜入庭樹。劉禹錫の秋風引。史記、微子世家に、飲之醇酒。(五) 蓴絲未老君先去。蕭蕭送雁羣。又、陶淵明に、秋風入庭樹、從此不。

劉郎應白髮

劉郎應に白髮なるべし、

桃花開不開

桃花開くや開かずや。

名く。【△】最時回、柳子厚の詩に、不知從此去、更道幾年回、杜子美の詩に、天邊幾年回。

【題義】此詩は熙寧三年三月の作。劉效は王安石の友であつたが、新法を論じて斥けられて秦州に通判となつた。此詩は其の行を送つた詩である。

【詩意】君見ずや阮籍が人の戚否(よしあし)を口にしなかつたことを。口は禍の本である。新法の不便なことを言つた爲に忽ち斥けらる。故に、舌在り齒牙牢しなどと誇るなかれ。史記の張儀傳に、嘗從楚相一飲、已而楚相亡璧、門下意張儀、共執掠笞、其妻曰、子毋讀書游說、安得此辱乎。儀曰、視吾舌尚在不在、妻笑曰、舌在也、儀曰、足矣。是の口は言葉を吐かないで、ただ醇酒を飲むべきである。書を讀むも、別に多きを要しない。詩を作るも、別に工を須ひない。海邊事なく、日日酒に酔ふ。(杜子美の詩に、朝旭日日典春衣、每日江頭盡醉歸。)併し、夢魂は蓬萊宮に到らない。(貢父が秦州に謫される時、館閣の壁に題して、壁門金闕倚天開、五見宮花落古槐、明日扁舟滄海去。卻從雲氣望蓬萊。)秋風は昨夜庭樹に入る。昔、晉の張翰は、齊王問に辟されて高官となつたが、秋風の起るを見て、吳中の菰菜、蓴羹、鱸魚膾を思つて曰く、人生志に適するを得るを貴ぶ。何ぞ能く官に羈れて數千里以て名爵を要めんやと言つたさうである。葦絳がまだ老いいうちに、君先づ去る。君先づ去らば、幾時か回るであらう。劉郎の所謂應に白髮となつて來るであらう。(劉禹錫が京師に還

相見。【○】葦絳、四月寒が寒を生じて、未だ葉あらずるを雉尾と名く。葦葉が舒びて長くなつたのを葦葉と

る詩に、南曹舊吏來相問。何處淹留白髮生とある。同じ劉禹錫(字は夢得)が元和十一年に朗州から召されて京師に至つたとき、戯れに看花諸君子に贈る詩に、紫陌紅塵拂面來、無人不道看花回。元都觀裏桃千樹、盡是劉郎去後栽、後又詩を題していふ、百畝庭中半是苔、桃花落盡菜花開、種桃道士歸何處、前度劉郎今又來と。劉郎は應に白髮なるべし。桃花は開くや開かずや。

送錢藻出守婺州得英字

錢藻出で婺州に守たるを送る、英の字を得たり

老手便劇郡高懷厭承明

老手は劇郡を便とし、高懷は承明を厭ふ。

聊紆東陽綬一濯滄浪纒

聊か東陽の綬を紆ひ、一たび滄浪に纒を濯ふ。

東陽佳山水未到意已清

東陽の佳山水、未だ到らずして意已に清し。

過家父老喜出郭壺漿迎

家に過りて父老喜び、郭を出でて壺漿迎ふ。

子行得所願愴恨居者情

子行いて願ふ所を得、愴恨は居るもの情。

吾君方急賢日盱坐邇英

吾君方に賢に急なり、日盱るるまで邇英に坐す。

黃金招樂毅白璧賜虞卿

黃金樂毅を招き、白璧虞卿に賜ふ。

子不少自貶陳義空崢嶸

子少しも自ら貶せず、義を陳ぶる空しく崢嶸。

古稱爲郡樂漸恐煩敲撈

古に稱す郡を爲むるは樂しと、漸く恐る敲撈を煩はすを。

臨分敢不盡醉語醒還驚

分るるに臨み敢て盡くさず、醉語醒むれば還驚く。

【字解】【一】 鎮遠 字は蘇老、武肅王孫五世孫。【二】 婺州 元和郡縣志に、江南道婺州。今の浙江金華縣。【三】 老手 物な

れた胸前。東坡の詩に、老手王摩詰、窮交孟浩然。【四】 劇郡 漢の朱邑傳に遠守劇郡、取於難處。【五】 高懷 承明、高懷は

氣高き心。杜市の詩に、高懷見物理、識者安青睞。承明は承明廬、石渠閣外に在り。漢の嚴助傳に、爲會稽太守、馬書曰、君厭承

明之盛、勢待從之奉、慎故土、出爲郡吏。【六】 紆 東陽縣、揚子に、使我紆朱懷、金。【七】 東陽 佳山水、劉禹錫の詩に、東陽

本是佳山水、何況曾經此隱侯。【八】 密 樂を意に容れたるをいふ、孟子陳惠王下に、寡食密、以迎王師。【九】 怡 怡、蘇武

の李陵に別るる詩に、怡恨切中懷。文選、北征賦に、心怡恨以傷懷。【一〇】 日 日、左傳の襄公四年に、日不吾忘。註にいふ、吁、

憂也。又、昭公二十一年に、楚君大夫其吁食。漢、蓋湯傳に、每朝奉事、語國家用、日吁天子忘食。【一一】 黃金 史記、樂

毅使燕、遂委質爲臣。李白的詩に、昭王白骨委蓬蒿、何人更掃黃金臺。【一二】 不 不、少自貶、孔子世家に、子貢曰、夫子之道至大

也、故天下莫能容、夫子蓋少貶焉。【一三】 陳 陳、義空、靜、莊子、肅王篇に、楚王反國、賞屠羊說、屠羊說曰、大王失國、說失屠

羊、大王反國、說亦反屠羊、云云、屠羊說、屠羊、而陳、義甚高。靜、靜は山の峻しき貌。李太白の大馬賦に、吐此靜之高。【一四】 項 項、項傳の贊に、執、殿朴、以鞭吾天下。撈は撈なり。【一五】 臨 臨分敢不盡 醉語之が興に示す詩に、臨分不盡。

【題義】 熙寧三年三月、錢藻は館閣から出でて、婺州に守となつた。舊例に館閣、外任に補せられる

場合には、同舍錢送し、席上先づ赴任する人の詩を索め、各、分韻して送行の詩を作らんと欲す。こ

の度、錢藻、五言絶句一首を作る。東坡分韻藻の字を得たから、此の五言古詩を作つたのである。

【詩意】 手腕の人は、劇郡を治めることを便として居る。前漢の張敞は、自ら謂ふ劇郡を治むと。氣

高い心の人、石渠閣外の承明廬などに居ることを厭ふ。聊か東陽郡太守の印綬を紆ふも、後漢の輿

服志に、郡太守二千石、銀印青綬、一たび滄浪の水に我が纒を濯ふ。滄浪之水清兮、可濯我纒。

滄浪は水の名、纒は冠のひも。東陽郡の佳山水は、未だ到らないうちに、意は已に清い。故山の家に

過つて父老は喜ぶ。後漢の岑彭傳に、南還津鄉、有詔過家上冢。一步城郭を出でると、盡漿を攜

へて來つて相迎へる。古樂府、木蘭の歌に、爺娘聞汝來、出郭相扶將。白樂天の初て江州に到る詩

に、遙見朱輪來出郭、相迎勞動使君公。子は行いて願ふ所を得、まことに羨ましい。ただ此に留る我等

は憤恨として中懷に切である。憤恨は悲愴の貌。今や吾が君王に於かせられては、賢者を求めるに急

である。日肝るるまで邇英閣におはする。仁宗の景祐二年に、邇英閣を置く、講讀の所。昔、燕の昭王

は黃金臺を築いて樂毅を招き、趙の孝成王は白璧を虞卿に賜ふ。白孔六帖に、燕昭王置千金於臺上、

以延天下士、謂之黃金臺。又、史記に、虞卿躡屣擔簞、說趙孝成王、一見賜黃金百鎰、白璧一

雙、再見爲上卿。子は少しも自ら貶さないで、義を陳べることが幹幹である。昔から郡を爲めるは樂

しと言はれて居るが、併しだんだん刑法が厳しくなつて敲撈を煩はすことを恐れる。青苗、助役など

の新法が既に行はれて、百姓の輸納が思はしくないと、郡を爲めるもの、鞭箠を用ゐるを免れない。

韓退之が江陵に赴く詩に、何況親狎獄、敲撈資姦儉。分れるに臨んで、敢て言を盡さない。醉中に

此の語を道ふ。醒めての後、また驚く、罪を朝廷に得るを恐れるからである。

送呂希道知和州

呂希道和州に知たるを送る

去年送君守解梁

去年君が解梁に守たるを送り、

古今體詩 送呂希道知和州

【字解】【一】 呂希道 字は景純、

河東の人。【二】 和州 今の和縣、

安徽安慶道に屬す。【三】 解梁 春

今年送君守歷陽。今年君が歴陽に守たるを送る。
 年年送人作太守。年年人の太守と作るを送り、
 坐受塵土堆胸腸。坐して塵土を受けて胸腸に堆し。
 君家聯翩三將相。君が家聯翩三將相、
 富貴未已今方將。富貴未だ已まず今方に將なり。
 鳳雛驥子生有種。鳳雛驥子生るる種あり、
 毛骨往往傳諸郎。毛骨往往諸郎に傳ふ。
 觀君颯鬱負奇表。觀る君の颯鬱奇表を負へるを、
 便合劍珮趨明光。便ち合に劍珮明光に趨くべし。
 胡爲小郡屢奔走。胡爲れぞ小郡に屢々奔走し、
 征馬未解風帆張。征馬未だ解かず風帆張るを。
 我生本是便江海。我生は本是れ江海を便とす、
 忍恥未去猶傍徨。恥を忍んで未だ去らず猶ほ傍徨、
 無言贈君有長歎。無言君に贈りて長歎するあり、

三八一
 秋時代の管地、今の山西の解、臨晉、
 虞鄉三縣。【一】歴陽、古、揚州の
 城。【二】聯翩、つづいて絶えない
 貌。陸機、文賦に、浮藻聯翩。【三】
 方將、毛詩に、有矧方將。註にいふ、
 將、大也と。【四】生有種、杜子
 美の詩に、寶侍御、驥之子、鳳之雛、
 年未三十、忠義俱。【五】往往傳、
 諸郎、晉宋の時、江左、王謝子弟を
 謂つて烏衣諸郎となす。【六】颯鬱
 こんもりとして高い。陸倕の文に、
 飄飄重軒、矍矍反字。【七】奇表
 後漢書李固傳に、固狀貌有奇表。
 【八】劍珮、明光、漢、蕭何傳に、
 賜何帶劍履上殿。西漢に、明光宮
 あり、唐、王昌齡寄崔員外詩に、
 我有故人曰鳳皇、腰佩金玉趨
 明光。【九】風帆張、韓退之の岳
 陽樓の詩に、巖程追風帆、劈箭
 入高浪。【一〇】忍恥、左傳襄公

美哉河水空洋洋

美なるかな河水空しく洋洋たり。

は彷彿に通ず、毛詩、黍離序に、悠悠不怨去、而作是詩也。【一】長歎、白樂天が庚七の時に、相繼一長歎、薄命與君同。【二】傍徨、傍
 徨洋、史記、孔子世家に、孔子將西見趙簡子、至於河而問、費鳴鶴舜之死也、臨河而歎曰、美哉河水洋洋乎、丘之不濟、此
 命也夫。

【題義】此詩は熙寧三年、吳希道がいでて和州に守たるを送つたもので、東坡の三十五歳の時であつた。紀昀いふ、大段似送任假詩、佳處不佳處俱似、較送錢藻詩、稍含蓄、只忍恥二字露骨耳と。
 【詩意】去年、君が解梁に守となつたのを送り、今年、君が歴陽に守となるを送る。毎年年人が太守となつて行くのを送り、自分は坐して塵土が胸や腸に堆い。(昔、襄陽の羅友は、道を好み、酒を嗜む。相温は其の才を認めたけれども、用ひなかつた。人が郡を得るものと、温は送別の席を設ける。或る時、友至る尤も晩かつた。之を問ふと、友は答へて曰く、昨、教旨を奉じ、且に門を出ると、一鬼に逢ふ。鬼いふ、我只汝が人の郡となるを送るを見て、人が汝の郡となりて送るを見ないと。遂に漸怖卻回し、覺えず遅刻す。温は心に愧ぢて、後に襄陽の太守としたといふ話がある。)さて君が家は代將相を出した。即ち呂蒙正は、太宗の時に、參知政事となつて、萊國公に封せらる。呂夷簡は、仁宗の時に、同平章事に除せられ、申國公に封せらる。呂公弼は英宗の時に樞密使となる。富貴未だ已まず、今方に大いなりである。鳳の雛、驥の子、生るる素性がよい。其の毛骨往往多くの子弟に傳はる。君の狀貌を觀るに颯鬱として奇表を負うて居る。どうしても劔を帯びて明光宮に趨くべき

人相である。胡爲れぞ小郡に轉轉奔走し、旅馬も装ひを解かないうちに、又、風帆を張つて出發する。我が生れは、元來、江海を便とする。恥を忍んで未だ去らず、猶ほ彷徨（徘徊の義）として居る。今は何も言はないで君に贈つて長歎するあるのみ。美なるかな河水、洋洋として流れ去る（毛詩に、河水洋洋、北流活活。）

次韻王誨夜坐

王誨が夜坐到次韻す

愛君東閣能延客。愛す君が東閣に能く客を延くを、
願我閒官不計員。願ふ我閒官にして員を計られざるを。
策杖頻過知未厭。杖を策き頻に過り未だ厭ざるを知らば、
卜居相近豈辭遷。居を卜し相近き豈遷るを辭せんや。
莫將詩句驚搖落。詩句を將て搖落に驚くこと莫れ、
漸喜樽疊省撲緣。漸く喜ぶ樽疊の撲緣を省くを。
但約月明池上宿。但約す月明かなるとき池上に宿し、
夜深同看水中天。夜深けて同じく水中の天を見る。

【字解】〔一〕王誨、字は規父、

熙寧中、蘇州を爲む。〔二〕東閣、漢、公孫宏傳に、起、徒步、數年至、宰相、封侯、於是起、客館、開、東閣、以延賢人。〔三〕閒官、韓退之が李襄州に留別する詩に、應、許、閒官寄、病身。〔四〕知、未、厭、一本知を如に作る。〔五〕相近、杜子美が過、朱山人池亭、詩に、相近竹參差、相過人不知。〔六〕搖落、楚辭九辯に、蕭瑟兮草木搖落而變衰、杜子美の詩に、搖落巫山暮、峽江東北流、

以、觀、感、潮、適有、蚊、蠓、僕、緣、而、附、之、不、時、則、缺、衝、毀、首、碎、胸。〔七〕水中天、李太白が弟昌齡を送る詩に、人乘海上月、帆落潮中

天。賈島の詩に、船壓水中天。

【題義】此詩は熙寧三年十月、京中で作つたものである。

【詩意】君が東閣を開いて、賓客を招せられるのは、まことに好い。併し我は閒官であつても其の員には計へられないであらう。杖を策いて度度訪問してもお厭ひなくば、お近い所に、吾が住居を遷すことも、決して憚らない。搖落の二字は、しばしば詩句に見はる。詩句を讀んで秋の搖落に驚いてはならない。漸く樽疊（酒樽）に蚊蠓（カとアブ）の僕僕然として縁り聚まる）することもなくなつて喜ばしい。約を待つて月明かなるとき、池上に宿し、夜深けて同じく水中の天を見る。まことに望ましいことである。

送文與可出守陵州

文與可出守陵州に守たるを送る

壁上墨君不解語。壁上の墨君語を解せず、
見之尙可消百憂。之を見て尙ほ百憂を消すべし。
而況我友似君者。而るを況んや我友君に似たる者をや、
素節凜凜欺霜秋。素節凜凜霜秋を欺く。
清詩健筆何足數。清詩健筆何ぞ數ふるに足らん、

【字解】〔一〕文與可、文同、字は與可、梓潼の人、皇祐の進士、畫を善くす。石室先生と號す。〔二〕陵州、漢、犍爲郡武陽縣の東境。〔三〕素節、高節といふに同じ、喬知之の詩に、丹心素節本無求。張九齡の詩に、荷葉素節。〔四〕凜凜欺霜、秋、

逍遙齊物追莊周。

逍遙齊物追莊周を遊ぶ。

奪官遣去不自覺。

官を奪ひ遣去自ら覺らず、

曉梳脫髮誰能收。

曉梳脱髮誰か能く收めん。

江邊亂山赤如赭。

江邊亂山赤くして赭の如し、

陵陽正在千山頭。

陵陽正に千山の頭にあり。

君知遠別懷抱惡。

君遠別して懷抱の惡きを知らば、

時遣墨君解我愁。

時に墨君を遣はして我が愁を解け。

遺之、及、與陳萬等。宗室襲封事、執朝典、坐奪一官、再請、郡、以、太常博士知、陵州。【○】赤如赭、杜子美が光祿坂の詩に、山行落日下、絕壁、四望千山萬山赤。【○】懷抱惡、晉の王羲之傳に、中年以來、傷於哀樂、與親友別、輒作數日惡、杜子美の詩に、使我不能餐、令我惡懷抱。

【題義】此詩は熙寧三年十月の作、文同がいでて陵州に守たるを送り、竝に玉堂硯銘を作つた。本集玉堂硯銘の跋に、文同與可、將赴陵州、孫洙巨源以玉堂大硯贈之、與可屬子瞻爲之銘云云。

【詩意】昔、王子猷は竹を愛し、何ぞ一日も此君無かるべけんやと言つた。(此君、竹の異名となる)今、文與可は善く竹を畫く。壁上の墨竹は言葉を發しないが、之を見ると百憂を消すことが出来る。然るを況んや、我が友(文與可を指す)の竹に似たる所あるをや。君の丹心素節は、秋霜と質を比する。

其の清詩や健筆も、之に比するときは、數ふるに足らない。君が胸中の廣大なる、よく莊子逍遙の心遊をなし、よく莊子齊物の觀をなす。故に坐せられて一官を奪はれ、外に遣去されても、(郡郡を請うて陵州に知たり。)少しも意に介しない。曉梳の脱髮は、誰か能く收めようぞ。首を回せば、江邊の亂山は赤うして赭(赤土)の如し。陵陽は正に千山の頭にあり、江山の風景は君の雙眸に入ることであらう。君遠く別れることの堪へ難いことを知つたなら、折折文信を致して我が愁を解いてくれるやうにお願ひする。

【餘論】本集の墨君堂記にいふ、王子猷謂、竹君、天下從而君之、無異辭、今與可、又能以墨象君之形容、作堂以居君、而屬余爲文以頌君德、則與可之於君、信厚矣、與可獨能得君之深、而知君之所、以賢、雍容談笑、揮灑奮迅、稚壯枯老之容、披折偃仰之勢、風雪凌厲、以觀其操、崖石聳嶭、以致其節、得志遂茂而不驕、不得志、瘁瘠而不辱、羣居不倚、獨立不懼、與可之於君、可謂得其情而盡其性矣。

送劉道原歸南康

劉道原の南康に歸觀するを送る

晏嬰不滿六尺長。

晏嬰六尺の長に満たざるも、

高節萬仞陵首陽。

高節萬仞首陽を陵ぐ。

青衫白髮不自歎。

青衫白髮自ら歎せず、

【字解】【一】劉道原、名は恕、筠州の人、熙寧二年、秘書丞、補修文字となる。【二】南康、太平寰宇記

に、江南西路南康軍、本、江州星子

富貴在天那得忙。十年閉戶樂幽獨。百金購書收散亡。塌來東觀弄丹墨。聊借舊史誅姦強。孔融不肯下曹操。汲黯本是輕張湯。雖無尺箠與寸刃。口吻排擊含風霜。自言靜中閱世俗。有似不飲觀酒狂。衣巾狼藉又屢舞。傍人大笑供千場。交朋翻翻去略盡。

富貴天に在り那ぞ忙することを得ん。十年戸を閉ぢて幽獨を樂み、百金書を購ひて散亡を收め、東觀に塌來して丹墨を弄し、聊か舊史を借りて姦強を誅す。孔融肯て曹操に下らず、汲黯本は是れ張湯を輕んず。尺箠と寸刃と無しと雖も、口吻排撃して風霜を含む。自み言ふ靜中世俗を閱すれば、飲まずして酒狂を觀るに似たるあり。衣巾狼藉として又屢々舞ふ、傍人大に笑うて千場に供す。交朋翻翻として去つて略盡き、

蘇。【一】晏嬰、齊の相となつて朝に在り、君語及之則危言、語不及之危行。晏子の御の妻、夫に向つて去らんことを誘ふ。曰く、晏子長不六尺、身相齊國、名顯諸侯、今、妾其の出づるを觀るに、志念深し、當以て自ら下るものあり云云。【二】高節萬仞、馬融の長笛賦に、萬仞之石磧。【三】腹首歸、説は凌と同じ。史記伯夷傳に、義不食周粟、一壘首陽山、采薇而食之。【四】青衫、青色の衣、白樂天の琵琶行に、江州司馬青衫濕。【五】富貴在天、論語、顔淵篇に、死生有命、富貴在天。【六】十年閉戶云云、李頎の詩に、十年閉戶水滸。楚辭、屈原九歌に、哀吾生之無樂、幽獨處乎山中。【七】塌來、去ると來ると、司馬相如の大人賦に、回車塌來。東坡後漢の和帝紀に、永元十三年、中

惟吾與子猶傍徨。世人共棄君獨厚。豈敢自愛恐子傷。朝來告別驚何速。歸意已逐征鴻翔。匡廬先生古君子。挂冠兩紀鬢未蒼。定將文度置膝上。喜動鄰里烹豬羊。君歸爲我道姓字。幅巾他日容登堂。

惟吾と子と猶ほ傍徨す。世人は共に棄て君獨厚し、一とを恐る。豈敢て自ら愛せんや子の傷られんこと。朝來別を告げて驚く何ぞ速かなる、歸意已に逐ふ征鴻の翔るを。匡廬先生は古の君子、冠を掛けて兩紀鬢未だ蒼ならず。定ず文度を將て膝上に置き、喜んで鄰里を動かして豬羊を烹ん。君歸つて我が爲に姓字を道へ、幅巾他日堂に登るを容せし。

東坡、覽書林、問篇解云云。【一】弄丹墨、魏略に、董遇善左氏傳、作朱墨別異。韓退之の詩に、丹墨交橫揮。【二】孔融不肯下曹操、後漢の孔融傳に、見曹操雖許南者、數不能堪、故被辭稱名、多致乖忤。【三】輕張湯、漢の汲黯傳に、張湯以吏定律令爲廷尉、黯實責張湯於上前、憤怒罵曰、天下謂刀筆吏不可爲公卿、果然、必謂也。【四】尺箠、莊子の天下篇に、一尺之箠。韓退之の送張道士詩に、恨無一尺箠爲國管光裏。【五】口吻排擊、舊唐書に、比來人多口擊。【六】含風霜、淮南王著鴻烈書、自云、宇中皆挾風霜。【六】酒

狂、漢の蓋寬饒傳に、無多酌我、我起酒狂。【七】張籍、史記、滑稽傳に、淳于棼曰、履屐交錯、杯盤狼藉、當此之時、能飲一石。【八】履屐、時に履屐俱備、履舞優優。【九】供子場、李太白の短歌行に、天公見玉女、大笑億千場。【一〇】翩翩、史記、平原君傳に、翩翩國世之佳公子。【一一】世人共棄云云、漢の賈誼傳に、自主樂觀時變、故人棄我取、人取我予。杜子美の詩に、能飲已併人共棄。【一二】恐子傷、韓退之の文に、不敢自愛、惟生之無益而有傷也。【一三】驚何速、驚の字、一本今に作る。【一四】

【題義】此詩は、東坡が、將に京を出でんとする時、すなはち、神宗の熙寧四年の作である。是より先、英宗の治平中、司馬光命を奉じて通鑑を編次し、劉道原を辟して局僚とした。新法を不可とし、面折して王安石に怒らる。道原、親老いたるを以て南康軍に歸觀せんことを求め、東坡に過つて別を言ふ。東坡因つて此詩を贈る。此詩、端を介甫の爲に發す。其の孔融不背下曹操、汲黯本是輕張湯、といふは、孔融、汲黯を道原に比し、曹操、張湯を介甫に況べたのである。其の雖無尺箠與三寸刃、口吻排擊含風霜、は、其の面折の實を著はしたのである。

【詩意】晏嬰は身の長六尺に満たないが、其の高節は、萬仞（八尺を仞といふ）で、伯夷の首陽山をも凌ぐ。（凌はこえる）之と同じく青衫白髮の書生も高く持して自ら歎息しない。一體、富貴は天の定むる所、人力の及ぶ所でないから、決して心迫るべきでない。かくて劉道原は十年戸を閉ぢて世の交りを超ち、百金書を購ひて散亡せるものを收める。東觀に出入して篇籍を閱みし、朱墨を弄して異同を分つ。そして舊史を借りて姦強を誅する。（英宗の治平三年四月、司馬光奏す、劉恕史學爲衆所推、望差同修通鑑と。恕の著す所の史書は、詳に宋史に載す。）孔融は肯て曹操に下らなかつた。汲黯

は、本是れ張湯を輕んじた。道原も之に類する。尺箠（箠は馬策）も寸刃も用ひないが、口先だけで排擊し、而も風霜の嚴しきを含む。（修史の事を借りて以て介甫を詆る。）自ら言ふ、靜に世俗を閱する、酒を飲まないで、酒狂のものを觀るに似て居る。酒狂の人は衣巾狼藉（紛亂の意）して又屢立つて舞ふ。傍人も大に笑つて賑やかである。既にして交朋も翻顔として去り、惟吾と子と猶は徘徊して居る。（宋史本紀に據るに、熙寧二年六月、御史中丞呂誨罷められ、鄧州に知たり。八月、侍御史劉琦貶せられて、處州の鹽酒務を監す。御史裏行錢顛貶せられて、衢州鹽稅を監す。同知諫院范純仁、河中府に知たり。侍御史劉述貶せられて、江州に知たり。十月、同中書門下平章事富弼、罷められて亳州に判たり。三年正月、判尙書省張方平罷められて、陳州に知たり。三月、右正言孫覺貶せられて、廣德軍に知たり。四月、御史中丞呂公著貶せられて、穎州に知たり。參知政事趙鼎罷められて、杭州に知たり。右正言李常貶せられて、涇州に通判たり。九月、翰林學士司馬光罷められて、永興軍に知たり。四年六月、歐陽修、太子少師を以て致仕す。富弼、青苗法を格するに坐して徙されて汝州に判たり。以上二句は此を指す。）世人は共に棄て、君だけが厚い。我は豈、敢て自ら愛せんや、君の傷られんことを恐れる。今朝來つて別を告げらる、如何にも其の速なるに驚いた。歸意は既に旅雁の翔けるを逐ひ、官を棄て廬山の南に歸る。（廬は廬山の別名、周の威王の時、匡裕といへるもの、此山に廬したからいふ。）匡廬先生（ここは劉渙を指す）は古の君子、冠を掛け、引退してから二十四年、鬢は未だ蒼白とならない。必ず其の愛子文度を膝上に置いて、喜んで鄰里のものと猪羊を煮て宴を開

くことであらう。君歸つたら、我が爲に姓字を傳へ、他日、我の隱者の衣を著け（世間の禮法に拘はらない）參堂することを容されよ。

出都來陳所乘船上有題小詩八首不知何人

有感於余心者聊爲和之

都を出でて陳に來る、乘る所の船上に、小詩八首を題するあり、何人なるかを知らず、余が心に感ずるものあり、聊か爲に之を和す

蛙鳴青草泊、蟬噪垂楊浦。蛙は鳴く青草の泊、蟬は噪ぐ垂楊の浦。

吾行亦偶然、及此新過雨。吾が行も亦偶然、此に及んで新に過雨。

【字解】〔一〕陳、春秋時代の陳國、漢の淮陽國、隋は陳州を置く、清は府となし、河南に屬す。今の淮陽縣は其の舊治。〔二〕泊、説文に、泊、止舟也。浦、海邊を浦といふ。一説に浦は外より流れ入る川を受けたる處をいへば、説文に水濱と註せるは粗なりと。〔三〕偶然、列子に、范氏之黨、以爲偶然、後漢、劉昆傳に、偶然耳。〔四〕過雨、陸龜蒙の詩に、古岸過新雨、高齋盡雨波。

【題義】熙寧四年七月、東坡は都を出でて、陳州府に赴く、此詩は舟中の作である。以下皆同じ。

【詩意】蛙は青草の泊に鳴き、蟬は垂楊の浦に噪ぐ。我が旅行も、亦思ひがけないことである。（紀昀いふ、亦字、承上二句。）此に來て新に雨が過ぎた。

鳥樂忘置學、魚樂忘釣餌。鳥樂んで置學を忘れ、魚樂んで釣餌を忘る。

何必擇所安、滔滔天下是。何ぞ必ずしも安んずる所を擇ばん、滔滔として天下是なり。

【字解】〔一〕鳥樂、左傳、襄公十八年に、鳥鳥之樂樂。〔二〕置學、獸を捕へるアミ、禮記、月令に、田獵置罟。罟は學に通ず。〔三〕忘釣餌、莊子、鼓腹舞、釣餌猶習智等之知多、則魚亂於水矣。〔四〕滔滔天下是、滔滔は世の風潮を追ひて行く貌。論語、微子篇に、滔滔者、天下皆是也。

【詩意】鳥は樂んで置學を忘れ、魚は樂んで釣餌を忘れる。何ぞ必ずしも安んずる所を擇ばうぞ（莊子人間世篇に、事其親者、不擇地而安之、孝之至也、事其君者、不擇事而安之、忠之至也。）滔滔として天下皆然り。

煙火動村落、晨光尙熹微。煙火村落を動かし、晨光尙ほ熹微。

田園處處好、淵明胡不歸。田園處處好し、淵明胡ぞ歸らざる。

【字解】〔一〕煙火、人體に同じ、飯を炊ぐ煙、史記、律書に、鳴鑼吠狗、煙火萬里、可謂和樂者乎。〔二〕晨光尙熹微、晨光は朝日の光、熹微は太陽の光がかすかなるをいふ。陶淵明、歸去來の辭に、恨晨光之熹微。〔三〕胡不歸、陶淵明が歸去來の辭に、歸去來兮、田園將蕪、胡不歸。

【詩意】煙火が立ちて村落が賑かとなり、朝日の光が尙ほかすかに映つて居る。田園處處に好し、其の田園が久しく打ち棄てらる。胡ぞ陶淵明の如く歸らざる。

我行無疾徐。輕楫信溶漾。

我が行疾徐なく、輕楫信に溶漾。

【字解】

【字解】「無疾徐」史記項羽紀に、徐行則免、疾行則及禍。【輕楫】梁、簡文帝の詩に、浮香染輕楫。【溶漾】ただよふ、同じく東坡の詩に、孤帆信溶漾。弄此牛黃碧。【開】說文に、開、開門曰開。江淮之間作「開」以制水、而時故決之。【寒波】文選、邱遲の詩に、漸漸寒波漲。

【詩意】我が旅行は、別に急ぎもしなければ、緩くもしない。輕い楫でまことにゆらゆらただだよ。船が留ると、村市が賑かになり、水門が發くと、寒波が一杯になる。

舟人苦炎熱。宿此喬木灣。

舟人炎熱を苦み、此の喬木の灣に宿す。

清月未及上。黑雲如頹山。

清月未だ上るに及ばず、黑雲頹るる山の如し。

【字解】「苦炎熱」唐、柳公權傳に、文宗曰、人皆苦炎熱、我愛夏日長。【黑雲】後漢書の杜篤傳に、屯黑雲。【頹山】後漢光武紀に、王莽邑營中、晝有雲如頹山、當營而阻。庾信の詩に、頹山起怪雲。歐陽文忠公の詩に、夕雲若頹山。夜雨如決渠。詩人常用の字面である。

【詩意】舟中の人は炎熱に堪へられないで、此の喬木の茂つて居る灣に宿する。空を仰ぐと清月がまだ上らないうちに、黑雲は頹れる山のやうであつた。

萬竅號地籟。衝風散天池。

萬竅地籟號び、衝風天池を散す。

喧呖瞬息間。還挂斗與箕。

喧呖瞬息の間、還た挂く斗と箕とを。

【字解】「萬竅」萬木の穴、莊子、齊物論に、大塊噫氣、其名為風、是唯無作、作則萬竅怒號。【地籟】地籟は聲の出づる所。齊物論に、地籟、則衆竅是已。【衝風】楚辭、屈原九歌に、衝風起兮水揚波。漢、韓安國の傳に、衝風之喪、不絶而起。【毛羽】天池、莊子逍遙遊篇に、南溟者、天池也。【喧呖】かまびすしく相擊つ。李太白の蜀道難に、飛湍瀑流爭喧呖。【瞬息】王僧孺の文に、瞬息不留。【斗與箕】斗は南北にある星の名、南斗と北斗。今は南斗をいふ、二十八宿の一。箕も二十八宿の一、風を好む星、春秋緯に、月屬箕、風揚沙。

【詩意】萬木の穴に、風が吹き號び、其の衝風は天池を散らさんばかりである。風の喧すしく相擊つ聲も、瞬く間に息んで、空はまた晴れわたつて、南斗星や箕星などが見える。併し、箕星は風を好む星である。

頽水非漢水。亦作蒲萄綠。

頽水は漢水にあらざるも、亦蒲萄の綠を作す。

恨無襄陽兒。令唱銅鞮曲。

恨らくは襄陽の兒、銅鞮の曲を唱へしむるなきを。

【字解】「頽水」名勝志に、頽水在陳州南五十里。【漢水】東漢水といふ、江に入る大川。初の名は漾水、河水となり、沮水を受け、東流して始めて漢水となる。【蒲萄綠】李太白の襄陽歌に、遙看漢水鴨頭綠、恰似蒲萄初釀醋。【襄陽兒】齊書、山簡傳に、鎮襄陽、襄陽有童兒歌曰、山公出何許、往至高陽池。

【詩意】頽水は漢水でないが、やはり蒲萄の綠色をなして流れて居る。李太白は漢水の鴨頭綠色で蒲

古今體詩 出都來陳州上有題小詩八首和之

葡萄酒を醸して未だ澆さぬ時のやうであると言つたが、頰水の色も其の通りである。して見ると、襄陽の小兒が争うて唱へた漢水白銅鑊の曲を此處に聞かないのが残念である。

【餘論】古樂府にいふ、襄陽關銅鑊歌にいふ、梁武帝雍鎮に在るとき、童謡ありいふ、襄陽白銅鑊、反縛揚州兒（銅を金となし、鞵を馬となす。白は金の色である。）と。義師の起るに及び、實に鐵騎を以てし、揚州の士、皆面縛すること諺言の如し。位に即くに及び、更に新聲を造つて帝自ら三曲となすといふ。

我詩雖云拙、心平聲韻和。

我が詩拙といふと雖も、心平かなれば聲韻和す。

年來煩惱盡、古井無由波。

年來煩惱盡き、古井由つて波するなし。

【字解】【一】心平聲韻和 左傳、昭公二十二年に、晏子曰、聲亦如味也、君子聽之、以平其心、心平德和、故詩曰、德音不暇、【二】煩惱 人生の煩ばしく惱ましきことの泛稱。圓覺經に、斷除一切煩惱障蔽。【三】無由波、孟郊の詩に、妾心古井水、波瀾難不起。白樂天の詩に、無波古井水、有節秋竹竿。

【詩意】我が詩は拙いけれども、心が平かであるときは、聲韻も和する。年來の人生に於ける煩惱も除かれて、古い井戸水の波が起らないやうである。

次韻張安道讀杜詩

張安道杜詩を讀むに次韻す

大雅初微缺、流風困暴豪。

大雅初より微缺、流風暴豪を困しむ。

張爲詞客賦、變作楚臣騷。

張りて詞客の賦となり、變じて楚臣の騷と作る。

展轉更崩壞、紛綸閔俊髦。

展轉更に崩壞、紛綸俊髦を閔す。

地偏蕃怪產、源失亂狂濤。

地偏にして怪産蕃く、源失つて狂濤亂る。

粉黛迷眞色、魚蝦易參牢。

粉黛は眞色を迷はし、魚蝦は參牢を易る。

誰知杜陵傑、名與謫仙高。

誰か知らん杜陵の傑、名は謫仙と高きを。

掃地收千軌、爭標看兩艘。

地を掃うて千軌を收め、標を争うて兩艘を看る。

詩人例窮苦、天意遣奔逃。

詩人は例として窮苦、天意遣奔逃せしむ。

塵暗人亡鹿、溟翻帝斬鼈。

塵暗人鹿を亡し、溟翻帝鼈を斬る。

艱危思李牧、迹作謝王褒。

艱危李牧を思ひ、迹作王褒を謝す。

失意各千里、哀鳴聞九臯。

失意各千里、哀鳴九臯に聞ゆ。

騎鯨遁滄海、捋虎得綈袍。

鯨に騎りて滄海に遁れ、虎を捋して綈袍を得。

巨筆屠龍手、微官馬曹似。

巨筆屠龍の手、微官馬曹に似たり。

迂疎無事業、醉飽死遊遨。

迂疎にして事業なく、醉飽遊遨に死す。

簡牘儀型在兒童篆刻勞
今誰主文字公合抱旌旄
開卷遙相憶知音兩不遭
般斤思郢質鯤化陋條濠
恨我無佳句時蒙致白醪
殷勤理黃菊未遺沒蓬蒿

簡牘儀型あり、兒童篆刻勞す。
今誰か文字を主る、公合に旌旄を抱くべし。
卷を開いて遙に相憶ふ、知音兩ながら遭はず。
般斤郢質を思ふ、鯤化して條濠を陋とす。
恨らくは我佳句なし、時に白醪を致すを蒙る。
殷勤黃菊を理め、未だ蓬蒿に沒せしめず。

【字解】【一】大雅 詩の一體、李太白の古風に、大雅久不作、吾衰竟誰陳、正聲何微茫、哀怨起廢人。【二】微缺 讀書、董仲舒傳に、王道微缺。【三】暴秦 史記、游俠傳に、暴秦之徒。【四】楚區 屈原が離騷をいふ。【五】展轉 展は轉に作る。詩經、周南に、悠悠然哉、輾轉反側。【六】紛紜 衆多なる貌、班固の東都賦に、方軌並進紛紜后辟。【七】僕也 衆に秀でた人。爾雅の註に、士中之俊稱、毛中之髦。【八】紛紜 杜子美が玉華宮の時に、況乃紛紜。【九】樂半 樂は殷物にて何よ家奇、牛羊豕を太牢といひ、羊を小牢といふ。【一〇】杜陵 杜子美の表に、臣本杜陵賸生。【一一】名與 詞仙、高 舊唐書に、賀知章、李白を見、之を賞して曰く、子天上謫仙人也。唐杜市傳に、少與李白齊名、時稱李杜。【一二】地收 千載、韓退之の集に、柳地亦立。後漢書、杜密傳に、劉勝自蜀郡歸鄉里、閉門掃軌、無所干及。【一三】學標 唐、盧象昇が韓退之の詩に、向道是龍人不信、果然奪得錦標歸。【一四】詩人例 昔、歐陽修の梅聖俞詩序に、詩人少進而多窮。【一五】人亡 漢の劇通傳に、秦失其鹿、天下共逐之。【一六】斬龍 列子湯問篇に、昔者、女媧氏鍊五色石、以補其缺、斷龍之足、以立四極。【一七】思 李牧 漢、馮唐傳に、文帝曰、嗟乎、吾獨不得廉頗、李牧、爲將、豈憂匈奴哉。【一八】王 前漢書に、益州刺史、襄有、魏村、上乃徵、爲郡主得、賈臣、頌云云。【一九】失宜 樂府に、失意杯酒間、白刃起相讎。【二〇】九車 幾車もある深い潭。詩小

雅に、鶴鳴九皋、聲聞于天。【二一】簡牘 杜子美が送孔巢父詩に、巢父掉頭不肯住、東將入海隨漁釣。又、若逢李白騎鯨魚、道市問信今何如。【二二】滄海 東方朔十洲記に、滄海島在北海中、水皆青色、仙人謂之滄海。【二三】持虎 杜甫傳に、嚴武舉、日久之曰、杜春言持虎。【二四】得錦標 史記、范雎傳に、魏使須賈於秦、范雎爲、微行、敝衣間步之、歸見賈、賈驚曰、范叔一寒如此、乃取一錦袍賜之、雎爲買御衣、乘府、門下曰、乃吾相張君也云云。【二五】展轉 莊子、列禦寇篇に、朱泚漫學、屠龍於支離益、單千金之家、三年技成、而無所用、其巧。【二六】馬曹 晉書、王徽之傳に、爲桓沖騎兵參軍、沖問卿署何曹、曰、似是馬曹、馬祖常の時に、笑我官曹似馬曹。【二七】死遊遊 莊子、列禦寇篇に、無能者、無所求、食而遊遊。【二八】簡牘儀型在 簡牘は文章を記す竹札と木札。左傳、杜預の序に、大事書之於策、小事簡牘而已。詩の大雅、文王に、儀刑文王、萬邦作孚。【二九】兒童篆刻勞 揚子に、離騷家刻壯夫不爲。【三〇】抱旌旄 韓退之の詩に、文字銳氣在、輝輝見旌旄。【三一】開卷遙相憶 陶淵明の文に、開卷有得、便欣然忘食。【三二】知音兩不遭 文選、古詩に、但傷知音稀。魏文帝が吳質に與ふる書に、痛知昔之難遇。【三三】般斤思郢質 揚子般の揮斤。莊子、徐無鬼篇に、郢人堊、漫其鼻端、若蠅翼、使匠石斲之、匠石運斤成風、聽而斲之、盡、堊而鼻不傷、郢人立不失容云云。其の容を動かさざる郢人の如くてなければ、匠石も、其の妙技を奏するを得ないであらう。【三四】鯤化陋條濠 莊子逍遙遊篇に、北溟有魚、其名爲鯢、化而爲鳥、其名爲鵬。秋水篇に、莊子與惠子游於濠梁之上。莊子曰、儻魚出遊從容、是魚樂也。【三五】致白醪 白樂天の詩に、白醪充夜酌。【三六】沒蓬蒿 高士傳に、張仲舒嘗居窮素、所處蓬蒿沒人。

古今體詩 次韻張安道讀杜詩

袍、憂國論時事、司功去諫曹、七哀同谷寓、一曲錦川遊、妻子飢寒累、朝廷戰伐勞、倦遊徒右席、樂善多干施、萬里歸無路、危城至輒遭、行吟悲楚澤、遠觀念莊濠、逸思乘秋水、愁腸困濁醪、來陽三尺土、誰爲剪蓬蒿である。

【詩意】大雅が久しく作らず、正聲も微茫となり、流風は、暴蒙に苦しむやうになつた。此の衰頹を更張したのが詞客の賦である。(荀子に見ゆる雲霓等の賦を始めとし、文選に載する所の兩都の賦や二京の賦も、皆、詞客の爲つたものである。賦は古詩の流であるが、今の作者の所謂古詩は、全く賦の名を取り、而も源流が實に繁い。尋で屈原が退けられて離騷經を作り、初めて騷といふ名が生じた。展轉して更に崩れもし壞れもして、幾多の俊秀の人を見る。凡そ地は偏鄙の爲に怪産が多く、又、源が失つて狂濤が亂れる。故に粉黛の外飾は異色を迷はすことになる。古語に瘦狗(狂犬)は象牢の主に吠ゆとあるが、判断を誤ると、魚蝦は象牢を易つて、物の輕重が失はれる。(首句より此に至る、太白古風第一首意に仿うて總起を作す、下四句は、李を以て杜に陪し、李杜並論す)誰か識らん、杜陵の傑、杜子美が出て、盛名、顧仙人(李白)とともに高くなつたことを(李杜と並び稱するも、詩、名を並ぶべく、人、名を齊うするのではない)掃地收千軌、爭標看兩艘とは、杜甫が已に諸家の長を兼ね、獨、太白と相抗するを言つたものである。詩人は窮苦するのが普通である。(詩人例窮苦、例の字は、太白を總束し、卻て是れ太白を放去す。下句の天意は、乃ち杜甫の事に入る。)それは天意が詩人を奔逃せしめ、詩才を暢達せしめるからである。塵暗うして人鹿を失ひ、天下共に之を逐ふ時代、

杜甫は賊中に陥らうとした。深翻して帝、龍を斬るとは、肅宗が安祿山、史思明を誅して唐室を再造したことをいふ。艱危思李牧、述作謝王褒は、兵亂の時に遭値して、武を尙び、文を輕んずるをいふ。失意で各遠く離れ、哀鳴は九阜に聞える。(甫が白流三夜郎諸詩を聞くをいふ)我は既に劍南に流落する。これから鯨に騎つて、滄海島に逃れようと思ふ。虎を搏する危きを犯しても滄海島で故人に逢はば緋袍を得る譯である。(緋袍懸懸有故人之意は、范曄の言である)技成りても、其の巧を用ゐる所がなければ、龍を屠るの術と異らない。微官であるから、其の舍も馬曹に似て居る。昔、王子猷は桓沖の騎兵參軍となつた。沖問うて曰く、卿は何の署ぞ。答へて曰く、何の署たるかを知らない。時に牽馬の來るを見る。是れ馬曹に似たりと言つたさうである。不遇の詩人、迂にして疎だから、別に成した事業もない。(杜甫を指し、下句に於て李白に進む)杜甫は醉飽して遊遊に死んだ。(唐書杜甫の傳に據るに、永泰元年、蜀中大に亂る。甫は扁舟、峽を下らうとしたが、未だ舟を維がないうちに、江陵も亂れる。乃ち湘流に沿ひ、沂りて衡山に遊び、未陽に寓居す。甫は嘗て岳廟に遊び、暴水に阻まれ、旬日も食を得なかつた。未陽縣令之を知つて、自ら舟に權し甫を迎へて還る。永泰二年、牛肉と白酒とを嗜ひ、一夕にして卒んだ。王文誥いふ、醉指李、飽指杜、非專言白酒牛肉、諸註皆失之と。)李杜文章在り、簡牘に見はれしもの刑るに足る。韓退之は嘗て不知羣兒愚、何用故誘傷と言つたが、兒童は徒に雕蟲(文を作るに、字句を鑠飾するをいふ)を勞する。今、文字を主るものは誰か、公(張安道を指す)は、文章界の旌旆を抱いへ居る。卷を開いて遙に相憶ふも、知音は遺ひ難い。揚子般の斤

を揮ふにも、郢人の質を思ふ。(張安道が杜詩を讀んで詩を作るをいふ) 醜化する、鱸魚の出遊する濠を晒とする。杜子美が韋左丞に贈る詩に、狼顧佳句新と言つたが、恨むらくは我に佳句はない。時に白膠を送らる。戲動に黃菊を理めて蓬蒿に没せしめない。(西京雜記に、菊花舒ぶる時、莖葉を并せ採り、黍米を雜へ、之を釀し、來年九月九日に至り、始めて熱し、就きて飲む、故に之を菊花酒といふ。)

送張安道赴南都留臺

張安道が南都留臺に赴くを送る

我公古仙伯、超然羨門姿。

我公は古の仙伯、超然羨門の姿、

偶懷濟物志、遂爲世所縻。

偶濟物の志を懷き、遂に世の爲に縻がる。

黃龍遊帝郊、簫韶鳳來儀。

黃龍帝郊に遊び、簫韶鳳來儀す。

終然反溟極、豈復安籠池。

終然溟極に反る、豈復籠池に安んせんや。

出入四十年、憂患未嘗辭。

出入四十年、憂患未だ嘗て辭せず。

一言有歸意、閣府諫莫移。

一言歸意あり、閣府諫むれども移すなし。

吾君信英睿、搜士及蒞茨。

吾君信に英睿、士を搜りて蒞茨に及ぶ。

無人長者側、何以安子思。

長者の側に人なくば、何を以て子思を安んせん。

歸來掃一室、虛白以自怡。

歸り來りて一室を掃ふ、虛白以て自ら怡ぶ。

游於物之初、世俗安得知。

物の初に遊ぶ、世俗安んぞ知るを得ん。

我亦世味薄、因循鬢生絲。

我亦世味薄く、因循鬢絲を生ず。

出處良細事、從公當有時。

出處良に細事、公に従ふ當に時あるべし。

【字解】【一】張安道、張文定公、名は方平、字は安道。【二】留臺、晉書に、張方劫、惠帝、幸長安、使射荀藩等在洛陽爲留臺、承制行事。留臺の名は此に始まる。【三】仙伯、杜子美の詩に、諸公乃仙伯、杖藜長松陰。集仙錄に、紫陽左公太極仙伯。【四】羨門、名は子高、古の仙人。前漢、郊祀志に、始皇東游、海上求仙人羨門之屬。【五】濟物、文選、謝靈運が述祖德詩に、抱濟物性而不離垢氛。【六】爲世所縻、周易に、我有好爵、吾與爾縻之。【七】黃龍遊帝郊、揚雄傳に、鳳凰巢其樹、黃龍游其沼。瑞應圖に、黃龍居四龍之長、舜東巡狩、黃龍負圖置舜前。【八】簫韶鳳來儀、舜の樂名、書經、益履に簫韶九成、鳳皇來儀。九成は九たび樂を奏すること。【九】安籠池、文選、潘安仁の秋興賦に、管籥池魚籠鳥而有江湖之思。【一〇】閣府云云、漢の製方造が傳に、閣府三百餘人、惟君使擇其中、與畫節轉凶。【一一】英睿、晉書、李嵩傳贊に、武昭英睿。【一二】及蒞茨、易、泰卦に、拔茅連茹。【一三】掃一室、後漢書に、陳蕃嘗閑一室、而庭宇無掃。薛勳謂蕃曰、子何不灑掃以待賓客。蕃曰、大丈夫當掃天下、安事一室乎。【一四】虛白以自怡、莊子、人間世篇に、虛室生白、吉祥止止。【一五】游於物之初、莊子、田子方篇に、老聃曰、吾游於物之初。【一六】世俗安得知、晉、王獻之傳に、謝安問、君書何如君家尊、答曰、故當不同、安曰、外論不爾、答曰、外人那得知。【一七】世味薄云云、韓退之が示與詩に、我老世味薄、因循致留臺。白樂天の詩に、須臾盡生結。【一八】出處、周易に、或出或處。孟東野が百憂の詩に、出處各有時。【一九】細事、漢、黃霸傳に、爲縣秩於京側、非細事也。

【題義】此詩は熙寧四年八月の作である。安道は王安石新法の害を論じ、深言危語を用ひて少しも屈

しなかつた。陳州に知たる時、監司は、皆新進で、時に趨り利を興すもののみ。安道曰く、吾は衰へたり、人に事ふる能はず。歸つて吾が志を全うせんと、南都留臺を力請して歸つた。故に詩中にいふ、一言有三歸意云云と。

【詩意】我が公(張安道を指す)は、古の仙伯であつて、超然として仙人義門の姿を具へて居る。達人は自我を貴び、高情天雲に屬するも、偶物を濟ふの志を懷いて遂に世に塵がれた。黃龍が帝郊に遊び、蕭韶の樂が奏され、鳳凰が來儀するも、終に溟溟の窮極に反る。豈また龍池に安んじようぞ。出入する四十年、毫も憂患を辭しなかつた。一言歸意があつて南都留臺を力請した。閩府の官屬は陳めたけれども公の意を翻すことは出来なかつた。吾君は信に英睿におはし、士を搜めて芴茨(微賤の意)に及ぶ。昔の繆公は子思の側に人がなく己の誠意を通ずることが出来なければ、子思を安んじて留め置くこと能はずと言つたが、吾が君もさやうである。歸り來つて一室を掃ひ、虛白以て自ら怡ぶ。かの密室をみるに、空峽の處は、必ず日光があつて之を射る。心も亦室と同じく、虛一にして物我なければ必ず明を生ずる。吉祥の集る所は、至虛至靜の處である。萬物の初に遊ぶ此の境は、世俗の人那ぞ知るを得ようぞ。我(東坡)も亦世味に薄い。因循として留連を致して鬢も絲を生じた。或は出で或は處るはまことに細事、何時か當に公に従ふ期があるであらう。(熙寧四年、東坡、將に杭州に赴かんとす。張安道に乞うて南都留臺を得た。安道が東坡を送る句に、最好乘船遊禪扉。東坡の安道を送る時に、無人長者側、何以安子思。安道の賢、朝廷當に堅く留むべきを比したのである。)

傅堯俞濟源草堂

傅堯俞が濟源草堂

微官共有田園興

微官共に田園の興あり

老罷方尋隱退慮

老い罷んで方に尋ね隱退の慮

栽種成陰十年事

栽種陰を成す十年の事

倉皇求買百金無

倉皇として買はんと求むるも百金なし

先生卜築臨清濟

先生卜築清濟に臨み

喬木如今似畫圖

喬木如今畫圖に似たり

鄰里亦知偏愛竹

鄰里も亦偏に竹を愛するを知り

春來相與護龍雛

春來相與に龍雛を護す

【字解】(一)傅堯俞、字は欽之、五州濟源縣の人。(二)濟源草堂、名勝志に、濟源草堂在濟源關西宋知河陽軍傅堯俞建、俗呼其遺址爲傅家林。(三)微官、文選、歐陽堅石の詩に、吾余沖且賤、抱負守微官。(四)老罷、杜子美が檢書詩に、老罷知明鏡、悲來望白雲。(五)十年事、管子に一年之計、莫如樹木、十年之計、莫如樹人。(六)倉皇求買、倉皇は急遽の貌、白樂天の閑忙詩に、倉皇日下山。求の字、一本、欽に作る。南史、呂僧珍傳に、宋季雅市宅、僧珍問宅價曰、一千一百萬、怪其貴、季雅曰、一百萬買宅、一千萬買鄰。(七)似畫圖、杜子美が反照の詩に、秋岸如秋水、松門似畫圖。(八)龍雛、俗間、物を謂つて龍孫となす。盧仝の詩に、竹林吾最情、新笋好看守、萬籜包龍兒、攢迸從林叢。

【題義】哲宗の元祐元年、傅堯俞は朱光庭や王巖叟と力を合せて東坡を攻め、誣ふるに誘勸を以てした。是より端を開いて黨禍を構成したのである。其の傅堯俞の別業を東坡が詠じたのである。

【詩意】微官を守つて居たが、而も共に田園の興味を有する。それで年も老いたから、隱退の慮を尋

ねる。十年の計は、之を樹うるに木を以てするといふ古語もあるから、倉皇として栽種を求めようとするも、なかなか金がない。洞天福地記に、濟瀆源出三王屋山、名沈水、係清源王所理とあるが、先生の卜築は其の清濟に臨んで居る。喬木は、今も畫圖のやうである。宅を卜するには、鄰を選ぶ。鄰里も亦、偏に竹を愛するを知つて、春來、相與に、龍(籬)を護する。因にいふ、竹を愛するは辛仲宣で、多く竹を植ゑ、竹を截つて鬘を爲る。人が其の故を問ふと、仲宣曰く、我性は竹を愛し、酒を好む、此二物をして相並ばしめんと欲するのみと。

陸龍圖詠挽詞

陸龍圖詠の挽詞

挺然直節庇峨岷。挺然たる直節峨岷を庇ふ、謀道從來不計身。道を謀りて從來身を計らず。屬隸家無十金産。屬隸のとき家に十金の産なし、過車巷哭六州民。過車巷に哭す六州の民。塵埃葦寺三年別。塵埃葦寺三年の別、樽俎岐陽一夢新。樽俎岐陽一夢新なり。他日思賢見遺像。他日思賢に遺像を見れば、

【字解】〔一〕陸龍圖、字は介夫、餘杭の人。龍圖閣直學士を以て成都府に知たり。〔二〕挺然、衆にけき出る、晉書、劉毅傳に、方正亮直、巖然不羣。〔三〕峨岷、晉書、謝安之詩に、屹起高峨岷。〔四〕屬隸、屬隸の類をいふ。禮記、喪大記に、屬隸以俛絕氣。註にいふ、屬、即今之新羅、易動、置口鼻之上、以爲俛。〔五〕十金産、漢、揚雄傳に、家産不過十金、乏無儋石之儲、安

不論宿草更沾巾

宿草を論せず更に巾を沾さん。

如也。〔一〕過車巷哭、後漢、蔡邕傳に、喪還、光武幸城門、過其車

【七】六州、李義山の詩に、漢後猶復六州兒。【八】樽俎、樽は酒を食き、俎は牲を載する、晏子春秋に、不出樽俎之間、而折衝千里之外。【九】思賢、成都に思賢閣あり、諸公の像を畫く。【一〇】宿草、禮に朋友之墓、有宿草而不哭焉。【一一】更沾、巾、杜子美の詩に、爲爾一沾巾。

【題義】熙寧三年八月、龍圖閣直學士知成都府陸詠が卒んだ。此詩は其の挽詞(葬を送る詞)である。宋史職官志に據ると、龍圖閣には學士・直學士・待制・直閣等の員がある。凡そ此等の職を帯ぶるものは、例として龍圖と呼ぶ。

【詩意】挺然として抜き出づる陸詠の直節は、峨山岷山を庇ふ程であつた。そして常に道の爲に謀つて其身のことを謀らない。臨終の時に見るも、家に十金の資産もなかつたのは、清貧といふべきである。昔、晉の羊祜が卒んだとき、南州の民は、羊祜の喪を聞いて號慟せざるなく、市を罷めて巷哭したものが、聲相接いだといふことである。陸龍圖の喪にも、六州の民が巷に哭したのは、其の徳が感せしめたのである。塵埃葦寺、三年の別とは、東坡と介夫と京師に相別れたことを言つたのである。樽俎岐陽一夢新とは、二人が復、鳳翔に會したことを言つたのである。(唐、地理志に、鳳翔府、貞觀七年置岐陽縣。)他日、成都の思賢閣に遺像を見れば、よし、古禮に、朋友の墓に宿草あれば哭せずとも、余は爾の爲に巾を沾すであらう。

胡完夫母周夫人挽詞 胡完夫の母周夫人の挽詞

柏舟高節冠鄉鄰 柏舟高節郷鄰に冠たり、

絳帳清風聳縉紳 絳帳清風縉紳に聳ゆ。

豈似凡人但慈母 豈凡人の但慈母の似からんや、

能令孝子作忠臣 能く孝子をして忠臣とならしむ。

當年織屨隨方進 當年屨を織りて方進に隨ひ、

晚節稱觴見伯仁 晚節觴を稱げて伯仁を見る。

回首悲涼便陳迹 首を回せば悲涼便ち陳迹、

凱風吹盡棘成薪 凱風吹き盡して棘薪を成す。

【字解】 胡完夫 宋の胡宗

愈字は完夫、神宗の時、累遷して同知樞密院に至る。王安石に忤ひ、出でて冀州に列たり。柏舟 詩經の柏舟の詩は、共姜が自ら誓つたものである。縉の世子共伯蚤く死し、其の妻、義を守る。父母孝つて之を歸せんと欲したが、嘗つて許さなかつた。縉 赤いとばり、晉、列女傳に韋逞母宋氏、父殺し周官晉義、逞仕存堅、爲太常、擊警幸太

學、同博士經典、時博士盧安日、惟周官禮註未有其師、自非此母、無可傳授後生、於是就宋氏家立講堂、隔紗帳受業。慈母 史記、李斯傳に、韓子曰、慈母有敗子、嚴家無格虜。孝子作忠臣 南史劉敬宣、八歲喪母、晝夜號泣、履序謂其父字之曰、卿此兒非惟家之孝子、必爲國之忠臣、後漢、韋彪傳に、求忠臣、必於孝子之門。伯仁 周顛の字、母李氏のこと前にあり。悲涼 文選、謝靈運の詩に、道消結憤懣、運開申悲涼。陳迹 莊子、天運篇に、六經先王之陳迹也。王羲之が蘭亭序に、俯仰之間、已爲陳迹。

【題義】 胡完夫の母周夫人の葬を送る詞である。夫人は嫡でないから、題は係るに子を以てし、胡完

夫母とした譯である。

【詩意】 夫が亡つた後、堅く義を守つて嫁しなかつた周夫人の高節は、郷鄰に冠たるものである。又、古の宋氏が、赤い帳を隔てて經典を講じたと同じやうな周夫人の清風も、當時の公卿の間に高く聳えて居る。故にただ尋常の慈母といふに留まらない。よく孝子（胡完夫を指す）をして忠臣たらしめた。昔、漢の翟方進は、少年の時、西の方、京師に至りて經を受けんと欲した。母は其の幼い身の上を憐んで、隨つて長安に之き、屨を織りて自ら給したが、周夫人が庭訓も、之と異らない。さて此詩に晩年、觴を舉げて伯仁を見ろといふのは、周顛の母李氏の事を引いて周夫人に比したのである。晉、列女傳に、周顛の母李氏の事を記して、中興の時、顛等並に顯位に列す。嘗て冬至に酒を置く。絡秀（李氏の字）觴を舉げて三子に賜ひ、爾等並に貴くなつて、かやうに我目の前に列するからには、吾復、何をか憂へん云云と言つたが、周夫人の胡完夫に於けるも、亦同じである。首を回せば、悲涼も亦陳迹となる。凱風吹いて棘薪を成す（詩經、凱風の章に、凱風自南、吹彼棘薪、母氏聖善、我無令一人）とある。これは上の二句は比で、下の二句は賦である。暖かな南風が吹き來つて、小棗をも薪になるやうに成長させた。それと同じく、我等も母の慈悲によつてこのやうに成長したのである。我等が母はまことに、よい人で、智慧のある利口な方である。ただ我等が母親を慰めることが足りないのである。我無令一人は、我我どもの中には、よい人が一人もないといふ意である。凱風は衛國の親孝行ものを美めた詩であるが、ここは、主として周夫人について言つたのである。紀昀いふ、凱風用古説と。

次韻柳子玉過陳絕糧 二首 柳子玉の陳を過ぎ糧を絶つに次韻す 二首

風雨蕭蕭夜晦迷 風雨蕭蕭夜晦迷

不須鳴叫強知時 須ひず鳴叫強ひて時を知るを。

多才久被天公怪 多才久しく天公に怪まる。

關食惟應饜婦知 關食惟應に饜婦知るべし。

杜叟挽衣那及脛 杜叟衣を挽く那ぞ脛に及ばん、

顔公食粥敢言炊 顔公粥を食ふ敢て炊を言はん。

詩人情味真嘗徧 詩人の情味真に嘗むること徧く、

試問於今底處虧 試みに問ふ今底の處に虧くこと。

【字解】 風雨蕭蕭、鷓鴣不鳴。又いふ、風雨如晦、鷓鴣不鳴。【二】多才、晉書、陳機傳に、饜婦嘗謂之曰、人之爲文、常恨才少、而子更患其多。【三】天公怪、韓退之が雙鳥時に、天公怪雙鳥、各捉一處囚。天公は天帝といふに同じ、晉書の天文志に見ゆ。【四】那及脛、杜子美の詩に、黃獨無首山雪盛、短衣數挽不掩脛。黃獨は一名土芋、衣數挽不掩脛。黃獨は一名土芋、衣數挽不掩脛。黃獨は一名土芋、衣數挽不掩脛。

【題義】 柳子玉が壽春(戰國の時の楚邑、今の安徽、壽縣)に謫され、舟が宛邱を過ぎたとき、詩を子由に寄せたが、此の二詩も、亦、同時の作である。

【詩意】 詩經の風雨の詩は、君子を思ふのである。亂世に當り、君子があれば、斯くはなるまいと慕ふのである。風雨晦迷、騒しい中にも、鷓鴣は時を知つて鳴く。鷓鴣が互に呼びあつて聲と聲とがつれぶしになる。其の中でも、賢人君子は、さわがないで、道を樂しむ。嗚呼して無理に時に合はうとしな

い。多才であつたが、久しく天帝に恵まれない。糧を絶ち食を闕いて居るさまは、ただ饜婦(めしたき女)が知つて居るのみ。杜甫は短衣數、挽いて脛を掩はずと言つた。それは寓居のときを詠じたのである。顔真卿は、一家食に乏しく、粥を食ふ。詩人の情味は、真に嘗め盡したのである。試みに問ふ、今何處に虧乏して居らるると。

如我自觀猶可厭 我の如きは自ら觀る猶ほ厭ふべし、

非君誰復肯相尋 君にあらざれば誰か復肯て相尋ねん。

圖書跌宕悲年老 圖書跌宕年の老ゆるを悲しみ、

燈火青熒語夜深 燈火青熒夜の深さを語る。

早歲便懷齊物志 早歲便ち齊物の志を懷き、

微官敢有濟時心 微官敢て時を濟ふの心あり。

南行千里知何事 南行千里知る何事ぞ、

一聽秋濤萬鼓音 一たび聽く秋濤萬鼓の音。

子の齊物論をいふ。物論を齊うするといふ所論である。【一】濟時心、潘安仁が詩に、豈敢隨微官、自樂天が詩に、可憐濟時心力在。【二】秋濤萬鼓、高適の詩に、萬鼓雷殷地。

【詩意】我が如きは、自分でも愛想が盡きる。君でなければ、誰か復、肯て相尋ねて来られようぞ。圖書は放逸して年の老ゆるを悲しみ、燈の光は青く焚いて夜の深きを語る。早くから莊子が是非異なるも、彼己と均しうするといふ齊物の思想を懐いて居つた。そして微官であつても、敢て時を濟ふの心がある。南行千里、何事があつたかと省みると、萬鼓の音高い秋濤を聴くのみである。(鏡塘が潮候間に聲如雷鼓、猶不足以形容之とあり。文選、枚叔が七發に、將以三八月之望、觀濤乎廣陵之曲江、混混屯屯、聲如雷鼓とある。波濤を雷鼓に比するは、詩人の常用である。紀昀いふ、憤懣而出以和平、故但覺沈著而不露張怒と。)

穎州初別子由 二首

穎州に初て子由に別る 二首

征帆挂西風、別淚滴清潁。

征帆西風に挂く、別淚清潁に滴る。

留連知無益、惜此須臾景。

留連は益なきを知るも、此の須臾の景を惜む。

我生三度別、此別尤酸冷。

我が生三度の別、此の別尤も酸冷。

念子似先君、木訥剛且靜。

念ふ子先君に似たり、木訥剛且つ靜。

寡辭真吉人、介石乃機警。

寡辭真に吉人、介石乃ち機警。

至今天下士、去莫如子猛。

今に至るまで天下の士、去ること子の猛なるに如くは莫し。

嗟我久病狂、意行無坎井。

嗟我久しく狂を病む、意行坎井なし。

有如醉且墜、幸未傷輒醒。

酔ひ且つ墜つるが如きあり、幸に未だ傷かず輒ち醒む。

從今得閒暇、默坐消日永。

今より閒暇を得、默坐日の永きを消せん。

作詩解子憂、持用日三省。

詩を作り子の憂を解き、持し用つて日に三省す。

【字解】(一)穎州、元和郡縣志に、河南道潁州、漢汝南郡汝陰。 (二)征帆、挂、西風、孟東野の詩に、一帆天外風。 (三)清潁、元和郡縣志に、潁水自項城縣界入州。 (四)留連、淹留に同じ、北史、王僧暉に、詣晉朝、賦詩曰、日落應歸去、魚鳥見留連。 (五)須臾、少しの間、漢、賈山傳に、願少須臾毋死。楚辭に、聊假日以須臾。 (六)三度別、元微之が自樂天に別るる詩に、自誤、君來三度別。 (七)木訥、木は質樸、訥は遲鈍、論語子路篇に、剛毅木訥近仁。 (八)寡辭、云、易の寡辭に、吉人之辭、寡く、謙人之辭多し。晉書に、王獻之、與兄徽之、讓之、謝安、二兄多言俗事、獻之張暉而已、客、安に王氏兄弟の優劣を問ふ、安曰く、小者佳、吉人之辭少。 (九)介石、周易、豫の卦、六二の爻に、介石。 (一〇)機警、晉書顧和傳に、王導謂和曰、卿圭璋特達、機警有餘。 (一一)天下士、史記、魯仲連傳に、所食於天下之士者、爲人排患釋難、紛亂而無取也。 (一二)莫、如、子由、弟轍が制置條例司に在りて、檢詳文字に充てられ、新法を爭議して合はず、罷めんと欲ふ。弟轍が去るの勇決なるを喜び、亦、朝廷に新法の不便を諷するなり。 (一三)病狂、漢匈奴傳に、我病狂妄言耳。 (一四)意行無坎井、意行は、意に任せて進み行く、劉禹錫の雙子歌に、腰斧上高山、意行無舊路。史記、越世家に、范蠡曰く、君行、命、臣行、意。坎井は、漢、賈誼傳に、樂々流則逝、得坎則止。莊子秋水篇に、坳井之塵。柳子厚、愚翁對に、吾足蹈坎井、頭抵木石。 (一五)默坐、韓退之の詩に、默坐念善矣。 (一六)持用、柳子厚が田家の詩に、婦茲筋力事、持用窮歲年。 (一七)三省、たびたび反省する。論語、學而篇に、吾日三省吾身。荀子、勸學篇に、君子博學而日參三省乎己。

【題義】神宗の熙寧四年六月、東坡は外補を乞ひて杭州に通判となる。京を出でて陳に至る。時に張

安道は陳州の守であり、子由は其の學官であつた。東坡は九月に陳を離れ、子由は送つて頴に至り、同じく歐陽文忠公に頴上に謁して相別れ、此詩を作る。十月、始て淮を渡る。時に東坡は年三十六、子由は三十三歳であつた。

【詩意】頴州を出發せる當時の情況をいふと、一帆西風を掛けて走り、別淚は清頴の水に滴る。昔から世が亂れると、頴水が濁り、世が治まると、頴水が清むと傳へて居る。それで頴水を清頴といふ。淹留するは無益と知つたが、此の須臾の景を惜む。これまでそなたと三度の離別を悲しんだが、今度の別は(頴州の別)前の三別に較べて、尤も心を痛める。(前の三度の別といふは、嘉祐六年、東坡が鳳翔に赴き子由と鄭州で別れたことが一つ、治平二年、子由が大名推官に赴き、東坡が京師で別れたことが一つ、熙寧三年子由が陳州學官に赴き、東坡又京師で別れたことが一つ合せて三となる)念ふに子は先君(亡くなつた父君即ち老泉)に似て居り、表面を飾らず素直で、剛毅であり、沈靜である。言葉數も寡くて、眞に吉人である。又、其の節操の堅きは石のやうである。古より今に至るまで、意見の合はないのを以て、朝廷を去つた人は多いが、子由が勇猛に決斷して、早く退いたのに及ぶものはない。(神宗の朝に、青苗法、既に行はる。子由、時に檢詳文字の職に在り、新法の不可を爭議して合はず。其の終に救ふことの出来ないことを度り、書を以て王安石に抵り、其の不可を指陳し、且つ外に補せられんことを請ふ。安石は大に怒り將に罪を加へようとした。子由は早く新法の不可を論じて外郡に出されたが、我は其後も猶ほ朝に在る。譬へば、狂病者が前に坎井があつても、其の危険なこ

とを知らないで、意に任せて進み行くがやうなものである。さて、私の朝廷に在つた時のことを思ひ反すと、譬へば醉中に覺えず車から墜ち、殆んど其身を傷けようとして、幸に其の醉が醒めたやうなものである。されば今からは、靜默を守つて閑日を消しよう。又、此詩を以て、そなたの外任の憂を解き、此を持し用つて、我身を省み慎まう。

近別不改容、遠別涕霑胸。

近別は容を改めず、遠別は涕胸を霑はす。

咫尺不相見、實與千里同。

咫尺相見す、實に千里と同じ。

人生無別離、誰知恩愛重。

人生別離なくば、誰か恩愛の重きを知らん。

始我來宛邱、牽衣舞兒童。

始め我宛邱に來る、衣を牽きて兒童舞ふ。

便知有此恨、留我過秋風。

便ち知る此の恨あるを、我を留め秋風を過らしむ。

秋風亦已過、別恨終無窮。

秋風亦已に過ぎ、別恨終に窮りなし。

問我何年歸、我言歲在東。

我に問ふ何の年か歸らん、我は言ふ歲東に在り。

離合既循環、憂喜迭相攻。

離合既に循環、憂喜迭に相攻む。

語此長太息、我生如飛蓬。

此を語り長太息す、我が生飛蓬の如し。

多憂髮早白、不見六一翁。

多憂髮早く白し、見ずや六一翁。

【字解】【一】改。容。文選宋玉の高唐賦に、薛分直上、釵分改容。【二】湯。謂。文選、潘安仁の悼亡詩に、不覺淚霑。【三】咫尺。中婦人の手、長さ八寸、之を咫といふ、周尺なり。李太白の巫山屏風詩に、高唐咫尺如千里。【四】人生無別離。李商隱の詩に、花發多風雨、人生足別離。【五】思愛重。文選、曹子建の詩に、思愛荷不虧、在遠分日親。【六】宛邱。陳州の縣名。元和郡縣志に、宛邱、本、漢陳縣。太平寰宇記に、東南至潁州三百里。【七】來。衣云。李太白の詩に、出門妻子強牽衣。また、兒女嬌笑牽人衣。【八】離合既循環。文選、陸士衡の詩に、離合非有常。史記、漢高帝紀に、三王之遺、若循環、終而復始。【九】長太息。楚辭、屈原の遠遊に、長太息而掩涕。【一〇】如。飛蓬。文選、潘安仁の西征賦に、願吾人之拘繫、與浮萍而蓬轉。【一一】多憂愛早白。魏文帝、短歌行に、人亦有言、憂令入老、嗟我白髮、生亦何早。【一二】六一翁。歐陽公、自號六一居士、云、我家藏書一萬卷、集錄三代以來金石遺文二千卷、有琴一張、有琴一扇、而常置酒一壺、以吾一老翁、於此五物之間、豈不爲六一乎。

【詩意】凡そ近別では容を改めたり、顔色を變へたりするには足らないが、遠別となると、容易に相會ふことが出来ないから、自然、哀みの心が甚しくなつて、涙が胸を沾すに至る。併し、また考へると、たとひ咫尺（八寸を咫といふ）の近い處に居ても、若し相見ることが出来ぬなら、千里の遠別と少しも異なることがない。そして又、人生に別離といふことがあるので、兄弟や親類の恩愛の重いことも解るであらう。若し此が無かつたら、唯、あたりまへの事のやうに思つて、恩愛の情が切實に身に染みないで過ぎ行くのである。（蘇武の惟念當乖離、恩情日以新の意）我（東坡自らいふ）は、熙寧四年の六月に、京師を出でて、始て子由の居る此の陳州の宛邱に來たが、子由の子供、即ち私の姪だが、喜んで我が衣を牽きて舞ひ踊つた。其の時からして既に今日の別恨あることを知つたが、我を留め離さないで、此の秋風を過ぎしめた。秋風既に過ぎしも、別恨はいつまでも翦りない。（紀昀いふ、

曲折之至、而爽朗如話、蓋情真而筆亦足以達之、遂爲絕調。今日いよいよ別れることになつた。姪どもは我に何れの年に、此處にお歸りなさるかと問ふ。我は彼等を慰めて歳星が東の方にある時には歸り來らうといふ。（歳星、春は辰の方に集る。辰の方は東に在るから、來春には歸り來る意）相離れ相合ふは、環の端なきが如く、常に循環するものである。憂が去れば喜が來る。喜と憂とが相攻めあひをなして居る。此の消息を合點すると、今までの憂喜は、つまらなかつたと悟る。此を語つて長太息をした。既に悟つた後の心地は如何といふに、我一生涯は、たとへば根が無くて飛ぶ蓬のやうなものである。何れに漂泊するか分らない。かく觀じ來れば、離別の憂などは、無益である。一切、心に留めないことに致さう。徒に憂を増すときは、頭髮が早く白くなる。現に今度、面謁した六一翁（歐陽修をいふ）を見られよ、翁は多憂の爲にあの通り白髮になられたのではないか。

歐陽少師令賦所蓄石屏 歐陽少師蓄ふる所の石屏を賦せしむ

何人遺公石屏風、何人か公に遺る石屏風、
 上有水墨希微蹤、上に水墨希微の蹤あり。
 不畫長林與巨植、畫かず長林と巨植とを、
 獨畫峨眉山西雪、獨畫く峨眉山西の雪。

古今體詩 歐陽少師令賦所蓄石屏

【字解】【一】石屏風。釋名に、屏風以屏障風也。【二】希微。老子に、希之又希、微之又微、得、名曰微。【三】峨眉。四川峨眉縣西南に在る。兩山相對する巖

嶺上萬歲不老之

嶺上萬歲不老の孤松、

孤松

崖崩澗絕可望不

崖崩れ澗絶えて望むべきも到るべからず。

可到

孤煙落日相溟濛

孤煙落日相溟濛、

含風偃蹇得真態

風を含んで偃蹇真態を得、

刻畫始信天有工

刻畫始めて信す天に工あるを。

我恐畢宏韋偃死

我恐る畢宏・韋偃死して號山の下に葬られ、

葬號山下

骨可朽爛心難窮

骨は朽爛すべきも心は窮め難く、

神機巧思無所發

神機巧思發する所なく、

化為烟霏淪石中

化して烟霏となりて石中に淪まん。

古來畫師非俗士

古來畫師は俗士にあらず、

摹寫物象略與詩

物象を摹寫する略詩人と同じ。

眉の如きより名く。【一】溟濛、小雨降つてをぐらひ、暈豆の時に、只因一雲溟濛雨不得分明看好山。

【二】偃蹇、おこりたかぶる、左傳、宣公六年に、彼皆偃蹇將棄三子之命。

楚辭、離騷に、望三希蓋之偃蹇兮、見有城之伏女。【三】刻畫、晉書、周顛傳に、刻畫無雙、唐突西施。【四】天有工、尙書に、天工人其代之。

【五】畢宏、大歷二年、給事中となり、松石を左省廳壁に畫く。【六】韋偃、老松異石に工みである。咫尺千尋、許柯價景の妙がある。【七】神機、阮瞻の文に、神機無所準。【八】烟霏、韓退之が山石の時に、出入高下窮烟霏。【九】非俗士、文選、孔德璋の北山移文に、爾題俗士罵。【一〇】摹寫物象、元稹が杜甫墓誌に、李白亦以奇文取稱、時人謂之李杜、觀其壯浪縱恣、攝去

人同

願公作詩慰不遇

願くは公詩を作りて不遇を慰め、

無使二子含憤泣

二子をして憤を含んで幽宮に泣かしむるなかれ。

幽宮

【題義】熙寧四年九月、東坡杭州に到るとき、子由と同じく歐陽修に謁し、其の蓄へる所の石屏を賦した。此詩が其れである。熙寧の初、歐陽公は太子少師を以て觀文殿學士を帯び、致仕す。特恩を示すので、是より遂に例となつた。

【詩意】歐陽公に石屏風を送つた人は、一體、何人であるか、屏風の上方は、水墨の蹤が希微である。長林も巨植も畫かない、ただ蛾眉山西の雪を畫く。嶺上に萬歲不老の孤松がある。(松の高さ尺餘、四時色を改めず。今も蛾眉にある)就いて看ようとすると、崖崩れ澗絶えて、望むべくして、到ることが出来ない。(山水を愛看して、遙に之を望み、到ることが出来ない所から到難といふ詩を作つた人もある)孤煙落日、小雨が降つてをぐらひから分明に好山を看ることが出来ないが、山勢のおごりたかぶつた真態が看得られる。山水自然の刻畫は、さすが天工も妙である。天下幾人畫古松、畢宏已老韋偃少とは、杜子美の詩であるが、畢宏も韋偃も亡つて、號山の下に葬られて居る。骨は朽ち爛れて、心は窮め難い。神機巧思も外に發する所がない。それで化して烟霏となつて石中に淪んだ譯である。

古來、畫師は俗士と違ふ。故に物象を摹寫するにも、略し詩人と同じく脱俗して居る。どうか、公には詩を作つて畫師の不遇を慰め、畢宏・韋偃の二子をして地下に在つて泣かぬやうに、切にお願ひする。

陪歐陽公燕西湖

謂公方壯鬚似雪、公方に壯なりと謂はば鬚は雪に似たり、

謂公已老光浮頰、公已に老いたりと謂はば光は頰に

場來湖上飲美酒、湖來湖上に美酒を飲み、

醉後劇談猶激烈、醉後の劇談猶は激烈。

湖邊草木新著霜、湖邊の草木新に霜を著くるに、

芙蓉晚菊爭煌煌、芙蓉晚菊争うて煌煌たり。

插花起舞爲公壽、花を挿んで起つて舞ひ公の壽を爲せば、

公言百歲如風狂、公言ふ百歲風の狂へるが如しと。

赤松共遊也不惡、赤松と共に遊ぶも也惡しからず、

誰能忍饑啖仙藥、誰か能く饑を忍んで仙藥を啖はん。

【字解】陪、陪從の意、柳公綽の詩に、飛、蓬亦陪從。

西湖、蕪州の西湖。

場來、去來といふに同じ、司馬相如の賦に見ゆること、前にも述ぶ。

飲、美酒、文選、古詩に、不、知、飲、美酒、被服素與、執。

劇談、急いで、はげしく話す、漢書、揚雄傳に、口吃不能劇談。

煌煌、光ある貌、宋玉の高唐賦に、元木冬榮、煌煌發榮。

爲、公壽、史記、魯仲連傳に、平原君酒酣、起爲壽。

長信少府起舞、寬傳傳に、許伯入第、長信少府起舞。

如、風狂、韓退之の詩に、男兒不、再、壯、百歲如、風狂。

赤松、赤松

已將壽夭付天公、

彼徒辛苦吾差樂、

城上烏棲暮靄生、

銀缸畫燭照湖明、

不辭歌詩勸公飲、

坐無桓伊能撫箏、

已に壽夭を將て天公に付す、

彼は徒に辛苦し吾は差樂し。

城上烏棲んで暮靄生じ、

銀缸畫燭湖を照らして明かなり。

詩を歌ひ公に勸め飲ましむるを辭せし

坐に桓伊の能く箏を撫するなし。

共進、史記、張良世家に、願者、人間事、從、赤松子、遊。

不、惡、白樂天の西征詩に、閑行亦不惡。

將、一本、以の字に作る。白樂天の詩に、且進一杯酒、其餘皆付天。

坐、韓退之の詩に、人間事勢豈不苦、韓退之の詩に、人間事勢豈不見、從自辛苦終何爲。

城上、後漢書五行志に、童謠曰、城上

銀缸、文選、玉五監

鳥尾舉進。李太白詩に、姑蘇臺上烏棲時。【一】暮靄生、杜牧之の詩に、暮靄生深樹、斜陽下小樓。【二】銀缸、文選、玉五監

【題義】此詩も前詩と同じく熙寧四年九月、蕪州で作つたのである。歐陽修、穎上に守となり、其の風土を樂み、因つて居を卜す。郡に西湖あり、歐公尤も之を愛す。穎に居る機に一年にして薨す。(年六十六)東坡は子由と穎に至り、歐公に謁し、公に陪して西湖に宴したとき此詩を作る。

【詩意】歐陽公は年方に壯とはいはれない。鬚は雪のやうである。併し、老いたりとも言へない。頰はつやつやとして居るからである。余は公に陪して西湖に舟を浮べて美酒を飲む。酔うた後も、劇談は猶は已まない。見渡せば、湖邊の草木は、新に霜を著けしも、蓮の花も菊の色も、煌煌として居る。そこで花を挿んで起つて舞ひ、公の壽を爲すと、公の言はれるには、人生は再び壯ならず、百歳も

風の狂へるが如く、瞬く間に過ぎて行くと。觀じ來れば、人間の事を棄てて、赤松子に従つて遊ぶことも固より惡くはない。誰かよく飢を忍んで仙薬を服するであらうか。(陸龜蒙は我幾年來、忍飢誦經、豈不知屠沽兒有酒食耶と言ひ、退いて杞菊の賦を作つて、以て自ら廣む。已に壽と天とを以て天命に付する。彼は徒に辛苦し、我は比較的樂しい。目を上ぐれば城上には烏が棲んで暮籠も生じ、銀の缸(もたひ)や畫燭が湖を照して明かである(紀昀いふ、挿此二句、便有情致、似從杜老越王樓歌化來、と。)詩を歌うて公に酒をお勧めしたが、生憎、坐に桓伊のやうに箏を撫する人が居ない。(晉の桓伊傳によると、謝安の女壻は王國寶である。安は其の人と爲りを惡んで毎に之を抑制した。孝武の末年に、國寶の讒諛が行はれて、主と相との間に、遂に隙が成る。帝、伊を召して飲ましめ、安、侍坐す。帝、伊に箏を以て歌はしむ。伊は箏を撫して、怨詩を歌うて曰く、爲君既不易、爲臣良獨難云云と。安は泣下つて、襟を濡したさうである。)

十月二日將至渦口五里所遇風留宿

十月二日、將に渦口に至らんとす、五里の所、風に遇ひ留宿す

長淮久無風、放意弄清快。長淮久しく風なし、意を放にして清快を弄す。

今朝雪浪滿、始覺平野隘。今朝雪浪滿ち、始めて平野の隘くして、

兩山控吾前、吞吐久不嘔。兩山の吾前に控ふるを覺ゆ、吞吐久しく嘔せず、

孤舟繫桑本、終夜澎湃。孤舟桑本を繋ぎ、終夜澎湃を舞はす。

舟人更傳呼、弱纜恃蒼削。舟人更に傳呼し、弱纜蒼削を恃む。

平生傲憂患、久矣恬百怪。平生憂患に傲る、久しいかな百怪を恬んす。

鬼神欺吾窮、戲我聊一噫。鬼神吾が窮を欺き、我に戯れて聊か一噫。

餅中尙有酒、信命誰能戒。餅中尙ほ酒あり、命を信じて誰か能く戒めん。

【字解】(一) 渦口 國學記開に、渦口在濠州鍾離縣西北九十里。(二) 長淮 國經に、淮河、四瀆之一、自泗州龜山東北流、與汴河合、東北入海、卽長淮也。(三) 雪浪滿 孟東野の詩に、寒江浪起千堆雪。(四) 兩山控吾前 水經註に、荆塗二山對峙爲一脈、自神禹以桐柏之水汎灌爲害、乃鑿山爲二以通之。兩山は今、懷遠縣の南に在り。(五) 吞吐 鮑照の書に、騰波噴天、高浪漚日、吞吐百川、寫滄海無聲。(六) 噫 一口にくひつくす。曲禮に、無噫氣。鄭註にいふ、噫、爲二舉盡臂。(七) 繫桑本 左傳、成公二年に、齊高固入晉師、桀石以投人、禽之而樂其車、繫桑本焉。桑根を車の上にしりり付け、恰も物を賣る人が、目じるしを出し置くやうにする。又、易の否卦九五に、繫於苞桑。疏にいふ、苞、本也、凡物無於桑之苞本、則牢固也。……は此の意に用ふ。(八) 澎湃 水波の相擊つ聲、司馬相如、上林賦に、沸乎暴怒、洶湧澎湃。(九) 傳呼 漢、蕭望之の傳に、倉頭盧兒、傳呼其寵。(一〇) 弱纜 杜子美が詩に、弱纜且長繩。(一一) 恃蒼削 左傳成公九年に、詩曰、靡有絲麻、無棄索管削。(一二) 久矣恬百怪 一本、矣を己の字に作る。韓退之の詩に、百怪入我腹。(一三) 鬼神、戲我 韓退之の賦に、雖得之而不能、乃鬼神之所戲。(一四) 信命 杜子美の詩に、男兒信命絕可憐。

【題義】此詩も熙寧四年の作。渦河の淮に入る處、之を渦口といふ。水勢が曲折し、旋轉するを以て

名く。將に渦口に至らんとして風に遭ひ、留り宿して此詩が出来たのである。
 【詩意】淮河は久しく風もなく穩かであつたから、意を放にして清快を喜んで居つた。然るに今朝、風烈しくなつて、雪浪が河に滿つ。始めて平野の隘くして、兩山が吾が前に控へて居るを覺えた。高浪が日に灌ぎ、百川を呑んだり吐いたりして、一舉食ひ盡すといふ觀がある。孤舟は桑根に繫ぐやうに牢固にするも動搖して已まない。終夜、水波が相撃つて居る。舟人は更に傳呼して、弱纜（纜は舟を維ぐ索）や荻副（皆、草の名、布とする）を待みとする。余は平生は憂患を物ともしないし、久しく百怪を怖れなかつたものである。然るに鬼神は、吾が窮を欺いて、我に戲れたので、聊か一噓する。（噓は痛傷の聲である）餅の中に、尙ほ酒があるから、之を飲んで、心持を取り直さう。男兒、天命を信ずる。誰か能く戒めよう。

出頴口初見淮山是日至壽州

頴口を出で初て淮山を見る、是日壽州に至る

我行日夜向江海

我行日夜向江海に向ふ

楓葉蘆花秋興長

楓葉蘆花秋興長し

長淮忽迷天遠近

長淮忽ち迷ふ天の遠近

青山久與船低昂

青山久しく船と低昂す

【字解】 壽州 戰國時代の楚邑、今の安徽壽縣。元和郡縣志に、壽九江都、南北朝爲壽春、隋改壽州。水經に、淮水又東流與頴口會、又、東北流徑壽春。 楓葉蘆

壽州已見白石塔

壽州已に見る白石塔

短棹未轉黃茆岡

短棹未だ轉せず黃茆岡

波平風軟望不到

波平かに風軟なるも望み到らず

故人久立烟蒼茫

故人久しく立つ烟の蒼茫たるに

花 白樂天の詩に、楓葉蘆花秋意長。
 【一】 秋興 秋意といふに同じ、秋日の感興をいふ。杜子美の詩に、秋來興甚長。
 【二】 長淮 一本に平淮に作る。
 【三】 短棹 竊叔倫の詩に、短棹晚烟迷。
 【四】 黃茆岡 白樂天

【題義】 東坡は嘗て縦筆、此詩を書き且つ題していふ、予年三十六、赴杭梓、過壽作此詩、今五十九、南遷至度、烟雨凄然、頗有當年氣象也と。
 【詩意】 我が旅は日夜に江海に向ふのである。（王文誥いふ、此極沈痛語、淺人自不知耳。）楓葉も蘆花も、索索として秋意を感せしめる。長淮の水日夜東流して、忽ち天の遠近に迷ふ心地がする。眼は青山を送り、又、青山を迎へ、久しく行く船と低昂をなして居る。既にして壽州に到り、遙に白石塔を見る。黃茆岡頭、秋日晩れて、短棹は未だ之に向つて轉じない。（杜牧之の六言詩に、河橋酒旆風軟、侯館梅花雪驕とある。）波は平かに、風は軟かなるも、望みは到らない。故人は久しく蒼茫たる夕陽に立つて居る。（紀昀いふ、吳體之佳者、吳體無粗獷之氣、卽佳と。）

壽州李定少卿出餞城東龍潭上

壽州李定少卿出でて、城東龍潭の上に餞す

古今體詩 出頴口初見淮山是日壽州 壽州李定少卿出餞城東龍潭上

山鴉噪處古靈湫

山鴉噪ぐ處古の靈湫

亂沫浮漣遶客舟

亂沫浮漣客舟を遶る

未暇燃犀照奇鬼

未だ犀を燃して奇鬼を照すに暇あらず

欲將燒燕出潛蚪

燒燕を將て潛蚪を出さんと欲す

使君惜別催歌管

使君は別を惜んで歌管を催し

村巷驚呼聚獲猴

村巷驚呼して獲猴聚る

此地他年遺愛

此地他年遺愛を頌せば

觀魚并記老莊周

魚を觀て并せて老莊周を記せよ

【題義】壽春の外郭東北隅の一榭(屋ある臺)は、東側に一湖があつて、三春九夏、紅荷が水を覆ふ。瀆(小渠)を城隍(隍は水のない城池)に引く。水漚して潭をなす、之を東臺といふ。東坡が壽州に至ると、李定が東臺に饒したので、此詩を作る。

【詩意】山の鴉が噪ぐ所は、古の靈湫のある處(湫は池)である。湫面は亂沫や浮漣(漣は口液)が舟を遶つて居る。未だ犀角を燃して奇鬼を照らす暇がない。燒燕を餌として潜める蚪(龍の子の角あるもの)を出さうとする。龍の性は、蠢猛であつて、鐵を畏れ、玉及び空青(銅青石の類)を愛して、燒燕の肉を嗜むからである。使君には(李定を指す)別を惜んで歌管を催さる。村巷は驚呼して獲猴が聚る。他年、此地を訪ひ、古人仁愛の遺風を頌する折もあらば、龍潭の魚を觀ると共に并せて老莊周をも記せられよ(莊子、惠子と濠梁の上に遊ぶ。莊子曰く、鯈魚(白魚)出で遊び、從容たるは、是れ魚の樂しむなり。惠子曰く、子は魚にあらず、安んぞ魚の樂みを知らんや。莊子曰く、子は我にあらず、安んぞ我が魚の樂みを知らざるを知らんやと)。

濠州七絶

濠州七絶

塗山

塗山

川鎖支祁水尙渾

川支祁を鎖ざして水尙ほ渾る

地埋汪罔骨應存

地汪罔を埋めて骨應に存すべし

樵蘇已入黃能廟

樵蘇已に入る黃能廟

烏鵲猶朝禹會村

烏鵲猶は朝す禹會村

【字解】(一)濠州、春秋の末は、鐘離の國、隋、開皇二年に、濠州と改む。(二)塗山、唐、地理志に、濠州鐘離縣有塗山。東坡の自註に、下有蘇廟、山前有禹會村。(三)支祁、無支祁をいふ、淮河水神の名。黃能廟に、龜山寺後山脚有二石穴、以碑塞、其戶一俗云、無支祁所宅也。

【字解】(一)李定、濟南の人。嘉祐、治平以來、諸路の計度轉運使を領歴す。(二)龍潭、壽州の芍陂は城東にある。從漢、建安十四年、鄧艾は此の陂を重修す、所謂陂泉の陂。(三)燒犀、東晉の溫嶠が犀角を燃して、牛溲蠟といふ溲瀉を照らした故事で、前にも見ゆ。(四)奇鬼、呂氏春秋に、隴北有奇鬼焉、善效人之子姪兄弟之狀、邑丈人有醉歸者、鬼效其子之狀、扶而道之。

【註】(一)使君、漢の世、太守を府君、刺史を使君といふ。三國志、關先主傳に、天下英雄、惟使君與操耳。(二)獲猴、大猷、韓忠之が南山の時に、微瀆動水面、而獲猴。獲猴、獲猴の類。(三)觀魚、濠州七絶の觀魚を指す。

禹會村 太平寰宇記に、嶺山西北禹村。帝王世紀に、禹會諸侯於嶺山、在揚州之域、今嶺邑界有禹會故墟存。
【題義】東坡、熙寧四年十月、涿州を過ぎ、嶺山・彭祖廟・莊周廟・觀魚臺・虞姬墓・四望亭・浮山洞の諸勝に遊びて此詩を作つた。紀昀いふ、七詩不脫宋人稟白一語。稟白とは、格式をいふ、常を蹈み故を襲ふを稟白に落つといふ。

【詩意】昔、禹が淮水を理めて、功が興らなかつたから、百靈を召集し、淮渦の水神である無支祁と名けるものを獲た。應對言語を善くし、淮の淺深を辨ず、形は猿猴の如し。禹は之を淮の陰、龜山の足に徙したから、淮水は安流して海に注いだ。永泰の初、楚中に漁者あり。淮中に於て古鎖を釣り得て絶えず。以て刺史李揚に告ぐ。大に人力を集めて之を引く、鎖窮りて鬪猴あり、躍りて復没すといふ。第一句は、此故事に據つたものである。川が水神支祁を鎖しても、水がまだ渾つて居る。又、禹が諸侯を嶺山に會したとき、防風氏が後れて至つたので禹は之を戮した。其の骨節が一車を専らにしたといふことである。第二句は、此故事に據つたものである。嶺山の地には汪罔氏の君防風を埋めたので、其の骨節も遺つて居るであらう。又、禹は鯀を羽山に殛し、其の神が化して黃熊となつて羽淵林に入つたといふことである。今は、薪を取るものも、草を取るものも其の廟に入る。そして烏鵲は、猶ほ禹會村に朝して居る。

彭祖廟

彭祖廟

【字解】〔一〕彭祖廟 涿州子城

跨歷商周看盛衰。

商周に跨歴して盛衰を見る。

欲將齒髮鬪蛇龜。

齒髮を將て蛇龜と鬪はんと欲す。

空餐雲母連山盡。

空しく雲母を餐して連山盡き、

不見蟠桃著子時。

蟠桃子を著くるの時を見ず。

蘇州四十里、山出雲母。【一】蟠桃、仙家に在りと傳ふる大きな桃の實、漢武内傳に、西王母命二侍女、以玉盤盛仙桃七顆云云。

【詩意】彭祖は長壽八百歳、殷末の時、已に七百六十七歳であつたから、故に跨歴商周と言ふのである。商周に跨歴して世の盛衰を見る。千歳の龜は、五色を具へると傳へて居り、又、蛇は無窮の壽があると言はれて居る。彭祖は年齢を以て蛇や龜と競争をしようとして居る。彭祖は水柱や雲母を服して長生したが、今は居らないから、空しく雲母を餐して連山盡きと言つたのである。漢、武帝の時、西王母が降つて桃七枚を出して、自ら二枚を啖ひ、五枚を帝に與へた。帝は核を留めて、種ると欲す。西王母は此桃は三千年に一たび花を開き、三千年に一たび實を結ぶと言つたさうである。彭祖八百歳の壽では、蟠桃の實を結ぶ時を見ない譯である。

逍遙臺

逍遙臺

【字解】〔一〕逍遙臺 東坡自註

常怪劉伶死便埋。常に怪む劉伶死して便ち埋むるを、

に、莊子祠堂在三陽元寺、即墓爲臺也。太平寰宇記に、南華真人塚在涿州

古今體詩 涿州七絕・彭祖廟・逍遙臺

豈伊忘死未忘骸 豈伊死を忘れて未だ骸を忘れざるか。

烏鳶奪得與螻蟻 烏鳶奪ひ得て螻蟻に與ふ、

誰信先生無此懷 誰か信せん先生に此懷なきを。

厚非之、曰、吾恐烏鳶之食夫子也。莊子曰、在上爲烏鳶食、在下爲螻蟻食、奪彼予此何其偏也。

【詩意】劉伶は、尤も酒を嗜み、常に鹿車に乗り、一壺酒を攜へ、人をして銜を荷うて之に隨はしむ。死せば、便ち我を埋めよと。果して然らば、劉伶は、死を忘れても、未だ骸を忘れないものであらうか。(東坡曰く、伯倫非達者也、棺槨衣衾、不害爲達、苟爲不然、死則死矣、何必更埋と。)骸は上に在つては、烏鳶の食となり、下に在つては、螻蟻の食となる。烏鳶から奪ひ得て、螻蟻に與へても、他の食となるは同じである。厚非は骸を忘るるには如かない。先生に此の高懐がないとは信せられない。

觀魚臺

觀魚臺

欲將同異較 同異を將て銜を較せんと欲す、

肝膽猶能楚越如 肝膽猶は能く楚越の如し。

若信萬殊歸一理 若し信に萬殊一理に歸せるば、

【字解】(一) 觀魚臺 涿州にあり、元和郡縣志に、莊周家在涿縣縣西南七里、涿水經其前。(二) 銜 禮記の註に、八兩曰銜。漢律歷志に、二十四銜可成兩。とあれど、僅小の義に用ふ、白居易の詩に、

子今知我我知魚 子今我を知り我魚を知る。

世利算、銜銖。(三) 肝膽猶能楚越如 莊子德充符篇に、自其異者觀之、

肝膽楚越也、自其同者觀之、萬物皆一也。(四) 萬殊 淮南子に、謂萬殊。(五) 子今知我云云 莊子、秋水篇に、莊子與、

【詩意】萬物は萬異である。もし同異を以て、僅小の點を較べたならば、肝膽の如く密接せるもので、楚越の如く遠く隔たることになるであらう。之に反し、萬殊一理に歸せば、彼我もなく、是非をも離れる譯である。莊子は、子に我にあらず、安んぞ我が魚の樂みを知らざるを知らんやと言つたが、萬殊一理から言へば、子、今我を知り、我も魚を知る譯である。現に莊子も、既已知吾知之而問我、我知之之濠上也と言つた。即ち徒に辯論するも益はない。請ふ其の初に反らう。足下は、はじめ、我に問ふ、魚にあらざれば、安んぞ魚の樂みを知らんと。是れ足下は我意を解して、此問があつたのである。足下は既に我意を知つた。我の濠上に於て魚の樂みを知るも、亦方に斯の如きのみ。

虞姬墓

虞姬の墓

帳下佳人拭淚痕 帳下佳人涙痕を拭ひ、

門前壯士氣如雲 門前の壯士氣雲の如し。

倉黃不負君王意 倉黃負かす君王の意、

【字解】(一) 虞姬墓 定遠縣の南六十里に在り、高さ六丈。名勝志に、俗名虞虞坂。(二) 氣如雲 自樂天が答諸少年詩に、健者壯氣如雲。(三) 倉黃 あわてる、風

只與虞姬與鄭君

只虞姬と鄭君とあり。

四三二

土記に、大昔倉黃賦。【一】虞姬
與鄭君。史記に、美人名は虞。黃

書に虞氏とある。鄭君、名は榮、大司農鄭當時は其後といふ。
【詩意】垓下に圍まれた項羽は、夜、四面の漢軍皆、楚歌するを聞き、驚いて曰く、漢皆已に楚を得たるかと、起つて帳中に訣飲した。項羽は悲歌慷慨すると、常に幸された美人虞氏も涙痕を拭うて之に和した。軍門の前に居る壯士は氣雲の如きも、倉黃の際、君王の意に負かなかつたのは、只、虞姬と鄭君とのみである。虞姬は自刎した。(九域志に、陰陵城、項羽迷失道於此、蓋虞姬死所。)又、鄭君は嘗て項羽に事ふ。項羽が死んでから、漢に屬した。高祖は、蕭の故項羽の臣であつたものをして籍と名いはしめた所、鄭君は獨、詔を奉じなかつたので逐はれたのである。(籍と名いふた故の項羽の臣は、盡く大夫に拜された。)

四望亭

四望亭

頽垣破礎沒柴荆

頽垣破礎柴荆に沒す、

故老猶言短李亭

故老猶はいふ短李の亭、

敢請使君重起廢

敢て使君に請うて重ねて廢を起す、

落霞孤鶩換新銘

落霞孤鶩新銘に換ふ。

【字解】【一】四望亭、東坡の自註に、太和中、刺史劉剛之立云云。

【二】頽垣、宋の武帝の詩に、拱木秀頽垣。【三】說文に、廢也、頽は柱下の石。【四】短李亭、唐の李紳傳に、爲人短小精悍、於詩敢有、名、時號短李。白樂天の詩に、聞吟

短李詩。【五】使君、刺史を使君といふこと、前に述べた。【六】起廢、史記、太史公自序に、孔子修、廢起廢。【七】落霞孤鶩、唐の王勃滕王閣序に、落霞與孤鶩齊飛。

【詩意】李紳の四望亭の記に據るに、濠城之西北隅廻環者、可數百里云云、劉君創亭焉、雲山左右、長淮榮帶、下繞清濠、傍瞰城邑、四封五達、皆可洞然。亭廢するもの數年、頽れた垣や破れた礎は柴や荆に沒す。故老は古を懷うて、猶はいふ、使君に請うて李紳の四望亭を再興したい。舊を修め廢を起し、落霞孤鶩を新しい銘とするのであると。

浮山洞

浮山洞

人言洞府是鰲宮

人は言ふ洞府是れ鰲宮と、

升降隨波與海通

升降波に隨つて海と通す。

共坐船中那得見

共に船中に坐す那ぞ見るを得ん、

乾坤浮水水浮空

乾坤は水に浮び水は空に浮ぶ。

書曰、天在「地外」、水在「天外」、水浮「天而載」地者也。

【題義】渤海の東に大壑がある。實は無底の谷で、其の中に五つの山がある。五山の根は連著する所なく、常に潮波に隨つて上下す。天帝、其の西極に流れることを恐れ、禹疆に命じて巨鼈十五をして首を擧げて之を戴かしむ。五山が始めて峙つたといふことである。

【字解】【一】浮山洞、浮山は、泗州招信縣の西七十里に在り、下は石穴がある。東坡の自註に、洞在「淮上」、夏潦不能及、而冬不加高、故人疑其浮也。【二】乾坤浮水、杜子美の洞庭詩に、乾坤日夜浮。【三】水浮空、晉、天文志に、黃帝

【詩意】人は言ふ、浮山洞は、これ此の繁の宮と、升降波に随つて海と通ずる。共に船中に坐しては那ぞ見ることを得ようぞ。乾坤は水に浮び、水は空に浮ぶ。天は雞子の青きが如く、地は雞子の黄なるが如し。天は地の外に在り、水は天の外にある。水は天を浮べて地を載する。

發洪澤中途遇大風復還

洪澤を發し中途大風に遇ひて復還る

風浪忽如此吾行欲安歸
風浪忽ち此の如し、吾行いて安にか歸らんと欲する。
挂帆却西邁此計未爲非
帆を掛けて却つて西に邁く、此の計は未だ非となさず。
洪澤三十里安流去如飛
洪澤三十里、安流去つて飛ぶが如し。
居民見我還勞問亦依依
居民我が還るを見、勞問亦依依。
攜酒就船賣此意厚莫違
酒を攜へて船に就いて賣る、此意厚く違ふ莫れ。
醒來夜已半岸木聲向微
醒め來つて夜已に半、岸木聲微に向ふ。
明日淮陰市白魚能許肥
明日淮陰の市、白魚能く許く肥えたり。
我行無南北適意乃所祈
我が行く南北なく、意に適するは乃ち祈る所。
何勞舞澎湃終夜搖窗扉
何ぞ勞せん澎湃を舞はずを、終夜窗扉を搖かす。
妻孥莫憂色更典篋中衣
妻孥憂色なく、更に典す篋中の衣。

【字解】(一) 洪澤、名勝志に、洪澤在清河縣東南六十里、湖長八十里。(二) 歌、安歸、晉、謝安傳に、吳、孫綽等、汎海、風起浪湧、諸人益懼、安吟嘯自若。舟人以安爲悅、猶去不止、風轉急、安徐曰、如此將何歸邪。(三) 西邁、遼風で前むことが出来ないから、風に順つて邁る。(四) 安流、楚辭、九歌に、使江水平兮安流。唐書の王義方傳に、四維解氣、千里安流。(五) 去如飛、李大白的詩、巴水急如箭、巴船去如飛。文選、王仲宣の詩に、拓地三千里、往返還欲飛。(六) 勞問、屈問の意、後漢書、黃憲傳に、未及勞問。(七) 依依、思ひ慕ふ貌。文選に、望風懷想、能不依依。(八) 莫違、鄭綱の詩に、今夕一章有莫違。(九) 淮陰市、淮陰はもと漢の舊縣、楚州城西五十里にある。(一〇) 白魚、ただ淮楚にある。杜子美の詩に、白魚如切玉。又、孫友得、淮陰市、淮陰はもと漢の舊縣、楚州城西五十里にある。(一一) 白魚、ただ淮楚にある。杜子美の詩に、白魚如切玉。又、孫友得、淮陰市、淮陰はもと漢の舊縣、楚州城西五十里にある。(一二) 適意、文選、古詩に、願以適意。願はは眷顧する貌。(一三) 澎湃、司馬相如の上林賦に、八川分注、相背異趣、海涌澎湃、澤弗容涸。(一四) 典篋中衣、韓退之の詩に、篋中有餘衣。

【題義】熙寧四年十月の作、洪澤湖を發し、途中、大風に遇つて引返した時の詩である。紀昀いふ、與三澗口詩、同刺、小人之排抑、然俱不露、所三以爲佳と。

【詩意】洪澤湖を出帆したが、風浪は忽ち此の如く烈しい。吾は行いて安くに歸らうぞ。風に逆つては、行くことが出来ない。風に順つて西に還るに如くはない。此の歸計は失敗でなかつた。洪澤三十里、安流去つて飛ぶがやうであつた。居民は、我が還るを見て懐しく近づき慰問もされた。酒を攜へてわざわざ船に賣りに來るもある。此の温い心持はこれから後いつまでも變らないやうにあつて欲しい。酒の醒めた時分は夜も已に半で、四邊が寂と静まつて、岸木の聲もかすかになつた。明日、淮陰の市では、名産の白魚も肥えて見える。一體、我が旅は浮雲の如く南北と一定しない。意に適ふは、固より願ふ所である。風浪の澎湃を舞はず天候など、心配するに足らない。終夜窗の扉を搖かすも、

妻子どもは一向平氣であつた。更に篋中の衣を典する。(質入する)

十月十六日記所見 十月十六日見る所を記す

風高月暗雲水黃。風高く月暗く雲水黄なり、
 淮陰夜發朝山陽。淮陰夜發し朝は山陽。
 山陽曉霧如細雨。山陽の曉霧細雨の如く、
 炯炯初日寒無光。炯炯初日寒うして光なく。
 雲收霧卷已亭午。雲收まり霧巻いて已に亭午、
 有風北來寒欲僵。風あり北より來つて寒うして僵れん、
 忽驚飛電穿戶牖。忽ち驚く飛電の戸牖を穿つを、
 迅駛不復容遮防。迅駛復遮防すべからず。
 市人顛沛百買亂。市人顛沛百買亂る、
 疾雷一聲如頽牆。疾雷一聲頽牆の如し。
 使君來呼晚置酒。使君來り呼び晚に酒を置く、

【字解】(一) 山陽。太平寰宇記

に、楚州淮陰郡理山陽縣。本、漢射陽縣。地在射水之陽也。晉改射陽爲山陽。(二) 炯炯。光のかがやく貌。廣雅に、炯、光也。炯は俗字。(三) 無光。漢、于定國傳に、永光元年、春雷夏寒日青無光。白樂天之詩に、白日冷無光、黃河凍不流。(四) 亭午。正午に同じ、亭に至る、日の午に至る時、一説に亭は直る。韓退之の詩に、須知節候即風寒、亦及亭午。翁承明。(五) 顛沛。唯憂の場合、論語、里仁爲美、造次必於是、顛沛必於是。(六) 百買亂。漢、尹翁歸の傳に、百買歸之。(七) 疾雷一聲。莊子、奔物論に、疾雷破山、風振海云云。(八) 顛沛。司馬

坐定已復日照廊。坐定まり已にして復日照廊を照す。

悅疑所見皆夢寐。悦として疑ふ見る所皆夢寐なるかと、

百種變怪旋消亡。百種の變怪旋消亡す。

共言蛟龍厭舊穴。共に言ふ蛟龍舊穴を厭ひ、

魚鼈隨徙空陂塘。魚鼈隨つて徙り陂塘を空しうすと。

愚儒無知守章句。愚儒無知章句を守り、

論說黑白推何祥。黑白を論說して推す何の祥ぞ。

惟有主人言可用。惟有主人の言用ふべきあり、

天寒欲雪飲此觴。天寒うして雪ふらんと欲す此の觴を

【題義】十月十六日、山陽に至ると、風雷冰雹、既にして復、晴れた。此詩は其の見る所を寫したものである。

【詩意】風高く、月暗く、雲も水も黄色を帯びて居る。淮陰を夜に出發し、朝は山陽に在る。山陽の曉霧は、細雨の如く、光りかがやくべき朝日も寒うしく光なく感せられる。雲收まり霧も巻いて已に正午の時分となつた。北風が吹いて寒く身に沁みて寒うして僵れようとする位である。忽ち飛電(雨氷)

の戸牖を穿つに驚いた。其の降ることが極めてはやいので、復、遮り防ぐことも出来なかつた。市人はつまづき倒れ、百賈は亂れる。疾雷一聲、頹牆かと疑はる。使君（楚州の太守をいふ）來り呼び、曉に酒宴を開く。坐が定まり、已にして復、日が廊を照す。恍として見る所、すべて夢ではないかと疑はれ、百種の變怪も、やや消亡してしまつた。それで、共に言ふ、蛟龍が舊穴を厭ひて、魚鼈隨つて徒り、陂塘を空うすと。愚儒は無知、章句を守る。（鮑照の詩に、愚儒守章句。未足識行藏。黑白を論説して、推すは何の祥である。（漢の五行志に、言之不從、則有青・白祥、聽之不聰、則有黑青・黑祥。）吉凶は焉くに在る。ただ主人の言は、用ふべきものがある。天寒うして雪が降らうとする。此の一杯の酒を飲め。

廣陵會三同舍各以其字爲韻仍邀同賦

廣陵三同舍に會し、各其の字を以て韻となし、仍て邀へて同じく賦す

劉貢父

劉貢父

去年送劉耶醉語已驚衆

去年劉郎を送る、醉語已に衆を驚かす。

如今各飄泊筆硯誰能弄

如今各飄泊、筆硯誰か能く弄せん。

我命不在天翠殼未必中

我が命は天に在るにあらすや、翠殼未必だ必しも中らす。

作詩聊遣意老大慵譏諷

詩を作りて聊か意を遣る、老大慵譏諷に慵し。

夫子少年時雄辯輕子貢

夫子少年の時、雄辯子貢を輕んす。

爾來再傷弓戢翼念前痛

爾來再び弓に傷つ、翼を戢めて前痛を念ふ。

廣陵三日飲相對恍如夢

廣陵三日飲み、相對し恍として夢の如し。

況逢賢主人白酒撥春甕

況んや賢主人に逢ふ、白酒春甕を撥し、

竹西已揮手灣口猶屢送

竹西已に手を揮ひ、灣口猶屢送る。

羨子去安閑吾邦正喧闐

羨む子去つて安閑、吾が邦正に喧闐。

【字解】 廣陵、郡の名、本、漢の江都國。隋、揚州に改む。故城は今の江蘇江都縣東北に在る。【一】劉貢父、劉敞、字は貢父、性滑稽、初、王安石と厚く、後、斥けらる。【二】驚衆、文選、頓延年の詩に、長嘯若、使人、越、自驚衆。【三】飄泊、杜子美の詩に、如今飄泊將安用。【四】雄辯、韓退之が盧全に寄する詩に、往年弄、筆、嘲、同異、怪辭、驚、衆、訪、不已。唐の祖君彦傳に、弄、筆、生、有、餘、罪。【五】我命不在天、書經に、我生、不、有、命、在、天。【六】翠殼、未、必、中、莊子、德、先、符、に、遊、於、羿、之、殼、中、央、者、中、也。【七】雄辯、杜子美の飲中八仙歌に、魚、逆、五、斗、方、卓、然、高、談、雄、辯、驚、四、筵。【八】輕、子、貢、史記、仲尼弟子傳に、子貢利口巧辭、孔子常稱其辯。【九】傷弓、荀子に、傷弓之鳥見、曲、木、而、驚。晉書に、傷弓之鳥、落、虛、聲。【一〇】戢、翼、毛詩に、雉、在、梁、斃、其、左、翼。【一一】白酒、魏武帝の詩に、玉盤著、朱、李、金、杯、盛、白、酒。【一二】竹西、亭の名、顧智寺に在る。山公醉後能騎馬、別是風流賢主人。【一三】揮手、文選、劉休元が擬古詩に、揮、手、從、此、辭。杜牧之の詩に、誰知竹西路、歌吹是揚州。【一四】揮手、文選、劉休元が擬古詩に、揮、手、從、此、辭。

古今體詩 廣陵會三同舍各以其字爲韻仍邀同賦・劉貢父

【題義】熙寧四年十月、東坡は揚州に抵り、劉攽・孫洙・劉摯と太守錢公輔に會し、座上、三同舍の詩を作る。錢公輔、字は君倚、武進の人で、時に廣陵の守たり。(熙寧四年五月、錢公輔、揚州に知たり) 三詩は意旨俱に同じである。

【詩意】去年、劉郎を送つたが、(劉貢父、海陵に倅(通判)たるを送つた一篇を指す) 其の醉語は意表に出で、衆を驚かした。只今は各流離飄泊の身で、筆硯を弄することも出来ない。我が命は、天にあるのではないか。昔、羿は射を善くしたが、併し其の的中すると否とは天命にある。命を知り詩を作つて聊か心持を晴らす。ただ老大となつた我は、元氣に乏しく、詩も譏諷に憊い。尤も利口巧辭は、少年の時、特に戒める。子貢は其點で、孔子に黜けられた。余は爾來、二度も弓に傷く。(言禍を得て、斥けらる) 弓に傷いた鳥は、曲木を見ても驚き、翼を翫めて前の痛みを念ふのが常である。廣陵三日、酒を飲み、相對し、恍として夢のやうである。況んや賢主人(錢公輔を指す)に逢うて、殊にうれしい。白酒は春甕を撥して、禪智寺内の竹西亭で互に手を揮つて別れる。灣口で、(揚州茶黃灣は俗に灣口といふ) 猶ほ屢、送別をする。子が去つて安閑であるは、まことに羨ましい。我邦は正に喧闐である。(杭州監司が新法を行つて、不便極めて多かつたからかくいふ)。

【餘論】弓に傷く鳥は虚發に落ちる。戰國策に、更羸與三魏王、處三京臺之下、有閒、雁從三東方來、更羸以虚發而下之、魏王曰、射可至此乎、更羸曰、此孽也、其飛徐而鳴悲、飛徐者、故瘡痛也、鳴悲者、久失羣也、故瘡未息而驚心未去也、聞三弦音烈、而高飛、故瘡頽也。

孫巨源

孫巨源

三年客京輦、憔悴難具論。

三年京輦に客たり、憔悴具に論じ難し。

揮汗紅塵中、但隨馬蹄翻。

汗を揮ふ紅塵の中、但馬蹄に隨つて翻へる。

人情貴往返、不報生禍根。

人情往返を貴ぶ、報いざれば禍根を生ず。

坐令平生友、終歲不及門。

坐に平生の友をして、終歲門に及ばざらしむ。

南來實清曠、但恨無與言。

南來實に清曠、但恨む與に言ふなきを。

不謂廣陵城、得逢劉與孫。

謂はず廣陵の城、劉と孫とに逢ふを得と。

異趣不兩立、譬如王孫猿。

趣を異にせば兩立せず、譬へば王孫と猿との如し。

吾儕久相聚、恐見疑排根。

吾儕久しく相聚る、恐らくは疑はれて排根せられん。

我編類中散、子通真巨源。

我が編は中散に類す、子が通は真に巨源。

絶交固未敢、且復東南奔。

交を絶つは固より未だ敢てせず、且く復東南に奔る。

【字解】孫巨源、名は洙、廣陵の人。未だ冠せずして進士に擧げられて第す。韓忠獻、其進策を讀み、太息して曰く、今の

買置なりと。東坡は巨源と交契甚だ厚し。【二】京輦、京師に同じ、輦は輦轎の下義。後漢周舉傳に、出入京輦。陳琳の文に、子弟

生長京輦。【三】他伴、やせ衰へる、楚辭に、憔悴而無樂。顔色憔悴。文選、謝靈運の詩に、風潮蘇具論。【四】揮汗紅塵、史

記、蘇秦傳に、揮汗成雨。班孟堅が西都の賦に、紅塵四合、煙雲相連。【五】清曠、後漢書、仲長統傳に、歌卜居清曠、以樂其志。

古今體詩 廣陵會三同舍各以其字爲韻仍舊同賦・孫巨源

【○】相衆 漢の袁良傳に、相衆而謀反耳。【○】掛根 漢書、灌夫傳の字面、掛根掛格と懸す、掛掛することである。【○】中散 晉、嵇康傳に、初解朝宗室、拜中散大夫。

【詩意】京師に客となつて三年、憔悴して樂みがなく、失意に論じ難い。汗を紅塵の中に揮ひ、ただ馬蹄に隨つて往來するのみである。人情は往返を貴び、禮意はここに起る。受けて報ゆる所がなければ禍根を生ずる。坐に平生の親しき友をして終歲門に及ばないやうな状態にならしめてしまふ。(韓退之が威春詩にも、心懷平生友、莫一在燕席とある。)南に來てからは、清くからりとした氣分になつた。ただ與に言ふべき人がないので残念に思ふ。廣陵の城で劉眞父・劉莘老及び孫巨源に相逢ふを得たことなどは暫く謂はない。なせといふに、趣が違へば兩立はしない。譬へば王孫(猿の一名)と猿との如し。猿と猴とは、性を異にし、山を異にして居る。猿の性は静で、猴の性は躁がしい。羣すと雖も、相善からず。吾等も久しく相聚つて居る内には、恐らくは疑はれて、排擠されるであらう。我が性質の褊(狹隘)は、中散大夫嵇康に似て居る。君の通(通達)は眞に山濤(字は巨源、孫洙と字を同うす。故に眞巨源といつたのである)である。山濤が官を去らうとするとき、嵇康を擧げて自ら代ると、康は濤に絶交を告げ、幽憤の詩を作りて曰く、惟此褊心、願明臧否と。我は君と敢て絶交はしない。且らく相離れて東南に奔らう。(乞得湘守東南奔。)

劉莘老

劉莘老

江陵昔相遇、幕府稱上賓。
再見明光宮、峨冠挹縉紳。
如今三見子、坎珂爲逐臣。
朝遊雲霄間、欲分丞相茵。
暮落江湖上、遂與屈子鄰。
了不見愠喜、子豈眞可人。
邂逅成一歡、醉語出天真。
士方在田里、自比涓與莘。
出試乃大謬、芻狗難重陳。
歲晚多霜露、歸耕當及辰。

江陵昔相遇ふ、幕府上賓と稱す。
再び見る明光宮、峨冠縉紳を挹す。
如今三たび子を見る、坎珂逐臣と爲る。
朝に遊ぶ雲霄の間、丞相の茵を分たんと欲す。
暮に落つ江湖の上、遂に屈子と鄰す。
了に愠喜を見ず、子豈眞の可人なるか。
邂逅一歡を成す、醉後は天真より出づ。
士は方に田里に在りて、自ら涓と莘とに比す。
出でて試みるるは乃ち大に謬る、芻狗重ねて陳べ難し。
歲晚霜露多し、歸耕當に辰に及ぶべし。

【字解】【○】劉莘老 名は莘、永靜、東光の人。【○】江陵 唐地理志に、江陵、本荊州南郡、天寶元年、更郡名。【○】縉紳 上賓。晉書、鄧超在祖溫墓下、謝安曰、鄧生可謂入幕之賓。東都事略に、學初舉進士、調知南宮縣、從江陵府觀察推官。【○】明光宮 前漢武帝紀に、太初四年秋、起明光宮。漢武故事に、上起明光宮、殿三燕趙美女二千人、充之。【○】峨冠 韓退之の詩に、峨峨進賢冠。【○】縉紳 史記、封禪書に、縉紳者不道。註にいふ、縉紳、劬於紳、紳、大帶と。【○】坎珂 鮑參之の詩に、志を得ないこと。揚雄の河東賦に見ゆ。【○】逐臣 戰國策に、樂之大監、趙之逐臣。【○】丞相茵 漢書丙吉傳に、取更靜暇。

丞相事上言曰、信忍之、不過汚丞相首耳。【一〇】幕落江湖上、韓退之が赴江陵詩に、朝爲青雲士、暮作白首囚。【一一】屈子、屈原を指す、楚辭離騷序に、遷之江南。【一二】不見懷喜、晉、晉康傳に、王戎自昔、與康居山陽二十年、未嘗見其喜愠之色。【一三】可人、可兒ともいふ、取るべき所ある人、晉、桓溫傳に、嘗行經王敦墓、曰、可人可人。又、東坡の詩に、始信簡明是可人。【一四】出天眞、杜子美の寄李白詩に、劍俠偏野逸、曠酒見天眞。【一五】渭興幸、史記、齊の世家に、西伯讓焉、太公於渭之陽、孟子に、伊尹耕於有莘之野。【一六】大謬、漢司馬遷傳、報任安書に、事乃有大謬不給者。【一七】芻狗、車で狗の形を造つたもの、巫祝の用ふる所である。莊子の天運篇に見ゆ。

【詩意】英宗の治平三年夏、東坡は老蘇公の喪を奉じて、舟行、蜀に歸つたとき、江陵を通つた。其時、劉莘老は荊州の幕府に在つたから、江陵昔相遇、幕府稱上賓と言つたのである。莘老は既に江陵府觀察推官となり、又、再び明光宮を見る。杜子美の十二月一日詩に、明光起草人所羨。賊冠にして、縉紳を抱き、志を得て居られた。然るに、只今三たび君を見るが、全く志を得ないで逐はれた臣となつて居る。君は朝には雲霧の間に遊んで丞相と齒を分たんとする地位を得、暮には逐臣となつて江湖の上に着ち、屈原と鄰をなす。屈原の潭湘の間に放逐されたのは、固より其の罪ではない。今、莘老も亦、湖南に謫せられて屈子と相鄰するのである。而も了に愠りも喜もしない。君は眞に取るべき人物である。邂逅して一たび歡談をする。(毛詩に、邂逅相遇、適我願兮。)醉語は天眞より發するものである。士たるものは、方に田里に在つて、自ら太公望や伊尹に比すべきである。出でて試用されるのが、大に謬である。芻狗は重ねて陳べ難い。かの芻狗が未だ用ひられないときは、盛るに餘衍(芻)を以てし、覆ふに文繡を以てし、尸祝は齋戒して之を送る。其の既に用ひた芻狗を路に棄て

るに及んでは、行くもの、其の首や、脊を踏み、草刈る人も取つて之を燒くのである。既に陳べた芻狗は再び陳べ難い。執政大臣の田里に在つた時分は、自ら太公や伊尹に比すが、出でて試用されるに及んでは大に謬辱する。當に罷め退くべきである。歳晚れて霜露が多い。芻耕當に辰に及ぶべし。(前漢の夏侯勝の傳に、學經不明、不如歸耕とあり、文選、古詩に、爲樂當及時、何能待三來茲とある。)

蘇東坡詩集 卷七

古今體詩 五十首

遊金山寺

我家江水初發源，
宦遊直送江入海。
聞道潮頭一丈高，
天寒尙有沙痕在。
中冷南畔石盤陀，
古來出沒隨濤波。
試登絕頂望鄉國，
江南江北青山多。
羈愁畏晚尋歸楫，
山僧苦留看落日。

金山寺に遊ぶ

我が家江水初めて源を發す、
宦遊直に江の海に入るを送る。
聞道らく潮頭一丈高し、
天寒うして尙ほ沙痕の在るあり。
中冷南畔の石盤陀、
古來出沒濤波に隨ふ。
試に絶頂に登り郷國を望めば、
江南江北青山多し。
羈愁晩を畏れ歸楫を尋ぬ、
山僧苦に留め落日を看しむ。

古今體詩 遊金山寺

【字解】(一)金山寺 潤州に在る。太平寰宇記、金山淨心寺、在潤州鎮東南、揚子江中。圖經に、金山龍游寺、屹立江中、爲諸碑刻之冠。

(二)江水初發源 孔子家語、三鄉篇に、江始出于岷山、其源可灑以灌。船。岷山は蜀郡に在る。(三)宦遊 仕官して他郡に暮らす、漢、司馬相如傳に、宦遊不遂而困。白居易の詩に、自我從宦遊、七年在長安。

(四)登絕頂望鄉國 岷山は江を導き、東して別に沱となり、又、東して濛に至り、九江を過ぎ、東陵に至り、中江となつて海に入る。(五)潮頭一丈高 枚乘の七發に、江水逶迤、海

微風萬頃轉文細。

微風萬頃轉文細に、

斷霞半空魚尾赤。

斷霞半空魚尾赤し。

是時江月初生魄。

是時江月初めて魄を生ず、

二更月落天深黑。

二更月落ちて天深黒。

江心似有炬火明。

江心炬火の明あるに似たり、

飛焰照山棲鳥驚。

飛焰山を照して栖鳥驚く。

悵然歸臥心莫識。

悵然歸臥心識るなし、

非鬼非人竟何物。

鬼にあらず人にあらず竟に何物ぞ。

江山如此不歸山。

江山此の如く山に歸らず、

江神見怪驚我頑。

江神怪を見はして我が頑を驚かす。

我謝江神豈得已。

我江神に謝す豈已むを得んや、

有田不歸如江水。

田あり歸らずんば江水の如きあらん。

に至りて魄を生ずる。魄とは、月の輪郭に、光の無き處なり。朔の夜には、明生じて、魄は死し、望の夜には、明死して、魄生ずるなり。【一】江心、炬火、東坡嘗ていふ、山林叢澤晦明之夜、野火生焉、散布如人乘馬、其色青、異乎人火、微表異物志に、海中懸陰晦、波如然、火飾海、以物擊之、並數如星火、有月不復見。【二】悵然、なげく貌。傳亮が感物の賦に、依然有

懷。李日の詩に、停棹依然位遠人。【三】如江水、誓ひの辭、すべて誓辭は、其處にあるものを指して、之を保證するのである。詩經に謂予不信、有如皦日。左傳、魯公二十四年、晉文公、謂晉紀曰、所不與國氏同者、有如白水。晉書、祖暕傳に、元帝以暕爲、帝威將軍、渡江、中流擊楫而誓曰、祖暕不能復濟者、有如大江。

【題義】神宗の熙寧四年（皇紀一七三一年、西曆一〇七一年）東坡三十六歳の時、杭州に通判となつて、任に赴く。十月初めて淮水を渡り、濠・楚・揚・潤の諸軍を經行し、此時、金山寺に遊び、十一月に、始めて杭州に至る。金山の寶覺・圓通の二長老を訪ひ、夜、金山寺に宿し、江中の炬火を望んで詩を作つたのである。

【詩意】我は鄉國蜀の地を去つて此に到る、思へば遠く來つたのである。蜀は、此の錢塘江の出る水源に在る。我は官遊を爲し、此の水源、即ち蜀の眉州眉山を去つて、今は、其の水が海に入る處に到る。錢塘は、觀濤の名所で、八月には、其の潮頭の高きは、一丈に至るといふことである。今は寒空のこゝととて潮は縮みて、さまで高くもないが、沙の上には潮の跡が遺つて居る。中冷泉は、天下の名水である。そして其南には石盤陀がある。試に絶頂に登つて鄉國を望むと、（鄉國は第一句の我家云云を承く）江の南も江の北も見渡す限り青山である。旅愁は晩になるを畏れて、歸棹を尋ねる。金山寺の僧は懇に留めて落日の光景を看せしめた。微風の爲に、波がちりちりとして、靴の皮のなめしに皺がよつたやうである。（陸放翁の詩に、水紋轉皺風初緊とある。即ちこの詩意である。）又、處處にたなびける霞は、半空にあつて、魚の尾の赤きがやうである。（此の二句は、巧に江上晚望の景を寫す。）江

月の輪郭に魄(光の無い處)を生じ二更(夜の十時)月が落ちて天は深黒となつた。江心は炬火明かに、飛焰は棲鳥を驚かし、悵然として懐ふ所あり。鬼でも人でもない、竟に何物か。江神は我が早く歸休しないが爲に、特に此の江心の怪物、即ち炬火の如きものを見はして、私の頑愚を驚かしたであらうが、併し私の官遊せるは、もともと生活の爲めであつて、已むを得ない。生活に差支なきまでの田園でもあつたなら、必ず速に歸休する。これ誓つて言つたことで、決して間違はない。江神が保證されるのである。(誓ひの言で結んだのは、人の意表に出づ。)

【餘論】紀昀いふ、首尾謹嚴、筆筆矯健、節短而波瀾甚闊。唐宋詩醇の評に、一往鏗澹の音を作す。自來金山を賦するもの、極意著題。正に從つて此の遠韻を得るなきを覺ゆ。起二句は、萬里の程、半生の事を將て、一筆に道ひ盡す。恰も好し岷山より江を導き、此處に至り海門に歸宿す。入題の語と爲す。中間、望郷國の句、故に羈望の語を作し、以て首尾に環應す。後、江神怪を見はすに思ひ及び、而して之を終ふるに歸田を以てす。奇を矜るの語、道を見るの言、想ひ見る登眺徘徊、一切を俯視するをとある。

自金山放船至焦山

金山より船を放つて焦山に至る

金山樓觀何耽耽。撞鐘擊鼓聞淮南。

金山の樓觀何ぞ耽耽たる、鐘を撞き鼓を撃ちて淮南に聞ゆ。

【字解】「〇」焦山 焦山普濟院は金山の東に在る。焦先(一)に焦先(二)に焦先(三)が隠れた所から焦山といふ。

焦山何有有修竹。

焦山何かある修竹あり、

采薪汲水僧兩三。

薪を采り水を汲む僧兩三。

雲霧浪打人跡絕。

雲霧浪打ち人跡絶ゆ、

時有沙戸祈春蠶。

時に沙戸春蠶を祈るあり。

我來金山更留宿。

我金山に來り更に留宿す、

而此不到心懷慙。

而して此に到らず心に慙を懷く。

同遊興盡決獨往。

同遊は興盡き獨往を決す、

賦命窮薄輕江潭。

賦命窮薄江潭を輕んず。

清晨無風浪自湧。

清晨風なく浪自ら湧く、

中流歌嘯倚半酣。

中流歌嘯半酣に倚る。

老僧下山驚客至。

老僧山を下り客の至るに驚く、

迎笑喜作巴人談。

迎へ笑うて喜んで巴人の談を作す。

自言久客忘鄉井。

自ら言ふ久客郷井を忘ると、

只有彌勒爲同龕。

只彌勒の同龕を爲すあり。

古今體詩 自金山放船至焦山

四五二

高士傳に、焦光、世莫知其所出、

或云、生漢末、嘗結草爲窟於河之

涇、後野火燒其窟、因露寢、冬雪大

至、袒臥不移。【二】耽耽、文選、

西京賦に、大厦耽耽、註にいふ、深

蓋の貌と。【三】撞鐘擊鼓、晉、

夏統の傳に、甲夜之初、撞鐘擊鼓、

初嚴聲に、食樂擊鼓、衆集撞鐘、

【四】淮南、唐書、地理志に、淮南採

訪使治揚州。【五】雲霧、羅は土

ぐしり、江總の詩に、虛字宿雲霧、

杜荀鶴の詩に山根浪打鳴。【六】沙

戸、東坡の自註に、吳人謂水中可

田者爲沙。【七】興盡、一本に盡

返に作る。【八】獨往、列子力命篇

に、獨往獨來、獨出獨入、孰能破

之。【九】賦命窮薄云云、鮑照の詩

に、賦命有厚薄、漢の揚雄傳に、或

橫江潭而漁。【一〇】清晨無風云

文選、曹子建の樂府に、雲散遊

困眠得就紙帳暖、困眠就くを得て紙帳暖かに、
 飽食未厭山蔬甘、飽食未だ厭かず山蔬甘し。
 山林飢餓古亦有、山林飢餓古亦あり、
 無田不退寧非貧、田なくして退かず寧ろ貧るにあらず。
 展禽雖未三見黜、展禽未だ三たび黜けられずと雖も、
 叔夜自知七不堪、叔夜自ら知る七の堪へざるを。
 行當投劾謝簪組、行くゆく當に劾を投じて簪組を謝す。
 爲我佳處留茅庵、我が爲に佳處茅庵を留めよ。

士師、三黜。三たび其の官等を罷黜された。【一】不堪。昔叔夜與山互爾書に、必不堪者七、甚不可者三。【二】投劾。閔仲叔は世世節士と稱す。建武中、侯霸の許に應ず。既に至る、霸は政事に及ばず、徒に勞苦するのみ。仲叔恨み、遂に辭して出で、劾を投じて去る。

【題義】此詩は、前詩と同時の作である。十一月の三日に金山寺に宿し、翌日、金山から船を放つて焦山に至り、論老に遭ひ、郷語を聞き、喜んで此の詩が出来た。

【詩意】金山の樓觀は、深遠である。四邊が静であるから、聲が遠くへ達し、鐘を撞き太鼓を撃つ音も、淮南(揚州)まで聞える。焦山には何がある。修竹がある。(毛詩に、終南何有、有條有梅。)又、兩三

の僧が薪を采つたり、水を汲んだりする。土ぐもりが浪打ちて人跡も絶えてゐるが、時に沙月の住民は、春鷺を養つて居る。我は金山に遊んで、寺に留宿したが、此處に到らなかつたことを慙ぢる。同遊の人人は興盡きて返つたが、余は獨往くことに決した。凡そ賦命には厚薄があるが、余は其の窮薄を受けて、江潭を輕んじ、之に従つて遊ぶのである。清晨風なきも、浪自ら湧く。中流歌嘯し、酒も半ば酣である。老僧(論老を指す、東坡自註に、焦山長老中江の人)は山を下り、客の來たことを驚き、迎へ笑うて、喜んで巴人の談(下里巴人は、下等なる曲の名)をなした。自ら言ふ、久しく客となつて村里の事など、とんと忘れた。只彌勒と龜を同うして居る。疲れて十分に眠ることが出来て、紙帳も暖かであつた。飽食といふ譯にはゆかないが、山蔬は甘かつた。山林に飢餓といふことは、昔もある。それで、田地がないために退かないのは、貧るのではない。柳下惠のやうに三たび黜けられなくても、稽叔夜が所謂必不堪者といふ感じがある。行くゆくは當に閔仲叔のやうに、自ら其の劾狀を投じて去るべく、(罪を案するを劾といふ)そして簪組(官位の義)を謝すべきであらう。就いては我が爲に佳處に茅庵を留められたし。(亦を編して卷とする。)

【餘論】紀昀いふ、前半以金山菜饒、後半借鄉僧生情、布局極有波折、語亦脫洒と。

甘露寺

甘露寺

江山豈不好、獨遊情易闌。

江山豈好からずや、獨遊は情闌なり易し。

古今體詩 甘露寺

但有相攜人何必素所歡
我欲訪甘露當途無閒官
二子舊不識欣然肯聯鞍
古郡山爲城層梯轉朱欄
樓臺斷崖上地窄天水寬
一覽吞數州山長江漫漫
却望大明寺惟見烟中竿
狠石臥庭下穹窿如伏獬
緬懷臥龍公挾策事瑠瓚
一談收獅子再說走老瞞
名高有餘想事往無留觀
蕭公古鐵錢相對空團圓
陂陀受百斛積雨生微瀾
泗水逸周鼎渭城辭漢盤

但相攜ふる人あらば、何ぞ必しも素より歡する所ならんや。
我甘露を訪はんと欲す、當途に閒官なし。
二子舊識らず、欣然として肯て鞍を聯ぬ。
古郡山城を爲し、層梯朱欄を轉す。
樓臺斷崖の上、地窄く天水寛し。
一覽數州を吞む、山長くして江漫漫。
却て大明寺を望めば、惟烟中の竿を見る。
狠石庭下に臥し、穹窿伏獬の如し。
緬に懷ふ臥龍公、策を挾んで瑠瓚を事とし、
一たび談じて獅子を收め、再び説いて老瞞を走らす。
名高く餘想あり、事往いて留觀なし。
蕭公古鐵錢、相對して空しく團圓。
陂陀百斛を受け、積雨微瀾を生ず。
泗水周鼎を逸し、渭城漢盤を辭す。

山川失故態怪此獨能完
僧繇六化人霓衣挂冰紈
隱見十二疊觀者疑誇謾
破板陸生畫青猊戲盤跚
上有二天人揮手如翔鸞
筆墨雖欲盡典型垂不刊
赫赫贊皇公英姿凜以寒
古柏手親種挺然誰敢干
枝撐雲峰裂根入石窟蟠
薙草得斷碑斬崖出金棺
瘞藏豈不牢見伏理可歎
四雄皆龍虎遺跡儼未剝
方其盛壯時爭奪肯少安
廢興屬造物遷逝誰控搏

山川故態を失す、怪む此れ獨能く完了。
僧繇六化人、霓衣氷紈を掛け、
隱見十二疊、觀者誇謾を疑ふ。
破板陸生の畫、青猊戯れて盤跚。
上に二天人あり、手を揮うて翔鸞の如し。
筆墨盡さんと欲すと雖も、典型不刊に垂る。
赫赫贊皇公、英姿凜として以て寒し。
古柏手親ら種う、挺然として誰か敢て干さん。
枝は雲峰を撐へて裂け、根は石窟に入りて蟠る。
草を薙ぎて斷碑を得、崖を斬りて金棺を出す。
瘞藏豈からずや、見伏の理歎すべし。
四雄は皆龍虎、遺跡儼として未だ剝せず。
其の盛壯の時に方りて、争奪肯て少くも安んせんや。
廢興造物に屬し、遷逝誰か控搏せん。

況彼妄庸子而欲事所難。 況んや彼妄庸子、而も難しとする所を事とせんと欲す。

古今共一軌後世徒辛酸。 古今共に一軌、後世徒に辛酸。

聊與廣武歎不待雍門彈。 聊か廣武の歎を興し、雍門の彈を待たず。

【字解】(一) 劉禹錫の詩に、近郊有時景、獨遊常鮮歌。 (二) 相繼 韋應物が陪王卿游詩に、君子有高園、相繼在幽尋。 (三) 素所歡 平素歡する所をいふ、漢の張良傳に、如平生歡。文選、陸士衡の擬古詩に、置酒宴所歡。 (四) 當造 要地に在る人、韓非子に、當造之人種事要。 (五) 開官 白樂天の詩に、終當乞開官、退與夫子游。 (六) 山爲城 史記、始皇本紀に、新華爲城。註にいふ、新華山、爲城。 (七) 江漫漫 白樂天の新樂府に、海漫漫直下、無底旁無邊。 (八) 大明寺 揚州に在り。維揚志に、寺在江都縣西北、古之棲霞寺也。 (九) 狼石臥庭下 輿地志に、石羊巷、在城南、吳時孫氏廢道也。劉備詣孫權、權與俱、因得各種一羊。 (十) 穹窿 簡文帝の詩に、天開復穹窿。 (十一) 羶 吳羊に似て大角。爾雅の釋畜に、羶如羊。史記に、羶如羊。 (十二) 事 劉楨、文選の答賓戲に、商鞅挾三術、以饋孝公。三術は帝道、王道、霸道をいふ。 (十三) 制子 制は狂犬をいふ。曹操は、孫策が江東を平定したと聞き、宜甚だ之を難る。嘗て呼ぶ、制兒難與爭鋒。 (十四) 走老驄 蜀志、諸葛亮傳に、說孫權、與先主并力、敗曹操於赤壁。 (十五) 事 杜云云 文選、謝靈運が詩に、三江事多往。 (十六) 古鐵鑊 名勝志に、甘肅寺中鐵鑊甚類、梁天監十八年造、在解脫殿前。銘にいふ、滿貯甘泉、種以荷車、供養十方、一切諸佛。 (十七) 陂陀 陂陀といふに同じ、地の斜にして平かでない貌。司馬相如、子虛の賦に、登陂陀之長阪。司馬相如の傳に、罷池陂陀下屬江河。 (十八) 微瀾 韓退之、南山の詩に、微瀾動水面。 (十九) 泗水過周鼎 今の泗水は、古、泗水の上流である。秦、昭襄王五十二年、秦は西周を攻め、寶器九鼎を取る。其の一、飛んで泗水に入り、船の八は、秦に入る。 (二十) 渭城辭漢整 李賀、金銅仙人辭漢歌に、攜盤獨出月荒涼、渭城已遠波聲小。魏の景初元年に、長安の鐵鑊、詔騎、劍人、承盤盤を從す。盤は折れ、劍人は重うして致すべからず、渭城に留む。 (二十一) 故壘 後漢嚴光傳に、狂奴故壘也。韓退之の詩に、興零失故壘。 (二十二) 化人 列子、周穆王嘗に、周穆王

時、西極之國有化人來。 (三) 覽衣 劉禹錫の詩に、玉清臺上著覽衣。 (四) 冰執 執は素、色、鮮潔、冰の如きをいふ。 (五) 雙履 史記、平原君傳に、民家有雙者、雙履行設。 (六) 天人 涅槃經に、佛爲天人師。 (七) 筆墨 杜子美が賣物の詩に、雙色久秋遠、蒼然猶出塵。 (八) 不刊 不朽といふに同じ、けづられぬ書、杜預春秋傳序に、左邱明受經於仲尼、以爲經者不刊之書也。 (九) 絲絲 毛詩に、絲絲索索。杜子美の詩に、絲絲蕭蕭光、今爲時所憐。 (十) 贊皇公 唐の李德裕傳に、初封贊皇縣伯。 (十一) 英豪 杜子美が丹青引に、英豪萬代聞。 (十二) 雲峰 趙鼎詩に、雲且見雲峰。 (十三) 石窟 晉書、郭璞傳に、鑿石窟而居。 (十四) 華草 周禮に、華氏掌殺草。 (十五) 遺跡 國語に、靈王不顧其民、一國棄之、如遺迹焉。 (十六) 前漢書 韓信傳に、刺印冠。註にいふ、刺、手弄角謂也。 (十七) 爭奪 杜子美の詩に、漢漢世界黑、國國爭奪繁。 (十八) 遐文 文選、王仲宣が登樓賦に、遺紛濁而運遐。 (十九) 控擗 引き止め打つこと、買置の服賦に、千變萬化兮、未始有執、忽然爲人兮、何足控擗。 (二十) 安庸子 前漢書に、灌嬰怒、顧魏勃笑曰、人謂魏勃勇、安庸人耳。 (二十一) 一軌 禮記に、天下車同軌、書同文。漢書中の詩に、古今同一軌。 (二十二) 辛醜 杜子美の詩に、自古鼻酸辛。 (二十三) 廣武 元和郡縣志に、梁海縣有廣武城、晉の阮瞻傳に、嘗登廣武、觀楚漢戰處、歎曰、時無英雄、使一髮子成名。

【題義】熙寧四年十一月、東坡は潤州(今の江蘇、丹徒縣)を渡り、北固山に登り、甘露寺に遊んで此詩を作る。東坡自ら此詩に註していふ、欲遊甘露寺、有二客相過、遂與偕行、寺有石如羊、相傳謂之狼石、云、諸葛孔明坐其上、與孫仲謀論曹孟德也、大鏡二、案銘、梁武帝所鑄、畫師子一、菩薩二、陸探微筆、衛公所留祠堂在寺、手植栢合抱矣、近寺僧發古殿基、得舍利七粒并石記、乃衛公爲穆宗皇帝追福所葬者也。紀昀いふ、以記序體行之、與李氏園詩同法、首尾完整、可爲長篇之式也。

【詩意】江山の風光は、なんと好いではないか、獨で遊ぶのは、情が閑なり易い。(閑とは事の半)

を過ぎた義である。情閑は、面白い情の最中を過ぎた意である。ただ相攜へて共に樂む人があれば、まことに好都合である。其の人は必しも平生の歡ある人でなくても宜しい。我は甘露寺に遊ぶうとするが、要路の人には閑な官はないから、共に行く人も居ない。此度、見えた二客は、舊、相識つた人ではないが、欣然として鞍を聯ねて遊ばれる。古郡は、山が城を爲して、層梯が朱塗の欄干を轉する。(古人が題山院詩に、薄日度朱欄とある。)樓臺は、斷崖の上にあつて、地が窄く、天水が寛い。一覽して數州を呑む。(白樂天が詩に、地窄虛空寬とある。)山は長くして江は漫漫、却て大明寺を望むと、ただ烟中に一竿を見るのみである。狼石が庭下に臥し、高くゆみなりに曲つて居る。羊の伏した形である。細に懷ふ、例の臥龍公(諸葛孔明をいふ)が籌策を挾んで劉備を鑽(歡心を買ふこと)したことを。孔明は一たび談じて劉子(孫策をいふ)を收め、再び孫權に説いて、劉備と力を并さしめ、曹操を赤壁に敗つた。(老瞞は曹操を指す)其の名は高くして、他から餘想がなされる。併し事は往いて觀を留めない。又、甘露寺には、梁の天監十八年(皇紀一一七九年、西曆五一九年)に、武帝(姓は蕭、名は衍)が造つたといふ古い鐵の鑊が二つ相對して圓く横はつて居る。其の地は破陀として百斛を受け、積雨が微瀾を生ずる。酒水は周鼎を沒せしめ、涪城は漢の承露盤を他に徙さしめない。山川は故の形態を失ふも、此れよく獨完いのは不思議である。甘露寺に、張僧繇の畫いた菩薩がある。覺衣は鮮潔冰のやうである。十二疊に隱見して居る。(六枚の陰陽兩面が皆、畫である。陽は菩薩、陰は天王が畫かれて居る)觀るものは、其の夸謔なるを疑つて居る。又、甘露寺に、陸探微(南齊、吳郡

の人)が畫いた後現がある。戲れて樂躡(寒み行く貌)として行く。上に二天人があり、手を揮うて鸞鳥の翔けるに似る。よし筆墨は盡きんと欲するも、典型は不朽に垂れる。甘露寺に、李德裕の祠堂、畫像及び植ゑし所の楡がある。赫赫たる贊皇公李德裕の英姿は凛として寒い。李衛公(李德裕は衛國公に封せらる)が手親ら種ゑた古柏(楡は柏葉松身)は、挺然として立つて居る。誰か敢て干さうぞ。枝は雲峰を撐へて裂け、根は石窟に入りて蟠る。草を剪り取りて斷碑を得、崖を斬りて金棺を出した。(傳へいふ、昭寧四年の春、涪州の甘露寺で、神光が毎夕、洞窟の間に起る。一旦、其の窟が故なくして自ら圯る。再び之を營み、基を築かうとして土を觀す。地を去る數尺、一礎、土中に覆はる。刻していふ、唐太和三年正月二十四日、於上元縣禪衆寺舊塔基下、獲舍利石函、以三其年二月十五日、重經藏於丹徒縣甘露寺東塔下、金棺一、銀椀一、錦襖九重、皆余之施也、余創甘露寺實利、重經三舍利、以資穆王之冥福也、江浙西道觀察等使兼涪州刺史李德裕記とある。)經藏は、なんと牢いことではないか。見はれたり、伏したりの理は、まことに不思議で歎すべきである。四雄は諸葛孔明・孫仲謀・蕭梁武帝・贊皇公李德裕、皆、龍虎である。遺迹は儼として今尚ほ廉隅が去れない。其の盛壯の時に方つては爭奪を事として少しも安んじなかつたであらう。凡そ物の廢興は、大自然の作用である。紛濁に遭うて遷逝するのを、誰か控擗しようぞ。まして彼の妄庸子にして、難き所を事としようとするは、其の量を知らないものである。而も古今共に軌を一にして居る。後世は徒に辛酸する。そこで余も亦、阮籍のやうに廣武城に登り、時に英雄なしの歎聲を發せざるを得ない。必しもかの雍門周の琴

を鼓して孟嘗君を悲ましめることを待たない。桓譚新論に、雍門周以琴見孟嘗君、君曰、先生鼓琴、亦能使文悲乎、對曰、竊爲足下有所悲、千秋萬歲後、墳墓生荆棘、游童牧豎、踰園而歌其上。曰、孟嘗君之尊貴、亦若乎、於是孟嘗君明然太息、淚承睫而未下、雍門周引琴鼓之、孟嘗君遂歎秋而就泣、とある。

次韻子由柳湖感物

子由が柳湖、物に感ずるに次韻す

憶昔子美在東屯、數間茆屋蒼山根、
嘲吟草木調蠻獠、欲與猿鳥爭啾喧、
子今憔悴衆所棄、驅馬獨出無往還、
惟有柳湖萬株柳、清陰與子供朝昏、
胡爲譏評不少借、

憶昔子美は東屯にあり、數間の茆屋蒼山の根、草木を嘲吟して蠻獠に調せらる、猿鳥と啾喧を争はんと欲す。子は今憔悴して衆の棄つる所、馬を驅つて獨出で往還するなし。惟柳湖萬株の柳あり、清陰子が與に朝昏に供す。胡爲れぞ譏評少しも借さざる、

【字解】柳湖 名勝志に、陳州の城北にあり、子由教授たるとき、亭を上に勝むと見ゆ。

【一】 蘇詩 韓退之の文に、使庸接、雖、評文章、商、較人士。【二】 不、少借。史記荆軻傳に、願大王少借借之。【三】 生、意、凌、極、云、世、說に、桓元既敗、殷仲文還爲大司馬、謂、顧、胤、顧、胤、老、憐、曰、槐、樹、婆、娑、無、復、生、意、庾、信、枯、樹、賦、に、此、樹、婆、娑、生、意、盡、矣。【四】 憔悴、失、意、の、貌、五、子、滕、文、公、篇、に、夷、子、憔悴、爲、困、曰、命、之、矣。【五】 濯、濯、晉、王、恭、傳、に、恭、美、姿、儀、或、曰、之、曰、濯、濯、如、春、月、柳、人、品、の、美、し、く、光、顯、なる、形、容。【六】 條、蛇、白、樂、天、の、詩、に、根、株、抱、石、長、屈、曲、蟲、蛇、蟠。【七】 疎、影、掃、清、圓、杜、子、美、の、詩、に、松、門、疎、影、掃、清、圓。【八】 春、聲、亂、晉、書、列、女、傳、に、雪、驟、下、謝、安、曰、何

生意凌挫難爲繁、柳雖無言不解慍、
世俗乍見應慍然、嬌姿共愛春濯濯、
豈問空腹修蛇蟠、朝看濃翠傲炎赫、
夜愛疎影搖清圓、風翻雪陣春絮亂、
蠹響啄木秋聲堅、四時盛衰各有態、
搖落悽愴驚寒溫、南山孤松積雪底、
抱凍不死誰復賢、

生意凌挫繁を爲し難し。柳は言ふなく慍ることを解せずと雖も、世俗乍に見て應に慍然たるべし。嬌姿共に愛して春濯濯、嬌姿共はんに空腹修蛇の蟠るを。朝に看る濃翠炎赫に傲るを、夜は愛す疎影清圓を掃かすを。風翻へりて雪陣春絮亂れ、蠹響啄木秋聲堅し。四時盛衰各態あり、搖落悽愴寒溫に驚く。南山の孤松積雪の底、凍を抱いて死せず誰か復賢らん。

所似也、道韞曰、未若柳絮因風起。【六】 四時盛衰云云 白樂天、松庭の時に、四時各有趣、萬木非其例。【七】 抱凍、庚

古今體詩 次韻子由柳湖感物 四六一

情が詩に、寒魚抱凍沈。

【題義】此詩は熙寧四年七月、陳州にて作つたものである。子由の原作は、柳湖萬柳作雲屯、種時亂插不須根、根如臥蛇身合抱、仰視不見蝴蝶喧、開花三月亂飛雪、過船渡水無復還、窮高極遠風力盡、寒墜泥土顏色昏、偶然直墜湖水中、化爲浮萍輕且繁、隨波上下去無定、物性不改天使然、南山老松長百尺、根入石底蛟龍蟠、秋深葉上露如雨、傾流入土明珠圓、乘春發生葉短短、根大如指長而堅、神農嘗藥最上品、氣力直壓鍾乳溫、物生稟受久已異、世俗何始分愚賢、である。紀昀いふ、與原詩相答、乃唱和正格、唐人此種處不苟、後人乃自說自話、不過依次用韻耳と。王文誥いふ、按子由詩意、謂柳花入水爲浮萍、松性堅耐、其露墜地爲仙茅、功力十倍于鍾乳、故東坡有胡爲謾評句と。

【詩意】昔、杜子美が東屯（夔州故城の東）に居つた時分は、蒼山下、廣さ數間の茅葺の屋に住まはれた。草木を嘲吟して蠻獠の地方に選任され、猿や鳥と鳴き聲を争ふ状であつた。子は今瘦せ衰へて衆に棄てらる。馬を驅つて悠悠獨出で、誰も往復する人はない。惟、柳湖に萬株の柳が波を拂つて垂れて居る。（杜牧の詩に、萬株楊柳拂波垂。）清い陰は、朝夕、子の憩ふ處である。なんすれぞ譏評少しも借さざる。生意は凌挫されて繁ることも出来ない。柳は物を言はず憚りもしないけれども、併し、世俗は乍ら見て、應に無然たることであらう。そして美しくなまめかしき姿の瀟灑として春月の如きを愛するであらう。空腹となつた長い蛇が蟠つて居るやうなことはかまはない。柳は朝に濃翠の

炎赫に傲るを見るし、夜は疎影の清圓を搖かすを愛する。春風は雪陣を翻して柳の絮は亂れ散る。秋聲は木のしんを食ふ蟲、木を啄む蟲となつて柳の樹にある。四時の盛衰各、態があつて、或は搖落し、或は悵悵として、寒温に驚く。ただ南山の孤松は、積雪の中に、凍を抱いて死なない。誰か復、之に賢らうぞ。

次韻楊褒早春

楊褒の早春に次韻す

窮巷淒涼苦未和、
君家庭院得春多、
不辭瘦馬衝殘雪、
來聽佳人唱踏莎、
破恨徑須煩麴蘖、
增年誰復怨羲娥、
良辰樂事古難竝、
白髮青衫我亦歌、
細雨郊園聊種菜、

窮巷淒涼として未和を苦しむ、君が家の庭院春を得ること多し。瘦馬の殘雪を衝くを辭せず、來り聽く佳人踏莎を唱ふるを。破恨徑に須ふ麴蘖を煩はすことを、年を増すも誰か復羲娥を怨まん。良辰樂事古より竝び難し、白髮青衫我亦歌ふ。細雨郊園聊か菜を種う、

【字解】【一】楊褒、字は之美、華陽の人。嘉祐の末、國史監直講となる。治平の間、穎州に通判たり。

【二】窮巷、漢、陳平傳に、家乃負郭窮巷。【三】瘦馬、白樂天の詩に、僊君馬瘦衣裘薄、許到江東勸鄒夫。【四】衝、殘雪、一本に衝衝、雪に作る。日高臥の詩に、未幾頭

時傾一盞、何如衝雪趁朝人。【五】佳人、美人に同じ、李延年の詩に、北方有佳人、絕世而獨立。【六】踏莎、今の曲名に踏莎行あり。莎は海邊に生ずる草の名。【七】種、種

世説に、今年田得七百斛、種

古今體詩 次韻楊褒早春

四六三

冷官門戶可張羅。

冷官門戶羅を張るべし。

放朝三日君恩重。

放朝三日君恩重し。

睡美不知身在何。

睡美にして身何在るを知らず。

杜子美が小園種秋菜一詩に、秋耕屬地温、山雨近荒句、冬膏飯之中、牛力晚來新、深耕種數畝、未甚後四鄰。【一】張羅、漢の鄧當時が傳に、下邳程公爲廷尉、賓客填門、及廢、門外可設雀羅。【二】放朝、白樂天が詩に、歸騎紛紛九衢、放朝三日爲泥塗。司空圖の詩に、高秋期步野、微雨放朝。

【題義】此詩は、熙寧三年正月の作。詩意を考ふるに、東坡が楊襄の家にとつて之を和したものである。情境の繪の如きを見ても遠方から寄せ和した詩ではない。

【詩意】郊外の窮巷は物すさまじくして、まだ陽和の時候とはならない。然るに君が家の庭院は、已に春色が枝頭に満ちて居る。それで、余は瘦せた馬に騎つて殘雪を衝くことも辭しなかつた。來つて美人が踏莎行の曲を唱ふるを聴く。恨は休めて酒でも飲まうよ。東南海の外、甘水の間に、羲和といふ國があり、又、羲和と名ける女子があつた。そこで羲和日に甘淵に浴し、十日(日輪をいふ)を生んだといふ傳説がある。十日を生み、年を増しても、誰か復羲娥を怨まうぞ。謝靈運は、天下良辰、美景賞心、樂事、四者は、並び難しと言つたが、まことに、良い辰と楽しい事とは、古から一致することが難しい。白髮青衫(盧業の詩にも青衫白髮病參軍と見ゆ)我も亦歌ふ。かの白樂天も、白髮更に添ふ今日の鬢、青衫猶は是れ去年の身と歎じたではないか。郊外の園、細雨霏霏として土を濕ぼす。

我は卑い官で、訪ふ人もなく、門戸に雀の羅を張ることが出来る。朝に趨るを放さるる三日、君恩は重い。睡る心地が美くて身の何處にあるか判らなくなつた。(杜子美の詩にも、曉來急雨春風顛、睡美不聞鐘鼓傳、とある。)

初到杭州寄子由二絶

初めて杭州に到り子由に寄する二絶

眼看時事力難勝。

眼に看る時事力勝へ難し。

貪戀君恩退未能。

君恩を貪戀して退くこと未だ能はず。

遲鈍終須投効去。

遲鈍終に須らく効を投じて去るべし。

使君何日換豐丞。

使君何の日か豐丞を換へん。

【字解】(一)杭州、今の浙江、杭州。 (二)力難勝、韓退之の詩に、居間食不足、從仕力難勝。 (三)君恩、君恩云云。白樂天の詩に、未報君恩歸未得、想君爲寄北山文。 (四)遲鈍、漢の翟方進の傳に、遲鈍不及事。如は鈍と同じ意に用ふ。 (五)投効、兼官をいふ。後漢書、孔融傳に、融即事、歸還所、投効而去。

【題義】此詩は神宗の熙寧四年十一月、杭州で作つたものである。東坡の時事を論する往往適切なものがあつたから、神宗は大に善しと稱したが、王安石に惡まれて外に出され、杭州に通判になつたのである。紀昀いふ、兩詩並太露太盡、と。

【詩意】青苗(春苗がまだ青い時に、民に金を貸し、收穫の時に、元利とも返済せしめる法)助役等王安石の新法は、今や其の煩に堪へない。己の才力も亦、其の任に勝へないのである。ただ君恩を

貪つて、退職することが出来ない。併し、鈍才の我は終に致仕すべきである。杭州の太守（沈立を指す）は何時響の如き丞（東坡自らいふ）を換へることであらう。（漢書の黃霸傳に、許丞といふもの、老いて聾を病む。督郵は白して之を逐はんとした。黃霸曰く、許丞は廉吏である、重聽するも何ぞ傷らんと。重聽とは、耳が聞えないで幾度も聞きかへすことである。）

聖明寛大許全身、
聖明寛大身を全うするを許さる、

衰病摧頹自畏人、
衰病摧頹自ら人を畏る。

莫上岡頭苦相望、
岡頭を上りて苦に相望むこと莫れ、

吾方祭竈請比鄰、
吾方に竈を祭りて比鄰を請ふ。

【詩意】宋史を按ずるに、王安石は東坡を恨怒して之を害しようとしたが、其の口實が無い。たまたま謝景温が東坡向に父の憂（父の喪をいふ）に丁つて蜀に歸つた時、往還多く舟に乗り、物を載せ、私鹽を貨賣したことを劾した。安石は大に喜んで按問させたが、卒に其の實がなかつた。東坡は京に至り、外を請ひ、杭州の通判となつた譯である。それで聖明（陛下をいふ）は寛大にあらせられ、我が身を全うすることを許さる。ただ衰病摧頹して、兎角、人を畏れてならない。どうか岡頭の上つて

【字解】〔一〕寛大 手やはらかにする、後漢書に、春日下寛大詔。

〔二〕摧頹自畏人 白樂天の詩に、岡頭向隅心、摧頹自懼人。文選、

魏文帝の雜詩に、客子常畏人。〔三〕

祭竈 竈、白虎通に、夏祭竈者、火之主、人所自愛也、夏亦火王、長。

瞻望しないやうに、我は方に竈（五祀の一）を祭りて比鄰を請ひ、杭州に通判となつた。（漢書に、張忠爲御史大夫、辟孫寶爲屬、欲令授子經、寶自劾去、後署主簿、徙入舍祭竈請比鄰、とある。王文詒いふ、一結妙甚、と。）

次韻柳子玉二首 柳子玉に次韻す 二首

地爐 地爐

細聲蚯蚓發銀瓶、
細聲蚯蚓銀瓶を發す、

擁褐橫眠天未明、
褐を擁して横に眠りて天未だ明けず。

衰鬢鐮殘倒雪領、
衰鬢鐮殘して雪領に敲り、

壯心降盡倒風旌、
壯心降り盡して風旌を倒す。

自稱丹竈錘銖火、
自ら稱す丹竈に錘銖の火ありと、

倦聽山城長短更、
聽くに倦む山城長短の更。

聞道牀頭惟竹几、
聞道らく牀頭惟竹几、

夫人應不解卿卿、
夫人は應に卿卿を解せざるべし。

尺牘中旌。〔六〕丹竈 鍊丹の竈。文選、江文通の別賦に、守丹竈而不顧。

古今體詩 次韻柳子玉二首・地爐

【字解】〔一〕地爐 齊書に、牀下設地爐火。〔二〕蚯蚓 韓退之が石鼎聯句詩に、時於蚯蚓發、微作。音龍鳴。〔三〕擁褐 纂異記に、陳季卿遇終南山翁携褐而坐。〔四〕鐮殘 鐮は毛むきにて毛髮を抜き取る。杜牧之の詩に、金鑷洗霜鬢。

〔五〕雪領 唐の鄭興字は寅先の津陽門詩に、笑云始老不勝雪、風蕭雪領霜垂頰。〔六〕壯心降 毛詩に、我心則降。杜子美の詩に、更覺寸心降。〔七〕倒風旌 史記、蘇秦傳に、齊王曰、寡人心搖搖如懸旌。

五東野の京山行に、此時遊子心、百

【題義】年譜を按ずるに、東坡の杭州に到つたのは、熙寧四年の十一月であるから、此詩も其の季節が背景になつて居る。

【詩意】蚯蚓は湿地の中に棲み、夜出て土を食ひ、聲清く鳴く、そして曉には、復土中に入る。其の細い聲が銀瓶から發する。我は褌衣を捲して此聲を耳にし、横さまに眠つて居り、天がまだ明けない。そこで我身を顧ると、抜き取られた後の衰鬢も飄蕭として霜が頤に垂れて居る。昔の壯心も今は衰へて風中の旌が倒れたやうである。道家の書に、凡一斤藥有二十六兩、每兩有二十四銖、從冬至建子日辰起、火、分兩錙銖相應とあるが、鍊丹の竈には、錙銖の火があるから、丹龍を守つて他を顧みない。山城で打つ長短の更鼓（夜中時刻を知らせる爲に打つ太鼓）も、聴くに倦む。聞けば牀頭には、惟、竹几（俗に竹几を竹夫人といふ）竹夫人では、例の卿卿といふことは解らないであらう。昔、王安豐の婦、常に安豐を呼ぶ時、卿といふ。安豐曰く、婦人が嚙に向ひ卿といふは、禮に於て不敬である。答へて曰く、我親卿愛卿、是以卿卿、我不卿卿、誰復卿卿、と言つたさうである。

紙帳

紙帳

亂文龜殼細相連。

亂文龜殼細くして相連る、
「ならず。

慣臥青綾恐未便。

青綾に臥するに慣れて恐くは未だ便、

潔似僧巾白氎布。

僧巾白氎布よりも潔く、

【字解】
【一】紙帳 東坡の詩に、
困眠得紙帳暖。
【二】亂文龜殼
云云 此の句は紙ないふ、一説には
錦綺匹段を實物とする。さうする
と、慣臥、潔似、暖於の三句は、皆、

暖於蠻帳紫茸氈。

蠻帳紫茸氈よりも暖かなり。

錦衾速卷持還客。

錦衾速に巻いて持して客に還へす、

破屋那愁仰見天。

破屋那ぞ愁へん仰いで天を見るを。

但恐嬌兒還惡睡。

但恐くは嬌兒の還惡睡し、

夜深踏裂不成眠。

夜深うして踏裂して眠を成さざるを。

詩に、光明白氎巾。【一】紫茸氈 趙后外傳に、帝賜后紫茸氈氣帳。【二】錦衾速卷持還客 杜子美の詩に、錦衾速卷持還客。始覺心和平。【三】破屋 韓退之が寄盧全詩に、破屋數間而已矣。【四】嬌兒 受子の稱。歐陽修の詩に、嬌兒疑女嬰。【五】踏裂 杜子美の詩に、布衾多年冷似鐵、嬌兒惡臥臥裏裂。

【詩意】亂文龜殼の模様がある紙は、細くして相連つて帳となる。青綾被に臥すに慣れた人には、この紙帳は、恐らくは不便であらう。併し、紙帳は、僧巾白氎布よりも潔い。蠻帳紫茸氈よりも暖かである。美しい錦の衾は、速に巻いて客に返へす、破れた家に住み馴れた身は、仰いで天を見ることは心配しない。但だ恐れるのは、可愛い子が寢様が悪く、夜深けて、踏み裂いて眠られないことである。

【餘論】神仙傳に、董奉居豫章。時、大旱、縣令丁士彥請致雨、奉曰、雨易得耳、貧道屋皆見天、恐雨至何堪、令曰、先生但致雨、當爲立架好屋、明日、士彥令起屋、立成、暮乃大雨。

臘日遊孤山訪惠勤惠思二僧

臘日孤山に遊び、惠勤、惠思二僧を訪ふ

天欲雪雲滿湖。

天雪ふらんと欲して雲湖に滿つ、

樓臺明滅山有無。

樓臺明滅山有無。

水清石出魚可數。

水清く石出で魚數ふべし、

林深無人鳥相呼。

林深く人無く鳥相呼ぶ。

臘日不歸對妻孥。

臘日歸りて妻孥に對せず、

名尋道人實自娛。

名は道人を尋ねて實は自ら娛む。

道人之居在何許。

道人の居は何れの許に在る、

寶雲山前路盤紆。

寶雲山前路盤紆。

孤山孤絕誰肯廬。

孤山は孤絶誰か肯て廬せん、

道人有道山不孤。

道人道あり山孤ならず。

紙窗竹屋深自暖。

紙窗竹屋深うして自ら暖む、

擁褐坐睡依團蒲。

褐を擁し坐睡して團蒲に依る。

天寒路遠愁僕夫。

天寒く路遠くして僕夫を愁へしむ、

【字解】 臘日、冬至より後、

三度目の戌日に、百神を合祭するを

臘といふ。因りて陰曆十二月の異名

となる。杜荀鶴の詩に臘日前年暖何處、

今年臘日凍全消。【孤山】 錢謙

治を去る四里、湖中に獨立する一峰。

【惠勤】 檢校の人、詩文に長ず。

惠思も同時の僧。王安石が集に、處

惠思詩があ。【明滅】 杜子

美が雨の詩に、明滅別常微、隱見巖

委露。白樂天が望香山詩に、反照

轉、樓臺、輝煒似圓堂、冰浮水明滅、

雲壓松偃亞。【有無】 王維の詩

に、江流天地外、山色有無中。【水

清石出】 古樂府に、露、彌且勿、

水清石自見。【相呼】 李太白の

詩に、清風動、蕭竹、越鳥相呼。杜

子美の詩に、暗飛螢自照、水宿鳥相

呼。【歸對妻孥】 漢の薛宣、

左馬朗となり、教を出して曰く、宜

從、乘歸對妻孥、設酒肴請鄰里、

一笑相樂。【自娛】 漢、楚元王

傳に辟張常以書自娛。【寶雲

寺】 乾德二年に、吳越王錢氏建つ。

【盤紆】 盤旋屈曲の意。司馬相

如が子虛賦に、山則盤紆靡鬱。沈休

文が詩に、野徑既盤紆、荒阡亦交互。

【坐睡】 說苑に、齊景公、坐睡

。【愛琴】 文選に、愛琴、駕而亟行。

【取求】 文選に、取求、取求、皆須、朝

敬夕謝。【前漢】 韓信傳に、追亡者耳。【江文通】 江文通の恨賦に、能罷慕、智離之狀。

【照寧】 照寧四年の作で、十一月二十八日に任に到り、十二月一日、(東坡官に到

る三日目) 惠勤を孤山の下に訪うて、此詩を賦したのである。

【詩意】 空が雪模様で、雲が湖面に滿つ。樓臺が隠れたり見はれたりし、山も有ると思ふと、忽ち

無く、無いと思ふと、又、忽ち有る。水清くて、石自ら見はれ、水中の魚も、ありありと數へられ

る。深林で人が居ないから、鳥も相呼んで居る。年の暮にも、歸つて妻子に對しない。名は道人を尋

る。

整駕催歸及未哺。

駕を整へ歸るを催し未だ哺れざるに、

出山廻望雲木合。

山を出で廻望すれば雲木合す、

但見野鶻盤浮圖。

但見る野鶻の浮圖に盤るを。

茲遊淡薄歎有餘。

茲遊は淡薄にして歎び餘あり、

到家恍如夢蘧蘧。

家に到りて恍として夢の蘧蘧たるが、

作詩火急追亡逋。

詩を作つて火急に亡逋を追ふ、

清景一失後難摹。

清景一たび失はば後摹し難からん。

夢五丈夫。

【圓蒲】 圓蒲が詩に、蒲團坐如鏡。【僕夫】 毛詩に、僕夫况瘁。【佛骨】 佛骨を瘞める所。柳子厚の文に、浮圖僧説がある。【有】 晉の陶侃傳に、飲酒有定限、常飲有餘兩限已滿。【塔】 塔をいふ、佛骨を瘞める所。柳子厚の文に、浮圖僧説がある。【火急】 甚だ急なるをいふ、北史、齊武帝紀に、取求火急、皆須朝敬夕謝。【追亡】 前漢、韓信傳に、追亡者耳。【江文通】 江文通の恨賦に、能罷慕、智離之狀。

【題義】 此詩も前詩と同じく照寧四年の作で、十一月二十八日に任に到り、十二月一日、(東坡官に到

る三日目) 惠勤を孤山の下に訪うて、此詩を賦したのである。

【詩意】 空が雪模様で、雲が湖面に滿つ。樓臺が隠れたり見はれたりし、山も有ると思ふと、忽ち

無く、無いと思ふと、又、忽ち有る。水清くて、石自ら見はれ、水中の魚も、ありありと數へられ

る。深林で人が居ないから、鳥も相呼んで居る。年の暮にも、歸つて妻子に對しない。名は道人を尋

る。

ねるといふに在るが、實は自ら娛むのである。惠勤・惠思、兩道人の住居は何處か、行いて尋ねようと思ふが、寶雲山前は路がわだかまり曲つて居る。又、孤山は孤絶で、樓閣は碧波の間に參差としてをるが、誰も塵を結んで居ない。(孤山は西湖中の稍西なる一嶼で、聳立して居る。)併し、道人に道があつて、山は友を得、決して孤ではない。(孤山の名が當らない。)紙の窓、竹の屋、深く自ら暖め、裨衣を擁し居眠りして蒲團に依る。さて、天寒く、路遠く、僕夫をして愁へしめるから、日が暮れない内に、獨を促して歸ることにした。山を出でて廻望すると、雲も木も合して、但、野鶴(はやぶさ、鷹の屬)の寺塔の上に盤旋するを見るのみ。昔、向秀は淡薄に甘んじたが、この遊こそ淡薄で、歡が餘ある。家に歸つても、ほんやりとして、夢の遽遽然(形があつて驚き動く貌)たるを覺える。(莊子、齊物論に、昔者、莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、俄然覺則遽遽然周也、不知周之夢爲胡蝶、與、蝴蝶之夢爲周與とある。)詩を作つて火急に亡げるものを追ふ、(通も亡る意)清景が一たび失ふと後では摹寫し難いからである。(紀時いふ、忽疊韻、忽隔句韻、音節之妙、動合天然、不_レ容_二湊拍、其源出_二於古樂府と。)

李杞寺丞見和前篇復用元韻答之

李杞寺丞、前篇に和せらる、復、元の韻を用ひて之に答ふ

獸在藪魚在湖

獸は藪に在り魚は湖にあり、

【字解】 ① 寺杞 字は堅甫、

一入池檻歸期無。 一たび池檻に入りて歸期なし。
 誤隨弓旌落塵土。 誤つて弓旌に隨つて塵土に落ち、
 坐使鞭箠環呻呼。 坐に鞭箠をして環つて呻呼せしむ。
 追胥連保罪及孥。 追胥連保罪孥に及び、
 百日愁歎一日娛。 百日愁歎して一日娛しむ。
 白雲舊有終老約。 白雲舊終老の約あり、
 朱綬豈合山人紆。 朱綬豈山人の紆ひに合はんや。
 人生何者非_二蘧廬_一。 人生何者か蘧廬にあらざらん、
 故山鶴怨秋猿孤。 故山鶴怨み秋猿孤なり。
 何時自駕鹿車去。 何れの時か自ら鹿車に駕して去り、
 掃除白髮煩_二菖蒲_一。 白髮を掃除して菖蒲を煩さん。
 麻屨短後隨獵夫。 麻屨短後獵夫に隨ひ、
 射弋狐兔供朝哺。 狐兔を射弋して朝哺に供せん。
 陶潛自作_二五柳傳_一。 陶潛は自ら五柳の傳を作り、

古今體詩 李杞寺丞見和前篇復用元韻答之

四七三

熙寧七年に、三司判官を以て提舉成
 都茶事たり。寺丞は、大理寺丞。
 【一】 獸在藪云云 莊子、田子方篇
 に、草食之獸、不_レ疾_二易_一。又、大
 宗師篇に、魚相忘乎江湖。【二】
 隨弓旌 左傳、莊公二十二年に、驅
 車乘、招我以_レ弓。孟子に招_二大夫
 以_レ旌。【三】 鞭箠 國語に、君王
 不_レ以_二鞭箠_一使_レ之。【四】 呻呼 列
 子、周穆王篇に、昔夢爲_二人_一、數罵
 杖撻、無_レ不至也、眠中呻呼呻呼、
 微_レ且息焉。【五】 追胥 周禮、小司
 徒之職、以_レ比_二追胥_一、以_レ合_二貢賦_一。追
 は逐寇をいひ、胥は盜賊を何捕する
 をいふ。【六】 連保 東坡の自註に
 近世渡_二鹽賊_一、皆坐_二同保_一、後_二其家_一。
 【七】 朱綬 後漢、吳鳳志の註に、
 太子及諸王、金印龜紐、朱綬。朱
 は黒みたる赤。【八】 紆 まとふこ
 と、揚子に、紆朱懷_二金之樂_一。【九】

潘閣畫入三峰圖

潘閣は畫かれて三峰の圖に入る。

吾年凜凜今幾餘

吾年凜凜今幾餘か餘す

知非不去衛衛

非を知りて去らず衛衛を慚づ

歲荒無術歸亡逋

歲荒して術なく亡逋に歸す

鵠則易畫虎難摹

鵠は則ち畫き易く虎は摹し難し

潘閣 莊子、天運篇に、仁義先王之
道也、止可一宿、而不可以久
處。【二】鹿車 晉書に、劉伶常
乘鹿車。鹿車は窄小、載に鹿を容
れるより名を得。【三】萬蒲 抱
朴子内篇に、尊終服萬蒲二十三年、
身生毛、日視書萬言、皆謂之冬祖
【二】麻鞋短後 麻鞋は麻葉の底な
短後ば後方の短い衣、莊子、說
劍篇に、曼胡之履、短後之衣。文選、蓋景陽の七命に、雄夫恥危冠之飾、與喪矣短後之衣。【三】射弋獲兎 射弋は絲を矢に
つないで飛鳥を取るないふ。史記、匈奴傳に、少長則射狐兔、用爲食。【四】作五柳傳 晉、陶潛は五柳先生の傳を著して
自ら況ぶ。【五】潘閣の詩に、高愛三峰插大虛、同頂仰空倒騎鶴、佛人大笑從他笑、終擬移家向此居とあり、好
事のもの、畫いて圖か爲る。觀野の詩に、從此軍山圖帳裏、更添潘閣倒騎鶴。【六】潘閣 淮南子に、董伯五年五十、而知
四十九年非、何者、先者難爲知、而後者易爲攻也。【七】鵠則易畫云云 後漢、馬援傳に、試見子嚴教書曰、效龍伯高、不
得、騎爲誰教之士、所謂刻鵠不成尚類鶩者也、效杜季良、不得、陷爲天下輕薄子、所謂畫虎不成、反類狗者也。

【題義】大理寺丞李杞が東坡の前時に和韻されたから、元の韻を用ひて之に答へたのが此詩である。
【詩意】草食の獸は、藪を易へるを患へない。藪に異草がなく、何處も同じいからである。魚も同じ
で、江湖に相忘れる。併し獸魚が一たび池や檻に入ると、やがて歸る期がない。誤つて弓旌の招きに
應じて塵土に落ちたが因果である。(左傳、昭公二十年にも、齊侯招虞人以弓、不進、辭曰、旃以
招大夫、弓以招士、皮冠以招虞人、臣不見皮冠、故不敢進) 鞭箠は環る。敲かれて呻呼する。
追督の職は、逐寇のこと盜賊を伺捕することを掌る。其の追督の來往が頻りである。又、同保連坐
し、罪は妻孥までに及ぶ。まことに百日愁歎して僅に一日を娛しめるのである。觀じ來ると、白雲は
舊悠悠、終老の約がある。(古詩に憂傷以終老) 貴人の紆ふ朱綬は、固より山人の紆には合はないであ
らう。人生は何者か、莊子の所謂蓬廬(草屋をいふ)ではなからうか、ただ一宿すべくして、久しく
處ることは出来ない。首を回せば、故山は鶴怨み、秋猿は狐である。何れの時か、自ら鹿車に駕し去
り、白髮を掃除し、そして萬蒲(杜子美の詩に、掃除白髮黃精在、君看他時冰雪容)を服して衰老を
卻けようぞ。麻底の革鞮を履き、後方の短い衣を著て獵夫の後に隨ひ、狐や兎を射弋して朝哺に供へ
たいと思ふ。(古の漏刻に、晝は朝、中、晡、夕あり。夜は甲、乙、丙、丁、戊あり)昔、陶淵明は五柳先
生の傳を作り、潘閣が三峰を仰いで倒に騎つたことは、好事のもの畫圖に入る。吾が年は凜凜
として餘す所幾くぞ。(文選の古詩に、凜凜歲暮)非を知つて去らなないと、年五十にして四十九年の
非を知つたといふ衛の蓬伯玉に慚ずることであらう。歲が荒で振郵の術がなく、亡逋のものが相つづ
く。(宋史、神宗紀に、熙寧四年秋七月、振郵兩浙水災)歲既に饑荒すること甚しい。我は奇を出し
賑濟しようと思ふが、又恐る、朝廷従はないで、反て馬援の所謂虎を畫いて成らず、狗に類するを恐
れるのである。

再和

東望海西望湖，山平水遠細欲無。野人疎狂逐漁釣，刺史寬大容歌呼。君恩飽暖及爾孥，才者不閒拙者娛。穿巖度嶺脚力健，未厭山水相縈紆。三百六十古精廬，出遊無伴籃輿孤。作詩雖未造藩閫，破悶豈不賢樽蒲。君才敏贍兼百夫。

再和

東望海を望み西は湖を望む、山平に水遠く細にして無からんと欲す。野人は疎狂にして漁釣を逐ひ、刺史は寛大にして歌呼を容る。君恩飽暖爾孥に及ぶ、才あるもの閒ならず拙なる者娛しむ。巖を穿ち嶺を度りて脚力健なり、未だ厭はず山水相縈紆するを。三百六十古精廬、出遊伴なく籃輿孤なり。詩を作る未だ藩閫に造らずと雖も、悶を破る豈樽蒲に賢らずや。君が才敏贍百夫を兼ぬ、

【字解】

【一】山平水遠 唐の王維は、香く山水平遠、雲影石色を畫く。繪工は以て天機所不到となす。【二】刺史寬大 漢、曹參傳に、相會後園近、吏舍、吏命日飲歌呼、從吏謂、參游、後園、取酒、坐飲大歌呼。唐の百官志の註に、武德元年、改太守、曰刺史。【三】飽暖 飽食暖衣、白樂天の詩に、歡娛接賓客、飽暖及妻兒。【四】才者不閒云云 莊子、列禦寇篇に、巧者勞、而智者憂、無能者、無所求、食而過進。【五】精廬 史通に列行、精廬以相屬。【六】籃輿 寺觀をいふ。後漢、姜肱傳に、籃輿、求見謝、文選、任彦昇の表に、精廬安寄、必窮、鑄助之感。【七】出遊無伴 白樂天の詩に、出遊無伴侶。【八】籃輿 竹轎をいふ、東坡の詩に、籃輿置紙筆、得句輕千乘。【九】藩閫 元稹が

朝作千篇日未晡，竭來湖上得佳句。從此不看營邱圖，知君篋積富有餘。莫惜錦繡償菅蕩，窮多鬪險誰先遁。賭取名畫不用募。

朝に千篇を作りて日未だ晡れず。湖上に竭來して佳句を得、此より看す營邱の圖を。知る君が篋積富餘あるを、惜む莫れ錦繡菅蕩を償ふを。窮多鬪險誰先遁、賭すること多ければ險を鬪す誰か先、名畫を賭取して募するを用ひず。

【一】朝作千篇 蘇東坡、蘇作千詩、蘇遺歎。【二】竭來 去來と同じ、蘇衡の思文賦に、題志竭來從文、蘇、我所求夫何思。一説に竭來はココニと訓し、發語の辭、洪武正韻に、窮、去來也。【三】營邱圖 李成は營邱の人、山水を畫くを以て名を得、自ら李營邱と號す。水經註に、衛山下有營邱、南有觀風臺、楚靈王之世、山崩毀其墳、得營邱九頭圖。【四】錦繡 錦は方なるかこ、横は圖。【五】菅蕩 左傳の註に、菅似茅。爾雅の註に、蓮似土菌、生蔓草中。

【題義】東坡の平生知交厚かつた蘇頌は、官を罷めて杭に客たることが久しい。東坡は李杞に答へた四首が存して蘇頌に答へた詩の傳はらないのは、どういふ譯か、東坡の詩が佚し去つたのであらうか。王文誥はいふ、此篇乃答和頌者、故有君才敏贍數句云云と。

文に、不能、歷其藩籬、泥堂與乎。【一〇】得蒲 博奕をいふ。得蒲の名は管に至つて著る。其の流派は博より出づ。博は六子を用ひ、得蒲は五子を用ふ。木を刺んで之を爲る。博物志に、老子入胡作得蒲。宋の高祖紀に、得蒲一擲百萬。【一一】敏 南史、臧盾傳に、爲人敏贍有風力。陳書、蔡徵傳に、隋文帝問其敏贍。【一二】百夫 毛詩に、百夫之特。【一三】朝作千篇云云 韓退之

【詩意】東は海を望み、西は湖を望む。山は平に水は遠し。此を決するに、細うして漸く無からんとする。野人は疎狂で、毎日漁釣を事として居り、刺史は寛大で部下の酒を飲んで歌呼するをも大目に見て居る。(時に沈立は、杭州の守となる。)王禹偁の言に、全家飽暖、盡荷君恩とあるが、君恩を荷ひて、飽暖妻子に及ぶは、幸福である。併し、一面から見ると、才あるものは閒でなく、拙なるものが却て娛しいのである。かくて屢を穿ち、嶺を度つて、而も脚は疲れない。又、山水の繁紆(めぐりまつはる)する大觀も見厭かない。西湖遊覽志に據ると、餘杭州の内外及び湖山の間、唐以前は、三百六十寺。錢氏が國を立てるに及んで、増して四百八十となつたさうである。この出遊は伴もなく、獨、籃輿に乗つて行く。我は詩を作つても藩閩に造ることが出来ない。とても、堂奥に入ることなどは望まれない。併し、胸中の悶を破るのは、樗蒲の戯に賢であらう。君が敏贖(才智が十分に足る)は、百人を兼ねる。朝に千篇を作りて、日が晡れないうちに出来上つた。ここに湖上で君の佳句を得たのである。既に佳句を得、自今は營邱の畫圖を看ようとしめない。知る君が篋櫃(書箱)には、好い書物が餘りあることであらう。どうか、君の錦繡を以て我が膏肓に償ふことを惜まないやうに。(唱和を望む意がある)すべて窮すると、險を關するものであるが、誰が先づこれを通れるであらう。名畫を購取して、之を摹するを用ひない。(韓退之の畫記に、獨狐生申叔者、始得此畫、而與余彈葉、余幸勝而獲焉、明年至河陽、座有趙侍御者、見之感然進曰、噫余之手摹也、亡之且二十年矣、余感趙君之事、因以贈之、とある。晉書の謝玄傳に、少好佩紫羅香囊、安因戲賭取、即焚之とある。)

る。要するに物を弄んで志を喪うてはならないのである。

遊靈隱寺得來詩復用前韻

靈隱寺に遊び、來詩を得、復前韻を用ふ

君不見錢塘湖。

君見すや錢塘湖、

錢王壯觀今已無。

錢王の壯觀は今已に無し。

屋堆黃金斗量珠。

屋は堆し黃金斗量の珠、

運盡不勞折簡呼。

運盡きては折簡して呼ぶを勞せず。

四方宦游散其孥。

四方宦游其の孥を散じ、

宮闕留與閒人娛。

宮闕は閒人に留與して娛ましむ。

盛衰哀樂兩須臾。

盛衰哀樂兩ながら須臾、

何用多憂心鬱紆。

何ぞ用ひん憂多くして心鬱紆なるを。

溪山處處皆可廬。

溪山處處皆廬すべし、

最愛靈隱飛來孤。

最も愛す靈隱飛來して孤なるを。

喬松百尺蒼髯鬚。

喬松百尺蒼髯鬚、

【字解】(一) 靈隱寺 靈隱山は昔、許由も葛洪も、此山に隠れて、歸るを忘れた所から、本、稽留山と名けたといふことである。今、寺を立つ。(二) 錢塘湖 一名西湖、杭州の西にある。其源は武林山(即ち靈隱山)から出る。(三) 錢王壯觀 五代史、吳越世家に、錢氏自唐末有國、有兩斷、幾百年、宋興、復朝、太祖厚禮遣還、國、太平興國三年、詔復來朝、復舉族歸於京師、國除。(四) 屋堆黃金云云 後漢の郭況は、庭中に高閣を起し、新石を其上に置き、秤を以て珠玉を量る。閣下には黃金箱があつて、武士を列して之を量らしむ。(五) 折簡 短

擾擾下笑柳與蒲。

高堂會食羅千夫。

撞鐘擊鼓喧朝哺。

凝香方丈眠氈氈。

絕勝絮被縫海圖。

清風徐來驚睡餘。

遂超羲皇傲几蓮。

歸時棲鴉正畢逋。

孤煙落日不可摹。

擾擾下笑柳與蒲と。

高堂會食千夫を羅ね、

鐘を撞き鼓を撃ちて朝哺に喧し。

凝香方丈氈氈に眠る、

絶た勝る絮被海圖を縫ふに。

清風徐に來つて驚睡の餘、

遂に羲皇を超えて几蓮に傲る。

歸る時棲鴉正に畢く逋る、

孤煙落日摹すべからず。

い手紙、晉書、宣帝紀に、王陵面縛

迎帝曰、漢若有罪、公當折簡召

之、何苦自來耶、帝曰、以君非折

簡之將故耳、(二)多憂心鬱鬱

文選、魏武帝の樂府に、人生如寄、多

憂何益、劉琨は氣が結ばれて樂しま

ない、杜子美の詩に、鬱鬱遊蓬蒿、

(三)會食、史記、淮陰侯傳に、今日

破趙會食、(四)凝香、韋應物の

詩に、兵衛森畫戟、宴罷滿清香、

(五)絕勝、風俗通に、絳毛錦一謂

之、魏晉、李賀の樂宮詩に、醉睡懸

湘堂月、(六)海圖、杜子美の詩

に、海國拆波游、蕭蕭移曲折、天吳及

紫鳳、願倒衣冠掃、(七)超、羲皇、傲、几蓮、

莊子、人間世篇に、伏羲几蓮之所行、

而況散馬者乎、伏羲は大昊伏羲氏、几蓮は三皇以前の帝王、散は尋常の人。

【題義】東坡が靈隱寺に遊ぶと、例の李杞が再び孤山の詩に和した。其の詩に答へたものが、此詩で

ある。熙寧四年十二月の作である。

【詩意】君見すや鏡塘湖を、景物華麗、天下の勝である。相傳ふ、昔、此塘を立てて海水を防いだ時、

募りていふ、土石一斛を致すものは、錢一斗を與へようと、旬日の間に、來るもの雲の如し。塘が未

だ成らないのに謔りていふ、復土を取らないと。是に於て土を戴く者皆棄置して去る。塘が成つて一

境其利を蒙つたといふことである。さて、錢氏は唐末から國を有ち、兩浙を兼有することが數百年、

宋が興つて國遂に除かれ、昔の壯觀も、今は見ることが出來ない。錢氏の盛時には、黄金は屋に堆く、

衡石を以て珠玉を量つたものである。運が盡きると、折簡を以て呼ぶことを勞しな。官游の人も、

其の家族を四方に散じ、宮闈は閑人に留興して、其の遊覽の地となさしめる。(吳越圖考に據ると、吳

越國治は杭州鳳皇山下、其子城南曰三通越門、北曰雙門、錢氏納土後、二門猶存。)思へば、盛衰哀樂

兩ながら須臾である。何ぞ區區憂多くして、心のむすばれることを致さうぞ。溪山何處も好く、塵す

べきである。最も靈隱山の飛び來つて、孤なるを愛する。昔、晉の咸和元年に、西天僧慧理は歎じて

いふ、此是中天竺國靈鷲山之小嶺、不知何年飛來、佛在世日、多爲三仙靈之所隱、今此亦復爾耶と。

因つて錫を掛け、靈隱寺を造り、飛來峰と號けたといふことである。百尺の高い松は蒼い髯髯で覆は

れ、擾擾(こたごたとして亂れる)として柳と蒲とを笑つて居る。晉の顧悦之は簡文帝と同年であつ

たが、髪が早く白くなつた。帝が其の故を問ふと、對へて曰く、松柏之姿、經霜猶茂、蒲柳常質、

望秋先零と。高堂の會食には千人を羅ね、鐘を撞き鼓を撃つて朝夕喧しい。(靈隱寺の飯僧をい

ふ)我は清香を凝らし、方丈で氈氈の上に眠る。絶た海圖を縫うた絮被に勝つて居る。清風が徐に來

つて睡を驚かした後、遂に三皇伏羲に超え、几蓮に傲る。歸る時は、棲鴉は正にことごとく通れ去つ

て、孤煙落日、摹することが出來ない。(東坡初めて西湖に至り、特に湖に就いて其の景物を摹寫す。

故に神來の筆となつたのである。

戲子由

子由に戲むる

宛邱先生長如邱、宛邱の先生長うして邱の如く、
 宛邱學舍小如舟、宛邱の學舍小にして舟の如し。
 常時低頭誦經史、常時頭を低れて經史を誦し、
 忽然欠伸屋打頭、忽然として欠伸すれば屋頭を打つ。
 斜風吹帷雨注面、斜風帷を吹いて雨面に注ぐ。
 先生不愧旁人羞、先生は愧ぢざるも旁人は羞づ。
 任從飽死笑方朔、任從す飽死して方朔に笑はるるに、
 肯爲雨立求秦優、肯て雨に立つが爲に秦優を求めんや。
 眼前勃蹊何足道、眼前の勃蹊何ぞ道ふに足らんや、
 處置六鑿須天游、六鑿を處置するには須く天游すべし。
 讀書萬卷不讀律、讀書萬卷を讀んで律を讀まず、

【字解】宛邱、陳州をいふ、今の河南淮陽縣。時に子由は其の學官となる。

【一】長如邱、史記、孔子世家に、孔子長九尺有六寸、人皆謂之長人、而異之。【二】學舍小從漢書、儒林傳の序に、學舍頗敞。【三】低頭、史記、日者傳に、宋忠買股伏以低頭。後漢書、陳仲弓傳に、無乃欲低頭歟之手。【四】誦、經史。韓退之の詩、今者無所誦讀。書史。【五】欠伸、志倦めば欠し、體倦めば伸す。曲禮に、君子欠伸捫杖屐。【六】屋打頭、唐の進士張象は、志氣高大にして、未だ嘗て人に低折せず。嘗て曰く、大丈夫有禮當盡世之志、而拘於下位、若立身於樊屨中、使入籠頭不待、遂に衣を拂ひて嵩山に遁る。【七】吹帷、文選、潘安仁の秋興賦に、動風展而吹帷。【八】飽死云云、前漢書、東方朔傳に、侏儒飽飲、死、臣聞飢飲、死、いふ。莊子、外物篇に、心有天游、室無空虛、則婦姑勃鬱、心無天遊、則六鑿相攘。六鑿は耳・目・鼻・口・心・知の六根。【九】讀書萬卷、南史に、陳元帝の敗、盡く圖書を焚いて曰く、讀書萬卷猶有今日。【一〇】唐、沈全交、嘲謂同に、評事不讀律、博士不尋章。【一一】致君堯舜上、云云、杜子美の詩に、致君堯舜上、再使風俗淳。韓退之の詩に、致君堯無術、自進誠獨難。【一二】冠蓋聞如雲、班固の西都賦に、冠蓋如雲。【一三】送老、杜子美の詩に、送老白雲邊。【一四】麴塵、酒食をいふ、朱松の詩に、麴塵有味盡難

致君堯舜知無術、致君を堯舜に致すは知りぬ術なきを。
 勸農冠蓋闌如雲、農を勸む冠蓋闌くして雲の如く、
 送老盡鹽甘似蜜、老を送る盡鹽甘うして蜜に似たり。
 門前萬事不挂眼、門前の萬事に挂けず、
 頭雖長低氣不屈、頭長く低ると雖も氣屈せず。
 餘杭別駕無功勞、餘杭の別駕功勞なし、
 畫堂五丈容旂旄、畫堂五丈旂旄を容る。
 重樓跨空雨聲遠、重樓空に跨つて雨聲遠く、
 屋多人少風騷騷、屋多く人少く風騷騷。
 生平所慚今不恥、生平慚づる所今は恥ぢず、
 坐對疲氓更鞭箠、坐に疲氓に對して更に鞭箠す。
 道逢陽虎呼與言、道に陽虎に逢うて呼んで與に言ふ、
 心知其非口諾唯、心に其の非なるを知るも口諾唯す。
 居高志下眞何益、居高く志下く眞に何の益かある、

氣節消縮今無幾

氣節は消縮して今幾もなし。

文章小技安足程

文章は小技安んぞ程するに足らん、

先生別駕舊齊名

先生別駕舊名を齊しうす。

如今衰老俱無用

如今衰老して俱に用なし、

付與時人分重輕

時人に付與して重輕を分たしむ。

【一】昔游既。史記、秦始皇本紀に、作前殿阿房、上可坐萬人、下可建五丈旗。【二】風塵。庾信が小園賦に、風塵而樹、天險參而雲低。【三】道逢。潘正叔の詩に、道逢深漢士、舉手對吾揖。陽貨の事、論語、陽貨黨に見ゆ。【四】語唯。史記、趙世家に、簡子曰、請大夫朝徒聞唯唯。【五】氣節。史記、汲黯傳に、任氣節。【六】文章小技。杜子美の詩に、文章一

【題義】照寧年間、朝廷から新に差せられた提舉の官は、到る所、苛細事を生じて官吏を發摘した。惟學官には吏責がない。そして弟子由は學官であるから、東坡は此詩を作つたのである。

【詩意】宛邱の先生子由は、丈高くして邱の如く、之に反して宛邱の學舎は狹小にして小舟のやうである。平生は頭を低れて經史を誦する。忽ちに志倦み體倦みて欠し伸すると頭が屋に打たれる。烈風が帷を吹き雨が面に注ぐ。先生は之を愧ぢないが、傍の人が却て羞ぢる。愧は見苦しきをはぢる。羞は顔を含せ難い意。飽死して東方朔に笑はれても構はないらしい。肯て雨に立つ爲に秦儻となるを求めようぞ。史記の滑稽傳に、優旆は善く笑言を爲す。秦始皇の時、置酒して天雨ふる。旆桶のもの(旆桶

郎は守衛の兵士)皆沾ひ寒し。優旆見て之を哀む。居る頃くあつて、殿上壽を上り萬歳と呼ぶ。優旆、檻に臨み大に呼んで曰く、旆桶郎、汝は長しと雖も何の益あらん、幸に雨に立つ。我は短しと雖も幸に休居すと。是に於て始皇旆桶の者をして半は相代らしめたといふ話がある。眼前の争鬭などは固より道ふに足らない。よく耳・目・鼻・口・心・知の六根を處置することが出来れば、自然の神を存して天遊をなすことが出来る。先生は經史百家萬卷の書物を讀んでも、一卷の法律書を讀んで居ない爲に、我が君を堯舜のやうに聖天子になし奉る術がない。さて農業を勸める使者が頻頻と往來し、其の冠蓋が相望んで喧すしい。併し、老を送る饗饗の素食も、蜜のやうに甘いし、門前の萬事は眼にもかけない。それで、頭は長く低れても、氣は屈しない。願れば餘杭の別駕(刺史に隨ひ行く官)は別に功勞はないが、五丈の畫堂に旆桶を容れ、重樓空に跨つて雨聲が遠い。屋が多く人が少くて風が騒騒と吹いて居る。平生慚づる所も今は恥ぢないやうに、情が薄くなつて、疲れた氓に對して更に鞭箠を加へる。昔孔子は、塗中で、鬻虎(魯、季氏の家臣、擅恣暴橫、季桓子を囚へて魯の政を專にす)に逢つて輿に言葉交へる。心に其の非なるを知つても、口には唯したり諾したりする。其の居が高くても志が下ければ、何の益もない。氣節は消え縮まつて今は幾くもない。文章は小技、道に於て未だ尊しとしない。安んぞ程とするに足らうぞ。先生と別駕とは、以前は名を齊しうした。只今は衰老して俱に用がない。試に時の人に、兩者の輕重を判斷せしめることにしよう。

【餘論】此時は終始、時事と相離れない。任從飽死笑一方朔といひ、肯爲三雨立一求秦儻といふは、

其の意を史記東方朔の傳にある侏儒飽死及び同じく滑稽傳にある優旃謂陸橋郎、我雖短幸休居に取つたものである。即ち子由は家貧しく、官は卑いが、身材は長大であるから、東方朔や陸橋郎に比した所以、そして當今進用の人を以て侏儒や優旃に比する。讀書萬卷不讀律、致君堯舜知無術といふは、是時朝廷新に律學を興し、軾は意に之を非とする。以爲らく、法律の力では君を堯舜に致すに足らない。然るに今時、専ら法律を用ひて詩書を讀むを忘る。故に我は萬卷の書を讀んで、法律を讀まない。法律の中には、君を堯舜に致すの術がない。勸農蓋蓋聞如雲、送老蓋聞甘似蜜といふは、朝廷新に提擧の官を差して、苛細事を生じ、官吏を發摘するを譏諷したのである。ただ學官には吏責がない。當時、弟轍は學官であつたから是句がある。生平所漸今不恥といひ、坐對疲僕更鞭篋といふは、是時、多く犯讞の人を徒配し、皆、飢貧の有様である。此等貧民を鞭撻するは、東坡の平生慚ぢる所、今、復、恥ぢないと言つて朝廷が鹽法の太だ念なるを譏諷する。道逢陽虎呼與言、心知其非一口語唯といふは、是時、張觀兪希且が監司となり、東坡は意に其の人となりを喜ばなかつた。然し敢て與に爭議しない。故に之を陽虎と毀訛したのである。

送蔡冠卿知饒州 蔡冠卿が饒州に知たるを送る

吾觀蔡子與人遊 吾蔡子の人と遊ぶを観るに、
掀唇笑語無不可 掀唇笑語可ならざるなし。

【字解】【一】蔡冠卿 字は元輔、慶歷六年、鄱陽縣に知となり、大遷少卿に遷る。【二】饒州 九域志に江南東路、饒州鄱陽郡治鄱陽縣。

平生儻蕩不驚俗 臨事迂闊乃過我
橫前坑穿衆所畏 布路金珠誰不裹
爾來變化驚何速 昔號剛強今亦頗
憐君獨守廷尉法 晚歲却理鄱陽枹
莫嗟天驥逐羸牛 欲試良玉須猛火
世事徐觀眞夢寐 人生不信長轆轤
知君決獄有陰功 他日老人醜魏顛

平生儻蕩俗を驚かさず、事に臨んで迂闊なるは乃ち我に過ぐ。前に横る坑穿は衆の畏るる所に布く金珠は誰か裹まざらん。爾來變化驚く何ぞ速なる、昔は剛強と號し今亦頗。憐む君が獨守廷尉の法を守り、晩歲却て鄱陽に枹を理むるを。嗟する莫れ天驥羸牛を逐ふを、良玉を試みると欲せば猛火を須ふ。世事徐に觀れば眞に夢寐、人生信せず長へに轆轤なるを。知る君決獄陰功あり、他日老人醜顛に醜いん。

今の鄱陽縣は其の舊治。【一】蔡子 蔡子 與の入遊 張衡の歸田賦に、感蔡子之慷慨とある。蔡子は、史記に、蔡澤諸侯に遊學して不遇云云、此に假り用ひたのである。【二】掀唇 掀唇の意、正韻に、唯罵、圓聲と見ゆ。【三】無不可 杜子美の詩に、快意東西無不可。【四】儻蕩 儻蕩といふに同じ、心が廣い。漢書、史丹傳に、觀若三儻不備、然心甚謹密。註にいふ、儻、疎誕無檢也。【五】驚俗 韓退之が詩に、東野勗驚俗。【六】迂闊 班固の答賓戲に、彼豈樂爲迂闊一哉。【七】坑穿 陳琳の檄に、坑穿塞路。【八】布路 布路は、分れ分れに散り去る、左傳、襄公三十年に、鄆伯有夜飲酒、朝至未已、朝者皆自朝布路而罷。【九】剛強 漢書の鄧野王の傳に、剛強整固。【一〇】廷尉 漢、

百官表に、廷尉、秦官、掌三刑、秩千石。張釋之の傳に、釋之爲廷尉、曰、廷尉、天下之平也、壹傾、天下用法皆爲之輕重、民安所措、其手足。【一】 理、鄧陽也、梅は柁に同じ、杜子美の短歌行に、君今起、梅春江流。【二】 天驕逐、羸牛、文選、顧延年の賦に、漢道興、而天驕呈才。杜子美が錦標行に、青丘要毒盡枯死、天馬散足隨羸牛。東方朔の七諫に、顧羸牛而珍。【三】 試、良玉、白樂天の放言詩に、試玉要、燒三日滿。【四】 眞夢寐、李太白の詩に、眞世若、大夢、胡爲勞、其生。【五】 魁制、車行の利ならざるより轉じて、人の不仕合をいふ。文選、古詩に、無爲守、實賤、魁制長苦辛。

【題義】蔡冠卿が王安石と刑名を爭議して外に補せられ、饒州に知となつたのは、熙寧三年の事で、此時は同年の十月に、東坡が京中で作つたものである。紀昀いふ、語自俊爽、病亦在、太俊太爽、遂無復餘地一と。

【詩意】吾は、蔡冠卿が人と交遊するを觀るに、聲喧しくしたり笑つたりして、東西可ならざるはな。平生翰達で、俗を驚かすやうな言行をしない。事に臨んで迂闊であることは我に過ぎて居る。前に横つて居る坑竈は、人の畏れる所であり、路に散り布ける金珠は、誰か之を襲まなからうぞ。爾來變化の速かなることは、まことに驚くべきである。昔は剛強と稱せられた人が、今は偏頗な人となつた。然るに君は濁つた世の中に獨り、廷尉（刑獄を司る官）の法を嚴守した爲に、晩年却て郡陽に移され饒州に知となつたことは同情に堪へない。（郡陽の湖に柁を理める意）天驕（蔡元輔に比する）が羸牛を逐ふ（進用された不才の人を指す）ことを嗟くな。猛火に投ずるも熔けない所に良玉の價値があるではないか。淮南子にも、鐘山之玉、灼以三煖炭三日三夜、色澤不變、得天地精一也と見えて居る。徐に世事を觀ると、眞に夢寐のやうである。人生は何時まで不遇とは信じない。陰徳があれば、必

ず陽報がある。君が決獄には定めし陰功があつたことと信する。昔、漢の于定國の父子公は、我治獄多陰徳、未嘗有所冤、子孫必有興者と言つたが、其言は于定國に至つて驗があつた。蔡元輔の陰功も必ず驗いられるであらう。他日老人稱魏顆といふは、左傳宣公十五年に、魏武子有嬖妾、無子、武子疾、命顆（武子の子）曰、必嫁是、疾病則曰、必以爲殉、及卒、顆嫁之曰、疾病則亂、吾從其治也、及輔氏之役、顆見老人結草以亢杜回、回覆而顛、故獲之、夜夢之曰、余而所嫁婦人之父也、爾用先人之活命、是以報、とあるに據る。

【餘論】大理少卿蔡冠卿の饒州に出されたのは、王安石と合はなかつた爲である。併し、其がまた正義の士の同情を得た所以で、東坡の此詩を味つても解かる。横前坑竈衆所畏といふは、當時用事の人は、横暴であつて、苟も其の意に違ふと、坑竈を設けて之を陥れることを讒つたのである。布路金珠誰不妻といふは、朝廷用事の人、其の意に順ふものがあると、利を以て之を讒つたのである。布くやうであると讒つたのである。爾來變化云云の二句は、士大夫が利の爲に誘はれ、脅かされ、變化之に従ひ、舊は剛強であつたが、今は然らざることを讒つたのである。憐君獨守廷尉法といふは、蔡元輔が屢、朝廷と刑法を爭議して進用されなく出されて小郡に守となつたことを言つたのである。莫、嗟天驕逐羸牛といふは、蔡元輔を天驕に比し、進用不才を以て羸牛に比して、進用の人の不當を讒諷したのである。欲、試良玉、須猛火、は、玉は火を経て變じないから良である。蔡元輔の艱險を経歴し、折挫されても節操を改めないことに比して言つたものである。

嘲子由

子由を嘲る

堆几盡埃簡攻之如蠹蟲

几に堆きは盡く埃簡、之を攻むる蠹蟲の如し。

誰知聖人意不盡書籍中

誰か知らん聖人の意、書籍の中に盡さざるを。

曲盡猶絃在器成機見空

曲盡きて絃猶は在り、器成りて機空を見る。

妙哉斲輪手堂下笑桓公

妙なるかな斲輪手、堂下に桓公を笑ふ。

【字解】(一) 蠹蟲 紙魚をいふ、書物を食ふ蟲。

【題義】書籍は古人の道を載する。併し、古は既に其の道の精醇を用ひ盡した。今に傳はるものは、其の糟粕のみ。之を用ひるも益がない。此の意を言うて子由を嘲けつたのである。紀昀いふ、理自明通、語則凡近、と。

【詩意】几案に堆く塵埃に包まれた書物を涉獵するのは、宛ら蠹蟲のやうである。昔、桓公、嘗て書を堂上に讀む。輪扁、椎と鑿とを棄てて、桓公に問うて曰く、讀むは何の言ぞ。公曰く、聖人の言なりと。曰く、今、聖人あるか。公曰く已に死せりと。輪扁乃ち曰く、君の讀む所は、古人の糟粕のみと。古の聖人と、其の世に傳へた術とは、早く既に古に滅したのである。そして聖人の意も、固より書籍の中に盡さない。妙は一心に存して、口に言ふことが出来ないからである。曲盡きて、絃が猶はある、神は絃外に存する。器成りて、機は空となる。輪扁が堂下に在つて、堂上の桓公が古人の糟

粕を書めるを笑つたのは、此の點である。

越州張中舍壽樂堂

越州張中舍壽樂堂

青山偃蹇如高人

青山偃蹇高人の如し、

常時不肯入官府

常時は肯て官府に入らず。

高人自與山有素

高人は自ら山と素あり、

不待招邀滿庭戶

招邀を待たずして庭戸に滿つ。

臥龍蟠屈半東州

臥龍蟠屈東州に半し、

萬室鱗鱗枕其股

萬室鱗鱗其の股に枕す。

背之不見與無同

之に背いて見ずば無きと同じ、

狐裘反衣無乃魯

狐裘反衣乃ち魯なるなからんや。

張君眼力覲天奧

張君の眼力は天奥を覲る、

能遣荆棘化堂宇

能く荆棘をして堂宇に化せしむ。

持頤宴坐不出門

頤を持し宴坐門を出でず、

【字解】(一) 張中舍 壽樂堂

堂は列官廳事の西南に在りて、山に面し泉に臨む。太子中舍張天山字は希元の建つる所。廳事は今、通判南廳たり。(二) 偃蹇 衆くして盛な貌。又、高い貌。楚辭、離騷に、何瓊佩之偃蹇兮、衆靈紛而蔽之。同じく離騷に、望瑤臺之偃蹇兮。(三) 官府 官廳も官衙も同じ。周禮に、以八法治官府。後漢の逸民傳に、龐公居觀上之南、未嘗入城府。杜子美の詩に、昔者龐參公、未嘗入州府。(四) 有素 漢の張禹傳に、必忘雅素。註にいふ、素、故舊也。(五) 招邀 文選、謝惠連の詩に、絳坐相招邀。杜子美の詩に、招邀屬有期。(六) 東州 越は浙東に在るか。

收攬奇秀得十五。奇秀を收攬して十の五を得。

才多事少厭閒寂。才多く事少くして閒寂を厭ふ。

臥看雲烟變風雨。臥して看る雲烟風雨を變ずるを。

筍如玉筋椹如簪。筍は玉筋の如く椹は簪の如し。

強飲且爲山作主。強ひて飲んで且つ山の爲に主となる。

不憂兒輩知此樂。憂へず兒輩の此樂を知るを。

但恐造物怪多取。但恐る造物は多く取るを怪しむ。

春濃睡足午窗明。春濃に睡足りて午窗明かに。

想見新茶如潑乳。想ひ見る新茶の乳を潑する如きを。

【題義】此詩は熙寧五年二月、張次山の爲に、越中壽樂堂に題したもので、東坡三十七歳の時の作である。
【詩意】青山の高くたかぶつて居るのは、恰も高人のやうである。高人は平生、官府に入るを肯じない。高人は自ら山と故舊の情がある。故舊は招邀を待たないでも庭戸に滿つる。(紀昀いふ、了無深意而說來、通體精采、此真善於陷空也。)越州の子城は山勢廻繞して居り、臥龍蟠屈の形をなし東州に半して居る。(會稽志に、府治據臥龍之東麓と見ゆ)萬戶屋を比べて甍を連ねて其の下にある。之に背いて見なければ、李義山が所謂背山起樓の殺風景である。狐白裘があつて、之を裏返して著て居る形は、魯の地であらうか。流石に張希元の眼力は、天奥を覘(伺ひ視る)て、能く荆棘を化して堂宇となしたのである。頤を持して(手もて頤をささへる)くつろぎ坐し、門を出ないで、奇秀を收攬し、十の五を得る。張君は才が多いのに、事が少くて、閒寂を厭ひ、臥して雲烟風雨の變ずるを看て居られる。筍は玉筋の如く、椹(桑の實、椹酒は桑の實で釀した酒)は簪のやうである。強ひて酒を飲んで山の主となる。(此山の勝景を獨占する)兒輩が此樂みを知るを憂へない。(昔、晉の謝安は嘗て王羲之に謂つて曰く、中年以來傷哀樂、與親友別、輒作數日惡。羲之曰く、年在桑榆、自然至此、正賴絲竹陶寫、陶寫は、陶情寫憂の意。樂みて憂を拂ふこと)恆恐兒輩覺損其樂歡之趣と)ただ恐れるのは、造物者が人間の多く取るを怪しむであらうことである。春、濃かに、十分睡つて、午窗も明かである。想ひ見る、新しい茶が乳を潑するやうであると。(越州は茶を産する。)

姚屯田挽詞

姚屯田の挽詞

京口年來者舊衰

京口年來者舊衰ふ

高人淪喪路人悲

高人は淪喪し路人は悲む

空聞草叟一經在

空しく聞く草叟の一經在るを

不見恬侯萬石時

見ず恬侯萬石の時を

貧病只知爲善樂

貧病只知る善を爲すの樂みを

逍遙却恨棄官遲

逍遙却て恨む官を棄つるの遲きを

十年一別眞如夢

十年一別眞に夢の如し

猶記蕭然瘦鶴姿

猶は記す蕭然瘦鶴の姿

【字解】姚屯田 職官分紀

に、工部官屬有屯田郎中、及員外郎

【二】 挽詞 哀悼の詞、挽げ、葬式

の時に、輓軍の詞を引くをいふ。挽

歌の起原は、漢の田横に始まるが、

其の由来は古い。古の廣嶺といふの

は、今の挽歌である。【三】 京口

建康實錄に、孫權於朱方築城、

因京口。又因門、謂

之京口。【四】 耆舊 老人をいふ、

後漢書、耆舊傳に、耆舊大姓、皆の

習鑿齒、襄陽耆舊傳を著す。【五】

論喪 尙書、饗子に、今股其論喪、

論喪、喪禮者謂之若也。

ある。

【題義】猶は記す蕭然瘦鶴の姿。故人姚屯田が夢裡に來るの哀情を述べて、軀を挽く言葉としたので

ある。

【詩意】孫權は、建安十三年に、吳より遷つて、京口に鎮した。其の京口も時勢の變遷で、年來、著
舊漸く衰へ、高人は淪落し、路人は悲しむ。草叟の一經といふことも、今は空しく聞くのみである。
漢の韋賢傳に、宣帝、位に即く、韋賢は先帝の師といふので丞相となる。少子元成、また明經を以
て、位、丞相に至る。故に鄒魯の諺に、遺子黃金滿籩、不如一經とある。又、かの恬侯が萬石
君といふ尊寵を専らにしたなどの話もない。願れば貧病の身、只、善を爲すの樂を知るのみである。
されば優遊自適卻いて官を棄てることの遅いのを恨む次第である。七年一別、眞に夢のやうである。
猶は蕭然として瘦鶴の風姿を記憶する。

送岑著作

岑著作を送る

懶者常似靜靜豈懶者徒

懶きものは常に靜に似たり、靜豈懶きものの徒ならんや。

拙則近於直而直豈拙歟

拙は則ち直に近し、而も直豈拙ならんや。

夫子靜且直雍容時卷舒

夫子は靜にして且つ直、雍容時に卷舒。

嗟我復何爲相得歡有餘

嗟我復何をか爲さん、相得て歡び餘あり。

我本不違世而世與我殊

我本世に違はず、而して世我と殊なり。

拙於林間鳩懶於冰底魚

林間の鳩よりも拙に、氷底の魚よりも懶し。

人皆笑其狂。子獨憐其愚。
 直者有時信。靜者不終居。
 而我懶拙病。不受砭藥除。
 臨行怪酒薄。已與別淚俱。
 後會豈無時。遂恐出處疎。
 惟應故山夢。隨子到吾廬。

人皆其の狂を笑ふ、子獨其の愚を憐む。
 直なるものは時あつて信ふ、静なるものは終に居らず。
 而して我懶拙の病、砭藥の除くを受けず。
 行くに臨みて酒の薄きを怪しむ、已に別淚と俱にす。
 後會豈時なからんや、遂に恐は出處疎く、
 惟應に故山の夢、子に隨つて吾が廬に到るべし。

【字解】(一) 半著作。岑象求、字は巖起、梓州の人。著作は官名、職官分紀に、秘書省有著作佐郎。(二) 雍容。やばらげる貌、漢書、司馬相如傳に、雍容嫺雅。(三) 卷舒。淮南子に、風箱卷舒。(四) 歡有餘。史記、灌夫傳に、魏其灌夫、其諍如父子然、相得歡甚。(五) 林間鳩。毛詩、鷓鴣の疏に、鳩抽於鷓鴣。孟東野の詩に、自慚所業微、功用如鳩抽。(六) 水底魚。陸記に、魚止水、未解魂之時、魚於水下、自藏也。(七) 懶拙病。杜子美の詩に、平生懶拙意、倒值逢疎。(八) 砭藥。許慎の説文に、砭以石割病也。(九) 酒薄。莊子胠篋篇に、魯酒薄而邯鄲開。(一〇) 與別淚。白樂天が曉別の詩に、請君斷腸歌、送我和淚酒。(一一) 後會。孔叢子に、後會何期。文選、謝惠連の雪賦に、傷後會之無因。(一二) 出處疎。獨孤及の詩に、出處未易料、且歌變悲容。

【題義】此詩は、熙寧五年二月の作、岑象求が梓州提舉の任に至るを餞送したのである。紀昀いふ、以て文爲詩、始三元次山、或以爲宋詞一非也。

【詩意】懶いものは静なるに似て居るが、静なるものは懶きものの徒とは言はれない。拙は見た所直に近いが、直は拙だといふことは出来ない。岑夫子は静にして且つ直、雍容嫺雅、卷舒宜きに從つて居る。我は何も爲し得ないが、意氣相投じて、歡が餘ある。我は元來、世に違はないが、世は我と異なる。かく我は世に容れられない。我の世に處する、林間の鳩よりも拙である。(歐陽文忠公の林間鳩の詩にも、人皆笑其鳩拙、無以三家室爲とある。)水底の魚よりも懶い。それで世の人は、皆、我の狂を笑ふも、子は獨、我の愚なるを憐んでくれる。願ふに直なるものは、時あつてか伸びる。静なるものも終にもとの處には居らないであらう。ただ我が懶拙の病は、砭藥の力で除くことが出来ない。出立に臨んで、酒の薄いのを怪しむ。又、已に別淚と俱にする。後會は期し難い。恐らくは今後、出處が料られなくなるであらう。ただ應に故山の夢は、子に隨つて、吾が廬に到るべきを、せめてのことと慰めて居る。

雨中明慶賞牡丹 雨中明慶に牡丹を賞す

霏霏雨露作清妍。霏霏雨露清妍を作す、
 燦燦明燈照欲然。燦燦明燈照して然えんと欲す。
 明日春陰花未老。明日春陰花未だ老いず、
 故應未忍著酥煎。故應に酥煎を著くるに忍びざるべし。

【字解】(一) 明慶寺。臨安志に、在木子巷、北唐大中二年、僧景初建。(二) 霏霏。詩經小雅に、雨霏霏霏。(三) 燦燦。かがやく貌、韓退之が芍藥の詩に、紅燈燦燦欲燃。(四) 春陰。花ぐもり。常建が詩に、晴天氣無邊、野浮春陰。(五) 花未老。崔暉が詩に、雨暗江花老。

【題義】此詩も熙寧五年の作で、三月、雨中に明慶寺に遊んで牡丹を賞した感想である。
 【詩意】霏霏として雨が降り、露を結んで、花の色が清妍である。又、燦燦とかがやく燈火は燃えんばかりに花に映じて居る。明日は花曇りであつても、花は未だ老いながら、花に酥煎を著けるに忍びない。昔、李昊といふ人は、牡丹の花が開く毎に、之を親友に分遣し、金鳳箋に歌詩を書いて添へた。又、興平酥（酥は油を以て麪に和せしもの）をも同時に贈る。そして、花が散ると、之を煎食する。ここの意味は、花が未だ老いながら、興平酥を煎食することは考へなくてもよからう。

吉祥寺賞牡丹

吉祥寺に牡丹を賞す

人老簪花不自羞

人は老いて花を簪し自ら羞ぢず、

花應羞上老人頭

花は應に羞づべし老人の頭に上るを。

醉歸扶路人應笑

醉歸路に扶けられて人應に笑ふべし、

十里珠簾半上鉤

十里の珠簾半は鉤に上す。

人に扶助される、晉の羊曇、晉で大醉し、路に扶けられ、樂を唄へ、覺えず西州門に至つた。
 春風十里揚州路、卷上珠簾絕不羞。
 【上】鉤、簾を捲き上げて鉤にかける、白樂天の詩に、酒戶斜開、珠簾半上鉤。
 【珠簾】美しい簾、杜牧之の詩に、爲老人開。

【題義】熙寧五年三月二十三日、東坡は太守沈立と同じく吉祥寺に遊び、牡丹を寺僧守瓏の圃に觀る。此詩は其時の作である。

【詩意】人は老いても、花を簪として頭に挿して自ら羞ぢないが、花の方では、定めし老人の頭に挿されることを羞かしく思ふことであらう。(劉禹錫も花は老人の爲に開かないと言つた。)我は醉に乗じて花を簪にし、人に扶けられて歸つた。十里の間の人家は半は珠簾を捲き上げて居つたから、定めし我の狂態を見て笑つたことであらう。

吉祥寺僧求閑名

吉祥寺の僧、閑の名を求む

過眼榮枯電與風

過眼榮枯電と風と、

久長那得似花紅

久長那ぞ花の紅に似るを得ん。

上人宴坐觀空閣

上人宴坐す觀空閣、

觀色觀空色即空

色を觀じ空を觀す色即ち空。

【題義】吉祥寺の僧守瓏が閑の名を求むことを求めたときに、此詩を作つたのである。
 【詩意】榮枯の眼を過ぎるのは、電と風との如くである、忽ち來つて、忽ち去つてしまふ。那ぞ花の紅に似ることを得ようぞ。悟つて見ると、色即ち空、萬物は因縁所生のものであつて、本來實有のものではない。守瓏上人は、觀空閣に宴坐して居て、色を觀じ、空を觀じ、色即ち空なることを觀じて居られる。

【字解】【一】過眼、同じく東坡の詩に、過眼百世如風燈。古詩に、過眼江山好、摩挲家日月多。
 【二】上人、翻譯名義律に、般若王稱、佛弟子爲上人。【三】宴坐、維摩經に、不於三界現、身意是爲宴坐。不起滅定、而現諸威儀、是爲宴坐。
 【觀色】觀、般若心經に、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。維摩經に、色即ち空、非色滅空、色性自空。

和劉道原見寄

劉道原が寄せらるるに和す

敢向清時怨不容。敢て清時に向て容れざるを怨まん、

直嗟吾道與君東。直に嗟す吾が道君と東するを。

坐談足使淮南懼。坐談は淮南をして懼れしむるに足る、

歸去方知冀北空。歸り去つて方に知る冀北空しきを。

獨鶴不須驚夜旦。獨鶴須あす夜旦を驚かすを、

羣鳥未可辨雌雄。羣鳥未だ雌雄を辨すべからず。

廬山自古不到處。廬山は古より到らざる處、

得與幽人子細窮。幽人と子細に窮むるを得ん。

南蘇東坡詩集卷七、而不及背。【一】冀北空、左傳、昭公四年に、冀之北土、馬之所生。韓退之が文に、伯樂一過冀北之野、而馬羣逆交。【二】獨鶴云云、淮南子に、鶴知夜半、劉琨を鶴に比し、衆人を鶴とする。【三】幽人、周易の卦に、履道坦坦、幽人貞吉。柳子厚が柳宗元山人至愚池詩に、自語「幽人」一行。

【題義】此詩も熙寧五年、三月の作である。道原の學問性行を歎美して、當時進用の人を諷する。坐談足使淮南懼は道原を汲黯に比し、淮南を王安石に喩へたのである。

【詩意】清時に君の容れられないのは、必しも怨まない。君の歸養されて、吾が道が君と東するを嗟

【字解】【一】劉道原、劉恕、字

は道原。王安石と論を異にし、交を

絶ち、歸養を力請す。【二】恨、不

容、家庭に、顔回曰、不容何病、不

容然後見君子。史記孔子世家に、夫

子推而行之、不容何病。【三】吾

道與君東、後漢、鄭玄傳に、玄從馬

融、受業畢、辭歸、融明然曰、鄭生

今去、吾道東矣。【四】坐談、魏志、

郭嘉傳に、劉表坐談客耳。【五】使

淮南懼、漢書、辛慶忌傳に、廣有

宮之奇、吾豈不衆、猶青在位、淮

南蘇東坡詩集卷七、困學紀聞に、今人多以淮南

嘆するのである。昔、漢の淮南王が謀反した時、汲黯を憚つて、黯好直諫、守節死義と言つた。淮南王の謀が寝んだのは、汲黯の力だと言はれて居る。君が王安石と争論して屈しなかつたのは、人意を強うするに足る。君が歸り去つて、冀北の野に馬が空しくなつた。(館中に人物がないことをいふ。)君の館中に在る、昂昂として獨鶴が、羣の羣に在るやうである。(獨鶴では、夜旦を驚かすを須むない。獨立、助けなきをいふ。詩にいふ、具曰予聖、誰知鳥之雌雄と。)今日進用の人は、君子と小人とが雜居して居る、恰も鳥の雌雄を辨することが出来ないやうなものである。さて、廬山は古より到らざる處(時に道原は其父漢に侍して九江に居る)であるから、どうか、幽人と仔細に窮めたいものである。

和劉道原咏史

劉道原の咏史に和す

仲尼憂世接輿狂。仲尼は世を憂へ接輿は狂す、

臧穀雖殊竟兩亡。臧穀殊なりと雖も竟に兩ながら亡ぶ。

吳客漫陳豪士賦。吳客漫に陳す豪士の賦、

桓侯初笑越人方。桓侯初め笑ふ越人の方。

名高不朽終安用。名高く朽ちざるも終に安に用ゐる、

【字解】【一】接輿、論語、微子

篇に、楚狂接輿歌而過孔子之門、曰、

鳳兮鳳兮、何德之衰云云。【二】臧

穀、莊子、駢拇篇に、臧與穀二人、相

與牧羊、而俱亡其羊、臧則被策讓、

穀則博塞以游、事業不同、其於亡羊均也。【三】吳客漫陳云云、晉

日飲無何計亦良。日に飲み何もなき計も亦良し。

獨掩陳編弔興廢。獨陳編を掩うて興廢を弔す、

窗前山雨夜浪浪。窓前の山雨夜浪浪。

待切脈望色、離羣影、言前所不在、過齊、齊桓侯嘗之、入朝見曰、君有疾、不治將深、桓侯不應、後使病、召扁鵲、扁鵲已過去、桓侯死。【一】不朽、左傳、襄公二十四年に、叔梁紇曰、大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽、文選、曹大家が東征賦に、惟命德爲不朽、身既沒而名存。【二】日飲無何、漢の安帝傳に、帝從吳相、辭行、兄子種曰、吳王崩日久聞多、齊、南方卑濕、絲(釜の字)能日飲亡何、說王母反而已、如此幸得脫。【三】陳編、韓退之の進學解に、竊陳編以益學。【四】浪浪、韓退之が賦に、雨浪浪其不止、雲浩浩其常浮。

【題義】道原は史學に長じ、魏晉以後の事に於て尤も精詳で、前史の差謬を考證し、十國紀年四十二卷、通鑑外紀十卷ある。此和詩の原詩即ち道原の咏史が傳はらないのは、惜しいことである。

【詩意】孔子は世を憂へて、天下に周遊した。接輿は髪を披り、佯り狂して無道の世を避けた。二人は行藏相反する。臧と穀との二人、俱に羊を牧し、俱に之を亡うた。臧は學をよくして、書を讀みしが爲めである。穀は博塞(博奕)に心を奪はれしが爲めである。讀書と博塞とは、善惡固より同じからざるも、羊を亡ふは則ち均しいのである。又、吳郡の陸機は、齊王罔が功を矜り、自ら伐る態度を惡んで、豪士の賦を作り、以て之を刺つた。齊の桓侯は初、扁鵲の處方を笑つた。病むに及んで扁鵲を召したが、鵲は已に逃れ去つた。齊王罔に見るも齊の桓侯に見るも、名高うして朽ちないでも、終

に安くに用ゐる。故に昔の張翰は使我有身後名、不如此即時一杯酒と言つたが、時人は其の曠達を貴んだのである。杜子美が醉時歌にも、名垂萬古知何用とある。愛壘の兄の子孫が、愛壘に向つて、毎日、酒を飲んで何にも他の事をしないがよい、と言つたあの計も亦良し。獨、陳編を掩うて古今興廢の事を弔する。窓前の山雨は夜浪浪(浪浪は流れる貌。王文誥いふ、著此二句、匡廬五老呼之欲出と。紀昀いふ、收得生動、著此七字、便有遠神と。)

和劉道原寄張師民

劉道原が張師民に寄するに和す

仁義大捷徑詩書一旅亭。

仁義は大捷徑、詩書は一旅亭。

相夸綬若若猶誦麥青青。

相夸りて綬若若たり、猶ほ誦す麥青青を。

腐鼠何勞嚇高鴻本自冥。

腐鼠何ぞ勞嚇、高鴻本自ら冥し。

顛狂不用喚酒盡漸須醒。

顛狂喚ぶを用ゐず、酒盡きて漸く須く醒むべし。

【字解】【一】捷徑、唐、隱逸傳に、仕途捷徑、屈原の離騷に、夫唯捷徑、以譽少。莊子、天運篇に、古之至人、假道於仁、託宿於義、以遊逍遙之域。【二】旅亭、列子の仲尼篇に、處吾之家、如逆旅之舍、初嚴經に、譬如行客投寄旅亭。或食、或宿、食引事畢、假裝而後、不遑安住、若實主人、自無飲往。【三】綬若若、漢の石顯傳に、民歌之曰、非邪石邪、五鹿客邪、印何索、綬若若。其の官を兼り勢に據るを言つたのである。【四】誦麥青青、莊子、外物篇に、雷以詩譏殺家、曰、詩固有之、曰青青之麥、生於陵阪、生不布施、死何含珠袋。【五】高鴻本自冥、揚子に、鴻飛冥冥、七人何慕焉。【六】顛狂、氣がくるふ、杜市の詩に、顛狂柳絮隨風舞、輕薄桃花逐水流。

【題義】前の劉道原が張師民に寄せた詩に和したものである。紀昀いふ、此直叫囂睡罵、不止三憑以怒一矣と。

【詩意】唐の盧藏用といふもの、初、終南・少室の二山に隠れたが、時に當世に意あるより、世人は目して從駕隱士といつた。承禎が山に還らうとするや、藏用は終南を指して、此中、大に佳趣ありといふ。すると、承禎はいふ、僕を以て之を視れば、仕官の捷徑なりと。仁義は大捷徑であるから、古の至人は、道を仁に假り、宿を義に託する。詩書は譬へば一旅亭で、旅亭に投寄して、或は食し、或は宿するやうなものである。かの印の樂業、綬の若若たるを夸つて居り、なほ麥の青青を誦するは、詩書を借りて其の姦を文るものである。腐鼠何ぞ勞嚇といふのは、莊子の秋水篇に、惠子相梁、莊子往見之、或謂惠子曰、莊子來、欲代子相、惠子恐、莊子曰、鸚得腐鼠、鵲過之、曰、嚇、今子欲以子之梁國而嚇我邪とあるを引いたもので、鵲は梧桐でなければ止まらない。竹の實でなければ食はない。醜泉でなければ飲まない。鵲の餌とする腐つた鼠などには目もつけないのに、何ぞ嚇といつて咎める。鴻は高く飛んで自ら冥冥に入り、弋人の及ぶ所ではない。さて利に溺れて氣の狂うたものは、嘆ぶことを用ゐない。酒が盡きて漸く醒めるであらう。

【餘論】東坡が杭州に通判となつて、劉恕字は道原の寄せた詩は、都合三首ある。東坡は毎に其の韻に依つて和したが、曾て張師民に寄せたものはない。此詩を案するに、讒諷を主としたものである。即ち朝廷、近日進用の人は、仁義を捷徑とし、詩書を逆旅とする。併し、印綬符籙に誘はれて、六經

を假りて以て進むのであるから、莊子の所謂、僞以詩禮發冢ものである。故に夢青青といふ、悪いことを行ひながら、詩を誦する。又、小人が祿を顧るのは、鵲が腐鼠を以て鴻鶴を嚇するやうなものである。其の利に溺れるは、人の酒に酔ふやうなもので、酒が盡きると自ら醒めるのである。

送張職方吉甫赴閩漕六和寺中作

張職方吉甫が閩漕に赴くを送る、六和寺中の作

羨君超然鸞鶴姿、羨む君が超然たる鸞鶴の姿、

江湖欲下還飛去、江湖に下らんと欲して還飛び去る。

空使吳兒怨不留、空しく吳兒をして留ざるを怨ましむ、

青山漫漫七閩路、青山漫漫たり七閩の路。

門前江水去掀天、門前の江水去つて天に掀し、

寺後清池碧玉環、寺後の清池碧玉環。

君如大江日千里、君は大江の如く日に千里、

我如此水千山底、我は此水の如く千山の底。

【字解】一、張職方吉甫、職官分記に、職方は官名。兵部官屬、職方郎中、從六品、員外郎、正七品。

二、六和寺、西湖遊覽志に、六和塔在月輪峰傍、六和といふは、戒和同修、見和同解、身和同住、利和同均、口和無爭、意和同悅である。

三、超然鸞鶴姿、漢、班固敘傳に、超然遊覽、淵然深遠。白樂天の詩に、因詠、松雪句、水懷、鸞鶴姿。

四、吳兒、晉書に、賈光顯、夏統吳兒、木人石

心也。

五、閩中記に、閩之人居海隅、有七種、故謂之七閩。

六、掀天、掀、天、

五〇五

白樂天の詩に、白浪歌天盡日風。【一】劉禹錫の詩に、水鏡亭臺碧玉環。

【題義】此詩も熙寧五年三月の作である。紀昀いふ、了無深意、而風調勝人、小詩如此亦自佳、但偶一爲之則可、不得倚爲安身立命處云。

【詩意】君が超然として鸞鶴の姿であることは羨ましい。鸞鶴は江湖に下らうとして還飛び去り、空しく吳兒をして留らないことを怨ましめる。張吉甫は初、江南の官を授けられたが、改めて閩漕に除せられたから、欲下還飛去、吳兒怨不留守たのである。古樂府に、山川悠遠兮路漫漫とあるが、七閩の路は、青山が漫漫として悠遠である。門前の江水は、去つて天に掀がる。六和寺後の池は、碧玉環のやうである。(蘇子美の賦する所の金鱗魚である。)君は大江の如く日に千里、我は此山の如く千山の底にある。(此水は池水を指す、下寮に伏處して、一步も行くことが出来ない。東坡が州を得るに當つて、王安石は其の責を抑へたといふことである。)

和子由柳湖久澗忽有水開元寺山茶舊無花

今歲盛開二首

子由が柳湖久しく澗れ、忽ち水あり、開元寺山茶舊花なく、今歲盛に開くに和す二首

太昊祠東鐵墓西

太昊祠の東鐵墓の西

【字解】

太昊祠、鐵墓、昔、

一樽曾與子同攜

一樽曾て子と同じく携ふ。

回瞻郡閣遙飛檻

回瞻すれば郡閣遙に檻を飛ばし、

北望檣竿半隱堤

北に望めば檣竿半は堤に隱る。思ひ、

飯豆羹藜思兩鶴

飯を飯し藜を羹にせんとして兩鶴を

飲河嘸水賴長寬

河に飲み水を嘸いて長寬に賴る。

如今勝事無人共

如今勝事人の共にするなく、

花下壺盧鳥勸提

花下の壺盧鳥提ぐることを勸む。

陳州に在る。陳州は滑の時、河南に屬す。今の淮陽縣。【一】一樽五東野の時に、一樽飲曾同。【二】郡閣杜牧の詩に、秋風郡閣飛花。【三】檣竿劉禹錫の詩に、沙頭檣竿上。【四】飲河云云。劉禹錫の觀波曲に、鸞鶴飲河形影。【五】壺盧鳥勸提。鳥語をいふ。歐陽修の觀鳥の詩に、獨有花上提壺盧。勸我沽酒花前。白樂天の詩に、春鳥勸提壺。

【題義】子由が宛邱二詠の敘に、宛邱城西柳湖、果歲無水、開元寺殿下、山茶一株、枝葉甚茂、亦數年不開、嶺頃從子瞻游此、每以二物爲恨、去歲雨雪相仍、湖中春水忽生數尺、至三月中旬、山茶復開千餘朵、因作二詩奉寄とある。

【詩意】太昊祠の東、鐵墓の西にある柳湖には、曾て子と同じく手を攜へて遊んだことがある。(東坡、陳州を過ぎ、子由と同じく柳湖に遊ぶ。)回瞻すれば郡閣は遙に檻干を飛ばし、北を望めば檣竿は半堤に隱れて居る。飯を飯し藜を羹にしようとして兩鶴を思ふ。(東坡と子由とに比す)河に飲み水を嘸いて長寬に賴る。昔、飲井の水竭きたとき、天が蜺を投ずると、大雨があつたと言ひ傳へる。只今

は風流勝事も人の共にするなく、花下に壺盧と鳴いて鳥は提壺を勸める。(酒をすすめる。)

長明燈下石欄干、長明燈下の石欄干、

長共松杉守歲寒、長へに杉松と共に歳寒を守る。

葉厚有稜犀甲健、葉は厚うして稜あり犀甲健に、

花深少態鶴頭丹、花深うして態少く鶴頭丹し。

久陪方丈曼陀雨、久しく方丈曼陀の雨に陪し、

羞對先生苜蓿盤、先生苜蓿の盤に對するを羞づ。

雪裏盛開知有意、雪裏盛に開く知りぬ意あることを、

明年開後更誰看、明年開いて後更に誰か看ん。

【字解】長明燈、江寧縣寺

に、晉の長明燈あり。歳久しく火色

變じ、青うして熱しない。劉禹錫の

詩に、長明燈是前朝燭、曾照青青年少

時。守歲寒、論語の子罕篇

に、歲寒、然後、知松柏之後凋也。

犀甲、周禮、冬官に、商人爲

甲犀甲七屬。杜子美の詩に、龍鱗犀

甲相錯愕、蒼髮白皮十抱文。

曼陀雨、法華經に、拘讎陀羅曼陀

羅花香。法華經に、天雨曼陀羅花。

【詩意】長明燈は、隋の文帝、既に其の古を訝つたが今に猶ほ存する。燈下の石欄干は、松杉と共に歳寒を守る。葉は厚うして稜があつて、犀甲健かに、花深うして態少く鶴頭が丹い。(劉禹錫が歩虛詞に、華表千年一鶴歸、凝丹爲頂雪爲衣とある。)久しくお寺の曼陀の雨に陪して、先生苜蓿の盤に對するを羞ぢる。(子由が學官たるをいふ。)雪裏盛に開くのは、意あることが解つた。明年開いて後に、誰が見るであらう。(杜子美の詩に、明年此會知誰健、更把三茱萸子細看とある。)

雨中遊天竺靈感觀音院 雨中天竺の靈感觀音院に遊ぶ

蠶欲老麥半黃、蠶は老いんと欲し麥半は黄なり、

前山後山雨浪浪、前山後山雨浪浪。

農夫輟耒女廢筐、農夫は耒を輟め女は筐を廢む、

白衣仙人在高堂、白衣の仙人高堂に在り。

【字解】天竺靈感觀音院、臨安志に、錢忠懿王夢白衣人求

治其居、乃即其地、創佛窟、號天

竺香觀院。後の靈感觀音院である。

蠶欲老、荀子、賦蠶篇に、春

壯而獨老者與。註にいふ、壯得其

養、老而見之。農夫輟耒、漢の鄒食其傳に、農夫釋耒、紅女下機。南史賀正傳に、年二十始輟耒。白衣仙人、釋氏有白衣觀音像文。

【題義】此詩も前時と同じく熙寧五年四月の作である。傳へいふ、晉の天福四年に、僧道翽、一夕山間に光明を見る。往いて之を視、奇木を得、匠者孔仁謙に命じて觀音像を刻せしめたといふことである。觀音院に遊んだ時であるが、當事の民を恤まないことを刺つたのである。

【詩意】蠶は老いんと欲し、麥も半は黄色となつた。既にして前山も後山も雨降つて浪浪と流れる。農夫は耒を輟め、女は筐を廢める。そして、白衣の仙人が高堂にある。(五代の時、吳越王錢俶、白衣

天人が居處の陰きことを告げたことを夢みて、爲に殿堂を廣くした故事に據る。

贈上天竺辯才師

上天竺辯才師に贈る

南北一山門。上下兩天竺。

南北一山門、上下兩天竺。

中有老法師。瘦長如鶴鶴。

中に老法師あり、瘦長鶴鶴の如し。

不知修何行。碧眼照山谷。

知らず何の行を修むるを、碧眼山谷を照す。

見之自清涼。洗盡煩惱毒。

之を見て自ら清涼、洗ひ盡す煩惱の毒。

坐令一都會。男女禮白足。

坐に一都會をして、男女白足を禮せしむ。

我有長頭兒。角頰峙犀玉。

我に長頭兒あり、角頰犀玉を峙つ。

四歲不知行。抱負煩背腹。

四歲行くを知らず、抱負背腹を煩はす。

師來爲摩頂。起走趁奔鹿。

師來りて爲に頂を摩す、起走奔鹿を趁ふ。

乃知戒律中。妙用謝羈束。

乃ち知る戒律中、妙用羈束を謝す。

何必言法華。伴狂啖魚肉。

何ぞ必しも法華を言はん、伴り狂して魚肉を啖ふ。

【字解】 上天竺 天竺に住する十七年、歸つて南山盤井の上に老す。元祐六年、九月疾なくして逝く。西湖遊覽志に、龍井本名龍泓。【二】 鶴鶴 鶴はコウザシ、鶴に似るも、頂は丹くはない。鶴は白鳥。【三】 白足 僧をいふ、劉禹錫の詩に、都人禮。

白足。李商隱の詩に、白足經曾思。敢道。【一】 戒律 戒法といふに同じ。五戒。八戒。十戒等、すべて、戒は、佛が弟子の爲に漸次に制定した法規である。

【題義】 元豐三年に、辯才大師は天竺から歸つて南山の龍井に退休した。此詩は老師の退居中に贈つたものである。紀昀は、語殊凡鄙、不識東坡何以至此、此と評して居る。

【詩意】 南北一山門、上下兩天竺、中に辯才老師は無礙、此生を寄せて居る。身は瘦せて長く鶴鶴のやうであるが、一體、何の修行をして居る。碧眼は山谷を照らし、見るからに清涼である。人世の慾望苦慮等の煩惱を洗ひ盡す感じがする。坐に一都會の善男善女をして白足和尚を禮拜せしめる。我に長頭の子あり、頰は四角で、頭角を峙つ。四歲になつても、歩行が出来ないので、抱いたり背負うたりする。老法師が來つて、爲に頂を摩すると、不思議や起走して奔鹿のやうである。して見ると戒律の中にも、自ら妙用があつて、羈束を脱するものがある。何ぞ必しも妙法蓮華を言はん。それで出家の身、伴り狂して魚肉を食ふ。

和蔡準郎中見遊西湖三首

蔡準郎中遊へられて西湖に遊ぶに和す 三首

夏潦漲湖深更幽。

夏潦湖に漲り深うして更に幽なり、

西風落木芙蓉秋。

西風落木芙蓉の秋。

飛雪暗天雲拂地。

飛雪天に暗く雲地を拂ひ、

【字解】 【一】 蔡準 蔡京の父、官は侍郎。【二】 深更幽 宋、謝靈運が山居の賦に、窮幽幽深、寂漠虛遠。【三】 西風落木 杜子美の詩に

古今雜詩 贈上天竺辯才師 和蔡準郎中見遊西湖三首

新蒲出水柳映洲

新蒲水を出で柳洲に映す。

湖上四時看不足

湖上四時看ること足らず、

惟有人生飄若浮

惟人生の飄として浮ぶが若きあり。

解顏一笑豈易得

顏を解いて一笑す豈得易からんや、

主人有酒君應留

主人酒あり君應に留るべし。

君不見錢塘游宦

君見すや錢塘游宦の客、

客

朝推囚暮決獄

朝に囚を推し暮に獄を決す、

不因人喚何時休

人の喚ぶに因らずんば何時にか休

せん。

【題義】熙寧五年四月、蘇軾の西湖に遊んだ時に和したものである。臨安志に、明聖湖、周繞三十里、三面環山、溪谷縷注、下有溫泉、水道瀉而爲湖とある。漢の時、金牛が湖中に見はれたから、明聖の瑞となして明聖湖と名け、其の負郭よりも西なるより西湖と稱す。

【詩意】夏季の流水（にはた水）が湖に漲り、深うして更に幽である。西風芙蓉の秋も、いつしか飛雪天に暗く、雲は地を拂ふ、新蒲は水を出で、新柳は洲に映す。四時の眺は見厭きないのである。（王文誥いふ、起四句、從春水滿四澤、春胎、妙在化板實爲虛靈也と。）折節の移り行くは、人生

の飄として浮べるに似て居る。顏を解いて一笑するは、容易でない。主人に酒がある。君留るべし。君見すや錢塘、游宦の客、朝に囚を推して、暮に獄を決する。事多くして、人が喚ぶのでなければ、何時の時か休息出来ようぞ。（熙寧中、東坡は史館より來つて、杭州に貳となる。時方に新法を行ふ。公常に法に因つて以て民に便にした。）

城市不識江湖幽

城市は識らず江湖の幽なるを、

如與蠓蚶語春秋

蠓蚶と春秋を語るが如し。

試令江湖處城市

試みに江湖をして城市に處かしめば、

却似麋鹿游汀洲

却て麋鹿の汀洲に遊ぶに似たり。

高人無心無不可

高人は無心にして可ならざるなし、

得坎且止乘流浮

坎を得て且つ止まり流に乘りて浮ぶ。

公卿故舊留不得

公卿故舊も留ることを得ず、

遇所得意終年留

意を得る所に遇へば終年留る。

君不見拋官彭澤

君見すや官を抛つ彭澤の令、

令。

【字解】

蠓は蜜蜂、蚶は夏死し、夏生じて秋死し、四時の全きを見ない。莊子、逍遙遊に、蠓蚶不知春秋。汀洲、水中に土砂が積もつて出来た地。屈原、九歌に、漢汀洲兮杜若。終年留、唐の范傳正が文に、偶乘扁舟二日千里、我與勝景終年不移。拋官彭澤令、劉禹錫の詩に、何事陶彭澤、拋官爲新

琴無絃巾有酒

琴に絃なく巾に酒あり

休ましむ

醉欲眠時遣客休

酔うて眠らんと欲するとき客をして

【詩意】 城市に居ては、江湖の幽なるを識らない。春死して夏死する寒蟬と春秋を語るやうなものである。試に江湖をして城市に處かしめば、却て麋鹿（麋はトナカヒ、鹿の屬）が汀や洲に遊ぶやうなものである。高人は無心であるから、往くとして可ならざるはない。塊を得て且つ止まり、流に乗つて浮ぶ。公卿も故舊も行くを留めることが出来ない。意を得る所に遇ふと、年を終へても、外に移らない。君見すや官を抛つ彭澤の令を、琴に絃なく、巾に酒あり、酔うて眠らんとするとき、客をして休ましめる。（晉書、南史陶潛傳に、性不解音、而蓄素琴一張、絃徽不具、每朋酒之會、則撫而和之云云。潛逢酒熟、取頭上葛巾、漉酒畢、還復著之。）

田間決水鳴幽

田間の決水鳴いて幽幽

插秧未徧麥已秋

秧を插みて未だ徧からず麥已に秋

相攜燒筍苦竹寺

相攜へて筍を燒く苦竹寺

却下踏藕荷花洲

却下藕を踏む荷花の洲

船頭斫鮮細縷縷

船頭鮮を斫り細くして縷縷

【字解】 幽、幽、深遠なる貌。詩、小雅に、幽南山。【】、插秧、田うみ、秧は禾苗。杜子美の詩に、插秧過云已。【】、麥已秋、陰曆の四月を麥秋といふ。禮記月令に、孟夏之月、靡草死、麥秋至。【】、船頭、臨安志に、苦竹、端午前多充。

船尾炊玉香浮浮

船尾玉を炊ぎて香浮浮

隨風飽食得甘寢

風に隨みて飽食甘寢を得

肯使細故胸中留

肯て細故をして胸中に留めしめんや

君不見壯士憔悴

君見すや壯士憔悴の時

時

饑謀食渴謀飲

饑うれば食を謀り渴すれば飲を謀る

功名有時無罷休

功名時ありて罷休なし

【三】 罷休、史記、孫武傳に、吳王曰、將軍罷休。

【二】 壯士、漢高祖紀に、壯士行何異。

【詩意】 田間の決水は音立てて幽幽たり。田植も皆は畢らないうちに、麥秋となつた。そこで相攜へて筍を苦竹寺に曳き、茶を煮、筍を燒き、僧餐に伴うた。却つて荷花の洲に藕を踏む。（荷は芙蓉、其の根は藕、其の莖は茄、其の華は菡萏、其の實は蓮である。）船頭では、鮮魚を鮓にし、縷縷として細かに、船尾では好米を炊いで香浮浮（魏の文帝が羣臣に與へた書に、江表惟長沙有好米、是時新稔稻出、斜風吹之、五里聞香とある。）風に隨んで浩歌し、食に飽いて甘寢を得。肯て細故を胸中に留めない。君見すや壯士が憔悴したときを、饑うれば食を謀り、渴けば飲むことを謀る。功名は時あつて

罷休することがない。

六月二十七日望湖樓醉書五絕 六月二十七日望湖樓醉書五絕

黑雲翻墨未遮山，白雨跳珠亂入船。

卷地風來忽吹散，望湖樓下水如天。

【字解】「一」望湖樓 西湖の畔にある。圖經には、一名、看湖樓、乾隆七年、忠愍王錢氏建、去錢塘一里。西湖遊覽志には、樓在昭慶寺前、一名、先德樓。清の康熙帝、此の樓に登り、平朝秋月の四字を題した。【二】白雨 夕立の雨をいふ。白樂天が悟真寺の詩に、赤日間。白雨。また三游洞の序に、水石相薄、跳珠亂玉。【三】卷地 轉迅之が詩に、春風卷地起、百鳥皆飄浮。【四】水如天 柳子厚の詩に、桂嶺瘴來雲似墨、洞庭春盡水如天。

【題義】此の詩は、神宗の熙寧五年（皇紀一七三二年、西曆一〇七二年）東坡の三十七歲、杭州に通判となつた時の作である。紀昀いふ、五首皆不失風調一と。第一首、水天一碧の湖面に、夏天驟雨の壯觀を寫し、才筆横逸、天馬の空を行くやうである。第四首は、更に情致に饒かである。

【詩意】墨のやうな雲が、あの山にかかるよと見るまに、黒雲が未だ前山を蔽ひ隠さないうちに）夕立が珠を跳らすやうに亂れて船に入り来る。（黒雲と白雨と對して實況を寫し出す所、字字活躍して紙上に聲あるやうである。）忽ち地を巻きつつ狂風が來つて彼の雲をも雨をも吹き散らして、一點の痕跡

を留めない。かくてもとの晴天となつて、此の望湖樓下の水は、青天の色と一様である。

【餘論】僅僅二十八字であるが、作者の精神も容貌も躍如として居る。此詩は、必ず指す所があるであらう。小人どもが、一時、勢を得て、狂ひまはつたが、忽ち敗れて散亂し、跡方もなくなつた意にも取れやう。

放生魚鼈逐人來，無主荷花到處開。

水枕能令山俯仰，風船解與月徘徊。

【字解】「一」放生 西湖遊覽志に、放生亭在寶石山麓。【二】無主 杜子美の詩に、桃花一葉開無主。【三】水枕 沈香をいふ。杜牧の詩に、瓊簾水枕。【四】徘徊 李太白、月下獨酌詩に、我歌月徘徊。

【詩論】天禧四年に、太子太保判杭州王欽若は、西湖を放生池となして、魚鳥を捕へることを禁じ、人主の爲に福を祈らんことを奏上した。西湖の池に放つた魚や鼈は人を逐うて來り、主のない荷花は到る處に開いて居る。沈香は能く山をして俯仰せしめ、風船は解く月と徘徊する。

鳥菱白茨不論錢，亂繫青菰裹綠盤。

【字解】「一」鳥菱白茨 菱は菱、尖角ある水草、四角なるを菱といひ、兩角を菱といふ。臨安志に、菱、初

古今體詩 六月二十七日望湖樓醉書五絕 五一七

忽憶嘗新會靈觀。忽憶嘗新會靈觀に嘗めしを、
滯留江海得加餐。江海に滯留して加餐を得たり。

【詩意】鳥菱や白茨は、錢を論せずして、之を購め、青い菰に亂繫して練盤に裏む。(韓退之の詩に、平池散茨盤。)忽ち憶ふ、嘗て新風味を會靈觀で嘗めたことを。(歐陽文忠公が食難頭詩に、凝祥池鎖會靈園と見ゆ。註にいふ、京師賣五嶽觀雞頭、最佳と。)今は江海に滯留して加餐(多く飲食すること)することが出来た。

【字解】(一)木蘭。木蘭川は、潭陽江中、七里洲に在る。昔班、木蘭を判んで舟を盛り、今に至るまで猶は在る。皇甫冉の詩に、雲間楓葉岸、留帶木蘭枝。(二)翠翹。劉禹錫の詩に、拾翠翠翹。曹子建の七

獻花游女木蘭橋。花を獻する游女木蘭の橋、

細雨斜風溼翠翹。細雨斜風翠翹を溼す。

無限芳洲生杜若。限なき芳洲杜若を生ず、

吳兒不識楚辭招。吳兒は識らず楚辭の招くを。

【詩意】花を獻する游女や、木蘭の橋、美しくて目を悦ばしめる。そして細雨斜風が首飾を溼はす。(張志和の漁父詞に、青箬笠、綠蓑衣、斜風細雨不須歸、と。此の字面を用ひたものであらう。)見

渡す限もなき美しい洲に杜若(やぶめうがの異名)を生じて居る。屈原の九歌に、采芳洲兮杜若、將以遺兮下女。とある。併し、吳兒は楚詞の招くを識らない。

未成小隱聊中隱。未だ小隱を成さず聊か中隱す、

可得長閒勝暫閒。長閒暫閒に勝るを得べけんや。

我本無家更安往。我は本家なし更に安にか往かん、

故鄉無此好湖山。故郷此の好湖山なし。

【字解】(一)小隱。王康樂の反招隱詩に、大隱隱朝市、小隱隱長閒。(二)長閒、暫閒。白樂天の詩に、偷閒意味勝長閒。韓退之の詩に、盡年將久、公今始暫閒。(三)無家。杜子美の詩に、此身那得更無家。

【詩意】未だ小隱をなさない、聊か中隱をするのであるから、長い閒の暫の閒に勝るといふ點を知ることが出来ようぞ。(小隱といふのは蕪澤に隠れる意である。白樂天が中隱の詩に、大隱住朝市、小隱入邱樊、邱樊太冷落、朝市太聒喧、不如此中隱、隱在留司官、似出復似處、非忙亦非閒、唯此中隱士、致身吉且安とある。)我には本、家がない。更に安くに往かうぞ。故郷には此好湖山がない。

【餘論】王文誥いふ、以上八詩、隨筆拈出、皆得西湖之神、可謂天才。
七月一日出城舟中苦熱。七月一日城を出づ、舟中苦熱。
涼颼呼不來、流汗方被體。涼颼呼べども來らず、流汗方に體に被る。

稀星乍明滅。暗水光瀾瀾。

稀星乍明滅。暗水光瀾瀾。

香風過蓮茨。驚枕裂魴鯉。

香風蓮茨を過ぎ、驚枕魴鯉を裂く。

欠伸宿酒餘。起坐灌清泚。

欠伸宿酒の餘、起坐清泚を濯ふ。

火雲勢方壯。未受月露洗。

火雲勢方に壯、未だ受けず月露の洗ふを。

身微欲安適。坐待東方啓。

身微安くに適かんと欲する、坐して東方の啓くを待つ。

【字解】「〇」苦熱。白樂天の詩に、不堪暑苦熱。【〇】涼颺。すすしい風、文選、張儀子の魯歌行に、常恐秋節至、涼颺寒炎熱。【〇】呼不來。後神記に、趙明長嘯呼、風亂流而濟。【〇】被。杜子美の詩に、汗流被我體。【〇】稀星。文選、曹孟德の詩に、月明星稀。杜子美の詩に、重露成涓滴、稀星乍有無。【〇】明滅。陶登の詩に、蓬臺乍明滅、巨浸何瀾漫。【〇】瀾瀾。水の流れる貌。詩の場風に、河水瀾瀾。【〇】香風。李太白の宮中行樂詞に、鑪香風暖。【〇】清泚。文選、謝元暉の詩に、寒流自清泚。【〇】安適。史記、伯夷傳に、我安適歸矣。【〇】東方啓。毛詩に、東有啓明、西有長庚。啓明は明星である。

【題義】七月一日は熙寧五年の七月である、城を出て舟に在り、苦しい熱さに堪へ兼ねて此詩を作つたのである。

【詩意】炎熱に堪へられない。涼しい風を呼んでも、風は来てくれない。流るる汗は、我が體に被る。星は稀に、又、乍も明滅する。暗水も、星光の明滅で、水光が瀾瀾として流れ行く。香風は蓮茨(茨はオニバス)を吹いて居る。枕を敲てて魴や鯉を驚かす。宿酒の餘、欠伸して汗を拭ふ。火雲の勢は方に壯であつて、未だ月露に洗はれない。(杜子美の詩に、火雲洗三月露、絕壁上朝暾とある。)

微なる此身は安くに適かうぞ。坐して東方の啓くを待つのみである。

宿餘杭法喜寺後綠野堂望吳興諸山懷孫莘

老學士

餘杭法喜寺後の綠野堂に宿して、吳興諸山を望み、孫莘老學士を懷ふ

徒倚秋原上。淒涼晚照中。

徒倚す秋原の上、淒涼晚照の中。

水流天不盡。人遠思何窮。

水流れて天盡きず、人遠くして思ひ何を窮りあらん。

問諜知秦過。看山識禹功。

諜を問うて秦過を知り、山を見て禹の功を識る。

稻涼初吠蛤。柳老半書蟲。

稻涼初めて吠蛤、柳老いて半は書蟲。

荷背風翻白。蓮腮雨退紅。

荷背風白を翻へし、蓮腮雨紅を退く。

追游慰遲暮。覓句效兒童。

追游遲暮を慰め、句を覓めて兒童に效ふ。

北望苕溪轉。遙憐震澤通。

北望すれば苕溪轉じ、遙に憐む震澤の通するを。

烹魚得尺素。好在紫髯翁。

魚を烹て尺素を得、好在なりや紫髯翁。

【字解】「〇」法喜寺。餘杭縣の東北半里に在る。舊名は吉祥院。【〇】孫莘老。宋史に、孫覺、字伯華老、高郵の人、進士の弟に登る。【〇】使。低徊に同じ、楚辭、遠遊章句に、步後倚以遙思。文選、謝叔源の詩に、誰能引芳柯。【〇】

古今體詩 宿餘杭法喜寺後綠野堂望吳興諸山懷孫莘老學士

問語。左傳、宣公八年夏、會晉伐秦、晉人獲秦繆、此時の本づく所である。蘇は蘇記をいふ、史記、三代世表に、余願蘇記、黃帝以來、皆有二年數云云。【一】秦過、賈誼は過秦論を作つて、秦の過失を指す。【二】蘇繆功、左傳、昭公元年に、劉定公歸於蘇、蘇曰、美哉繆功、明德遠矣。【三】吹始、なくかへる、蘇謂では、蘇繆を呼んで始となす、韓退之の詩に、始即是蘇繆。【四】香魚、漢、五行志に、昭帝時、上林御樹斷仆地、一朝起立生枝葉、有香魚、葉成、文曰、公孫病已立。杜子美の詩に、香魚玉佩聲。【五】遊暮、だんだん年寄る、屈原の離騷に、惟草木之零落兮、恐美人之遲暮、陸遊の詩に、年光遊暮壯心違。【六】覓句、杜子美の詩に、覓句新知律。【七】習溪、習水は、天目山より出づ。古老相傳ふ、岸を夾んで習草多く、秋風花を吹いて、浮ぶこと飛雪の如し。因りて溪に名く。【八】震澤、何書に、三江既入、震澤既定。【九】尺素、古樂府に、香從遠方來、遺我雙鯉魚、呼兒烹鯉魚、中有尺素。【一〇】好在、杜子美の詩に、好在阮元瑜。

【題義】此詩も前詩と同時に作である。紀昀いふ、不必精深、而自然華妙、此由氣韻不合同。【詩意】秋原の上を低徊(たちもどる)すると、夕日の影も淺涼である。水流れて天に速なり、天は盡きない。人は遠く離れて、思慕の情は、何ぞ窮りあらん。古の蹟記を閲して秦の過失を知り、山勢を流覽して大禹の功績を識つた。(秦始皇紀三十七年に、始皇は會稽山に上らうとして、錢塘に至り、浙江に臨む。水波が惡かつたから、西百二十里、陝中より渡つたといふことである。餘杭といふ名も、舟を中に捨てた(杭を留むる意)所から起つたさうである。東坡の自註に、餘杭、始皇所舍舟也、西北舟杭山、堯時洪水、繫舟山上とある。舟杭山は餘杭縣西北二十五里に在り、山頂に石穴がある。古老いふ、禹治水維舟の處と。)稻が涼しくなつて蝦蟇が鳴く。柳葉も老いて半は蟲の食つた書物のやうになつた。荷の背は風に吹かれて白きを翻へし、蓮の脚は雨に打たれて紅を退ける。回想追遊は

暮年を慰めるものであるから、兒童に真似て、詩の句を覓める。北望すれば習溪も向を變へ、北流して太湖に入る。(太湖は古の震澤である)魚を烹ると、尺素を得た。好在なりや紫髯翁とある。(昔、張遼は紫髯將軍を以て孫權を目したが、今、莘老も髯が多く、姓も孫といふから、此故事を用ひたのである。)

【餘論】宋の李慶(華州の人)が師友談記に、館中以孫莘老爲大翁孫學士、孫巨源爲小翁孫學士。鬚子は鬚の俗稱、胡下に生ずるよりいふ。

宿臨安淨土寺

臨安の淨土寺に宿す

鷄鳴發餘杭到寺已亭午。
參禪固未暇飽食良先務。
平生睡不足急掃清風宇。
閉門羣動息香篆起煙縷。
覺來烹石泉紫筍發輕乳。
晚涼沐浴罷衰髮稀可數。
浩歌出門去暮色入村塢。

鷄鳴に餘杭を發し、寺に到れば已に亭午。
參禪固より未だ暇あらず、飽食良に先づ務む。
平生睡足らず、急に清風の宇を拂ふ。
門を閉ぢて羣動息み、香篆煙縷起る。
覺め來りて石泉を烹る、紫筍輕乳を發す。
晚涼沐浴し罷み、衰髮稀にして數ふべし。
浩歌門を出で去る、暮色村塢に入る。

微月半隱山圓荷爭瀉露
相攜石橋上夜與故人語
明朝入山房石鏡炯當路
昔照熊虎姿今爲猿鳥顧
興廢何足弔萬古一仰俯

微月半は山に隠れ、圓荷争ひて露を瀉ぐ。
相攜ふ石橋の上、夜故人と語る。
明朝山房に入る、石鏡炯として路に當る。
昔は熊虎の姿を照し、今は猿鳥の顧となる。
興廢何ぞ弔するに足らん、萬古一仰俯。

【字解】(一) 微安 吳志にいふ、建安十六年、分餘杭立臨水縣、晉太康中、改臨安縣。(二) 淨土寺 杭州靈隱に、淨土寺在臨安縣南半里、周顯德三年置。(三) 亭午 日在午を亭午といふ、晉の孫綽が天台賦に、羲和亭午、游氣高懸。(四) 參禪 皮日休が詩に、林間孤鶴參禪。(五) 掃清風 李太白の書に、清風掃門、明月侍坐。文選、振古詩に、玉宇來清風。(六) 羣動息 司空圖の詩に、夜久羣動息。陶潛明が詩に、日入羣動息、歸鳥鳴林鳴。(七) 香茶 香譜に、近世作香茶、其文作十二辰、分百刻、然一晝夜已。(八) 煙縷 白樂天、待滯入關詩に、碧樓煙縷直。(九) 紫芣 茶の佳品。(一〇) 衰髮 白樂天の沐浴詩に、髮少不勝梳。(一一) 浩歌 杜子美の詩に、浩歌彌激烈。李太白が詩に、仰天大笑出門去。(一二) 暮色 柳子厚、西山宴遊記に、蒼然暮色自遠而至。(一三) 村場 村落といふに同じ、杜市の詩に、駘行虛日無村場。(一四) 微月半隱山 杜子美の詩に、圓荷爭瀉露。杜子美の詩に、圓荷爭瀉露。白樂天、白蓮詩に、淺香銀露破、海影玉盤傾。(一五) 熊虎姿 左傳宣公四年に、楚子文曰く、是子也、熊虎之狀、而豺狼之聲。(一六) 仰俯 王羲之の蘭亭敘に、夫人之相與俯仰一世云云。

【題義】此詩は熙寧五年七月の作で、東坡の三十七歲、杭州に通判であつた時であつた。唐宋詩辭に、別有二三種清島幽異之趣、無心刻琢、自造玄微と評して居る。

【詩意】雞鳴の時刻に、餘杭(有名な吳越王の舊跡で、通判の官舎ある處)を出發した。寺に到つた頃は、已に正午であつた。參禪は固より暇がないが、飽食だけは先づ務める。官吏の身は、平生睡が足りない。篋書の間に局促するからである。山寺の閑靜な處を尋ね、急に字を拂つて清風を入れる。(十分に眠らんが爲めに)門を閉ぢた後は、羣動息んで寂然。一晝夜、煙縷が起る。覺めて石泉を煮る。茶が輕乳を凝する(茶の熱したる時のさま)夕方になつて涼しくなる頃、沐浴した後、髮を梳るに、衰髮が稀にして數へる位である。晚浴の後、散步し、浩然門を出で去る。暮色は蒼然として村落に入り、微風は半山に隠れる。荷葉は争ひて露を瀉ぐ。相攜へて、石橋の上で、夜、故人と語る。(以上は淨土寺に宿した時のこと。其の明朝に至つて、淨土寺を去つて今日は山房院(眞寂院)に遊ぶ。石鏡は炯(ひかること、炯は俗字)として路に當る。昔、吳越王錢鏐は臨安の人であつたが、布衣であつた時、嘗て石鏡に照らす、鏡起ち上つて聳え戦いだといふことである。(太平寰宇記に、臨安の石鏡山は、高さ二十六丈、山の東峰に、石鏡あり、徑二尺七寸、其の光は鏡の如し)此の石鏡に、吳越王の錢鏐が、壯年の時に、熊虎の如き、たくましい姿を照らしたが、今日はかかる英雄が居ないから、徒に山中に在つて猿や鳥など瑣細なものに顧みられるばかりである。(此句にも東坡の不平が見える)併し、悟つて見ると、當然のことで、何も用するには足らない。萬世の久しい歲月も、ただ頭を仰むけるか俯すか、まことに瞬く間に過ぎないのである。

自淨土寺步至功臣寺

淨土寺より歩いて功臣寺に至る

落日岸葛巾晚風吹羽扇

落日葛巾を岸し、晚風羽扇を吹く。

松間野步穩竹外飛橋轉

松間野歩穩に、竹外飛橋轉す。

神功鑿橫嶺巖石得巨片

神功横嶺を鑿ち、巖石巨片を得。

直渡千人溝下有微流注

直に千人の溝を渡る、下に微流の注たるあり。

岡巒蔚回合金碧爛明綯

岡巒蔚として回合し、金碧爛として明綯。

緬懷異姓王負擔此鄉縣

緬に懷ふ異姓の王、負擔す此の郷縣。

長逢胯下辱屢乞桑間飯

長へに逢ふ胯下の辱、屢乞ふ桑間の飯。

誰謂山石頑識此希世彥

誰か山石頑と、此の希世の彥を識る。

凜然英氣逼屹起猶聳戰

凜然として英氣逼り、屹起猶は聳戰。

他年萬騎歸父老恣歡宴

他年萬騎歸り、父老恣に歡宴。

錦繡被原野金珠散貧賤

錦繡原野に被り、金珠貧賤に散す。

寶融既入朝吳芮空記面

寶融は既に入朝し、吳芮は空しく面を記す。

榮華坐銷歇閱世如郵傳

榮華は坐に銷歇し、世を閱する郵傳の如し。

惟有長明燈依然照深殿

惟長明の燈あり、依然として深殿を照す。

【字解】(一)功臣山 縣の南、二里に在る。木、大官山と名づく。吳越王錢氏建てて功臣院となす。臨安志に、唐昭宗削改、錢鏐所居大官山爲功臣山。(二)岸葛巾 岸は高なり、頭巾を高くして額を見はすをいふ。古、阜屣にして冠せざるもの屣する所。晉書に、謝奕爲桓溫司馬岸幘曠臥、溫曰、我方外司馬、杜子美の詩に、白頭岸江草。晉の劉琨傳に、岸幘大官、意氣自若。(三)千人溝 臨安縣圖經に、寺有溝名曰千人。(四)岡巒蔚回合 張衡の西京賦に、岡巒參差。臨安志の詩に、洲島巒廻合。(五)緬懷明綯 杜牧之の宣城詩に、城高勢接浦、金碧爛明綯。文心雕龍に、明綯以難勝。(六)異姓王 郭夔が天目山の詩に、五百年生異姓王。錢鏐自ら謂ふ、己應此運と。西漢、異姓諸侯王表に、昔高祖定天下、功臣異姓而王者八國。(七)負擔 左傳、莊公二十二年に、陳公子完曰、免於罪戾、強於負擔。(八)胯下辱 史記、韓信傳に、出胯下、濡伏。(九)桑間 濮陽の南に在る、濮書、地理志に、衛地有桑間濮上之阻云云。(十)寶融既入朝 後漢書、寶融傳に、自以非蕃臣、一旦入朝、在功臣之右、每召見、容儀辭氣、卑恭已甚、帝以此意觀厚之。(十一)吳芮 漢、吳芮傳に、高祖以其將梅鋗有功、從入武關、故梅、芮、後長沙王、一年薨。(十二)榮華 楚辭、離騷に、及榮華之未落兮。(十三)銷歇 庾信の詩に、壯情已銷歇。劉禹錫の歌に、榮華一旦有銷歇。(十四)閱世 劉禹錫の詩に、觀身如傳會、閱世甚東流。漢、蓋寬饒の傳に、富貴無常、忽則身人、此知傳會、所閱多矣。(十五)照深殿 文選に、華月照方池、列坐金殿側。

【題義】此詩も前詩と同じく熙寧五年七月の作である。歩至の景を寫して、琢句は六朝人の風骨に近いと評されて居る。

【詩意】諸葛武侯が司馬懿と渭濱に在り、將に戰はんとしたとき、懿は戎服して事に在り、人をして視しめた。武侯は素車に乗り、白葛巾で羽扇を持ち、三軍を指揮して居つたので、懿は歎じて名士と謂ふべしといつたさうである。今、落日に葛巾を高くして額を見はし、羽扇をば晚風に吹かせて松

林の間を緩歩する。竹外飛橋を過ぐ。横嶺を鑿つて巖石巨片が屹立して居るのを見て、造化の力の偉なるに驚いた。直に千人溝を渡る。(この千人溝といふのは、傳へいふ、錢氏が千人を役して、一日に出来上り、溝上の橋は紫石を以て之を爲り、徑の關は、各丈餘といふことである。)下に微流の泓然たるを見る。岡巒はこんもりとして廻り合つて居る。金碧は、きらきらとして明絢(絢は文采)である。細に懐ふ、異姓の王が此の郷縣に在つて負擔して、長へに胯下の辱に逢つたことを。即ちかの吳越王は少い時、貧困で負擔をした。其の貴なるに及んで、錦囊を以て此の擔を盛つたといふことであるが、(五代史、吳越世家に、錢鏐字は具美、杭州臨安人也、天復二年封越王。)長く胯下の辱めに逢つて、屢桑間の飯を乞うた。誰か謂ふ、山石は頑と、此希世の彦(男子の美稱)を識つたではないか。王は凜然として英氣が逼つたので、山石は屹然として起ち、鏖戦(ふるふる)したといふことである。(吳越備史に、武肅王錢鏐、杭州安國縣人、生於本縣之衣錦鄉、王嘗憩後山、忽一石屹然自立、王志之、後建功臣精舍、遂以石爲佛坐。)他年萬騎が戦争より歸つて、父老は恣に歡宴し、錦繡は原野を披ひ、金珠を貧賤に散じた。(吳越世家に據るに、錢鏐が衣錦城に遊んで宴すると、故老山林、皆覆ふに錦を以てし、還郷歌を作つていふ、三節遺郷分挂錦衣、父老遠來相追隨、斗牛無字人無欺、吳越一王馴馬歸と。)寶融は既に入朝し、(興國三年吳越王錢俶、入朝し、盡く領土を朝廷に獻じ、改めて淮海國王となる。後漢の寶融に比したのである。)吳芮は空しく面を記す。(魏、黃初の末、吳人が吳芮の家を發いたが、容貌が生けるやうであつた。後與に發く者、吳綱を見て曰く、君何ぞ長

沙王に類する。但、微しく短なるのみと。綱、翟然として曰く、是れ先祖なりと。榮華は坐に銷歇して、世を閱することは郵傳の如くである。ただ長明の燈のみは、依然として深殿を照らして居る。

遊徑山

徑山に遊ぶ

衆峯來自天目山。
勢若駿馬奔平川。
中塗勒破千里足。
金鞭玉轡相廻旋。
人言山住水亦住。
下有萬古蛟龍淵。
道人天眼識王氣。
結茆宴坐荒山巔。
精神貫山石爲裂。
天女下試顏如蓮。

衆峯天目山より來る、
勢は駿馬の平川に奔り、
中塗千里の足を勒破し、
金鞭玉轡相廻旋するが若し。
人は山に住すと言ふも水にも亦住す、
下に萬古蛟龍の淵あり。
道人は天眼王氣を識り、
茆を結んで宴坐す荒山の巔。
精神山を貫きて石爲に裂く、
天女下り試む顔は蓮の如し。

【字解】(一)徑山 天目の東北

峰である。中に徑路があつて、天目に通ずるより徑山といふ。徑山事狀に、五峰周抱、中有平地、人跡不到。(二)天目山 浙江臨安縣の西北五十里に在る。元和志に、山有二峰、峯頂各一池、左右相對、名曰天目。(三)千里足 漢武帝紀に、太初四年、斬大宛王、獲三汗血馬、應劭いふ、一日千里と。(四)金鞭玉轡 徐陵が紫騮馬の詩に、玉鞭金轡、金鞍錦鞍。(五)天眼 金剛經に、如來有天眼、觀諸名義、佛國有天眼通者、於眼得色界云云。(六)精神貫山石云云 西京雜記に、揚子雲曰、至誠則金石爲開。

寒窗暖足來朴渥。夜鉢呪水降蜿蜒。雪眉老人朝扣門。願爲弟子長參禪。爾來廢興三百載。奔走吳會輸金錢。飛樓湧殿壓山破。朝鐘暮鼓驚龍眠。晴空仰見浮海蜃。落日下數投村蕪。有生共處覆載內。擾擾膏火同烹煎。近來愈覺世議隘。每到寬處差安便。

寒窓に足を暖めて朴渥を來し、夜鉢水を呪して蜿蜒を降す。雪眉の老人朝に門を扣き、弟子となつて長く參禪せんことを願ふ。爾來廢興三百載、吳會に奔走して金錢を輸す。飛樓湧殿山を壓して破る、朝鐘暮鼓龍の眠を驚かす。晴空仰ぎ見る海に浮ぶの蜃、落日下に數ふ村に投ずる蕪。有生共に處る覆載の内、擾擾たる膏火同じく烹煎せらる。近來愈々覺ゆ世議の隘きを、寬處に到る毎に差安便。

願ふ。

【一】天女下試、蘇詩、僧曉然の詩に、天女來相試、將花欲染衣。四十二章經に、天神獻玉女於佛、佛遣佛言、革囊衆穢耳、爾來何爲、去吾不用、天神意敬云云。【二】朴渥、宛ないふ、通雅に、宛名朴渥、見古文苑。山門事狀に、師有二白兔、常處於杖屨之間。【三】夜鉢呪水、晉書、僧沙彌に、鉢、早、苜蓿常使之呪、能雨。俄而龍下。鉢中、天龍大雨。【四】吳會、吳郡志に、吳、本秦會稽郡、後漢分吳會稽爲二郡、後世指二浙之地、通稱吳會、謂吳與會稽也。【五】輸、金錢、史記、平準書に、龜貨金錢刀布之幣、與焉。【六】浮海蜃、史記、天官書に、海傍蜃氣象樓臺、韓退之の詩に、頃刻青紅浮海蜃。【七】蕪、莊子人間世篇に、山木自蠹也、青火自煎也。【八】世議隘、文選、

嗟余老矣百事廢。却尋舊學心茫然。問龍乞水歸洗眼。欲看細字銷殘年。

嗟余老いぬ百事廢す、却つて舊學を尋ねれば心茫然。龍を問うて水を乞ひ歸つて眼を洗ひ、細字を見て殘年を銷せんと欲す。

鮑明遠の詩に、人情幾世遷、世議隘、衰與。【一】尋舊學、心茫然、李白の行路難に、拔劍四顧心茫然。時に新學處に行ける。故に以て舊學となす。【二】細字、韓退之が短燈籠歌に、夜書細字、觀一言盡。【三】銷、

【題義】此詩も、前詩と同じく熙寧五年、七月の作である。紀昀いふ、入手以喩起、耳目一新、東坡慣用此法と。唐宋詩醇に、只是敘述徑山事、奇文崛起、紙上如有一金碧照耀、蹶杜陵之高蹤、導渭南之先路とある。

【詩意】衆峰が天目山の方から走り来る。其の勢は、駿馬が平川に奔り、途中で、千里の足を勸破（勸は抑制の意）して、金の鞭、玉の鞭が相廻旋するがやうである。人は山に住すとよく言ふが、水にも亦住する。下に萬古蛟龍の潜んで居る淵がある（山門事狀にいふ、天目之頂有龍居焉、中常出水、四方而下、南派由陸、西派由嶺、皆入浙江、東派由餘杭、北派由安吉、皆會太湖、而入吳江、徑山之頂、乃天目、龍之別居と）。道人は天眼通があつて、見る所の諸色、照らさざるはない。荒山の巔に赤を結んで冥坐して居る。（法欽大師は、吳郡崑山の人、年二十二、馬素禪師見て之を識り、躬ら爲に髪を去り、師に謂て曰く、汝、流に乗じて行き、徑に遇うて止まれ。師、臨安東北山下に至

つて之を問ふ。樵者いふ、此山中之を徑場といふと。乃ち挂錫の地を求む。適苦をもて置界(鬼を捕へる網)を覆ふを見る。師は之に就いて宴坐すと傳へて居る。精誠の力は、山石を裂く。(法欽大師、北峰石屏の下に坐す。白衣の儒士、前に拜し、自ら言ふ、天目巾子山人と。師いふ、吾が坐後の石屏、汝能く呪して破れしむるや否やと。山人いふ、可と。遂に之を叱せしに、石屏が裂けて三片となつたと傳へて居る。)天神が天女を佛に獻じたが、佛は心を動かさなかつたといふが、大師もさうである。寒窗に足を煖めて、二白兔を來し、夜鉢に水を呪して蜿蜒たる蛟龍を降す。(晉書の佛圖澄傳に據るに、襄陽城の壑、水源暴に竭く、石勒、澄に問ふ。何以致水と。澄いふ、今當三教龍取水と。乃ち繩牀に坐し、安息香を燒いて呪願數百言、此の如きこと三日、水法然として微流、一小龍あり、長は五六寸許、頃あつて、水大に至るといふ。)雪眉の老人、朝に門を叩き、弟子となつて、長く參禪せんことを願ふ。(王文誥いふ、此二句、實本宣室志老人求孫思邈事、公乃借作徑山用耳と。)爾來、廣興三百年、吳會に奔走して金錢を致し、ここに普請をはじめ、高樓湧殿が山を壓して破り、朝の鐘や、暮の太鼓は龍の眠を驚かし、晴空の時は、海に浮ぶ蜃氣樓を仰ぎ見ることが出来る。樵は高い地に在るから夕陽の沈まんとする時、村に投ずる高を數へることが出来る。有生は共に覆載間(天地間に同じ)に在るも、山木は自ら冠し、膏火は自ら煎る。近頃は世議の愈隘きを覺える。寬處に到る毎に、差安便なるを感ずる。(近來愈覺世路隘は、以て朝廷人を用ふるに刻薄褊隘の人が多く、少しも人の過失を容れないのを諷し、山中寬閑の處を見はす)嗟余は老いて、百事廢する。却て舊學を尋ねると心が

茫然とする。徑山には洗眼の池がある。昔、昭明太子は嘗て此に讀書したといふことであるが、余も龍を問ひ水を乞ひ、歸つて眼を洗ひ、細字を看て、殘年を銷しようと思ふ。(東坡自註に、龍井水洗病眼二有效。)

【餘論】徑山山門事狀にいふ、徑山、乃天目東北峰也、中有徑路以通天目、故謂之徑山、圍一大師諱法欽、吳郡崑山人、因獵者導、自重岡之西、至于危峰之北、石岩之隈、坐于石床之上、有頃有素衣道人、前而致拜、師曰、汝何人也、曰、龍也、師曰、何以至此、曰、自師到此、吾屬五百、皆不安息、師若久住于此、我將擊其屬歸。天目、願捨此地、爲師立錫之所、師許之、乃請師登山絕頂、入五峰之間、中有大湫、指謂師曰、吾家若去、此湫當涸、留一穴水、慎勿壅之、我將時至而衛師、今此一穴尚存、謂之龍井、言訖乃隱、於是雲霧晦冥、風雨驟作、連夜不息、及明既霽、湫水盡涸、濕沙遂平、北峰之隙、復有草庵可居、師乃止焉、庵蓋龍所爲、今庵基見在、諸草不生、永泰中、師坐北峰石屏下、見白衣儒士拜於前、自言是天目巾子山人也、長安佛法有難、我聞師道行高邁、願度爲沙彌往救、師曰、汝有何術、對曰、我誦俱胝觀音呪、功力無比、師欲驗之、乃曰、吾坐後石屏、汝能呪之令破否、曰、可、遂叱之、石屏裂爲三片、今謂之喝石巖、師知神異、爲羅髮給衣、賜名惠崇、至京師、與術士競、惠崇告勝云。

自徑山回得呂察推詩用其韻招之宿湖上

徑山より回り、呂察推が詩を得、其の韻を用ひ、之を招きて、湖上に宿す

多君貴公子愛山如愛色。君が貴公子にして、山を愛すること色を愛するが如きを

心隨葉舟去夢遠千山碧。心は葉舟に随つて去り、夢は千山の碧を遠る。多とす。

新詩到中路令我喜折屐。新詩中路に到り、我をして喜んで屐を折らしむ。

古來軒冕徒操舍兩悲慄。古來軒冕の徒、操舍すれば兩ながら悲慄す。

數朝辭簪笏兩脚得暫赤。數朝簪笏を辭し、兩脚暫く赤することを得。

歸來不入府却走湖上宅。歸り來りて府に入らず、却て走る湖上の宅。

龍辱吾久忘寧畏官長詰。龍辱は吾久しく忘る、寧ぞ官長の詰ることを畏れんや、

飄然便歸去誰在子思側。飄然として便ち歸り去る、誰か子思の側に在る。及ばん。

君能從我遊出郭及未黑。君能く我に從つて遊ばば、郭を出ること未だ黒からざるに

【字解】 呂察推 名は仲市、字は德仲、丞相文穆公慶正の孫。宋史職官志に、諸路有觀察推官。多君貴公子、晉、

魯康伯に、颯川鎮會、貴公子也。漢の灌夫傳に、上必多君有寵。愛山、韓退之が假山詩に、公乎真愛山。葉舟、

韓退之が詩に、共泛青湖一葉舟。新詩到中路、文選、晉叔夜の琴賦に、臨清流賦、新詩。阮嗣宗の詩に、中路辭安歸。

軒冕、軒車と冕服、莊子、飾性篇に、古之所謂得志者、非軒冕之謂也、物當來、寄也、故不爲軒冕、肆志。管子、先王制。

軒冕以著貴賤。【一】 操舍兩悲慄、莊子、天運篇に、以官爲是者、不能操、以顯爲是者、不能操、操者、不能操、與入朝、操之則操、舍之則患。【二】 簪笏、江總の詩に、簪笏率周行。【三】 得暫赤、韓退之の詩に、赤脚思當流。杜子美が、早秋苦熱の詩に、南望青松架短檠、安得赤脚踏層冰。【四】 龍辱吾久忘、老子に、龍辱若驚。【五】 官長詰、杜子美の詩に、徒步反愁官長怒。鄭廣文の詩に、醉則騎馬歸、頗遣官長罵。【六】 子思側、孟子、公孫丑篇に、昔者、魯穆公無人乎子思之側、則不加安子思。【七】 從我遊、王維が裴秀才融に與へる書に、僊能從我遊乎。

【題義】 此詩も、前詩と同じ時に作つたものである。徑山から歸つて呂穆仲の詩を得、同じく望湖樓に宿したのである。

【詩意】 君が貴公子であつて、山を愛すること、色を愛するが如くなるを愛する。心は一葉の舟に随つて去り、夢は千山の碧を遠る。新詩を賦して中路に到り、我をして喜び、屐を折るを覺えざらしめる。(昔、晉の謝安は、苜蓿を破つたといふ驛書を得たとき、喜色を抑へたが、内に還つて、戸限を過ぎると、心喜ぶこと甚しく、屐齒の折れたのを覺らなかつたといふ話があるが、喜悅の動作に見はれることである。古來、軒車に乗り、冕服を着ける高位の人、祿と名と柄とを操れば則ち慄れ、之を失へば則ち悲しむ。それで、數朝、簪笏(朝士の衣冠)を辭して、兩脚が暫く赤脚となることが出来る譯である。歸り來つて府には入らないで、却て江上の宅に走る。世間の龍辱は吾久しく忘れて居るから、固より官長の詰ることなどは畏れないのである。飄然として便ち歸り來る。誰か子思の側に在る。昔、魯の穆公は、子思の側に人が無ければ、子思を安んずることが出来なかつたといふが、良朋を得たものである。君能く我に從つて遊ばば、郭を出ること未だ暗くないうちに間に合ふであらう。(紀

吟いふ、誰在子思側、用事不的と。

宿望湖樓再和

望湖樓に宿し再び和す

新月如佳人。出海初弄色。

新月は佳人の如し、海を出でて初て色を弄す。

娟娟到湖上。激激搖空碧。

娟娟として湖上に到り、激激として空碧を搖かす。

夜涼人未寢。山靜聞響屐。

夜涼人未だ寢ず、山靜にして響屐を聞く。

騷人故多感。悲秋更慘慄。

騷人は故感多し、秋を悲しみ更に慘慄。

君胡不相就。朱墨紛黜赤。

君胡ぞ相就かざる、朱墨紛として黜赤。

我行得所嗜。十日忘家宅。

我が行嗜む所を得、十日家宅を忘る。

但恨無友生。詩病莫詞詰。

但恨む友生なきを、詩病詞詰なし。

君來試吟咏。定作鶴頭側。

君來りて試に吟咏せば、定ず鶴頭側を作さん。

改罷心愈疑。滿紙蛟蛇黑。

改め罷んで心愈疑ふ、滿紙蛟蛇黒し。

【字解】(一)弄色、高過の時に、柳條弄色不忍見。(二)娟娟、美好の貌。文選、鮑明遠が既月の時に、娟娟似銀眉。(三)激激、さざなみの起る貌。揚雄の時に、春江激激清且急。白樂天が西園晚歸詩に、煙波淡淡搖空碧。(四)人未寢、顧況が詩に、月上春林一人未寢。(五)騷人、詩人をいふ。正字通に、屈原作離騷、言遭憂也、今謂詩人為騷人。(六)悲秋、更慄、宋

玉の九辯に、悲哉秋之爲氣也、傷懷兮如在遠行、登山臨水兮發將歸。(七)騷、騷雅に、黑而之謂之。(八)詩病、白樂天いふ。詩に八病あり、平頭・上尾・蜂腰・鶴膝・大韻・小韻・傍紐・正紐をいふ。(九)詞詰、しかりなる。文選、曹子建の書に、劉季緒、才不逮作者、而好詆訶文章、苟求利病。(一〇)改罷、杜子美の詩に、新詩改罷自長吟。(一一)蛟蛇黒、杜子美の詩に、雙龍三大字、蛟龍髮相觸。

【題義】前詩と同じ時の作。紀昀いふ、寫景自好と。又いふ、後半不甚自然と。

【詩意】新月は佳人のやうで、海から出て、初て色を弄する。娟娟と美しく湖上に到り、激激と漣をなして、空碧を搖かす。夜は涼しく、人未だ寢ねず、山は靜にして響屐の音が高く聞える。詩人は元來、感し易い。秋を悲しみ、更にいたみ恐れる。君胡ぞ相就かざる。朱も墨も紛として、或は黒く、或は赤い。(朱墨の句は案牘をさす。)我が今回の旅行は、嗜む所を得、十日も家宅を忘れた。但恨むことは、友達のないことである。詩病があつても、詞詰してくれるものがないから、上達はしない。君來つて試に吟咏せば、必ず鶴頭側をなさう。(鶴頭側といふのは、頭を側て吟するをいふ。)改め罷んで、心愈疑ふ。それは滿紙が蛟蛇の如く黒いことである。

夜泛西湖五絶

夜西湖に泛ぶ五絶

新月生魄迹未安。

新月魄を生じ迹未だ安からず、

纔破五六漸盤桓。

纔に五六を破りて漸く盤桓。

古今體詩 宿望湖樓再和 夜泛西湖五絶

五三七

【字解】(一)新月、杜子美の初月時に、影斜輪未安。(二)生魄、歳生魄は十六日をいふ、歳めて魄を生ずる意。魄は月の輪郭の光なきと

今夜吐豔如半壁。遊人得向三更看。

今夜豔を吐く半壁の如し、遊人三更に向つて看ることを得。

【題意】此詩も前詩と同じ時の作、唐宋詩辭に、五絶、蟬聯而下、體製、從三百篇一出、とある。

【詩意】新月が魄を生ずる。魄とは、月の輪郭の光がない處である。朔の後、明が生じて魄が死し、望の後、明が死して魄が生ずる。魄の迹が未だ易くない。やつと、月初の五六日を破つて漸く盤桓する。今晩は豔を吐く、半分の豔のやうである。遊人は三更(午夜十二時)に向つて之を看ることが出来やう。

三更向闌月漸垂。

三更闌に向つて月漸く垂る、

欲落未落景特奇。

落ちんと欲して未だ落ちず景特に奇なり。

明朝人事誰料得。

明朝人事誰か料り得ん、

看到蒼龍西沒時。

看到蒼龍西に沒する時。

【字解】【一】明朝人事云云 武元衡の詩に、無因駐滄景、日出暮還生。杜子美の杜鵑行に、蒼天變化誰料得。【二】蒼龍、星の名、角亢の宿、夜半にして沒す。漢書、天文志に、東宮蒼龍星。

人事は誰か料り得やうぞ、看て蒼龍星の西に沒する時に至る。(韓退之の詩に、東方蒼色龍とある。)

蒼龍已沒牛斗橫。

蒼龍已に沒して牛斗横はり、

東方芒角昇長庚。

東方の芒角長庚を昇す。

漁人收筒及未曉。

漁人筒を收めて未だ曉ならざるに及ぶ、

船過惟有菰蒲聲。

船過ぎて惟菰蒲の聲あり。

【字解】【一】蒼龍已沒云云 漢書、天文志に、杓指龍角、孟廣いふ、杓、斗柄也、龍角、東方宿也、指、連也と。【二】東方芒角、漢、天文志に、天一杓指、牙盾助搖角、大兵起。律歷志に、角、觸也、觸地而出、

【詩意】蒼龍星が既に沒すると、牛宿斗宿が横はる。東方の芒角、長庚星を昇す。長庚星は即ち金星、一に太白といふ。(長庚の廣さは一匹の布の如くて天に著く)漁人は釣筒を收めて、未だ曉ならない時刻に間に合ふのは、此の星が見はれて居るからである。船が過ぎて、ただ菰蒲の聲がある。(東坡の自註に、湖上禁漁、皆盜釣者也とある。)

菰蒲無邊水茫茫。荷花夜開風露香。

菰蒲無邊水茫茫、荷花夜開いて風露香し。

【字解】【一】茫茫、杜子美の詩に、春動水茫茫。【二】燈明、火を

漸見燈明出遠寺。漸く見る燈明の遠寺に出づるを、
更待月黑看湖光。更に月の黒き待つて湖光を看ん。

點する、後漢書、黨錮傳に、籠、灼燈明。

【詩意】見渡す限り、菰と蒲とで、水は茫茫として廣い。荷の花は夜開いて、風も露も香ばしい。だんだん燈明の遠寺に出づるを見る。更に月の黒きを待つて湖光を看よう。

【餘論】紀昀いふ、前首已是將曉、何以此首又待二月黑、未喻其故と。按するに、前首には、及、未曉といつて、將曉とはいはない。紀昀の評は拘泥を免れない。周密の癸辛雜識に、西湖四聖觀前、毎至昏後、有一燈浮水上、其色青紅、自施食亭南、至西冷橋、復回、風雨中光愈盛、月明則稍淡、雷電之時、則與電爭光閃爍、余之所居、在積慶山巔、每夕觀之、無少差、凡看二十餘年矣とある。西湖遊覽志にいふ、此湖光也と。

湖光非鬼亦非仙。

湖光鬼にあらず亦仙にあらず、

風恬浪靜光滿川。

風恬に浪靜にして光川に滿つ。

須臾兩兩入寺去。

須臾に兩兩寺に入り去る、

就視不見空茫然。

就いて視れば見えず空しく茫然。

【詩意】湖光は鬼でもなければ、仙でもない。風が恬かに、浪も靜かで、光が川に滿つる。須臾にし

【字解】〔一〕風恬 宋之問の詩に、風恬魚自躍。盧綸の詩に、仙香盡散知浪靜。〔二〕兩兩 史記、天官書に、兩兩相比。〔三〕就視 後漢書の皇后紀に、就視乃笑。

て兩兩相比んで寺に入り去る。就いて視るも見えないので、空しく茫然とした。

【餘論】以上五絶、合して一首と作して讀むと、其の妙を見る。三四兩作の景を寫す所殊に佳し。

309
65

全訳書 巻之三
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

終

續國譯漢文大成

文學部 五十二

309

65

鉄
入



始





續國譯漢文大成

吉岡符郎氏
二
繪本

文學部第五十二册(第十三帙の四)
蘇東坡詩集 一の四



蘇東坡詩集 卷八

古今體詩 六十九首

焦千之求惠山泉詩

茲山定空中。乳水滿其腹。

遇隙則發見。臭味實一族。

淺深各有值。方圓隨所蓄。

或爲雲洶湧。或作線斷續。

或鳴空洞中。雜佩間琴筑。

或流蒼石縫。宛轉龍鸞蹙。

餅器走千里。眞僞半相瀆。

貴人高宴罷。醉眼亂紅綠。

赤泥開方印。紫餅截圓玉。

焦千之、惠山泉を求むる詩

茲山定す中を空にし、乳水其の腹に満たん。

隙に遇へば則ち發見す、臭味實に一族。

淺深各、値ふことあり、方圓蓄ふ所に隨ふ。

或は雲の洶湧を爲し、或は線の斷續を作す。

或は空洞の中に鳴り、雜佩琴筑を間ふ。

或は蒼石の縫に流れ、宛轉して龍鸞蹙る。

餅器にして千里に走り、眞僞半は相瀆す。

貴人高宴罷んで、醉眼紅綠を亂る。

赤泥方印を開き、紫餅圓玉を截る。

古今體詩 焦千之求惠山泉詩

傾甌共歎賞。竊語笑僮僕。
 豈如泉上僧。盪灑自挹掬。
 故人憐我病。弱籠寄新馥。
 欠伸北窗下。晝睡美方熟。
 精品厭凡泉。願子致一斛。

甌を傾けて共に歎賞し、竊語して僮僕笑ふ。
 豈如かんや泉上の僧、盪灑して自ら挹掬するに。
 故人我病を憐んで、弱籠新馥を寄す。
 欠伸す北窗の下、晝睡美にして方に熟す。
 精品凡泉を厭ふ、願くは子一斛を致せ。

【字解】【一】焦千之。字は伯強、涇州焦岐の人。文學を以て知を東坡に受く。【二】富山泉。陳鴻漸の煎茶小品に、常州、無錫縣、惠山寺泉第二、太平寰宇記に、惠山寺在無錫縣南七里。【三】其甌。蜀志、秦宓傳に、蜀有汶泉之山、江出其甌。【四】吳味實一族。左傳、襄公二十二年に、晉諸草木、吾臭味也、而何敢差池。【五】雜佩。詩、鄭風女曰揚揚當之、知三子之來之、雜佩以贈之。【六】翠坑。白樂天の盧山草堂記に、東南有翠布、高階閣、落石渠、夜中如環佩等聲。【七】宛轉。やはらかに動く。文選、魯靈光殿賦に、蟠獨宛轉而承露。【八】餅餅。韓退之の詩に、瓶大餅餅小。【九】赤泥。水經註に、岐水又東逕姜氏城南爲姜水、姜水發杜陽縣大嶺側、世謂之赤泥、鮑浩、波歷、閭、俗名大橫水也。東坡の毛正仲惠茶詩に、空爐赤泥印、遠致紫玉珠。【一〇】方印。盧全が謝孟諫議寄新茶詩に、口曾諫議送書信、白餅餅封三道印。風冲之が謝人寄茶詩に、針封三道印、不奉一行書。【一一】圓玉。庾信が昭夏歌に、圓玉已美。【一二】願語。私語といふに同じ。晉族の家賦に、若見願語私願、便舍起。【一三】煎。煎。かまで作つた餅、茶條に、茶宜煎葉、收藏之家、以煎葉封蓋入焙中。【一四】欠伸。曲禮に、侍坐君子、君子欠伸、捫拭展。

【題義】此詩は神宗の熙寧五年(皇紀一七三二年、西曆一〇七二年)八月の作である。獨孤及の惠山寺新泉記に、寺居西山之麓、山小多泉、山下有靈池、其泉伏湧潛洩、無汙無實、始發表丈之沼、疏爲懸流、及於禪林、周於僧房、灌注於德池、灑洞於法堂とある。

【詩意】この山は、中が空であつて、乳水が其の腹に満ちて居るに違ひない。それで間隙に遇ふと、其處から發し見はれる。之を譬へると、臭も味も同じの一族で、値ふ所によつて淺深となり、蓄へる所に隨ひて方圓ともなる(紀昀いふ、意新語粉、得此一起、併下四或字、習調亦覺生趣、盎然不爲耳目之厭と)或は雲のやうに湧き立つ。或は線の斷續するが如くなる。或は空洞の中で鳴り、雜佩に琴筑を聞へる(雜佩とは、身に帯びる種種の玉である)或は蒼石の縫目に流れ、徐に動いて龍や蟹の蹙るやうである(酉陽雜俎といふ書に、兗州縣有泉、泉眼中、水交旋如盤龍、驢馬飲之皆驚走と見えて居る)水を大小の瓶に入れて運ぶと、千里に走る。さうなると、水に塵物が出て來て、眞偽半は相潰すことになる。貴人の高宴が罷んで、醉眼が朦朧として紅綠を亂るとき、遠くから寄せられた新茶を喫する。赤泥開方印とは、新茶の封を開くことで、劉禹錫が試茶の詩句を用ひたのである(劉禹錫の試茶歌に、白泥赤印走風塵とある)紫餅截圓玉は磚茶を削ることである。茶の色は、白いのを貴ぶが、餅茶は、多く珍膏を以て其面に油するから、青・黃・紫・黒の異同がある。甌を傾けて茶を喫り、共に歎賞する。水が贖物であることを知らずに歎賞して居るので、僮僕たちは竊にささやいて笑つてゐる。泉上の僧が手を洗ひ嗽いで、自ら水を抱みて茶を煮るには及ばない。故人(焦千之を指す)は私の病を憐んで、好い新茶を弱籠に入れて寄せられた。まことに辱じけない。志が倦めば欠し、體が倦めば伸する。北窓の下で欠伸し、晝寢の後の心持が宜いとき、茶を喫する。茶の精

品は凡泉を厭ふ。どうか君、惠山泉一斛を送り致せ。

答任師中次韻

任師中に答へて次韻す

閑裏有深趣常憂兒輩知

閑裏深趣あり、常に憂ふ兒輩の知るを。

已成歸蜀計誰借買山貨

已に蜀に歸るの計を成す、誰か山を買ふの貨を借らん。

世事久已謝故人猶見思

世事久しく已に謝す、故人猶ほ思はる。

平生不飲酒對子敢論詩

平生酒を飲まず、子に對して敢て詩を論す。

【字解】(一) 任師中、任偃字は師中、眉山人。兄孜、字は道聖と共に時に知られ、大任、小任と稱さる。東坡の時に、大任剛烈世無、疾、延如、風、朱伯厚、小任温毅老更文、真采惠愛小高君。(二) 買山貨、世説に、支道林(晉の高僧、支蓮字は道林)因、人欲、深公買印山、深公答曰、未聞果由買山而隱、郭超每聞、欲高尙、隱退者、輒爲禱百萬貫。(三) 世事久已謝、張衡の詩曰賦に、興、世事、手長難。

【題義】此詩は、前詩と同じく熙寧五年八月の作で、任師中が東坡に詩を寄せ、勸むるに詩酒自娛を以てしたので、次韻して之に答へたのである。東坡の自註に、來詩勸以三詩酒自娛とある。我は已に故山の蜀に歸るの計を成したから、(東坡は蜀、眉山の人)山を買つて居を下する資金を借る必要もない。(仕官して俸錢を求めない意。昔、王秀之は晉平の太守となつたが、暮年にして還るを求めてい

ふ、吾山費已足、豈可久留以妨賢路乎と。時人は王晉平、恐富求歸と言つた。余は久しく世事に遠ざかつたが、故人(任師中を指す)は猶ほ思うてくれるのは辱しめない。詩酒自ら娛むやうにとのお言葉であるが、余は酒を飲まないし、又、君に對して敢て詩を論じようぞ。

沈諫議召遊湖不赴明日得雙蓮於北山下作

一絕持獻沈既見和又別作一首因用其韻

沈諫議召して湖に遊ばんとす、赴かず、明日、雙蓮を北山下に得、一絶を作りて持して獻す、沈既に和せらる、又、別に一首を作り、因りて其の韻を用ふ。

湖上棠陰手自栽

湖上の棠陰手自ら栽う、

問君更得幾回來

君に問ふ更に幾回が來ることを得る。

水仙亦恐公歸去

水仙も亦、公の歸り去るを恐れ、

故遣雙蓮一夜開

故に雙蓮をして一夜に開かしむ。

【字解】(一) 沈諫議、宋史に、沈立、字立之、歷陽人、第進士、歷、右諫議大夫、出爲江淮發運使、知、越州、杭州、熙寧三年に、右諫議大夫を以て、出でて越州に知たり。四年正月に移りて杭州に知たり。(二) 棠陰、居官の地をいふ。劉長卿の詩に、帝宅、樓、託分、驗、棠陰、昔、召伯、南國を循行し、甘棠の下に舍る。後人、其の樹を愛して、嘉伐に及びず。棠陰の義は此に本く。詩の召南に、蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所業。甘棠は社棠。(三) 水仙、湖上に水仙王廟がある、圖經を按ずるに、廟は錢塘門外二里に在る。

【題義】此詩も、前詩と同じ時の作で、沈立が湖上に遊ばうとしたのに、赴かなかつたから、明日、雙蓮に詩を添へて獻じたのである。紀昀いふ、既涉世故、那能不作應酬詩、但存之集中、則轉寫盛名之累、此非作詩者之過、而編詩者之過也。

【詩意】湖上居官の地に沈立之は植木をしたが、昔の甘棠の詩が思ひ浮ばれて、勿剪勿伐の感がある。君に問ふ、更に幾回來ることが出来るかと。沈立之は、久しからずして、當に替るべし。湖上の水仙王廟神も亦、君が歸り去るのを恐れると見えて、故に雙蓮をして一夜に開かしめる。

詔書行捧縷金箋

詔書行くゆく捧げん縷金箋、

樂府應歌相府蓮

樂府に應に相府蓮を歌ふべし。

莫忘今年花發處

忘る莫れ今年花發く處。

西湖西畔北山前

西湖の西畔北山の前。

其の後、朝服用ふる所の樂章は、皆、樂府といふ。【一】相府蓮、宋の陳登所が全芳備祖に、於韻因三瑞蓮裝、曲名相府蓮、國史補に、予司空以樂府有想天儔、其名不雅、將改之、亦有笑者、曰、南朝相府曾有瑞蓮、故歌相府蓮、自是後人誤謂相承不改耳。

【詩意】君はだんだん榮進して、行くゆくは、縷金箋の詔書を捧げるであらう。そして、朝廟樂府では應に相府蓮を歌ふことであらう。(昔、王儉が南齊の相となつたとき、薦めた所は、皆名士であつた

から、世間では、紅蓮映秋水といつた。今も蓮華といふは、王儉より始まつたのである。)さて、今年花開く處を忘れてはならない。それは、西湖の西畔、北山の前である。(杭州圖經にいふ、北高峰在靈隱寺後。又いふ、北山之形、如獅子、名獅子峰。)

和歐陽少師會老堂次韻

歐陽少師が會老堂に和し、韻に次す

一時冠蓋盡嚴終

一時の冠蓋は盡く嚴終、

舊德年來豈易逢

舊德年來豈逢ひ易からんや。

聞道堂中延蓋叟

聞道らく堂中に蓋叟を延くと、

定應牀下拜梁松

定ず應に牀下に梁松を拜すべし。

蠶魚自曬閒箱篋

蠶魚自ら曬す閒箱篋、

科斗長收古鼎鐘

科斗長へに收む古鼎鐘、

我欲棄官重問道

我官を棄てて重て道を問はんと欲す、

寸筵何以得春容

寸筵何を以て春容を得ん。

七月七日曬書、箱篋は書物箱。【六】科斗長收古鼎鐘、科斗は古文字をいふ。歐陽修は、古鼎鐘の銘刻を收むること甚だ多かつた。故にいふ。【七】寸筵、東方朔の答客難に、以筵投鐘、豈能發其音聲、韓退之の詩に、寸筵控巨鐘。【八】得春容、韓退之の詩に、

【題義】此時も、熙寧五年八月の作、歐陽修は趙概（字は叔平、卒して康靖と諡す）と同じく政府に在つて、交情睦ましかつた。趙概が離陽に歸老すると、歐陽修も相繼いで汝陰に歸つた。一日、康靖は單車で來訪し、月を逾えて反つた。歐陽修は因て其の地に榜して會老堂といふ。當時、相與に唱和し、東坡も其の韻に次したのである。歐陽修の會老堂の詩は、古來交道愧難終、此會今時豈易逢、出處三朝俱白首、湖零萬木見青松、公能不遠來千里、我病猶堪鬪一鍾、已勝山陰空與盡、且留歸郡一爲從容といふのである。

【詩意】今や天下に分佈して居る朝廷の使者は、皆新進の少年で、漢の武帝の時に信任された殿助や將軍などいふ人達である。此時の一時冠蓋の句は、此意に用ゐたもので、其の本意は此句を以て趙概を翻起したのである。有徳の老人は、年來、容易に逢ふことが出来ない。聞けば、會老堂中に蓋叟を延くと。蓋叟は、趙概を謂ふ。定めし林下に梁松を拜することであらう（梁松は、後進を謂ひ、呂正獻を指す。正獻は呂公著の諡である。これは、後漢の馬援の故事に據つたのである。馬援が病氣であつた時、梁松が見舞に行いて林下に拜した。林下に拜すると、必ず起つて答禮をするのが禮であるのに、援は答禮しないでいふ、我は乃ち松が父の友である。松は貴くても、何ぞ其の序を失ふことが出来やうぞと言つたさうである。歐陽公は、此堂に在つて、日に古書を繙く。故に蠶魚自麗開箱籠と言つたのである。又、古文書を好み、古鼎鐘を澤山に收藏されて居る。此聯は、堂の字に著落す。故に

下に重閣の道を以て之に緊接する。我は官途を棄てて重ねて學の道を問はんとするも、力足らず、才乏しく、寸筵では何を以て春容を得やうぞ。（春は戈春の意、撞くことである。）

題永叔會老堂

永叔が會老堂に題す

三朝出處共雍容。

三朝出處共に雍容、

歲晚交情見二公。

歲晚交情二公を見る。

乘輿不辭千里遠。

輿に乗じて千里の遠きを辭せず、

放懷還喜一樽同。

懷を放つて還一樽の同じきを喜ぶ。

嘉謀定國垂青史。

嘉謀國を定めて青史に垂れ、

盛事傳家有素風。

盛事家に傳へて素風あり。

自願塵纓猶未濯。

自ら願るに塵纓猶は未だ濯はず、

九霄終日羨冥鴻。

九霄終日冥鴻を羨む。

【字解】一、永叔、歐陽修の字、吉州廬陵の人。文名天下に冠たり。熙寧五年卒す、年六十六。太子太師を贈り、文忠と諡す。二、三朝、仁宗、英宗、神宗の三朝をいふ。三、乘輿、やばらいた車、史記に、南陽行賈、畫法孔氏之乘容。虞書、司馬相如傳に、從車騎、乘容謂輿。四、嘉謀、國を治むるよい謀、書經、君陳篇に、爾有嘉謀嘉猷、則入告、爾后于内。五、青史、古は竹の青皮を火にあぶつて、書を除き事を記したものであり。六、九霄、九天に同じ、青雲をいふ。七、我今重題附冥鴻、世を避けて志を高尙にする、李賀の詩に、我今重題附冥鴻。



【題義】歐公の會老堂は、趙康靖の來訪に因つて命名したことを前詩に述べたが、此詩は二公の交情を言ひて歐公を美めたのである。

【詩意】歐公は三朝に事へて誠忠を致し、其の出處進退が雍容として迫らない。殊に晩年に於ける歐公と趙康靖との交はまことは美しいのである。康靖は年八十、輿に乗じて千里を遠しとしないで、汝陰に歐公を訪問した。そして、酒樽を同うして、平生の懐を放つた。さて兩公の國家を治める善い謀は、青史に赫いて居り、其の經國の文章も家に傳へ、世に行はれて居る。素風があつて偶然でない。我は自ら願ふに尙ほ官遊して塵纒（纒は冠のひも）を濯ふことが出来ない。空しく青空を仰いで冥冥に遊んで居る鴻雁を羨んで居るのみである。（張九齡の詩に、今我遊冥冥、弋者何所慕とある。）

和歐陽少師寄趙少師次韻

歐陽少師、趙少師に寄するに和する次韻

朱門有遺啄

朱門遺啄あり、

千里來燕雀

千里燕雀を來す。

公家冷如冰

公が家冷なること冰の如く、

百呼無一諾

百呼すれども一諾なし。

平生親友半遷逝

平生の親友半は遷逝、

【字解】【一】趙少師、前詩の題辭である。字は叔平、廬山、廣福の人。神宗の朝に、太子少師を以て致仕し、康靖に居る十五年にして卒し、康靖と諡す。【二】朱門、杜子美の詩に、朱門酒肉臭。【三】百呼無一諾、韓詩外傳に、一呼再諾者、人

公雖不怪旁人愕

公は怪まずと雖も旁人愕る。

世事如今臘酒醲

世事如今臘酒醲なり、

交情自古春雲薄

交情は古より春雲薄し。

二公凜凜和非同

二公凜凜和して同するにあらず、

疇昔心親豈貌從

疇昔心親しむも豈貌從はんや。

白鬚相映松間鶴

白鬚相映す松間の鶴、

清句更酬雪裏鴻

清句更に酬ゆ雪裏の鴻。

何日揚雄一塵足

何の日か揚雄一塵足り、

却追范蠡五湖中

却て范蠡を追ふ五湖の中。

蘇也。【一】遷逝、遷化といふに同じ、あの世にうつり去る意。潘岳の詩に、暝靈運天機、四節代遷逝。【二】臘酒、臘祭（陰曆十二月の祭）のときの酒。【三】和非同、論語、子路篇に、君子和而不同、小人同而不和。【四】崇德、韓退之が詩に、直置心親無貌從。【五】清句云云、白樂天の詩に、清句三朝誰是敵。【六】揚雄一塵、漢書に、揚雄居岷山之陽、曰、吾有一田一廬、有一宅一區。【七】追、范蠡云云、史記に、范蠡汎扁舟浮於江湖。

【題義】此詩も、熙寧五年八月の作。紀昀いふ、謹嚴而不局促、清利而不淺薄、自是用意之作と。歐陽公の趙少師に寄せた詩は、剝剝復啄啄、柴門驚鳥雀、故人千里至、信士百金諾、精神相趨動、顔

色、閨里歡呼共嗟愕、顧我非惟愁寂寥、於時自可警輪薄、事國十年憂患同、酣歌幾日暫相從、酒醒初不戒徒御、歸思暫起如飛鴻、車馬関然人已去、荷鋤却向野田中といふのである。

【詩意】朱門には剝啄の跡があつて、人の出入が稀である。それで、遠くから燕雀を來たす。家の冷

いことは氷のやうで、百呼しても一諾がない。願れば平生の親しき友は、半はあの世の人となつた。公は命に安んじて怪まないが、旁人は愕く。世事は臘酒の如く醜で、簡單にゆかないが、交情は春の雲の如くに薄い。(王文誥いふ、通幅出色、全恃此二句、擇得結實) 歐陽少師・趙少師の二公は、凛凛として和して同するのでない。故に平生、心相親しむも、貌は必ずしも従はないのである。お互に老人となつて、白鬚の相映するは、松間の鶴のやうである。清句更に酬ゆるは、雪裏の鴻といふ趣がある。何れの日か、揚雄のやうに一宅地を得て、生活に不自由なく、扁舟汎汎として江湖に浮ぶ范蠡のやうな境遇でありたい。

監試呈諸試官

監試諸試官に呈す

我本山中中人寒苦盜寸廩
文辭雖久作勉強非天稟
既得旋廢忘懶惰今十稔
麻衣如再著墨水真可飲
每聞科詔下白汗如流瀉
此邦東南會多士敢題品

我は本山中の人、寒苦寸廩を盗む。
文辭久しく作ると雖も、勉強して天稟にあらず。
既に得て旋で廢忘す、懶惰今十稔。
麻衣再び著くるが如し、墨水真に飲むべし。
科詔の下るを聞く毎に、白汗瀉を流すが如し。
此の邦は東南の會、多士敢て題品す。

芻蕘盡蘭蓀香不數葵荏
貧家見珠貝眩晃自難審
緬懷嘉祐初文格變已甚
千金碎全璧百納收寸錦
調和椒桂醜咀嚼沙礫磳
廣眉成半額學步歸蹕蹠
維時老宗伯氣壓羣兒凜
蛟龍不世出魚鮪初驚淪
至音久乃信知味猶食楛
至今天下士微管幾左袵
謂當千載後石室祠高朕
爾來又一變此學初誰論
權衡破舊法芻豢笑凡飪
高言追衛樂篆刻鄙曹沈

芻蕘盡く蘭蓀、香は葵荏を數へず。
貧家珠貝を見る、眩晃自ら審にし難し。
緬懷す嘉祐の初、文格變すること已に甚し。
千金全璧を碎き、百納寸錦を收む。
調和椒桂醜に、咀嚼沙礫磳なり。
廣眉半額を成し、歩を學んで歸つて蹕蹠。
維時の老宗伯、氣は羣兒を壓して凜。
蛟龍世に出でず、魚鮪初めて驚淪。
至音久うして乃ち信、味を知りて猶は楛を食ふ。
今に至るまで天下の士、微管りせば幾んど左袵。
謂ふ千載の後に當り、石室に高朕を祠ると。
爾來又一變、此學初誰か論ぐる。
權衡舊法を破り、芻豢凡飪を笑ふ。
高言衛樂を追ひ、篆刻曹沈を鄙む。

先生周孔出弟子淵齋寢。

先生周孔出で、弟子淵齋寢ぬ。

却願老鈍軀頑樸謝鐫鉞。

却て願ふ老鈍の軀、頑樸鐫鉞を謝す。

諸君況才傑容我懶且噤。

諸君況んや才傑、我が懶く且つ噤むを容す。

聊欲廢書眠秋濤春午枕。

聊か書を廢して眠らんと欲す、秋濤午枕に春く。

【字解】

【一】 監試 東坡、范夢得に答ふる書に、某被差本州監試、得開二十餘日。當時試官二人、其の一方乃劉錡。【二】 十年といふに同じ。左傳、僖公二年に、虢公敗於桑田、晉卜偃曰、虢必亡矣、不可以五穀。【三】 麻衣如再著、麻衣は喪服であるが、こゝは舉子の著ける白布の衣服をいふ。詩の曹風に、麻衣如雪。晚唐、劉得仁の詩に、一著麻衣便白頭。唐劉虛白の詩に、二十年前此夜中、一般燈火一般紅、不知歲月能多少、猶著麻衣待至公。舉子は皆、白麻を服す。【四】 屬水眞可飲、藥の試、進士の程に中らざるもの、飲ましむるに屬水を以てす。北齊、選舉、監者には屬水一斗を飲ましむ。所著、禮儀志に、後齊每集秀孝、皇帝坐於朝堂、秀孝各以班草對、其有脫誤、書誨孟浪者、起立席後、飲屬水一升。【五】 科罰 三國志、魏、程曉傳に、高選賢才、以充其職、申明科罰、以育其進。宋史、選舉志に、宋之科目、初惟進士及諸科、歲以爲常、皆秋取解、冬集禮部、奉考試諸州、以本列官試進士、錄事參軍試諸科。【六】 漉漉 說文に漉、汁也。【七】 題品 品題といふに同じ。宋史、楊億傳に、當時文士、咸願其題品、温庭筠の詩に、武庫方題品。【八】 芻蕘 芻は草を取るもの、蕘は薪を取るもの、詩經の大雅に、先民有言、詢于芻蕘。【九】 蘭蕙 蘭も蕙も香草。王勃の上明員外啓に、蘭蕙不替。【一〇】 奕在 後漢、馬融の廣成頌に、柱在典奕。典奕は蕞菜。【一一】 珠貝 文選、蜀都賦に、珠貝池浮。池浮は浮沈の意。【一二】 眩晃 眩晃といふに同じ。目がまよひき程に耀く。【一三】 嘉祐初云云 嘉祐の初、文格靡靡、劉錡、觀宜の屬の如き、皆、選に與からず、士論頗る洶洶、劉錡は船山の人。好んで酸語をなしたので、歐陽修に怒まる。文格變、嘉祐二年、歐陽修、貢舉を知る。是より先、進士益、奇僻に相習ひ、鈞章韓句、浸、渾渾を失ふ。歐公深く之を疾み、遂に痛く我抑を加へ、文體亦是より少しく變す。【一四】 千金碎全璧 莊子、山木篇に、

林間棄千金之璧。【一五】 百精 皇甫冉の詩に、百精老空林。【一六】 寸錦 梅朴子に、小文雖巧、猶之寸錦。【一七】 嗚呼沙雁 文選上林賦に、嗚呼沙雁。嗚呼の樂府に、沙雁自飄揚。嗚呼、食に砂がまじること。【一八】 庸庸成中領 後漢書、馬援傳に、長安語して曰く、城中好、廣府、四方且中領。【一九】 岸際 莊子、秋水篇に、嬰謂蚘曰、吾以一足、跖岸而行。跖は踏に同じ。同じく秋水篇に、不聞夫海陵子之學、行於邯鄲、未得國能、又失其放行矣、直匍匐而歸耳。【二〇】 老宗伯 歐陽修をいふ。宗伯は古の六卿の一。周禮に、宗伯主禮之官。時に、歐陽修、禮部を以て貢舉を知る。按ずるに歐陽修は禮部侍郎を以て翰林學士を兼ねたるもの八年、故に東坡の謝啓にいふ、會宗伯之選掄、疾時文之靡弊。【二一】 不世出 漢書、王吉傳に、欲治之主不世出。【二二】 魚鮪初寒 禮記の禮運篇に、魚爲書、故魚鮪不凍。鮪は魚鮪の鮪。【二三】 至音久乃信 後漢書、陳元傳に、至音不令來。【二四】 金檉 詩の泂宮に、朝彼飛鷁、集於泂林、食我檉。檉、我好音。【二五】 微管幾左衽 論語、微管篇に、微管仲、吾其披髮左衽矣。【二六】 石室詞 高駉、太平寰宇記に、文翁學堂、一名周公禮殿。郭陽國志に、漢末文翁立文學精舍、作石室、在華陽縣城南、後遇火、太守陳留高駉更修立、又增造二石室。後人因つて以て殿を列る。【二七】 權衡 物の輕重を計る器、車子に、懸權衡、以稱輕重。【二八】 芻蕘 芻は草を食ふ畜類、牛羊の屬。豕は穀を食ふ畜類、犬豕の屬。禮記に、共、穀則之芻蕘。孟子、告子篇に、芻蕘之悅、我口。【二九】 凡任 任は、よく差ること、論語、鄉黨篇に、失、任不食。【三〇】 高音 新書に、見教、一高音、韓退之の詩に、大句幹元道、高音軋管。【三一】 芻蕘 芻、樂府をいふ。晉の芻豢、字は叔賈、風神秀異、好く玄理を説す。弟の妻の父樂廣は、海内に重名あり。時にいふ、婦翁水滸、女翁玉潤と。【三二】 曹沈 曹植と沈約、曹植字は子建、操の子、十歳にして著く文を屬す。沈約字は休文、博く羣籍に通じ、善く文を屬す。【三三】 潤寒 顔淵と閻子雲。揚子に、或問、潤寒之徒惡乎在、曰在潤寒。【三四】 老鈍 盧綸の詩に、老鈍多眠。【三五】 鐫鉞 鐫は雕刻すること。鉞は廣韻に、爪利鐫板也とある。板は食器の蓋板、爪を以て之を刻む。公羊傳の定公八年に、鉞其板。後世は轉じて板木に刻む義に用ゐる。【三六】 才傑 沈約の詩に、吏部信才傑。【三七】 噤 口を閉ぢる、廣韻に、噤塞而口閉也。

【題義】 熙寧五年、東坡は杭州に在つて、中和堂に監試(試験官)をした。其の時に取つた所の應試

者の文章が體甚だ陋といふので、諸試官に呈したのが、此詩である。紀昀いふ、中一段大開大合、波瀾起伏、極爲三壯闊也。又いふ、雖痛詆新學、而以三遺笑出之、尙未至以怒罵と。

【詩意】我は本、蜀、眉山の人、寒苦の一書生で、薄俸を受けて居つた。多年文辭を作つたが、それは勉強して作つたもので、天稟ではない。心に得る所がないでもなかつたが、隨つて廢忘し、懶惰今に十年。今は再び白布の衣服を着けて、場屋の人となつた感じがする。昔から進士の程に中らない者は墨水を飲みしめるといふことであるが、我は眞に墨水を飲むべきである。人材登用の科擧に關する詔が下るを聞く毎に、我は白汗が流れて止まない。杭州は東南の都會で、人材が多い。其の品定めをする、草を取り、薪を取る芻蕘も、盡く蘭や蕙の香草に比すべく、かの桂住や、蕙菜などの香草は物の數でない。さて貧家に珠貝の寶を見ると眩くて、自ら審かにし難い。之と同じく、細に嘉祐の初を懐ふと、當時の進士は、文を作る、奇僻に陥り、鈎章棘句、全く渾渾を失つて居る。昔、林回は、千金の璧を棄てたといふが、當時の文章は、千金の全璧を碎いたものと謂つてもよろしい。多くの僧衣を着けたものが、寸錦を收めたと謂つてもよろしい。小文は巧なりと雖も、猶ほ之れ寸錦である。恰も調味に椒桂が和しないで、醃(酢漿)く、咀嚼するに、食物に沙礫が礫る(食物に砂が混する)と同じく、すべて奇僻に習つて居る。更にいふと、城中の人、廣い眉を好んで、四方の人、且に半額ならんとするやうなものである。行歩を邯鄲に學んで、未だ學び得ないうちに、故の歩き方を失つしまひ、一足を以て踣躓(一足で行く貌)して歸つたといふ類である。是の時に老宗伯(歐陽修)が出

現して時文の靡弊を一掃した。此の歐陽修の氣は、羣兒を壓して凜然たるものがある。歐陽公は文弊を疾んで痛く裁抑を加へた。それで、いよいよ試擧が出ると、時に推擧されたものが、皆選に入らないので、羣薄の士は、收まらない。晨朝、修の家に羣聚して、之を詆斥した。街司も、運吏も止めることが出来なかつた。甚しきは歐陽修を祭る文を爲つて其の家に投じたものもある。併し文體は是より亦少しく變つて來た。蛟龍は世に出でない。たまたま出ると魚鱗は初めて驚いて水中を走る。歐陽公の世に出づる、之に類するものがある。凡そ至音は衆聽に合はないから、一時は多く耳を假さない。久うして人に信せられる。今に至るまで、天下の士は、管仲がなかつたなら、夷狄の風に淪み、髪を被りて結ぶことなく、衣の襟を左前に合せて恥ぢることもないであらう。歐陽公が出でなかつたら、天下の文章は、ますます邪徑に陥いつたことと思ふ。故に千歳の後に當り、石室に高股を嗣ると同じこととおもふ。(高股は石室を修立し増造した太守である。歐陽公は斯文を修立した)爾來、又一變した。(王安石が科擧の法を改めたことを指す。宋史の選舉志に據ると、初、進士試三詩・賦・論各一首、策五道、帖論語十帖、對春秋或禮記墨義十條)といふやうな制度であつたが、神宗は王安石の議を入れて、試験の法を改め、從來の時・賦・帖・經・墨義を罷め、士は各、易・詩・書・周禮・禮記一經を占治し、論語・孟子を兼ねる。春秋は之を罷めた。三傳通じ難いといふのでなく、斷爛朝報と認めたからである。此學は、一體誰が諒けたか。權衡は舊法を破り、芻豢は凡疋を笑ふ。當時、虛無の學を尙んで、衛玠や樂廣だもの高言を眞似る。當時、詩賦を以て篆刻となして用ひず。曹植や沈約など雕蟲を

鄙しむ。雁蟲とは文を作るに、字句を鑄飾するをいふ。先生の周公孔子が出て、弟子の顔淵や閔子騫が寝る。(歐陽公を稱揚す)却て願ふに、老鈍の此身(東坡自ら言ふ)は先生に對し、頑樸であり、鑄錢を事とした點を謝する。そして又、諸君も才傑であるから、私の懶惰で且つ口無調法を容される。我は聊か書を廢して眠らうとする。時に秋濤は、高く午枕に巻いて居る。

【餘論】唐朝の士を取る、専ら科擧に由る。五代亂離と雖も、貢擧は廢しなかつた。進士科があり、明經諸科がある。周の世宗、又、制擧三科(賢良方正科、經學優深科、詳閑吏理科)を置き、朝野の士をして並に擧に應ずることを得しめ、試るに策論を以てした。宋朝、亦之に沿ひ、制擧、常貢の別がある。制擧は常なく、或は行ひ、或は罷む。眞宗は科を増して六となしたが、賢良方正、博通墳典、才識兼茂、詳明吏理、識洞精略、材任邊寄、未だ幾ならず之を廢した。仁宗は六科を復し、以て京朝官を待ち、別に三科を増し、(高蹈丘園、沈淪草澤、茂材異等)以て布衣を待ち、書判拔萃科を置き、以て選人の書に應ずるものを持つ。皆、先づ秘閣に試み、格に中つて然る後、帝、親ら之を策す。其の常貢は、則ち諸州毎秋、解を發し、(發解といふは、州縣より京師に出でて試験を受けしめること。州縣の試験にて優等であつたものは、其の地方官廳から解(公文書)を中央政府に發送し、更に其人を京師で試験する。本州給解、故に之を拔解といひ、發解といふ)冬、禮部に集り、春に考試する。凡そ進士は、詩賦論及び帖經墨義を試み、諸科は(九經、五經、通禮、三禮、三史、學究一經等)専ら帖經墨義を試む。開寶中、進士ありて、知擧官情を用ひて、取捨するを訴ふ。太祖乃ち下第輩に選に

中るものを選び、親ら講武殿に御して別に試む。是れより殿試は遂に永制となつた。

望海樓晚景五絶

望海樓晚景五絶

海上濤頭一線來。

海上の濤頭一線來り、

樓前指顧雪成堆。

樓前指顧に雪堆を成す。

從今潮上君須上。

今より潮上らば君須らく上るべし、

更看銀山二十回。

更に銀山を看んこと二十回せん。

【字解】望海樓、太平寰宇記に、樓高十八丈、唐武德七年置。

【一線來】唐、盧肇海潮の賦に、夾三峯山而透入、射一線而中投。

【指顧】手に取る如く近く見ざる義、漢書、律歷志に、指顧取象。

【銀山】東坡の啓に、銀山或動。

【題義】熙寧五年八月の作、杭州圖經に、東樓、一名望海樓、在舊治中和堂北、とある。東坡が范夢得に與へた書にも、被差監試、在中和堂望海樓閒坐云云。樓は鳳凰山半に在るから、潮を見る。故に或は望潮樓といひ、望濤樓といふ。閑中で作つた詩である。

【詩意】潮の生ずる迅速さをいふと、海上に、一線の潮の頭が見えたと、樓前近く指顧の間に、千波萬波が争ひ起つて、雪の堆きさまを成す。(劉禹錫の詩に、八月潮聲吼地來、頭高數丈促山廻、須臾卻入三海門、去、捲起沙堆似雪堆とある)さて今日より潮が上つたらば、君よ、(君とは、廣く衆人を指す)須らく樓に上るべし。そして更に銀の山を二十回も看ることに致さうぞ。(潮の盛に湧きたらるさまを銀の山といふ。東坡の意を推すと、我は此處に、十日間も逗留しようと思ふから、毎日朝

の潮と夕の汐と一日に兩度づつ、即ち十日の間には、二十回看ることになる。

横風吹雨入樓斜。

横風雨を吹いて樓に入つて斜なり、

壯觀應須好句誇。

壯觀應に須らく好句にて誇るべし。

雨過潮平江海碧。

雨過ぎ潮平かにして江海碧に、

電光時掣紫金蛇。

電光時に掣す紫金の蛇。

【詩意】横風は雨を吹いて斜に樓に入る。此の壯觀は應に好句に寫して誇るべきであらう。雨過ぎ潮が平かにして、江海は見渡す限り碧の色である。そして、電光は時に紫金蛇をひく。(樓上の風雨電光の壯觀を寫し、紙上颯颯として聲あり。江海碧といひ、紫金蛇といふ、金碧著色の畫を觀るやうである。)

青山斷處塔層層。

青山斷ゆる處塔層層。

隔岸人家喚欲嚙。

岸を隔つる人家喚べば嚙へんと欲す。

江上秋風晚來急。

江上の秋風晚來急なり、

爲傳鐘鼓到西興。

爲に鐘鼓を傳へて西興に到る。

【詩意】樓上から望むと、西興鎮の層層と聳ゆる塔が見える。又、其の人家は近くて、喚ぶときは響

へやうとする。日晚れ方からは、浙江上の秋風がきびしく吹き起つて、浙江の寺の鐘鼓の聲を傳へ、西興に送り到るのである。(西興は、越にあり、越州圍經にも、西興鎮は蕭山縣の西十三里にあると見えて居る。要するに、此の樓は杭州の浙江に在つて、越州の西興に對せるもので、此詩は樓上から、西興の青山層層塔を望んだ感じを述べたものである。)

樓下誰家燒夜香。

樓下誰が家か夜香を燒く、

玉笙哀怨弄初涼。

玉笙哀怨して初涼を弄す。

臨風有客吟秋扇。

風に臨んで客の秋扇を吟するあり、

拜月無人見晚粧。

月を拜して人の晚粧を見るなし。

【字解】(一) 玉笙。李義山の詩に、恨望銀河吹玉笙。(二) 吟。秋扇。晉、王琰の白團扇歌を吟じたので、班婕妤の事を用ゐたのでなからう。謝芳姿が白團扇を製して、王現に贈る詩に、團扇復團扇、持許自障面、憔悴無復理、羞與郎相見。班婕妤が團扇詩に、新製齊纨素、皎潔如霜雪、裁成合歡扇、團圓似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼颯奪炎熱、兼捐貧病中、恩情中道絕。

沙河燈火照山紅。

沙河の燈火山を照して紅なり、

【字解】(一) 沙河。唐の地理志

歌鼓喧呼笑語中。
爲問少年心在否。
角巾欵側鬢如蓬。

歌鼓喧呼たり笑語の中。
爲に問ふ少年心在りや否や、
角巾欵側して鬢蓬の如し。

のかぶる頭巾。高邁の詩に、丘園有角巾。晉書羊祜傳に、既定邊事、當角巾東路歸故里。
欵側八九丈。

【題義】昔の香山といふは、今の吳山のことである。胥山の西北は、舊、石を鑿つて棧道を爲つた。唐の景龍四年に、沙岸の北が漲り、地漸く平坦となつた。州司馬李珣が始めて沙河を開いて、水陸に路を成した。杭州圖經に據ると、此時河流去胥山未甚遠。景龍沙漲の後、錢氏に至り、沙に隨つて岸を移し、漸く鐵幢に至る。今の新岸は、胥山を去る、已に三里を逾え、皆、通衢となつて、居民が甚だ盛といふことである。

【詩意】沙河の燈火が山を照して紅であり、歌鼓笑語、喧呼して甚だ賑かである。爲に少年に問ふが、角巾を著け欵側して鬢は蓬の如きに心ありや否や。

蟹眼已過魚眼生。

蟹眼已に過ぎて魚眼生じ、

試院煎茶

試院茶を煎る

聽聽欲作松風鳴。

聽聽松風の鳴を作さんと欲す。

蒙茸出磨細珠落。

蒙茸磨を出でて細珠落ち、

眩轉遠甌飛雪輕。

眩轉甌を遠つて飛雪輕し。

銀餅瀉湯誇第二。

銀餅湯を瀉いで第二を誇る、

未識古人煎水意。

未だ識らず古人水を煎する意を。

君不見昔時李生

君見すや、昔時李生客を好んで手自ら

好客手自煎。

煎し、

貴從活火發新泉。

活火に従ひ新泉を發するを貴ぶを。

又不見今時潞公

又見すや、今時潞公茶を煎して西蜀を

煎茶學西蜀。

學び、

定州花瓷琢紅玉。

定州の花瓷紅玉を琢するを。

我今貧病常苦飢。

我今貧病にして常に飢うるを苦めば、

分無玉盃捧蛾眉。

玉盃の蛾眉に捧しむるなきを分とす。

且學公家作茗飲。

且く公家を學んで茗飲を作し、

に、錢謙益南五里有沙河塘。咸通二年、刺史崔彦曾開、昔潮水衝二華錢塘江岸、至於奔逸入城、勢莫能禦、故開沙河以決之、何有三、曰、外沙、中沙、裏河。【二】角巾、隱者

【字解】【一】蟹眼已過魚眼生、蟹の眼は小さく、魚の眼は大きい、以て湯の沸騰の度を狀する。大觀茶

論に、凡用湯、以魚目蟹眼連連聲爲度。【二】瀉、水經の註に、風瀉而瀉、瀉は小風、瀉は數風の聲。【三】松風鳴、吳許次抄茶疏に、水一入、銕便須急煮、候有松聲、即去。【四】蒙茸、草が亂れ生ずる。謝朓の詩、霜畦紛紛、秋町鬱蒙茸。【五】詩第二、惠山泉煎茶を第二と爲す。又煎茶は、兩浙が盛で、越州の日注が第一。景祐より以來、洪州雙井の白芽が製作尤も精しく、遠く日注の上に出で、遂に草茶の第一となる。【六】好客、此記、馮諤傳に、開孟嘗君好客。【七】定州花瓷、宋時、定州造る所の瓷は、宜和・政和間の瓷を以て最となす。定窯に光素、凸花の二種あり、白色を以て正となし、白骨にして加ふるに油水を以てし、淚痕の如きものあるを佳となす。茶疏に、茶碾取古

博爐石銚行相隨。
博爐石銚行くゆく相隨ふ。
不用揶揄挂腹文。
腸を揶揄し腹を挂する文字五千卷を用ひ
字五千卷。

但願一甌常及睡。
但願ふ一甌常に睡足り日高まる時に及
足日高時。

足日高時。

ばんことを。

白樂天の詩に、黄金不_レ惜買_二銀眉_一。【一】揶揄挂腹文字。盧仝が孟諫_二煎茶_一を寄するを酬する詩に、三椀搜_二枯腸_一。世有_二文字五千卷_一。【二】睡日高時。盧仝が煎茶の詩に、日高丈五睡正濃。軍將打_二門窗_一。同公。都谷の詩に、願_二清一甌_一春有味。願清は浙江長興縣に在り、茶の産地、其の産する所の紫箬茶も亦、願清と名く。

【題義】此詩は熙寧五年八月十日、試院に在つて、作つたものである。唐宋詩醇に、獨寫_二煎茶妙處_一、於_二集中諸詠_一茶詩、別出一奇、語不_二必深_一、而精采自露云云と。紀昀いふ、發端超妙、惜以下多入_二澀調_一耳と。

【詩意】昔、蔡君謨は、茶辨を作つて、詳に水泉煎飲等を辨じ、蟹眼・魚眼用湯の法を述べた。それは、茶經に、凡候_レ湯有三沸、如_二魚眼_一微有_レ聲爲_二一沸_一、緣邊如_二湧泉連珠_一爲_二二沸_一、騰波鼓浪爲_二三沸_一、則湯老とあるに據つたものであらう。湯の沸騰の度は、蟹眼の小沸が過ぎて、魚眼の大沸が生じ、騰騰として松風の鳴く音を作さうとする。更に形容すると、蒙茸と亂れて茶の磨(石磑)から細かい球が落ち、茶の甌を逸つて眩轉し、飛雪の如くに軽い。銀餅から湯を瀉いで第二を誇る。(乃ち是れ

尋常茶を點する時、先づ略_二瓶中の湯_一を傾けて、方に點す、之を第二湯といふ。これは未だ古人の水を煎する意を識らないのである。(古語にいふ、煎水不_レ煎茶。昔、李約は茶を嗜んで、能く自ら煎し、人に謂つて曰く、茶須_二緩火夾_一、活火煎と。活火は炭の餘あつて、方に熾なるものをいふ。李生は、活火に従ひ、新泉を發するを貴んだ。又、今時の澆公は(澆公煎茶の事は、考ふる所なし。)茶を煎して、西蜀を學び、定州の花瓷に紅玉を琢する。我は今、貧病であつて、常に饑うるを苦しむ境遇であるから、勿論蛾眉をして捧げしめる玉碗もない。それで且く公家を學び、茗飲をなして、博爐(博は甌)石銚(廣韻に銚、燒器)を隨へて行く。腸を揶_二腹_一を挂へる文字五千卷を用ひないのである。ただ願ふ、一甌を喫し、十分に睡つて、日の高き時に及ばんことを(是時、甫めて王安石の議を用ひて、士を取る法を改め、詩賦・帖經・墨義を罷め、専ら策を以て干言を限定す。故に東坡が諸試官に呈する詩に、聯欲_二廢書眠_一、秋滿春_二午枕_一。正に此篇の末句の意と同じ。未_レ識古人煎_二水意_一、且學_二公家_一作_二茗飲_一。亦、皆、此の意である。)

孫莘老求墨妙亭詩 孫莘老墨妙亭の詩を求む

蘭亭蘭紙入昭陵。蘭亭の蘭紙昭陵に入るも、

世間遺跡猶龍騰。世間の遺跡猶は龍騰

顏公變法出新意。顏公法を變じて新意を出す、

【字解】【一】孫莘老、宋の孫覺、字は莘老、高郵の人。官、龍圖學士、王安石の爲に逐られたが、安石退いて鐘山に居ると、造り訪ふ。安石の本するに及び、文を作つて誅す。【二】墨妙亭、今の浙江興興縣、舊湖州府

細筋入骨如秋鷹。細筋骨に入つて秋鷹の如し。
 徐家父子亦秀絕。徐家の父子亦秀絶、
 字外出力中藏稜。字外に力を出して中に稜を藏す。
 嶧山傳刻典刑在。嶧山の傳刻典刑あり、
 千載筆法留陽冰。千載の筆法陽冰を留む。
 杜陵評書貴瘦硬。杜陵書を評して瘦硬を貴ぶ、
 此論未だ公ならず吾は憑らす。此論未だ公ならず吾は憑らす。
 短長肥瘦各有態。短長肥瘦各有態あり、
 玉環飛燕誰敢憎。玉環飛燕誰か敢て憎まん。
 吳興太守真好古。吳興の太守は真に古を好み、
 購買斷缺揮縑緝。斷缺を購買して縑緝を揮ふ。
 龜趺入座螭隱壁。龜趺座に入り螭壁に隱る、
 空齋畫靜聞登登。空齋畫靜にして登登を聞く。
 奇蹤散出走吳越。奇蹤散出して吳越に走り、

署内に在る。曾梁の墨妙亭詩に、陸名盛位如藤久、壯字豐碑亦易忘、渠木已非眞篆刻、色絲空喜好文章、峴山漢水成虛擲、大厦深齋且閉扉、好事今推賢漢守、故開新館集琳瑯、
 【一】 蕭紙。北戸錄に、晉宋間、有一種紙、長丈餘、或抄之、世謂蕭紙。
 【二】 昭陵。唐太宗の陵、今の陝西、醴泉縣東北、九層山にある。
 【三】 顏公鑿石法。書斷に、唐、顏真卿書、雄秀獨出、一變古法。
 【四】 新章。杜預左傳序に、此蓋春秋新章。
 【五】 細筋入骨云云。衛夫人筆陣圖に、善筆力者多骨、不善筆力者多肉。又いふ、多骨微、肉者、謂之筋骨。
 【六】 徐家父子。徐鑰之は會稽の人、書を善くし、法を以て其の子法に授く。法は益、工に、法書論一篇を撰んで時の楷模となる。鑰之は廣平の太守、法は中書舍人、開

勝事傳說詩友朋

書來乞詩要自寫。書來つて詩を乞ひ自ら寫さんことを、
 爲把栗尾書溪藤。爲に栗尾を把つて溪藤に書す。
 後來視今猶視昔。後來今を視ること猶昔を視るがごとく、
 過眼百世如風燈。眼を過ぐる百世風燈の如し。
 他年劉郎憶賀監。他年劉郎賀監を憶ひ、
 還道同時須服膺。還道はん時を同うせば須らく服膺す。

「要す、

子蔡酒。【一】 嶧山傳刻。寶泉の遺書賦註に、李斯作小篆、書嶧山碑、其後石燬失、土人刻木代之、杜子美の詩に、嶧山之碑野火焚、渠木傳刻肥失。【二】 陽冰。李陽冰は越郡の人、唐初書評に、陽冰篆書、若古篆、力有萬夫、李斯後一人而已。【三】 貴後。杜子美八分小篆歌に、書貴瘦硬、方通神。【四】 玉環飛燕。楊妃外傳に、記小字玉環。漢成帝内傳に、飛燕身輕不勝風、帝置七寶避風蓋。【五】 龜趺。石碑の臺石に龜の形を刻んだもの、宣稱の詩に、龜趺負穹石、浮屠羅裏修。【六】 螭。螭首をいふ、碑の額又は柱頭に、螭の形を雕るもの。六典に、碑碣之制、五品以上立碑、註にいふ、螭首龍狀と。【七】 登登。碑を打つ聲、詩に築之登登。【八】 栗尾。筆をいふ。【九】 溪藤。刻篆紙をいふ、唐國史補に、紙則有越之刻藤。【一〇】 觀今猶觀昔。開亭銘に、後之觀今、猶今之觀昔。【一一】 如風燈。韓退之の詩に、百歲如風狂。杜荀鶴の詩に、百歲風前短炬燈。【一二】 劉郎憶賀監。劉禹錫の詩に、高樓賀監昔曾登、壁上海棠龍虎圖。又いふ、偶因獨立、空書目、恨不同時便伏膺。

【題義】

此詩も熙寧五年八月の作。東坡の墨妙亭の記に、熙寧四年十一月、高郵孫莘老、自廣德移守吳興、其明年二月、作墨妙亭於府第之北、逍遙堂之東、取凡境内自漢以來古文遺刻、以實之とある。紀昀いふ、句句警健、東坡極加注意之作と。又いふ、此真通人之論、詩文皆然、不獨書一也と。

王文誥いふ、江淹雜擬詩序、已明此旨、東坡移以論書耳。

【詩意】王右軍（王羲之）蘭亭修禊序の真本は、蘭紙に書いてあるさうで、唐、太宗の初、之を得たから、趙模・馮承素・諸葛貞の流に命じ、楊本にして諸王に賜うた。其の真本は、玉匣に入り、従つて昭陵に葬つたから、見ることが出来ない。併し世間に遺つて居る右軍の筆の跡は、梁の武帝が評したやうに、字勢が龍の天門に躍り、虎の風閣に臥したやうである。凡そ書は通すれば變する。歐陽詢は王右軍の體を變じ、柳公權は歐陽の體を變じて顏真卿等に至る。皆、法を得た後に、自ら其の體を變する。若し法を執りて變じないときは、號して奴書となす。顏真卿は書法を變じて新意を出し、細筋が骨に入つて、秋鷹のやうである。（徐浩の論書に、初學之際、宜先筋骨、筋骨不立、肉何所附と見ゆ。）徐浩父子も亦秀絶である。（徐浩、字は季海。浩が父熈之、字は惟岳。）父子皆、草隸に工であつて、人は其の書を狀して怒猊抉石、渴驥奔泉となした。其の字は、外に力を出して、中に稜を藏する。（王文誥いふ、鍾王之法、七字道盡と。鍾は鍾繇、王は王羲之・王獻之。）李斯は小篆を作つて、禪山の碑を書いた。其の書は傳刻されて、典刑が存する。禪山の碑に刻んだ李斯の小篆は、其の後、唐の李陽が其の筆法を得て、玉箸體と號した。杜子美は、書を評して瘦硬を貴ぶと言つたが、此論は公平でないから、我は従はない。（亭中に顏・徐・李斯等の石刻があるから序に之を言つたのであらう。）短長肥瘦、各態があつて、楊貴妃の身肥えたるも、趙飛燕の身輕きも、誰か敢て憎まうぞ。吳興の太守孫幸老は、眞に古を好み、斷缺を購買して、緘繡を揮ひ、廣く境内に索めて、漢以來の古文遺刻を取

り、墨妙亭を築いて之を貯へたのである。其の收集の多き、石碑の臺石の龜趺も、亭の座に入り、同じく螭首（龍の角なきもの）も壁中に隠れ、空齋は畫靜にして碑を打つ聲の登壇たるを聞くのみである。奇蹤は吳越に散出し、勝事は傳説して友朋に誇る。孫君にはわざわざ書信を寄せて詩を我に求めらる。（王文誥いふ、收到墨妙句、似率易、而手法細密之甚と。）我は爲に筆を把つて剡溪紙に書く。後の今を視るは、猶ほ今の昔を視るがやうで、眼を過ぐる百世と雖も、風燈の如きである。劉禹錫は高樓賀監昔曾登、壁上筆蹤龍虎騰と言つたが、他年、劉禹錫が賀監を憶つたやうに墨妙亭を憶ふとき、もし君と時を同うせば、須らく此書を服膺すべしと言はうとする。

【餘論】歐陽修の集古錄に、蘭亭修禊序、世所傳本尤多、世言、真本非昭陵、唐末之亂、昭陵爲溫韜所發、所藏書畫、皆剔取裝軸金玉而棄之、太宗時、搜訪集爲三十卷、模傳之、分賜近臣、獨蘭亭真本亡矣、故不得列於法帖。この温韜といふは、京兆華原の人で、少うして盜をなし、後、李茂貞に事へ、姓名を李彥韜と改む。後唐、明宗の時、嘗て諸陵を發くの罪を以て德州に流し、死を賜はつた。

李公擇求黃鶴樓詩因記舊所聞於馮當世者

李公擇、黃鶴樓の詩を求む、因りて舊馮當世に聞きし所のものを記す

黃鶴樓前月滿川、黃鶴樓前月川に滿つ、

【字解】〔一〕李公擇、李常、字

古今體詩 李公擇求黃鶴樓詩因記舊所聞於馮當世者

抱關老卒飢不眠、
夜聞三人笑語言、
羽衣著屐響空山、
非鬼非人意其僂、
石扉三叩聲清圓、
洞中鏗鉞落門關、
縹緲入石如飛烟、
鷄鳴月落風馭還、
迎拜稽首願執鞭、
汝非其人骨腥羶、
黃金乞得重莫肩、
持歸包裹敝席氈、
夜穿蒺藜星光射天、
里閭來觀已變遷、

抱關の老卒飢えて眠らず。
夜聞く三人笑語していふを、
羽衣履を著けて空山に響く。
鬼にあらず人にあらず意ふに其れ僂、
石扉三たび叩いて聲清圓。
洞中鏗鉞門關落つ、
縹緲として石に入る飛烟の如し。
鷄鳴き月落ち風に馭して還り、
迎拜稽首して鞭を執るを願ふ。
汝は其の人にあらず骨腥羶、
黄金乞ひ得て重うして肩にするなし。
持し歸つて包裹す敝席氈、
夜蒺藜を穿ちて星光を射る。
里閭來り觀れば已に變遷す、

は公擇、建昌の人。熙寧中、諫院に
知たり。均輸・青苗の毒を天下に流
すを言つて、出されて滑州に列た
り。哲宗立ちて、戸部尙書に追み、
尋で出されて鄂州に知たり。〔一〕
黃鶴樓 太平寰宇記に、黃鶴樓在武
昌江夏縣西二百八十步、昔、費文禪
登仙、每騎黃鶴、於此憩駕。
〔二〕 馮當世 馮京、字は當世、江夏
人。富郷公の甥にして文簡と諡す。
〔三〕 抱關 門香をいふ。孟子、萬章
篇に、抱關擊柝、荀子、榮辱篇に、
抱關擊柝。〔四〕 羽衣 漢書、郊祀
志に、使使衣羽衣。〔五〕 石扉三
叩 劉孝綽の詩に、方夜勢石扉三
叩。〔六〕 鏗鉞之聲 文選、
吳都賦に、鏗鉞之聲。〔七〕 門關
周禮に、有股門關。〔八〕 縹緲
はるかに廣い。白樂天の詩に、山在
虛無縹緲之間。〔九〕 執鞭 論語、

似石非石鉛非鉛、

石に似て石にあらず鉛鉛にあらず。

或取而有衆忿喧、

或は取りて衆忿喧するあり、

訟歸有司今幾年、

訟有司に歸して今幾年。

無功暴得喜欲顛、

功なくして暴に得喜んで顛せんと欲す、

神人戲汝眞可憐、

神人汝に戲る眞に憐むべし。

願君爲考然不然、

願くは君爲に然不然を考へよ、

此語可信馮公傳、

此の語信すべし馮公傳ふ。

【題義】 此詩も熙寧五年八月の作。樂城集に據つて考へると、公擇は時に鄂州に知となつて居た。紀
昉いふ、音節瑯然と。

【詩意】 鄂州黃鶴樓前、月は川に滿つる。相傳ふ、樓の下に石があつて、其の光の徹して居る所から
石照と言つた。其右の巨石が所謂仙人洞である。嘗て一守關の老卒があつて、晨夕毎に洞下に拜する。
或る夕、月が晝の如くであつたとき、三道士が洞中から出て、吟嘯すること久しく、將に復、洞に入
らうとする。老卒は之に従ふ。道士いふ汝は何人か。老卒は具に之に對へ、且つ富貴を欲する所以を
いふ。道士いふ、此洞間の石、速に一塊を抱いて去るべしと。老卒持して出でると、やがて石が合つ
て、入ることが出来ない。翌日、石を視ると黄金であつたといふことである。(此詩は此傳説に據つた

述而篇に、樂、執鞭之士、吾亦爲之。
〔一〕 聞理 呂氏春秋に、水居者、
草食者理。〔二〕 包裹 淮南子に、
包裹天地。

ものである。再びいふと、三道士は履を著け、其の履音が空山に響く。鬼でなく、人でもなく、其れ仙人か。三たび石扉を叩く、其の聲が清圓である。洞中も鐸鉢と響いて、やがて門闕が落ちる。縹緲として石に入り、飛烟のやうに消えてしまつた。既にして鶏が鳴き、月が落ちる。風に駭して還り、迎拜して鞭を執つて出入に從ひ、趨走したいと願ふ。すると仙人はいふ、汝は其人ではない。汝の骨がまだ腥いと。老卒は黄金を乞ひ得たが、重くて肩にすることも出来ない。(紀昀いふ、以上三句、他人須數行一了)持ち歸つて弊れた席氈に包んで置いた。黄金の光は、夜、茅屋を穿つて、天を射たのである。さて我が里間に歸り來つて觀れば、已に變遷して故の如くではない。石に似て石でなく、船に似て船でもない。(王文誥いふ、隨筆填寫、亦如斷續碎瓦、皆成黄金。)或は之を取つて衆が憤嗔する。そこで有司に誣へた。それから今に幾年か分らない。功がないのに暴に富を得て、喜んで颯せんとする老卒よ、神人の汝に戯れるは、眞に憐むべきである。願くは君爲に此の事の然るか然らざるかを考へよ。此の話は、馮當世が傳へたものであるから、信すべきである。(紀昀いふ、得此二語、方非小説傳奇、不然則遊騎無歸、收束不住と。)

八月十日夜看月有懷子由并崔度賢良

八月十日夜月を見て、子由并に崔度賢良を懷ふあり

宛邱先生自不飽 宛邱先生自ら飽かず、

【字解】(一)崔度 歷に通じ、

更笑老崔窮百巧 更に笑ふ老崔百巧を窮むるを。

一更相過三更歸 一更相過ぎ三更に歸る、

古柏陰中看參昴 古柏陰中に參昴を見る。

去年舉君首荷盤 去年君が首荷盤を舉ぐ、

夜傾閩酒赤如丹 夜閩酒を傾く赤うして丹の如し。

今年還看去年月 今年還看る去年の月、

露冷遙知范叔寒 露冷に遙に知る范叔の寒きを。

典衣自種一頃豆 衣を典して自ら種う一頃の豆、

那知積雨生科斗 那ぞ知らん積雨科斗を生ずるを。

歸來四壁草蟲鳴 歸り來れば四壁草蟲鳴く、

不如王江常飲酒 如かず王江の常に酒を飲むに。

【題義】崔度は時に陳州の教授であつた。子由も同じく學官であつたので、月を見て子由を懷ひ、并

せて崔度に寄せたのが此詩である。紀昀いふ、清而不淺と。

【詩意】宛邱先生子由は、自ら足るとしな。更に老崔度の百巧を窮める態度も、笑ふべきである。夜の八時頃相通り、同じく十時頃歸つて見ると、古柏の陰中に參星と昂星とを見る。去年陳に在つて、君が首宿盤を擧げ、此は辛亥都を出て陳に在る時を指す。夜、鬪酒を傾けたことを思ひ出す。酒の色は赤くて、丹のやうであつた。今年また去年の月を見る。露冷かにして遙に范叔の寒きを知る。(子由・崔度を懷ふ)衣を典して自ら一頃の豆を種えたが、思ひ掛けもなく、長雨で蛙を生ずると同様で、收穫がなかつた。歸り來て見ると、四壁に草蟲が鳴いて居る。王江(陳州の道人)のやうに常に酒を飲んで居るに越したことはない。

【餘論】張耒の明道雜志に、陳州有王江者、真有道之士、嗜酒伴狂、形短而肥、丫髻(あげまきに結んだ髪)簪花、語言不常而中有理、止無常處、惟持一葉一束、或至京師、今不復見矣。又、龍川志にいふ、巧者王江居宛邱、喜飲、大雪埋之、氣勃然、雪輒融液、自云、本考城人、嘗舉三學究。熙寧三年、子由が陳に至つた時、脾肺に疾が多かつた。幸、道士の服氣法を授けるものがあつたが、遂に身を終へるまで之を行つた。當に之を王江及び李若之に得たのであらう。

催試官考較戲作

試官の考較を催し戲れに作る

八月十五夜

八月十五夜

【字解】【一】茅簷、那樓と同じ、陶淵明の詩に、藍樓柳簷下。【二】市樓、許渾の詩に、市樓餘酒過市樓。

月色隨處好

月色隨處に好し。

不擇茅簷與市樓

擇ばず茅簷と市樓と、

況我官居似蓬島

況んや我官居蓬島に似たり。

鳳唼堂前野橘香

鳳唼堂前野橘香し、

劍潭橋畔秋荷老

劍潭橋畔秋荷老ゆ。

八月十八潮

八月十八潮、

壯觀天下無

壯觀天下に無し。

鯤鵬水擊三千里

鯤鵬水擊三千里、

組練長驅十萬夫

組練長驅十萬夫。

紅旗青蓋互明滅

紅旗青蓋互に明滅、

黑沙白浪相吞屠

黑沙白浪相吞屠す。

人生會合古難必

人生會合古より必し難し、

此景此行那兩得

此の景此行那ぞ兩ながら得ん。

願君聞此添蠟燭

願くは君此を聞いて蠟燭を添へよ、

古今雜詩 催試官考較戲作

五七七

春【一】蓬島、蓬萊島をいふ。李義山の詩に、蓬島煙霞閣苑城。【二】鳳唼堂、鳳凰山下に在り。此山に鳳塔を建てて、鳳唼は正に居る所の池上に落つ。舊、一堂あり、山の落ちんと欲する處に在り。近之を葺き、之を鳳唼堂といふ。【三】劍潭橋、王文韶いふ、杭州無此橋名、指杭州中。也、月色隨處好句、不專指杭州。【四】八月十八潮、錢謙益潮圖に、八月十八日、潮大常潮、遠觀數百里、若葉橫江、稍近見潮頭高數丈、捲雲湧雪、混流屯屯、聲如雷鼓、猶不足形其容之。夢梁錄に、臨安每歲八月內潮怒勝於常時、自十一日起至十八日、傾城而出、最為驚盛、自廟子頭直至六和塔、水軍散、聞於潮未來時、下水、打牌、展旗、百端呈獻、號天下壯。

門外白袍如立鶴。門外の白袍立鶴の如し。

弄潮之戲始於此。【七】組練水軍三千里。莊子、逍遙遊に、北冥有魚、其名爲鯢、化而爲鳥、其名爲鵩、鵩之從於南冥也、水擊三千里。【八】組練、白練練の組、組甲被練と熟す、衣甲の飾をいふ。組甲とは、甲に漆して、組文をなすもの。被練は練袍をいふ。左傳、襄公三年に、楚子重伐吳、使鄧廖帥組甲三百、被練三千、以侵吳。【九】長驅、休まずして進むをいふ。戰國策に、輕兵銳卒、長驅至齊。【一〇】兩得、荀子に、人一之於禮義、則兩得之矣。【一一】白袍、宋の初は、唐の舊制に仿り、官あるもの、皂袍を服し、官なきものは白袍を著る。楊文公談苑に、晉、開運詔兩制、各作詩賦一篇、付禮部爲考試之式、獨舉士李憐不肖曰、憐字有數、因人成事、使再表白袍入貢部、下第必矣。洪邁の貢院詩にも、懶慢紛紛白袍子とある。

【題義】此詩も熙寧五年八月十五夜、杭州の州宅で作つたものである。丁度、此の時、杭州に、進士の考較(試験)があつたが、(宋時定制、放榜在中秋日、以後詩考之、是年八月十七日始出榜、故公有催試官之作)八月十八日は、觀濤の時期であるから、夜を日に繼ぎて、考試を濟ませ、諸試官と愉快に觀潮をなさうと試官を促したものである。私事を以て公事を促したから、戲作の二字を以てことわる。紀昀いふ、此何等大典、乃以竣事遊眺促之、立言殊不得體、雖題有戲字、其實戲字已先錯と。

【詩意】八月十五夜は、月色隨處に好し、茅葺の家と、市樓とを擇ばない。我が杭州の官居は蓬萊島に似た仙境である。殊に風味堂前の野橋は香しく、劍潭橋畔の秋荷は老いたのである。(風味堂も、劍潭橋も、皆、杭州府廳の佳境で、州宅と相違つて居る。)八月十八潮の壯觀は、天下に比がない。(方輿

勝覽に據ると、杭州の海潮は、毎日晝夜、再び上る。常に、月の十日、二十五日は、最も小。月の三日、十七日は、極めて大。小なるときは、漸く漲りて、數尺に過ぎない。大なるときは、濤の湧くこと、高さ數丈に至る。毎年八月十八日には、遠くは數百里から士女が來つて、集り觀る。此時、舟人漁子は、濤に浜り、浪に觸る、之を迎潮といふさうである。)かの莊子にある鯉魚が鵬に化して、南溟に徙るとき、翼を以て、水を撃つこと三千里、(此日の潮勢をいふ。)又、かの左傳に見ゆる楚の子重が吳を伐ちたるとき、組甲被練の十萬の精兵を率ゐて、長驅したるも、此の潮の如くであつたらう。紅の旗や、青い蓋は、弄潮人のいでたちの派手な狀で、それが潮の進退高低によつて、見えつ隠れつするのである。潮の打ち來るときは、白浪を捲き、潮が退く時は、黒い沙を捲き去る。即ち相呑むが如く、相屠るがやうに見える。人生の會合は、古より難いとする所、まして此の壯絶の景、此の集合は、容易に得られない。之を聞かれたなら、蠟燭を添へて、終夜、考試の業を執り、速に其の事を畢へて、遊覽に出掛けるが宜しからう。門外には、白袍の舉子等が早く試みられたしとて首を伸ばして待つて居る。(舉子は、皆、白麻を服す、故に白袍といふ。鶴の字は、白袍を狀し、又、首を伸ばして居るとの意をも含めるのであらう。)

八月十七日復登望海樓自和前篇是日榜出。與試官兩人復留五首。

古今勝時 八月十七日復登望海樓自和前篇是日榜出與試官兩人復留五首

八月十七日復た望海樓に登り、自ら前篇に和す、是日榜出づ、試官兩人と復た五首を留む

五八〇

樓上烟雲怪不來。

樓上烟雲來らざるを怪しむ、

樓前飛紙落成堆。

樓前飛紙落ちて堆を成す。見るべし、

非關文字須重看。

文字に關するにあらざるも須く重く

却被江山未放回。

却て江山に未だ放回せざるを被る。

【字解】(一) 試官兩人 一人は

湖州の人劉揚で、送劉寺丞詩に見

ゆ。(二) 飛紙落成堆 全唐詩話

に、中宗、正月晦日幸昆明池、羣臣

應制百餘篇、帳殿前結綵樓、命上

官唱詩、選一篇爲新曲、須臾紙落

如飛、惟比宋二詩不下、移時一紙飛盡、乃沈詩也。

【題義】再び望海樓に登り、試官兩人と韻語をなしたのであるが、詩中、往往寓意がある。といふのは、當時、新學が盛に行はれて、去取必ず東坡の意の如からざるものがあつた爲めであらう。紀昀いふ本色得好と。

【詩意】樓上は烟雲の來ないことを怪しむ。それは樓前に飛紙が落ちて堆い爲めであらう。唐の中宗が昆明池に幸し、羣臣に詩を作らしめ、其の中から一篇を選んで新曲を爲らうとしたとき、須臾にして紙の落ちること、飛ぶが如く、ただ沈・宋(沈佺期と宋之問)の二詩のみが下らなかつた。時を移して一紙が飛び墜ちた。乃ち沈佺期の詩であつたといふ。今は文字に關するのではないが、江山も一文章である。須らく其の江山に放回されないことを重く看るべきであらうかと思ふ。

眼昏燭暗細行斜。

眼昏く燭暗く細行斜なり、

考閱精強外已誇。

考閱精強外已に誇る。

明日失杯君莫怪。

明日杯を失ふ君怪しむ莫れ、

早知安足不成蛇。

早く安足を知らば蛇を成さず。

【字解】(一) 不成蛇 戰國策

に、陳轅曰、楚有詞者、賜其舍人

卮酒、舍人相謂曰、蓋地爲蛇、先

成者飲酒、一人蛇先成、引酒且飲

曰、吾能爲之足、未成、一人之蛇

成、奪其卮曰、蛇固無足、子安能

爲之足。

【詩意】眼昏く、燭も暗くて、細行の文字が斜めである。(後句の秋花不見と同意。)たとひ舉子の程文(試験の答案)を考閱することが精強であつても、外已に誇の色を見はしたならば、蛇を畫いて足を加へるの類となる。かくて明日杯を失ふ(酒を飲むことが出来ない意)のも、當然である。即ち早く安足を知らば、蛇の畫が出来ないのである。(此詩は戰國策にある蛇固無足、子安能爲之足に據つて説をなしたのである。)

亂山遮曉擁千層。

亂山曉を遮りて千層を擁し、

睡美初涼撼不響。

睡美にして初涼撼かすも響へず。

昨夜酒行君屢歎。

昨夜酒行りて君屢歎す、

定知歸夢到吳興。

定めて知る歸夢の吳興に到るを。

【字解】(一) 千層 方千の詩に、

積翠千層一運開。(二) 撼 ゆすり

動かす意、韓退之の詩に、蛇蟄撼大

樹。(三) 響 言にて應ずる意、呼

欲響の類。(四) 吳興 今の浙江

古今體詩 八月十五日復登望海樓自和前篇是日榜出與試官兩人復留五首

【詩意】亂山千層を擁して居るので、夜の明けることが遅い。初涼睡眠快くしてゆり動かすも應じない。昨夜、酒が行つたときも、君はたびたび歎息された。定めし故山の吳興に歸るを夢みたことであらうと推察する。

天台桂子爲誰香。

天台の桂子は誰が爲に香し、

倦聽空階點夜涼。

聴くに倦みて空階夜涼に點す。

頼有明朝看潮在。

頼ひに明朝看潮の在るあり、

萬人空巷鬪新粧。

萬人空巷に新粧を鬪はす。

中、天台桂子落十餘日、方止云云と見ゆ。

【詩意】天台山は飛仙の居る所、其山の桂の實は、誰が爲に香ばしいのであるか。桂子の香しいのを聴くに倦みて、空階夜涼に點じた。幸に明朝は觀潮の時期であるから、人出は定めし多かるべく、萬人は空巷に新粧を鬪はすことであらう。

【字解】【一】天台、山の名、今の浙江天台縣の北に在る。古より飛仙の居る所と稱す。【二】桂子、かつらの實、宋之問の詩に、桂子月中落。白樂天の詩に、天台桂子落紛紛。また、陸龜蒙の詩の註に、唐の垂拱

秋花不見眼花紅。
身在孤舟兀兀中。

秋花見ず眼花紅なり、
身は孤舟兀兀の中にあり。

【字解】【一】眼花、醉眼がちらついて、昏花を生ずるをいふ。杜甫の飲中八仙歌に、眼花落井水底眠。

細雨作寒知有意。
未教金菊出蒿蓬。

細雨寒を作す意あるを知る、
未だ金菊をして蒿蓬を出でしめず。

【一】金菊、嚴隱の詩に、采采黃金花、何由滿衣袖。【二】蒿蓬、草に喩ふ、李白の詩に、我輩豈是蓬蒿人。

【詩意】試院中に在つては、秋花をば見ることが出来なく、但眼花の紅なるを見るのみである。(眼花は、醉眼の昏花を生ずることである。此の身は孤舟兀兀(動かない貌)の中にある。細雨が降つて寒さを催す。未だ金菊をして蒿蓬を出でしめない。(王安石新學の盛行は、東坡の意の如くならないものが多い。故に金菊蒿蓬の感があるのであらう。)

秋懷 二首

秋懷 二首

苦熱念西風常恐來無時。

苦熱西風を念ふ、常に恐る來るに時なきを。

及茲遂淒涼又作徂年悲。

茲に及び遂に淒涼、又徂年の悲を作す。

蟋蟀鳴我牀黃葉投我幃。

蟋蟀我が牀に鳴き、黃葉我が幃に投す。

牕前有棲鵬夜嘯如狐狸。

牕前棲鵬あり、夜嘯狐狸の如し。

露冷梧葉脫孤眠無安枝。

露冷にして梧葉脱し、孤眠安枝なし。

熠燿亦有偶高屋飛相追。

熠燿亦偶あり、高屋飛んで相追ふ。

定知無幾見、迫此清霜期。
物化逝不留、我興爲嗟咨。
便當勤秉燭、爲樂戒暮遲。

定めて知る幾くも見るなきを、此の清霜の期に迫る。
物化逝いて留らず、我興ちて爲に嗟咨す。
便ち當に勤めて燭を乗るべし、樂を爲すこと暮遲を戒む。

【字解】【一】西風。秋の風、李白の詩に、八月西風起。五行説にては、秋を西に配する。【二】凄涼。さびしく寒い、陸游の詩に、霜露已凄涼。【三】蟋蟀。今のこほろぎ。詩の唐風に、蟋蟀在堂、歲事其莫。きりぎりす、こほろぎの霜、古今相反す。【四】車帳。(垂布の類。【五】。漢書、賈誼傳に、散爲長沙王傅、有屬入令、止於坐側、屬不詳鳥也。【六】無安夜。曹操の樂府に、月明星稀、烏鵲南飛、遙樹三眠、無枝可依。【七】燭。蠟燭、蠟のこと。詩、東山に、燭燭宵行。註にいふ、燭燭、螢火也と。李陵の詩に、晨風吹北林、燭燭東南飛。因にいふ、即照夜光、皆螢である。燭燭は、螢火の蟲、飛んで光ある貌。故に燭燭、螢也といふ。【八】無幾見。詩に、無幾相見。【九】清霜。杜子美の螢火詩に、十月清霜重、風零何處歸。【一〇】物化。萬物變化の理をいふ。莊子、齊物論に、此之謂物化。【一一】我興。詩に、我興觀夜。【一二】秉燭。古詩に、晝短苦夜長、何不秉燭遊。

【題義】此の二首も熙寧五年八月の作である。秋懷を述べたものであるが、興意は時事に及んだものである。唐宋詩醇の評に、前作感憤、後作乃導其冲和、起乎悲、止乎樂、蓋猶是優游卒歲之旨とある。【詩意】夏季には、秋風を待ちわびて、常に秋の來る時はまだかと口癖のやうに言つたが、さて秋になると、却つて又、寂しい。其上に、月日も早く徂去る。かくては百年の歲月も、幾ばくもなからうと流年を悲しむのである。(紀昀いふ、流年運暮之感、妙不直寫、只以物化烘托而出。)蟋蟀は我が牀の下に鳴いて居り、黃葉は我が垂布に投ずる。應前には棲鵬がある。鵬は惡鳥であつて、夜曠

くこと狐の如く理の如くである。露冷にして梧葉(桐の葉)が脱し、孤眠の鵬は、其の身を安んずる枝は無い。(此は栖むこと其の所にあらざるをいふ。梧桐は風風の栖む所である)螢にも亦、偶(友の義)がある。高屋に飛んで相追ふ。併し螢は時を得たさまで、友を求めて高屋上に飛び廻はつて居るも、此の清霜の期に迫つたから、幾もたたく、見えなくなるであらう。即ちやがて死ぬであらう。萬物は皆、かやうに變化して行き、少しも留まらない。我等も、ゆくゆくは、此の如くなるであらうと、我は興き之が爲に嗟いた。(此句は起の徂年悲の句に應じて、其の意を終へる。)時節は右のやうに、速に移り易はるものであるから、暮遲(暮年といふに同じ)となつても、致し方がない。時に及んで、勤めて蠟燭を取つて、夜にかけて樂しむべきである。(此詩は時事と離れない。蟋蟀・棲鵬・燭燭の三物は、小人に比す。即ち此の衰世に方り、世を濟ふべき賢者を渴望したが、其の出で事を執る人を見ると、衆望に叶はないで、却て天下を誤る虞がある。(暗に王安石を指す)まして、羣小人は競ひ出て、時に乗じて、勢を逞しくするも、(呂惠卿以下の小人を指す)此輩は久しからずして當に自滅すること、かの燭燭や、蟋蟀の如くであらうと思ふ。)

海風東南來、吹盡三日雨。
空塔有餘滴、似與幽人語。
念我平生歡、寂寞守環堵。

海風東南より來り、吹き盡す三日の雨。
空塔餘滴あり、幽人と語るに似たり。
念ふ我が平生の歡、寂寞として環堵を守る。

壺漿慰作勞、裹飯救寒苦。
 今年秋應熟、過從飽雞黍。
 嗟我獨何求、萬里涉江浦。
 居貧豈無食、自不安吠畝。
 念此坐達晨、殘燈翳復吐。

壺漿作勞を慰め、飯を裹みて寒苦を救ふ。
 今年秋應に熟すべし、過從雞黍に飽かん。
 嗟我獨り何を求めん、萬里江浦を渉る。
 居貧なるも豈に食無からんや、自ら吠畝に安んぜず。
 此を念ひて坐して晨に達す、殘燈翳ひ復た吐く。

【字解】 ① 海風東南來、李白の詩に、海風吹不歸。 ② 空塔、何遜の詩に、夜雨滴空塔、滴入愁人耳。 ③ 幽人、晏
 子、蓬蒿窮環堵、禮記、備行篇に、備有一畝之宮、環堵之室。淮南子に、環堵之室、美之以生茅。韓詩外傳に、原憲居環堵之室、
 美以蓬蒿。 ④ 壺漿慰作勞、作勞を一本に、我勞に作る。蓋は瓶、漿は飲料、米汁で作る。醴の類。陶淵明の詩に、壺漿勞。
 近聞、晉書、載記に、作勞耳鳴、非不詳微也。揚雄の書に、田家作苦、斗酒相勞。尙書に、不昏作勞。 ⑤ 裹飯救寒苦、
 莊子、大宗師篇に、裹飯而往食之。 ⑥ 我獨何求、詩に、不知我者、謂我何求。 ⑦ 坐達晨、潘安仁が懷遷賦に、驅長歎
 以達晨。 ⑧ 殘燈翳復吐、杜子美の詩に、曳燈螢清絕、初日翳復吐。

【詩意】 海風が東南から吹いて来て、三日の雨を吹き盡してしまつた。空塔の餘滴が幽人と語るやう
 である。(一篇は、此の句から生じ来り、極めて奇警である。古詩の夜雨滴空塔、滴入愁人耳より
 脱化したるは言ふまでもないが、更に新意を出して居る。紀昀いふ、平語卻極奇幻こと。)さて首を回
 して郷里に在つた時の平生の樂みをいふと、寂寞として環堵の室を守つて居た。(方一丈を堵となし、

四方が各一堵の小室である。儒者には環堵の室といひ、佛者には方丈の室といふも、要するに同じく
 小室を意味する。)東坡の心持を推していふと、我は郷里にあつて、儒家に生れ、儒業を守つて居たが、
 今から思ふと、それが無上の樂みであつた。故郷に居た時は、郷里の人が酒漿を壺に入れて送り來
 り、田を作る辛勞を慰めてくれたり、飯を裹んで送りくれたりした。今歳は何處も豐作であるから、
 故郷では、定めし、あちこちへ往來して雞黍などの御馳走で飽食することであらう。今我は何を求め
 る爲に、かやうに江浦の險を涉つて、此の萬里の遠方に來つたのであるぞ。郷里に居るなら、貧家で
 はあるが、食物のないのではない。但、自ら吠畝の中に安んじて、農作を爲すことが厭やであつたか
 ら、仕官をなしたのである。(紀昀いふ、亦人不肯道語)今日から思へば、愧かしくも、悔ゆること
 である。此が爲に眠ることも出來ずに、坐して晨に達するのである。無情の殘燈までが暗くなつたり、
 又、明るくなつたりして、吾が心事を諒としてくれるやうに感ずる。(雨滴を友とするに、筆を起し、
 殘燈を友とするに筆を收む。)

哭歐陽公孤山僧惠思示小詩次韻

歐陽公を哭す、孤山の僧惠思小詩を示され、韻に次す

故人已爲土、衰鬢亦驚秋。
 猶喜孤山下、相逢說舊遊。

故人已に土となり、衰鬢も亦秋に驚く。
 猶は喜ぶ孤山下、相逢うて舊遊を説くを。

古今體詩 哭歐陽公孤山僧惠思示小詩次韻

【字解】【一】孤山、杭州園湖に、孤山去錢塘治四里。【二】已爲土、莊子、在宥篇に、上見光而下爲土。【三】舊遊、惠動、惠思の二僧は、嘗て東坡に従つて遊ぶ。

【題義】熙寧五年九月、歐陽修の訃音を聞いて、孤山の惠勳の室に哭し、文を爲つて之を祭つた。(餘論を參照) 歐陽公年譜に、熙寧辛亥六月、以觀文殿學士太子少師致仕、七月歸穎、明年壬子閏七月、年六十六と見えて居る。

【詩意】故人は已に死して土に化した。我が衰鬢も亦、秋に驚いて無情を感ずる。併し、孤山の下、(其地は即ち寶雲菴である。)相逢うて舊遊を談ずるのは、まことに喜ばしいことである。

【餘論】東坡が哀を孤山に擧げて、歐陽文忠公を祭つた文は、本集、祭文の冠である。其文に曰く、嗚呼哀哉、公之生於世、六十有六年、民有父母、國有耆龜、斯文有傳、學者有師、君子有所恃而不恐、小人有所畏而不爲、譬如大川喬嶽、不見其運動、而功利之及於物者、蓋不可計、以數計而周知、今公之沒也、赤子無所仰芘、朝廷無所稽疑、斯文化爲異端、而學者至於用夷、君子以爲無爲爲善、而小人沛然自以爲得時、譬如深淵大澤、龍亡而虎逝、則變怪雜出舞輪蹄、而號狐狸、昔其未用也、天下以爲病、而其既用也、則又以爲運、及其釋位而去也、莫不冀其復用、至其請老而歸也、莫不憫恨失望、而猶庶幾於萬一者、幸公之未衰、孰謂公無復有意於斯世也、奄一去而莫予追、豈厭世濁濁、潔身而逝乎、將民之無祿而天莫之遺、昔我先君、懷寶遁世、非公則莫能致、而不肖無狀、因緣出入、受教於門下者、十有六年於茲、聞公之喪、義當匍匐往弔、而懷祿不去、愧古人以忤倪、絃詞千里、以寓一哀而已矣、蓋上以爲天下、而下以哭其私、

梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛次韻

梵天寺僧守詮の小詩を見る、清婉愛す可し、次韻

但聞烟外鐘不見烟中寺。

但烟外の鐘を聞き、烟中の寺を見ず。

幽人行未已草露溼芒屨。

幽人行いて未だ已まず、草露芒屨を溼はす。

惟應山頭月夜夜照來去。

惟應に山頭の月、夜夜來去を照すべし。

【字解】【一】梵天寺、杭州園湖に、梵天寺在鳳凰山、臨安志に、梵天寺、乾德中、錢氏建、舊名南塔、治平中改今額。【二】幽人、世を避けて居る人、周易の履卦に、履道坦坦、幽人貞吉。

【題義】冷齋夜話(宋の釋惠洪著す)に、東吳の僧守詮は、伴狂垢汚、而して詩語清婉である。嘗て一詩を湖上山寺の壁に落日寒蟬鳴、獨歸林下寺、柴扉尙未掩、山月隨行屨、時間天吹聲、更入青蘿去と書いた。東坡は此の詩を一見して之に和したのが此詩である。

【詩意】但烟外の鐘を聞くのみで、烟中の寺を見ない。幽人は行くこと未だ已まずして草露が芒屨(わらぐつ)を溼す。(王文誥いふ、此種句調、猶之盤筵中、間以小食、雖亦適口、然非一飽物也云云)ただ山頭の月だけが、夜夜、來去を照らすことであらう。

【餘論】紀昀いふ、莊老告退、山水方滋、晉、宋以還。清音遂暢、授以風雅之本旨、正如六經而外別出三元談、亦自一種不可磨滅之文字、後人轉相神聖、遂欲截斷衆流、專標此種爲「正法眼藏」。(釋尊が靈山會上にあつた時、一語をも説かないで、ただ梵天の捧げた金波羅華を拈した。大衆は皆、茫然として居つたが、摩訶迦葉一人は、其の意を了して、破顔微笑した。釋尊よりて迦葉に宜しく、我に正法眼藏、涅槃妙心あり、今、汝に附與すべしと。釋尊が自ら大悟得了し給へる甚深秘密の悟境を正法眼藏といふ。)然則三百以下、漢魏以前、作者豈盡俗格哉、東坡之喜此詩、蓋亦偶思螺蚌之意。談「彼法者、勿以藉口と。按するに、禪家にては、東坡の溪聲便是廣長舌、山色不離清淨身の二語を取つて、以て道を見ると爲す。然れども、其の梵天寺五古の色相相ともに空にして、已に上乘に臻るには若かない。其の成佛は當に靈運の下に在らざるべしと思ふのである。

和沈立之留別二首 沈立之留別に和す 二首

而今父老千行淚、而今父老千行の淚、

一似當時去越時、一に當時越を去る時に似たり。

不用鐫碑頌遺愛、用ひず碑に鐫りて遺愛を頌することを

丈人清德畏人知、丈人の清徳は人の知らんことを畏る。

蘇東坡、五年壬子立除春官西院、福州人陳襄來代。【一】而今、論語、泰伯篇に、而今而後、吾知免夫、小子。【二】遺愛、古

【字解】一、沈立之、沈立、字は立之、歷陽の人。三朝に歷事し、白首一節、儲書數萬卷に至る。神宗

藏する所を問ふ、立、其の目及び著す所の名山水記三百卷を上る。臨安志に、熙寧三年十二月、趙鼎自杭徙知青州、是月庚申、和州人沈立自越移杭、五年壬子立除春官西院、福州人陳襄來代。【一】而今、論語、泰伯篇に、而今而後、吾知免夫、小子。【二】遺愛、古

人仁愛の後世に遺る意、左傳、昭公二十二年に、及子產卒、仲尼聞之、出涕曰、古之遺愛也。【一】丈人、長老の稱、晏、臨計に、

【題義】此詩は熙寧五年八月の作、沈立之が春官院に除せられて杭州を去るとき、詩を留めて別を爲したのである。

【詩意】今、父老が君の爲に千行の涙を垂れるのは、全く越州を去りし當時に似て居る。併し、君の遺愛を碑に鐫つて之を頌するのは無用である。すべて丈人の清徳は、人の知らんことを畏れるからである。(昔、晉の胡威(字は伯武、淮南の人)は、其父質と俱に清慎を以て聞えた。世祖(武帝)威に謂つて曰く、卿の清は、父に孰與れぞ。對へて曰く、臣不如也、臣父清畏三人知、臣清畏三人不知と。)

臥聞鏡鼓送歸艘、臥して鏡鼓の歸艘を送るを聞き、

夢裏忽忽共一觴、夢裏忽忽として一觴を共にす。

試問別來愁幾許、試みに問ふ別來愁へ幾許ぞ、

春江萬斛若爲量、春江萬斛若爲ぞ量られん。

【字解】一、臥聞、馬融の詩に、山鐘可臥聞。【二】鏡鼓、鐘は小鼓、晉書の宋顯傳に、具成備鳴。【三】歸艘、船は吳の大舟の名。謝玄暉の辭隋王、臨に、唯持春江可望、候歸艘於春浦。

【詩意】鏡や太鼓を鳴らして歸艘を送るのを臥ながら聞いて居る。(此れ即景の語)夢裏忽忽として一

觴(酒杯)を共にしたが、試に問ふ、一別以來、愁へ幾許ぞ。愁思の深いことは、春江の水よりも過ぎて居る。(季後主が詞にも、問君都有幾多愁、恰似一江春水向東流とある。東坡が自註に、去時予在試院とある。沈立之が初めて去つた時は、未だ送別することを得なかつた。併しながら、猶は夢裡に於て、共に一觴を傾けたのである。如今、別後の愁恨は、豈、春江萬斛の比量すべきであらうやといふ意味である。)

和陳述古拒霜花

陳述古が拒霜花に和す

千株掃作一番黃

千株掃ひ作す一番の黃

只有芙蓉獨自芳

只芙蓉の獨自芳しきあり。

喚作拒霜知未稱

喚びて拒霜と作す知る未だ稱はず、

細思却是最宜霜

細思すれば却つて是れ最も霜に宜し。

【字解】
陳述古 陳襄字は述古、文憲公雍佐の長子。慶歷二年、進士及第。熙寧中、知制誥に除せらる。青苗法の不便を論じ、是れ商賈の術と、王安石・呂惠卿を駁して以て天下に謝せんことを望む。王安石に忌まれ、數月ならずして、出でて

陳州に如たり、未だ期ならずして、改めて杭州に移る。述古、官に在り、至る所必ず務めて學校を興す。學者稱して古靈先生となす。【一】香 陸龜蒙の詩に、幾點社翁雨、一番花信風。【二】芙蓉 爾雅の疏に、江東人呼芙蓉爲芙蓉。【三】拒霜 本草に、芙蓉、一名拒霜、蠶如荷花、八九月始開、故名拒霜。

【題義】古靈先生集(二十五卷ある)に、中和堂木芙蓉盛開、戲呈子瞻詩がある。此詩は之に和したのである。原唱の末二句は、容易便開三百朶、此心應不長秋霜といふのである。此詩は則ち更に一層を進めて、以て述古の斥けられて、名愈、重きに比するのである。

【詩意】秋風が千株を掃ひ去つて、草木が一番の黄色を呈した。只、芙蓉の獨自芳しきあるのみ。拒霜と喚び作すも、命名の適當しないのを覺ゆる。細思すれば、却て是れ最も霜に宜しいのである。(紀昀いふ、用意頗爲深曲、查初白以淺譏之、似乎未喻其旨と。)

次韻孔文仲推官見贈

孔文仲推官贈らるるに次韻す

我本麋鹿性諒非伏轅姿

我は本麋鹿の性、諒に轅に伏するの姿にあらず。

君如汗血馬作駒已權奇

君は汗血の馬の如し、駒と作つて已に權奇。

齊驅大道中竝帶鑾鑣馳

齊しく大道の中を驅り、竝に鑾鑣を帯びて馳す。

聞聲自決驟那復受繁維

聲を聞いて自ら決驟す、那ぞ復繁維を受けん。

謂君朝發燕秣楚日未欬

謂ふ君朝に燕を發し、楚に秣うて日未だ欬かず。

云何中道止連蹇驢隨

云何ぞ中道にして止まん、連蹇驢隨ふ。

金鞍翠錦玉勒垂青絲

金鞍翠錦を冒ひ、玉勒青絲を垂る。

旁觀信美矣自揣良厭之

旁觀は信に美なり、自ら揣るに良に之を厭ふ。

均爲人所勞何必陋鹽輜

均しく人に勞せらる、何ぞ必しも鹽輜を陋とせん。

君看立仗馬、不敢鳴且窺。
 調習鞭箠、僅存骨與皮。
 人生各有志、此論我久持。
 他人聞定笑、聊與吾子期。
 空齋臥積雨、病骨煩撐支。
 秋草上垣牆、霜葉鳴塔墀。
 門前自無客、敢作揚雄麾。
 候吏報君來、弭節江之湄。
 一對高人談、稍忘俗吏卑。
 今朝枉詩句、粲如鳳來儀。
 上山絕梯磴、墮海迷津涯。
 憐我枯槁質、借潤生華滋。
 肯效世俗人、洗刮求瘕癍。
 賢明日登用、清廟歌緝熙。

君看よ仗に立つた馬、敢て鳴き且つ窺はす。
 調習鞭箠に困み、僅に骨と皮とを存す。
 人生各々志あり、此の論我久しく持す。
 他人聞かば定ず笑はん、聊か吾子と期す。
 空齋積雨に臥し、病骨撐支を煩す。
 秋草垣牆に上り、霜葉塔墀に鳴く。
 門前自ら客なし、敢て揚雄の麾きを作さんや。
 候吏君の來るを報ず、節を弭む江の湄。
 一たび高人に對して談じ、稍俗吏の卑きを忘る。
 今朝詩句を枉げ、粲として鳳の來儀するが如し。
 山に上りて梯磴を絶ち、海に墮ちて津涯に迷ふ。
 憐む我枯槁の質、潤を借りて華滋を生ず。
 肯て效はんや世俗の人、洗刮瘕癍を求むるに。
 賢明日に登用し、清廟緝熙を歌ふ。

胡不學長卿、預作封禪詞。

胡そ長卿を學んで、預め封禪の詞を作らざる。

【字解】【一】孔文仲、字は經父、新喻の人。進士に擧げられ、台州推官を歴。熙寧の初、范鎮、制舉に關し、對策萬言、新法を力論し、王安石に怒られ、罷めて故官に歸る。【二】推官、唐の官名。節度、觀察兩使の僚屬。其の後、諸州皆置く。宋、其の制に沿ふ。【三】樂馬、馬野に喰ふ、朱熹の送郭拱辰序に、宛然樂馬之姿、林野之性。【四】伏軾、史記、魏其武安傳に、今日廷論、局促效下制。漢書、灌夫傳、武帝怒曰、局促效下制。【五】汗血馬、血の如き汗を出す駿馬。前漢書、大宛傳に、宛別邑七十餘城、多善馬汗血。言其先天子也。【六】權奇、詭計に同じ。顏延年の騎白馬賦に、雄志側權奇權奇。【七】前漢書、禮樂志に、志欲權奇權奇。【八】馳驅、馳は天子の馬車の衝に著けた鈴。禮記、馬車。詩の秦風に、駟車驅驅。【九】伏軾、疾走する、莊子、齊物論に、觸見見之伏軾。【十】紫羅、つなぐ、詩、小雅、白駒に、紫羅之繩之。【十一】朝安、燕云、顏延年、騎白馬の賦に、且則、幽燕、畫殿、刑苑、李白、天馬歌に、鐘鳴則、燕鳴林越、神行電邁、騰凌。【十二】迷雲、國語、困み、難みて進まざる貌。禮記、子さき馬、驥は、らば、買置の賦に、驥馬馳驅、神行電邁、騰凌。【十三】金鞍、梁簡文、玉鞍、庾信の馬射賦に、赤汗散生白雲毛、銀鞍卻覆香羅帽。高都護の馬行に、青絲絡頭、君老、梁簡文帝の紫羅詩に、青羅、玉鞍、庾信の馬射賦に、控、玉勒、而搖、星、跨、金鞍、而動、月。【十四】彌、買置の馬、屈原賦に、駢、兩耳、伏、雙車、分。李太白の天馬歌に、誰見圖車上、被、駟、戰、國、策に、汗、明、見、春、申、君、曰、夫、隸、之、商、至、矣、服、雙、車、而、上、太、行、流、汗、灑、地、白、汗、交、流、中、阪、遙、延、負、轅、而、不、能、上、伯、樂、道、之、下、車、板、而、哭、之、驥、於、是、而、俯、而、噴、仰、而、鳴、見、伯、樂、之、知、已、也。【十五】立、仗、馬、唐書、李林甫傳に、居相位、凡十九年、固寵市權、蘇耽天子耳目、諫官無敢言者、補同社、上書言政事、斥為下邦令、因以誦勸、其餘、曰、君等獨不見、立、仗、馬、乎、終日無、聲、而、飯、三、品、御、豆、一、鳴、則、聞、之、矣。【十六】調習、詩、秦風、馴、駘、之、政、に、調、習、車、馬、之、事。【十七】此、論、我、久、持、漢書、儒林傳に、仲舒嘗持論。【十八】揚雄、揚子に、在、東、箱、則、引、之、倚、門、闥、則、應、之。【十九】弭、節、禮記に、吾令、義、和、弭、節、而、分、望、曉、庭、而、勿、迫。班彪の北征賦に、釋、余、馬、於、彭、陽、兮、日、弭、節、而、息、息。爾雅に、水、草、交、爲、謂、之。【二十】俗、吏、卑、漢書、倪寬傳に、非、俗、吏、所、及。【二十一】總、緝、熙、盧全の詩に、皇天不、爲、區、立、梯、磴。【二十二】清、廟、緝、熙、後漢、郭伋傳に、帝、勞、之、曰、賢、能、太、守、

帝城不遠、河澗九里、冀京師故殿、爾也。莊子、列禦寇駕、河澗九里、澤及三族。古詩、綠葉發華滋。【三】求、數、復、後、漢、趙壹の賦に、所好則鑽皮出其毛羽、所惡則洗垢求其數與。【三】賈明日登用、文選、郭主得賈臣一頌に、有賢明之臣。【四】清廟賦、詩、清廟は文王を祀るなり。維清維熙、文王之典。詩、大雅、穆穆文王、於辟熙敬止。【五】胡不學、長卿云云、史記、司馬相如傳に、相如病甚、天子使所忠往、而相如已死、家無書、問其妻、曰長卿未死時、爲一卷書、曰、有使者來求書、奉之、其遺札書言、封疆事、忠委其書、天子異之云云。

【題義】此詩も熙寧五年九月の作。東坡の杭を過ぎて唱和したのは、正に文仲の擧を罷めて、復、台州推官に還つた時である。但、年月を推すと、文仲が台州から再び罷めて杭州に至つた時であつて、罷めて台州に還つた時ではない。東坡と文仲とは、同じく范景仁（范鎮字は景仁、兩たび翰林に入り、四たび貢擧を知る。卒して忠文と諡す）に薦められ、竝に外に斥けられた。此詩を作つたのは、此關係である。

【詩意】我は本、鹿鹿のやうな鄙野の性で、まことに、局促として曠に伏するの姿ではない。君は大宛汗血の馬のやうで、駒の時から既に奇計がある。齊しく大道の中を驅つて竝に鑾鑾を帯びて馳せ、聲を聞いて疾走した（以上、我本鹿鹿性を説く）何ぞ復、束縛を受けやうぞ。君は朝に燕の地を出發し、南の方楚に秣つても、日が未だ傾かないといひ、何ぞ途中で止まうぞといはれる。其れで驢馬の如き驢馬の如き我も、足を難みつづき隨うたのである。黄金の鞍に翠錦を置き、玉の勒に青絲を垂れる。外貌は傍から觀てもまことに美しい。併し我は心窃に之を厭ふのである。均しく人に役せられるからには、何ぞ必しも鹽車（良馬が駕馬と同じく鹽を運ぶ車を與かされるを鹽車の憾といふ。）

を陋とはしない。君看よ儀仗に立てる馬を、終日鳴きもしないし窺ひもしない。調習や鞭箠に苦しんで、僅に骨と皮とを存するのみである。人生、各、志がある。我は久しく此論を持して居るが、他人が聞かば、必ず笑ふであらう。剛か吾子と期する。長雨で空齋に臥し、病骨を支へて居る。秋草は垣牆に上り、紅葉は塔墀（墀は石を敷ける庭）に鳴いて居る。門前に客がなくても、揚雄に真似て之を招かうともしない。候吏が君の來れるを報らせたから節を江の涇に弭めた次第である。此句に據るも、文仲は確に台州より杭州に至るから、節を江の涇に弭めたのである。一たび高人に對して談じたので、俗吏の卑きを忘れたのである。今朝は枉げて詩句を賜はる、榮として鳳凰の來儀するがやうである。我は山に上つて梯磴を絶ち、海に墮ちて津涯に迷ふに異らない。憐むべきは我が枯槁の質であるが、幸にも河澗九里、君の餘澤を蒙むるを喜ぶ。背て世俗の人が洗刮して疵痍を求めぬに效はない。賢明が日に登用されて清廟緝熙（緝は明、熙は廣、光が明かなる貌）を歌ふ。胡ぞ司馬長卿を學んで、預め封禪の詞を作つて置かないか。

朱壽昌郎中少不知母所在刺血寫經求之五

十年去歲得之蜀中以詩賀之

朱壽昌郎中、少うして母の所在を知らず、血を刺し經を寫し、之を求むること五十年、去歲之を蜀中に得、詩を以て之を賀す

古今體詩 朱壽昌郎中少不知母所在刺血寫經求之五十年以詩賀之

嗟君七歲知念母。
憐君壯大心愈苦。
羨君臨老得相逢。
喜極無言淚如雨。
不羨白衣作三公。
不愛白日昇青天。
愛君五十著綵服。
兒啼却得償當年。
烹龍爲炙玉爲酒。
鶴髮初生千萬壽。
金花詔書錦作囊。
白藤肩輿簾盛繡。
感君離合我酸辛。
此事今無古或聞。

嗟君七歲母を念ふを知る、
憐む君が壯大心愈々苦しむを。
羨む君が老に臨んで相逢ふを得るを、
喜び極まりて言なく涙雨の如し。
羨まず白衣三公となるを、
愛せず白日青天に昇るを。
愛す君が五十綵服を著け、
兒啼して却て當年を償ふを得るを。
龍を烹て炙となし玉を酒となす、
鶴髮初て生ず千萬壽。
金花詔書錦もて囊を作る、
白藤肩輿簾は盛繡。
君が離合に感じて我は酸辛す、
此事今は無し古或は聞く。

【字解】【一】朱壽昌字長叔、三歳の時、父は母劉氏を出し、母子相知らざること五十年。温公日錄に、壽昌以同母弟妹在開州、乃折衷判河中、故詩以長叔爲比。【二】金剛經をいふ。【三】得相逢、白樂天の詩に、誰知臨老相逢日。【四】淚如雨、魏武帝の詩に、憶家淚如雨。【五】白衣作三公、白衣は無位無官の人、未だ仕官しない人は白衣を著る。史記儒林傳序に、公孫弘、以春秋、白衣爲天下三公。漢代の三公は、大司徒、大司馬、大司空。又、荀爽白衣作三公、布衣より起り、九十五日にして三公に至る。【六】白日昇青天、史記、始皇本紀註に、茅盈曾祖父蒙於華山之中、乘雲翼龍白日昇天。【七】綵服、兒啼、列士傳に、老萊子、年七十者、五色斑斕の衣、戲舞於堂庭、爲小

長陵場來見大姊。
仲孺豈意逢將軍。
開皇苦桃空記面。
建中天子終不見。
西河郡守誰復譏。
穎谷封人羞自薦。

長陵場來大姊を見る、
仲孺豈將軍に逢ふを意はんや。
開皇の苦桃空しく面を記す、
建中の天子終に見ず。
西河の郡守誰か復譏らん、
穎谷の封人は自ら薦むるを羞づ。

兒啼、以悅親。【一】鶴髮、白髮をいふ、庾信が竹枝賦に、鶴髮難皮、蓬頭展齒。【二】千萬壽、蔡邕の表に、上千萬壽。【三】白藤肩輿云云、宋史、輿服志に、白藤輿、金剛轎車、内外命婦通乘。【四】酸辛、阮籍が詩に、惟昔懷酸辛。【五】長陵場來見大姊、漢書、外戚傳に、王太后、武帝母也、微時生女在民間、武帝軍駕自往迎之、在長陵小市、直至其門、家人驚恐、女逃匿、扶將出拜、帝下車立曰、大姊何藏之深也、載至長樂宮、與俱歸太后。場來は、洪武正韻に、輸、奉來也。發語の辭、韓愈の詩に、場來岐山下、日暮邊鴻吹。【六】仲孺豈逢將軍、漢書、霍光傳に、霍中孺以驛吏給事平陽侯家、與侍者衛少兒私通、而生去病、不相關久之、去病既壯大、爲將軍、擊匈奴、至平陽、迎中孺、因跪曰、去病不早自知爲大人遺體也。【七】開皇苦桃云云、隋書、高祖外家呂氏、其族重徵、平齊後、求助不知所在、開皇初、汝南郡上言、有男子呂永吉、自稱有姊、字苦桃、爲揚廣妻、勸諭知是舅子、始追贈外祖雙周、外祖母姚氏。【八】建中天子云云、舊唐書に、代宗皇后沈氏生德宗、史思明再陷河洛、失太后所在、德宗即位、建中元年、憲宗爲皇太后。【九】西河郡守云云、史記、吳起傳に、吳起出衛郭門、與其母訣、腹背而盟曰、起不爲卿相、不復入衛、頃之其母死、起終不歸、後仕衛爲西河守。【一〇】穎谷封人、穎考叔をいふ、其の母を愛して施して莊公までも感動せしめて、其の母を愛するやうにした。左傳、隱公元年に見ゆ。

【題義】此の詩は、熙寧五年九月の作。朱壽昌が母を尋ねるために、官を棄てて、四方に行き、終に之を陝州に得、迎へて歸り養つたことを美めたのである。詩中に、此事今無古或聞と言つたのは、壽

昌を褒めて李定を貶したのである。李定は、母の喪に服しない。壽昌は、官を棄てて母を求めた。此の二人が朝を同うし、王安石は李定に左祖し、却て壽昌を忌む傾向があつたので、東坡は西河郡守誰復讎と言つた。其の意は、獨李定を刺るのみでなく、亦以て深く王安石を罪したのである。

【詩意】ああ君は、七歳の時分から、母子相知らないことが五十年、常に母を慕つて已まなかつた。一旦決然官を罷めて四方に母を尋ね、遂に廻り逢つたので、喜び極まつて涙が雨の如きも、尤もなことである。君の心を推すと、無位・無官から一躍して三公となるのも羨ましくない。又、神仙の術を得て、白日雲に乗り、青天に昇ることも、別に愛しない。老萊子が七十の老年になつて身に五色斑斕の衣を服し、嬰兒の戯を親の前に爲し、跌きて地に臥し兒啼を爲したといふのが君の満足する所であつたらう。母子相逢うて、龍を炙りものとし、玉を酒とし、白髮千萬壽。(仙人の壽を保つをいふ)ここに、長安の大尹錢明逸は、朝に上表して、朱某向來官尋母、今既得之馮翊矣、宜還舊秩、以勸激天下と。其の秋、朱壽昌は、太夫人に侍して都に入つたが、上は嘉賞し、特に召見して其の官を復し、其母を長安縣太君に封じたといふことである。金花詔書、錦もて囊を作り、白藤肩輿、簾は盛飾とは此の事を言ひ表はしたものである。人生の聚散には常がない。君の離合に感じて、我は酸辛する。(壽昌の事を敘するは、此に至つて擧る。以下、東坡の本意に入る)さて、王安石は李定を薦めて臺官とした。李定は母の喪に服しなかつたので、臺諫の人人に其の不孝用ふべからざるを論せられた。東坡も此時によつて李定を貶したのである。昔、漢の武帝は骨肉の親に厚かつた。母太后の微な

るとき生んだ異腹の姉が長陵小市に住んで居ると聞いて、親ら之を迎へた。又、同じく漢の霍去病の父仲孺は縣吏であつたが、平陽侯の侍者と私通して去病を生んだ。父子相聞しなかつたのを、去病が將軍となつて匈奴を撃つとき、平陽に至つて之を迎へた。仲孺は我子ながら、今は赫赫たる將軍である。之に逢ふことを思はなかつたであらう。隋の開皇の初、呂永吉といふものが、自分の姑は苦桃といふ名で、楊廣(隋の煬帝)の妻であると稱したから、勘驗して、之を追贈した。建中の天子徳宗も、母沈氏の所在を失ひ、使臣をして天下に周行せしめた。子の親に於ける至情は、高きも卑きも變りはない。然るに、西河郡守吳起が母歿するも、終に歸らなかつたことを今は讖らないのは遺憾である。(西河の郡守は、吳起を借りて、李定を指したのである)かかる世には、穎考叔のやうな純孝の人が自ら薦めて出るを羞ぢるであらう。朱壽昌は世と名を争ふことを欲しないから、河中を乞うて去るのである。

湯村開運鹽河中督役

湯村に運鹽河を開き雨中に督役す

居官不任事蕭散羨長卿

官に居て事に任せず、蕭散羨長卿を羨む。

胡不歸去來滯留愧淵明

胡ぞ歸らざる、滯留淵明に愧づ。

鹽事星火急誰能郵農耕

鹽事星火急なり、誰か能く農耕を郵まん。

薨薨曉鼓動萬指羅溝坑

薨薨曉鼓動き、萬指羅溝坑に羅る。

天雨助官政。汝然淋衣纓。

天雨官政を助け、汝然として衣纓に淋ぐ。

人如鴨與猪。投泥相濺驚。

人は鴨と猪との如く、泥に投じて相濺驚す。

下馬荒隄上。四顧但湖泓。

馬を下る荒隄の上、四顧但湖泓。

線路不容足。又與牛羊爭。

線路足を容れず、又牛羊と争ふ。

歸田雖賤辱。豈失泥中行。

田に歸る賤辱と雖も、豈泥中の行を失はんや。

寄語故山友。慎毋厭藜藿。

語を寄す故山の友、慎みて藜藿を厭ふことなかれ。

【字解】【一】湯村。九域志に、仁和縣有湯村其一也。咸寧縣安志に、河通湯縣山麓門鹽場、東坡嘗於此嘗役開河。【二】蕭散。蕭散といふに同じ、しづかひま、唐書、裴度傳に、治第東都、野服蕭散。司馬相如の賦に、意思蕭散、不復與外事相關。【三】星火急。李衛の陳情表に、急於星火。【四】藜藿。おほき藜。詩經に、倉斯羽藜藿兮。【五】湖坑。林寬が香雨の詩に、窮巷變湖坑。【六】汝然。禮記、檀弓篇に、孔子汝然流涕。【七】泥中行。詩經に、胡爲乎泥中。【八】藜藿。あかさのあつもの、藜子、藜子篇に、孔子窮於陳蔡之間、七日不食、藜藿不食云云。論は米粒がないこと。陶淵明が貧士の詩に、弊體不掩肘、藜藿當乏斷。

【題義】此詩も熙寧五年、十月の作である。故山の友は、藜藿を厭ひて仕官せんことを思ふことなかれと言ひて、朝廷の運鹽河を開くの不當であり、又、農事を妨げることとを諷諷す。紀昀いふ、天雨句抽滯、人如何太俚と。王文誥いふ、其文如經、其筆如史と。

【詩意】官に居て事に任じなく、意思蕭散と言つた司馬相如を羨ましく思ふ。(長卿は相如の字)胡ぞ

歸らないか、ぐづぐづと滯留して居るのは、歸去來の辭を作つて故園に歸つた陶淵明に愧ぢる。新法の一なる開運鹽事の監督は、星火よりも急である。(宋史の食貨志に據ると、熙寧五年以盧秉提舉兩浙鹽事、竈戶益困、惟杭越湖三州格新法不行、發運司劾奏虧課、皆賦治云云。誰か能く農耕を郵じものぞ。農事を妨げる事などは一向思はないで、どんどんと太鼓を打つて人民を召集し、之を驅つて鹽河の事に従はしめる。萬指が溝坑に羅る。其の中には天雨が汝然として流れ、衣や纓(冠系)に淋ぐ。人は鴨の如く、又、猪(豬の俗字)の如くに泥に投じて相濺驚する。此の四句は、下の四句と兩層に分つ。上四句は役をいひ、下四句は督役をいふ。皆雨中の實事である。余も亦、馬から下りて荒堤の上立つて四方を眺めると、一面に湖となり泓となつて、線路は足を容れることも出来ない。その上、また、牛羊と争ふのである。(王文誥いふ、一路敍雨中督役固妙矣、其下一轉入結、可稱絶倒と。)歸田は賤辱であるとしても、泥中に行いて耕すことは失はない。

【餘論】是時、盧秉は、鹽事開運河に提舉であつた。提舉は管理の義である。(宋代に提舉常平倉、提舉水利、提舉茶鹽等の官は、皆監督官である。)運河を開くに、人夫千餘人を役する。東坡は大雨中に、其の河を部役したのである。ただ般鹽は既に農事でなくて、農民を役する。秋田が未だ了ならぬのに、民を招くは、農事を妨げる。又、其の河中には往往湧沙があつて數里に達する。それで、東坡は、運河は開き得るも不便といふ。又、自ら泥雨勞苦を嘆き、司馬長卿が居官而不任事を羨み、又、陶淵明のやうに、早く官を棄てて歸り去らないのを妬むた。農事が未だ休まないで、人夫を役する千餘

人。故にいふ、鹽事星火急、誰能郵農耕と。又、百姓已に勞苦す、意はざるに、天雨が又、官政を助け、民を勞せしめる。かくて百姓も疲弊する。勞役する人の泥水中に在つて辛苦するは、鴨と猪とに異ならない。東坡自身も亦泥中に在つて、牛羊と路を争つて行くのである。もし、歸田せば、かかる苦勞はなからう。故にいふ、寄言故山友、慎勿厭藜藿と。

是日宿水陸寺寄北山清順僧二首

是の日本陸寺に宿して、北山の清順僧に寄する二首。

草没河堤雨暗村。

草河堤を没して雨村に暗く、

寺藏修竹不知門。

寺は修竹に藏れて門を知らず。

拾薪煮藥憐僧病。

薪を拾ひ藥を煮て僧病を憐み、

掃地焚香淨客魂。

地を掃ひ香を焚いて客魂を淨うす。

農事未休侵小雪。

農事未だ休せず小雪を侵し、

佛燈初上報黃昏。

佛燈初て上つて黃昏を報す。

年來漸識幽居味。

年來漸く識る幽居の味を、

思與高人對榻論。

高人と榻を對して論せんことを思ふ。

【字解】(一) 水陸寺 清湖橋に在り、今は廢す。臨安志に、自太平橋北前沙河至臨平上塘橋下有水陸院、東坡曾開湯饋運河、宿此。

(二) 清順 西湖の僧清順、字は顯然、清苦にして、佳句多し。嘗て詩を賦していふ、久服林下遊、頗識林下趣、從渠綠陰裏、不礙清風度、閑來石上眠、落葉不知數、一鳥忽飛來、啼破幽絕處と。王荆公湖上に遊んで之を受し、東坡も亦、興に

遊んで嗜和多し。【三】拾薪煮藥 後漢書、水宮傳に、爲諸生拾薪。温庭筠の詩に、煮藥石泉清。【四】掃地焚香 關忠輔に、草應物、性高潔、鮮食草、所在焚香掃地而坐。【五】對榻 草應物の詩に、對榻過清夜。

【題義】 此詩は熙寧五年十月の作。詩中に農事未休侵小雪の句があるのを見て、十月であることが知れる。鹽河の工事を雨中に督促し、夜、水陸寺に宿し、懷を北山の清順に寄せたのである。

【詩意】 草は河堤を没し、雨は一村を籠める。我が宿した水陸寺は、竹林に藏れて、門も知れない。薪を拾ひ、藥を煮て、寺僧の病を憐み、地を掃ひ、香を焚いて、我が旅魂を淨うした。農事は未だ休まず、小雪を侵して働いて居る。佛前に燈が照せられて、黃昏になつたことが分る。年來漸く幽谷の味が解つたから、高人(清順を指す)と榻(狭く長く低い牀)を對して高談したいと思ふ。(前六句は、東坡自ら道ひ、後の二句は清順に入る。)

長嫌鐘鼓聒湖山。

長も鐘鼓の湖山に聒しきを嫌ふ、

此境蕭條却自然。

此境蕭條として却て自然なり。爲し、

乞食遠村眞爲飽。

食を乞ひて村を遠り眞に飽くことを

無言對客本非禪。

言なくして客に對す本禪にあらず。

披榛覓路衝泥入。

榛を披いて路を覓め泥を衝いて入り、

洗足關門聽雨眠。

足を洗うて門を關し雨を聽いて眠る。

【字解】(一) 蕭條 深靜の貌、班固の燕然山の銘に、蕭條萬里、野無遺寇。(二) 自然 老子に、道法自然。(三) 乞食 晉陶淵明に乞食詩がある。(四) 披榛 抱朴子に、葛洪、貧無僮僕、蕭條頓決、披榛出門、排草入室。(五) 窮賈 唐書、賈島字浪仙、初爲浮

古今體詩 是日宿水陸寺寄北山清順僧二首

遙想後身窮買鳥。 夜寒應響作詩肩。

遙に想ふ後身の窮買鳥、
夜寒うして應に詩を作る肩を響かす。

鳥、名無木。韓退之に、空無本歸。范陽の詩がある。【二】響、作詩。肩、韓退之の詩、石鼎聯句の序に、彌明袖手煖而高吟。

【詩意】余は平生、鐘や太鼓の湖山に聴しいのを嫌つて居る。此境は深静で寂しいが、却て自然である。村を逸つて食を乞ふので、空腹を感じない。客に對して無言で居ても、禪を學んで居る譯でもない。貧しくて僮僕がないから、榛(雜木の茂れるもの)を披いて路を覚め(さがし求める意、竟は俗字)泥を衝いて入る。足を洗つて門を開きし、雨の音を聴いて眠る。(王文語いふ、題云是日、必當有。此二句、方是真境、即乞食無言一聯語中、有骨竝不平等也。)遙に想ふ、窮買鳥の後身ともいふべき北山の清順僧が、寒い夜、肩を響かして高吟して居られることを。

鹽官部役戲呈同事兼寄述古

鹽官部役戲れに同事に呈し、兼て述古に寄す

新月照水水欲冰。 夜霜穿屋衣生稜。 野廬半與牛羊共。 曉鼓却隨鴉鷓興。

新月水を照して水氷らんと欲し、
夜霜屋を穿ちて衣に稜を生ず。
野廬半は牛羊と共にし、
曉鼓却て鴉鷓に隨つて興く。

【字解】【一】鹽官、鹽官縣圖經にいふ、縣管六鄉、隋、開皇九年、置杭州鹽官縣、縣屬有鹽場十所。臨安志に、漢志但有海鹽縣、晉宋志乃有海鹽、鹽官兩縣。鹽官の置は、當に吳の時に在るべし。吳王濞、海

夜來履破裘穿縫。 紅頰曲眉應入夢。 千夫在野口如林。 豈不懷歸畏嘲弄。

夜來履破れ裘縫を穿つ、
紅頰曲眉應に夢に入るべし。
千夫野に在り口は林の如し、
豈歸るを懷はざらんや嘲弄を畏る。

我州賢將知人勞。 已釀白酒買豚羔。 耐寒努力歸不遠。 兩脚凍硬須公軟。

我州の賢將は人の勞するを知る、
已に白酒を釀し豚羔を買ふ。
寒に耐て努力せよ歸ること遠からず、
兩脚凍硬せば須らく公軟かにすべし。

【二】賈將、漢書、韓信傳に、項王不能任屬賈將。同じく嚴延年の註に、謂郡守爲郡將者以其兼統武事也。杭守は節鎮を帯び、所部六州、京口に至つて止む。【三】白酒、禮記に、酒清白とあるは、酒に清酒と白酒とあるをいふ。梁武帝の詩に、玉盤著朱李、金杯盛白酒。【四】兩脚凍硬、唐、楊國忠の傳に、帝歲幸華清宮、諸楊湯沐館在宮東垣、帝臨幸、必備五家、實資不貲計、出有賜曰錢路、返有勞曰軟脚。大唐釋教に、子儀自同州歸、代宗問大臣、就宅作軟脚云云。

【題義】此詩は、熙寧五年十月、東坡が部役されて、鹽官に至つたとき、戯れに同事のものに呈し、兼て陳襄(字は述古、學者稱して古靈先生といふこと、前に見ゆ)に寄せたのである。

【詩意】新月が水を照して水が氷らうとする。夜霜が屋を穿つて衣も堅くなる。(夜色の寒烈をいふ)。

田舎の家に居て半は牛や羊と共にし、曉を告げる太鼓を聞くも、却て鴉や鶻に随つて興きる。(王文詩) 詰いふ、二句極練的、是開河官語) 夜來、履は破れ、裘も縫目に穴があく。紅瓶曲眉の人も、應に夢に入るであらう。(王文詰いふ、接得挺拔) 千夫野に在りて口は林の如くである。それで、故郷に歸りたいと懐はないでもないが、此等の人の嘲弄を畏れるから、少しも口には出さない。我州の賢明な太守は、人の苦勞するを察して同情がある。既に白酒を醸して、豚や羔(小羊)を買つて振舞つてくれた。努力して寒氣に耐へよ。最早、故郷に歸ることも遠くはあるまい。そして兩脚が凍硬したならば、公は須らく軟にするであらう。(紀昀いふ、題有戲字、不嫌滑稽、然不應如此之鄙。)

鹽官絕句 四首

南寺千佛閣

古邑居民半海濤、古邑居民半は海濤、師來構築便能高、師來つて構築して便ち能く高し。千金用盡身無事、千金用ひ盡して身事なく、坐看香煙繞白毫、坐して香煙の白毫を繞るを看る。

嘗於靈山會上、爲諸大衆、說二十八品、故眉間白毫相、光照三千大千世界。

【字解】千佛閣 臨安志に、慶善寺在鹽官縣西南二百步、天監七年、土人安靈度、因井中有光三日不止、捨宅爲寺、地濱海、遂以觀海無名、祥符元年改今額、有千佛閣。千金用盡 李太白の詩に、千金散盡復來。白毫佛の額にある毛、光を發して無量の國土を照らすといふ。法華經に、世

【題義】四首ともに熙寧五年十月の作、慶善寺千佛閣に登つたときの感想である。紀昀いふ、四首皆不脱宋調一と。

【詩意】古邑の居民、半は海濤に在つたが、師(僧居則を指す)來つて構築して、居處が高くなつたのである。千金も用ひ盡して身も軽く、安坐して香煙の白毫を繞つて居るのみである。

北寺悟空禪師塔

已將世界等微塵、已に世界を將つて微塵に等うす、空裏浮花夢裏身、空裏の浮花夢裏の身。豈爲龍顏更分別、豈龍顏の爲に更に分別せんや、只應天眼識天人、只應に天眼天人を識るべし。

【字解】悟空禪師 釋齊安、姓李氏、悟空と號す、唐宣宗朝、安國寺悟空禪師、碑在鹽官縣。東坡の自註に、名齊安、宣宗徵時、師知其非凡人。塔 悟空塔、鹽官縣に、安國寺在縣西北、寺中有悟空塔、塔前有古柏存焉。微塵 法華經に、三千大千世界徠爲微塵。空裏浮花 華嚴經に、如目擊人見空中花。圓覺經に、譬彼病目見空中花。龍顏 前漢書、高祖爲人隆準而龍顏。天眼 五眼の一、天人が禪定を修して得たる眼。五眼とは、肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼をいふ。天人 三國志に、曹植曰、眞天人也。

【詩意】悟空禪師は已に世界を將つて微塵に等しうして居る。空裏の浮花の如く、又夢裏の此身は、龍顏の爲に更に分別しようぞ。只應に天眼の通力(神通力)によつて、天人を識るべきである。

塔前古榿

塔前の古榿

當年雙榿是雙童。

當年の雙榿は是れ雙童、

相對無言老更恭。

相對して言なく老いて更に恭し。

庭雪到腰埋不死。

庭雪腰に到つて埋むれども死せず、

如今化作兩蒼龍。

如今化して兩蒼龍と作れり。

【詩意】鹽官の安國寺にある悟空禪師の塔前には、古榿がある。當年の雙榿は是れ雙童である。傳燈錄に據ると、神光といふ僧、達摩大士の少林に住すと聞いて乃ち往く。晨夕參承、天大に雪ふるも、光は堅立して動かなくかつたが、積雪膝を過ぎたといふことである。此詩は其の意を借り用ゐたのである。只今は化して兩蒼龍となつた。(紀昀いふ、此竟無起無收、作一絕句、非莊非戲、非幻非真、却不爲佳、第二句尤腐と。)

六一〇 塔前古榿 石林題

【字解】(一) 塔前古榿 榿、佛堂前之榿也。亦唐物、徽宗取之、榿大不可勝。榿、乃以舟泛海、出彭州、以舟行一日、張帆風猛、榿枝與帆抵岸、不可制、舟與人皆沒。此事宣和年間、移したのは朱勳といふ人。

僧爽白雞

僧爽の白雞

斷尾雄雞本畏烹。

斷尾の雄雞本烹らるるを畏る、

年來聽法伴修行。

年來法を聽いて修行に伴ふ。

還須却置蓮花漏。

還須らく却て蓮花漏を置くべし、

老怯風霜恐不鳴。

老いて風霜を怯るれば恐くは鳴かじ。

【字解】(一) 白雞 東坡の白註に、養二十餘年、嘗在坐側、雞居、斷尾居いふ、學道之士居山、宜養白大、白雞、可以辟邪。梅鼎吉時に、譚延明、白雞、觀道歌、黃龍、(二) 斷尾 左傳、昭公二十二年に、

【詩意】昔、寶孟といふもの、或日、郊邊へ適きたるとき、雄雞が自ら其尾を斷ち切るを見、何故ぞと侍者に問ふ。侍者は答へて、是ぞ雄雞が犠牲となりて殺されるのを厭ふが爲に候といつたさうである。斷尾の雄雞は、本、烹られるのを畏れる。道を學ぶ士は、白雞を養つて邪を避ける故に、白雞は年來、法を聽いて修行に伴ふのである。併し還須らく却て蓮花漏を置くべきである。なせならば、老いて風霜を怯るれば恐らくは鳴かないであらう。(紀昀いふ、結寓意と。王文誥いふ、此用山中畜雞應更而鳴事。)

六和寺沖師開山溪爲水軒

六和寺の沖師山溪を開して水軒と爲す

欲放清溪自在流。

清溪を放て自在に流めんと欲するも、

忍教冰雪落沙洲。

冰雪をして沙洲に落しむるに忍びんや。

出山定被江潮澆。

山を出づれば定めて江潮に澆されん、

能爲山僧更少留。

能く山僧の爲に更に少く留まれ。

【字解】(一) 六和寺 六和塔は浙江杭州南高峰の下に在る。其地には、舊、六和寺があつたから、六和塔といふ。太平興國中、寺名を開化寺と改めたが、塔の名は今に改まらな

ことである。【一】自在流 杜子美の詩に、江流大自在。【二】渡 韓偓之句に、勿使泥塵渡。
 【題義】 此時も熙寧五年十月の作。山溪を開して水軒となすは、在山水清の意から出たのである。
 【詩意】 清い谷間の水を放つて自在に流れしめやうとするも、この潔い氷雪をして沙洲に落ちしめるに忍びない。山を出づれば定めて江湖に流されやう。(泥とは泥などの物に著く意から起る) 能く山僧の爲に更に少く留まれ。(王文誥いふ、二句、従我如此水、千山底、自爲翻按、可見其游行自在也。)

冬至日獨遊吉祥寺 冬至の日、獨吉祥寺に遊ぶ

井底微陽回未回。井底の微陽回るや未だ回らずや、

蕭蕭寒雨溼枯荻。蕭蕭たる寒雨枯荻を溼す。

何人更似蘇夫子。何人か更に蘇夫子に似たる、

不是花時肯獨來。是れ花時ならざるも肯て獨來る。

有一月、微陽動。【一】枯荻 枯れた草の根、荻書、讀樂志に、青陽開動、根荻以絶。

【題義】 熙寧五年十一月の冬至に、獨で吉祥寺に遊んだ時の作である。吉祥寺には牡丹があるから、花時ならざるも言つたのである。紀昀いふ、率筆而極有風致と。

【詩意】 冬至は、一陽來復、陰曆十月の極陰が、十一月に至つて始めて來復する謂である。其の冬至となつて、井底の微陽が回るや、未だ回らずや、蕭蕭として(物寂しく)寒雨が枯れた草の根を溼は

す。何人か更に此の蘇夫子に似たるものぞ。即ち花の時節でもないのに、花の名所に來るのである。
 【餘論】 吉祥寺は牡丹の名所。同じく東坡が吉祥寺の花の時に、仙衣不用剪刀裁、國色初離三卯酒、來太守問花花有語、爲君零落爲君開。又、東坡が杭州に在つて、陳述古に約し、同じく吉祥寺の牡丹を賞しやうとするとき、花將に落ちんとして、述古に至らず。東坡は詩を作つて、今歲東風巧剪裁、含情只待使君來、對花無信花應恨、直恐明年便不開といふと、述古之を開いて、明日即ち來つたといふことである。

後十餘日復至 後十餘日復至る

東君意淺著寒梅。東君意淺く寒梅を著く、

千朵深紅未暇栽。千朵深紅未だ栽うるに暇あらず。

安得道人殷七七。安んぞ道人殷七七を得、

不論時節把花開。時節を論せず花を把つて開かしめん。

七七に謂つて曰く、鶴林の花は、天下の奇絶なり。嘗て聞く能く非時の花を開かしむと、今、重九將に近かんとす。能く此花を開いて此日に副はんや否や。七七之を請し、乃ち前二日に鶴林に往いて宿す。中夜に女子來り、七七に謂つて曰く、妾は上元に命ぜられ、此花を司りて人間に在り、此花、今道者と之を開かしめん。然れども久しきにあらすして闍苑に歸せんと。女子悽然として見えす、九日にして爛漫たること春の如し。其の後、兵火、寺を焚き、樹は根株を失ふといふ。

古今體詩 冬至日獨遊吉祥寺 後十餘日復至

【字解】 【一】東君 屈原の九歌に、東君儻あり。東王父とも、東王公ともいふ。青陽の氣、萬物の先といふ意より出づ。【二】殷七七 字は文祥、周寶蓀之を襲る。移つて浙西を鎮するに及んで、七七忽ち到る。

鶴林寺の杜鵑花高さ丈餘、實、一日

【題義】冬至の後、十餘日を経て、東坡は復、吉祥寺に至り遊ぶ。紀昀いふ、此却無味と。

【詩意】東君（春をいふ）は心が浅くして、ただ意を梅花に著けるのみである。従つて千朶（朶は花の枝）の深紅を未だ裁うるに暇がない。（千朶深紅は、吉祥寺の牡丹をいふ）どうか道人殿七七を得て、時節に拘はらず、花を把つて開かしためたいものである。（言ひ換へれば、一陽が初めて動いて、東君の消息は、纔に寒梅に到つた。未だ千朶の牡丹を培出するに暇がないから、道人の術で牡丹を開かしたいといふのである。）

戲贈

戲れに贈る

惆悵沙河十里春。惆悵沙河十里の春、

一番花老一番新。一番花老いて一番新なり。

小橋依舊斜陽裏。小橋舊に依る斜陽の裏、

不見樓中垂手人。見ず樓中手を垂るるの人を。

【題義】戲れに人に贈つた詩であるが、作つた時が分らない。王文誥いふ、舊在「前卷望海樓晚景、沙河燈火照山紅句下、與題不合、今改載於此」と。又、紀昀は、此詩を評して、晚唐窠臼といつた。

【字解】【惆悵】痛く思む、楚辭、九辯に、惆悵而自悲。白居易の詩に、惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黃昏。【沙河】西湖遊覽志に、外沙河自永昌門北、繞城、前沙河在菜市門外、後沙河在長山門外。【一番】一度の意、陸龜蒙の詩に

窠臼といふのは、常を踏み故を襲ふの謂である。もと鳥の巢のことで、形が臼に似たるより窠臼といふ。

【詩意】沙河十里の春色は人を惱まして痛み怨ましめる。一度は花老い、一度は新である。小橋もとの儘に、斜陽（日暮）の中にあるが、樓中手を垂れる舞人を見ない。

和人求筆迹

人の筆迹を求むるに和す

麥光鋪几淨無瑕。麥光几に鋪いて淨うして瑕なし、

入夜青燈照眼花。夜に入つて青燈眼花を照す。

從此刻藤眞可弔。此より刻藤眞に弔すべし、

半紆春蚓縮秋蛇。半は春蚓を紆ひ秋蛇を縮ぬ。

【字解】【麥光】紙の名、南中竹紙の號。今、成都では麻の屑で、纏うて之を爲る。一統志に、徽州所獻麻紙山出紙、有麥光、白滑、水裏、凝霜之名。【青燈】草庵物の時に、坐使青燈曉、還傷夏衣薄。【眼花】目のかすみ意、杜甫の

【題義】人が詩を寄せて筆迹を求められたから、之に和したのである。作つた時は分らない。末の二句は、眼花の二字より生出したのである。

【詩意】紙は案に鋪いて、淨うして瑕がない。夜に入つて、燈の青い光は、眼花を照らして居る。かくて筆を染めると刻藤の紙こそ眞に憐むべきである。半は春の蚓のやうに、行く時は體を引ききて而る

後に伸びるやうな字が書かれ、又、秋の蛇のやうにうねうねして匍匐する形も出来る。(昔、唐の太宗が蕭子雲の書を論じて、行行若紫蠶、字字如縮秋蛇と言つたさうだが、これは、骨力の無いことを譏つたのである。紆は紫と同じく、まとふ意。縮はつかねまとふ意である。)

將之湖州戲贈莘老

將に湖州に之かんとし、戯れに莘老に贈る

餘杭自是山水窟

餘杭は自ら是れ山水の窟

仄聞吳興更清絕

仄に聞く吳興は更に清絶と

湖中橘林新著霜

湖中の橘林新に霜を著け、

溪上茗花正浮雪

溪上の茗花正に雪を浮ぶ

願渚茶芽白於齒

願渚の茶芽は齒よりも白く、

梅溪木瓜紅勝頰

梅溪の木瓜は紅頰に勝れり

吳兒膾縷薄欲飛

吳兒の膾縷薄うして飛ばんと欲す、

未去先說饒涎垂

未だ去らざるに先づ説けば饒涎垂る

亦知謝公到郡久

亦知る謝公郡に到ることの久しきを、

應怪杜牧尋春遲

應に怪むべし杜牧春を尋ぬるの遅きを、

【字解】(一)餘杭 縣の名、明清時代には浙江杭州府に屬したが、今は浙江錢塘道に屬す。(二)吳興 今の浙江、吳興縣。(三)清絶 幽雲吳、見書、實自清絶。(四)湖中橘林 石林遊藝錄に、吳中橘、惟東西二山最盛吳。吳興志に、橘出湖底、宋時、湖底山屬吳興。(五)願渚 元和郡縣志に、願渚山、貞元以後、每歲以紫筍茶進奉。(六)梅溪 吳興誌に、梅溪一名東海堰、在烏程縣西南六十里。(七)木瓜 和名サケ、花は紅白の二種ある。願渚泉上に木瓜堂あり、其の庭除に木

鬢絲只可對禪榻

鬢絲只可對禪榻に對するに、

湖亭不用張水嬉

湖亭用ひず水嬉を張るを

瓜を列植して、泉を引く。(八)紅勝頰 杜子美の詩に、色紅梨臉頰。土人瓜を取り、其中を砂中に埋め、

紙を以て花を飾して上に貼し、流水を以て之に灌ぎ、日に曬して乃ち紅なり。(九)吳兒膾縷薄欲飛 杜子美の詩に、刀鳴膾縷飛。吳興志に、唐、吳昭信、吳興人、善造鎗、時人嘲之曰、鎗若過吳、鏃如花鋪。(一〇)願渚 美味を見て流す渚。陸游の詩、龜車未用願渚遊。皮日休の詩に、紫筍茶進奉。(一一)謝公到郡久 晉の謝安傳に、嘗爲吳興太守。願渚公が願渚公塔碑陰に、太保謝公嘗、咸和中、以吳興山水清遠、求與此郡。(一二)尋春遲 杜牧が宣城の幕に在であつた時、湖州に寄贈多しと聞き、往いて之に遊ぶ。刺史崔元克は水嬉を張り、州人をして學く觀しめ、杜牧をして之を聞せしむ。因つて一女姝を見、之に期して曰く、吾十年ならずして來つて此郡を守らん。來らずんば遠く所に從かすと。牧、湖州に守たるに及び、女已に人に從ふこと三年。牧因つて詩を賦して曰く、自是尋春去較遲、不須惆悵強勞時。(一三)鬢絲云云 杜牧が願渚禪院に詩に、紅船一棹百分空、十歲青春不負公、今日鬢絲禪榻時、茶經願渚花風。(一四)張水嬉 吳興掌故に、清明日、楫影舟於溪上、爲觀渡之戲、謂宜田園。

【題義】孫覺(字は莘老)が湖州に知となつた時、松江隄が常に民患をなすといふので、之を改築することになつた。時の漕使は、東坡に檄して孫莘老の設計を見にやつたから、東坡は湖州に至つた。此詩は其時の作である。

【詩意】餘杭の地は、自ら是れ山水の窟である。聞けば吳興の地は更に清絶であるとか。湖中の橘林は、新に霜を著け、溪上の茗花(あしの花)は、正に雪を浮べて居る。(茗溪は一名を茗水ともいふ。東坡、西茗の二源は、吳興城中に至り、兩溪が相合して一となつて太湖に入る。岸を夾んで茗花が多く、秋時、水上に飄散すること、恰も飛雪のやうであるといふ)願渚には多く茶を産して歲貢に充て

る。又、梅溪の木瓜は色が好くて美人の頬に勝つて居る。吳兒の造つた鱸膾は、薄くして飛散せんとする。未だ行かない先きに涎が出る。晉の謝安が此の郡に至ることを求めたのも尤ものことと思ふ。杜牧が春を尋ねることの遅いのは、應に怪しむべきである。鬢絲茶烟の感といふことがある。それは少年の頃に、嬉遊に耽つたものが、老いて淡泊な生活に餘生を送るをいふ。鬢絲は（老人を指す）禪榻（禪牀と同じ、坐禪を組む腰掛）に對するのが相應しい。奇麗を慕ひて、湖亭に水嬉を張るなどのことは、全く無用である。

鴉種麥行

鴉種麥行

霜林老鴉閒無用。
哇東拾麥哇西種。
哇西種得青猗猗。
哇東已作牛尾稀。
明年麥熟芒攢槩。
農夫未食鴉先啄。
徐行俯仰若自矜。

霜林老鴉閒にして用なし、
哇東麥を拾ひ哇西に種う。
哇西種を得て青うして猗猗、
哇東已に牛尾の稀なるを作す。
明年麥熟して芒は槩を攢む、
農夫未だ食はずして鴉先づ啄む。
徐行俯仰自ら矜るが若し、

【字解】【猗猗】美しく盛なり、詩の霜風に、綠竹猗猗。【攢槩】ほこきをあつめる。攢錐と同じ、韻延年の文に、攢錐成林。【鼓翅跳踉】鼓翅は羽ばたきする、鼓翼、鼓輪といふに同じ、跳踉は莊子、秋水篇に、跳踉乎井幹之上。又、晉書、諸葛長民傳に、眼中驚起跳踉、如與人相打。跳踉といふに同じ。【歷山】山東歷城縣の南に在る。一名、舜耕山。山の上に舜

鼓翅跳踉上牛角。

鼓翅跳踉牛角に上る。

憶昔舜耕歷山鳥

憶ふ昔舜歴山に耕し鳥爲に耘る、

爲耘

如今老鴉種麥更

如今老鴉麥を種えて更に辛勤。

辛勤

農夫羅拜鴉飛起

農夫は羅拜し鴉は飛起す、

勸農使者來行水

農を勸むる使者來りて水を行る。

唐は開元十二年に、勸農使を置いて、郡邑を巡察し、戶口を安撫す。景徳三年には、昭して諸道の轉運使・副使・同封府知府及び諸道の知州・刺史・少卿監以上は、並に勸農使を兼ね。其餘の知州・知軍・通判等、並に勸農事を兼れしむ。天禧四年に、諸路の提點判官を改めて、勸農使副となす。

【題義】此詩も、熙寧五年十二月、湖州へ赴く道中の作である。王文誥いふ、起四句純乎古意、有此一起、則後幅觸手都成奇語一と。

【詩意】霜林の老鴉は、閒で用がないと見え、哇の東で麥を拾つて哇の西に之を種う。哇の西に種ゑ得て青うして美しい。そして哇の東は既に牛尾のやうに稀になつた。(牛毛といへば多きに喩ふ、北史に學者如三牛毛、成者如三麟角。杜甫の詩に、秦時任三商鞅、法令如三牛毛) 明る年になると、芒麥芒、

麥實のさきの針の如き毛をいふは恰も粟を攪めたやうである。農夫が未だ食はないうちに、鴉が先づ啄んでしまふ。徐行したり、俯仰したりして自ら矜るやうである。羽撃き跳ね廻つて、牛角にさへ上る。憶ふ昔、舜帝が山東の歷山に耕したとき、象は之が爲に耕し、鳥は之が爲に耘つたといふことである。今は老鴉、麥を種ゑて更に辛き勤めをする。農夫が羅拜すると、鴉は飛び起つ。そして農を勤める使者が來つて、耕水を行つて視察をする。

送張軒民寺丞赴省試

張軒民寺丞省試に赴くを送る

龍飛甲子盡豪英

龍飛の甲子盡く豪英、

嘗喜吾猶及老成

嘗て喜ぶ吾猶ほ老成に及ぶを。

人競春蘭笑秋菊

人は春蘭を競ひて秋菊を笑ふ、

天教明月伴長庚

天は明月をして長庚に伴はしむ。

傳家各自聞詩禮

家に傳へて各自詩禮を聞く、

與子相逢亦弟兄

子と相逢ふ亦弟兄。

洗眼上林看躍馬

眼を上林に洗うて躍馬を見る、

賀詩先到古宣城

賀詩先づ到る古宣城。

【字解】寺丞、職官分給に、太常・宗正・光祿・衛尉・太僕・鴻臚・司農・大理・太府、皆有之。

【二】省試、貢試といふに同じ。唐代、州縣で行つた官吏登用試験、唐書選舉志に、敦州縣、學生八品子、若庶人、入四門學爲俊士、即諸州貢舉省試。龍飛甲子、天德は、仁宗即位し、改元した年號であるから、龍飛甲子と言つたのである。東京賦に、龍飛白水。白水は南陽の白水

【三】豪英、李太白の詩に、談笑盡豪英。漢の實錄傳に、天子所與共六尺輿者、皆天下豪英也。春蘭笑秋菊、楚辭、九歌に、春蘭兮秋鞠。烟花錄に、煬帝曰、春蘭秋菊、各一時之芳。陳崇業いふ、蘭菊異芳、胡有同慶者。長庚、太白をいふ、韓退之の詩に、東方未明大星沒、獨有太白對殘月。上林、漢の苑名、以て新先聖、並する所の京師は、瓊林苑の如きない。史記に、蔡澤いふ、躍馬食肉富貴四十三年足矣。古宣城、今の太平府。太平寰宇記に、太平州、本宣州、當宣縣。

【題義】熙寧五年十一月、張軒民が貢舉省試に赴くを送つた詩である。宋の陸游が老學庵筆記に、自建炎軍興、蜀士以險遠、許就制置司、類司與省試同、間有願赴省試者、亦聽とある。

【詩意】仁宗の即位された天聖元年是、人材が輩出して、貢試に應ずるもの、盡く豪英であつた。我は幸に當時の老成先生を見るに及ぶことが出来た。世人は春の蘭を競ひ、秋の菊を笑つて居る。併し、天は明月をして長庚に伴はしめて居る。さて、各自は家に傳へた詩禮の教へを聞いて居る。今、子と相逢ふは、亦、弟兄である。眼を洗つて、漢の上林苑にも比すべき京師の地、新先聖が宴する處では、馬を躍らして得意なる人達を見る。それで、賀詩は先づ古宣城(今の太平府)に到るのである。(東坡の自註に、伯父與太平州張侍讀同年、此其子。)

和致仕張郎中春晝

致仕張郎中の春晝に和す

投絨歸來萬事輕

絨を投じ歸り來つて萬事輕し、

消磨未盡祗風情

消磨して未だ盡きざるは祗風情。

【字解】致仕、官を君に納め還す義、公羊傳、宣公元年に、温而致仕。唐書、東魯言傳に、德言請致仕、太宗不許。張郎中

舊因[○]蕞菜[○]求[○]長假[○]。
 新爲[○]楊枝[○]作[○]短行[○]。
 不禱[○]自安[○]緣[○]壽骨[○]。
 深藏[○]難[○]沒[○]是[○]詩名[○]。
 淺斟[○]杯酒[○]紅[○]生[○]頰[○]。
 細琢[○]歌詞[○]穩[○]稱[○]聲[○]。
 蝸[○]殼[○]卜[○]居[○]心[○]自[○]放[○]。
 蠅[○]頭[○]寫[○]字[○]眼[○]能[○]明[○]。
 盛衰[○]閱[○]過[○]君[○]應[○]笑[○]。
 龍[○]辱[○]年[○]來[○]我[○]亦[○]平[○]。
 跪[○]履[○]數[○]從[○]圯[○]下[○]老[○]。
 逸[○]書[○]閒[○]問[○]濟[○]南[○]生[○]。
 東[○]風[○]屈[○]指[○]無[○]多[○]日[○]。
 只[○]恐[○]先[○]春[○]鷓[○]鴒[○]鳴[○]。

蕞菜、字は子野、吳興の人、仕へて都官郎中に至る。晩年、漁釣自ら適す。【一】投杖、杖は杖屋の杖で、印の號。潘安仁の秋興賦に且數枉以歸來兮、危投杖以高風。【二】消靡、歐陽修の豐樂亭記に、剗削消靡。【三】風情、白樂天の詩に、秋吟殘春招酒伴、客中誰最有風情。【四】因蕞菜、晉書、裴綸傳に、因秋風起、思吳中莖菜、專與鱸魚膾。曰、人生貴得適意、何爲羈宦數千里、以要名爵乎、遂命駕歸。【五】長假、晉書、段灼傳に、取莖假還鄉里。【六】蕞菜、楊枝、白居易の妾美素は善く飲ひ、小蠻は善く舞ふ。嘗て詩あり、櫻桃寒素口、楊柳小蠻腰。白既に年高邁にして、小蠻は方に豐麗なり。因りて楊柳詞を爲りて、以て意を託す。【七】短行、樂府に、長短歌行あり。【八】

蝸殻卜居、昔、蝸の先も楊布も、故に小廬を作る。形は蝸牛殻の如し、故に蝸牛廬といふ。古今註に、蝸牛、陸蠹也、熱則自蝸於葉下、野人結圓舍、形如蝸牛之殼、故曰蝸舍。【一】蠅頭寫字、南史に、齊、新陽王鈞、嘗手自細書五經、置於巾箱、以備遺忘、賀劼曰、殿下自有墳索、復何煩蠅頭細書、別錄巾箱中。【二】龍辱、龍榮恥辱と號す、老子に、龍辱若驚。范仲淹、岳陽樓記に、龍辱若驚。【三】龍辱、裴良嘗遊下邳、圯上有二老父、至良所、直置其履圯下、顧謂良曰、孺子下取履、良愕然欲取之、爲其老、強忍下取履、因跪進、父以足受之、笑而去、里所、復還曰、孺子可教矣。【四】濟南生、漢書、翟林傳に、伏生濟南人、故爲秦博士、學文時、求能治尙書者、天下亡有、聞伏生治之、欲召、生年九十餘、老不能行、詔太常、使掌故往受之。秦時禁書、伏生壁藏之。【五】逸書、離騷經に、恐鷓鴣之先鳴兮、使百草爲之不芳。

【題義】此詩は張郎中が春晝の舊作に和したのである。詩中に、東風屈指無多日、の句があるのを見ると、當に湖州に在つた時の作であるやうに思はれる。紀昀いふ、七言長律最難、此固不失三圓穩と。又、唐宋詩醇の評にも、集中七言長律甚少、此體在唐如杜、白諸公、亦不多見、以其傷氣也、是作、格度渾成、音調諧美、見才大無所不可也とある。

【詩意】官職を辭して故山に歸れば、萬事身輕になつた思がする。ただ消して無くすことの出来ないものは、風情(面白いおもむき)である。昔、晉の張翰は蕞菜の羹、鱸魚の膾を味はうとし、官を辭して歸郷したが、張郎中も蕞菜に因つて長い休暇を求め、風流自ら娛みて、楊柳詞を爲り、長短歌行を作る。別に禱らないけれども、平かに安らかであるのは、健康の賜である。又、深く藏して居るけれども、没し難いのは是れ詩名である。淺酌微醉、紅は頰に發し、細に歌詞を口吟すると、穩にして聲に稱ふ。(細琢歌詞とは、張先が喜んで小詞を爲るをいふ)小さな廬舎を造つて、心自ら放に、蝸

頭のやうな細い文字を書いても、眼は能く明瞭である。それで古今の盛衰を閲し過して、君は應に笑ふのであらう。世の榮辱には、我も亦、年來平かである。昔、漢の張良は、下邳に遊んだ時、圯上の老人に従ひ、聽いて其の履を取つて、兵書を授かつたが、我も亦、逸書を間に濟南の沈生に問ふ。東風、指を屈すれば、最早、多日もない。只恐れるのは、春に先つて鷓鴣（鴉）の鳴くことである。

【餘論】胡安定の言行錄に、慶曆六年、郡守宴三老於南園、其一爲三衛尉丞張維。張公諱維、吳興の人で、吟咏を以て自ら娛んで出で仕へなかつた。其の子尙書都官先も亦致仕家居し、公平生愛した所の詩十首を取つて之を縑素に寫し、十詠圖と號した。張維十詠詩中、灘頭斜日覺鷓鴣（鷓）隊、枕上西風鼓角聲の如き、皆佳句である。

再用前韻寄莘老 再び前韻を用ひて莘老に寄す

君不見夷甫開三窟 君見すや夷甫三窟を開くを、
 不如長康號癡絕 如かず長康癡絶と號するに。
 癡人自得終天年 癡人は自得して天年を終ふるも、
 智士死智罪莫雪 智士は智に死して罪雪ぐ莫し。

【字解】【一】夷甫開三窟。晉書に、王衍字夷甫、居華陽、不爲窟。爲窟、而思自全之計、乃以弟澄爲荆州、族弟敦爲青州、謂曰、荆州有江漢之固、青州有負海之險、卿二人在外而吾留此、足以爲三窟矣、讀者歸之。【二】

困窮誰要卿料理 困窮誰か要す卿の料理を、
 舉頭看山笏拄頰 頭を擧げて山を看笏頰を拄ふ。
 野鳧翅重自不飛 野鳧翅重くして自ら飛ばず、
 黃鶴何事兩翼垂 黃鶴何事ぞ兩翼垂る。
 泥中相從豈得久 泥中相從ふ豈久しきを得ん、
 今我不往行恐遲 今我往かず行く恐くは遅からん。
 江夏無雙應未去 江夏無雙應に未だ去らざるべし、
 恨無文字相娛嬉 恨らくは文字の相娛嬉するなきを。

温晉云、愷之體中、雖動各半、合而論之、正得平耳。故に俗に傳ふ、愷之に三窟あり、才稱、癡絶、癡絶と。【一】其、後漢書、段熲傳に、熲、百年之遺負、以忠勝之亡魂。【二】料理、事なほかり治める、晉書、王愷之、爲桓神參軍、神嘗謂愷之曰、卿在府日久、比當相料理、愷之初不爾答、直高視以手版拄頰云、西山朝來致有爽氣耳。【三】笏拄頰、手版を以て頰を拄へる。【四】江夏無雙、後漢書に、黃香傳學、文字相娛嬉、愷退之の時に、文章自

【題義】此詩は、熙寧五年十一月、將に湖州に往かうとする時、孫莘老に寄せたのである。（東坡の湖州に至つたのは、十二月であつた。）紀昀いふ、語太憤激と。

【詩意】君見すや晉の王衍（字は夷甫）が少しも國家を念はないで、自全の計ばかりを思つたことを。弟澄を荆州に、族弟敦を青州に置き、以て三窟（岩屋）となすに足ると謂つたさうである。夷甫の此の態度は、願愷之（字は長康）の癡絶と稱するに及ばない。なせといふに、癡人は自得して天年を終

へるも、智士は智に死して、其の罪を雪ぐことが出来なからである。困窮の此際に、誰か卿の料理を要するぞ。頭を擧げ笏にて頰杖をつき、青山を看、朝來、爽氣ありと言つた。野鳧は翅が重いので自分で飛べない。黄鶴は何事ぞ兩翼が垂れる。(野鳧は自ら喻へ、黄鶴は幸老を指していふ。)泥中相従ふのでは、久しくは堪へない。(泥中は泥淖の中といふ意で、地名といふ説は非)今、我が往かなければ、行くことは、恐くは遅くなるであらう。黄庭堅は幸老の婿で、文を能くする。未だ去らないであらうが、恨らくは文字の相嫌婚する人がないのを。(黄山谷後集にいふ、庭堅初室曰蘭溪縣君孫氏、故龍圖閣直學士孫公覺幸老之女、庭堅年十七、從舅氏李公擇於淮南、孫公憐甚少、以蘭溪歸之。

畫魚歌

畫魚の歌

天寒水落魚在泥、
短鈎畫水如耕犁。
渚蒲披折藻荇亂、
此意豈復遺鯁鯢。
偶然信手皆虛擊、
本不辭勞幾萬一。

天寒く水落ちて魚泥に在り、
短鈎水を畫して耕犁の如し。
渚蒲披折して藻荇亂る、
此意豈亦鯁鯢を遺さんや。
偶然手に信すれば皆虚擊、
本勞を辭せず萬一を幾ふ。

【字解】(一)畫魚 畫は則に同じ、鈎を以て魚を畫す。今、三尖水鳥に往往之あり。樂城集の自註に、吳人以三長鈎一加三杖頭、以杖畫水取魚、謂之畫魚。(二)渚蒲 杜子美の詩に、渚蒲芽白水蒼青。又いふ、渚蒲隨地有。(三)鯁鯢 鯁は鯢と同じ、鯢に二あり、鯁鯢の鯁、魚子の鯁是なり。こゝは魚子にいふ。(四)幾萬一 後漢書、劉玄德に、

一魚中刃百魚驚、
蝦蟹奔忙誤跳擲。
漁人養魚如養雛、
插竿貫笠驚鷓鴣。
豈知白艇鬧如雨、
攪水覓魚嗟已疎。

一魚刃に中れば百魚驚き、
蝦蟹奔忙して誤つて跳擲す。
漁人魚を養ふこと雛を養ふが如し、
竿を插み笠を貫いて鷓鴣を驚かす。
豈知らんや白艇鬧して雨の如きを、
水を攪して魚を覓む嗟已に疎なり。

【題義】熙寧五年十二月、湖州に至るときの作。(東坡の自註に、湖州道中の作) 查初白いふ、以爲波瀾蒼望、無自窮其畔岸と。紀昀いふ、初白先生、推之太過と。

【詩意】天が寒く、水が退けて、魚が泥の中に在る。短鈎で水を畫することは、恰も田を耕すときの犁(農具の一)のやうである。渚の蒲は披き折れ、水草も亂れ散つて居る。既に魚を畫する大魚も小魚も同じことで、豈また鯁鯢をば遺さうぞ。(本旨は此に在る) 偶然手に信せて水を畫すると、皆、虚擊であつた。元來、勞を厭はないし、萬一を幾うたのである。一つの魚が刃に中れば、百魚が驚く。蝦も蟹も奔るに忙はしく、誤つて跳擲する。一體、漁人の魚を養ふことは、雛を養ふがやうである。竿を插み、笠を貫いて鷓鴣(水鳥)を驚かす。魚を養ふ爲である。白艇(艇は圓い棒)が雨のやうに鬧しく下るといふことは知らなかつた。水を攪して魚を覓める、其れは既に思慮の疎であることを思

はなければならぬ。

【餘論】唐宋詩辭に、時新法盛行、故即短鈎畫、水以爲喻、所言此意豈復遺三歟、與一魚中、刃百魚驚者、似皆指新法之病、民、王、呂、王安石、呂惠卿、輩壞法亂制、豈異於渚蒲而亂蕩荇哉、其請罷條例司、疏有云、造端宏大、民實驚疑、創法新奇、史皆惶惑、正與詩意相同、而其繪事如畫、筆端有神、雖寥寥短章、讀其詞、如有一千百言在腕下、と評して居る。

吳中田婦歎

吳中田婦の歎

今年粳稻熟苦遲、
庶見風霜來幾時、
霜風來時雨如瀉、
杷頭出齒鎌生衣、
眼枯淚盡雨不盡、
忍見黃穗臥青泥、
茅苦一月隴上宿、
天晴穫稻隨車歸、

今年の粳稻熟すること苦だ遅し、
庶くは見ん風霜來る幾時、
霜風來る時は雨瀉ぐが如し、
杷頭齒を出し鎌は衣を生ず、
眼枯れ涙盡きて雨は盡きず、
見るに忍ぶ黃穗の青泥に臥するを、
茅苦一月隴上に宿す、
天晴れ稻を穫り車に隨つて歸る。

【字解】

【一】粳稻、うるちのいれ、史記、滑稽傳に、粳以粳稻、大觀本草に、粳與秈同、有早中晚三收、諸家獨以晚稻爲粳者非也、凡不粘者、皆爲粳、【二】杷頭、説文に、杷、平田器とあつて、田をからすきで耕した後、更に土の塊をこなす農具、戰國策に、商人無杷頭、註釋之勢、方言に、刈鉤自圃而西、或謂之鎌、【三】出齒、柳子厚の書に、發齒蒸出芝菌、又、杜子美の詩に、歸耕生衣臥、【四】眼枯、杜子美の詩に、莫自使眼枯、取次

汗流肩積載入市、
價賤乞與如糠糶、
賣牛納稅拆屋炊、
慮淺不及明年飢、
官今要錢不要米、
西北萬里招羌兒、
冀黃滿朝人更苦、
不如却作河伯婦、

汗流れ肩積く載せて市に入る、
價賤く乞與する糠糶の如し、
牛を賣り税を納れ屋を拆いて炊ぐ、
慮は淺くして明年の飢に及ばず、
官は今錢を要して米を要せず、
西北萬里羌兒を招く、
冀黃朝に滿ちて人更に苦しむ、
如かず却つて河伯の婦と作るに、

朝、張差は勃海の太守、黃霸は潁川の太守、二公は皆、民を安んずるを以て善治と稱された。【一】河伯、河國に、河伯、姓呂、名公子、夫人姓馮、名夷、後漢書、張衡傳の註に、馮夷、姓馮、名夷、爲河伯。

【題義】此詩も熙寧五年十二月の作、戲れに賈收に贈り、并せて收が吳中田婦歌に和したのである。東坡の自註に、和賈收韻とある。

【詩意】今年の粳稻は實ることが苦だ遅い。霜風の來るときは、雨が瀉ぐやうである。杷(馬鉞)は齒を生じ、鎌(鎌に同じ)に衣を生ず。(紀昀いふ、常景高成三奇句)眼枯れ涙は盡きて、雨は盡きない。黃穗の青泥に臥するは、まことに堪へられない。茅苦に

覆はれて一月も罷(田中の高處)の上に宿つた。天晴れ稻を穫りて車に載せて歸つた。汗は流れ肩は熱くなつて奥にて市に入る。値段は賤いので糠や糠のやうに與へる。牛を賣り、税を納れ、屋を拆いて炊ぐ。前の慮が浅く、明年の飢に備へない。官は今、錢を要求して、米を要求しない。そこで、司馬溫公は青苗(春時、苗の青い頃、民に金を貸し、收穫の時に、元利とも返済せしめる法)及び坐倉糶米の害を論じて、東南饑荒而粒米狼戾、今棄其有餘、取其所無、農末皆病矣と言つた。一體、宋の法に據ると、米で納めるも、錢で納めるも民の便利に任せたが、王安石の新法が行はれてからは、官が争うて錢を取つたため、何處も米が賤くなつて、農民は米を賣る、二石で僅に一石の値を納れることが出来たのである。これは西北萬里から羌兒(羌は、支那西方の野蠻人種の稱)を招いたやうなものである。そして、龔遂や黃霸のやうな善く民を治める人が朝に滿つれば、人民は更に苦しむ結果となる。却て河伯の婦となるには如かない。(史記の滑稽傳に、魏文侯時、西門豹爲鄆令、會長老、問民所疾苦、長老曰、苦爲河伯娶婦、約問其故、曰、鄆三老廷掾、常歲賦斂百姓、得數百萬、爲河伯娶婦、當其時、巫行視人家女好者、共粉飾之、浮之河中、曰、即不爲河伯娶婦、水來漂沒、溺其人民。約至始禁絶之云云)新法の害を言つたのである。

【餘論】宋の買收字は耘老、烏程の人である。詩名があつて、飲酒を喜む。其の屋に水閣があり、浮暉といふ。李公擇・蘇子瞻は之と遊び、倡酌が極めて多かつた。子瞻嘗て道場に遊んで回るとき、風雨に値つた。そこで、舟を泊し、浮暉閣に上り、官奴に命じて燭を乘らしめ、風雨を掃つて壁間に作したが、後、石に墨妙亭に刻した。收は素より貧しいので、東坡は毎に之を念ひ、嘗て古木怪石を寫し、其の後に書して贈つた。云ふ、今日舟中霜寒、十指如懸槌、適有嘉酒、遂獨飲一杯、醜然徑醉、念買處土貧甚、無以慰其意、爲作古木怪石一紙、每遇饑時、輒一開看、不知能飽人否、若吳興有好事、能爲君月致米三石酒三斗、終君之世者、便以贈之、不爾可令雙荷葉收家、須添丁長、以付之也。雙荷葉は耕老の侍婢、添丁は、耕老の子である。後、東坡が去ると、耕老亭を作つて蘇を懷ふ。詩一卷あり、懷蘇集といふ。

和邵同年戲贈買收秀才三首 邵同年に和し、戲れに買收秀才に贈る 三首

傾蓋相歡一笑中、
從來未省馬牛風。
卜鄰尙可容三徑、
投社終當作兩翁。
古意已將蘭緝佩、
招詞閑詠桂生叢。
此身自斷天休問、

古今體詩 和邵同年戲贈買收秀才三首

【字解】(一)邵同年 吳興志に、邵迎、字茂誠、高郵人。漣水燕歌に、邵迎、官止州縣、窮死無嗣。(二)傾蓋相歡 前漢書、鄧禹上三疎李王書の語に、有白頭如新、傾蓋如故、何則知不知也。傾蓋は、車を駐め、蓋を傾けて相語ること、家語、敬思篇にも見ゆ。(三)馬牛風 左傳、魯

白髮年來漸不公

白髮年來漸不公

公四年に、齊侯伐楚、楚子使吳師言曰、君處北海、寡人處南海、惟

是風馬牛不相及也。疏にいふ、馬逐上風而去、牛逐下風而來、故云不相及也。又、昔にいふ、馬牛其風。【三】卜、鄭左傳、昭公三年に、非宅是卜、惟鄰是卜。白樂天が卜鄰の時に、明月好同三徑夜、綠楊宜作兩家春。【四】蘭、韓、佩、離、蘇、に、初、秋、蘭、以、爲、佩。【五】桂、生、寂、劉、安、の、招、隱、士、章、句、に、桂、樹、叢、生、兮、山、之、幽。【六】天、休、閑、杜、子、美、の、詩、に、自、斷、此、生、休、閑、天。

【題義】此詩も、前詩と同じ時の作で、邵茂誠の詩に和して、戯れに買収に贈つたものである。本集の邵茂誠詩集の序に、茂誠與余同登進士第一、十有五年而見之於吳興孫莘老座上と見ゆ。

【詩意】君と我とは車を駐め、蓋を傾けて、愉快に相談笑する。從來久しくお互に省みなかつたことは、全く風馬牛であつて、昔、漢の杜陵の蔣詡(字は元卿)は、兗州の太守となつたが、玉莽が攝に居ると、病を以て官を免じ、郷里に居り、臥して戸を出でなかつた。かくて舍中の竹下に、三徑を開いたが、惟、羊仲、求仲の二人だけが之に従つて遊んだといふことである。この故事を借りて我は鄰を卜して、尙ほ三徑を容るべしと言つたのである。結局、我等は里中の社に入つて當に兩翁となるべきであらう。古意は既に秋蘭を纫にした。招隱の詞は、閑に桂の叢を生ずるといふ桂樹叢生兮山之幽の句を詠じた。此生、天に問ふを休めよ。問うても、駄目である。杜牧の詩に、公道世間惟白色とあるが、白髪は、年來漸く公でない。

朝見新萸出舊棧

朝に見る新萸の舊棧に出づるを、

【字解】新萸出、舊棧、枯

騷人孤憤苦思家

騷人は孤憤して苦に家を思ふ。

五噫處士大窮約

五噫の處士大だ窮約し、

三賦先生多誕誇

三賦の先生誕誇多し。

帳外鶴鳴奮有鏡

帳外鶴鳴いて奮に鏡あり、

筒中錢盡案無鮭

筒中錢盡きて案に鮭なし。

玉川何日朝金闕

玉川何れの日か金闕に朝せん、

白晝關門守夜叉

白晝門を關して夜叉を守る。

【五噫處士】後漢、張滂傳に、滂過京師、作五噫之歌曰、眇彼北邙兮、顯覽帝京兮、嗚、宮室崔嵬兮、人之劬勞兮、嗚、蓬蓬未兮、嗚、黃宗開而非之、求、滂不得。【三賦先生】漢書、相如奏子虛、上林、大人三賦、先是文君新寡、相如繼與臨邛令(玉吉)相重而以琴心挑之、相如從車騎、雍容閑雅甚都。【筒中錢盡云云】東坡が秦太虛に答へる書に、初到、黃、痛自簡儉、日用不得過百五十、仍放、大竹筒貯、用不盡者、以待賓客、此買私老法也。南史に、庾杲之清貧自樂、食惟有、韭、瀝、脯、飯、生、韭、雜、菜、任、助、醫、藥、之、曰、誰謂庾郎貧、食、鮭、嘗、有、二、七、種。【金闕】神異經に、西北荒中有三金闕、【夜叉】盛全詩に、夜叉當、晝不、背、背、夜、中、關、祭、夜、中、關。

【詩意】買收秀才が再び娶らうとした際で、(買収老隱者城南橫塘上、晚娶真氏)詩中の句は、皆、夫婦の事に涉つて居る。朝に新しい萸が舊い棧(斜に斫つた木)に生ずるを見る。詩人は孤憤して苦に家事を心配する。かの五噫の歌を作つた梁鴻は、太だ窮約し、三賦の作者として名高い司馬相

如も、兎角誑誇（大言をはこる）の言が多い。帳の外では鶴が鳴く、鶴は九臯に鳴いても、聲は天に聞える。窟には鏡がある。之を前に設けると、妖異と雖も、所詮本形は透れることは出来ない。温暾が牛渚磯で、犀角を燃やして怪物を照らしたことも、思ひ合はさる。そして此の鏡窟は、婦人の要具である。我の大竹筒中の鏡も盡きて、案に黠がない。玉川は何れの日か金闕に朝するであらう。白晝門を關して夜叉を守る。（維摩經註に、夜叉有三種、一在地、二在虚空、三在夜叉也、地夜叉不能升空、天夜叉能飛行、佛轉法輪、地夜叉唱、空夜叉聞、空夜叉唱、四天王聞、如是乃至三梵天一也。と見えて居る。）

生涯到處似橋鳥。

生涯到處橋鳥に似たり、

科第無心摘領鬚。

科第心なく領鬚を摘む。

黃帽刺船忘歲月。

黃帽船を刺して歲月を忘る、

白衣擔酒慰鰥孤。

白衣酒を擔うて鰥孤を慰む。

狙公欺病來分栗。

狙公病を欺き來つて栗を分ち、

水伯知饑爲出鱸。

水伯饑るを知りて爲に鱸を出す。

莫向洞庭歌此曲。

洞庭に向つて此曲を歌ふこと莫れ、

【字解】 橋鳥、杜子美の詩に、橋鳥相背發、又いふ、橋鳥宿處非。又いふ、橋鳥終歲飛。此は特に橋杆上に刺みて鳥形を爲し、以て風を占ふのみ。晉令は車駕出入するとき、風の前に在るを相る。晉の傅元が相風賦に、豫神鳥於竿首、俟神風之來往とある。科第、摘領鬚之が詩に、年年取科第、如摘領鬚。科第は試験して優劣

烟波渺渺正愁予。

烟波渺渺として正に予を愁へしむ。

の次第を定める意、科舉をいふ。

【詩意】 人間の生涯は到處、風を占ふといふ橋鳥にも似て居る。年年の科第も領底の鬚を摘むやうに、心なく進んで行く。黄帽を著けた舟子は船に棹さし、幾んど年月を忘れる。世味既に斯くの如くである。白衣酒を擔うて鰥孤（鰥寡孤獨）を慰めるも一境である。昔、酒好きな陶淵明は、重陽の節に酒が無かつた時、宅邊の菊叢中で、坐して菊の花を摘んで居た。盈把久うして白衣の人が至るを望見した。それは江州の刺史王弘が酒を送るの使であつた。便ち獨で酌み、酔うて後に歸つたといふことである。更に又、世態の朝三暮四を思はせる。狙公が山栗を衆くの狙に分配したとき、朝三にして暮四と言つたら、衆狙は怒つた。朝四にして暮三と言つたら悦んだ。朝三暮四、朝四暮三、其の數はかはらないが、狙の愚なる、一は喜び、一は怒る。世間も己を是として心を勞することが多い。水伯も人間の饑る（食物を饑はる）ことをよく知つて居り、爲に鱸魚を出す。併し、洞庭湖に向つて此の

【二】黄帽刺船、前漢書に、鄧通以白衣擔酒、陶淵明は嘗て九月九日望久之、見白衣人至、乃王弘送酒使也。【三】狙公、分栗、莊子齊物論に、狙公（さるまはし）賦乎（山栗）、曰朝三而暮四、衆狙皆怒、曰、然則朝四而暮三、衆狙皆悅、名實未節而喜怒爲用云云。【四】水伯、山海經に、朝陽之谷神曰天吳、是爲水伯。【五】洞庭、湖南の境に在る、長二百里、廣百里、華容、南縣、安鄉、漢壽、沅江、湘陰の各縣之を環る。巴陵縣城、其の入江の口に當る。【六】烟波、もやの籠めた水波、崔颢の詩に、日暮鄉關何處是、烟波江上使人愁。

【題義】此詩も熙寧五年十二月の作である。起首四句は總寫、下は道場を詳にして、何山を略す。更に出山同望の二語を作して、搖蕩して情に入る。何山は、只高人の讀書を細懐して、復、山を模し水を範しない。紀昀いふ、若、斷若、連、有、自在流行之妙と。又いふ、何山只作、帶筆點染、輕便之至と。

【詩意】吳郡には名山が多い。道場山の頂、何山の麓、上は雲峰を凌ぎ下は幽谷に入る。我は山水の窟の中から來つたが、尙ほ此の山を愛して看れども厭きない。(湖州に愛山書院あり、此句を以て名く) 陂湖は行くゆく盡きて白漫漫。青山は忽ち蜿蜒として龍蛇の形を作し更に蟠まつて居る。山は高きが強い風もなく松に自然の響がある。山谿の石齒を誤認しては驚湍(湍は急流)となすこともある。山僧は山泉を放つて出さない。屋底の清池は瑤席を照らして居る。階の前にある合抱の木は、雲に入つて香ばしく、月裏の仙人の手植に係る。(階前云々、桂樹をいふ) 山を出でて同望すると、翠の雲巖(美人の髪に喩ふ)は空に見るやうである。又、碧色の瓦や朱塗の欄も縹緲と遙に遠い間に見られる。白水田頭に行路を問へば、小溪の深い處が何山である。高人(何鑑を指す)が書を讀んで、夜、且に達した。晉の何鑑は、嘗て此山で讀書したが、後、吳興の守となつたので、其の居を以て寺となし、其山に名けた。(顏魯公が杼山碑に、寺西南有何鑑釣臺とある。鑑の嘗て此に居つたことは明かである) 山に至るも、山鶴は夜半に鳴く。我は今、學を廢めて山に歸らない。山中酒に對して空しく三たび歎息するのである。(王文誥いふ、此詩用唐人轉韻、而讀去、絕無轉韻之跡、此其筆力不同故也と。)

贈孫莘老七絶

孫莘老に贈る七絶

嗟予與子久離羣

嗟嗟予子と久しく羣を離る、

耳冷心灰百不聞

耳冷に心灰して百聞かす。

若對青山談世事

若し青山に對し世事を談せば、べし。

當須舉白便浮君

當に須らく白を舉げ便ち君を浮す。

【字解】(一) 孫莘老、孫覺、字は莘老、高郵の人、王安石に遇はれたこと、前に見ゆ。(二) 羣、羣、記、禮弓に、子夏曰吾過矣、吾羣、羣而索居、亦已久矣。(三) 耳冷、唐の孟弘微、宣宗に對して曰く、陛下何以不知有耳、不召用。帝怒つて曰く、朕耳冷不知有耳、乃ち之を聞く。(四) 心灰、莊子、齊物論に、形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎。(五) 白、太白、杯の名、吳郡賦に、里譚卷飲、飛觴舉白。(六) 浮、韻なり、劉向說苑に、韓文侯與大夫一飲酒、使公乘不仁爲、解政曰、飲不盡者浮以二太白。

【題義】此詩も熙寧五年十二月の作、熙寧中、新法が行はれると、王安石は勢を得、諸公は之を争つたが、勝たないで、皆、排斥さる。孫莘老は、先に罷められて、湖州に居る。東坡は杭州に居つたが、五年十二月、事を以て湖州に至り、莘老と會した。(東坡、杭州に任たりし日、差せられて湖州に往き、提舉の利害を相度る。湖州に知たりし孫覺と相會したのである。)是時、莘老及び坐客と約して、如し言が時事に及ぶものは、罰杯として一大盞を科せんと言つて、此詩を作つたさうである。

【詩意】ああ予は君と久しく別れて居る。世事を聞かぬ故に、耳根は冷然として居る。(世事の爲に、耳の熱するやうなことは無い。)其れが爲に、心も死灰の如くである。此際、若しも青山に對して世事を談するやうなことがあれば、當に白を舉げて君を浮すべし。(白は太白とて、杯の名。浮は爾雅に罰

也と見ゆ。白の字は、青の字に對して好いが、わざと意あつてしたのではない。自然に出たのである。故に妙。坐客、時事に言及するものあらば、一大盡を罰する。時事を指さないのは、固より賦の意であらうが、時事を言へば、不便が多く、更に説くべからず。説くも亦盡さないからである。

天目山前淥浸裾

天目山前淥浸裾を浸す、

碧瀾堂下看銜鱸

碧瀾堂下銜鱸を見る。

作隄捍水非吾事

隄を作り水を捍ぐは吾が事にあらず、

閑送苕溪入太湖

閑に苕溪を送りて太湖に入る。

【字解】(一) 天目山 湖州に在る。寰宇記に、湖州安吉縣、天目山、高三萬六千丈、父老云、欲渡難及、避水災、天目海設山爲第一。水經註に、山上有霜木、皆是數百年樹、謂之翔鳳林。(二) 碧瀾堂 湖州の守護所、畫堂館中の堂名。杜牧之が宣州に佐たりし時、來つて吳興に遊び、畫堂を爲る。(三) 銜鱸 郭景の江賦に、鱸膾相屬、萬里送情。(四) 作隄捍水 孫覺が湖州に知たりし時、松江隄を以て民害となし、易ふるに石を以てす、長さ百餘里。東坡が湖州に往き湖岸を相度するは、此の築隄の事である。(五) 苕溪 輿地志に、苕溪一源自天目、一源自獨松嶺、合浮玉山水、至吳興、入太湖。寰宇記に、霽水、苕水之別名、深不可測、中多鯢魚。

【詩意】天目山前の淥即ち水は、人の衣裾を浸すばかりである。湖州の守護所たる碧瀾堂の下には、舟が多く、軸鱸相つづいて居る。(舟のともが後から銜むがやうに接して居る)此度、我は運鹽河を開くために、其の奉行を命せられて、湖州に來つたが、隄を作り、水を防いで、水利を興すことは、私の心ではない。(此役は、己の心に不満である。不満であることを吾事に非すと云つたのが妙處である)それで、終日、只苕溪の水が、流れて太湖に入るのを見てゐるのみである。(東坡は曾て水利の不便を言ひて、却て轉運司とされ、差して隄防の事に預る。故に本、興水利の人にあらずと言つて、時世を譏諷したのである。東坡が杭州から湖州に赴いた時の作であることは、前にも述べたが、時に孫莘老は、湖州に守となつて居たから、以下五首、皆、湖州の事を用ゐたのである。)

夜來雨洗碧鱸帆

夜來雨洗うて碧鱸帆

浪湧雲屯遠郭寒

浪湧き雲屯して郭を遠りて寒し。

聞有弁山何處是

弁山ありと聞く何れの處か是なる、

爲君四面竟求看

君が爲に四面竟に求めて看る。

寰宇記に一名下山、山石曼然如玉。下山は峻極で、清秋爽月でなければ、其の頂を見ない。弁山と書くは、冠弁の義に取り、下山と書くは、下姓のものが之に居つたからだといふ。

【詩意】夜來、雨が鱸帆(鋭く尖つた山)を洗つたので、碧も滴るばかりである。浪が湧き、雲も屯し、郭を遠りて寒し。此地方に弁山ありと聞くが、何處であらう。君の爲に四方を流覽し、竟に求めて之を看る。

【字解】(一) 雨洗 寰宇記の詩に、雨洗亭早二千餘載。(二) 鱸帆 鮑參軍、登鱸帆以長傘。宋玉の高唐賦に、盤岸鱸帆。文選、附元暉の詩に、菑嶺復鱸帆。(三) 雲屯 謝靈運の詩、巖高白雲屯。(四) 弁山

で飲ませてはならない。蓋次公を真似るではないが、酒狂するを恐れるからである。

去年臘日訪孤山。

去年臘日孤山を訪ひ、

曾借僧窓半日閑。

曾て借る僧窓半日の閑。

不爲思歸對妻子。

歸て妻子に對するを思ふが爲ならず、

道人有約徑須還。

道人約あれば徑に須らく還るべし。

【詩意】 宋の林逋、山の北麓に隱居す。

【字解】 臘日 臘は陰曆十二月の祭の名、冬至より後の三度目の戌の日に行ふ。杜市の詩に、臘日前年暖尚遲、今年臘日凍全消。孤山 浙江の杭州西湖に在る。一明樂立、湖山勝地となす。故に亦、孤州に歸らうとして居つたのである。

莘老葺天慶觀小園有亭北向道士山宗說乞

名輿詩。

莘老の葺ける天慶觀小園に亭あり北に向ふ、道士山宗說、名と詩とを乞ふ

春風欲動北風微。

春風動かんと欲して北風微、

歸雁亭邊送雁歸。

歸雁亭邊雁の歸るを送る。

蜀客南游家最遠。

蜀客南游家最も遠く、

吳山寒盡雪先晴。

吳山寒盡きて雪先づ晴く。

扁舟去後花絮亂。

扁舟去つて後花絮亂れ、

五馬來時賓從非。

五馬來る時賓從非なり。

惟有道人應不忘。

惟道人あつて應に忘れざるべし、

抱琴無語立斜暉。

琴を抱いて語るなくして斜暉に立つ。

となり、常に五馬を以て自ら隨へ、五馬坊・五馬亭を立つ。漢の制によると、太守は馴馬、其の秩中二千石を加ふる者あれば、乃ち廳を右にす、故に五馬を太守の美稱とする。【一】賓從 左傳、襄公三十一年、賓從有代。【二】斜暉 夕暮の光、暉暉・夕暉皆同じ。徐陵の句に岸水帶斜暉。

【題義】 此詩も、熙寧五年十二月の作である。東坡は天慶觀の小園に至つた。園に孫莘老の葺ける亭があつて北に向つて居る。道士山宗說が亭の名と詩とを乞うたから、爲に歸雁亭と題して、此詩を添へたのである。

【詩意】 春風が暖く動かうとしたので、冬の風が微になつた。此時、歸雁亭邊に雁の歸るを送る。

古今體詩 莘老葺天慶觀小園有亭北向道士山宗說乞名輿詩

【字解】 天慶觀 湖州嘉禾に、天慶觀は府治北、唐大開二年建、名元風觀、唐改龍興、宋祥符二年、改天慶。【一】歸雁亭 吳興亭故に、歸雁亭、孫莘老作、道士乞名、東坡以歸雁一名之、蓋自寓思歸之義。【二】花絮亂 暉の亂文帝の詩に、花絮隨風。【三】五馬 太守の美稱、南齊、柳元伯の子五人、皆馬を領し、五馬亭に參差たり。故に殷文圭いふ、柳氏亭邊參差五馬と。又、謝靈運、永嘉の太守

(月令に、季冬、雁北郷とある。東坡の詩は、此の意に取る。) 蜀客(東坡自ら稱す)は南に遊んで、家が最も遠く、吳山は寒さも盡きて、雪が先づ晴く。(紀昀いふ、風調自在。) 扁舟去つて後、花絮が亂れる。さて、他日太守が來られるとき、賓従の人人は、異つて居るであらうが、ただ道人だけは、應に昔を忘れないであらう。そして相變らず、琴を抱いて無言のままで、夕陽に立つて居られるであらう。(他年當に湖を乞ふべきをいふ。結意は此から生出する。)

至秀州贈錢端公安道竝寄其弟惠山老

秀州に至り、錢端公安道に贈り、竝に其の弟惠山老に寄す

鴛鴦湖邊月如水。鴛鴦湖邊月水の如し。
孤舟夜榜鴛鴦起。孤舟夜榜して鴛鴦起る。
平明繫纜石橋亭。平明纜を繫ぐ石橋亭。
慙愧冒寒髯御史。慙愧寒を冒す髯御史。
結交最晚情獨厚。交を結ぶ最も晩きも情獨厚し。
論心無數今有幾。心を論ずる無數今幾か有る。
寂寞抱關歎蕭生。寂寞關を抱いて蕭生を歎す。

【字解】(一) 秀州 五季のとき、吳越が置く。今の浙江嘉興府、江蘇嘉善松江府、皆其の境。(二) 錢端公安道 錢頤字は安道、無錫の人。知烏程縣より召されて、御史裏行となる。唐の時、御史裏行を端公と稱す。(三) 鴛鴦湖 南湖と名く、府城の南に在る。其の禽に鴛鴦が多いから、故に名く。一説に、南湖の相開く、鴛鴦の如きよりいふ。五代

耆老執戟哀揚子。耆老戟を執りて揚子を哀しむ。
怪君顔采却秀發。怪しむ君顔采却て秀發。
無乃遷謫反便美。乃ち遷謫反て便ち美なる無からんや。
天公欲困無奈何。天公困ましめんと欲す奈何ともする。
世人共抑眞疎矣。世人共に抑ふるは眞に疎なり。
毘陵高山錫爲骨。毘陵高山錫を骨となす。
陸子遺味泉冰齒。陸子味を遺る泉冰齒。
賢哉仲氏早拂衣。賢なるかな仲氏早く衣を拂ふ。
占斷此山長洗耳。此山を占斷して長へに耳を洗ふ。
山頭望湖光潑眼。山頭湖を望めば光眼を潑し。
山下濯足波生指。山下足を濯へば波指に生ず。
偷容逸少問金堂。偷容逸少金堂を問ひ。
記與嵇康留石髓。嵇康と石髓を留めしを記す。

成・哀・平問、非・賢皆爲三三公、權傾人主、所應莫不控擢、而維三世不從官、及拜重位、難以耆老久次、轉爲大夫、黃門

古今體詩 至秀州贈錢端公安道竝寄其弟惠山老

の時、湖東に側近がある。(一) 結交 史記、荆軻傳に、太子曰、願因先生得結交於荆卿。(二) 論心 荀子に、相形不如論心。(三) 抱關歎蕭生 前漢、蕭望之の傳に、霍光秉政、丙吉罷、王仲翁與望之等數人、皆召見、先是上官桀與望主謀殺光、光既誅桀等、後出入自備、吏民當見者露索、(探體として搜索する)去刀兵、兩吏挾持、望之獨不肯聽、自引出闕曰、不願見、於是是除用望之、三歲間、而仲翁至光祿大夫、望之以射策甲科爲郎署小苑東門候、仲翁出入傳呼甚寵、願謂望之曰、不肯聽、破反抱關爲、望之曰、各從其志。(七) 哀揚子 前漢、揚雄傳實に、爲郎給事黃門、與王莽、劉歆、段、真帝之初、又與董賢同官、當

郎は門戸を守るを掌る、故に鞍を執る。潘岳の詩に、執鞍執揚。【一】秀發、楚辭、遠遊章句の序文に、文采秀發。晉書、慕容紹
 載記に、精采秀發。【二】選調、蘇頌の詩に、書史使選調。【三】便美、史記、匈奴傳に、不如漢之便美。【四】思陵、高山、
 爲晉、思陵は常州、高山は惠山。顏延之詩に、汝州之治、諸井、皆以夾錫鑄、鑄之、每井、車數十千、同其故、一老兵曰、此邦
 鑄風沙、沙入井中、人飲之、即成瘴、夾錫錢、所以治沙土也、因思無錫、惠山泉清甘、甲於二浙者、以有錫也。元和郡縣
 志に、常州晉陵郡、漢曰思陵、晉元帝時、避諱改晉陵。【五】冰面、包信の劉琨師に贈る詩に、曉激凌骨、冰面寒。【六】洗、
 耳、晉書、孫楚曰、所以枕流、欲洗其耳。【七】逸少、王羲之字は逸少、草隸は古今の冠たり。官を去り、東土の人士と山水、釣
 の興を嘗み、又、道士許邁と共に服食す。【八】金堂、許邁、嘗、王羲之に書を遺つていふ、自山陰、南至金堂、多有金堂玉室、
 仙人芝草、左元放、左慈字は元放、之徒在焉、漢末諸葛遺者、皆在焉と、羲之之が傳を爲る。【九】留石、仙經に、石髓を服
 すれば、壽夭に齊し。晉書、嵇康遇王烈、共入山、烈嘗得石髓、如飴、即自服、中、餘半與康、康而爲石、烈曰、叔夜、晉康
 字は叔夜、志趣非常而不遇、命也。神仙傳に、烈攜師與叔夜、已成青石、烈私語弟子曰、叔夜未嘗得遺故也。

【題義】 熙寧五年十二月の作、秀州に至つて錢顛に贈り、並に其弟惠山老に寄す。惠山老は、即ち
 錢道人である。

【詩意】 鴛鴦湖邊を照す月は、水のやうに澄んで居る。月に乗じて孤舟を夜中に榜いだため、(榜は棹
 の意) 湖中の鴛鴦を驚かした。夜もしらしらと明るくなる。纜を石橋亭に繋ぐ。かく寒を冒して擣御
 史に對しては慙愧に堪へない。(錢安道は、擣があつて御史であるから擣御史といふ。東坡は嘗て安道
 に遇つて小酌した。) 交を結ぶ最も晩きも、情は獨厚い。心を論ずる無數なるも、今は幾かある。寂
 寞として關を抱いた漢の蕭望之のことが思ひ出されて其の不遇を歎息する。三世に奉仕しても官を徒
 されなく、耆老久次といふお情で、やつと大夫となり、黃門郎となつて鞍を執つた揚雄も、亦哀しく

思はれてならない。さて、不遇である君が憔悴しないで、容貌風采の秀發する所を見ると、或は選調
 といふことが反て快よいことでもなからうかと不思議に思ふ。天公が困しましめやうとすれば、人力
 では之を如何ともすることが出来ないものである。世の人が運命を抑へやうとするのは、もともと無
 理である。毘陵(常州)も高山(惠山)も、泉の清く甘いことは、二浙に甲であるのは、錫があるか
 らである。陸羽も(陸子は陸羽、字を鴻漸といふ。性、茶を嗜み、茶經三篇を著す。此の清泉に味を
 遣れた。それに就いて思ふのは、弟君の惠山老である。(仲氏は弟をいふ。詩經に、仲氏吹篳。) 早く
 衣を拂つて此山を占斷し、長へに耳を洗うて世外に超然たることである。山頭から湖を望めば、湖光
 が眼を激(ちらす)する。山下で足を濯へば、波が指に生ずる。倘容して王羲之は仙人の居る金堂玉
 室を問うて、例の嵇康と石髓(仙人は石髓を服す)を留めたことを記す。

秀州報本禪院僧文長老方丈

秀州報本禪院僧文長老方丈

萬里家山一夢中

萬里の家山一夢の中

吳音漸已變兒童

吳音漸く已に見童を變す

每逢蜀叟談終日

蜀叟に逢ふ毎に談日を終へ

便覺峨眉翠掃空

便も覺ゆ峨眉の翠空を掃ふを

【字解】 【一】報本禪院、本覺寺
 碑記に、橋李(今の浙江嘉興縣)西
 郭二十七里外、有空翠亭遺址、唐宣
 宗時、僧某來自臨海、泊亭下、感
 異人夢、結庵以居、事同、創報本
 禪院、宋僧文及主之、請某爲

師已忘言眞得道、
 我餘搜句百無功、
 明年採藥天台去、
 更欲題詩滿浙東、

師已に言を忘れ眞に道を得、
 我れ句を搜るを餘せば百も功なし。
 明年薬を採て天台に去り、
 更に詩を題して浙東に滿しめんと欲す。
 寺、愛陽今額。【一】吳郡、南史、明隱傳に、吳音不調。
 【二】忘言、莊子、外物篇に、言者
 所、以在、意、得、意而忘言。【三】
 搜句、文心雕龍に、搜句、思於前例、
 【四】天台、洞天記に、天台赤城山、
 高一萬八千丈、周圍五百里、在台州天台縣。【五】浙東、元和郡縣志に、浙東觀察使管州七、越、婺、衢、處、溫、台、明。

【題義】此詩は、鄉談を聞いて、故國を思うたのである。紀昀いふ、三四常意寫來警動と。宋の周必大(字は子充、一字洪道、廬陵の人、自ら平岡老叟と號す、著書八十一種、卒して文忠と諡す)吳郡諸山録に、早行至本覺寺、登岸即古構李也、舊號小長蘆、東坡過此爲文長老賦詩と見ゆ。即ち此詩である。

【詩意】久しく故郷を離れて居つて、萬里家山を夢む。賀知章は嘗て少小にして家を離れ、老大にして回る。郷音改まるなく鬢毛摧くと言つたが、今は我は吳國の言葉づかひ、漸く已に見童を變じたのである。蜀叟文長老に逢ふ毎に一日中話をする。峨眉山(嘉州に在る)の翠色が虚空を掃ふことなども念頭に浮ぶ。師(僧文長老を指す)已に意を得て、言を忘る。眞に道がある。我は終日、詩句を搜ることの外には、何も能はない。明年は薬を採らなために天台山に行くつもりであるから、更に詩を題して浙東に題しようとする。(杜子美の詩に、更欲題詩滿青竹)

王復秀才所居雙槍 二首

吳王池館徧重城

吳王池館の徧重城

閒草幽花不記名

閒草幽花名を記せず

青蓋一歸無覓處

青蓋一たび歸りて覓むる處なし

只留雙槍待昇平

只雙槍を留めて昇平を待つ

【字解】【一】王復、饒州人、居る所は、杭州候潮門外に在り。
 【二】秀才、秀才の二字は始めて管子に見ゆ。漢に至つて始めて科目の稱となる。宋の時は、凡そ應舉のもの、皆、秀才と稱す。【三】吳王、饒州を指す、字は吳夷、杭州臨安の人で、吳越王第一世である。饒の太祖、位に即き、饒を吳越王に封す、饒笑つて曰く、吾、豈、孫仲謀たるを失はんやと。【四】青蓋、青蓋車をいふ、青色のおほひある車、古、天子又は皇太子の乗用である。吳志、三嗣主傳に、青蓋入洛陽。

【題義】此の二首は熙寧五年十二月の作、候潮門を出で、王復の園居に過ぎつて、其の植うる所の雙槍を觀て、此詩を賦したのである。

【詩意】吳王錢鏐が池館である徧重城は、閒草が生じ、幽花が開いて居るが、其の名を知らない。青蓋が一たび歸つて覓める所がない。ただ二つの雙槍を此地に留めて昇平の世を待つのみである。(晉書の陳訓傳に據るに、吳の孫皓の時、錢塘の湖開く。或はいふ、天下當太平、青蓋入洛陽と。皓は以て訓に問ふ。訓曰く、臣止能く氣を望む。湖の開塞に達する能はずと。退いて其の友に告げて曰く、青蓋入洛、將に與、纒、壁の事あらんとす。尋で吳が亡びた。纒は棺のことである。古の國君などは凡そ三重の棺を用ゐる、一番外なるを櫛、(是は預め墓穴に入れてある)其の次を棺とし、一番内

なるを楸とする。(厚さは楸八寸、棺六寸、楸四寸)別に楸の字がある。棺の別名で、棺に屍の入りたるを楸といふ。さて輿楸とは、古へ國君が敵國に攻め落され、自ら出でて降るとききの式で、不吉の字面である。自ら死罪を期し、必ず殺される覺悟で、預め楸を作り、臣子をして之を輿して、己の後に隨從せしめる。(謝罪の極である)又、衝壁とは、降参しようとする諸侯が己の口に壁をくはへることである。これは、たとひ、降参にもせよ、矢張、一種の會見に外ならないから、會見の例にならひて、壁を執りて進物としようと思ふ。併し、兩手を縛られて居るから、已むなく口に衝むのである。

凜然相對敢相欺

凜然として相對して敢て相欺く、

直幹凌空未要奇

直幹空を凌いで未だ奇を要せず。

根到九泉無曲處

根は九泉に到つて曲處なし、

世間惟有螿龍知

世間惟有螿龍の知るあり。

【字解】(一) 九泉 地下をいふ、

阮瑀が詩に、冥冥九泉室。蕭の太子丹は根を擧げて九泉に入り、龍蛇の靈に身へて、身を存したと傳ふ。(二) 螿龍 螿は蟲類が土中などにかくれる。易蒙辭に、龍蛇之變、以存身也。

【詩意】古楸は凜然(勢のりりしく引きしまる貌)として相對して敢て相欺く。眞直な幹は空を凌いで(一本に凌雲・臨空などに作る)居るが、奇を要しては居ない。又、其の根は深く地下に入つて曲れる處がない。廣い世間に、ただ螿龍が知つて居るのみである。(楸を詠じて、其の世に知らるるなきを嘆じ、以て自ら況べたのである。東坡は熙寧の間に於て、王安石と新法を論じて懐はず、しばし

ば斥逐された。其の御史の獄に繋かれたとき、時の相は此の詩を進呈していふ、末句に、不臣の意があると。神宗曰く、詩人の詞、安んぞ此の如く論すべけんや、彼自ら楸を詠するのみ、何ぞ朕が事に預らうぞと。時相は語が塞がつたといふことである。

【餘論】續通鑑に、中丞李定・御史舒亶論・自熙寧以來、作爲文章一怨謗君父、王珪(字は禹玉)復舉・賦詠楸詩曰、根到九泉無曲處、世間惟有螿龍知、今、陛下飛龍在天、賦欲求之地下之螿龍、不臣孰甚焉、帝曰、彼自詠楸、爾預朕事。また、王定國が聞見近錄に、王和父嘗言、蘇子瞻在黃州、上數欲用之、王禹玉(王珪)輒曰、賦嘗有此心、惟有螿龍知之句、陛下龍飛在天、而不敬乃反求知螿龍乎、章子厚曰、龍者、非獨人君、人臣亦皆可言龍也、上曰、自古稱龍者多矣、如荀子八龍、孔明臥龍、豈人君也、及退、子厚詰之曰、相公乃欲覆人家族、邪、禹玉曰、此舒亶言爾、子厚曰、亶之唾、其亦可食乎と見ゆ。胡荅溪いふ、東坡、御史の獄に在るとき、獄吏問うて曰く、楸の詩に、根到九泉無曲處、世間惟有螿龍知、譏諷する無きありやと。東坡答へて曰く、王安石が詩に、天下蒼生望霖雨、不知龍向此中蟠、とある、此龍なりと。獄吏は之が爲に一笑了さうである。(王文誥いふ、王安石不知龍向此中蟠句、公所本也、其後鞠案、即舉王安石以對、と。)

宋叔達家聽琵琶

宋叔達の家に琵琶を聴く

數絃已品龍香撥

數絃已に品にす龍香の撥

半面猶遮鳳尾槽

半面猶は遮る鳳尾の槽

新曲從翻玉連鐶

新曲は從つて翻す玉連鐶

舊聲終愛鬱輪袍

舊聲終に愛す鬱輪の袍

夢回只記歸舟字

夢回つて只記す歸舟の字

賦罷雙垂紫錦條

賦し罷んで雙び垂る紫錦條

何異烏孫送公主

何ぞ異らん烏孫に公主を送るに

碧天無際雁行高

碧天際なく雁行高し

以東坡管領湖山、宜有高唱、而此卷管策之作、却不甚多、豈更事管心之故耶。

東坡湖山を管領するを以て、宜しく高唱するあるべし。而して此卷管策の作、却て甚しく多からず、豈更事管心に強ゆるの故なるか。

【字解】(一) 宋叔達 宋道字は叔達、河南の人。少うして孤、力學して進士甲科に上る。弟、勉と同榜、賢士大夫と遊び、善く詩歌を爲る。

【二】 琵琶 手を以て琵琶する彈き方より名を得。手を前に推すを琵琶といひ、後に引くを琶といふ。長さ三尺五寸は、天地人と五行とに法り、四絃は四時に法る。其の起原を評にしないが、漢代胡地に起つたものであらう。釋名に、琵琶本出於胡中馬上所鼓也。【三】 數絃 論衡に、數絃之聲。【四】 龍香 貴妃外傳に、貴妃琵琶以龍香板爲撥。楊貴妃の琵琶は龍香板を以て撥となし、龍香板を以て撥となす。【五】 半面 龍香板を以て撥となす。【六】 牛面 龍香板を以て撥となす。【七】 玉連鐶 曲の名、歐陽脩沈博士歌に、杜彬琵琶皮作絃、自玉連鐶有金線紅文、聲成雙鳳。明皇雜錄には、自秀貞に作る。【八】 玉連鐶 曲の名、歐陽脩沈博士歌に、杜彬琵琶皮作絃、自玉連鐶有金線紅文、聲成雙鳳。明皇雜錄には、自秀貞に作る。【九】 鬱輪袍 廣林記に、王維徵時、爲岐王所知、將應舉、王令作琵琶新曲、引至公主家、死一世英、傳、玉連鐶聲入黃泉。【一〇】 烏孫 廣林記に、王維徵時、爲岐王所知、將應舉、王令作琵琶新曲、引至公主家、死一世英、傳、玉連鐶聲入黃泉。【一一】 公主 天子が女を諸侯に嫁する時、同姓の諸侯又は三公をして之を主らしめるから、公主といふ。

【題義】 宋叔達の家で琵琶を聴いたことを作つたものであるが、紀昀いふ、三四寓意と。【詩意】 琵琶に龍香の撥を加へると、數絃の聲に、已に長短緩急がある。調を緩うして高く彈じ、節を急にして促に搦つ。鳳尾の槽で半面を遮る。新曲は玉連鐶に従ひ、舊聲は鬱輪袍を愛する。夢は回つて、只記憶するは、歸舟の二字である。賦し罷んで雙び垂る紫錦條。烏孫の國に公主(天子の女)を送るに異らない。碧天は際なく、雁行は高い(紀昀いふ、結得無味、亦無力と)。

入北亭、命酌曰、登與公求得佐酒者、頗善管絃、(くだら)こと、須臾引一女子至、李生視之、雙鬟、上有朱字云、天際識歸舟、雲間辨江樹。李生其年往汴、陸長源以女嫁之、既婚、頗類比亭子所觀者、復解管絃、果有朱書字、視之、天際之詩兩句也。【二】 紫錦條 周禮禮記に、西園賦詩、(紫錦條)北里琵琶紫錦條。又、張說が琵琶賦にも見ゆ。【三】 烏孫送公主 傳元琵琶賦序に、故老云、漢遣烏孫公主、嫁昆彌、念其行道思慕、使工人知音者裁琴、筑、琴瑟之屬、作馬上之樂、以方語目之、故云琵琶、取易傳於外國也。公主、天子が女を諸侯に嫁する時、同姓の諸侯又は三公をして之を主らしめるから、公主といふ。

蘇東坡詩集 卷九

古今體詩 六十二首

元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作

元日、張先子野が七夕に莘老に寄するの作に和せらるるに次韻す

得句牛女夕轉頭參尾中

句を得る牛女の夕、頭を轉す參尾の中。

青春先入睡白髮不遺窮

青春先づ睡に入り、白髮窮を遺れず。

酒社我爲敵詩壇子有功

酒社我敵となり、詩壇に子は功あり。

縮頭先夏鼈實腹鄙秋蟲

頭を縮むる夏鼈に先だち、腹に實して秋蟲を鄙しむ。

莫唱裙垂綠無人臉斷紅

裙垂綠を唱ふる莫れ、人の臉の斷紅なるなし。

舊交懷賀老新進謝終童

舊交賀老を懷ひ、新進終童を謝す。

袍鶴雙雙瑞腰犀一一通

袍鶴雙雙瑞、腰犀一一通す。

小蠻知在否試問嘯嘯翁

小蠻知りぬ在りや否や、試みに問ふ嘯嘯翁に。

【字解】

〔一〕張先子野、吳興志に、張子野、烏程人、康定（仁宗の年號）進士、仕至都宮郎中、致仕、年八十九卒云云。齊東野語

に、是時有兩巫先、俱字子野、其一、博州人、天壽（仁宗の年號）三年進士、歐陽公爲作墓志、其一、揚州人、天壽八年進士、宋史不立傳、故其家世不詳。【一】 幸老 孫覺、字伯華、官龍圖學士たり、前に出づ。【二】 牛女 柳覽に、周處の風土記を引き、七月七日、何故（牽牛星の異名）織女二星、當會、守夜者、見天漢中、奕奕白氣、光耀五色、以此爲三德也と見ゆ。【三】 參尾中 禮記、月令篇に、孟春之月、昏參中、且尾中。孟春の月は、昏には參尾南方の中央に在り、且には尾尾南方の中央に在る。參尾も尾星も二十八宿の一。【四】 詩壇 劉仙倫が詩に、御嶺南詞詩壇家。杜牧の詩に、今代風韻將、誰登李杜壇。【五】 錦頭先夏龍 玉川子が月蝕の詩に、北方寒魚被蛇縛、藏頭入鏡如入獄。又いふ、寒魚夏龍一種味、且當以三其肉充之。羅は肉のあつもの。【六】 秋風 唐文粹に、羅隱が秋風賦序を載せていふ、秋風如絲也、致身羅網間、實以亦羅網間。【七】 險隘紅 元稹が鶯鶯傳に、雙臉斷紅而日。陳子良が詩に、物業來眉上、桃花落臉紅。【八】 憶賀老 李太白が憶賀老詩に、碧山無賀老。【九】 終童 前漢の終童傳に、年十八還爲博士弟子、後爲諫大夫、死時年二十餘、故世謂之終童。【一〇】 抱鶴雙雙 陸龜蒙の詩に、寒鴉驚起一雙雙。樂天の詩に、魚佩奪調光照地、鶴衝瑞帶勢冲天。又いふ、魚龍白金一隨步履、鶴舞紅紗一繞身飛。【一一】 履屨 漢、西域傳實に明珠文甲通犀翠羽之珍。【一二】 小蠻 白樂天が愛妓の名、舞を善くす、樂天の詩に、楊柳小蠻腰。【一三】 嚙嚙翁 白樂天をいふ。雲溪友議に、李林宗、字直木、嘗謂白爲嚙嚙翁云云。張子野に妾がある。故に樂天を以て之に比する。唐の寶象（字は友封）性温雅にして、多く論を持すること能はず。士友言議の際、動して發せず。白樂天等目して、嚙嚙翁となす。

【題義】 此詩は、熙寧六年正月（東坡三十八歳の時）の作である。紀昀いふ、四句意欲弄弄姿、轉似荆公一鳥不鳴之句と。王荆公が鍾山の詩は、澗水無聲遠竹流、竹西花草露春柔、茅簷相對坐終日、一鳥不啼山更幽といふのである。これは梁の王籍の鳥啼山更幽を反したもので、王籍の詩意は、山の閑静を破つて、鳥が啼いたから、噪がしかるべきに一段と閑静になつたといふ意である。荆公は王籍の本意を取つて而も反した語句を用ゐて居る。それで蕪苑卮言に、一鳥不鳴山更幽、有何趣味、宋人

可可笑、大槩如此と評して居る。紀昀又いふ、五句爲敵字不妥、若作無敵、又與東坡不飲不食合と。【詩意】 例の七夕の詩に和して、詩句を得、頭を參星・尾星の方に轉ずる。（南方を望む意）青春の事先づ睡に入り、白髪となつても、窮するを遣れない。酒社（酒宴の集り）には我は敵となつたが、詩壇（詩を作る仲間）には、君の功があらはれた。頭を縮めることは、夏の蠶に先だち、（蠶よりも優さる意）腹を實すことも、蜘蛛を鄙しめる程である。舞餘裙帶綠雙垂といふは、永叔の詞だが、其をば唱へることなけれ、現に人の臉の斷紅となるものが少くないからである。かくて舊交を回想して賀老を懐ひ、新進の俊秀である終童をば謝する。身に佩べる袍鶴・魚袋・瑞帶などは、歩に隨つて躍る。そして履屨は、一一要處に通ずる、屨といふ獸の角の中心に細い穴があつて通せる状態は、人の心の相通ずるによく似て居る。又、因にいふが、白樂天の愛する舞妓小蠻は、現に健在なりや否や、試に嚙嚙翁と言はれた白樂天にお尋ね申さう（張子野に妾があるから、樂天を以て之に比したのである。）

正月九日有美堂飲醉歸徑睡五鼓方醒不復能眠起閱文書得鮮于子駿所寄雜興作古意一首答之

正月九日、有美堂に飲ひ、酔ひて歸り、徑に睡る、五鼓方に醒む、復眠ること能はず、起ちて文書を閱して、鮮于子駿が寄せし所の雜興を得、古意一首

古今體詩 正月九日有美堂飲醉歸得鮮于子駿所寄雜興答之 六五九

を作りて之に答ふ

衆人事紛擾志士獨悄悄

衆人は紛擾を事とし、志士は獨悄悄

何意琵琶絃常遭腰鼓鬧

何の意ぞ琵琶の絃、常に腰鼓の鬧しきに遭ふ

三杯忘萬慮醒後還皎皎

三杯萬慮を忘れ、醒後還皎皎

有如轆轤索已脫重縈繞

轆轤の索の如きあり、已に重縈繞を脱す

家人自約飭始慕陳婦孝

家人自ら約飭し、始は陳婦の孝を慕ふ

可憐原巨先放蕩今誰弔

憐ひべし原巨先、放蕩今誰か弔する

平生嗜羊炙識味肯輕飽

平生羊炙を嗜ひ、味を識る肯て輕しく飽かんや

烹蛇啖蛙蛤頗訝能稍稍

蛇を烹て蛙蛤を啖ひ、頗る訝る能く稍稍

憂來自不寐起視天漢渺

憂へ來つて自ら寐せず、起て視る天漢の渺たるを

聞干玉繩低耿耿太白曉

聞干玉繩低れ、耿耿たり太白の曉

【學解】 有美堂 杭州開元寺、有美堂在郡城吳山、西湖遊覽志餘に有美堂在鳳凰山之頂、左江右湖、舉陣目下、五鼓、五更、五夜に同じ、午前四時ないふ、一夜を甲乙丙丁戊に分つ、甲夜は今の午後八時、乙夜は十時、丙夜は十二時、丁夜は午前二時、戊夜は四時、鮮于侁、宋史に、鮮于侁、字子駿、閬州人、作詩平淡澹粹、尤長於楚詞、蘇軾詞九調、謂近屈原宋玉、自以爲不可及也、紛擾、後漢書、朱浮傳に、交易紛擾、悄悄、悄然といふに同じ、憂へる貌、詩の彫風、柏舟に、憂心悄悄、腰鼓、古樂府、共戲樂に、腰鼓鈴杵各相應、龍退之の時に、數杯滯、勝韻、曹鼎、皎皎萬慮還新、轆轤、廣韻に、轆轤、圓轉木也、家人自約飭、云云、漢書に、原涉字巨先、或謂涉曰、子本東二千石之世、結髮自修以行、美推財、雖讓爲名正、復、鍾取仇、猶不失仁義、何故自放縱爲輕俠之徒乎、涉曰、子獨不見家人慕婦耶、自約敷之時、意乃慕宋伯姬及陳孝婦、亦爲盜賊所汚、遂行淫佚、如其非禮、然不能自還、吾猶此矣、烹蛇啖蛙蛤、龍退之が南食詩に、我來嘗鱸鱖、自宜味南菜、惟蛇香所識、宜彈口眼揀、又、答柳柳州食蝦蟆詩に、張餒爲蛙蛤、於實無所較、余初不下喉、云云、悄悄、悄悄は漸く進む貌、戰國策に、悄悄置食之、玉繩、星の名、玉繩の北に在る、張衡の賦に、上霽開而仰視、正視遙光與玉繩

【題義】 此詩も前詩と同じく、熙寧六年正月の作である。(東坡が子駿の詩に答へた時は、子駿は利州に在つた) 庚溪詩話に、嘉祐初、龍圖閣直學士、尙書吏郎中梅公儀守杭、上特製詩龍賜、其首章曰、地有吳山美、東南第一州、梅既到杭、遂建堂山上、名曰有美、歐陽修爲記とある。有美堂に飲み、酔うて歸り、夜起きて此一首が出来たのである。紀昀いふ、入手直插兩喻、筆力奇峭と。又いふ、烹蛇二句、比勉強從時。又いふ結處少落、窠臼と。窠臼とは、常を蹈み、故を襲ぐの謂である。

【詩意】 衆人は交易紛擾を事とし、志士は獨悄悄(しほしほと憂へる)として居る。琵琶の絃聲が常に腰鼓の鬧しし戲樂に遭ふやうなもので、これは、そもそも何の意ぞ。酒を呼ぶ三杯、暫く酔ひて、憂を忘れるも、醒めると、復、心頭に萬慮が新になる。恰も轆轤の索のやうで、而も今は已に縈繞を脱する。家人が自ら約飭(つつまやかに、いましめる)する時は、始は陳婦の孝を慕つて居る。併し、

境遇が思想を變へる。昔、漢に原涉といふ人があつた。或人、涉を讒つて、君は吏であつた日は、自ら修めて仁義を失はなかつたが、何故に今はかく放縱にして輕俠の徒となつたのかと言つたとき、涉は應へて、子は家人寡婦を見ないか、約筋の時には、意では宋の伯姬や陳の孝婦などの行を慕つて居たが、一旦盜賊に身を汚されてからは、遂に淫佚を行つて非禮を知りつつも、自ら還ることの出来ないものがある、之と同じである、と言つたさうである。原巨先の放蕩をば、今、誰か弔する。平生羊の炙り物を嗜み、其の美味を知つて居るが、肯て輕しくは飽食しない。蛇を烹たり、蛙蛤を啖つたりする。最初は、喉を下らなかつたが、近頃は亦よく稍稍露食する。憂へ來つて寝ても寐られない。起きて大空を仰いで天の河の渺渺たるを視る。關干（欄干に同じ）に當つて玉繩星が低れて居る。丁度、曉に向はうとした時分で、太白星が耿耿として大空に懸つて居る。

次韻答章傳道見贈

次韻して章傳道の贈られしに答ふ

竝生天地宇同闊古今宙
視下則有高無前孰爲後
達人千鈞弩一弛難再發
下士沐猴冠已繫猶跳踈

竝に生ず天地の宇、同じく闊す古今の宙。
下を視れば則ち高きあり、前なく孰かを爲さん。
達人は千鈞の弩、一たび弛めば再び發き難し。
下士は沐猴の冠、已に繫いで猶は跳踈す。

欲將駒過隙坐待石穿溜
君看漢唐主宮殿悲麥秀
而況彼區區何異壹醉富
鷄鷄非所養俯仰眩金奏
觸體有餘樂不博南面后
嗟我昔少年守道貧非疚
自從出求仕役物恐見囿
馬融既依梁班固亦事竇
效贖豈不欲頑質謝鑄鏤
仄聞長者言婢直非養壽
吐面慎勿拭出胯當俯就
居然成懶廢敢復齒豪右
子如照海珠綱目疎見漏
宏材乏近用巧舞困短袖

駒を將ひて隙を過らんと欲し、坐して石を穿つ溜を待つ。
君看よ漢唐の主、宮殿麥秀を悲む。
而るを況んや彼の區區、何ぞ壹醉の富めるに異らんや。
鷄鷄を養ふ所にあらず、俯仰金奏に眩す。
觸體餘樂あり、南面の后に博へず。
嗟我昔少年、道を守りて貧しきも疚しきにあらず。
出でて仕を求めしより、物に役して囿せらるるを恐る。
馬融は既に梁に依り、班固亦竇に事ふ。
贖に效ふ豈欲せざらんや、頑質鑄鏤を謝す。
仄に聞く長者の言、婢直壽を養ふにあらず。
面に吐くも慎んで拭ふこと勿れ、胯に出づる當に俯して。
居然懶廢を成す、敢て復豪右に齒せん。
子は海を照す珠の如きも、綱目疎にして漏るるを見る。
宏材は近用に乏しく、巧舞は短袖に困む。

坐令傾國容臨老見邂逅。

坐に國を傾むく容をして、老に臨んで邂逅を見しむ。

吾衰信久矣。書絶十年舊。

吾が衰ふること信に久し、書絶ゆ十年の舊しき。

門前可羅雀感子煩屢叩。

門前雀を羅にすべし、子の屢叩くを煩はさるるに感じ、

願言歌緇衣子粲還予授。

願くは言に緇衣を歌はん、子の粲たる予が授を還さん。

【字解】(一) 韋傳道。韋傳字は傳道、周の人、吳郡文粹に、蘇子美が答詩内の二句を載せていふ、南園韋其氏、傳名字傳道と。
(二) 天地字、古今甫。尸子に、四方上下曰宇、往古來今日宙。此の語は、淮南子にも見ゆ。
(三) 達人。左傳、昭公七年に、吾聞
辨有達者、曰、孔丘、聖人之後也。又いふ、聖人有明德者、若不富世、其後必有達人。魯康公絶交の書に、柳下惠、東方朔、
達人也。賈誼が鳳鳥賦に、達人觀兮、物亡不可。
(四) 千鈞。南史、宋の高祖紀に、軍中多萬鈞、神弩所至、其不摧陷。
(五) 一弛。禮記、雜記篇に、張而
不弛、文武弗能也、弛而不張、文武弗爲也、一張一弛、文武之道也。穀、廣雅に、穀、張也。
(六) 法服冠。楚の人は、張
を法服といふ。漢書、項籍傳に、韓生曰、人謂楚人沐猴而冠、果然。
(七) 將。勳、勳、莊子、知北遊に、人生天地之間、若白駒
之過隙、忽然而已。
(八) 石穿。漢、枚乘の傳に、太山之謂穿石、漸磨使之然也。
(九) 悲。哀秀。史記、宋の世家に、箕子
朝周、過故殷虛、感宮室毀壞生禾黍、乃作麥秀之詩曰、麥秀漸漸兮、禾黍油油、彼狡僞兮、不與我好兮。
(十) 悲。醉當
詩の小雅、小宛に、彼昏不知、壹醉日富。箋にいふ、無知之人、飲酒一醉、自謂日益富也。
(十一) 蓬閣。海鳥の名、蓬、愛居
に作る。左傳、文公二年、臧文仲不知者三、其一祀愛居。莊子の至樂篇に、海鳥(其名を愛居といふ)止於蓬閣、魯侯御(迎へる)
而觴之于廟、奏九韶以爲樂、具太牢、以爲膳、鳥乃眩視憂悲、不敢食、一仰、三日而死、此、以己養愛鳥也、非、以
鳥養愛鳥也。
(十二) 鶴。鶴有、鶴、雲、莊子の至樂篇に、莊子之楚、見空鶴、鶴以馬捶而問之、夜半、鶴見夢曰、死
無君於上、無臣於下、亦無四時之事、從然(從容の意)以天地爲春秋、雖南面王樂、不能過也。
(十三) 其非。狄、莊

子、蘇王篇に、原直應子貢曰、意聞之、無財謂之貧、學而不能行、謂之病、今貧也、非病也。
(一) 恐。見、聞。莊子、
齊物論に、方且爲物役、徐無鬼に、皆聞於物。聞は聽取の意。
(二) 馬融。馬融字は季重、後漢の大儒。郭太后の朝に臨み
し時、融は鳳雛を以て贊頌に遣ふ。其後、郭氏に怒り、歌て復、勢家に忤はな。遂に鸚鵡の爲に草して李固を奏す。又、大將軍西
華の頌を作る。
(三) 班固。班固字は孟堅、扶風の人。永元の初、大將軍竇憲に從つて匈奴を討ち、功があつた。憲が敗れる
に及び、固、先づ坐して、官を免ぜられ、既にして獄に繋がれて死んだ。
(四) 效。漢、莊子、天運篇に、西海病、心而厲其里、其
里之隴人、見而美之、歸亦赤心而厲其里。
(五) 頑。頑、後漢書、橋元傳に、特以頑質、見納君子。
(六) 辨。張華の賦に、
不煩、惟鋒之鑄鍊。
(七) 仄。仄、長者言、司馬遷が在安に答ふる書に、僕雖能驚、亦側聞長者遺風矣。
(八) 辨。剛直にしても
とる。離騷に、賦辨直以忘身兮、終然歎乎羽之野。後漢書に、韓直之風、于斯行矣。
(九) 美。史記、老子傳に、以其修
道而美也。
(十) 吐。吐、面憤勿域。唐書、裴師德の傳に、其弟之官、散之財、弟曰、人有唾面、漱之乃已、師德曰、未也、
漱之、是適其怒、正使自乾耳。
(十一) 居然。其の儘、坐して動かない。晉書に、居然是出羣之器。
(十二) 豪右。右は右族、後
漢書、羊祜傳に、帝拜、彭河南尹、禁制豪右、京師傾之。左思の詩に、豪右僧足陳、張衡が四愁の詩序に、豪右兼并之家。
(十三) 巧
目。唐書の狄仁傑傳に、可謂滄海遺珠矣。前漢志に、細細吞舟之魚。
(十四) 毛。近用。後漢書に、器博者無近用。
(十五) 巧
知。史記に、韓非曰、長袖善舞。漢文帝の詩に、工歌巧舞、工歌巧舞入人意。
(十六) 傾。傾、前漢、外戚傳に、李延年
歌曰、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國。
(十七) 邂逅。詩、鄭風に、邂逅相遇、道我願兮と見えて、思ひが
けなくめぐり合ふこと。毛傳にいふ、解悅之貌と。
(十八) 子。子、子、子、詩、鄭風に、緇衣之宜兮、敝予又改爲兮、適子之
館兮、適子授子之樂兮。樂は黄白に換いた来。

【題義】 韋傳道は、一老者である。東坡に稍卑うして時宜に適ふやうにと勸める。東坡は、爾の如く
自ら貶すと、終に俗に諧はないから、爲さないのであると言つた。此詩の歸宿する所は此意である。
紀昀いふ、鋒銜太露、而縱橫之氣、自爲可可愛、と。

【詩意】共に天地の宇に生じ、同じく古今の宙を閱する。下を視るのは、己が高きに居るからである。後を爲すといふのも、前がある爲めで、前なくば誰か後を爲さうぞ。達人（達人といふに同じ、道理に通達した人）が、千鈞の弩も、一たび弛める（弦を落す）と、再び發き難い。低級の人には、沐猴に冠を着けたやうなもので、已に頭上に繁いで、なほ跳驥する（跳ははねる、驥は走る意）一方に駒を將ゐて戸隙を過ぎらうとし、他方に於て、坐して溜の石を穿つのを待つて居る。併し、榮枯は移る世の中であるから、漢や唐の人君が堂堂たる宮殿も、いつしか毀壞して、禾黍を生じ、麥秀の詩を作つて、之を悲しむやうになつた。まして、世の區區たる輩の生涯は、彼の飲酒一醉、酒の氣に乗じ、おごり氣が出でて、大分限の量見となるのと異ならない。さて、鷓鴣（海鳥）は、人を養ふ道で養ふべき所のものでない。昔、海鳥が魯郊に止まつたとき、魯侯は迎へて之を廟に饗し、舜の樂を奏したり、太宰を具へたりすると、鳥は乃ち眩視憂悲し、敢て一嚮を食はず、敢て一杯を飲まず、三日にして死んだといふことである。己を養ふ養ひ方で鳥を養はうとしたからである。故に海鳥の俯したり、仰いだりして、金奏に眩するの無理はない。又、かの憫體にも、餘樂があつて、南面の君の樂にも易へられない。莊子が楚に之き、途中に憫體を見る。鞭を以て打ち、之を枕にして臥す。夜半に憫體曰く、死せば上に君なく、下に臣がない。また四時の事もなく、從容として天地と壽命を同うす。其の樂たる、南面の王と雖も之に過ぎないと言つたさうである。ああ、我も昔は少年、道を守つて貧に居るも、心の中は疚しくはない。然るに出でて仕を求めてからは、物に役され、聞されることを恐れた。昔、馬

融は、梁冀に依つたので、正直の士に羞とされた。又、班固の寶憲に從つたことも、感服しない。梁冀、寶憲は、竝に是れ漢時の人、時君が不明であるに因つて、驟に顯位に陞つたが、驕暴であつて、威福を竊み、事を用ゐた。そして馬融・班固の兩儒は、竝に之に依託した。東坡は當時の執政大臣を誣毀して、我は班固・馬融が苟容依附に效ふことが出来ない。頑質の我は鑄鑠（彫刻する）することを謝すると言つたのである。側に聞けば、長者の言は、剛直にして理に戻つて居る。故に天壽を養ふものでない。唐の婁師徳は、其弟の赴任するとき、誠めて、人有唾面、潔之、是違其怒、正使自乾一耳と言つたさうである。韓信を學んで勝下に出づる、當に伏して就くべきである。もとの儘に動かさないで、やがて懶廢をする。敢てまた豪強のものと並ぶことをしない。子は海を照らす珠の如きも、網の目が疎いために漏れたに違ひない。宏材は近用に乏しい。長袖は善く舞ふ。故に巧舞は、短袖に苦む。坐に美人をして老に臨んで思ひがけもなく相違はしめる。余の衰へたのも久しい。音書も絶え、十年の舊しき、人の出入稀となつて、門前に雀の網を置くことが出来た。子が屢訪問されたのに感じ、願くは言に詩の細衣の章、即ち細衣の宜しき、敵れなば又改爲せん、子の館に適き、還らば予子に樂を授けん、を歌はう。樂は眞白の米で、飲食の中で、最も貴い所から、馳走の意に用ゐる。子の樂たる予に授を還すことであらう。（寄せた詩の返しがあることと信ずる。）

法惠寺橫翠閣

法惠寺橫翠閣

【字解】

法惠寺 杭州圓照

朝見吳山橫

朝に吳山の横を見、

暮見吳山縱

暮に吳山の縦を見る。

吳山故多態

吳山は故態多く、

轉折爲君容

轉折して君の爲に容くる。

幽人起朱閣

幽人朱閣を起し、

空洞更無物

空洞更に物なし。

惟有千步岡

惟千歩の岡あり、

東西作簾額

東西に簾額を作す。

春來故國歸無期

春來りて故國歸るに期なく、

人言秋悲春更悲

人は秋を悲しといふも春は更に悲し。

已泛平湖思濯錦

已に平湖に泛びて濯錦を思ひ、

更看橫翠憶峨眉

更に横翠を見て峨眉を憶ふ。

雕欄能得幾時好

雕欄能く幾時の好きを得る、

不獨憑欄人易老

獨欄に憑る人の老い易きのみならず。

に、法惠寺在大井巷、吳越王錢氏建、嘉興興慶寺、治平二年改賜今額。臨安志には、西林法惠院、乾德元年吳越王建、舊名興慶寺、詳符中、改今額。西湖遊覽志に、自清波門折而南爲方家橋、給時舊有法惠院、慶曆間、法言作西軒於此。【一】吳山、城中に在る。吳の人が子胥を山上に殉る。因つて胥山と名く。【二】幽人、易の履卦に、履道坦坦、幽人貞吉。【三】朱閣、雕欄が時に、元景胤朱閣。【四】空洞更無物、晉書に、王導嘗枕周顛膝而指其腹曰、卿此中、何所可有也、答曰、此中空洞無物、然足容一獨數百人、導亦不以爲忤。【五】濯錦、李賀の詩に、彩雲濯錦若霜痕。【六】濯錦、成都の濯錦江をいふ。興國考に、錦江在成都府城南、一名汶江、織錦濯此則鮮麗、其地

百年興廢更堪哀

百年の興廢更に哀しむに堪へたり、

懸知草莽化池臺

懸に知る草莽も池臺に化するを。

遊人尋我舊遊處

遊人我が舊遊の處を尋ね、

但覓吳山橫處來

但吳山の横はる處を覓めて來る。

【題義】法惠寺の横翠閣に登臨し、吳山が縦横の奇なるを説く。百年興廢云云は、雍門周が所謂曲池既已平、高臺亦已傾の意である。紀昀いふ、短峭而難以曼聲、使三人怡然易感と。(曼聲は長い聲、列子に曼聲長歌の字面あり。)

【詩意】朝に吳山の横面を見、暮に吳山の縦面を見る。縦も横も亦、奇である。吳山は元來、姿態が多く、轉折して君の爲に容つくる。(紀昀いふ、起得峭拔と。峭拔とは、用筆が高く拔んで俗を絶つこと。幽人(世を避けて居る人)が此の勝地に横翠閣を起した。閣は空洞で更に物がなない。惟千歩の岡があつて、東西に簾額を作して居る。春になつても、故國に歸へる期がないから、人は秋を悲しいふも、我には春が更に悲しい。已に平湖に泛んで、成都の濯錦江を思ひ、此の横翠閣を看ては嘉州の峨眉山を憶ふ。(東坡は蜀の人であるから、故にいふ。)雕欄をした美しい欄干も、能く幾時の好看を

得るであらう。獨、欄干に憑る人の老い易いばかりでなく、百年興廢の跡に想到すると、更に哀しいものがある。遙に度つて知る草莽の地も、いつしか立派な池臺と化して、遊覧の人も我が舊遊んだ處を尋ねて、但、吳山の横はる所を覓め來ることであらう。(詩醇の評に、清麗羊眠、神韻欲絶と見え居る。羊眠とは草の深く茂れる貌で、陸機の賦にも、清麗羊眠とある。)

祥符寺九曲觀燈

祥符寺九曲觀燈

紗籠擊燭迎門入。

紗籠燭を撃つて門に迎へて入る、

銀葉燒香見客邀。

銀葉香を燒いて客を邀ふるを見る。

金鼎轉丹光吐夜。

金鼎丹を轉じて光夜に吐き、

寶珠穿蟻鬧連朝。

寶珠蟻を穿ちて鬧しきこと朝に連る。

波瀾炤裏元相激。

波瀾裏に翻つて元相激し、

魚舞湯中不畏焦。

魚は湯中に舞ひて焦るるを畏れず。

明日酒醒空想像。

明日酒醒め空しく想像すれば、

清吟半逐夢魂銷。

清吟半は夢魂を逐うて銷す。

寶珠穿蟻 小説載、有以九曲寶珠欲穿之而不得、問之孔子、孔子教以蠶、置於線、使蟻通焉。唐、楊綽が蟻穿九曲珠賦に轉之丹服之、三日得仙。

蠶爲質分微渺、珠有鑿而虛圓、荷一縷之是葉、雖九曲而可穿。【〇】魚舞湯中、云云 琉璃瑤中、魚を其の中に置く、其の後、燈を點するに、魚は遊泳して畏れなかつた。

【題義】 此時は、熙寧六年正月の作。九曲法濟院で、法の燈籠を觀た感想を述べたのである。

【詩意】 祥符寺に至ると、紗で製した燈籠の燭を撃つて、衆子を門に迎へる。そして案内する。又、銀葉に香を燒いて客を邀へるのを見る。仙術に用ゐる金鼎で、例の丹藥を鍊ると、其の光が夜に吐き、寶珠を蟻が穿つて鬧しきことが朝まで連る。波は鏡裏に翻へつて、元相激し、魚は湯中に舞つて焦れることも畏れない。昔、三國の時に、方術の士があつて、藥を魚に傳け、沸鼎の中に投じた所、魚は徘徊して死ななかつたさうである。明日酒が醒めて、空しく想像すると、清吟は半は夢魂を逐うて銷えて行く。

【餘論】 正月十五日を上元といふ、昔は上元張燈の風習がある。史記、樂書に、漢家祀太一、以昏時祠到明とある。今人の正月望日、夜遊觀燈は其の遺事である。事類全書に、唐太宗の時、三元夜を禁せず、上元には乾元門に御し、中元、下元は東華門に御す。そして上元の遊觀が、獨、盛である。又、通鑑、唐の僖宗紀に、胡三省註に、道書以正月十五日爲上元、七月十五日爲中元、十月十五日爲下元とある。

上元過祥符僧可久房蕭然無燈火

上元に祥符の僧可久の房に過る、蕭然として燈火なし

古今體詩 祥符寺九曲觀燈 上元過祥符僧可久房蕭然無燈火

門前歌舞闌分朋

門前歌舞分朋を闌はす、

一室清風冷若冰

一室清風冷なること氷の若し。

不把琉璃閑照佛

琉璃を把つて閑に佛を照らさず、

始知無盡本無燈

始めて知る無盡は本燈なきを。

【字解】【一】上元 正月十五日をいふ、前詩の餘韻に詳なり。【二】僧可久 臨安志に、西湖僧作詩者、照寧間、有清順可久兩人、願字怡然、久字逸老、所居皆湖山勝處、而清約介僻、不妄與人交、士大夫多往遊見、時有饋之米者、所取不過數升、以瓶貯几上、日取二三合食之。【三】闌分朋 庾信が春賦に、分朋入射堂、潘唐書の中宗紀に、自勞林門入集於梨園、建場、分朋拔河。按河は、古は之を牽鉤といふ、今の拉綱の戲である。【四】冷若氷 一本に飲氷に作る。【五】無盡本無燈 維摩經に、法門名無盡燈、譬如一燈然百千燈。

【題義】照寧六年の上元に祥符寺に詣で、僧可久の僧房に過つて、上元の張燈を觀ようとしたが、蕭然として燈火がないので、此詩が出来たのである。武林梵志に、法師可久、錢塘錢氏子、喜爲古律詩と。東坡の郡に監たりしとき、日に師と詩友となる。西湖の祥符に居る。東坡は、元夕、九曲に燈を觀ようとして、從者を去り、獨行いて師の室に入つたが、了に燈火もなく、但、蘆菊の餘香を聞くのみ。歎仰して詩を留めたといふことである。

【詩意】お寺の門前では歌ひつ舞ひつ分朋を闌はして居る。併し僧房に入ると、一室の清風は、冷かなること氷の如くであり、蕭然として燈火を見ない。そして師は琉璃を把つて閑に佛を照らさうともしない。始めて無盡は、本、無燈といふ言葉の意味が解つた。

正月二十一日病後述古邀往城外尋春

正月二十一日病後、述古邀へて城外へ往き、春を尋ぬ

屋上山禽苦喚人

屋上の山禽苦に人を喚び、

檻前冰沼忽生鱗

檻前の冰沼忽ち鱗を生ず。

老來厭伴紅裙醉

老い來つて紅裙に伴ひて酔ふことを厭ひ、

病起空驚白髮新

病より起て空く驚く白髮の新なるに。

臥聽使君鳴鼓角

臥して使君の鼓角を鳴すを聴き、

試呼稚子整冠巾

試みに稚子を呼んで冠巾を整へしむ。

曲欄幽榭終寒窘

曲欄幽榭に終に寒窘せん、

一看郊原浩蕩春

一看す郊原浩蕩の春。

【字解】【一】述古 陳襄、字は述古、學者稱して古童先生といふ、前に出づ。【二】生鱗 郭景純が遊仙詩に、麗國西南來、滄波湧鱗起。註にいふ、鱗爲麗國風、水波湧然如魚鱗之起也。【三】紅裙醉 魏暹之の詩に、不解文字飲、惟能紅裙。杜甫の詩に、越女紅裙濕、幽翠凝嬌愁。紅裙は妓女の稱。【四】白髮新 李白の寄遠詩に、朱顏形落盡、白髮一何新。【五】臥聽 晉書の鄭超傳に、帳中臥聽之。【六】使君 魏暹の詩に、使君は刺史をいふ、漢の世、太守を府君、刺史を使君といふことは、前にも述べた。晉書に、王述爲會稽、以母喪、居郡縣、職之代述、止一巾、述每聞角聲、謂職之當候已、如以此者累年而職之竟不顧。後漢の公孫瓚言ふ、鼓角鳴於地中、太守の出づる、鼓角を鳴らすを得。【七】稚子整冠巾 杜子美の詩に、稚子戲成綽作釣鉤。又いふ、笑僮僮人爲整冠巾。韓退之の詩に、我欲收斂加冠巾。【八】曲欄 白樂天の詩に、獨上危樓覓曲欄。【九】幽榭 鄭谷の詩に、幽榭名園臨紫陌。【一〇】郊原浩蕩 杜子美の古相行に、崔嵬枝幹郊原古。浩蕩は廣大なること。

古今體詩 正月二十一日病後述古邀往城外尋春

【題義】此詩も熙寧六年正月の作、二十一日陳述古が、病後の東坡を遊へて城外へ春を尋ねたので、此詩がある。述古は、東坡が寄せられた詩に和していふ、郊原芳意動遊人、湖上晴波見躍鱗、閒逐牙旗千騎遠、暗驚梅萼萬枝新、尋僧每拂題詩壁、邀客仍將漉酒巾、寄語文園何所苦、且來相伴一行春と。

【詩意】春が来て、屋上の山禽は、苦に人を喚んで居り、欄干の前にある氷つた沼も、水面に忽ち鱗を生ずる。(氷が解けて、波の起ること、魚の鱗の如きをいふ。)老いては、最早、紅裙に伴つて酔ふことなどは、厭である。併し病より起きて我が白髪の新なるにも驚いた。臥して鼓角の鳴るのを聞いたから、使君の出かけられたことが分つた。だから、子供を呼んで冠巾を整へしめたのである。かくては終に曲つた欄干や、幽な樹に、寂しくも窘しむことであらう。それで、郊原浩蕩の春色を一看した譯である。(紀昀いふ、二語寫出胸次)

有以官法酒見餉者因用前韻求述古爲移廚飲湖上

喜逢門外白衣人

門外白衣の人に入逢ふ喜び、

【字解】【一】官法酒、周禮に、

官法酒を以て餉らるる者あり、因て前韻を用ひ述古に求め、爲に廚を移して湖上に飲む

欲脍湖中赤玉鱗

湖中赤玉の鱗を脍にせんと欲す。

遊舫已粧吳榜穩

遊舫已に粧ふ吳榜の穩なるを、

舞衫初試越羅新

舞衫初めて試む越羅新なるを。

欲將漁釣追黃帽

漁釣を將て黃帽を追はんと欲し、

未要靴刀抹絳巾

未だ靴刀絳巾を抹するを要せず。

芳意十分強半在

芳意十分強半在り、

爲君先踏水邊春

君が爲に先踏む水邊の春。

【一】赤玉鱗、卓氏藻林に、赤玉鱗、魚也と見ゆ。【二】吳榜、晉の裴毅傳に、吳榜越船、不飽無水而存。楚辭の王註に、吳榜、越船也。【三】遊舫、李賀の詩に、越羅衫狀迎春風。杜子美の詩に、越羅製錦金粟尺。【四】黃帽、黃冠といふに同じ、黃冠は田夫の服。禮記の郊特牲に、黃衣黃冠而祭。又、道士の冠をいふ。【五】絳巾、唐の制、戎服を以て見えるものは、左に刀を握り、右に弓矢を屬し、帕首袴脚(帕首は、鉢巻、袴脚は腹引と靴)を着ける。絳巾を抹するものを紅抹額といふ、乃ち帕首の謂である。韓退之の文に紅抹首髻髻刀。また、元和聖德詩の註に、再會廬山之夕、大風雷震、有甲兵千餘人、其不披甲者、以紅裙帽抹其額、自此遂爲軍容之服。【六】芳意、韓退之の詩に、芳意飽呈瑞。

【題義】此詩も前詩と同じ時の作。官法酒を餉つたものがあつたから、陳襄に約して廚を湖上に移して宴を開いたのである。

【詩意】門の外に白衣の人が酒を送つて來たのを喜ぶ。酒を助ける肴に湖中の紅魚を脍(細く切つた

古今體詩 有以官法酒見餉者因用前韻求述古爲移廚飲湖上

生(なま)の肉(にく)にしよとす。遊(あそ)坊(ぼう) (畫(え)坊(ぼう)ともいふ)には既に吳(ご)榜(ぼう) (船(ふね)の棹(しゅう))の穩(ま)かなるを備(そな)へ付(つ)けた。舞(ま)衫(しん) (舞(ま)ひの衣(え))は、初(はじめて)て越(こ)羅(ら)の新(あたら)しいものを試(こ)みる。漁(り)釣(り)をなして田(でん)夫(ふ)とならうと欲(ほ)するから、未(ま)だ靴(くつ)を穿(き)ち、刀(た)を握(にぎ)り紳(しん)巾(ぎん)を抹(ぬ)するなど軍(ぐん)容(よう)の服(ふく)を嚴(げん)めしくする必要(ひつよう)も見(み)ない。春(しゅん)意(い)は十(じゅう)分(ぶん)であるから、君(きみ)の爲(ため)に先(ま)登(のぼ)して水(みづ)邊(べ)の春(はる)を尋(たず)ねやうと思(おも)ふ。

飲(い)湖(こ)上(じやう)初(はつ)晴(せい)後(ご)雨(う)二(に)首(しゆ)

湖(こ)上(じやう)に飲(い)む、初(はつ)は晴(せい)れ後(ご)は雨(う)ふる 二(に)首(しゆ)

朝(あ)曦(き)迎(むか)客(きやく)豔(えん)重(じゆう)岡(かう)

朝(あ)曦(き)客(きやく)を迎(むか)へて重(じゆう)岡(かう)に豔(えん)なり、

晚(ばん)雨(う)留(とど)留(とど)人(ひと)入(い)醉(すい)郷(かう)

晚(ばん)雨(う)人(ひと)を留(とど)めて醉(すい)郷(かう)に入(い)らしむ。

此(こ)意(い)自(みづか)ら佳(か)不(ふ)會(かい)

此(こ)の意(い)自(みづか)ら佳(か)なれども君(きみ)會(かい)せず、

一(いち)杯(はい)當(あた)屬(ぞく)水(すい)仙(せん)王(わう)

一(いち)杯(はい)當(あた)り水(すい)仙(せん)王(わう)に屬(ぞく)すべし。

【字解】湖(こ)上(じやう) 西湖(せいこ)の上(じやう)、

西湖(せいこ)は杭州(こうしゅう)の城西(せいせい)に在(あ)る。周(しゅう)回(かい)三十(さんじゅう)里(り)、其(その)源(げん)は、武(ぶ)林(りん)泉(せん)より出(い)づ。唐(たう)より以(も)つて、東(とう)南(なん)遊(ゆう)賞(しょう)の勝(か)地(ち)とな(な)る。

【題義】此(こ)詩(し)も熙(せい)寧(ねい)六(ろく)年(ねん)正(せい)月(げつ)二十(にじゅう)一(いち)日(にち)の作(さく)で、西(せい)湖(こ)の上(じやう)に飲(い)み、初(はつ)は晴(せい)れ、後(ご)に雨(う)降(ふ)り、山(さん)色(しき)が空(くう)濛(もう)であつた、竝(なら)びに記(き)するに詩(し)を以(も)つてしたのである。

【詩意】朝(あ)日(じつ)は客(きやく)を歡(こ)び迎(むか)へて、重(じゆう)れる岡(かう)に、うるはしい光(こう)彩(さい)を放(はな)つた。又(また)、晚(ばん)雨(う)は人(ひと)を留(とど)めて醉(すい)郷(かう)の別(べつ)天(てん)地(ち)に入(い)らしめた。醉(すい)之(し)郷(かう)去(き)中(ちゆう)國(こく)、不(ふ)知(ち)其(その)幾(いく)千(せん)里(り)也(なり)、其(その)土(ど)曠(くわう)然(ぜん)無(む)涯(げい)、無(む)丘(きゆう)陵(りやう)阪(ばん)險(けん)、其(その)氣(き)和(わ)平(へい)一(いつ)投(たう)、無(む)海(かい)潮(しう)寒(かん)暑(しよ)、其(その)俗(ぞく)大(だい)同(どう)、無(む)邑(い)居(きよ)聚(く)落(らく)、其(その)人(ひと)甚(じん)清(せい)、無(む)愛(あい)憎(そう)喜(き)怒(ど)、吸(き)風(ふう)飲(いん)露(ろ)、不(ふ)食(じき)五(ご)穀(こく)、其(その)幾(いく)于(よ)子(し)、其(その)行(かう)徐(じゆ)徐(じゆ)、與(よ)鳥(ちよう)獸(じゆう)魚(ぎよ)鱉(べん)難(なん)處(ち)、不(ふ)知(ち)有(あ)り舟(しゆう)車(しや)器(き)械(けい)之(し)用(よう)、昔(こ)昔(こ)昔(こ)黃(わう)帝(てい)氏(し)嘗(じやう)獲(かく)遊(ゆう)其(その)都(と)、歸(かへ)而(を)香(かう)然(ぜん)喪(さう)其(その)天(てん)下(か)、以(も)つて爲(な)る結(けつ)繩(じゆう)之(し)政(せい)已(い)薄(はく)矣(なり)、降(かう)及(じやく)堯(ぎやう)舜(じゆん)、作(さく)爲(な)る千(せん)鍾(しゆう)百(ひやく)壺(か)之(し)飲(いん)、因(よ)り姑(こ)射(しゃ)神(しん)人(にん)以(も)つて假(かり)道(だう)、蓋(たいてい)至(いた)其(その)邊(べん)鄙(び)、終(しゆう)身(しん)太(たい)平(へい)、禹(う)湯(たう)立(た)法(ぽう)、禮(れい)樂(らく)繁(はん)華(か)、數(すう)十(じゅう)代(だい)與(よ)り醉(すい)郷(かう)一(いつ)隔(かく)、其(その)臣(しん)義(ぎ)和(わ)弄(りゆう)甲(かう)子(し)而(を)逃(に)せ、冀(き)其(その)幾(いく)也(なり)、失(しつ)路(ろ)而(を)道(だう)天(てん)、故(こ)天(てん)下(か)遂(すい)不(ふ)事(じ)、至(いた)乎(こ)乎(こ)末(ま)孫(そん)榮(えい)榮(えい)村(むら)、怒(ど)而(を)昇(せい)其(その)精(せい)丘(きゆう)、階(かい)級(きやく)千(せん)仞(びん)、南(なん)向(かう)而(を)望(ぼう)、卒(そつ)不(ふ)見(み)醉(すい)郷(かう)、武(ぶ)王(わう)得(とく)志(し)于(よ)世(せい)、乃(な)命(めい)公(こう)旦(たん)立(た)酒(しゆ)人(にん)氏(し)之(し)職(しやく)、典(てん)司(し)五(ご)齊(せい)、拓(たく)土(ど)七(しち)千(せん)里(り)、僅(たゞ)與(よ)り醉(すい)郷(かう)一(いつ)達(たつ)焉(なり)、三(さん)十(じゅう)年(ねん)刑(けい)措(そ)、不(ふ)用(よう)、下(か)逮(たいてい)幽(ゆう)厲(れい)、迄(いた)乎(こ)乎(こ)秦(せい)漢(わん)、巴(ぱ)圖(と)喪(さう)亂(らん)、遂(すい)與(よ)り醉(すい)郷(かう)一(いつ)絕(けつ)、而(を)臣(しん)下(か)之(し)愛(あい)道(だう)者(しや)、往(かう)往(かう)竊(せつ)至(いた)焉(なり)、阮(げん)嗣(し)宗(そう)陶(たう)淵(えん)明(めい)等(とう)十(じゅう)數(すう)人(にん)、竝(なら)び遊(ゆう)于(よ)于(よ)醉(すい)郷(かう)、沒(ぼつ)身(しん)不(ふ)返(へん)、死(し)非(ひ)其(その)壤(らう)、中(ちゆう)國(こく)以(も)つて爲(な)る酒(しゆ)仙(せん)云(い)、嗟(さ)乎(こ)乎(こ)醉(すい)郷(かう)氏(し)之(し)俗(ぞく)、豈(た)古(こ)華(か)胥(しよ)氏(し)之(し)國(こく)乎(や)、何(なに)其(その)淳(じゆん)寂(じやく)也(なり)如(ごと)是(なり)、余(よ)將(かう)游(ゆう)焉(なり)、故(こ)爲(な)る之(し)記(き)也(なり)。此(こ)の意(い)は自(みづか)ら佳(か)であるが、君(きみ)には解(かい)らないうやうである。一(いち)杯(はい)當(あた)り水(すい)仙(せん)王(わう)に酌(しやく)むべきであらう。

水(すい)光(くわう)激(げき)豔(えん)晴(せい)方(ほう)好(こう)
山(さん)色(しき)空(くう)濛(もう)雨(う)亦(また)奇(き)
欲(ほ)把(と)西(せい)湖(こ)比(ひ)西(せい)子(し)
淡(たん)粧(じやう)濃(なう)抹(ま)總(そう)相(かう)宜(い)

水(すい)光(くわう)激(げき)豔(えん)として晴(せい)れて方(ほう)に好(こう)、
山(さん)色(しき)空(くう)濛(もう)として雨(う)も亦(また)奇(き)なり。
西(せい)湖(こ)を把(と)つて西(せい)子(し)に比(ひ)せんと欲(ほ)すれば、
淡(たん)粧(じやう)濃(なう)抹(ま)總(そう)て相(かう)宜(い)し。

【字解】激(げき) 水(みづ)の満(み)ちて

動(うご)く貌(ぼう)。文(ぶん)選(せん)、海(かい)賦(ふ)に、激(げき)淡(たん)激(げき)豔(えん)。
空(くう)濛(もう) 巨(こ)んやりと暗(あん)き貌(ぼう)、文(ぶん)選(せん)、謝(しゃ)元(げん)暉(き)の詩(し)に、雲(うん)霧(む)如(ごと)く濛(もう)濛(もう)。
西(せい)子(し) 吳(ご)王(わう)夫(ふ)差(さ)に寵(ちゆう)愛(あい)せられたる美人(びじん)西(せい)施(し)をいふ。董(とう)字(じ)記(き)に、施(し)、

其姓也、會稽諸暨縣有西施家、句踐得之、當懸懸、以獻吳王。【一】淡粧濃抹、淡粧は、薄化粧のこと。濃抹は濃く化粧する、抹は塗抹の意。

【詩意】杭州西湖の上に飲み、晴雨共に景色の佳いことを、西施の薄化粧も、厚化粧も、其の風姿兩ながら宜しきに比したのである。水光の激濺として晴れて偏に好いのは、是れ濃抹、(方の字を一本に偏の字に作る)山色の空濛として雨にも亦奇なるは、是れ淡粧、(空濛を一本に濃粧に作る)西湖を西子に比すれば、淡粧濃抹兩ながら相宜し。(欲の字を一本に若に作り、總の字を兩に作る。西子を以て西湖に比するは工巧と謂ふべきである。)

【餘論】東坡の句に、只有西湖似西子。又いふ、西湖真西子と。王文誥いふ、此是名篇、可謂前無古人、後無來者。公凡西湖詩、皆加意出色、變盡方法、然皆在錢塘集中、其後帥杭、勞心裁賑、已無復此種傑構云云、と。廣輿記、浙江、杭州府の條に、府城西周三十里、漢時、金牛見湖中、人言明聖之瑞、舊稱明聖湖、蘇軾守郡上言、西湖有不可廢者五、乃築長堤、以便行者、堤上有六橋、云自紹興建都、君臣相競嬉游於此、金主亮聞而羨焉、卒起投鞭渡江之志、論者以西湖爲尤物破國、比之西施、亦稍過矣と見ゆ。又、舊西湖に十景ありと稱す曰く、平湖秋月、蘇隄春曉、斷橋殘雪、雷峯落照、南屏晚鐘、鞠院風荷、花港觀魚、柳浪聞鶯、三潭印月、兩峯插雲。

往富陽新城李節推先行三日留風水洞見待

富陽新城に往き、李節推先づ行く、三日風水洞に留り待たる

春山礧礧鳴春禽

春山礧礧として春禽鳴く、

此間不可無我吟

此間に我が吟なかるべからず。

路長漫漫傍江浦

路は長く漫漫として江浦に傍ふ、

此間不可無君語

此間に君が語なかるべからず。

金鯽池邊不見君

金鯽池邊君を見ず、

追君直過定山邨

君を追うて直に過ぐ定山の邨。

路人皆言君未遠

路人皆言ふ君未だ遠からず、

騎馬少年清且婉

騎馬少年清にして且つ婉と。

風巖水穴舊聞名

風巖水穴舊名を聞く、

只隔山溪夜不行

只山溪を隔てて夜行かず。

溪橋曉溜浮梅萼

溪橋曉に溜りて梅萼を浮ぶ、

知君繫馬巖花落

知る君馬を繫いで巖花の落ちたるを。

出城三日尙透遲

城を出でて三日尙ほ透遲、

妻孥怪罵歸何時

妻孥怪罵す歸るは何れの時ぞと。

古今體詩 往富陽新城李節推先行三日留風水洞見待

【字解】【一】富陽新城、前漢地理志に、秦分三十六郡、富春屬會稽、漢哀帝封河間孝王嬰子元、爲富春侯、晉武帝、太元中、改曰富陽。

古蹟考に、富陽城、唐、咸通中、縣令趙勣所築。【二】李節推、李泌節推のこと。宋史、職官志に、軍府幕職有節度推官。臨安志に、節度推官廳、在府前、近民坊焉。【三】風水洞、浙江杭州の南二十里に在る。洞極めて大、水溢潤れず、立夏清風自ら生じ、立秋則ち止む。故に名く。【四】礧礧、鳥の聲、礧礧の字面は、皮目休の時に、礧礧如蟬聲。蘇轍が除日の詩に、礧礧如蟬聲などあるが、東坡のこゝに用ゐたは格磔の意である。格磔は、鷓鴣の鳴く聲。本草に、鷓鴣生江南、形似母雞、鳴聲如日行不得也、奇聲。【五】金鯽池、開化寺、六和塔の金魚池は

世上小兒誇疾走。世上小兒は疾走に誇る、如君相待今安有。如し君相待たば今安くに有る。

【詩意】 寺後に在り。山頂で、水底に金脚魚が多い。東坡詩話に、蘇頌、蘇子美六和塔詩、松橋待金脚、竟日獨題留、杭州圖經に、定山在錢塘舊治之西南四十里、臨安志に、定山、高七十五丈、周廻七里一百二步、山下居民數百家。【七】 清且純、詩の節風、野有蔓草、篇に、有美一人、清揚婉兮。眼の清くして眉の揚りたるをいふ。【八】 紫馬巖花落、杜子美の詩に、紫馬巖林花動。【九】 逕遠、一本に逕遠に作る。斜に行く鳥。淮南子に、河邊海、故能遠。【一〇】 疾走、爾雅の疏に、迅疾走也とある。

【題義】 熙寧六年正月二十七日、東坡は杭州に在つて部を行き、風水洞に遊んだとき、本州の節度推官李億が先づ行き、風水洞に留つて、東坡の到るを待つて居つた。此詩は此時の作である。紀昀いふ、磊磊落落、起法絶佳と。又いふ、一結索然と。

【詩意】 春の山には磔磔と鳥が鳴いて居る。之を聞けば、我は一詩なかるべからず。道路は長く、漫漫として江浦に傍うて居る。此間には、君の一語がなかるべからずと思ふ。六和塔の金魚池の邊にも君の姿を見なかつたから、直に追かけて定山郷に至つた。路人に尋ねると、皆いふ、君は未だ遠くは行かない。馬に騎つて居る少年で、清にして且つ婉（美好をいふ）である。風水洞の風水洞は、舊から名高い。臨安志に據ると、風水洞は、楊村の慈巖院に在つて、舊名は恩德院であつた。白居易の遊恩德寺詩に、雲水埋藏恩德洞、簪裾束縛使君身とある。只、山溪を隔てて居るので、夜分は行くことが出来ない。溪に架けた橋は、曉に水が溜りて梅萼を浮べて居る。君が馬を繫いで巖花落ち

たのであることが知れた。城を出てから三日も経たが、尙ほ斜に逶迤として行く。妻孥は怪み罵つて、家に歸るは何時であらうぞと言つた。（王文誥いふ、歸何時、乃未歸之詞也、歸何遲、乃已歸之詞也、詩雖代爲設想、必既未歸、自應作歸何時、今既定三時字韻、則上句之尙逶迤、應仍作三時遲と。）世上の小兒は疾走に誇る。（世人の小人が多く急進を務むるを譏つたのである。）如し今、君が相待たば、今何處にあるか。（王文誥いふ、憂然便往奇絶と。）

風水洞二首、和李節推

風轉鳴空穴、泉幽瀉石門。風轉じて空穴に鳴り、泉幽にして石門に瀉ぐ。

虛心聞地籟、妄意覓桃源。虛心地籟を聞き、妄意桃源を覓む。

過客詩難好、居僧語不繁。過客詩好くし難く、居僧語繁からず。

歸瓶得冰雪、清冷慰文園。歸瓶冰雪を得、清冷文園を慰む。

【字解】 【一】 風水洞、前詩の字解に詳なり。長慶三年、秋九月、白樂天來遊し、泉石竹木を觀て詩を留む。【二】 地籟、籟は聲の出る所、莊子、齊物論に、南郭子綦謂、鍾子綦曰、汝聞人籟、而未聞地籟。【三】 妄意、莊子、舐陰當に、妄意室中之藏、衆也。【四】 桃源、陶淵明の桃花源記に、晉太元中、武陵人捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、林盡水窮、復得一山、其中往來種作、男女衣著、悉如外人、自云、先世避秦來此、停數日辭去、及郡下、謂太守說如此、即遣人隨其往、遂逢、不復得路。【五】 過客、旅人ないふ。李白の春夜宴桃李園序に、光陰者、百代之過客。【六】 歸瓶、寺から歸る意、師の意

に入り、佛法を傳授することを入室灌瓶といふ。【七】清冷、陳武帝の滯滯賦に、心清冷其若水。王褒賦に朝露清冷、而潤其側分。【八】聖文園、漢書に、司馬相如嘗有消渴疾、拜爲聖文園令。消渴とは咽喉がかわいて流動物を飲しがり、小便の通じない病、今の糖尿病の類。

【題義】前詩に連続した詩である。東坡が定山村に至つて、李億を見、風水洞の諸詩に和したのである。後、同年八月の望に湖を観て詩を作り、又、再び風水洞に遊んで詩を作つた。東坡の風水洞の詩は前後五首の筈であるが、今は、李億留待一首及び和秘二首があるのみ。

【詩意】風が吹き濟り、轉じて空穴に入つて聲がある。泉は幽かに流れて、やがて石門に瀉ぎ去る。心を虚うして地鎮を聞き、妄意（でたらめな心）を以て桃花源の理想郷を覚める。莊子に人鎮・地鎮・天鎮の説明がある。人鎮は笙簧の類、地鎮は衆聲（多くの穴）より生ずる聲、そして萬物をして心あらしめるは天鎮の力である。地鎮は形があつて受け、天鎮は形がなくして生ずる。ここは此の地鎮の字面を用いたのである。さて、虚心、空穴の聲を聞いて、妄に桃源の郷を覚める。過客の我は詩を好くし難く、居僧は寡言である。我來つて道を問ふ、餘話なし、雲は青天に在り、水は瓶に在りて、寺から歸るとき、冰雪を得たが清らかに冷しい。こんなに清冷であればかの消渴の疾で苦しんだといふ孝文園の令であつた司馬相如を慰めることが出来やうと思ふ。

山前乳水隔塵凡

山前の乳水塵凡を隔つ、

【字解】【一】乳水、遊男記に、

山上仙風舞檜杉

山上の仙風檜杉を舞はす。

細細龍鱗生亂石

細細龍鱗亂石を生じ、

團團羊角轉空巖

團團羊角空巖に轉ず。

馮夷窟宅非梁棟

馮夷の窟宅は梁棟にあらず、

御寇車輿謝轡銜

御寇の車輿は轡銜を謝す。

世事漸艱吾欲去

世事漸く艱吾去らんと欲す、

永隨二子脫譏讒

永く二子に隨つて譏讒を脱かれん。

篇に、搗扶搖羊角而上者九萬里。淮南子に、扶搖捨抱羊角而上。捨抱は抱き持つ意。許慎の註にいふ、扶、擲也、搖、動也、扶搖如羊角、轉如曲磬。【二】馮夷窟宅云云、馮夷は河の神、莊子に、馮夷得之、以遊大河。楚辭に、魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮朱宮。【七】御寇車輿、列禦寇の乗る處をいふ。列子、黃帝駕に、列子師老商子、友伯高子、盡二子之道、乘風而歸。莊子逍遙遊に、列子御風而行、泠然善也。【八】轡銜、轡は手綱、銜はくつり。楚辭に、無轡銜而自駛。

【詩意】山の前の石洞中に乳水があつて、塵の世と隔つて居る。又、山上、羽客の仙風は檜や杉を吹き舞はして居る。紀昀いふ、風水二字、分疏勻稱、但、語皆不工と。龍神は、よく細細、又、よく巨巨で、變幻測られない。かくて龍鱗が細細として亂石を生ずる。亂石の龍鱗の如きを形容す。既にして、團團と遠く近く仙風が空巖に轉轉して行く。水神の窟宅は、所謂龍堂、朱宮で、梁もなく、棟も

武陵源在吳中山、無他木、僅生桃李、俗呼桃李源、源上有石洞、洞中有乳水。【三】塵凡、塵世と同じ、元の賈師奉（字は奉市）の詩に、龍宮自與塵凡隔。【四】仙風、沈約の風の賦に、羽客之仙風。李白の大鶴賦序に、有仙風遺骨、可與神遊八極之表。【五】細細、新書に、龍之神也、能與細細、能與互互。【六】羊角、風をいふ、莊子の逍遙遊

ない。又、列子は風に御して行く、冷然として善く、手綱も、術も不必要である。今や世事は漸く難ならずとするから、我は去つて隠遁しようと思ふ。そして永く二子（馮夷と列子。或はいふ、老商子と伯高子と）に随つて譏議を脱れようと思ふ。（要するに、東坡が風水洞に遊んでいふやう、世事が日に非であるから、吾は去らうとする。以爲らく、新法を行ふの後小人は争ひ進んで、各、譏議を務める。かくて國事が日に益々艱難となつて來た。我は（東坡自らいふ）以て世の人に合ふことが難かしく、又以て世の人を容れることも出來ない。故に決然官を棄てて、隱居の地を卜するのである。）

獨遊富陽普照寺

獨富陽普照寺に遊ぶ

富春眞古邑此寺亦唐餘

富春は眞に古邑、此寺も亦唐の餘。

鶴老依喬木龍歸護賜書

鶴は老いて喬木に依り、龍は歸つて賜書を護す。

連筒春水遠出谷晚鐘疎

連筒春水遠く、谷を出でて晚鐘疎なり。

欲繼江湖韻何人爲起予

江湖の韻を繼がんと欲す、何人が爲に予を起す。

【字解】(一)富陽 漢の富春縣、明前、皆、浙江、杭州府に屬し、今は浙江錢塘道に屬す。(二)普照寺 圓頓に、淨明院、在、縣北五里、唐朝壽寺號普照、後廢、石晉天福七年重建、治平二年、改賜今額。(三)喬木 年を経た高い木、詩の小雅、伐木篇に、出、自、幽、谷、暵、于、喬、木。(四)賜書 漢書の敘に、傳、家有、賜、書、臨、安、志に、淨、明、寺、枕、高、山、名、曰、舒、盤、山、物、有、龍、潭、洞、水、橫、流、上有、橋、亭、有、御、書、閣。(五)連筒 筒ないふ、杜子美の詩に、連筒堰、小園。

【題義】此詩は熙寧六年正月、富陽の普照に遊んで作つたのである。李白の詩に、天台國清寺、天下爲四絕、今爲普照遊、到來復何別とあるは、此詩の第二句と正に合して居る。紀昀いふ、此種詩、寺寺可題、何必普照、人人可題、何必東坡と。

【詩意】今の富陽は、漢の富春縣で、眞に古邑である。富陽に在る普照寺も、唐朝からの舊寺である。鶴は老いて喬木に依り、龍は歸つて賜書を護する。（普照寺には、御書閣があるからいふ。）覺は遠く春水を送り、谷を出づると、晚鐘の聲が疎である。江湖の詩韻を繼がうと思ふが、さて何人が予を起すであらうか。（昔、宋之間が江南の靈隱寺に遊んだとき、夜月澄明、獨、廊下を行き、因て吟じて曰く、驚嶺巒岩秀、山の高い貌、龍宮鎖寂寥と、沈思すること久しうして就らなかつた。時に老僧があつて、大禪牀に坐して曰く、何ぞ吟ずること苦しき、何ぞ、樓觀滄海日、門對浙江潮と道はざる。宋は其の警策（活躍せしめるに足る主要の短句）を歎じ、明日になつて、之を尋ねた所、復、寺僧を見なかつた。知るものいふ、此れ騎驛王であると。此詩は此故事に據つたのである。）

自普照遊二庵

普照より二庵に遊ぶ

長松吟風晚雨細

長松、風に吟じ、晚雨細かなり、

東庵半掩西庵閉

東庵半ば掩うて西庵閉づ。

山行盡日不逢人

山行盡日人に逢はず、

【字解】(一)二庵 富陽縣西に、延壽院在、縣北四里、院前有、東西二庵、臨安志に、大明院在、縣北四里、四峰環繞、前如、蓮臺、俗呼、二庵、即東坡所謂東西二庵是也。(二)東庵 香ばしいこと。李義山の見、

衰衰野梅香入袂

衰衰なる野梅香袂に入る。

居僧笑我戀清景

居僧笑ふ我が清景を戀ふるを、

自厭山深出無計

自ら山の深きを厭ひて出づる計なし。

我雖愛山亦自笑

我は山を愛すと雖も亦自ら笑ふ、

獨往神傷後難繼

獨往神傷まば後繼ぎ難し。

不如西湖飲美酒

如かず西湖に美酒を飲まんには、

紅杏碧桃香覆髻

紅杏碧桃香鬢を覆ふ。

作詩寄謝探薇翁

詩を作つて寄せ謝す探薇翁、

本不避人那避世

本人を避けず那ぞ世を避けん。

【題義】前時と同時の作である。劈頭の二句は全題で、已に餘景なく、以後は都て議論に入る。往の字は、是れ通篇の詩眼。

【詩意】長い松は風に吹かれて高く吟じて居り、晚雨も細かに降りしきるは、普照院の光景である。院の前に二つの庵がある。東の庵は半ば掩はれ、西の庵は閉ぢて居る。山を行いて盡日人に逢はない。併し香の好い野梅の移り香が袂にある。山僧は我が（東坡）清景を戀ふるを笑ひ、其の身は山の

深きを厭つて居る。而も山を出づる計がない。我は山を愛するが、亦自ら笑ふ。それは獨往いて、精神が傷むと、後に繼ぎ難いからである。それで、西湖に美酒を飲むに越したことはない。紅の杏、碧の桃、移り香は鬢を覆うて居る。ここに詩を作つて遠方より探薇翁に寄せ謝する、本、人を避けない我である。何で此の世の中をば避けようぞ。

【餘論】紀昀いふ、幽獨神傷、全用杜句、作獨往非是と。王文誥は之を駁して、今復此詩、必如獨往字、始與下句緊接、若用幽獨、則前後脫氣矣、紀氏專主查註、故失於細究耳。周益公、嘗言凡墨蹟石刻與集本互異、恐集本、乃後所改定、不可輕動、其說最當云云と言つて居る。

富陽妙庭觀董雙成故宅發地得丹鼎覆以銅

盤承以琉璃盆益既破碎丹亦爲人爭奪持去

今獨盤鼎在耳 二首

富陽の妙庭觀は董雙成の故宅、地を發いて丹鼎を得、覆ふに銅盤を以てし、承くるに琉璃盆を以てす、盆は既に破碎せられ、丹も亦、人の爲に爭奪持ち去らる、今、獨、盤鼎あるのみ 二首

人去山空鶴不歸 人去つて山空しく鶴歸らず、
丹亡鼎在世徒悲 丹は亡し鼎在つて世徒に悲しむ。

古今體詩 富陽妙庭觀董雙成故宅發地得丹鼎二首

梅花二詩に、非唯直衰香。【三】神、三圓、觀志の註に、初集卷七、不笑而神傷。杜子美の詩に、晚來幽獨悲傷神。獨往を隱安志には幽獨に作る。【四】探薇翁、史記に、伯夷叔齊、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。

【字解】【一】妙庭觀、富陽縣觀に、妙庭觀在縣西十五里、唐安志

可憐九轉功成後、憐むべし九轉功成るの後、
却把飛昇乞内芝。却つて飛昇を把つて内芝を乞ふ。

改題今讀。〔一〕人去。重變成をいふ。變成は古の女仙で、西王母の侍女。もと杭州の人。相傳ふ丹を宅

中に煉る。丹成りて道を得、自ら玉童を吹き、鶴に駕して昇僊す。邑人、橋を立てて之を望む。因つて名けて望仙橋といふ。〔二〕九轉功成。仙經に、九轉丹金液の事を載す。抱朴子の金丹篇に、丹九轉九轉、第一丹名丹華、第二名神符、第三名神丹、第四名靈丹、第五名四丹、第六名煉丹、第七名柔丹、第八名伏丹、第九名紫丹。〔三〕内芝。宣靈志に、河中永樂縣道源院、唐文宗時、道士鄧太元鎮丹於藥院中、丹成、屢轉功未究、留貯院內、人共奉之、太元願化、其徒周悟先主院事、商人侯道華事悟先、以供給使、一旦味爽、衆徒起、道源房中無所見、獨留一首云、結裏大遼丹、多年色不移、前宵遊夢却、今日碧空飛、慚愧深珍重、珍重那天師、他年復得藥、留著與内芝。其下列細詞一稱、去年七月一日、藥師韓君、賜姓李、名内芝、配住上清宮遊院。

【題義】此の二首も、前詩と同じ時の作。世に傳ふ、妙庭觀は董雙成の故宅で、宋、仁宗の天聖中、道士朱去非といふもの、地を發いて丹鼎・銅盤・琉璃盆を得と。今は獨、盤・鼎が存するのみで、此詩が出來たのである。

【詩意】昔の仙人は郷里に歸ると、多くは化して鶴となつた。丁令威の如きは、其れである。續搜神記に、遼東の城門に華表柱あり。白鶴ありて其の上に乗る。詩を言ふ、有鳥有鳥丁令威、去家千年今來歸、城郭如故人民非、何不學仙塚累累と。又、神仙傳に、董仙君(名は耽)は桂陽の人なり。數十の白鶴ありて、門に降る。遂に雲漢に昇つて去る。後に白鶴に騎つて來り、郡城東北の樓上に至る人あり。或人、彈を挾んで之を彈せしに、鶴は、爪を以て樓上の板を攫み、漆を以て書していふ、城郭は人民非、三有甲子一來歸、吾是董仙君、彈我何爲と。何れも塵に歸つて鶴となつた。女仙董

雙成は鶴に騎して昇僊したまふ歸らない。丹を煉つたといふ鼎はあるも、丹、其のものはない。世の人は徒に悲しむのである。憐むべきは金丹を煉り、九轉の功が成つた後、却つて飛昇を把つて内芝を乞うたことである。

琉璃擊碎走金丹。
無復神光發舊壇。
時有世人來舐鼎。
欲隨雞犬事劉安。

琉璃擊碎して金丹を走らす、
復神光の舊壇に發するなし。
時に世人の來りて鼎を舐るあり、
雞犬に隨ひて劉安に事へんと欲す。

【字解】〔一〕琉璃。紺色の寶玉、佛說七寶の一。七寶は七珍ともいふ。七寶に就いては諸經、其の稱ぐる所を異にするも、普通に、金・銀・琉璃・玻璃・珊瑚・瑪瑙・琥珀をいふ。〔二〕神光發。舊壇。漢書の禮樂志に、夜常有神光集於祠壇。

【詩意】琉璃盆を破碎し、金丹を走らしたので、復、神光の舊壇に發することがない。時たま、世人が來つて鼎を舐ることがある。雞犬に隨つて劉安に事へやうと欲するのであらう。(神仙傳に、漢の淮南王安は、道術を愛す。八公ありて門に詣る。皆、鬚眉皓白。王に丹經三十六卷を授く。後、白日に天に升る。去る時に臨み、藥器を中庭に置き、餘藥、庭中に在り。雞犬之を舐啄(なめたり、ついはんだりする)し、盡く天に升るを得。故に雞鳴天上、犬吠雲中といふことが見えて居る。此詩の結句は、此の故事に據つたものである。)

新城道中 二首

新城道中 二首

東風知我欲山行。東風我が山行せんと欲するを知り、

吹斷簷間積雨聲。吹き断ゆ簷間積雨の聲。

嶺上晴雲披絮帽。嶺上の晴雲絮帽を披き、

樹頭初日挂銅鉦。樹頭の初日銅鉦を挂く。

野桃含笑竹籬短。野桃笑を含んで竹籬短く、

溪柳自搖沙水清。溪柳自ら搖いて沙水清し。

西崦人家應最樂。西崦の人家應に最も樂むべし、

煮芹燒筍餉春耕。芹を煮筍を燒いて春耕に餉す。

【題義】此の二詩は、熙寧六年二月の作。首のは富陽の早發を敘し、次のは行いて新城に至るを敘す。早發の時、微雨初て霽れ、道に西崦の餉耕に逢ひ、欣然として此作があつた。亭午（正午の時）馬を溪邊に策せし時、次の詩にある細雨足時茶戸喜、亂山深處長官清の句が出来た。時に晁君成が令となつて、官清民樂の實があつたから之を美めたのである。

【詩意】春風は我が山行しようとするを知つたものと見え、簷に滴たる積雨の聲を吹き断つた。嶺上の晴れた雲は、絮帽を披いたやうであり、樹上の初日は銅を挂けたやうである。野の梅は笑を含んで、竹の籬も短く、溪上の柳も自ら動いて沙水も清い。赤谷西崦の人家は、鳥雀が茅茨に依り、瀟瀟は松菊を帯び、最も楽しむべきである。行いて半道に及ぶ時、村人は芹を煮筍を燒いて春耕に餉して居つた。

身世悠悠我此行。身世悠悠たり我が此の行、

溪邊委轡聽溪聲。溪邊委を委てて溪聲を聽く。

散材畏見搜林斧。散材林を搜る斧を見んことを畏れ、

疲馬思聞卷旆鉦。疲馬旆を卷く鉦を聞かんことを思ふ。

細雨足時茶戸喜。細雨足る時茶戸喜び、

亂山深處長官清。亂山深き處長官清し。

人間岐路知多少。人間の岐路知りぬ多少ぞ、

試向桑田問耦耕。試みに桑田に向つて耦耕に問はん。

【字解】【一】新城。新城縣屬

に、晉十二郡、吳大帝、黃武五年、

置。東安郡。新城屬焉。唐高宗、永

祿元年、分富春西境置新城。上

縣。清初仍之。距杭州之西南一

百三十三里。【二】東風。春の風、

曉の月令に、孟春之月、東風解凍。

【三】簷間積雨聲。杜市の詩に、野雲

低渡水、簷雨銅鉦風。【四】晴雲

披絮帽。韓退之の詩に、晴雲如

學絮。杜牧の詩に、晴雲似絮散低

空。頭上の巾を絮とす。漢。周

勃傳に、勃下延尉、太后以絮絮

勃。【五】西崦。鳥雀依茅茨、瀟瀟

瀟瀟。【六】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【七】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【八】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【九】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十一】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十二】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十三】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十四】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十五】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十六】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十七】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十八】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【十九】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【二十】耦耕。耦、二人並

手而耕也。【二十一】耦耕。耦、二人並

林深險、探海窮。【一】卷、物、王融の山水詩序に、縱虎卷、懸壺之施。【二】岐路、えだみち、岐道といふに同じ。列子、說符篇に、岐路之中、又有二岐路。【三】桑田、神仙傳に、已見東海三島桑田。【四】耕、陶潛の詩に、商歌非吾事、依俛在耕。【詩意】身世悠悠たるかな、我が此度の旅行は至つて暢氣である。溪邊に轡を棄てて溪聲を聞く。我は元來役に立たない人間で、木に譬ふれば散材である。それで、林を捜る斧を見んことを畏れる。疲れた馬は、施を巻く鉦を聞いて退却せんことを思ふ。(時既に亭午、山行漸く疲れて、行役を慨いたのである) 細雨が十分に濕つて、茶戸が喜び、亂山の深い處、長官は清く、住民は樂しむ。(王文詒いふ、一聯明以美見、用官清民樂、作骨、保美見之詞、本屬常語、忽將三戶喜、脫去民樂、脫胎隨地點染云云と。脱胎とは、他の作意を取つて、其の形式をかへる義。參同契に、作丹之時、脱胎入口、功成之後、脱胎出殼とある。) 人間の岐路極めて多く、岐路に又岐路があつて、遂に亡羊。試みに桑田に向つて耦耕(兩人ならび耕す)の人間はうと思ふ。

山邨五絶

山邨五絶

竹籬茅屋趁谿斜。
春入山邨處處花。
無象太平還有象。
孤烟起處是人家。

【字解】【一】竹籬、杜荀の詩に、茅舍竹籬短。【二】茅屋、宋書、裴松之の傳に、起茅屋數間、妻子恆苦。【三】春入、屈原の卜居に、春草生、以力耕乎。【四】處處花、韓退之の詩に、種桃處處開花。【五】無象、象太平云云、蘇唐書、牛僧孺傳に、

文宗曰、天下何由太平、細等有象於此乎、牛僧孺曰、太平無象、今雖未及至理、亦謂小康、若別求太平、非臣等所及。【題義】此詩は熙寧六年二月の作、朝廷の新法青苗、助役等の不便を諷つたのである。紀昀いふ、五首語多三露骨、不爲佳作と。王文詒いふ、五絶並佳、第一首、還有象、亦帶諷意と。【詩意】竹の籬や茅葺の屋が、谿間に趁いて斜に點點して居る。山村にも春が來たと見えて、處處に花が咲いて居る。太平象なしといふも、現に象がある。即ち炊烟の起る處是れ人家である。

烟雨濛濛雞犬聲。

烟雨濛濛として雞犬の聲あり、

有生何處不安生。

有生何れの處にか生を安んぜざらん。

但令黃犢無人佩。

但黃犢をして人の佩ぶるなからしむ、

布穀何勞也勸耕。

布穀何ぞ勞せん也た耕を勸むるを。

【字解】【一】烟雨濛濛、杜牧之の江南春詩に、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中。煙は烟に同じ。王昌齡の詩に、玉清壇上雨濛濛。【二】黃犢無人佩、漢書に、魏遂爲渤海太守、民有帶持刀劍者、使賣牛。

買牛、買刀買劍、何爲帶牛佩劍。犢は牛子。【三】布穀、鳥の名、俗に催耕鳥といふ。

【詩意】煙りて降る雨が濛濛としてをぐらく、雞や犬の聲が聞える。既に生あるもの、何れの處にか、其の生を安んずることが出来なからう。ただ黃犢を人が佩ぶることのないやうにしたいものである。(黃犢を生産に向けたいとの意) さうなると、かの布穀即ち催耕鳥が耕すことを勸める手數も要らなくなるであらう。(是時、私鹽を販ぐもの、多く刀仗を帯びた。故に前漢の魏遂が事を取り、聞らく、但、鹽法を將て寬平にし、人をして刀劍を帯びないで、牛を買ひ犢を買はしめるときは、自ら勸督を勞

しない。以て朝廷の鹽法が太だ峻烈で不便なることを諷諷したのである。東坡が餘杭に在つた時、蘇民が兵仗を以て私鹽を護送することが、たびたびあつた。吏民が敢て近かつたのは、彼等は常に數百人も輩をなして居つたからである。

老翁七十自腰鎌。老翁七十自ら鎌を腰にす、

慚愧春山筍蕨甜。慚愧す春山筍蕨の甜きを。

豈是聞韶解忘味。豈是れ韶を聞いて解く味を忘るるな

邇來三月食無鹽。邇來三月食に鹽なし。

【詩意】七十の老翁が自ら鎌を腰にするのは、其身も亦、東野の中にあるが如きものである。飢を充たす爲に春山の筍や蕨を採りて、之を甜いとして居る。まことに慚愧する次第である。昔、孔子は齊に在した時、韶(舜の樂)の樂を聞いて學ぶこと三月の久しきに至り、心がここに一となつて、肉の味の旨いことをも忘れたといふが、今は是れ韶を聞いて味を忘れるのではない。邇來三月、食に鹽がない。(要するに此の時の主意は、山中の人は饑えて食しく、食物もない。年老いても猶ほ筍蕨を採つて饑に充てる。時に鹽法が太だ峻であつて、僻遠の人に至つては鹽食がなく、動もすれば數月を苦しむ。昔の聖人は、能く韶樂を聞いて味を忘れたが、山中の小民は、豈能く淡き食うて樂しまんや。

【字解】【一】腰鎌、鮑明遠が詩に、腰鎌刈、寒邊。元初が詩に、老翁七十自腰鎌、將引兒孫行時。古樂府に、腰鎌八月、俱在東野中。【二】慚愧、宋の羅大經の鶴林玉露に、山妻稚子作、筍蕨、供、麥飯。

亦以て鹽法の太だ峻なるを諷つたのである。王文誥いふ、私販法重而官鹽貴、則民之貧而懦者、或不食鹽、往在浙中、見山谷之人有數月食無鹽者。

杖藜裹飯去忽忽。杖藜飯を裹んで去つて忽忽、

過眼青錢轉手空。眼を過ぐる青錢手を轉すれば空し。

贏得兒童語音好。贏ち得たり兒童語音好きを、

一年強半在城中。一年の強半は城中に在り。

【字解】【一】杖藜、あかざの杖、莊子、藜王當に、原藜杖、藜而應門。晉書に、文帝以藜母老、贈藜杖一枝。【二】裹飯、莊子、大宗師に、子與曰、子桑殆病矣、裹飯而往食之。【三】忽忽、忽或は思に作る、

【詩意】藜の杖を曳き、飯を裹んで逃げて去る、上から貸し與へられた青苗錢も、一時の融通で、忽ち目を過ぎ去つて、少しも手許には留まらない。即ち手を轉らせば、空しくなつてしまふ。(東坡の奏狀に、每見見散青苗錢、則縣中酒庫暴增、鄉民有徒手而歸者、可爲流涕云云とあるは、此の七字の註脚といふべきである)更に青苗法、助役法の弊害を言ふと、百姓は青苗錢を得て、一時は便で

あるが、城中に於いて之を浮費し、又、郷村の子弟は、此を以て多く城市に在つて、但、城中の語音を學び得るのみである。教育の爲にも宜しくない。

【餘論】宋の元豐二年、東坡は徐より湖に徙り、事不便、民をば、敢て言はない。詩を以て託諷する。其の圖に益あらんことを庶ふのである。中丞李定等いふ、賦侮慢、蓋陛下發、以本業貧民、則曰、庶得兒童語音好、一等強半在城中、其他觸物即事、應口無非、以三詆諷爲主と。東坡は遂に坐貶された。

竊祿忘歸我自羞。

祿を竊んで歸るを忘れ我自ら羞づ、

豐年底事汝憂愁。

豐年なるに底事そ汝憂愁する。

不須更待飛鷹墮。

須るす更に飛鷹の墮つるを待つを、

方念平生馬少游。

方に念ふべし平生の馬少游を。

【字解】【一】底事 何事といふに同じ。唐人の詩に多く用ふ。白樂天の詩に、古往今來底事無。【二】特飛鷹墮 後漢の馬援傳に、援擊交趾、謂官屬曰、吾從弟少游嘗言吾恍惚有大志、曰、士生一世、但取衣食足、樂下澤車、御款段馬、足むそ馬、爲郡縣吏、守墳墓、鄉里稱善人、斯可矣、致求盈餘、但自苦耳。當吾在浪泊西里間、夢未試時、下澤上轡、毒氣薰蒸、仰視飛鷹貼貼(墮ちる貌)墮水中、臥念少游平生時語、何可得也。【詩意】我は固より其の器でなく、空しく祿を竊んで、田に歸へるを忘れて居る。深く自ら羞むるのである。今年は豐年であるのに、何ぞ汝は憂愁するぞ。(東坡は時政の弊に因つて、弟子由と組を解いて田に歸るを約す。我は東坡自ら謂ひ、汝は子由をいふ)昔、馬援の交趾を征するや、浪泊西里の間

に在り、下澤上轡、仰いて飛鷹を視るに、貼貼として水中に墮ちた。其の時、從弟少游の言つた語を念つたが、後の祭である。故に豐年の今日此頃、宣遊して飛鷹の墮ちる境に入る必要を見ないであらう。方に平生の馬少游の言葉を念ふべきである。

癸丑春分後雪

癸丑春分後の雪

雪入春分省見稀。

雪は春分に入つて省見稀に、

半開桃李不勝威。

半開の桃李威に勝へず。

應慚落地梅花識。

應に慚づべし地に落つる梅花の識る

却作漫天柳絮飛。

却て天に漫りて柳絮の飛ぶを作す。

不分東君專節物。

東君節物を專にするを分たず、

故將新巧發陰機。

故らに新巧を將て陰機を發す。

從今造物尤難料。

今より造物尤も料り難し、

更暖須留御臘衣。

更に暖めて須く御臘衣を留むべし。

【字解】【一】癸丑 神宗の熙寧六年(皇紀一七三三年、西曆一〇七三年)東坡の三十八歳の時。【二】春分 二十四氣の一、春の中にして晝夜平分の時、今の三月廿一日頃。周禮、典瑞の註に、天子常春分朝日、秋分夕月。【三】省見 漢書、東方朔傳に、未得省見。又、何武傳に、未嘗省見。註にいふ、言不爲所發識。【四】落地梅花 送隨文の雪朝詩に、落梅飛四注、翻、舞三舞。又、梅花賦に、梅花特早、偏融春。【五】漫天柳絮飛 蘇東坡詩に、揚花檢苑無才思、惟解漫天作雪飛。【六】不分東君 杜子美の詩に、不分桃花紅似錦。東君は春の神、王初の立春後詩に、東君珂珮響璚璫。【七】節物 文選の陸士衡の詩に、與爾感節物。節物は、時節に應じて生ずる品物。晉書の陸機傳

蘇東坡詩集卷九
蘇東坡詩集卷九
蘇東坡詩集卷九
蘇東坡詩集卷九

【題義】此詩も前詩と同じく、熙寧六年二月の作で、東坡が客と湖上に飲み、孤山より夜歸つて城に入つたとき、河塘を過ぎ、繁燈爛然の狀を詩にしたのである。紀昀いふ、句句暮神、真而不俚と。
【詩意】我は若い時分には、酒盃を見ただけでも、酔うた位であるから、酒量は至つて少い。佛し、好物で、半醉半醒の味が尤も宜しいと思ふ。一日、客と湖上で飲み、籃輿に乗つて歸つた。春風は醉顔を吹いて涼しい。行いて孤山の西に至つた時分は、夜色が已に蒼蒼であつた。清吟も、夢寐を離れて居たので、折角、好い句を得ても、旋つて已に忘れてしまつた。(紀昀いふ、二句神來。)尙ほ記憶にあるは梨花の村で、依依(たどたどしく)として何處となく花の香が来る。さて確に城中に入るは、何れの時であらうぞ。賓客も半は散じてしまひ、睡眼忽ち驚嬰(驚いて顧る)し、繁き燈火は沙河塘に賑かである。市人は手を拍ちて愁ふ。其の狀は、林を失つた麀のやうである。我が山野の姿は、異趣を以て之を強ふことは無理といふことが解つた。人生は要するに安んずる所あるを樂しむとする。之に反して吾がこれまでの策は殊に良くなかつた。(王文誥いふ、自謂山野之狀、本不合作官人、故城市以不類而笑也。全用此意作結、亦自慨之詞と。)

曾元恕游龍山呂穆仲不至

曾元恕龍山に遊ぶ、呂穆仲に至らず

青春不覺老朱顏

青春覺えず朱顔老ゆるを、

強半銷磨簿領間

強半銷磨す簿領の間

愁客倦吟花似酒

愁客吟するを倦む花酒に似たるを、

佳人休唱日銜山

佳人唱ふるを休む日は山を銜むを。

共知寒食明朝過

共に知る寒食明朝過ぐるを、

且赴僧窗半日閑

且つ僧窓に赴く半日の閑

命駕呂安邀不至

駕を命ずる呂安邀へて至らず、

浴沂曾點暮方還

沂に浴する曾點暮に方に還る。

【字解】【一】曾元恕 東坡と同じく、鳳凰山靈化洞に遊んだ人。宋の費良が蘇軾漫志に、熙寧六年、同游龍山石屋洞、題名云云。【二】龍山 龍安志に、龍山在嘉會門外、去城十里、一名臥龍山。山上に天鳳閣寺や、靈化洞がある。【三】呂穆仲 時に杭州密推であつた。宋史の職官志に、軍府幕職有觀察勸農副使推官。【四】青春 陸元帝墓要開編推官。【五】青春 陸元帝墓要開編推官。【六】浴沂 曾點、孔子の弟子、魯國の武城に在る。

晏の賦に、結賞商秋、歌華青春。【一】強半 過半といふに同じ。同じく東坡の詩に、贏得兒童語嗜好、一年強半在城中。【二】簿領 帳簿に記すこと。南史、孔廣傳に、廣美容止、善談論、王僧虔云、與來、使人廢簿領。【三】日銜山 李大白的烏棲曲に、吳歌楚舞歡未畢、青山欲銜半邊日。【四】素食 荆楚歲時記に、去冬至二百五日、即有疾風甚雨、謂之素食。【五】半日間 李涉が題鶴林寺詩に、終日骨體靜夢間、忽聞春盡強登山、因過竹院逢僧話、又得浮世半日間。【六】命駕呂安 晉書に、呂安與嵇康高談、每二一相思、輒千里命駕、康友而善之。【七】浴沂曾點 論語先進篇に、曾點曰、其春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。沂水は魯城の南に在る。

【題義】此詩も熙寧六年二月の作。曾孝章と龍山靈化洞に遊んだが、約束した呂穆仲が來なかつた。

日暮に追つて曾氏は其の險を畏れたので、中途で還つた。其の後、穆仲が至つたから、遂に同じく靈化洞に遊び、徧く幽勝を歴て還り、此詩が出来たのである。

【詩意】青春の時分は、朱顔のやがて老ゆるをも覺えないで、一年の過半は、帳簿を記す俗務の間に銷磨（消磨）と同じ、へらしてなくす）してしまふ。愁のある客は、花似酒の曲を吟するを倦むやうである。（紀昀いふ、此似用杜曲花光濃似酒語と。）佳人も、かの日は山を衝むといふ鳥棲曲を唱へることを休めるがよからう。明朝になると寒食の日が過ぎた譯であるから、暫く僧意に赴いて浮世半日の閒を得ようと思ふ。駕を命する呂安は、邀へたけれども來ない。それで沂水に浴した曾點も、暮方になつて還つた（呂穆仲、期して至らず、故にいふ。）

寒食未明至湖上太守未來兩縣令先在

寒食の未明湖上に至る、太守未だ來らず、兩縣令先づ在り

城頭月落尚啼鳥

城頭月落もて尙は啼く鳥

烏榜紅舷早滿湖

烏榜紅舷早く湖に滿つ

鼓吹未容迎五馬

鼓吹未だ五馬を迎ふることを容さざり

水雲先已颺雙鳧

水雲先づ已に雙鳧を颺ぐ

映山黃帽螭頭舫

山に映する黃帽螭頭の舫

【字解】一、寒食 解は前詩に在り。冬至より一百五日に當る節。晉、介子推が焚死せし日なるより、後人、寒食す。鄭中記に、冷食三日、作乾粥食之。二、太守 陳襄をいふ。字は述古、學者、古靈先生と稱すること、前に出づ。三、兩縣令 蘇、仁和の二縣がある。輿地廣記に、錢塘縣、五代時、晉改爲錢江、後別置錢塘縣、與錢江、分治州、太平興國四年、改錢江、

夾道青烟鵲尾爐

道を夾さむ青烟鵲尾の爐

老病逢春只思睡

老病春に逢うて只睡らんことを思ひ

獨求僧榻寄須臾

獨僧榻を求めて須臾を寄す

曰仁和。周郎字は開祖、時に錢塘の令たり、徐暉は仁和の令たり。臨安志にも、仁和縣令、北宋時有徐暉。【一】鳥榜紅舷 游湖の船。【二】鼓吹 鼓を打ち笛を吹き鳴らす。古樂府に漢明帝樂四品を載す、三に曰く、黃門鼓吹樂、之を天子宴羣臣に用ふ。【三】五馬 太守をいふ、宋の程大昌の演繁露に、太守五馬莫知的確、古樂府五馬立踰驛、即其來已久、或言、詩有良馬五之、後園事也、漢有驪馬、車止用四馬、而鄭玄註詩曰、周禮、州長建旗、漢太守比州長、法御五馬、則太守之用五馬、後漢已然矣、若其制之所始、則未有知者、云云。王文濡いふ、其始出於左傳右驂之別、至漢加旗、則皆馬也、南史に、柳元策兄弟五人、並爲太守、亦有五馬之稱。【四】水雲 王昌齡の詩に、日暮雲霞空水雲。【五】雙鳧 周郎、徐暉の二縣令をいふ。【六】螭頭舫 白樂天の杭州詩に、小舫船亦畫龍頭。【七】鵲尾爐 海錄碎事に、珠林を引いていふ、香爐有鵲尾爐。法苑珠林に、費崇先、吳興人、少尤信佛法、每懸經、常以鵲尾香置膝前、杜陵集に載す、陶貞白有金鵲尾香爐。【八】寄須臾 柳子厚の詩に、且寄須臾間。

【題義】前詩と同じ時の作、寒食の日の未明に、東坡は湖上に至つたが、太守陳襄はまだ來ない。錢塘縣令の周郎と仁和縣令の徐暉とは先づ居た。これは其の時の詩である。

【詩意】城頭の月は、西山に落ちたが、鳥は尙ほ啼いて居る。遊湖の船である烏榜紅舷は、早や湖上に満ちて居る。王文誥いふ、此二句定是詞體、必非詩體、宋人有謂三公詞似詩者、當由此詞一奉誤と。鼓を打ち笛を鳴らして、太守陳述古を迎へないうちに、日暮水雲、先づ已に雙鳧を揚げて、

兩縣令の周邪と徐暉とが先づ在る。山に映する黃帽は畫龍頭の小航船である。道を夾さむ青煙は鶴尾の香爐である。老病の此身は、春に逢うて、只、睡らんことを思ひ、獨、僧榻(榻は臥榻、狹く長くして低き牀)を求めて、須臾を寄する。(王文誥いふ、一結平濟、公往往不脱此意、故能晚年肆力於陶と。)

次韻孫莘老見贈時莘老移廬州因以別之

孫莘老贈らるるに次韻す、時に莘老廬州に移る、因つて以て之に別る

鐘鍾一手賦形殊、鐘鍾一手なるも形を賦する殊なり、
造化無心敢望渠、造化は無心敢て渠を望まんや。
我本疎頑固當爾、我本疎頑固より當に爾るべし、
子猶淪洛況其餘、子猶は淪洛況んや其餘をや。
冀黃側畔難言政、冀黃の側畔政を言ひ難く、
羅趙前頭且眩書、羅趙の前頭且つ眩書。
惟有陽關一杯酒、惟有陽關一杯の酒あり、
慙慙重唱贈離居、慙慙重ねて唱へて離居に贈る。

【字解】(一)孫莘老、孫覺、字

は莘老、龍圖學士であつたが、王安石の爲めに逐はれたことは、前に述べた。(二)鐘鍾、莊子の大宗師篇に、昔在鐘鏜之間耳。鐘鏜は、鏜へる器。(三)賦形、文天祥の正氣歌に、鑿然賦形とある。賦は配する意。(四)造化、同じく莊子の大宗師篇に、以天地爲一大塊、以造化為一大冶。天地を以て一大塊とし、造化を以て一大冶治とす。

する意。(一)疎頑、疎愚といふに同じ、頑は分別のないこと、柳宗元の詩に、步登最高寺、蕭散任疎頑。後漢書、曹世叔妻傳に、吾性疎頑。(二)固當、爾、爾爾傳に、固當爾邪。(三)淪洛、おちふれる。柳宗元の啓、乃今形喪淪落。白樂天の琵琶行に、聞是天涯命人。(四)況其餘、後漢書、崔實傳に、況其餘哉。(五)冀黃、冀遂は山陽の人で、前漢、宣帝の時、渤海の太守となる。冀趙字は次公、同じく宣帝の時、潁川の太守となる。俱に前漢循吏傳に見ゆ。(六)側畔、杜市の詩に、羅樓夜柳側、羅郭輕烟畔。劉禹錫の詩に、沈舟側畔千帆過、病樹前頭萬木春。(七)陽關、唐、王維の送元二使安西詩に、渭城朝雨邑輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。陽關は、涼州敦煌郡、今の甘肅、安西、敦煌縣である。(八)離居、李白代寄情人、楚詞體云、使青鳥二分術書、恨三刻宿分離居。

【題義】此詩も、熙寧六年二月の作、孫莘老が贈つて來た詩の韻に次し、又、莘老の移つて廬州に知たるを送つた別れの詩ある。紀昀いふ、次句宋人野調、三四江西句法と。

【詩意】大自然の鐘器は、一手なるも、流形を賦することは千差萬別である。造化は無心で作用する。故に命を賦することが異つて居ても、敢て彼を怨望しない。我は元來、疎愚であるから、今日の不遇は當然である。君の如き立派な人物にして、なほ淪落するのであるから、其餘は推して知るべきである。冀遂や冀黃は、前漢宣帝の時の循吏である。其の側畔では政事を言ひ難い。羅趙の前頭で、目まばゆき程の筆跡である。(東坡の自註にいふ、莘老見稱政事與書、而莘老書至不工と。宋の葛立方の韻語陽秋に、世之言惡札者、必曰羅趙、東坡蓋諷之也。)惟、陽關送別の曲、故人の勸める一杯の酒がある。慙慙に三疊して之を唱へ、離居の人に贈るのである。

贈別

別を贈る

青鳥銜巾久欲飛

青鳥巾を銜んで久しく飛ばんと欲す

黃鶯別主更悲啼

黃鶯主に別れて更に悲啼す

慇懃莫忘分攜處

慇懃に忘るること莫れ分攜の處

湖水東邊鳳嶺西

湖水の東邊鳳嶺の西

【詩意】 蘇東坡の詩に、蘇云猛虎窟、申路正悲啼。李白の詩に、金紅青燕照悲啼。

【題義】 古來、饒送の禮がある。併し、人に饒するに物を以てするは、人に饒するに文を以てするに若かない。人を送るに酒を以てするは、人を送るに言を以てするに若かない。物の意は盡きあつて、文の意は盡きない。酒の味は窺りあつて言の味は窺りないからである。此詩を讀むもの、此意を知らなければならぬ。

【詩意】 青鳥は西王母の使者である。紅巾を口に銜へて久しく飛ばうとして居る。唐の韓偓が浙西を鎮したとき、戎豈といふもの、部内の刺史であつた。一酒妓があつて歌を善くし、色亦、閒妙であつたから、豈は情を屬すること甚だ厚かつた。混は其の能を聞いて之を召す。豈は敢て留めないで、歌詞を爲つて、之を送つた。其の詞は、好去春風湖上亭、柳條藤蔓繫離情、黃鶯久住潭相識、欲別頻啼四五聲といふのである。妓至りて、戎が此詞を唱へると、混は即時之に歸したといふことである。

【字解】 【一】 青鳥、太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承露殿齋、忽青鳥從西來、飛集殿前。東方朔曰、西王母欲來、有頃、王母至、二青鳥夾侍王母傍。杜子美の詩に、楊花雪落覆白蘋、青鳥飛去銜紅巾。 【二】 悲啼、鳴く聲の去銜紅巾。 【三】 慇懃、委曲の鳴、李白の詩に、惜別夜難眠。 【四】 分攜、李嶺山の詩に、詞中展卷看分攜。

【字解】 【一】 饒、皮日休の詩に、西施不及幾殘風。 【二】 玉翠、獻簡の體に用ゐる玉の翠。夏に饒といひ、股に翠といひ、周に饒といふ。王融の詩に、玉翠絕泉味。 【三】 離歌、古詞に、斟酌酒唱離歌。 【四】 萬行啼、沈仕用の詩に、沾衣

これが黃鶯主に別れて更に悲啼の意味である。どうか手を攜へて相別れた處を記憶されるやうに、それは、湖水の東邊、鳳嶺の西である。

【字解】 【一】 饒、皮日休の詩に、西施不及幾殘風。 【二】 玉翠、獻簡の體に用ゐる玉の翠。夏に饒といひ、股に翠といひ、周に饒といふ。王融の詩に、玉翠絕泉味。 【三】 離歌、古詞に、斟酌酒唱離歌。 【四】 萬行啼、沈仕用の詩に、沾衣

情萬行。 【五】 一刺、蘇東坡、范蠡は、既に越を佐けて、吳を滅ぼし、復、西施を得て、之と共に去り、舟に乗じて海に浮び、姓名を變じて、自ら賜夷子皮といふ。杜牧之の詩に、西子下姑蘇、一刺逐、賜夷。 【六】 僕、我と同じ、韓退之の詩に、鱷魚犬子船、牙眼怖殺僕とある。 【七】 舊、舊、一本に、舊住西に作る。呂氏童蒙訓に、東坡詩を載せて、應記儂家舊姓西とある。舊住西は、傳寫の誤であらう。寰宇記に、西施、施、其姓也、所居在、故有、東家施、西家施。

【題義】 説文に遠目、離近日、別と見ゆ。丈夫非無淚、不灑離別間、醉中挾分ちて、行く人が居る人に別を告げる。送別の詩に次韻して留別の詩を作つたのである。紀昀いふ、語有情韻と。

【詩意】 祖道の宴が開かれ、蠟燭の赤い光も、焼き散らして、盃も飛び交はす。離歌唱へ徹して、萬行の啼は、衣を沾す。張文潛の詩に、亭亭畫舸繫春潭、只待行人酒半酣、不管烟波與風雨、數將離

次韻代留別

次韻して留別に代ふ

絳蠟燒殘玉翠飛

絳蠟燒殘して玉翠飛び、

離歌唱徹萬行啼

離歌唱へ徹す萬行の啼

他年一舸鴟夷去

他年一舸にて鴟夷去らば、

應記儂家舊姓西

應に記すべし儂が家は舊西を姓とせ

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

情萬行

恨過江南とあるが、他年、一柯鷓鴣子皮(范蠡をいふ)を透うて去らば、應に我家は、舊と西を姓とせるを記憶すべきである。西施も我家も均しく西を姓とする。何ぞ其の新舊を問はうぞ。

月兔茶

月兔茶

環非環玦非玦

環とするも環にあらず玦とするも玦にあらず

中有迷離玉兔兒

中に迷離玉兔兒あり

一似佳人裙上月

一に佳人裙上の月に似たり

月圓還缺缺還圓

月は圓にして還缺け缺けて還圓なり

此月一缺圓何年

此の月一たび缺ければ圓なるは何れ

君不見鬪茶公子

君見ずや鬪茶公子小圓を鬪はすに忍

不忍鬪小圓

の年ぞ

上有雙銜綬帶雙飛鸞

上に雙銜綬帶の雙飛鸞あり

飛鸞

を比べて勝負をする)するまい。歌謡等に鬪茶歌あり。【七】雙銜綬帶 唐制によると、圖書に、雙銜綬帶、雁銜威儀の別あり。唐書、車服志に、賜節度使、賜銜綬帶、謂其有成儀也。又、摺撰の制、三品以上以、雙銜綬帶、雁銜威儀。茶譜に、宣州宣城縣有、

茶山、東曰、陽坡、其茶最勝、形如小方餅、橫鋪若芽其上、太守歸之京師、題曰陽坡茶、杜牧之詩に、山實東吳地、茶稱陽坡。

【題義】月兔茶は、涪州より産する所のもの、月中の兔(傅咸の文に、月中何有、白兔搗藥とある)から起つた名であるから、此時も着想をここに取つたのである。併し、紀昀は此詩を評して、東坡乃有此惡札と言つて居る。

【詩意】月兔茶の狀を言ふと、環と見るも、環ではない。玦とするも玦でもない。中に玉兔の模糊たるがある。それは全く佳人が裙(裳の裾)の上の月に似て居る。月は圓かにして、また缺け、缺けては、また圓である。此月が一たび缺けると、圓かなるは何れの年ぞ。君見ずや鬪茶を好む公子達の小圓を鬪はすに忍びないことを。それは茶の上に雙銜綬帶の雙飛鸞の形があるからである。

薄命佳人

薄命佳人

雙頰凝酥髮抹漆

雙頰は凝酥髮は漆を抹す、

眼光入簾珠的皦

眼光簾に入つて珠的皦

故將白練作仙衣

故白練を將て仙衣を作らんとす、

不許紅膏汗天質

許さず紅膏の天質を汗すを。

吳音嬌軟帶兒癡

吳音嬌軟兒癡を帶ふ、

【字解】薄命 列子の力命

篇に、北宮子、厚於德、薄於命、汝厚於命、薄於德、王青齡の詩に、眞成薄命久尋思、夢見君王覺後疑。白樂天が雙圓妾の詩に、顔色如花命如葉、命如葉薄、辭奈何。【二】嬌軟、こり固まつた臘脂(乳製の食品)。白樂天の詩に、面因嬌軟作。

無限閒愁總未知。無限の閒愁總て未だ知らず。

自古佳人多命薄。古より佳人は多く命薄し、

閉門春盡楊花落。門を閉ぢ春盡き楊花落つ。

蘇東坡に東坡作「尼童詩」應將「白練」作「仙衣」事、見「則天長壽三年」開書曰、一歲天下罷、當用「白練」爲「衣」云、李白の詩に、楚歌吳語不成。【一】閒愁、歐陽修の詩に、乍爾乍晴花自落、閒愁閒日長。【二】佳人多命薄、古樂府に、

【題義】宋の周輝が著した清波雜志に、輝在建業、於老尼處、得東坡元祐間綾帽子上所書薄命佳人詩、尼時年八十餘矣とある。佳人薄命といふのが此詩の骨子である。紀昀いふ、題鄙甚、詩却不失「古格」也。

【詩意】兩頰（面旁）は、凝り固つた乳酪のやうに、色が白くて麗しい。又、髪の毛は、漆を塗つたやうで光澤がある。そして眼のはつきりとして塵を射るは、珠的の噴たるが如くである。もと白練で仙衣を作らうとする。紅膏を粉飾して天然の素質を汚すことを許さない。吳音は、なまめきて柔かに、そして兒癡を帯びて居る。それで無限の閒愁も、總て知らないで居る。昔から、佳人と言はれるものは、多く薄命である。門を閉ぢて、外に出でない間に、春は盡きて、楊の花も落ちてしまふ。（王文詒いふ、詠「尼童」確極と。）

七一〇

吉祥寺花將落而述古不至

今歲東風巧翦裁。今歲東風巧に翦裁す、

含情只待使君來。情を含んで只待つ使君の來ることを。

對花無信花應恨。花に對して信なく花應に恨むべし、

直恐明年便不開。直に恐る明年便ち開かざることを。

【題義】此詩は、熙寧六年三月の作である。東坡が杭州に居つた時、陳襄（字は述古、學者、古靈先生と稱す）と共に吉祥寺の牡丹を賞しようとして約した。花が將に落ちようとするのに、述古は來ないから、此詩を爲つて之に寄せたのである。

【詩意】今歲は春風が巧に花を剪り裁ちて、殊に美しい。情を含んで誰をか待たうとする。ただ使君（刺史をいふ）即ち陳述古君の來車を待つて居るのみ。然るに、人が花に對して信なくば、花はまさに人を恨むであらう。直に恐れるのは、明年には、花も慍んで開かないことである。

述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦

仙衣不用剪刀裁。仙衣用ゐず剪刀の裁することを、

【字解】「一」仙衣不用云云

古今體詩 吉祥寺花將落而述古不至 述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦 七一

國色初酣卯酒來。國色初めて卯酒を酣にして來る。

太守問花花有語。太守花に問ふに花語あり。

爲君零落爲君開。君が爲に零落し君が爲に開くと。

野み、修己に謂つて曰く、今の京邑の詩、誰か首出となす。修己曰く、李正封が詩に、天香夜染衣、國色初酣卯酒。又、王建が詩に、國色朝酣酒、天香夜染衣。【一】卯酒、朝飲む酒。白居易の詩に、心願卯酒未消時。太真外傳に、上召、太真起子、紀子時卯酒未開。【二】零落、草木の枯れぬむ。楚辭に、惟草木之零落兮。

【題義】述古は東坡の寄せた詩を見て、明日至る。東坡は復、前詩の韻を用ひて、賦したので此詩である。

【詩意】牡丹は仙花である。仙人の衣は、無縫の衣であるから、剪刀などで裁つことはいらない。又、牡丹の色は、恰も朝酒を飲んで酣なる時のやうである。(二句は牡丹を形容す) 太守が花に問ふと、花は君が爲めに零落(草の枯れるを零といひ、木の枯れるを落といふ)し、又、君が爲めに開くと語つた。(東坡は時に太守であつた。)

李鈴轄坐上分題戴花 李鈴轄の坐上戴花を分題す

二八佳人細馬馱 二八の佳人細馬馱す、
十千美酒渭城歌 十千の美酒渭城の歌。

【字解】【一】李鈴轄、鈴轄は職名で、宋史職官志に、總管、鈴轄司、掌軍旅、屯戍、營防、守禦之政令、或一

簾前柳絮驚春晚 簾前の柳絮春晩に驚き、

頭上花枝奈老何 頭上の花枝老を奈何せん。

露溼醉巾香掩冉 露は酔巾を溼して香掩冉、

月明歸路影婆娑 月は歸路に明かにして影婆娑。

綠珠吹笛何時見 綠珠の吹笛何れの時か見ん、

欲把斜紅插皂羅 斜紅を把つて皂羅に挿まんと欲す。

州一限、有、兼二路三路者。【一】分題、前漢詩話に、古人分題、或各賦一物、如云、送某人、分題得某物也、或曰探題。【二】二八佳人、十六人の美人をいふ、宋玉の招魂に、二八侍御、二八齊容など見ゆ。十六人の女樂をして侍宿せしめること、十六人の美女一齊に起ちて容を整へることである。【三】細馬馱、馱、馱馬之監稱、右、細馬謂馱馬之良者。【四】十千美酒、曹植の詩に、歸來宴平樂、美酒斗十千。【五】渭城歌、王維の詩に、渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新。【六】柳絮、前にも出づ。晉書、王凝之妻謝道韞の傳に、謝安嘗內集、俄而雪驟下、安曰、何所似也、安兄子朗曰、撒鹽空中、差可擬、道韞曰、未若柳絮因風起。【七】香掩冉、鮑照の樂府に、須臾宛丹零落銷。掩冉は、風が物を吹き靡かす貌。【八】綠珠、晉書に、石崇の妓綠珠は香く笛を吹く。【九】斜紅、隋、簡文帝の詩に、分妝開淺暈、猶餘傳斜紅。【一〇】插皂羅、宋史の輿服志に、簪花謂之簪戴、大羅花以紅黃銀紅三色、簪花以雜色、羅大羅花以紅銀紅三色、又重戴、唐士人多尚之、蓋古大戴帽之遺制、以皂羅爲之。

【題義】李鈴轄が詩會の席上で、題を探り分ち取つて出來たのが、此詩である。紀昀いふ、氣味頗似玉溪と。玉溪は唐の李商隱(字は義山)をいふ。商隱の詩は怪譎を以て一格をなし、西峴體と稱する。

【詩意】年の若い佳人が良い馬に騎つて走る。美酒十千、渭城の朝雨、輕塵を裏し、客舎青冑として柳色新なりで、簾前に柳の絮（柳の實が熟して、亂れ飛ぶ）の散るのを見ては、春の晩るるに驚いた。頭上の花枝、插さうとするも、老を奈何せん。露は醉巾を濡して香も銷え失せる。月は明に歸路を照らして影が婆娑として舞ふ。（婆娑は舞ふ貌）かの綠珠の吹く笛を何れの時にか見るであらう。斜紅を以て皂羅帽に插さまうとする。

於潛令刁同年野翁亭 於潛の令刁同年が野翁亭

山翁不出山。

山翁は山を出でず、

溪翁長在溪。

溪翁は長に溪に在り。

不如野翁來往溪

如かや野翁の溪山の間に來往せん

山間

には、

上友藥鹿下鸞鷲。

上は鹿鹿を友とし下は鸞鷲。

問翁何所樂。

翁に問ふ何の樂しむ所ぞ、

三年不去煩推擠。

三年去らず推擠を煩はず。

翁言此間亦有樂。

翁は言ふ此間亦樂あり、

【字解】一、於潛、杭州七縣の在府城西一百七十里。二、刁同年、刁璠字は景范、熙寧中、於潛の令となる。後、蘇軾と共に浮溪の上に向らる。同年とは、同じ年に、進士の試験に及第したもの。（同見補に俱捷、謂之同年）或はいふ、刁約、字は景純と、非なり。刁約は令とはならないし、年紀も及第も俱に東坡の先輩である。刁約は、宋、仁宗の

非絲非竹非蛾眉

絲にあらず竹にあらず蛾眉にあらず。

山人醉後鐵冠落

山人醉後に鐵冠落ち、

溪女笑時銀櫛低

溪女笑ふ時銀櫛低る。

我來觀政問風謠

我來つて、政を觀て風謠を問ふ、

皆云吹犬足生鱗

皆いふ吹犬足鱗を生ず。

但恐此翁一旦捨

但恐る此の翁一旦此を捨て去らば、

此去。

長使山人索寞溪

長く山人をして索寞たらしめ溪女をし

女啼。

て啼かしめんことを。

て曰く、劉侯授不、謝令推不去。【一】非絲非竹云云。左太冲の詩に、何必絲與竹、山水有清音。【二】蛾眉、鐵冠、天日山の唐の細く長く曲れる雲の如き意。詩の雷風、顧人驚に、嶺首蛾眉。李白の詩に、美人捲朱簾、獨坐翠蛾眉。【三】鐵冠、天日山の唐道士常に鐵冠を冠す。一統志に、杭州府天目山、在臨安縣西五十里。元和志に、天目有兩峰、峰頂各一池、左右相對。【四】銀櫛、於潛の婦女、皆大銀櫛を挿む、長さ尺許、之を蓬香といふ。【五】問風謠、觀政のこと、書經に見ゆ。後漢書、羊續が傳に、探問風謠。同じく、李邵が傳に、和帝即位、分遣使者、皆微服單行、各至州縣、觀採風謠。【六】足生鱗、鱗は長さ毛、後漢の羊彭傳に、羊彭爲魏郡太守、與人歌之曰、我有桐華、非君伐之、我有嘉穀、非君過之、吹犬不驚、足下生鱗、含哺鼓腹、焉知凶災云云。【七】索寞、ものさびしい貌。寂寞、蕭索同。蘇軾の詩に、塞上詩懷尤索寞。方岳の詩に、太陽無光天索寞。

文心雕龍に、崇英之氣。

【題義】此詩は、熙寧六年三月（東坡の三十八歳の時）部を行き、於潛縣で刁璋の野翁亭に題したものである。紀昀いふ、野氣太重、似晚唐人七古下調と。

【詩意】山翁は常に山中に住んで外へは出ない。溪翁は長く溪に在つて他を知らない。（共に偏つて居る）野翁は然らず、溪にも下り、山にも上る。毎に溪山の間に来往して上は麋鹿の遊ぶを見て之を友とし、下は溪上鳧鴨の悠游たるを樂しむ。溪と山との遊びを并せ爲すによつて野翁亭と名けたのである。（亭に名ぐる義を彼す）野翁亭の主人（刁氏を指す）に問ふ、何の樂しむ所ぞ。三年も去らない。人が推擠して煩はしくすすめても、決して外に徙らない。（此に住居せらる）翁いふ、此の溪山の間（山に上り、溪に下つて來往し遊ぶ處）亦、自ら樂がある。それは、絲（琴・瑟の類）でもなく、竹（簫・笛の類）でもなく、蛾眉（美人をいふ）でもない。即ち管絃美色の樂にあらずして、山水の間に、一種の眞樂がある。山に上れば、山人酒を酌んで、醉後には、頭上の鐵冠を落しても、容を理めないで、放逸して樂む。溪に下れば、溪の女は、笑語して頭に挿む銀櫛を低れて、相和樂するを見る。（これを樂んで三年までも去らないといふ意）我（東坡）於潛に來つて、其地政治の善惡を觀察する。其地風俗の厚薄を吟味する。（諸所の詞を以て民の喜樂と憂患とを辨へ、令尹の治を察する）於潛の人民は皆いふ、今の令を迎へてから、縣中は治平で、盜賊の戒もない。故に里の犬なども驚き咎めて走ることがないから、足に蹙を生じたのであると。刁氏が於潛を治めることは實に和平である。

但、恐らくは、此人一旦此縣を捨て去りはしまいかと。若し然うなると、山人や溪女をして恃む所を失つて索寞として愁ひ啼かしめることになる。

於潛女

於潛の女

青裙縞袂於潛女、
兩足如霜不穿屨。
澹沙鬢髮絲穿杼、
蓬沓障前走風雨。
老漁宮粧傳父祖、
至今遺民悲故主。
苕溪楊柳初飛絮、
照溪畫眉渡谿去。
逢郎樵歸相媚嫵、
不信姬姜有齊魯。

青裙縞袂於潛の女、
兩足は霜の如くにして屨を穿かず。
澹沙たる鬢髮絲杼を穿つ、
蓬沓前を障つて風雨に走る。
老漁宮粧父祖を傳ふ、
今に至るまで遺民故主を悲しむ。
苕溪の楊柳初めて絮を飛ばし、
溪を照す畫眉谿を渡つて去る。
郎樵の歸るに逢うて相媚嫵す、
信せず姬姜の齊魯を有つを。

【字解】【一】於潛 杭州七縣の一であることは、前に述べた。縣の西に碧山あり、因て名く。舊、晉字は水なし、隋に至つて水を加ふ。武德七年、潜州を置き、八年、廢して縣となす。【二】兩足如霜 李太白の詩に、一雙金齒屐、兩足白如霜。【三】蓬沙 韓退之の月蝕の詩に、素鳥司南方、尾秃翹蓬沙。蓬は註に角上聚也と見ゆ。【四】絲杼 杼は當に杼に作るべし。説文に、杼之持、杼者、絲杼杼、言髮如絲之穿杼也。【五】蓬沓 東坡の自註に、於潛女、猶大銀櫛尺許、謂之蓬沓。杜牧之の詩に、老漁即

古今體詩 於 潛 女

山崎、後庭千銀川。【一】傳父祖、晉書、陸機傳に、我父祖名播四方、事不知耶。杜子美詩、君上得三阮生、汝祖先父祖。【二】召溪、名勝志に、召溪、源出天目山、東流臨於滄界。【三】畫眉、眉を削り、餘髮を以て假眉を畫く。漢書、張敖傳に、爲婦畫眉。畫くことの巧拙によつて、顔容を改め、新醜をなす、柳眉、蛾眉、遠山眉などの目がある。【四】眉黛、黛し眉と同じ、天好問の詩に、新花紅粉妝、重疊工眉黛。梅唐書に、太宗大笑曰、人言魏徵舉動醜儀、我但覺其醜眉耳。【五】姪妾有齊魯、齊女、姜姓、魯女、姬姓。

【題義】於潛縣の女を賦したのである。紀昀いふ、老滌の二句、横互中間、殊無頭緒一と。

【詩意】於潛縣の女の身形をいふと、青い裾(下裳)に、白い袂(袖は白絹)を着けて居る。兩足は霜のやうであつて、腰を穿かない。突張つた鬢髪は、恰も絲が杆(横絲を通はす具)を穿つがやうである。於潛の女は、蓬香として大銀櫛の尺許なるを前に挿んで風雨に走る。吳越王錢氏の宮女は、父祖から宮仕して居る。今日に至るまで、遺民は故主君を悲しんで居る。若溪の楊柳は、初て架を飛ばし、溪を照らす畫眉の美人は溪を渡つて去る。郎權(郎は年少き男子の稱)の歸るにあつて、相媚態(なまめきたる姿)をして、人に媚びしたがふ)する。此狀を觀ると、姬姓の魯女、姜姓の齊女だけが、魯や齊を有つとも信せられない。

自昌化雙谿館下步尋谿源至治平寺二首

昌化雙谿館の下より歩いて谿源を尋ねて治平寺に至る 二首

亂山滴翠衣裘重、亂山翠を滴らして衣裘重し、

【字解】昌化、雙谿館、亂山

雙湖響空窗戶搖、雙湖響空しく窗戶搖く。

飽食不嫌溪筍瘦、飽食嫌はず溪筍の瘦するを、

穿林閒覓野芎苗、林を穿ちて閒に覓む野芎の苗。

却愁縣令知游寺、却て愁ふ縣令の寺に遊ぶを知るを、

尙喜漁人爭渡橋、尙は喜ぶ漁人の争うて橋を渡るを。

正似醴泉山下路、正に似たり醴泉山下の路、

桑枝刺眼麥齊腰、桑枝は眼を刺し麥は腰に齊し。

名、梅嶺が四川通志に、醴泉山在眉州治西八里、環州城、山中有八角清、甘如醴、故名。【六】刺眼、杜子美の詩に、石角鉤衣破、刺眼眼新。

【題義】此時は熙寧六年三月の作、東坡が昌化縣に至り、雙溪館の下から歩いて、溪の源を尋ね、治平寺に至つた時のことを寫したのである。昌化縣の前で谿が南北に分れて流る。熙寧の間、縣令陸元長は、其の北流に臨んで亭を爲つたが、東坡は亭上に遊び、詩を題し事を記した。雙湖響空の語がある。

【詩意】春は亂山に入つて青く、翠が滴りて、行人の衣裘も重くなつたやうに感せられる。谿水は南北に分れて流れて居るが、谿の源を尋ねて遂に治平寺に至つた。溪水の響も空しくなつて、寺の窗戶

古今體詩 自昌化雙谿館下步尋谿源至治平寺二首

が搖いた。溪筍の瘦せたのをも嫌はずに十分に食べた。林を穿つて間に野苧(をんなかづら)の苗を
覺めた。却て縣令が我等の寺に遊ぶを知つたことを迷惑に思ふのである。併し、尙ほ漁人が争うて橋
を渡るのを喜ばしく思ふ。(紀昀いふ、苗字如何對瘦字、六句、用莊子爭席意)。莊子に、其反也、
舍者與之爭席矣と見ゆ。)山寺に到るの途はかの眉州に在る醴泉山下の路に似て居る。(東坡が程六表
弟の蜀に歸るを送る時に、醴泉寺古堊橋袖の句あり。)即ち桑の枝は眼を刺し、麥の高さは腰に齊し
い。

每見田園輒自招、
倦飛不擬控扶搖、
共疑楊惲非鋤豆、
誰信劉章解立苗、
老去尙貪彭澤米、
夢歸時到錦江橋、
宦游莫作無家客、
舉族長懸似細腰。

田園を見る毎に輒ち自ら招く、
飛ぶに倦んで擬せず扶搖に控するを。
共に疑ふ楊惲豆を鋤くにあらずと、
誰か劉章苗を立つを解するを信せん。
老い去つて尙ほ彭澤の米を貪り、
夢に歸りて時に到る錦江橋。
宦遊して家なきの客となる莫れ、
舉族長く懸りて細腰に似たり。

【字解】(一)倦飛、陶淵明の
歸去來の辭に、鳥倦而知還。
【二】控扶搖、控は、投げること、
莊子の逍遙遊に、控於地而已。扶
搖は、同じく逍遙遊に、捧扶搖而
上者九萬里。扶搖を約めると、昔
となる。曠は颶風の義。二聲を合せて一音としたもの。爾雅に、扶搖、
之颶風。【三】楊惲、字は子幼、漢、
宣帝の時、中郎將となる。殿中に居
り、康甕で、私がながつたが、性、剛

書であつたため、怒を招き、免ぜられて庶人となる。家居産業を治め、室宅を起し、財を以て自ら娛む。友人孫會宗、書を以て之を
戒しむ。答へて曰く烹羊炰魚、斗酒自勞。酒後、耳熱し、天を仰ぎ笛を拊つて鳥鳥と呼ぶ。人生行樂のみ、富貴を須つ何れの時ぞ
と。【四】劉章解立苗、史記、齊悼惠世家に、朱虛侯劉章劉氏不得職、常入侍高后。燕飲、進曰、請爲太后一言耕田歌。高
后曰、若生而爲王子、安知田乎。章曰、深耕溉種立苗、孰不獲非其種者。鋤而去之。呂后然。【五】貪彭澤米、晉書、陶
潛傳に、爲彭澤令、在縣、公田悉令吏種秫、而自種一畝、子固請種秫(うるしれ)、乃以一頃五十畝種秫、五十畝種粳。【六】
錦江橋、今、成都の大慈寺前に在る。過ぐる所の石橋が是である。【七】長懸似細腰、韓偓の詩に、細腰不自乳、舉族長孤懸。
【詩意】今、余は田園を見る毎に、輒ち自ら招いてここに居らうとする。鳥は飛ぶに倦んで、颶風に
投じようともしない。昔、楊惲は官を免ぜられて、田園生活に入り、人生は行樂のみと謂つたさうだ
が、實際彼は豆を鋤いたとも思はれない。又、朱虛侯劉章は、劉氏の一族が職を得ないのを忿つて、
燕飲の時に、太后の爲に、耕田歌を言ひ、深耕溉種立苗、其の種でないものは、鋤いて之を去らん
とすると説いた。すると、呂后は默然として居つたさうである。併し、誰も劉章が苗を立てることを
解したとも信じない。老い去つて尙ほ彭澤の米を貪つて、退隱が出来ないのは愧かしい。夢に故山に
歸つて、時に錦江橋に到つた。ああ人生宦遊して、家なきの客となること勿れ。家族が生活難に陥い
つて、細腰となるであらう。

於潜僧綠筠軒

可使食無肉、
食をして肉なからしむべくとも、

古今體詩 於潜僧綠筠軒

不可使居無竹。
無肉令人瘦。無竹令人俗。
人瘦尚可肥。俗士不可醫。
旁人笑此言。似高還似癡。
若對此君仍大嚼。
世間那有揚州鶴。

居をして竹なからしむべからず。
肉なくんば人をして瘦せしむ。竹なくんば人をして俗ならしむ。
人の瘦せたるは尚ほ肥えつべし。俗士をば醫すべからず。
旁人此の言を笑ふ。高きに似て還つて癡なるに似たりと。
若し此君に對して仍つて大に嚼ちせば、
世間那ぞ揚州の鶴あらんや。

【字解】 於潛僧。杭州府に、於潛縣があること前に出づ。僧、名は孜、字は惠覺、參寥子集に見ゆ。或はいふ、僧は癡らしくは道潛を指すならんと。參寥子集は、宋の釋道潛の撰する所、道潛は性質が福であつたため、合ふこと算かつたさうである。一統志に、道潛、於潛人、通内外典、能文章、尤喜爲詩、蘇軾守杭州、卜智果精舍、居之云云と見ゆ。【二】 綠筠軒。臨安志に、寂照寺在於潛縣南二里、寺舊有綠筠軒。後、宋、理宗の寶慶の初に、御名を避けて、此君軒と易ふ。坡詩王微之の語を用ゐたのである。【三】 不可使居無竹。一本に不可居無竹に作る。【四】 仍大嚼。鶴の曹植(字は子建) 吳質(字は季重) に與ふる書に、過屠門而大嚼、雖不得肉、食且快意。子建が書の意は、屠者の門を過ぎ、肉を見て大に嚼すれば、たとひ其の肉を得て食はないでも快といふに在る。東坡は大嚼の二字を使用したまでで、而も肉を食ふ意に用ゐた。書の意とは異なる。字を用ゐて意を用ゐなかつたのである。【五】 揚州鶴。殷芸小説に、有客相從、各言所志、或願爲揚州刺史、或願多貲財、或願騎鶴上揚州、其一曰、願爲揚州刺史、騎鶴上揚州、蓋欲兼三人之所欲也。九江郡・丹陽郡・廬江郡・會稽郡等の處、皆揚州の地。刺史は太守、漢には太守といひ、唐には刺史といふ。

【題義】 此詩も熙寧六年三月の作、寂照寺に遊んで、寺僧惠覺の爲に綠筠軒に題し、并に於潛女の詩

も作つたのである。紀昀いふ、與三月兔茶詩相埒と。

【詩意】 食と居とは、誰でも重んずる所のものである。食には、饑令肉を備へることがなくとも、居處には種竹がなくては叶はない。(昔、晉の王徽之(字は子猷)は嘗て居を空宅(室屋樹木もないあれ屋敷)の中に寄せて、便ち竹を種えしめた。或人が其の譚を問ふと、徽之は、但嘯詠して、何ぞ一日も此君なかるべけんやと言つたさうである。此君は竹を指す。此語よりして此君の二字を竹の異名とする。東坡も子猷が語を用ゐたのである。食膳に肉がなければ、只、人の肌膚を瘦せさせるまでだが、居處に竹を栽ることがないと、人の心をして凡俗ならしめる。人の瘦せたのは、尚ほ肥えるやうにも出来ようが、只、凡俗の輩は、逆も醫治を施して、變じ易へやうはない。(藤に附ける薬がない)意。東坡が此詩は、詩僧の居所を言ふ作であるから、肉は食はなくとも、竹は種えなくては叶はない云云と言つたのであらう。傍人は此の言を笑つて、(此言は上の六句を指す)言は高尚なるに似て、還つて愚癡である。謂れもない出家の僧となつて、肉竹の論などをしようよりは、世間に居て、肉をも食ひ、又、竹をも栽えて樂んだならば、二つとも併せて好かるべきにと、僧を嘲つて笑ふ。(此の以下の二句は嘲りを解く辭である)傍人の嘲りも、一理はあらうが、凡そ世の中の事、同時に二つは好まれない。それで比較して勝れた方を擇んで取るがよい。若し竹に對して、又、肉を大嚼するやうに好いことばかりあつたら、世間に何ぞ揚州の鶴のやうな願があらうぞ。(畢竟、願の滿ち難い世である)よつて、肉を食ふことを捨てて、竹を栽えて樂むのであると、或人のなした嘲りを解き、兼ねて此の

與臨安令宗人同年劇飲

臨安の令宗人同年と劇飲す

我雖不解飲

我飲を解せずと雖も、

把盞歡意足

盞を把れば歡意足る。

試呼白髮感秋人

試みに白髮秋を感ずる人を呼んで、

令唱黃雞催曉曲

黃雞曉を催はすの曲を唱へしめん。

與君登科如隔晨

君と科に登りしは晨を隔つるが如し、

敝袍霜葉空殘綠

敝袍霜葉空しく綠を残す。

如今莫問老與少

如今老と少とを問ふこと莫れ、

兒子森森如立竹

兒子は森森として竹を立つるが如し。

黃雞催曉不須愁

黃雞曉を催すとも愁ふるとを須むず、

老盡世人非我獨

世人を老い盡くす我獨のみにあらず。

秋詩がある。【一】黃雞催曉曲 白樂天の詩に、羅道使君不解飲、聽唱黃雞與白日、黃雞催曉丑時鳴、白日催年百時渡、【二】敝袍 論語、子罕篇に、衣敝緇袍、緇袍は緇入。袍は衣の著あるもの。【三】霜葉 霜にて赤くなつた葉。白樂天の詩に、

似如霜葉、雖紅不是春。【四】森森 高く聳ゆる貌。晉書、和嶠傳に、嶠森森如千丈之松。

【題義】此詩も、熙寧六年三月の作である。治平寺に至つて、臨安縣を過ぎたとき、縣令蘇舜舉と劇飲して歸り、此の詩を作つたのである。紀時いふ、清而淺と。

【詩意】我は酒を飲むことは出来ないが、盞を把れば、何となく歡ばしくてたまらない。試に白髮となつて秋風を感ずる人をして、白樂天が作つた黃雞催曉の曲を唱へしめようか、深感に堪へられないであらう。憶昔、君と進士の試験に及第したことも、昨日の如くである。青春空しく過ぎて、今は飲れたる綿入を著け、霜葉は紅と雖も、是れ春ならず、處處綠を残すのみである。如今、老と少とを問ふこと莫れ、幸に兒子は森森として生長し、竹を立つたやうである。(子由が詩に、聞道渠家八丈夫、他日歸耕免曲獨とあるは、東坡の此句と同意)されば黃雞が曉を催すこともあるも、少しも愁へるには及ばない。世人を老い盡すのであつて、我獨のみが年よるのではない。

寶山晝睡

寶山の晝睡

七尺頑軀走世塵

七尺の頑軀世塵に走り、

十圍便腹貯天真

十圍の便腹天真を貯ふ。

此中空洞渾無物

此の中空洞渾て物なし、

何止容君數百人

何ぞ止に君の數百人を容るるのみなし。

古今體詩 與臨安令宗人同年劇飲 寶山晝睡

【字解】【一】寶山 杭州圖經に、寶山在吳山之南。西湖志に、湖之吳山、西上有寶月山、又東爲淺山、淺山之支爲七寶山。【二】七尺頑軀 文選、陸士衡の詩に、骨爲七尺軀。【三】十圍 晉書に、尹隸歷帶十圍。【四】便腹 肥え太りたる腹。後漢

書に、通明、字季先、以文學知名、曾晝日假臥、弟子私嘲之曰、通季先復便懶、讀書、但欲眠。【二】天眞、人の本性、琴操に、反其天眞、晉書の阮籍傳に、保天眞。

【題義】此詩も前の詩と同じ時の作、寶山の僧舎に晝寝ね、睡覺め、起つて壁上に題したのである。【詩意】この七尺の頑軀（愚だが丈夫である、己の身を謙しいふ。）は世塵に走り、十圍もある便便たる腹中には天眞（天然のままにて飾りのない本性）を貯へて居る。又、此の腹中は空洞にして渾て何物もない。されば包容することは大であつて、何ぞただに君等數百人を容るるのみならんや。

【餘論】東坡は自ら此詩の後に題していふ、余在錢塘、一日晝寝於寶山僧舎、起題壁、其後有三數小子、亦題名壁上、見者乃謂予謂之也、周伯仁（周顛字は伯仁）所謂君者、乃王茂宏（王導字は茂弘）之流、豈此輩哉と。周顛字は伯仁、少うして重名あり。神采秀徹、王導（字は茂弘、少うして風鑿あり、識量清遠なり）深く之を尊重す。嘗て其の腹を指して曰く、此中、何かあると。曰く、此中、空洞にして物なし。以て卿等數百人を容るべしと。東坡の此の詩は此の故事に據る。

僧清順新作垂雲亭

僧清順 新に垂雲亭を作る

江山雖有餘亭樹苦難穩
登臨不得要萬象各偃蹇
惜哉垂雲軒此地得何晚

江山餘ありと雖も、亭樹苦だ穩なり難し。
登臨するも要を得ず、萬象各一偃蹇。
惜しいかな垂雲軒、此地得ること何ぞ晚き。

天功爭向背詩眼巧增損

天功向背を争ひ、詩眼巧に増損す。

路窮朱欄出山破石壁很

路窮りて朱欄出で、山破れて石壁很ぐ。

海門浸坤軸湖尾抱雲巘

海門坤軸を浸し、湖尾雲巘を抱く。

葱蔥城郭麗淡淡烟邗遠

葱蔥城郭麗しく、淡淡烟邗遠し。

紛紛鳥鵲去一一漁樵返

紛紛鳥鵲去り、一一漁樵返る。

雄觀快新獲微景收昔遁

雄觀新獲を快うし、微景昔遁を收む。

道人眞古人嘯咏慕替阮

道人は眞に古人、嘯咏阮を慕ふ。

空齋臥蒲褐芒屨每自捆

空齋蒲褐に臥し、芒屨毎に自ら捆く。

天憐詩人窮乞與供詩本

天は詩人の窮するを憐み、供詩の本を乞與す。

我詩久不作荒澀旋鋤壘

我が詩は久しく作らず、荒澀旋て鋤壘す。

從君覓佳句咀嚼廢朝飯

君に從つて佳句を覓め、咀嚼朝飯を廢す。

【字解】

【一】垂雲亭 杭州國隱に、寶嚴院、亭有僧竹軒・垂雲亭、亭乃詩僧清順作、垂雲亭詩にいふ、小亭曉出雲間、萬象升沈不得聞、其怪詩語頭白早、時來向此寫湖山。【二】亭樹 亭は臺、樹は屋宇ある臺。宋史に、久在洛、因卜居、有亭樹竹樹之勝、優游自得。【三】偃蹇 左傳の宣公六年に、彼皆偃蹇。註にいふ、偃蹇と。傲慢にして隨ばない貌である。楚辭、離騷の註には、高貌とある。【四】天功 書經の舜典に、欽哉惟時、亮天功。【五】詩眼 范成大の詩に、道眼已空詩眼在、梅花欲動

古今體詩 僧清順新作垂雲亭

雲花稀。【六】增損。史記、呂不韋傳に、有能増損一字者、予千金。【七】海門。王昌齡の詩に、殘月生海門。【八】浸。坤軸。杜子美の詩に、安知有香池、萬頃浸坤軸。【九】雲。陶宏景が許長史畫室題詞に、通氣雲。【一〇】浸。後漢、光武紀に、壽伯何望春、春郭、唯曰、氣佳成鬱鬱、感然然。【一一】淡。宋玉の高唐賦に、澹澹兮而望入。【一二】暮。晉阮。笛康字は叔夜、阮籍字は嗣宗、晉書に、周顛於王導坐、傲然嘯詠、導云、卿欲希嵇阮耶、顛曰、何敢近捨明公、遠希晉阮。【一三】芒屨。六朝前は申其草を以て履を爲つた。麻で造つたものを屨といふ。史記、范雎傳に、屨登屨屨とある。芒屨は屨者の履。晉書、劉琨傳に、家貧織芒屨、以爲養。芒屨と同じ。唐書の隱逸傳に、朱挑推曹、十芒屨、道上一見者曰、居士屨也、爲曹未若易之、置其處、輒取去、終不與人接。【一四】自。孟子、滕文公篇に、相屨屨屨、細以打ちかためること、孟子的註に、細屨屨屨、手で擊つて之を備る也、屨屨屨屨、故叩之也と見ゆ。

【題義】此詩も前詩と同時の作、熙寧六年三月、東坡は寶殿院に遊んだ。寶殿院は、天成二年に、錢氏が建てた寺である。西湖遊覽志餘に據るに、東坡一日僧舍に遊び、壁間に小詩を見る。云ふ、竹暗不通日、泉聲落如雨、春風自有期、桃李亂深塢。誰が作りし所と問ふ。或人、僧清順と對ふ。聲名頓に起る。詩僧清順、垂雲亭を作つて、東坡、之を寫す。紀昀いふ、力摹昌黎、而氣機流走處、仍是本色耳と。

【詩意】江山の形勝は十分であるが、亭榭はどうも落著がない。(紀昀いふ、從前亭榭不得地也と。)登臨するも、其の要領を得ないで、萬象が各、驕傲の態度を示して居る。惜しいかな垂雲亭、此の地を手に入れること何ぞ晚き。天功(自然のはたらき)と地の向背を争ひ(勝地を探るをいふ)そして詩眼(詩人の眼力)は、巧に之を取捨増損する。路が窮まつて、朱塗の欄干が目に入り、山破れて石

壁が関ぐやうに見える。海門は地軸を浸して居るかに疑はれ、湖水の尾は、雲縹雲を帯びた高い峯を抱いて居る。鬱鬱として城郭が麗しく、淡淡として烟村を遠くに望んで居る。紛紛として鳥鵲も去つてしまひ、漁夫も樵夫も残らず返つて來る。新に雄大な觀を獲たのは、まことに愉快である。又、以前に知られなかつた微景も之を収めることが出來た。(紀昀いふ、眞之韓集、不可復辨と。)清順道人は、眞に古の高人で、常に嘯詠して嵇康や阮籍を慕はれて居る。空齋(誰も居ない室)に住まつて、蒲褐(がまや毛布)で製した藁敷物に臥し、草屨を織つて生活を立てて居る。天は詩人の窮するを憐れんで詩才を授け、道人をして立派な詩人となした。翻つて我身を顧ると、詩も久しく作らなかつたので、荒蕪し澀滯して居り、鋤鋤を要する。そこで、君に従つて佳句を覓め、爲に朝飯も廢める次第である。

五月十日與呂仲甫周邠僧惠勤惠思清順可

久惟肅義詮同泛湖游北山

五月十日、呂仲甫・周邠・僧惠勤・惠思・清順・可久・惟肅・義詮と同じく湖に泛び、北山に遊ぶ。

三吳雨連月湖水日夜添

三吳雨連月、湖水日夜添ふ。尋僧去無路、激激水拍簷。僧を尋ね去るも路なく、激激として水簷を拍つ。

駕言徂北山得與幽人兼
清風洗昏翳晚景分穠纖
縹緲朱樓人斜陽半疎簾
臨風一揮手悵焉起遐瞻
世人驚朝市獨向溪山廉
此樂得有命輕薄神所殲

駕して言に北山に徂き、幽人と兼ぬるを得。
清風昏翳を洗ひ、晚景穠纖を分つ。
縹緲朱樓の人、斜陽半は疎簾。
風に臨んで一たび手を揮ふ、悵焉として遐瞻を起す。
世人は朝市に驚せ、獨溪山に向つて廉。
此の樂み命あるを得、輕薄は神の殲す所。

【字解】

【一】北山 西湖志に、自東雲山、葛嶺、棲霞、靈隱、天竺、之北山、以其在西湖之北也。【二】三吳 水經に、吳興、吳郡、會稽を以て三吳となす。或は指掌圖に據つて、蘇州、常州、湖州を三吳とするもあり、通典を引いて、會稽、吳興、丹陽分つて三吳と爲す。何れでも宜しい。【三】昏翳 翳、去聲、杜牧之の詩に、石路昏翳去、此生塵不造。【四】穠纖 水が溢れる貌。縹緲が詩に、春江澹澹清且急。【五】昏翳 曇りて暗い、昏翳といふに同じ。陳子昂の詩に、昏翳無妻夜。【六】穠纖 縹緲は草木の稠く多い貌。縹は微細。曹植の洛神賦に、縹緲得中。【七】縹緲 遠くかすかに見える貌。李白の天門山詩に、參差遠天際、縹緲晴霞外。【八】朱樓 後漢書、馮衍傳に、伏朱樓而四望兮。【九】悵焉 望悵の意。楚辭、九辨に、惆悵兮而私自憐。李太白の詩に、停悵悵然憶遠人。【一〇】遐瞻 遐眺などと同じく、遠くを見渡す意。

【題義】此詩は、熙寧六年五月十日に、呂穆仲（即ち仲甫）周邠・惠勤・惠思・清順・可久・惟庸・義詮（孤山僧志に、詮を柏堂に作る）等と同じく西湖に泛んで、北山に遊んだ時の作である。湖山を寫して畫のやうである。紀昀いふ、四句用義山水齋畫語と。

【詩意】三吳の地、雨が連月降りつづいて、湖水の水量が日夜に増した。僧を尋ねて行かんとするも、路がない。激激として水が溢れて簾を打つ。龍に駕して北山に行き、幽人（世を避けて隠れ居る人）と之を兼ねることが出来た。清風が昏翳（暗くおぼふこと）を洗ひ、晚景が稠き處と細かい處とを、はつきり見はして居る。遙に見る朱樓の人、夕陽は半ば疎簾を照らして居る。風に臨んで一たび手を揮ふと、悵然として望悵の心が生じ、遠くを見渡したいといふ氣が起つて来る。世の人は人の稠き朝や市に驚せ集つて、かかる溪山に向つては至つて淡白である。幸に山水の此樂みを得たのは、眞に天の命である。従つて輕薄は神の殲す所であることを念はなくてはならない。

會客有美堂周邠長官與數僧同泛湖往北山
湖中聞堂上歌笑聲以詩見寄因和二首時周
有服

客有有美堂に會す、周邠長官、數僧と同じく湖に泛び、北山湖中に往く、堂上の歌笑の聲を聞き、詩を以て寄せらる、因りて和す、二首、時に周に服あり

靄靄君詩似嶺雲
從來不許醉紅裙

靄靄として君が詩は嶺雲に似たり、
從來許さず紅裙に醉ふことを。

古今體詩 會客有美堂周邠長官與數僧同泛湖往北山湖中二首

不知野屐穿山翠、
 惟見輕橈破浪紋。
 頗憶呼盧袁彥道、
 難邀罵座灌將軍。
 晚風落日元無主、
 不惜清涼與子分。

知らず野屐の山翠を穿つを、
 惟見る輕橈の浪紋を破るを。
 頗る憶ふ盧を呼ぶ袁彥道、
 邀へ難し坐を罵る灌將軍。
 晚風落日元なし、
 清涼を惜まず子と分たん。

前の詩に、越女紅裙濕、燕姬翠黛愁。【一】野屐、屐は木屐。宋書に、謝靈運好山水、尋山陟嶺、常著木屐、上山則去其前齒、下則去其後齒。【二】呼盧、賭博。呼盧は賭博すること。盧は博の采の目の名、五子、皆黒きもの、最勝の采。袁彥道は、晉の世の博奕に巧な人の名。因て博奕の事をもいふ。尙ほ餘論を見よ。【三】罵座灌將軍、灌夫が灌賢や程不識を兼辱したことを見よ。餘論を見よ。

【題義】此詩も、熙寧六年五月の作、客有美堂に會したが、周邠長官は服喪中で來なかつた。數僧と同じく湖中に泛び、堂上歌笑の聲を聞いて周邠の寄せられた詩は、堂上歌聲想過雲、玉人休整碧紗裙、散殘粉落脂脂暈、飲劇杯深琥珀紋、簪履定知高楚客、笑談應好卻秦軍、莫辭上馬玉山倒、已是遲留至夜分。此詩は之に和したのである。

【詩意】君が詩は露瀼（雲の集りたなびく貌）として嶺雲に似て居る。從來、紅裙に醉ふことを許さ

ない。山に遊んで、野屐の山翠を穿つことを知らない。ただ水に泛んで、輕い楫の浪紋を破るを見るのみである。かの喪に居るも、服を變じ、賭博をして人の窮を救うた袁彥道のこと憶はれてならない。又、かの灌夫が丞相田蚡の婚禮の賀宴に列し、灌賢や程不識を兼辱したことも穉かではないが、多少氣を吐くに足るのである。かかる人は、今は邀へ難い。天地間には物各主がある。ただ晚風と落日には、元來、主がないから、どうか清涼を惜まないやうに、子と之を分たうと欲するのである。

【餘論】晉書の袁耽傳に、袁耽、字彥道、陽夏人、少有才氣、爲士類所稱、桓温少時、遊于博徒、資產俱盡、欲求救于耽、而耽在艱、（喪に居るをいふ）遂變服懷布帽。隨温與債主戲、耽兼有藝名、債者聞之而不相識、謂之曰、卿當不辨作袁彥道也、遂就局、十萬一擲、直上三百萬、耽投馬絕叫、探布帽擲地曰、竟識袁彥道否。とある。又、漢書の灌夫傳に、灌夫嘗有服、丞相田蚡娶燕王女爲夫人、太后詔列侯宗室、皆往賀、寶嬰過夫、欲與俱、夫謝曰、丞相與夫有隙、嬰強與俱、夫行酒、蚡不能滿觴、夫怒、次至灌賢、方與程不識耳語、夫無所發怒、適屬賢曰、平生毀程不識不直一錢、今日、長者爲壽、適效女曹兒咕囁（咕囁、附耳小語聲。）耳語。蚡謂夫曰、程李、俱東西宮衛尉、今衆辱程將軍、仲孺（灌夫字は仲孺）獨不爲李將軍（李廣）地乎、夫曰、今日斬頭穴胸、何知程李、蚡怒、召長史曰、今日召宗室、有詔、勅灌夫罵、坐不敬とある。袁耽も服喪中、灌夫も服喪中、故に東坡の自註に、皆取其有服也。

載酒無人過子雲。酒を載せて人の子雲に過ぐるなし、
 掩關晝臥客書裙。關を掩うて晝臥せば客裙に書す。
 歌喉不共聽珠貫。歌喉共に珠貫を聴かず、
 醉面何因作纈紋。醉面何に因つて纈紋を作さん。
 僧侶且陪香火社。僧侶且つ陪す香火の社、
 詩壇欲斂鸛鷺軍。詩壇斂めんと欲す鸛鷺の軍。
 憑君遍遠湖邊寺。君に憑つて遍く遠る湖邊の寺、
 漲綠晴來已十分。漲綠晴れ來つて已に十分。

老呼爲一串珠。【一】 纈紋。しほり。李賀の詩に、龜甲屏風厭眼。【二】 香火。北齊書の陸法和の傳に、有香火因緣。張翥の詩に、
 風雷畫朝寺、香火醉中人。【三】 鸛鷺軍。鷺も鷺も、陣立ての名。左傳、昭公二十一年に、公子城以管師至、救宋、與華氏戰於
 緡邱、鄭國顯爲鷺、其御顯爲鷺、緡邱は宋の地。

【詩意】 漢の揚雄は、家が貧しくて、酒ばかり嗜んで居たから、人の其の門に至るものは、稀であつた。たまには好事のものもあつて、酒や肴を載せ、従つて學んだのである。今は酒を載せて尋ね來るものもない。それで關門を閉ちて晝臥して居ると、思ひ掛けなくも、客がやつて來て下裳に字を書いた。又、昔、羊欣といふ人は、隸書が上手であつた。父不疑が烏程の令となつたとき、欣は年僅に十

【字解】 【一】 子雲。漢の揚雄、字は子雲、蜀郡成都の人。學を好んで、博く羣書を誦む。嘗て甘泉、河東、校獵、長楊の四賦を表し、又、法言及び太玄等を著す。【二】 掩。掩はわほひ閉ちる。南史、宣帝傳に、席門常掩。【三】 歌喉不共聽。珠貫。禮記、樂記に、歌者上如埙、下如篳（篳と同じ）、樂象乎埙如珠貫。嚴尚書の子尉馬に與ふる詩に、莫須恨歌喉一串珠。白樂天の子尉馬に與ふる詩に、何郎小妓歌喉好、嚴

二。時に王獻之が吳興の太守であつたが、甚だ之を愛した。欣、嘗て夏月に新しい絹の裙を着けて、晝寢をして居た時、獻之は縣に入り、之を見て、裙に數幅を書して立ち去つたといふことが南史に見えて居る。人も來ないし、來ても逢はない。従つて歌喉貫珠の美聲も、共に聴くことが出来なかつた。これでは醉眼も細紋をなさない。さて僧侶も香火の社に陪する。有美堂の同人は詩陣を張り、或は鸛鷺の陣立を用ゐるものもあり、鸛鷺の陣立を用ゐるものもある。君の御蔭で遍く遠る湖邊の寺、時は恰も漲綠晴れ來つて已に十分であつた。

席上代人贈別三首 席上人に代りて別を贈る 三首

悽音怨亂不成歌。

悽音怨亂して歌を成さず、

縱使重來奈老何。縱ひ重ねて來らしむるも老を奈何せん

淚眼無窮似梅雨。

淚眼窮りなく梅雨に似たり、

一番勻了了一番多。

一番勻了すれば一番多し。

【字解】 【一】 悽音云云。李百藥の詩に、悽音起離憂。悽音の二字は、共に心に悲しく感じたいむ意。
 【二】 似。梅雨。江浙地方は、四五月、梅黄まんとす。木潤ひ、土潤ひ、蒸鬱して雨を爲す、之を梅雨といふ。風土記に、夏至前雨名黃梅雨、木潤

【題義】 杜甫の詩に、揮淚各西東とあり、陸龜蒙の詩に、丈夫非無淚、不灑離別間とある。離情は發して離歌となる。此三首は要するに人に代つて離歌を唱へたのである。紀昀は、第一首を評し

て卑俗と言つた。

【詩意】遠きを離れといひ、近きを別れといふ、離別に臨んでは、悽愴の心が怨亂して離歌も出来ない。縦ひ重ねて来る機会があるとしても、老を奈何せん。涙眼は窮りないこと梅雨の盡くるなきに似て居る。一たび勻了して少くなつたと思ふと、又、一番多く降りしつのである。(勻は解字に、少也从勺从二と見ゆ。)

天上麒麟豈混塵。 天上の麒麟豈に混せんや、
籠中翡翠不由身。 籠中の翡翠身に由らず。

那知昨夜香閨裏。 那ぞ知らん昨夜香閨の裏、

更有偷啼暗別人。 更に偷啼暗別の人あらんとは。

【字解】(一) 天上麒麟 南史に、徐陵母談氏嘗夢、五色雲化為鳳、集左肩、已而既、年數歲、家人攜以換賣、摩其頂曰、天上石麒麟也。(二) 籠中翡翠 白樂天の詩に見ゆ。翡翠はカハセミ、格物論に、一種二色、翡赤羽、翠青羽、大如鳥、皆珍禽也。(三) 不由身 羅隱の時に、世間難得不由身。(四) 偷啼 陳後主の詩に、大婦怨空閨、中婦夜偷啼。暗涙といふに同じ。(五) 暗別 白樂天の時に、惟有離離與暗別。

【詩意】天上の麒麟は、下界の塵には混じらない。籠中の珍禽は、得難くして身に由らない。昨夜、香閨の裏に、更に偷啼(人に知れないやうに泣く)して、人知れず別を悲しんで居る人があるとは、誰も氣付かないであらう。(偷啼する所以である。孟浩然が友の京に之くを送る時に、君登青雲去、予望青山歸、雲山從此別、淚濕薜蘿衣とあるも、同じ心持ちで、會面の期し難いことを悲しむのである。)

ある。)

蓮子擘開須見臆。 蓮子擘開須らく臆を見るべし、

楸枰著盡更無期。 楸枰著け盡して更に期なし。

破衫却有重逢日。 破衫却て重ねて逢ふ日あり、

一飯何曾忘却時。 一飯何ぞ曾て忘却する時あらんや。

【字解】(一) 蓮子云云 蓮の實を指といふ、王延壽の賦に、鰕房菜の。荷中の玄質(藕粉、荷は蓮の葉)を煮(はすの實の中の實)といふ。(二) 楸枰 碁局をいふ、温庭筠の詩に、閑對楸枰一壘。

【詩意】此詩は所謂吳歌の格で、字を借りて意を寓せたのである。蓮の實が咲き開いた。蓮の實は荷、荷中の實は藕、須らく臆を見るべきである。(須見臆は荷の意を以ていひ、心の底まで見るべき意である。)碁局をば著け盡して、更に會ふべき時はない。(更無期は碁を以ていひ、行行重行行、與君生別離、相去萬餘里、各在天一涯、道路阻且長、會面安可知的意である。)破衫(破れ衣)は重ねて逢ふ日がある。(重ねて逢ふ處、縫紉の縫を以て之を隠くす)食する毎に飯匙(さじ)は忘れない。一飯何ぞ曾て忘却する時あらんや。(別れても忘れない。忘卻時は、匙七の匙を以て之を隠くす。)

【餘論】古樂府の子夜歌に、霧露隱芙蓉、見蓮不分明。また、明燈照空局、悠然未見期。また、理絲入殘機、何悟不成匹。讀曲歌に、芙蓉履裏委、蓮子從心起。また、石闌生口中、銜杯不得語、東坡の此詩は、全く此等の詩の意を祖としたのである。宋の葛立方の韻語陽秋に、彙碁(碁が其の夫を稱していふ)今何在、山上復有山、何當大刀頭、破鏡飛上天。古詞又云、鬪碁燒敗襖(襖

はうはぎ、長きを袍といひ、短きを襖といふ。著子故依然、皮・陸嘗擬之、陸云、且日思雙履、明時願早諧、皮云、莫言春爾薄、猶有萬重思、此皆、以下句一釋上句一與三葉粘一異矣。東坡の詩の蓮子擘開須見臆、是文與釋、並見於一句之中矣。

留題徐氏花園二首 徐氏の花園に留題す 二首

莫尋羣玉山頭路

羣玉山頭の路を尋ねる莫れ、

莫看劉郎觀裏花

劉郎觀裏の花を看る莫れ。

但解閉門留我住

但解く門を閉ち我を留めて住せしむ、

主人休問是誰家

主人問ふことを休めよ是れ誰が家と。

【字解】(一) 留題 名勝を遊覽し、其の地に就いて題詠する所あるをいふ。(二) 徐氏花園 徐知道の花園ならん。東坡成都に在りし時、徐知道西川兵馬使たり。(三) 羣玉山 上古帝王祝書の處。穆天子傳に、天子北征東還、乃簡黑水、至於羣玉山、先王之所謂東府。(四) 劉郎觀裏花 劉禹錫(夢得)の自朗州至京、戲贈看花諸君詩に、紫陌紅塵拂面來、無人不要看花間、玄都觀裏桃千樹、盡是劉郎去後栽。紅塵を世の俗塵に、花を看るを富貴に走る人に、玄都觀を朝廷に、桃を小人に比したのである。

【題義】會心の處、必ずしも遠きでない。飄然たる林水、自ら濠・濮(二川の名)の間の思がある。既に花園に居す。門を閉ちて住すべきである。此詩は此意をいふ。紀昀いふ、滑調と。

【詩意】遠く羣玉山頭の路を尋ねることなけれ、又、劉禹錫が所謂玄都觀裡(京師に在る道教の寺)の花を看ることなけれ、但、よく門を閉ち、我を留めて住せしめる。主人問ふを休めよ是れ誰が家なるを。(以て市朝の心を消盡せしむ)。

退之身外無窮事

退之身外無窮の事、

子美樽前欲看花

子美樽前花を看んと欲す。

更有多情君未識

更に多情あり君未だ識らず、

不隨柳絮落人家

柳絮に随つて人家に落ちず。

【詩意】杜牧之の詩に、身外任塵土、樽前極歡娛とあるが、韓退之は身外に不朽の業を立てようとし、杜子美は樽前に花を看ようとする。更に多情(感情が多い)の人がある。君は未だ識らない。此の人は柳絮(柳の綿)に随つて人家には落ちない。

唐道人言天目山上俯視雷雨每大雷電但聞

雲中如嬰兒聲殊不聞雷震也

唐道人言ふ、天目山上俯して雷雨を視る、大雷電毎に、但聞く、雲中嬰兒の聲の如きを、殊に雷震を聞かざるなり

已外浮名更外身

已に浮名を外にし更に身を外にす、

【字解】(一) 唐道人 字は子微

古今體詩 留題徐氏花園二首 唐道人言天目山上俯觀雷雨

【字解】(一) 樽前欲看花 杜

子美の醉時歌に、生前相遇且銜盃、

白居易の詩に、花下忘歸因美景、

樽前勸醉是春風。(二) 多情 杜

牧之の詩に、多情卻似絕無情。

區區雷電若爲神、區區たる雷電若ぞ神となさん。
 山頭只作嬰兒看、山頭只嬰兒の看を作すに、
 無限人間失箸人、限りなき人間箸を失ふ人。
 東山春色緑、歸隱謝浮名。【四】失箸人 三國、蜀志に、曹操從容謂先主曰、今天下英雄、惟使君與孤耳、本初之徒不足數也、先主方食、失匕筯。華陽國志にいふ、於時正當雷震、備因謂操曰、舉人云、迅雷風烈必變、良有以也、一震之威、乃何至此也。

【題義】聲あるを雷といひ、聲なきを電といふ。即ち淮南子に、陰陽相薄、感而爲雷、激而爲電と見えて居る。故に陰陽の外に超然たる道人からいふと、雷の鳴る、雲中に嬰兒の聲がするとしか感じない。此詩は、此意を言つたものである。紀昀いふ、狂語近祖と。
 【詩意】既に世間の浮名を外にし、更に其の身を外にして居る我身は、區區たる雷や電やなど何ぞ神として恐れようぞ、ただ山頭嬰兒の泣くこととしか感じないのに、限りなき人間の中には、劉備の如く、震雷の際に、七箸を失つて、迅雷風烈には必ず變ずと、其の場を彌縫つた人もある。

追和子由去歲試舉人洛下所寄暴雨初晴樓上晚景 五首

子由去歲舉人を試み、洛下に寄せし所を追和す。暴雨初て晴れ、樓上晚景 五首

秋後風光雨後山

秋後の風光雨後の山、滿城の流水碧潺湲。

烟雲好處無多子

烟雲好き處多子なし、及取昏鴉未到間。

【字解】【一】舉人 舉子といふに同じ、前に述べた。鄉試に及第して、更に會試(京師の試験)に應ずるもの。事文類聚に、唐制禮部試舉人、夜以三鼓爲限。【二】潺湲 湲、湲の流の貌。白樂天が悟真寺の詩に、藍水色似夏、日夜長潺湲。【三】昏鴉 杜子美が對雪の詩に、無人獨浮蟻、有待至昏鴉。浮蟻は酒の異名、酒の上に浮ぶ青よりいふ。

【題義】五首、皆、熙寧六年六月の作である。子由は熙寧五年八月、洛陽に赴き、妙覺寺に於て舉人を考試したとき、寄せた詩を追和したのである。紀昀いふ、五首、首較有風致、次亦可、餘皆平平と。

【詩意】秋に入つてからの風光、雨霽れて後の山色は、人をして爽かならしめる。滿城の流水は潺湲として碧をなして居る。かかる烟雲の勝地は多くは得られない。殊に暮色蒼然の時がい。即ち昏鴉の翅を接へて歸り、未だ到らざるの間である。(紀昀いふ、末二句、有世道之感と。)

洛邑從來天地中

洛邑從來天地の中、嵩高蒼翠北邙紅。

【字解】【一】天地中 周禮の地官、大司徒に、以土圭之法正日景、以求地中。土圭は日影を測る

風流者舊消磨盡。風流の昔舊消磨し盡く、
只有青山對病翁。只青山の病翁に對するあるのみ。

復下中興、卒營築、居九鼎、曰、此天下之中、四方入貢、道里均云云。邵堯天の詩に、水竹腹心裏の句あるも、亦、洛中を詠じたのである。【一】嵩高、五嶽の中嶽。嵩或は崧に作る。山大にして高きを崧といふ。毛詩に、嵩高維嶽。【二】北邙、洛陽に、北邙連亘四百餘里、東洛九原之地。名山記に、北邙山在偃師縣北。【三】青葛、禮記に、八十曰耆、願況が詩に、襄陽耆舊幾人存。

【詩意】洛邑は從來、天地の真中で、昔、周公が洛邑を營んだのは、時を以て諸侯を朝せしむるに、天地の中を取り、四方の職貢や道里を均しうした爲めである。かの嵩高も北邙も（皆、山の名）洛陽に在る。嵩高は青青として居り、北邙は紅である。洛陽には、風流の昔舊消磨し盡き、只、青山のみあつて病翁に對して居る。（病翁は東坡の自註に、謂富公也とある。富公、名は弼、字は彥國、河南の人、熙寧二年八月、病を以て位を辭し、出でて河南に判となり、汝州に改む。富公言ふ、新法臣所不曉、不可以復治郡、願歸洛養病と、之を許す。此れより洛に居り、元豐六年閏六月（皇紀一七四三年、西曆一〇八三年）薨す。紀昀いふ、末二句、有二世道之感と。）

【餘論】紀昀は此詩を評していふ、蒼翠紅青、未免太複と。王文誥は、すなはち據詩、蒼翠指嵩高樹色、紅指北邙塵壙（壙はほこり）、分析甚明、曉嵐加入青字、自爲纏轉（戦の交り加はる貌）と。又いふ、太複與詩毫無干涉と反駁して居る。

白汗翻漿午景前、白汗漿を翻へす午景の前、
雨餘風物便蕭然、雨餘風物便も蕭然。
應傾半熟驚黃酒、應に傾くべし半熟驚黃の酒、
照見新晴水碧天、照らし見る新晴水碧の天。

【字解】【一】白汗、淮南子に、擊二石之漿、則白汗交流。【二】蕭然、杜子美の詩に、南方六七月、出入與中原、老少多渴死、汗餘水漿翻。【三】風物、風景といふに同じ、陶潛の文に、天氣澄和、風物

開美。陶潛明が五柳先生の傳に、環堵蕭然、不蔽風日。【一】驚黃酒、杜子美の詩に、鶯兒黃似酒、對酒愛新菊とある。鶯はがてう。雁に似て大、野に在るを雁といひ、家に在るを鶯といふ。【二】水碧天、文選、謝靈運の詩に、水碧凝流溫。水碧は水玉、流溫は温潤である。

【詩意】熱さが堪へ難くて、午景の頃は、白い玉のやうな汗が、恰も水漿を翻へすやうである。雨が過ぎた後は、風景が何となく物寂しく感ぜられる。氣を晴らすは酒に如くはない。應に半熟した驚黃の酒（黄色を帯びた美しい酒）を傾くべきである。眼花耳熱した後、照し見る新晴水碧の天、新に霽れた涼しい水玉の天を見るときは、何とも言へない心持となる。

【餘論】宋の程大昌の演繁露にいふ、李白詩多言采水碧、碧、玉類也、水中有此碧一也。碧は玉の綠青色をいふ。（山海經に、高山多青碧とある。古は大夫の佩びる玉は水蒼玉を用ゐた。）

疾雷破屋雨翻河、疾雷屋を破り雨河を翻へす、
一掃清風未覺多、一掃清風未だ覺めざること多し。

【字解】【一】疾雷破屋、莊子、齊物論篇に、疾雷破山、風振海而不可加驚。【二】吳道子、陽翟の人、

應似畫師吳道子。應に畫師吳道子に似たるべし、

高堂巨壁寫降魔。高堂巨壁降魔を寫す。

に、天慶寺世尊成道、且受三折印、半乘作羅、世尊以指按地、地大震、魔皆顛仆、於是降之。唐、明皇雜錄に、畫師吳道玄、神清氣俊、善圖佛像、尤長於寫鬼神、下筆神速、勢若飛動。

【詩意】疾雷山を破り、厲風屋を破る。白雨忽ち至つて、恰も河を翻へすがやうであつた。既にして風雨を一掃したが、未だ清味を覺えない。其の光景は、恰も畫師吳道子に似た所があるやうに思はれる。吳道子は酒を好み氣を使ひ、毫を揮はうとする毎に、必ず酣飲したといふことである。それで高堂巨壁に降魔（惡魔を降伏する）の圖を寫したのである。

【餘論】因に風のことをいふと、爾雅に、暴風從上下曰飈、從下上曰颺、亦曰扶搖、回風曰飄、日出而風曰暴、陰而風曰暎、雨土曰霾、春晴而風曰光風、和風、餘風曰結風、吹物有聲曰顛、終日風曰終風と見ゆ。

客路三千不見山。客路三千山を見ず、

上樓相對夢魂間。樓に上つて相對す夢魂の間。

明朝却踏紅塵去。明朝却つて紅塵を踏んで去る、

羞向清伊照病顏。羞づ清伊に向つて病顔を照すことを。

【字解】【一】夢魂 李太白の詩に、夢魂不到關山難。林逋の詩に、芳華開透綠夢魂。心に思ふ所があれば、精氣が夢寐に入るのである。【二】踏紅塵去 白樂天の詩に、亦曾夢兩足、夢人踏紅塵。【三】

清伊 流れの清い伊水をいふ、水經註に、伊水經前亭、名勝志に、伊水出南陽縣西、蓋陽山、東北過伊園中、又東過洛陽縣南、入於洛。

【詩意】子由は熙寧三年に、出でて陳州（今の河南、淮陽縣は其の舊治）の學官となつたが、五年に洛に至つて、舉人を試験する官となつた。故に客路三千不見山の句がある譯である。相思の情は、夢寐の間に來往する。夢魂は車馬の力を借らないが、何時しか樓に上つて兄弟相對する。暫時相逢ひ、又相分るで、明朝は却つて紅塵を踏んで去る。かの清んで居る伊水に向つて、此の病顔を照らすを羞ぢる次第である。

過廣愛寺見三學演師觀楊惠之塑寶山朱瑤

畫文殊普賢 三首

廣愛寺に過り、三學演師を見、楊惠之が塑せる寶山、朱瑤が畫ける文殊、普賢を觀る 三首

寓世身如夢安閒日似年。世に寓して身夢の如く、安閒にして日年に似たり。

敗蒲翻覆臥破械再三連。敗蒲翻覆して臥し、破械再三連ぬ。

勸客眠風竹長齋飲石泉。客に勸めて風竹に眠らしめ、長齋して石泉に飲む。

回頭萬事錯自笑覺師賢。頭を回せば萬事錯れり、自ら笑つて師の賢なるを覺ゆ。

古今體詩 過廣愛寺見三學演師觀楊惠之塑寶山朱瑤畫文殊普賢三首

【字解】【一】三學演師 三學は戒學・定學・慧學をいふ。佛道修行の三大綱で、八萬四千の法門、また此の三學を出ない。翻譯名義集に、世尊立教法有三焉、一者戒律、二者禪定、三者智慧。唯の簡文帝の文に、道隆三學。【二】楊惠之 名畫録補遺、楊惠之於河南府廣愛寺三門上、塑五百羅漢及山亭院切伽山。【三】朱瑀 名畫錄に、朱瑀、字溫琪、學吳道子筆跡、由是知名。圖畫見聞志に、朱瑀、長安人、工畫佛道、洛中廣愛寺有文殊普賢像、酷類吳生。【四】文殊普賢 文殊師利は、妙吉祥または妙德と譯す。諸佛發心の師。普賢菩薩は、禪定を代表し、白象に乗る。【五】身如夢 維摩經に、是身如夢爲成妄見。【六】日似年 白樂天の北窓閒坐詩に、自有近年術歲月長。【七】敗蒲 許渾が詩に、敗蒲倚蒲團。蒲は僧衣。【八】破衲 阿彌陀經に、各以衣被盛衆妙華。衣被は、佛家にて花を盛り佛に奉げる具。釋典には、被、行戒衣也と見ゆ。【九】眠風竹 杜子美の詩に、嘴酒愛風竹。【一〇】長齋 蘇晉長齋佛前。

【題義】此詩も、熙寧六年六月の作である。廣愛寺に過り、禪師に見え、塑像及び佛畫を見たことを賦したのである。第一首は見三學演師に和し、第二首は觀楊惠之塑寶山に和し、第三首は、朱瑀畫文殊普賢に和したのである。紀昀いふ、題脱和子由三字と。王文誥いふ、此因前列總題錯誤、而晚風不喻其故、特有此說と。

【詩意】此世に寓する此の身は、夢の中に在るのである。觀するも夢、觀じなくても亦夢、人間往く所として夢でないことはない。心を靜にして安閑なるときは、一日は一年の如くに長い。敗れた蒲團を裏がへして臥し、破れた衣被(華)を盛りて、諸佛菩薩に供養する器具なれど、ここは行戒の衣と見た方が宜しからう)を再三連ね、客に勤めて風竹に眠らしめ、平生精進潔齋して、石泉に臨んで酒を飲む。頭を同せば、過去の總ては失敗であつた。自ら笑つて師の賢なるを感じたのである。

妙迹苦難尋。茲山見幾層。
妙迹苦だ尋ね難し、茲山幾層を見る。

亂峰螺髻出。絕澗陣雲崩。
亂峰螺髻出で、絶澗陣雲崩る。

措意元同畫。觀空欲問僧。
意を措くこと元畫に同じ、空を觀じて僧に問はんと欲す。

莫教林下意。終老歎何曾。
林下の意をして、老を終るまで何曾を歎せしむること莫れ。

【字解】【一】妙迹 晉書、王羲之傳に、常歎妙迹水絕。【二】螺髻出 螺髻は、法螺貝のやうに束れた髻。夜日休が羅浮峰の詩に、似將青嶺髻。在明月中。憲洪の詩に、落日遠山螺髻青。【三】絶澗 絶谷、絶壑などいふに同じく、遠く離れた谷をいふ。後漢書の建寧傳に、深林絶澗、有若自然。奇禽異獸、飛走其間。【四】陣雲 雲が重つて起る兵陣の如きよりいふ。史記の天官書に、陣雲如立。文選、木元虛の海賦に、崩雲層層、注注泊泊。

【詩意】妙迹は尋ね難い、仰げば寶山は高くして幾層を見る。其の亂峰は法螺貝を束ねた髻の形をなして聳えて居り、山中の遠い澗は、重つた雲が崩れたやうである。亂峰や絶澗は自然の配置だが、意を措くことは畫に同じである。萬有の空を觀じた余は僧に問ひたいと思ふのである。林下の意(即ち山林に幽棲する意)をして遂げしめ、そして老を終ふるまで林下何曾見一人といふ歎聲(隱遁すると言つて決行しない意)を發せしめないやうにありたい。

【餘論】唐の范攄が著した雲溪友議に、江西の帥章丹は、東林の僧靈徹と忘形の契であつた。章丹嘗て靈徹に詩を寄せていふ、王事紛紛無暇日、浮生冉冉只如雲、已爲平子歸休計、五老峯前必其君と。徹は之に酬いていふ、年老身閑無外事、麻衣草座亦容身、相逢盡道休官去、林下何曾見一人と。

朱瑤唐晚輩得法尙雄深、
滿寺空遺跡何人識苦心。
長廊款雨脚破壁撼鐘音。
成敗無窮事他年復弔今。

朱瑤は唐の晩輩なるも、法を得ること尙は雄深。
滿寺空しく遺跡、何人か苦心を識らん。
長廊雨脚に款ち、破壁鐘音に撼く。
成敗無窮の事、他年復今を弔せん。

【字解】【一】雄深 劉禹錫の文に、雄深雅健。宋、韓愈の冷齋夜話に、雄深雅健者、其氣長故也。【二】識「苦心」 杜子美の詩に、識子用心苦。文選の古詩に、晨風懷苦心。杜子美が詩に、更覺良工心獨苦。【三】長廊 吳平子の西京賦に、長廊廣庭。【四】雨脚 杜子美の詩に、雨脚如麻未斷絕。又、出門復入門、雨脚但如舊。李賀の詩に、雨脚來吹簾。【五】無窮事 唐の詩畫が善く春詩に、莫思身外無窮事、且樂生前有限杯。杜子美の詩句と同じ、但、杜は且樂を且盡に作る。

【詩意】朱瑤は唐末の人であるが、畫を善くする。世に傳へる所に據ると、吳道子の畫は多く瑤の筆だといふことである。瑤は畫法を得ること雄深（雄大で意味が深い）であつたが、今は滿寺空しく遺跡で、何人か朱瑤が丹青の苦心を識らうや。長い廊は雨脚に款ち、破れた壁は鐘音に撼いて居る。凡そ世の事は一成一敗、循環して窮る所を知らない。他年、復、今日を弔することもあらう（蘭亭の序にも、後之視今、亦猶今之視昔と言つて居る。）

韓子華石淙莊

絳侯百萬兵尙畏書牘背

韓子華の石淙莊
絳侯百萬の兵も、尙は書牘の背を畏る。

功名意不已數與危機會、
我公抱絕識凜凜鎮橫潰。
欲收伊呂迹遠與巢由對、
誓言雖未從久已斷諸內。
區區爲懷祖頗覺羲之隘、
此身隨造物一葉舞澎湃。
田園不早定歸宿終安在、
彼美石淙莊每到百事廢。
泉流知人意屈折作濤瀨、
寒光洗肝膈清響跨竽籟。
我舊門前客放言不自外、
園中亦何有蒼蔚可勝計。
請公試回首歲晚餘蒼檜

功名意已ます、數、危機と會す。
我が公は絶識を抱き、凜凜として横潰を鎮す。
伊呂の迹を收めんと欲し、遠く巢由と對す。
誓言未だ從はずと雖も、久しく已に諸を内に斷つ。
區區懷祖の爲にするは、頗る羲之の隘きを覺ゆ。
此の身は造物に隨ひ、一葉澎湃に舞ふ。
田園早く定らず、歸宿終に安くに在る。
彼の美なる石淙莊、到る毎に百事廢す。
泉流は人の意を知り、屈折濤瀨を作す。
寒光肝膈を洗ひ、清響竿籟に跨る。
我が舊門前の客、放言外よりせず。
園中亦何か有る、蒼蔚計るに勝ふべけんや。
請ふ公試に首を回せ、歲晚蒼檜を餘す。

【字解】【一】韓子華 韓獻肅公、名は絳、字は子華。

【二】絳侯 漢の周勃傳に、勃從高祖討絳侯、與相就圍。卒して武

古今體詩 韓子華石淙莊

侯と誅し、次子の亞夫、封を襲ぐ。【三】與・危・機・會、劉禹錫題・欽器圖・詩に、秦國功成思・稅駕、晉臣名遂歎・危・機、無・因・上・蔡・季・黃・犬・顯・作・丹・徒・一・布・衣。【四】僕・橫・潰、文選、王子淵の調蕭賦に、時橫潰以陽逸。橫潰は縱橫潰亂の意、陽逸は清濁の貌。
 【五】伊・呂・述、史記の殷本紀に、伊尹、名阿衡、傅事任以國政。同じく齊世家に、太公望呂尚以漁釣、周西伯與俱歸、立爲師。
 【六】巢・由、高士傳に、許由隱・於・箕・山、堯召爲・九州・長、不・欲・聞・之、洗・耳・於・水・澗。時有巢父、牽・犢・飲・之、見・由・洗・耳・聞・其・故、由・語・之、巢父曰、子若處・高岸深谷、人迹所・不・通、誰能見・子、子故浮・游・俗間、苟求・名譽、汚・我・澗・水、年三十にして、尙未だ名を知られず、人之を師といふ。王季、門地を以て之を許す。既に見て他言なく、唯、江東の米價を問ひしに、遂は張目して答へず、導曰く、王季細ならず、人何ぞ師といふやと。【七】義・之・際、晉王羲之傳に、王述少有・名譽、與・羲・之・齊・名、而羲之甚輕之、由・是・情・好・不・協、羲之恥・爲・之・下、謂・其・諸・子・曰、吾不・誠・懷・祖・(王述)而位遇懸絶、當・由・汝・等・不・及・坦・之・(述の子)耶、述、後檢・敬・會・稽・郡、辨・其・刑・政、羲之深恥之、遂稱疾去郡、於・父母墓前・自誓去官。【八】彭・評、司馬相如の上林賦に、拂乎暴怒、洶洶澎湃。【九】歸・宿、宿は止、歸者する點をいふ。荀子に、偶然無所・歸宿。【一〇】作・海・濶、漢揚雄傳に、何必湘・泗・與・海・濶。【一一】寒・光、木蘭歌に、寒光照・鐵・衣。【一二】肝・膽、肝膽とむなうち。同じく東坡の詩に、藥洲成・曲沼、清激見・肝・膽。【一三】清・響、詩・年・鐘、文選、王仲宣の七哀詩に、流波激・清響、拾遺夜の琴賦に、激・清響・以・赴・會。高唐の賦に、鐵條悲鳴、聲似・年・鐘。【一四】門・前・客、唐の李適之(京兆の人)が罷相時に、試問門前客、今朝幾個來。【一五】香・廚、詩の曹風に、香分廚兮、南山朝陽。隨游の詩に、靜岸・葛・巾・穿・香・廚。

【題義】此詩も熙寧六年六月の作、前の廣愛寺の詩と同じく子由が洛下の作に和したのである。子由が洛に赴いたのは五年、東坡の詩は六年に作つたから、前詩にも追和したのである。紀昀いふ、此卷多率筆應酬之作、此詩特爲深警、故知有物之言、不同浮響、又見無所取義而作詩、雖東坡亦不能佳と。

【詩意】絳侯周勃は、相の位を免せられて、國に就いた。河東の守や尉が縣下を行き、絳に至る毎に、物に誅せられんことを恐れて、家人に兵を持たせて會見した。すると、或人が、物は兵を動かして反せんと欲すると告げたので、物を廷尉に下した。物は千金を獄吏に與へて同情を乞ふと、獄吏は書牘の背を示して、公主を以て證となせと教へた。(公主は孝文帝の女で、物の子が之に尙して居る。)教へられた通りにしたので助かつた。物既に獄を出でて、吾嘗て百萬の軍に將となつたが、これまで獄吏の貴きを知らなかつたと言つたさうである。又、人は功名の念が已まないので、數、危機を犯すことがある。晉の諸葛長民の傳に、劉裕が劉毅を誅したとき、長民が所親に謂つていふ、昔年醜・彭越、前年殺・韓信、禍其至矣と。謀つて亂を爲さうとしたが、猶豫して發しなかつた。既にして歎じて、貧賤常思・富貴、富貴必履・危機、今日欲・爲・丹徒(縣の名、江蘇金陵道に屬す)布衣、豈可・得、と言つたさうである。我が韓獻肅公は、すぐれた職見を抱いて、縱橫潰亂を鎮し、古の伊尹や呂尚の迹を收めやうとした。そして遠く許由や巢父と對立しようとしたのである。其の誓の言葉は、未だ實行しないが、久しく已に之を心に斷めて居つた。區區懷祖の爲に官を去つた王羲之の如き態度は、隘いと謂はねばならない。此身は造物に隨ひ、一葉の澎湃(波濤の相觸れて戻るさまをいふ)に舞ふやうなものである。歸耕するとしても、田園がまだ定まらないから、歸著する所は、終に何處にあるか分らない。彼の美しい石淙莊に到る毎に、百事を廢める。そこで泉流は、能く人の氣分を吞み込んで居るものと見え、屈折して瀉瀨(なみ立つ早瀬)をなして居る。寒光は心の中を洗ひ、清らかな響は竿籟に跨る。

我が舊門前の客は、今日幾人來る。放言は外よりはしない、内から出るのである。さて園中には今では、亦、何かある。草木が蒼蔚（盛に茂る貌）して居るのである。請ふ君、試みに首を回せ、草木が盛に茂つても、歳晚には蒼梧を餘すのみで、他は盡く凋落するではないか、（言ひ換へれば、草木は蒼蔚盛茂であつても、歳晚には黃落するのである。其の凋まないのは、ただ蒼梧のみである。以て韓公子華に比して重きをなす所以である。此の末の四句が一篇の妙旨である。）

【餘論】韓子華の父、忠獻公（名は億）は、平日、嘗て子弟に語つて曰く、進取在_二於止足、寵祿不可_二過溢、若至_二六十、可_二以退身謝事と。公が薨すると、子華は墓前に誓つた。進んで大政に參するに及び、辭表を上り、具に情事を述ぶ。最後に手疏していふ、昔、晉王羲之爲_二會稽太守、去_レ郡不仕、亦嘗自誓_二於父母墓前、朝廷以_二其誓苦、不_二復召之、臣今志願、雖_レ與_二羲之_一顔殊、然誓_二先臣墓前、則無_レ異矣と。屢_レ章を上つたが、終に允されなかつた。元祐二年に致仕したが、時に年は七十六で、次年に薨つた。此詩に、誓言雖_レ未_レ從、久已斷_二諸內、區區爲_二懷祖、頗覺_二羲之_一陰とあるは、蓋し子華の表の意を用ゐたのであらう。

昭和三年十二月七日 印刷
昭和三年十二月十日 發行

續國譯漢文大成 文學部第十三帙

【非賣品】

著作權所有

編輯者兼	國民文庫刊行會
右代表者	鶴田久作
印刷者	東京市本郷區西片町十番地
印刷所	君島
	東京市小石川區久堅町百八番地
	共同印刷株式會社
	東京市小石川區久堅町百八番地

發行所

電話神田一八三三五番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

309

65

終